

琉球大学学術リポジトリ

琉球語沖縄首里方言のモダリティ：
叙述・実行・質問のモダリティを中心に

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学 公開日: 2018-05-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 崎原, 正志 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/40991

琉球語沖縄首里方言のモダリティ：
叙述・実行・質問のモダリティを中心に

平成29年度

(2018年3月)

琉球大学大学院
人文社会科学研究科
地域比較文化専攻

博士論文

崎原正志

Masashi SAKIHARA

主指導教官 狩俣繁久

副指導教官 石原昌英・宮平勝行

はじめに

◆本研究の位置づけ

・研究概要および目的

本博士論文（以下、本論または本研究）は、沖縄首里方言のモダリティについて包括的かつ体系的に記述し、首里方言のモダリティ体系の全体像を明らかにすることを第一の目的とする。第二の目的として、首里方言のモダリティ体系を他の言語・方言（主に標準日本語）と照らし合わせた場合、どのような特徴を備えているのか、どのようなモダリティ体系を持つ言語として位置づけられるのかを示すことである。

・モダリティとモダリティ研究について

モダリティという用語を規定するのは容易ではないが、ここではひとまず、「現実世界の出来事を話し手が〈確認〉し、それをどのような目的で聞き手に発信するかを表現する文レベルの意味」という規定を与えておく²。モダリティは、テンポラリティやアスペクチュアリティと並ぶ文法的カテゴリーの一つである。述語の文法的な形式に焦点をあてて分析するテンス・アスペクト・ムードは形態論に含まれるが、述語の文法的な形式も考慮しながら、文全体の文法的な意味・機能を分析するテンポラリティやアスペクチュアリティ、モダリティは構文論に含まれる³。

この現実世界を表し分ける文レベルの意味=モダリティは、述語が大きな役割を担っている。したがって、本論におけるモダリティ研究は、述語の形式とその文レベルの意味の関係（多義性）を様々な文法的な観点（人称・テンス・アスペクト・利益性・情報共有等の違い）から明らかにすることである。例えば、「命令形=命令文」という形式に傾斜した分析の仕方ではなく、次に示すように、「命令形」を用いた文が〈命令〉だけでなく、〈許可〉や〈非難〉を表す、という記述を行う（〈山括弧〉は文のモダリティを指す）。尚、首里方言の音声表記は簡略的なIPAを用いる（詳細は、「凡例」を参照）。

- 1) (a) $\phi e:ku \quad ?ike:$ (早く 行け。) 〈命令〉
- (b) A: $kadi=n \quad eimabi:gaja:$ (食べて=も いいですか。)
B: $to:, \quad kame:$ (さあ、食べろ。) 〈許可〉
- (c) [公演中に私語をしていたがその場では注意できなかったので公演後に呼び出す]
 $\widehat{t\acute{t}e}u=nu \quad hanaei \quad suru \quad ba:ne: \quad ju: \quad \widehat{t\acute{e}iki}=jo:$
(人=が 話を する 時は よく 聞け=よ。) 〈非難〉

(1a)の文は典型的な〈命令〉を表す文で、聞き手に動作の実行を強制的に働きかける文であるが、(1b)

¹ 「現実の世界の出来事を文の内容にとりこんで、あい手につたえるという、言語活動としての《ものがたり文》は、ある状況のなかで、はなさなければならないという、はなし手の欲求からおこってくる。文のなかにとりこまれる、現実の世界の出来事は、なんらかの意味ではなし手あるいは仲間の利害にかかわっていて、そのことがはなし手をして積極的にその出来事を文の内容にとりこませる、(中略)鏡が物をうつしだすように、文のなかに現実の世界の出来事がうつしだされるわけではない。(中略)はなし手が《確認する》という、積極的な行為がなければ、ものがたり文の対象的な内容としての出来事はありえない。(中略)《確認》というのは現実にはたいする、はなし手の積極的な態度のあらわれである」(奥田, 1985b, pp. 48-49)。

² モダリティの規定は、奥田靖雄 (1996) 「文のこと」を参考にした。

³ 「文法研究は、文を対象とする〈構文論〉と、単語の文法的側面を対象とする〈形態論〉からなると考える」(工藤, 2014, p. 633)。単語の認定については、左の工藤 (2014) や鈴木 (1972) を参考にした。

は聞き手の方から先に動作の実行の意志が話し手に共有されている点で(1a)とは異なり、動作の実行への強制力がなく、単に動作の実行の〈許可〉を表している。(1c)は動作の実行がすでに不可能な点で(1a)とは異なり、聞き手の過去の動作に対する〈非難〉を表している。

さらに、命令形を用いた文だけが〈命令〉を表すわけではない。次にみるように、否定質問形式や話し手の評価を表す言語形式が〈命令〉を表すこともできる。

- 2) (a) $\phi e:ku$ $\eta ikani$ (早く 行かないか。)
 (b) $\phi e:ku$ $\eta ikandare:$ $naran=do:$ (早く 行かなければ いけない=ぞ。)

・対象言語の背景と問題点

本論が対象とする琉球諸語は、奄美語・国頭語・沖縄語の北琉球諸語と、宮古語・八重山語・与那国語の南琉球諸語の総称である(右図参照)。琉球諸語には、約800の地域方言が存在していると推定され、それらが上記の6つの言語にまたがって存在し、なおかつ全てが消滅の危機に瀕している。この多様かつ危機的な言語状況は琉球諸語の最大の特徴である。

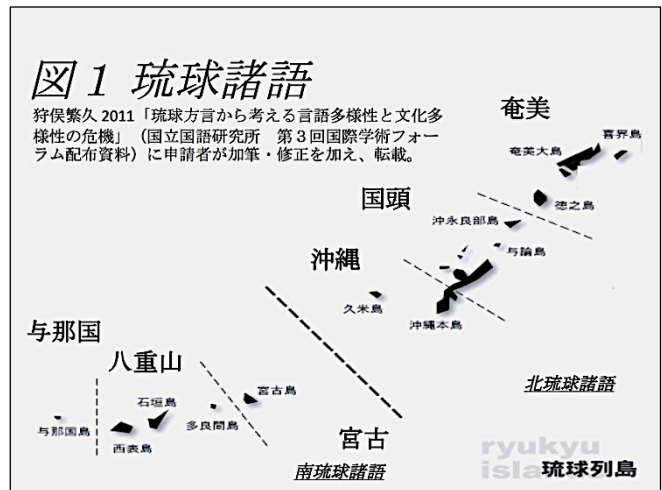
これまで琉球諸語の継承と再活性化のために、様々な文法研究が行われてきたが、上記の

ようなモダリティ研究は、琉球諸語では皆無である。その理由は二つあって、一つは、モダリティ研究がその言語や方言の音声や音韻体系、語彙、形態論的な特徴がある程度分析された後、初めて、十分な分析が成り立つ分野だからである。危機言語かつ多様性に富み、標準日本語(以下、日本語)と比べて研究の遅れている琉球諸語では、そのような研究の蓄積が全般的に不十分であるためであった。

もう一つは、下地理則(2013)「危機方言研究における文法スケッチ」で示されているような文法スケッチ(音韻・語彙・文法を網羅的に記述する研究モデル)等を用いた総合的な記述研究が主流になってきているためである。研究者数が調査対象となるべき方言数に比べて圧倒的に少なく、第一言語話者が存命かつ健全なうちに各方言全体の記録・保存を行わなければ、完全に消滅してしまう危険性があるため、このような総合的・概括的なマクロレベルの記述研究は不可欠である。

しかしながら、総合的な記述研究の実施と平行して、奥田(1999a)「プラグマチカ」や日本語記述文法研究会(編)(2003)『現代日本語文法4・第8部・モダリティ』等で行われているような詳細なモダリティ研究を行わなければ、より正確で緻密な文法体系を明らかにすることが困難となり、良質な文法書を作成することも不可能となる⁴。これまで首里方言は、琉球諸語を代表とする言語・方言として、『沖縄語辞典』(1963)や工藤他(2007)『首里方言のアスペクト・テンス・エヴィデンシャルティ』等、音韻論や形態論を中心とした数多くの研究が行われてきた。音声や語彙、形式や形態がどうなっているのか、全体像が明らかになってきた今こそ、モダリティというマイクロレベルの文法研究が求められている。

このモダリティというのは首里方言や琉球語に限った言語現象ではなく、すべての言語・方言にあ



⁴ Tsunoda (2005) は、危機言語の言語復興・再活性化には「辞書と文法書とテキストの3点セットが必要」だと述べている。

らわれるが、モダリティ体系は各言語や方言によって異なる。首里方言は、例えば、敬語体系が殊に発達していて、それにまつわる形式も多様である点が特徴的である。敬語表現がモダリティと関わっている場合もあり、首里方言独特の敬語表現にまつわるモダリティ体系の記述が見込まれる。敬語体系に限らず、首里方言が独自に持つ様々な文のモダリティについて記述することは、言語の文法的な多様性を示してくれるという言語学的な価値がある。そして、言語学的な価値はもちろんのこと、首里方言話者の現実世界に対する表現の仕方、あるいは精神性や世界観を垣間みることもできるため、文化研究等にも応用できる可能性がある。

さらに、モダリティの研究には、登場人物および文脈や場面が特定できるさまざまなタイプの談話資料が欠かせない。なぜなら、モダリティの分析には話者が何を伝えようとしているのか、その発話の目的を文レベルで分析しなければならず、話し手と聞き手との関係が深く関わってくるからである。首里方言をモダリティ研究の出発点としたのは、他の沖縄島の諸方言に比べて、研究の蓄積があり、まとまった談話資料が存在しているからである⁵。このことはモダリティの研究にとって非常に重要であり、本研究において首里方言を研究の対象とした最大の理由であった。これらの談話資料や先行研究を駆使して分析することで、首里方言のモダリティを包括的・体系的に分析することができるようになる。本研究がこれからの琉球諸語や日本語のモダリティ研究に一助できれば幸いである。

◆首里方言のモダリティに関連する先行研究

首里方言のモダリティについて体系的に分析した研究は、管見の限り見当たらない。しかしながら、首里方言のAspect・Tense・Mood（以下 ATM）を詳細に分析した工藤他（2007）は、首里方言のモダリティを研究する上で最も欠かせない研究の一つである。また、當山（2015a）は、第2章の「形態論概観」において、下地（2013）が提示する「琉球諸語文法スケッチ章立て（案）」を用いて、首里方言の音韻、形態、構文について概略的な文法記述を行っており、53 ページ辺りから Mood についての記述も見られるため、参照すべきである。同様に、首里方言の音韻、形態、構文について概略的な記述を行なっている上村（1997）や Shimoji（2012）、仲原（2014）等も参照すべきだろう。

次に、宮良（2002）は、題目に「モダリティ」という用語を含み、目をひく研究の一つである。「沖縄中南部方言の中でも、現在演劇とかで標準的に使われている首里や那覇の方言」の「モダリティ」を研究対象としているが、本論で扱う構文論的なモダリティとは規定が異なり、叙述文における Mood や Evidentiality（証拠性）についての形態論的な分析が中心となっている⁶。

同じく Evidentiality について取り扱った Arakaki（2013）は、Evidentiality を独立した文法カテゴリーとして体系的に分析を行なった初めての琉球語研究であり、大変貴重である。Evidentiality とモダリティは密接な繋がりがあり、実際に、本論でも取り扱う認識のモダリティである *hadzi* の文や、終助辞 *te* の文等についても論じていて、興味深い。また、場面状況を細かく設定した用例の分析方法はモダリティ研究としても大変参考になるものである。しかしながら、Evidentiality といった用語の規定のあり方が異なり、また、形態論的な分析が中心となっているため、構文論的な分析には不足してしまう。他、英語で書かれた類似の研究に Shinzato（1984）がある。

⁵ 危機的な状況にある琉球諸語・諸方言において、第一言語話者が限られている現在、まとまった談話資料がある首里方言はモダリティ研究の手始めとして分析するのに適している。

⁶ 「モダリティの規定は一つではなく、さまざまな立場が存在する」(宮崎, 2014, p. 2011)。モダリティの諸説については、同事典の「モダリティ」の項を参照されたい。

首里方言を扱った研究ではないが、かりまた（2016）は、沖縄名護幸喜方言の終助辞を述語に含む文のモダリティについて論じていて、非常に参考になる。特に、文の人称性（パーソナリティ）や時制（テンス・テンポラリティ）、動詞の形態論的な形に着目した分析方法は、モダリティ研究に欠かせないため、見逃せない。また、従来の研究で軽視されがちだった終助辞とモダリティの関係を体系的に論じた研究として注目すべきである。

しかしながら、従来の研究は全体として、形態論的な分析に基づいた動詞のモードについて論じた研究か、叙述文のモダリティについて分析した研究が多く、モダリティ体系の全体像がはっきりしない。今後は、命令文や勧誘文、質問文といった叙述文以外のモダリティについても分析し、モダリティ体系全体を見ていく必要がある。

◆研究方法および面接調査の概要

研究方法は、まずモダリティ分析を行う前に、既存の談話資料および面接調査によって用例を多数収集し、得られた用例をモダリティ形式ごとに分類・整理する。そして、次の(i)から(iv)までの手順でそれぞれの文のモダリティを分析する。(i)述語にモダリティ形式を含んだ分析対象となる文およびその前後の文を、登場人物の関係性や文脈がわかるように抜き出す。(ii)モダリティに関わる様々な文法的な要素、例えば、人称・テンス・アスペクト・利益性・情報共有の有無・発話者（話し手）と受け手（聞き手）との関係等を、対象となる文から抽出し、文のモダリティを決定する。(iii)これらの文をモダリティごとに分類・整理し直し、それぞれの文や項目ごとに分析に関する詳細な論述を行う。(iv)首里方言に特徴的な文は、日本語や他の琉球諸語との比較分析を行い、首里方言のモダリティ体系の特徴を明らかにする。以下では、人称性、時制、およびモダリティ形式についてだけ代表して述べることにする。尚、〈山括弧〉は文のモダリティを指し、《二重山括弧》はモダリティに関わる文法的な要素・概念を指す。

・人称性(パーソナリティ)

文の動作主体(動作のにない手)のことで、一人称の文の動作主体は「話し手」、二人称の文の動作主体は「聞き手」、一・二人称の文の動作主体は「話し手および聞き手」、三人称の文の動作主体は「話し手と聞き手以外」である。《人称性》が問題となるのは、次の sandare: naran(しなければならない)の文でみるように、文の人称によってモダリティが変化する場合があるからである。文の人称が二人称の場合、終助辞 do:を伴わせながら聞き手への《働きかけ》が加わることで〈強制〉という意味あいが生じ、〈命令〉を表すことができる(あるいは、〈命令〉に近い意味あいを表す)。しかし、二人称以外の場合、《働きかけ》は弱く、動作主体が一人称の場合では、話し手の〈決意〉のような話し手の主観的な評価が述べられているだけである。

3) ?ugueiko: t̃eu=nu mando:-kutu, t̃ei: t̃eikir-an=dare: nar-an=do: 〈強制〉

首里城.TOP 人=NOM 多い-CSL 気.ACC つける-NEG=FOC.ある.CND なる-NEG=SFP

「首里城は人が多いから、気をつけないといけないぞ。」

4) wanne: φunto:=nu kutu kak-an=dare: nar-an 〈決意〉

私.TOP 本当=GEN 事.ACC 書く-NEG=FOC.ある.CND なる-NEG

「私は本当の事を書かなければならない。」

・時制 (テンス・テンポラリティ⁷)

事象が過ぎ去ったことか否かはモダリティに大きく影響する場合がある。例えば、動作主体が二人称の *santin eimun* (しなくてもいい) の文では、事象が未実現 (未来) の場合なら、聞き手への《働きかけ》が生じ、動作を制御したり、免除したりする意味あいを表すが、事象がすでに過ぎ去ったこと=非実現 (過去) なら、〈不満・後悔〉といった意味あいを表す。

- 5) *phisamante: s-ant-i=n eimu=sa. phirakunar-e:*
正座 する-NEG-SEQ=ADD 済む=SFP 足を崩す-IMP2
 「正座しなくてもいいよ。足を楽にしなさい。」(音声「フィラクナユン」)
- 6) [芝居。島流しにあった役人を夫にした女だが、あまりに女遊びがひどいので、母親が嘆く]
eima=nu ne:tuke:tu=nu utu mut-e: ?an e-e: ein|o:=ja s-ant-i=n eimut-a-ru-munnu
島=GEN まずまず=GEN 夫.ACC 持つ-CND そう する-SEQ 心労=TOP する-NEG-SEQ=ADD 済む-PST-ADN-FN
 「島のまずまずの夫を持てば、こうして心労しなくてもよかったのに。」(芝居, 568)

・モダリティ形式

述語にどのようなモダリティ形式が用いられているかを知ることは、モダリティの分析にとって欠かせない重要なことである。例えば、述語の形態論的な形の一つである *ra* という形式は、独り言で用いられるならば、自問のような話し手の〈疑い〉をつぶやく意味あいを表す。話し手の〈疑い〉を焦点化助辞の *ga* がとりたてている。

- 7) [離れ離れになってしまう親子の将来はどうなっていくのかと自問している]
?akijo:, kunu ?ujakk^wa, tea:=ga nat-i ?iteu-ra
INTJ この 親子 どう=FOC なる-SEQ 行く-DUB
 「ああ、この親子、どうなって行くやら。」(芝居, 586)

また、文末に終助辞 *ja:* が付加された *ra* の文は、話し手の〈疑い〉を聞き手に間接的に伝えるような、対話的な用法となる。ここでも、話し手の〈疑い〉の部分を *ga* がとりたてている。

- 8) [若い連中が噂をしているのを聞いて村の老人が]
kundu=n mata kamaraei: kuto: ?ar-an=ga ?a-ra=ja:
今度=ADD また ややこしい こと.TOP COP-NEG=FOC ある-DUB=SFP
 「今度もまたややこしいことではないだろうね。」(芝居, 546)

さらに、《聞き手知識の関与》や《問いかけ性》といった要素が加わる場面状況においては、焦点化助辞 *ga* による焦点化はなくなり、文末に終助辞 *ja:* を付加させて、話し手の間接確認の判断を含む〈念押し的な真偽質問〉を表す文となる。すなわち、日本語のダロウのように、話し手の〈疑い〉を聞き手の目の前で述べることで、その答えを知っている聞き手を刺激し、問い直すといった文になる。

⁷ 不完全ながらもテンス・アスペクト・ムードといった形態論的な用語とテンポラリティ・アスペクチュアリティ・モダリティといった構文論的な用語を混ぜて使用する。モダリティは構文論の分野だが、形態論的な分析も必要不可欠であるし、形態論と構文論を完全に切り離して分析することはできない (あるいはそのような分析は無意味だと考える)。また、もう一つの理由として、首里方言のテンポラリティおよびアスペクチュアリティの研究は皆無であり、現段階ではひとまず形態論的な分析を通して文全体 (モダリティ) を分析せざるを得ないからである。

9) ʔja:=n ʔiteu-ra=ja:

2SG=ADD 行く-DUB=SFP.YNQ3

「お前も行くだろう？」

・面接調査の概要

2015年の5月から2018年1月まで、首里方言のネイティブ・スピーカーの方(以下「調査協力者」)にご指導をいただいた。調査協力者の詳細は以下の通りである。

首里平良町出身、昭和6年生、男性(先祖の身分は平民)。

今回の調査では、意図的に調査協力者を一人に絞った。理由は、二つあって、一つは筆者が聴覚に障害があるため、何人もの調査協力者と面接調査を実施することが困難であったことである。もう一つは、上記の調査協力者と面接調査を始めた際、お互いの信頼関係の構築が非常に重要だと痛感したからである。モダリティ研究は、場面設定等を詳細に伝えなければならず、こちらが意図する内容を正確に伝えなければならなかった。そのため、調査協力者との信頼関係が重要になった。聴覚に障害のある筆者は、一人の調査協力者と信頼関係を築くのが限界であった。もちろん、多くの方から用例を得た方が、データの信頼度や正確性は高まるに違いない。しかし、本論においては、分析は既存の談話資料を中心に行なったため、面接調査で得たデータは補助的なものとして位置づけ、フィールドワークの際は一人の調査協力者との信頼関係を重視した。調査協力者は、首里方言やウチナーグチ⁸に関する著書を数多く出版しており、社会的にも首里方言について精通していると周知されている。したがって、補助的な資料としては申し分ないと判断される。

◆人権の保護及び法令等の遵守への対応

石原昌英(2011)「言語の記録保存と研究者の倫理」に記載されている高良宣孝氏が作成した「同意書」を参考に筆者が作成した「調査同意書」を用いて、個人情報の取り扱いを厳重に行い、調査協力者への配慮に留意した(「付録資料3」を参照)。

◆本論文の構成

本論は三部構成である。

第I部では、モダリティという用語の定義およびモダリティに対する本論の立場を示しながら、首里方言とモダリティの関わりについて述べる。また、本論でいう「首里方言」とはどのような言語あるいは方言のことを指すのか、対象となる言語・方言について明記する。

第II部では、第一の目的である首里方言のモダリティの包括的・体系的記述を行う。記述のし方あるいは章立てのし方として、形式よりも文全体の意味や機能、つまり文のモダリティを考慮して記述する。例えば、「命令のモダリティ」は「命令形を述語に持つ文のモダリティ」という意味ではなく、「〈命令〉(というモダリティ)を持つ文のモダリティ」という意味で用いる。したがって、命令形を述語に持

⁸ 沖縄の言葉の意。沖縄島や周辺離島を含む沖縄地方で話される諸方言の総称あるいは俗称。直訳すると、沖縄口(おきなわぐち)。他に、シマグチ、シマクトウバ等の類似表現がある。ただし、それぞれの地域的・社会的ニュアンスは若干異なる。

つ文であっても、〈勧誘〉を表す用例は、「勧誘のモダリティ」に含めて記述する（〈意志〉なら「意志のモダリティ」に〈質問〉なら「質問のモダリティ」に含めるというように）。ただし、一つの形式が表せるモダリティについてもまとめる必要があると思われるので、各形式のまとめ部分で表にして見やすい形でまとめることにする。

第Ⅲ部では、各章ごとのまとめおよび本研究の総まとめを行いながら、第二の目的である首里方言のモダリティ体系の特徴についても述べる。特に、日本語のモダリティとの共通点および相違点について言及しながら、首里方言のモダリティ体系にはどのような特徴がみられるのかについて論じる。

◆研究の着想に至った経緯

先述の通り、本論の主な目的は、沖縄首里方言のモダリティについて包括的かつ体系的に記述することである。そのいきさつは、ハワイ留学時代に沖縄系の移民の子孫たちがウチナーグチを学んでいることを知り、英語で書かれたウチナーグチの教科書がないということで、英語で書かれたウチナーグチの教科書『Rikka, Uchinaa-nkai!』(Sakihara, et al., 2011)を、他の先生方や学生たちと協力して作成したことであった。作成中、文法の説明を書いている時に、終助辞の説明が十分にできず、参考になる終助辞研究もほとんどなかった。そんなことから、修士論文では、首里方言の終助辞について論文を書いたが、さらなる課題が見つかった。それは、終助辞が文のモダリティと深く関わっていることであった。文のモダリティがわからないと、終助辞の働きもはっきりしないと気づき、博士論文では、モダリティという観点から首里方言の文法について包括的かつ体系的に記述しようという運びになった。

本研究の先にある最終的なゴールは、文法記述のしっかりしたウチナーグチ（沖縄語）の教科書を作ることである。良質な文法研究があってこそ、良質な教科書ができることを確信している。本研究がそのような様々な文法研究のうちの、いちモダリティ研究として言語復興・言語教育に寄与できれば幸いである。

◆謝辞

本論を完成させるにあたり、日本学術振興会（研究題目「琉球語首里方言のモダリティー実行・叙述・疑問のモダリティを中心に」）から助成を受けた。いただいた助成金は、面接調査や国内外で開催される学会の参加にかかる費用にあてることができ、その結果、研究の質が飛躍的に高まった。日本学術振興会に心より感謝の意を表したい。

それから、以下に挙げるたくさんの方々のご協力やご指導を経て完成させることができた。特に、指導主査である狩俣繁久教授は、単に研究の方法や内容を指導してくれただけでなく、琉球諸語における記述文法の意義を教えてくださいました。心から厚くお礼を申し上げます。いっぺーにふえーでーびる。また、指導副査の石原昌英教授と宮平勝行教授、人文社会科学研究科の先生方および研究生の皆様、下地賀代子先生、仲原稯先生、西岡敏先生、ハイス・ファン・デル・ルベ、當山奈那、白田理人、目差尚太、Lee Tonouchi, Eric Wada, Norman Kaneshiro, Keith Nakaganeku, Laura Kina, Astrið Breckmann 各氏から貴重なご意見・ご協力をいただいた。

そして、私の家族はいつでも私をカシー（サポート）してくれて、家族のカシーあってこそ本論文を完成することができた。イッペーニフェーデービル（ありがとうございます）。

◆凡例

〈山括弧〉は、具体的な使用場面における、文や形式の文法的な意味や意味あい（＝モダリティ）

を一語あるいは数語で用語化したものを明示するために用いる。例えば、叙述文の場合の〈断定〉や〈推量〉、命令文の場合の〈命令〉や〈強制〉等である。また、《二重山括弧》は文法的な要素・概念を用語化したものを明示するために用いる。例えば、《対象的な内容》、《聞き手利益性》、《問いかけ性》等である。

本文中の日本語の諸文法形式や用例は、カタカナで書き表し、首里方言の諸文法形式や用例は、IPA（国際音声記号）を基礎とした簡略的な音声表記で記す（詳細は付録資料5を参照）。音環境によって変化するが、基本的にシャ行音を **ɕ**（無声歯茎硬口蓋摩擦音）で、ラ行音を **n** の前では **ɺ**（そり舌側面接近音）、それ以外では **r**（歯茎はじき音）で書き表す。尚、音声は筆者の聴覚的な判断によるもので、音響学的な分析は行っていないため、実際の音価は異なる可能性がある。詳細は今後の課題である。

動詞の形態論的な諸活用形式は、次に列挙するように、動詞 **sun**（する）で代表させて呼ぶことがある。例えば、動詞の完成相・非過去形を **sun** 形式、完成相・単純過去形を **san** 形式、継続相・非過去形を **so:n** 形式、継続相・過去形を **so:tan** 形式、第二過去形を **sutan** 形式、第一命令形を **ɕi** 形式、第二命令形を **ɕe:**形式、と呼ぶようにである。

用例の出处は、用例の末尾の丸括弧（ ）内に略記で記す。尚、数字はページ数を指す。例えば、（実践, 21）のようにである。ただし、「仲原(2007)＝略記(全国)」は、ページ数が記載されていないため、数字は用例の通し番号を意味する。また、「音声データベース」は、インターネット上のデータのためページ数がないので、検索できるように「 」内に見出し語を記す。面接調査で得た用例は、（調査, 2015/5/21）のように日付も簡略化して記す。用例の出处は下記の一覧の通りである。出典情報の詳細については本論末尾の参考文献を参照されたい。テキストの種類は、民話、テキスト、質疑応答形式の談話資料、創作会話集、沖縄芝居の脚本、自然会話をそのまま録音した談話資料、方言ニュースの原稿、散文等がある（詳細は註釈⁹を参照）。

◆用例の典拠一覧

略称	出典情報	テキストの種類
(大沖)	「大好き沖縄」編集部(編).『大好き沖縄』	民話（モノログ）
(沖会)	中松竹雄 (2000).『沖縄語会話』	テキスト
(沖辞)	『沖縄語辞典』	辞典
(音声)	首里那覇音声データベース	談話資料（面接）
(語遊)	儀間進「語てい遊ばなシマクトゥバ(新聞連載コラム ¹⁰)」	創作会話集
(暮らし)	宮里朝光他 (2006).『沖縄ぬ暮らしとう昔話』	創作会話集
(猿)	玉那覇朝子(訳).『猿の生肝』	沖縄芝居の脚本
(実践)	又吉元亮 (1997).『実践首里語テキスト』	創作会話集
(芝居)	那覇市教育委員会, & 沖縄言語研究センター (1994a). 『沖縄芝居脚本集第2巻(後略)』	沖縄芝居の脚本

⁹ 「民話（モノログ）」は、民話の一人語りを採録・文字化したもの。「テキスト」は、首里方言あるいは沖縄中南部方言一般を学習する人を対象とした教科書。「談話資料（面接）」は、質疑応答形式の面接調査によって得たデータを用例として整理・文字化したもの。「創作会話集」は、架空のシチュエーションを設定し、そこで用いられる会話を創作したもの。「沖縄芝居の脚本」は、文字通り沖縄芝居の脚本である。「談話資料（自然）」は、自然談話をそのまま採録・文字化したもの。「方言ニュース原稿」は、ラジオ沖縄で実施されている「方言ニュース」の原稿を文字化したもの（「方言ニュース」についての詳細は、柴田 2007 を参照されたい）。「散文」はエッセイ。

¹⁰ （語遊「スン」2009/6/28, p. 18）のように「 」内に見出し語、後ろに掲載日付とページ数を記載する。

(芝居 2)	那覇市教育委員会, & 沖縄言語研究センター (1994b). 『沖縄芝居脚本集第3巻(後略)』	沖縄芝居の脚本
(全国)	『全国方言文法データベース』	談話資料 (面接)
(全国 2)	仲原穰 (2014). 『全国方言文法辞典(後略)』	談話資料 (面接)
(対談)	崎間他 (2002). 『古老にきく「沖縄の言葉と文化」』	談話資料 (自然)
(楽沖)	中松竹雄 (2003). 『楽しい沖縄語会話』	創作会話集
(調査)	面接調査・80代男性, 首里平良町出身	談話資料 (面接)
(那民)	那覇市教育委員会 (1982). 『那覇の民話資料』 第4集	民話 (モノローグ)
(日放)	日本放送協会(編). (1972). 『全国方言資料』 第10巻	談話資料 (自然)
(ニュ)	伊狩典子他 (1998). 『しまくとぅば』	方言ニュース原稿
(入門)	西岡敏・仲原穰 (2000). 『沖縄語の入門(後略)』	テキスト
(方談)	国立国語研究所(編). (1985). 『方言談話資料(8)(後略)』	談話資料 (自然)
(方談 6)	国立国語研究所(編). (1982). 『方言談話資料(6)(後略)』	談話資料 (自然)
(方談 10)	国立国語研究所(編). (1987). 『方言談話資料(10)(後略)』	談話資料 (自然)
(昔話)	伊芸弘子(編著). (1992). 『沖縄・首里の昔話』	民話 (モノローグ)
(リア)	比嘉光龍. (2015). 『気持ち伝わる! 沖縄語リアル フレーズ BOOK』	創作会話集
(琉球弧)	儀間進 (1979). 『琉球弧: 沖縄文化の模索』	散文
(琉総)	平山輝男他 (1966). 『琉球方言の総合的研究』	談話資料 (自然)
(童歌)	高江洲義寛 (1979). 『沖縄わらべうたの世界』	歌集

以下にグロス一覧を記す。尚、複雑な表記を避けるため、ハイフン(-)、等号(=)、ピリオド(.)のみを用いる。ハイフン(-)は、述語では語幹と接尾辞や活用語尾の境界を表すが、それ以外(主に複合名詞や複合動詞)では単語と単語あるいは単語と接辞の境界を表す。等号(=)は、単語と助辞(くつつき)の境界を表す。ピリオド(.)は、分割できないひとつの単語あるいは形態素が表す複数の文法的な意味を列記する場合に用いる。

例) $\widehat{te}iŋk^w a: = n d i \ ? i - e e : \quad w a k a - i n a g u - n u t e a : = j a \ ? a n s u k a : \ e i t e - a b i r - a n = d o : = t a i$
かぼちゃ=QT 言う-NLZ.TOP 若-女-PL=TOP あまり 好き-POL-NEG=SFP=POL.F
「かぼちゃって言ったら、若い女たちはあまり好きじゃないですよ。」

◆グロス一覧

略称	文法的意味	主な形式 (首里方言・日本語)
1	1st person 一人称	<i>wan</i> 私
2	2nd person 二人称	<i>?ja</i> : お前
3	3rd person 三人称	<i>?ari</i> 彼 (彼女)
ABL	ablative 奪格	<i>-kara</i> から
ACC	accusative 対格	<i>-φ</i> (ゼロ) を
ADD	additive 累加・共存	<i>-n</i> も
ADN	adnominal 連体	<i>-ru</i>

ADVRS	adversative conjunction 逆接	-eiga けど, が
ALL	allative 方向格	-kai に
ASS	assertive 強い主張	-do: よ
BEN	benefactive 受益	k ^w i:n, turasun たべて <u>くれる</u>
CMPR	comparative 比較格	-jaka より
CND	conditional 条件	mut-aa, mut-ee, mutēi:-ne: たら, れば
CNJ	conjunction 接続詞	ʔancee:, jaεiga それでは, でも
COM	comitative 共格	-tu と
COP	copula コピュラ	jan だ
COP2	copula 2 コピュラ 2	de:-biru, de:-munu, de:-munu である
CPL	completive 完結・完了	kadi-ne:n たべて <u>しまった</u>
CAUS	causative, transitivizer 使役	-asun, εimi:n, εimirasun せる, させる
CH	class high 士族・貴族言葉	ta:ri:, ʔaja:
CL	class low 平民言葉	su:, ʔamma:
CSL	causal 原因・理由	-kutu ので, から
DAT	dative 与格	-ɲkai, -ni, -nakai に
DES	desiderative 希望	-busan たべ <u>たい</u>
DIM	diminutive 指小辞	-g ^w a:
DIREV	direct evidential 直接証拠	kamu-tan たべ <u>ヨッタ</u> (たべていた・たべた)
DUB	dubitative 疑い	-ra だろうか
EQ	echo question 問い返し質問	
F	feminine 女性言葉	-tai
FIL	filler フィラー	na:
FN	formal noun 形式名詞	εi, mun, munnu, ba: の, もの, わけ
FOC	focus marker 焦点化	-du, -ga, -ja
GEN	genitive, possessive 属格	-nu, -ga の
HMB	humble honorification 謙譲語	usagijun, unnukijun, jueirijun
HON	honorific 尊敬, 敬意	-miee:n
HORT	hortative 勧誘	kam-a たべ <u>よう</u>
IMP	imperative 命令 ¹¹	k-u:=wa, kadi=ma:, kadi=ma:ni
IMP1	1 st imperative 第一命令形	kam-i たべ <u>ろ</u>
IMP2	2 nd imperative 第二命令形	kam-ee たべ <u>ろ</u>
IMPRS	impression 印象	kamun-ne: sun たべる <u>かのよう</u> だ
IND	indicative 直説法	kam-u-n たべ <u>る</u>
INF	infinitive 不定, 連用形	kam-i, maa-ku たべ
INFR	inferential 推量	kamuru hadzi たべる <u>だろう</u>
INST	instrumental 具格	-ei, -εei, -sa:ni で
INT	intensional 意志	kam-a たべ <u>よう</u>

¹¹ 第一命令形と第二命令形の区別が不明瞭なものやそれ以外の命令形式をこちらに含める。

INTJ	interjection 感動詞・間投詞等	
IP	interjectory particle 間投助辞	-jo:, -ja:, -te:
LIM	limitative 限界格	madi まで
LOC	locative 場所格	-uti, -uto:ti, -ndzi で
M	masculine 男性言葉	-sai
MIR	mirative 驚き・意外等	-sa, -saja:
MON	monologue 独話・独り言	-ssa:, -gaja:
NASS	non-assertive 断定回避	-eiga, -gaja: けど, が
NEG	negative 否定	kam-an, neen, uran <u>たべない</u>
NLZ	nominalizer 名詞化	-ei の
NOM	nominative 主格	-ga, -nu が
OBLG	obligative 義務・必要	s-andare: naran, e- <u>iwadu jaru</u> なければならない
PASS	passive 受身	-ari:n れる, られる
PEJ	pejorative 軽蔑, 卑下	-ça:, -g ^w a:, jumu-, jana-
PFX	prefix 接頭辞	ke:-, <u>tei:-</u>
PL	plural 複数	-ta:, - <u>n̄tea:</u> , - <u>nut̄ea:</u>
POL	politeness 丁寧さ	-a/ibi:n, - <u>tailsai</u> です, ます
POT	potential 可能	-ari:n, -ju:sun, nain
PROG	progressive 継続相	kad-o:-n <u>たべている</u>
PROH	prohibitive 禁止	-na, - <u>nake:</u> , - <u>aŋke:</u> <u>たべるな</u>
PST	simple past 単純／第一過去	kad-an <u>たべた</u>
PST2	evidential past 証拠性／第二過去	kamu-tan <u>たべヨッタ</u>
PST3	inferencial past 推論を含む過去	kamu-te:-n, kade:- <u>te:-n</u>
PUR	purposive 目的	-i(:)ga <u>たべに</u>
QT	quotative 引用	-ndi と, って
RES	resultative 結果	kad-e:-n (<u>たべ</u>) <u>テアル</u>
SEQ	sequential 継起	kad-i, kam-a:ni, kam-a:i <u>たべて</u>
SFP	sentence final particle 終助辞	-do:, -ja:, -jo:, -te:, -sa よ, ね, さ
SG	singular 単数	
SIM	simultaneous 同時・並行	kam-agana:, kam-agatei: <u>たべながら</u>
TOP	topic marker 主題	-ja は
VOC	vocative 呼格	-jo:
WHQ	wh interrogative 補充質問	-ga か?
YNQ	yes-no interrogative 真偽質問	-i/mi か?
YNQ2	yes-no interrogative2 真偽質問2	-na: か?
YNQ3	other interrogatives その他の質問文	-ra:ja: だろう?, -gaja: かなあ?

尚, グロスはいくまでも形式の把握のために付す。実際の使用場面における意味とグロスで示された意味が異なる場合がある。

目次

はじめに

本研究の位置づけ	i
首里方言のモダリティに関連する先行研究	iii
研究方法および面接調査の概要	iv
人権の保護及び法令等の遵守への対応	vi
本論文の構成	vi
研究の着想に至った経緯	vii
謝辞	vii
凡例	vii
用例の典拠一覧	viii
グロス一覧	ix
第 I 部 モダリティと首里方言の関わり	1
第 1 章 本研究におけるモダリティについて	1
1.1 モダリティとは	1
1.2 モダリティ理論に関する先行研究	4
1.2.1 宮崎他 (2002) のモダリティの枠組み	4
1.2.2 モダリティをめぐる本研究の立場	5
1.2.3 終助辞について	6
1.3 第 1 章のまとめ	7
第 2 章 本研究における「首里方言」について	7
2.1 研究対象としての「首里方言」および地域概要	7
2.1.1 「首里階層方言」	8
2.1.2 「首里地域方言」	10
2.1.3 「首里那覇社会方言」	10
2.1.4 研究対象としての「首里方言」以外の方言	10
2.1.5 男女差について	11
2.1.6 第 2 章 1 節のまとめ	12
2.2 首里方言の音声(音韻)・形態・語彙的特徴	12
2.2.1 音声的特徴	12
2.2.2 形態的および語彙的特徴	13
2.2.2.1 動詞の活用	13
2.2.2.2 「名詞 + する」の動詞	14
2.2.2.3 否定形の中止形	15
2.2.2.4 否定形の連体形	15

2.2.2.5	コピュラ jan および存在動詞 ?an の否定形の丁寧形	16
第 II 部 首里方言の叙述・実行・質問のモダリティ 17		
第 3 章 叙述のモダリティ 17		
3.0	はじめに	
3.0.1	終助辞が用いられる文のモダリティ	17
3.0.2	《聞き手めあて》および《主張の強さ》について	18
◆	認識のモダリティ	21
3.1	〈記述〉の文	21
3.1.1	終助辞 do: の文	22
	do: の文のまとめ	25
3.1.2	終助辞 sa の文	26
	sa の文のまとめ	31
3.1.3	終助辞 de: の文	32
	de: の文のまとめ	35
3.1.4	〈記述〉の文のまとめ	36
3.2	推量文	36
3.2.1	hadzi の文	41
3.2.1.1	概観	41
3.2.1.2	接続の仕方	42
3.2.1.3	hadzi の文の〈推量〉のモダリティ	43
3.2.1.3.1	〈推論〉Deductive	44
3.2.1.3.2	〈想定・仮定〉Assumptive	47
3.2.1.3.3	〈推測・憶測〉Speculative	48
3.2.1.3.4	〈確信〉Confidence/belief	53
3.2.1.4	hadzi の文のまとめ	54
3.2.2	断定形の文	54
3.2.2.1	終助辞 do: の文	55
3.2.2.2	終助辞 sa の文	57
3.2.2.3	終助辞 de: の文	58
3.2.2.4	終助辞 te: の文	59
	te: の文のまとめ	63
3.2.3	ee:n 推定文	63
3.2.3.1	終助辞 te: の文	64
3.2.3.2	推定文のまとめ	67
	その他の推量に関わる文	67
3.2.4	φu:dzi の文	67
3.2.5	guto:n の文	68
3.2.6	gisan の文	70

3.2.7	ne: sun の文	70
3.2.8	反事実仮想文	71
3.2.8.1	hadzi の文	71
3.2.8.2	終助辞 te: の文	72
3.3	疑い文	72
3.3.1	ra の文	72
3.3.1.1	形態・構文的特徴	72
3.3.1.2	ra の文による〈疑い〉のモダリティ	77
	ra の文のまとめ	87
3.3.2	gaja: の文	87
	gaja: の文のまとめ	91
3.3.3	疑い文のまとめ	91
◆	思い出させる文と〈前提〉を表す文	91
3.4	思い出させる文	92
3.4.1	終助辞 ee: の文	92
3.4.2	真偽質問文	97
3.4.3	否定質問文	97
3.5	〈前提〉を表す文	98
3.5.1	終助辞 ee:ja: の文	98
3.5.2	終助辞 saja: の文	100
3.5.3	終助辞 ee: の文	101
	思い出させる文・〈前提〉の文のまとめ	103
3.6	説明文	103
3.6.1	とりたて形式による説明文	103
3.6.2	終助辞 te: の文	106
3.6.3	ba: jan (わけだ) の文	107
3.6.4	munna: の文	108
3.7	感嘆文	110
3.7.1	終助辞 ee: の文	110
3.7.1.1	聞き手に対する話し手のミラティブな判断	110
3.7.1.2	発見・気づき	111
3.7.2	終助辞 saja: の文	111
3.7.3	真偽質問文	113
3.7.3.1	i/mi の文	113
3.7.3.2	ba:i/basui の文	115
3.7.3.3	na: の文	115
3.8	《事実確認》の hadzi の文	116
3.8.1	予定の不実現	117
3.8.2	思い出し (記憶)	117

3.8.3	さとり	118
3.8.4	断定回避	119
3.9	その他の周辺のリアルな文	120
3.9.1	hadzi の文以外の断定回避	120
3.9.1.1	終助辞 te: の文	120
3.9.1.2	eiga の文	120
3.9.1.3	終助辞 de: の文	121
3.9.2	終助辞 te: を用いた〈当然のこととして答える〉文	122
◆評価のモダリティ		123
3.10	〈ただの評価〉の文	124
3.10.1	終助辞 do: の文	124
3.10.2	終助辞 sa の文	125
3.10.3	終助辞 de: の文	130
	〈評価〉の文のまとめ	132
3.11	必要・義務文	132
3.11.0	sandare: naran と eiwadu jaru について	132
3.11.1	sandare: naran の文	134
3.11.1.1	音声・形態・構文的特徴	134
3.11.1.2	sandare: naran の文のモダリティ	136
	sandare: naran の文のまとめ	147
3.11.2	eiwadu jaru の文	147
3.11.2.1	音声・形態・構文的特徴	147
3.11.2.2	eiwadu jaru の文のモダリティ	149
3.11.3	sawadu jaru の文	157
	eiwadu jaru/sawadu jaru の文のまとめ	160
3.11.4	e:ja:形式	160
3.11.5	bitei: jan (べきだ) の文	161
3.11.6	ei jasa (のだ) の文	161
3.11.7	suce: maci (方がいい) の文	162
3.11.8	ee:/sa: maci (したらいい) の文	165
3.11.9	ee: eimun (すればいい) の文	165
3.12	許可・許容文	166
3.12.1	ei(n) eimun (して(も)いい) の文	166
3.12.2	命令形(しろ)の文	167
3.12.2.1	ee:形式の〈許可〉	168
3.12.2.2	eimiso:re:形式の〈許可—依頼〉	169
3.12.2.3	eimice:bire:形式の〈許可〉	170
3.12.2.4	eimice:biri 形式の〈許可〉	170

3.13 不必要の文.....	171
3.13.1 sanitn eimun(しなくてもいい)の文.....	171
3.13.2 suce: ?aran(するほどでもない)の文.....	174
3.14 不許可・非許容の文.....	175
3.14.1 ce: naran(してはいけない)の文.....	175
3.14.2 kuto: naran(ことはできない)の文.....	178
3.14.3 可能動詞を用いた文.....	179
評価のモダリティまとめ.....	179
◆希求のモダリティ.....	180
3.15 希求文.....	180
3.15.1 busan の文.....	180
3.15.2 評価形式を用いた〈願い〉.....	183
3.15.3 命令形を用いた〈願い〉.....	183
3.15.4 依頼文による〈願い〉.....	184
3.15.5 意志・勧誘形を用いた〈願い〉.....	184
3.16 からかい・挑発の文.....	184
3.17 非難の文.....	185
3.17.1 質問形式を用いた〈非難〉.....	185
3.17.2 実行文による〈非難〉.....	188
3.17.3 評価文による〈非難〉.....	189
◆意志のモダリティ.....	189
3.18 意志文.....	190
3.18.1 意志形を述語に含む文.....	191
3.18.1.1 意志形+終助辞 u:/i:の文.....	195
3.18.1.1.1 意志形 + i:の文.....	196
3.18.1.1.2 意志形(普通体) + u:の文.....	196
3.18.1.1.3 意志形(丁寧体) + u:の文.....	197
3.18.1.1.4 意志形(丁寧体) + u: + sai/tai の文.....	198
3.18.1.2 意志形+終助辞 na の文.....	198
3.18.1.3 意志形+終助辞 ja:の文.....	199
3.18.2 断定形を述語に含む文.....	199
3.18.2.1 断定形+終助辞 do:の文.....	201
malefactive な受け身表現を伴った〈意志〉の文.....	202
3.18.2.2 断定形+終助辞 sa の文.....	202
3.18.2.3 断定形+終助辞 saja:の文.....	205
3.18.2.4 断定形+終助辞 te:の文〈成り行きの意志〉.....	206
3.18.3 sandare: naran と eiwadu jaru の文.....	208

3.18.4	i/mi の文(真偽質問形式).....	208
3.18.5	e:ja:形式(引用節).....	209
	意志のモダリティまとめ.....	210
第3章	「叙述のモダリティ」まとめ.....	211
第4章	実行のモダリティ.....	211
4.1	勧誘文.....	211
4.1.1	終助辞なしの文.....	212
4.1.2	終助辞 na の文.....	213
4.1.3	終助辞 ja: の文.....	215
4.1.4	否定質問文.....	216
4.1.5	断定形の文.....	217
4.1.6	命令形を用いた〈勧誘〉.....	217
	勧誘文のまとめ.....	218
4.2	命令文.....	218
4.2.1	〈命令〉というモダリティと場面状況的な意味あい.....	219
4.2.2	ee:, ei, eijo:, wa 形式の文による〈命令〉.....	221
4.2.2.1	ee:形式の文による〈命令〉.....	221
4.2.2.2	ei 形式の文による〈命令〉.....	223
4.2.2.3	eijo:形式の文による〈命令〉.....	224
4.2.2.4	ee:ja:, eijo:ja:形式.....	227
4.2.2.5	mice:n を伴った ee:, eijo:, ei 形式の文による〈命令〉.....	227
4.2.2.5.1	eimiso:re:形式.....	227
4.2.2.5.2	eimiso:rijo:形式と eimiso:ri 形式.....	229
4.2.2.5.3	eimice:bire:形式.....	229
4.2.2.5.4	eimice:biri 形式.....	230
4.2.2.5.5	eimice:birijo:形式.....	231
	ee:形式と eijo:形式のまとめ.....	232
4.2.2.6	wa 形式.....	233
4.2.3	〈勧め〉.....	235
4.2.3.1	ee:形式の〈勧め〉.....	235
4.2.3.2	eimiso:re:形式の〈勧め〉.....	236
4.2.3.3	eijo:形式の〈勧め〉.....	237
4.2.3.4	eimiso:rijo:形式の〈勧め〉.....	238
4.2.4	命令形を用いた〈許可〉.....	239
4.2.5	命令形を用いた〈勧誘〉.....	239
4.2.6	命令形を用いた〈願い〉.....	239
4.2.7	命令形を用いた〈非難〉.....	240
4.2.8	ee:ja:, eijo:ja:の文のモダリティ.....	240
	ee:, ei, eijo:, wa 形式の文のまとめ.....	241

その他の命令文	
4.2.9 n(:)ri, n(:)re:を用いた命令文	242
4.2.10 ma:を用いた命令文	243
4.2.11 ma:ni を用いた命令文	244
4.2.12 否定質問形式を用いた命令文	244
4.2.13 動作主体が二人称の sandare: naran の文(必要—命令)	245
4.2.14 動作主体が二人称の eiwadu jaru の文(必要—命令)	246
4.3 依頼文	246
4.3.1 k ^w :in を含む文	246
4.3.2 turasun を含む文	247
4.3.3 ʔutabimice:n を含む文	248
4.3.4 意志文による〈依頼〉(意志—依頼)	249
4.3.5 質問文による〈依頼〉(質問—依頼)	249
4.4 禁止文	251
4.4.1 na の文	251
4.4.2 najo:の文	251
4.4.3 nake:の文	255
4.4.4 否定形+ke:の文	256
4.4.5 動作主体が二人称の ce: naran(してはいけない)の文	258
第4章「実行のモダリティ」まとめ	258
第5章 質問のモダリティ	258
5.1 真偽質問文	259
5.1.0 i と na:の文の概観	259
5.1.0.1 音声的特徴とイントネーション	259
5.1.0.2 i と na:の形態的特徴と分析対象	260
5.1.0.3 i と na:は〈質問〉を表すのか	263
5.1.0.4 i と na:は終助辞なのか	264
5.1.1 i/mi の文	264
5.1.1.1 〈質問〉を表す i/mi の文	264
5.1.1.2 〈質問〉以外のモダリティ	278
5.1.1.2.1 〈反語解釈〉	278
5.1.1.2.2 〈納得〉	281
i/mi の文のモダリティ総まとめ	282
5.1.2 na:の文	283
5.1.2.1 〈質問〉を表す na:の文	283
5.1.2.1.1 名詞に直接後接する na:の文	283
5.1.2.1.2 述語に後接する na:の文	285
5.1.2.2 〈質問〉以外のモダリティ	290
5.1.2.2.1 〈反語解釈〉	290

5.1.2.2.2	〈納得〉	292
5.1.2.2.3	de:nna:の文	293
	na:の文のモダリティ総まとめ	294
	i と na:の文の総まとめ	295
5.1.3	raja:の文	295
5.1.3.1	概観	295
5.1.3.2	形態的特徴	296
5.1.3.3	raja:の文のモダリティ	296
	raja:の文のまとめ	303
5.1.4	ra の文	303
5.1.5	gaja:の文	305
5.2	補充質問文	305
5.2.1	ga の文	305
5.2.2	ra の文	307
5.2.3	gaja:の文	307
5.3	その他の質問文	308
5.3.1	否定質問文	308
5.3.2	問い返し質問文	309
第5章「質問のモダリティ」まとめ		312
第III部 本研究の総まとめ		313
6.1	各章のまとめ	313
6.2	全体のまとめ	316
6.2.1	叙述文	316
6.2.2	実行文	317
6.3.3	質問文	317
6.3	首里方言のモダリティの特徴	318
6.3.1	叙述文	318
6.3.2	実行文	319
6.3.3	質問文	320
今後の課題		321
さいごに		322
参考／引用文献		322
付録資料1：琉球語とは？		328
付録資料2：首里方言に地域はあるのか？		330
付録資料3：調査同意書		332
付録資料4：動詞の活用表		336
付録資料5：IPA(国際音声記号)表記および音韻・音節構造等について		337

第I部 モダリティと首里方言の関わり

第1章 本研究におけるモダリティについて

1.1 モダリティとは

本研究では、モダリティを「現実世界の出来事を話し手が〈確認〉し、それをどのような目的で聞き手に発信するかを表現する文レベルの意味・働き」と規定する¹²。よって、モダリティ研究とは、主に述語にあらわれる文法的なかたち（形式や形態）を含む文が、全体としてどのような働き（意味・機能）を担っているかについて分析することで、その発話の目的あるいは文の述べ方を文レベルで明らかにすることである¹³。

例えば、話し手が聞き手に命令する文なのか、質問する文なのか、聞き手に対して話し手の判断や評価を伝える文なのか、単に出来事の実態を伝える文なのか等、さまざまな言語学的観点¹⁴から明らかにしていくのである。〈命令〉を目的とした文は命令文、〈勧誘〉を目的とした文は勧誘文等と呼ばれる。

命令文には命令形、勧誘文には勧誘形というように、モダリティのタイプによって基本の述語形式がある。例えば、次の用例では、動詞 *?iteun*（行く）と *kamun*（食べる）が命令文の場合には命令形 *?ike:* と *kame:* が、勧誘文の場合には勧誘形 *?ika* と *kama* が用いられている。*?ike:* や *kame:* のような動詞の連用語幹に *e:* が後接した形は命令文における基本形式となり、*?ika* や *kama* のような動詞の連用語幹に *a* が後接した形は勧誘文における基本形式となる。

命令文

φe:ku ?ik-e 「早く行け」

早く 行く-IMP2

φe:ku kam-e 「早く食べろ」

早く 食べる-IMP2

勧誘文

maɖzun ?ik-a 「一緒に行こう」

一緒に 行く-HORT

maɖzun kam-a 「一緒に食べよう」

一緒に 食べる-HORT

命令文には命令形だけが用いられるのではなく、発話の目的をはたすために、私たちは会話の場面や文脈にあわせて、さまざまなタイプの形式や文を用いることができる。例えば、次の用例はすべて〈命令〉を目的とした文であるが、述語の命令形だけでなく、否定質問形式(*?ikani* 行かないか)、話し

¹² 規定のあり方は、奥田（1996）や佐藤（1999）を参考にした。奥田は、モーダルな意味（モダリティ）を「（私）のたちばからする、現実の世界の出来事と対象的な内容としての出来事との関係のし方」と規定している。さらに、佐藤によると、奥田は「対象的な内容は、具体的な発話においては、はなし手の *referenciation*（関係づけ）の行為と *prediction*（のべたて）の行為によってつくりだされている」（佐藤, 1999, p. 91）と述べていて、モダリティの規定にもそのことが反映されている。筆者の規定は、奥田の規定に準じたものであるが、本研究の目的にあわせて自分なりに規定を試みた。

¹³ 音声・音韻論的な研究は「音」に焦点をあて、形態論的な研究は「文法的なかたち」を中心に分析する。

¹⁴ 例えば、中心的なものに、文の人称性やテンス・アスペクト等が挙げられる。

手の評価を表す形式(?ikandare: naran 行かなければならない)が用いられている。

ɸe:ku ?ik-e: (早く 行け。)

早く 行く-IMP2

ɸe:ku ?ik-an=i (早く 行かないか。)

早く 行く-NEG=YNQ

ɸe:ku ?ik-an=dare: nar-an=do: (早く 行かなければ いけないぞ。)

早く 行く-NEG=FOC.ある.CND なる-NEG=SFP

もちろん、これらの〈命令〉の文の細かいニュアンス¹⁵はそれぞれ異なるが、「話し手が聞き手に働きかけて、話し手が望む動作や行為を聞き手に一方的にしむける」という同じ目的(モダリティ・モーダルな意味ともいう)を持っている。命令形を用いた命令文を基本(プロトタイプ)として、場面状況にあわせたさまざまな形式を用いた、さまざまな命令文が存在している。

さらに、述語に命令形が用いられている文が、必ず命令文になるとは限らない。次にみるように、命令形をふくむ文が、《対象的な内容》の違いあるいは発話にいたるまでの話し手の認識の内容のし方やその違いによって、さまざまな意味あいを持つ。

10) ?ja: t̄e:ra: n:d̄zi-buc̄iku=n ne:n. nama sigu ?nd̄zit-i ?ik-e:
お前.GEN 顔.TOP 見る-DES=ADD ない 今 すぐ 出る-SEQ 行く-IMP2
「お前の顔は見たくもない。今すぐ出て行け。」

11) mi:=nu kensa had̄zimi:n=do:. to:, kuma=ŋkai tat-e:
目=GEN 検査.ACC 始める=SFP.ASS INTJ ここ=DAT 立つ-IMP2
「目の検査を始めるぞ。さあ、ここに立て。」

12) A: wanne: guburi: s-abir-a=u:=sai
私.TOP 失礼 する-POL-INT=SFP=POL.M
「私は失礼します。」

B: to:, ?ance: ?isud̄z-i ?ik-e:
INTJ CNJ 急ぐ-SEQ 行く-IMP2
「そう、それじゃ急いで行け。」

13) habu=nde:=nu u-ine: nar-an-mun, t̄e: t̄ein t̄eikit-i ?ik-e:
ハブ=など=NOM いる-CND なる-NEG-CSL 提灯.ACC つける-SEQ 行く-IMP2
「ハブなどがいたらいけないから、提灯をつけて行け。」

14) [沖縄で広く普及しているわらべ歌]
sakaja=nu mid̄zi k^wat-i ku: k^wat-i ?utir-i=j̄o:, d̄zind̄zin. sagar-i=j̄o:, d̄zind̄zin
酒屋=GEN 水.ACC 食う-SEQ 粉.ACC 食う-SEQ 落ちる-IMP1=SFP 蛭 下がる-IMP1=SFP 蛭
「酒屋の水を飲んで粉を食って落ちよ, 蛭さん。下がれよ, 蛭さん。」

一つ目は、聞き手が不利益を被る、典型的ともいえるような〈強制〉的な命令の文である。二つ目は、聞き手の利益性に関しては無関心で、話し手が相手に行為の実行を指示する場合の例で、〈指示〉的な命令を表す。三つ目は、先に動作の実行の意志が相手から示されている場合の例で、〈許可〉を表す。四つ目は、動作の実行が聞き手に利益をもたらす場合の例で、〈勧め〉を表す。五つ目は、働きか

¹⁵ 本研究では、この文の細かいニュアンスのことを佐藤(1999)にならって「意味あい」と呼ぶ。

けの対象が意志を持たず、話し手が直接働きかけることが不可能あるいは困難な場合で、その文はただの話し手の〈願い〉を表す。

文に差し込まれる出来事の素材的な内容、つまり「今すぐ出て行くこと」「ここに立つこと」「急いで行くこと」「提灯をつけて行くこと」等を、奥田（1996, p. 231）に準じて《対象的な内容》と呼ぶとすれば、命令形という一つの形式が《対象的な内容》の違いに応じて、〈強制的な命令〉〈指示的な命令〉〈許可〉〈勧め〉〈願い〉等、さまざまなモダリティの文にあらわれる。このような《対象的な内容》の違いや話し手の認識のし方の違いは、利益・不利益の有無（利益性）、意志の有無（意志性）、人称（主語がだれ／何か）の違いとなって文の中で具体的に示され、モダリティを決定づける条件や要因となっている。

どのような要因や条件が積極的に関わっているかは、モダリティのタイプによって異なるが、動作主が誰かあるいは主語が何かということ、つまり、文の《人称性》はどのモダリティタイプにおいても、常に深く関わっている。なぜなら、動作の主体の違い（話し手が実現するのか、聞き手がするのか、それとも第三者がするのか）によって、事象の内容や様子は大きく変わるからである。

例えば、命令文は「聞き手のある行動にしむける」という働きがあるため、二人称（聞き手）を主語にとる。勧誘文ならば、「聞き手を話し手の行為にひきこんで、同じ行動に仕向ける」という働きがあるため、一・二人称（話し手と聞き手）を主語にとる。叙述文（平叙文）のように、人称制限がないものもある。人称制限がないとは、一人称も二人称も三人称も主語にとれるということである。

ただし、人称制限がない場合でも、人称ごとにモダリティが変化することがある。例えば、話し手の評価を表す *eiwadu jaru*（すればこそだ・しないとイケない¹⁶）は、主語あるいは主体が一人称の文では、話し手の〈意志〉や〈願望〉を、主語（主体）が二人称の文では、聞き手への〈忠告的な命令〉を、主語（主体）が三人称の文では、話し手の第三者等に対する〈必要〉をただ述べる。

それから、文のテンス（時間制）もモダリティと関わっている。過去あるいは現在の事象はすでに実現された／実現されている事象であるため、リアルな事象と結びついているが、未来の事象はまだ実現されていない事象を描きだしているため、ポテンシャルな事象と結びついている。したがって、文に差し込まれた事象は過去のことなのか、それとも今現在起こっていることなのか、それとも未来のことを描きだしているのかによって、文に差し込まれる《対象的な内容》が変化するため、モダリティの違いにも大きく影響する。

例えば、*raja*:を用いた質問文は、話し手が決めてかかった疑いのような判断を差しだして、その判断が正しいかどうか聞き手に問いかける文であるが、過去の事象を *raja*:の文で問いかける場合は、*ḍzino: jukai teikataraja*:（お金は相当使っただろう？）のように、過去に実際に起こった事象について問いかける文となる。しかし、未来の事象を *raja*:の文で問いかける場合は、*?ande: ?imiso:randaraja:tai*（そうは言わないでしょう？）のように、まだ起きていないポテンシャルな事象を差しだすため、問いかけ以外の別の働きを持つことがある。上の例では、「そうは言うな」というような話し手の未来の動作を前もって阻止する禁止文に似た働きを持っている。

このような人称性やテンスに加えて、モダリティ分析には、話し手以外の聞き手が存在するか（独り言か対話的か）、聞き手が存在するなら話し手と聞き手との関係（年齢の上下や親しさ等）、発話の目的

¹⁶ 「すればこそだ」は直訳であり、「しないとイケない」は意識である。*eiwadu jaru* は、否定のかたちを一切もたずに、〈行為の限定〉あるいは〈行為の義務づけ〉という意味あいを実現する。首里方言では、「これだけしかない」を *?uppi=du ?aru*（直訳：これだけ=ぞ ある）というように、否定表現を用いず *du* を用いてとりたてる方法で、ものや出来事の限定を表すことが多い。

が果たされたとき受け手が利益を得るか、不利益を被るか(あるいは利益性はニュートラルか)、話し手が聞き手に問いかけて何らかの情報を求めているか(問いかけ性・情報要求性)等、さまざまな場面状況的な要素が複雑にからみあって、文のモダリティを形作っている。

以上、モダリティとは何かということについて概略的に解説を試みたが、次節では、本研究におけるモダリティとはどういうものか、どのような枠組みを用いているのかを、さらに詳しく述べていく。

1.2 モダリティ理論に関する先行研究

本節では、宮崎他(2002)のモダリティの枠組みについて述べながら、本研究がPalmer(2001)等のmodality研究を参考にしつつも、宮崎他(2002)の枠組みを踏襲した研究であることを示す(モダリティという用語の規定をめぐることは、奥田(1996)や佐藤(1999)を参考にしている。註12も参照されたい)。

宮崎他(2002)の枠組みを採用したのは、首里方言のモダリティ体系全体を記述する手始めとして何らかの基本的な枠組みが必要だったからである。琉球諸語研究にはそのような研究の蓄積がない。そのため、ひとまず日本語のモダリティ研究の枠組みを用いて、首里方言のモダリティ体系全体の記述を試みたのが本研究の特徴である。

本研究でも同様に、宮崎他(2002)の「文の述べ方」という観点を用いてモダリティを分類する。そうしたとき、本研究のタイトルにある〈叙述・実行・質問〉の三つの基本的な枠組みが浮かびあがってくる。そして、文の述べ方という観点から分類したモダリティのあり方、つまりその基本的な枠組みは、後述するように、二段階の二項対立プラス α という対立のし方をみせるのである。

1.2.1 宮崎他(2002)のモダリティの枠組み

先述の通り、本研究における〈叙述・実行・質問〉というモダリティの枠組みは、宮崎他(2002)を参考にしたものである¹⁷。宮崎他(2002)は、文の述べ方という観点から日本語のモダリティ体系全体を分類しているが、モダリティの枠組みを設定する上で、まず〈基本叙法〉という形態論の考えを出発点としている。そして、下の表に示すように、形態論的なカテゴリーとしてのムードのなかでもっとも基本的な〈意志〉〈命令〉〈叙述〉を〈基本叙法〉と呼び、その三つを基本とした枠組みを用いて日本語のモダリティ体系について記述を行っている。

表1 宮崎他(2002)におけるムードの語形の対立

切れ続き	ムード	テンス	語形
終止	意志	—	書こう
終止	命令	—	書け
終止	叙述	非過去	書く

このうち、〈意志〉と〈命令〉は〈実行〉という一つのカテゴリーとしてまとめることができ、〈実行〉は〈叙述〉と対立する(つまり、〈叙述〉か〈非叙述〉かで対立している)。そして、〈実行〉の

¹⁷ 規定のし方については、先に述べた通り、奥田(1996)や佐藤(1999)を参考にした。宮崎は、「言語活動の基本単位としての文の述べ方についての話し手の態度を表し分ける、文レベルの機能・意味のカテゴリー」「文の素材的な内容(および聞き手)に対する話し手の態度」という規定を採用する等、規定のし方については奥田のものと若干異なるが、奥田の研究の成果を自身のモダリティ研究に積極的に取り入れている。

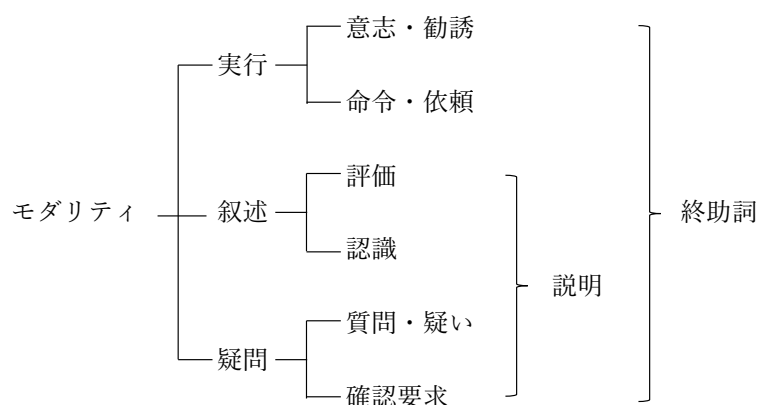
下位に〈意志〉と〈命令〉が存在するという「二段階の二項対立」という構造を持つ(宮崎, 2002, p. 11)。

しかしながら、この〈基本叙法〉のなかに〈質問〉は入っていない(宮崎では〈疑問〉という用語を用いている)。詳細は宮崎他(2002)を参照されたいが、日本語のモダリティ体系の基本をこの〈基本叙法〉に求めながらも、〈質問〉をとりあげるのは、文の述べ方という観点から文の意味や機能を考えたとき、重要な要素となって文のモダリティに関わってくるからである。「書く」という叙述文を上昇イントネーションで「書く?」のように質問文として述べることができたり、「書こう」という意志・勧誘文の末尾に「か」をつけて上昇イントネーションを伴わせることで「書こうか?」のように意志の質問文として文を述べるができる。

したがって、〈質問〉は〈基本叙法〉レベルではあらわれなくても、文の述べ方という観点から文の働きを分析したとき、聞き手に問いかけて情報を得るという文の述べ方を表す〈質問〉というモダリティが存在しているため、〈質問〉をモダリティの枠組みの中に含めるのがよいと考える。

次の表が宮崎他(2002)の示すモダリティの枠組みである。

表2 宮崎他(2002)のモダリティの枠組み



1.2.2 モダリティをめぐる本研究の立場

ひとまず、本研究では、首里方言のモダリティ研究の出発点として、この宮崎他(2002)の日本語のモダリティの枠組みを参考にしつつ、首里方言のモダリティ体系全体の記述を行う。ただし、本研究での分析の結果、首里方言のモダリティ体系全体が明らかとなった今、次のような変更点を認める。

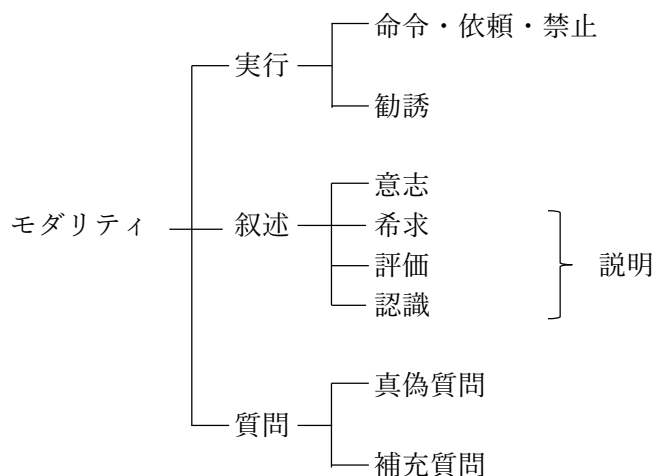
表3 モダリティの枠組みに係る変更点

- (a) 〈意志〉を〈実行〉には含めない。
- (b) 〈実行〉に〈禁止〉を含める。
- (c) 〈叙述〉に〈意志〉と〈希求〉を含める。
- (d) 〈説明〉を〈叙述〉に含める。ただし、〈希求・評価・認識〉との共存が可能である。
- (e) 〈疑問〉を〈質問〉に変更し、「確認要求」および〈疑い〉は削除する。
- (f) 〈疑い〉の一部を〈叙述〉のうちの〈認識〉に含める。
- (g) 「終助辞のモダリティ」は認めない(以下で補足)。

上記をまとめたのが次の表である。あくまでも暫定的なものであり、今後研究が進むにつれて新たに変化したり、発展していく可能性がある。また、この枠組みは首里方言に特有なものではなく、日本

語のモダリティにも適用できるものである。

表4 本研究のモダリティの枠組み



1.2.3 終助辞について

本研究では、「終助辞のモダリティ」という分類は行わない。ただし、後述するように終助辞は、モダリティと密接に関わる要素の一つであるため、モダリティ分析からは除外されない。ここでいう終助辞というのは、大抵、一ないしは二モーラという短い拍で形作られ、文の末尾に配置される言語形式の総称のことである。聞き手への伝達的な配慮を主な機能としているものが多く、このような機能を持つ終助辞はモダリティを決定する機能を持っていないことが多い。

例えば、首里方言の終助辞に *te:* というのがある。*te:* は動詞の断定形に後接するが、*te:* の文全体としては、話し手の発話時における推量（推定）や間接確認による判断を表す。日本語でも、断定形（断定形）の文が推量（推定）や間接確認による判断を表すことができるように¹⁸、首里方言でも同じような用法があり、そのような文を聞き手に伝えるときに *te:* が用いられる¹⁹。

しかしながら、モダリティを決定する機能を持つ終助辞も存在する。例えば、質問文であられる「か」や首里方言の *na:* のような終助辞である。日本語の「か」は、それなしでも質問文になりうるが、首里方言の *na:* は、それなしでは質問文にはなれない。

このように、終助辞の機能は多岐にわたっているため、「終助辞のモダリティ」というものは存在しない。どのようなモダリティの文に、どのような終助辞が用いられて、結果として文がどのようなモダリティを表現しているのか、そのモダリティが成り立つために、その終助辞は必須かという分析が重要である²⁰。

¹⁸ 工藤 (2014) 『現在日本語ムード・テンス・アスペクト論』 (p. 116)。

¹⁹ [飲んでいたお茶が洗濯物を干している間に減っていて] *odzi:=ga ?utea nude:n=te:*. (おじい=が お茶を 飲んだんだ ≒よ) のように動詞の *ee:n* 形式と共起しやすいことから証明できる。*ee:n* 形式は、証拠に基づく推定（間接確認）を表す (工藤, 2014)。ここでの《対象的な内容》である *odzi:=ga ?utea nude:n* (おじい=が お茶を 飲んだ) というのは、お茶が減っていることからの〈推定〉である (実際に飲んだのを見たわけではない)。

²⁰ Palmer (2001) 等の一般的な欧米言語学の枠組みでは、通常、終助辞はモダリティとはみなされない。また、説明や丁寧さ等も同様にモダリティには含まれない (Faquire, 2012, p. 114*¹; p. 117*²)。

*¹ ...there are some atypical *modariti* including *setsumei no modariti*, the subtype of *kantan no modariti* belonging to *hyougen ruikei no modariti* and the subtype of *teineisa no modariti* belonging to *dentatsu no modariti* which do not fit into the topic of modality in terms of the semantic criteria established in Chapter 3.

*²...Palmer (1986) makes reference to Kuno (1973) and question whether the final particles belonging to the *dentatsu taido no*

1.3 第1章のまとめ

本研究では、モダリティという用語については奥田（1996）や佐藤（1999）を基に、「現実世界に対する認識を通して、話し手が聞き手に何を伝えるのか、どのような目的を発話によってはたそうとしているのかを表現している、文レベルの働き」と規定する。〈叙述・実行・質問〉というモダリティ全体の枠組みについては、宮崎他（2002）を参考にする。また、これらの規定や枠組みを土台としながら、差し支えがない程度に、Palmer（2001）等の他の modality 研究も活用する²¹。

第2章 本研究における「首里方言」について

2.1 研究対象としての「首里方言」および地域概要

ごく一般的に首里方言と言えば、現在的那覇市首里地区で伝統的に話されてきた方言（あるいは言語）のことを指す。しかし、一口に「首里方言」と言っても、その様相は複雑である。當山（2015b）は、従来の研究において「首里方言」という用語が何を指すのかについて明確な定義づけが行われて来なかったことを指摘し、首里方言を「首里階層方言」「首里地域方言」「首里那覇社会方言」の三つに分類している²²。したがって、本研究でも、當山（2015b）の分類に基づきながら、「首里方言」とは何を指すのか、本研究がどのような言語あるいは方言を対象としているのかについて詳しく述べる²³。

結論から言うと、本研究では、下記の表にて太字で示した「首里方言」以下全てを「首里方言」として研究の対象とする。ただし、この分類は予備的・暫定的なものである。あくまでも本研究のいう「首里方言」が何を指すのかを明示するための目安である。

表5 首里方言の言語系統的下位分類

カテゴリー	カテゴリー2	対立する構成要素
言語1	琉球語	日本語・アイヌ語・中国語・韓国語・英語等
言語2	沖縄語	奄美語・国頭語・宮古語・八重山語・与那国語 ²⁴
方言1	南部方言	中部方言 ²⁵
方言2	都市方言 ²⁶	地方方言
方言3	首里方言	那覇方言・久米方言・泊方言・屋取方言 ²⁷ ・辻方言 ²⁸

modariti (e.g. *yo, ne, ka* and *sa*) express a meaning of modality at all.

²¹ 本研究での Palmer（2001）の貢献は大きい。認識のモダリティに位置づけられる *hadzi*（はず・だろう）の文を分析する上で、Palmer（2001）を大いに参考にしている。それは、類型論の分析に基づき世界の言語と照らしあわせることで、*hadzi* の文をはじめ、首里方言のモダリティへの理解が深まるのではないかと考えたからである。

²² 當山（2015b）は、従来の研究では、「首里階層方言」の土族階級が使用した方言に研究の対象が置かれてきた問題点を指摘している（pp. 88-89）。

²³ 研究題目の「琉球語」に関しては、内容が乱雑になるため、ここでは論じない（本論最後の「付録資料1」を参照されたい）。ここでは単に「琉球列島の諸言語・諸方言の総称」くらいの意味で使用する。

²⁴ UNESCO (2009)「Atlas of the World's Languages in Danger」。

²⁵ 沖縄語あるいは沖縄中南部方言の細分類についての定説はないため、これも仮の暫定的なものである。

²⁶ 都市方言は、首里・那覇・久米・泊などかつてマチカタと呼ばれた都市部の諸方言の総称である。都市方言は「階層方言」を持つ。

²⁷ 屋取（ヤードウイ）は、かつてマチカタと呼ばれた都市部（首里や那覇など）から「田舎降り（武井, 2009）」した旧士族が、地方へ生活の場所を求めて移住・開墾して築いた集落のことである。屋取方言の多くは都市方言と地方方言の両方の特徴を持っている。

²⁸ かつて遊郭が置かれた辻（チーヂ）で使用されていた言葉のことだが、現在では知る由もない。暫定的に都市方言として分類した。

方言 4 首里階層方言
 首里地域方言²⁹
 首里那覇社会方言

また、上記の「首里方言」には含まれないが、モダリティを研究するには差し支えがないと判断される「近隣方言」も研究の対象として含めることにする。なぜなら、現時点では、談話資料が少なく、それを補う必要があるからである。モダリティの詳細な研究のためにはできるだけ多くの用例を分析する必要がある。まとめると、本研究における対象言語（方言）は、次のようになる。

表 6 対象言語（方言）

- (a) 首里階層方言・首里地域方言・首里那覇社会方言
 (b) 首里方言以外の近隣方言（モダリティ分析に差し支えがない場合に限る）

次項では、首里階層方言・首里地域方言・首里那覇社会方言という三つの用語について、簡単な説明を行う（詳細については當山 2015a や當山 2015b を参照されたい）。また、最後に「首里方言以外の近隣方言」についても説明を行う。

2.1.1 「首里階層方言」

「首里階層方言」とは、「コミュニティ内に存在する社会的階級によってその使用言語が区別される方言である」（當山, 2015b, pp. 91-92）。したがって、貴族や士族だけに限らず、平民身分の者が貴族や士族身分の者に向かって使用する場合もあったと思われるため、階級差によって使い分けられる方言全般を「首里階層方言」と呼ぶのが良いだろう³⁰。以下が国立国語研究所(編)（1987）から抜粋した「首里階層方言」の使用例である。

15) [士族: 大正 10 年生・男, 貴族: 大正 15 年生・男]

士族: jucirij-abit-an	「ごめんください。」
参る-POL-PST	
貴族: t̃e-e:=saja: ʔir-e:	「来たか。入りなさい。」
来る-RES=SFP 入る-IMP2	
士族: ʔu: eidu:gaɸu:	「はい。ありがとうございます。」
はい ありがとう.HON	
ʔadzi-ganaci:-me:, ʔu-hadzimi	「御按司様, 御初め」
按司-HON-HON 御-初め	
gusu:jo:, ʔubukundzanaci: ʔuja-nce:-bi:-ti:	「皆様, ご機嫌よろしゅうございましたか。」
皆様 ご機嫌よろしい COP.HON-HON-POL-PST.YNQ	
貴族: ʔi: ʔitta:=n ɸukura:sa s-o:-ti:	「うん。お前達も元気にしていたか。」
うん 2PL=ADD 元気 する-PROG-PST.YNQ	

²⁹ 首里地域方言の下位に、金城方言・赤平方言・儀保方言など、村単位の方言が置かれる。

³⁰ 當山 (2015b) は「琉球王国時代に存在した貴族階級と士族階級の人々が話していた方言のことである」と述べている（當山, 2015b, pp. 91-92）が、上記の理由により、必ずしも貴族と士族に限らず、平民階級の人々も使用することがあったと思われる。

士族: ?u: eidu:gaɸu:	「はい。ありがとうございます。」
はい ありがとうございます.HON	
nage: nuntɕi ?ugam-i:ga=n	「久しくお会いしにも」
長い間 顔.HON 拝む-PUR=ADD	
jueiri-ju:s-abir-an, ?usuri ?itte-o:-ibi:n	「参ることができませんで、恐れ入ります。」
参る-POT-POL-NEG.SEQ 恐れ 入る-PROG-POL	
貴族: ?n: nna ?iteunasu su-kutu=ja:	「うん。皆忙しいからな。」
うん 皆 忙しき する-CSL=SFP	
?iɸina: k-u:=jo:	「少しは来なさい。」
少しは 来る-IMP=SFP	
士族: ?u: eidu:gaɸu:	「はい。ありがとうございます。」
はい ありがとうございます.HON	

(pp. 255-256)

上でみるように、「首里階層方言」の特徴は、敬語表現や挨拶に顕著にみられる。なぜなら、どの階級の者がどの階級の者に向かって話すのか、話し手と聞き手の階級差によって、使用言語に差が生じるからである。例えば、訪問相手が貴族ならば、話し手は身分関係なく「ごめんください」を *jueirijabitan* (参りました) あるいは *jueirijabira* (参りましょう) と言うが、それ以外で丁寧に言う場合は、*tea:bira(sai/tai)* と言うように単に動詞 *teu:n*(来る)を用いた表現を使用する³¹。

すなわち、「首里階層方言」の場合は、このような聞き手に対する敬意の度合いの違いに留意しながら、分析を行う必要がある。ただし *jueirijabitan* と *tea:bira(sai/tai)* のように、語彙的な意味が同じ表現は、意味上は同じように扱っても分析に差し支えはない。

³¹ 国立国語研究所(編) (1987) や首里奨学母の会 (1978) 等を参考に、首里階層方言の語彙や表現を例示したのが表7である。形式2より形式1の方が敬度が高いが、形式2も幾分か敬度を含んだ表現である。

表7 首里階層方言の語彙・表現例

敬度* 高 ←

#	日本語対応訳	形式1	形式2
(a)	ごめんください	<i>jueirijabitan</i>	<i>tea:bira(sai/tai)</i>
(b)	ありがとうございます	<i>eidu:gaɸu:(de:biru)</i>	<i>niɸe:de:biru</i>
(c)	ご機嫌よろしいこと (挨拶)	<i>?ubukundzanaci:</i>	<i>(?ugandzu:)</i>
(d)	祖父・老翁	<i>?uɸudzundzanci:me:</i>	<i>tamme:</i>
(e)	元服 (成人の儀式)	<i>dzimbuku</i>	<i>katakaciraju:i</i>
(f)	兄・兄さん	<i>jateime:/jattei:me:</i>	<i>jattei:</i>
(g)	昼御飯	<i>?asaubun</i>	<i>?asaban</i>
(h)	結婚した貴族の女性	<i>?umanime:</i>	<i>?atto:me:</i>

* 敬意の度合いのこと (川上, 1998, p. 260)

ただし、これらの語彙や表現は、同じ階級の者同士で使用するのか、違う階級の者が敬意を払うために相応の語彙や表現を用いるのか、さらに細かく分類しなければならず、その実態は複雑である。(a)~(g)は聞き手 (あるいは文の主体) の階級に合わせて用いられる敬語表現である。例えば、士族あるいは平民階級の者が貴族の家を訪ねた場合、その者は士族であろうが平民であろうが *jueirijabitan* と言う。一方、(h)は同じ結婚した貴族の女性に対して、話し手の階級差によって使用する語が異なる例である。貴族の者はその女性のことを *?umanime:* というが、それ以外の階級の人々は *?atto:me:* と呼ぶようである (音声データベース「ウマニメ」)。

また、上述の「首里階層方言」の会話例では年上である士族が年下の貴族に対して敬語を用いているため、年齢よりも階級の上下によってどのような言葉や敬語を用いるかが決定されるという特徴がある。年齢と階級差による使用言語の違いに関しても実際はもっと複雑で、自分より階級が下の者でも、年齢が自分より上でかなり高齢であったり、かなり離れている場合、ある程度の敬意を示す敬語表現が用いられる (応答語「はい」の例: ?u: 目下→目上, ?o: 目上→年長の目下, ?i: 対等/目下へ, ?n: 対等/目下へ)。

新垣 (2006) は首里階層方言の敬語表現について分析した研究である。新垣によると、貴族と士族の間の会話では丁寧さを表す終助辞 *tai/sai* がほとんど用いられない。したがって、*tai/sai* は士族・平民間あるいは士族同士で主に使用されていた可能性がある。

2.1.2 「首里地域方言」

「首里地域方言」は、「平民階級が使用していた言語の後継」であるとする（當山, 2015b, p. 94）。つまり、首里の各村々で話されていた地域方言のことを指す。首里地域方言の実態についてはほとんど明らかにされていないが、いくつかの資料において断片的に記述されている（詳細は「付録資料 2」を参照されたい）。

地域方言に関しても、語彙の違いや、発音やイントネーションの違いがみられるだけなので、その違いに留意すれば、モダリティ分析にはあまり問題にならない場合がほとんどだろう。

2.1.3 「首里那覇社会方言」

當山 (2015b) によると、「首里那覇社会方言」は、「地域方言の特徴をうしなつた」コミュニティー内に広く通用する共通語的な方言を指す (p. 96)。崎原 (2015b) では、このような方言をネオ沖縄語 (NEO Okinawan) と呼称し、それにまつわる様々な問題について論じている。本研究では、沖縄芝居の台詞を用例として用いるが、沖縄芝居で用いられる方言は、首里や那覇の方言が混ざったような共通語的な方言が使用されていて、首里那覇社会方言に分類できる。首里那覇社会方言は、宮良 (2002) も指摘している通り³²、厳密に言えば、必ずしも「首里方言」とは言えない要素を含んでいるため、その扱いには留意しなければならない。次にそのことについて詳しく述べる。

2.1.4 研究対象としての「首里方言」以外の方言

首里那覇社会方言や屋取集落で話されていた屋取方言は、厳密には「首里方言」にはあてはまらないだろう。また、本研究では、不足している談話資料を補うため、首里方言に近い近隣方言も研究の対象として扱う。文献としては下記の 2 つ等が含まれる。

表 8 近隣方言の出典情報

出典名	カテゴリー (方言名)
那覇市教育委員会, & 沖縄言語研究センター (1994a) 『沖縄芝居脚本集第 2 巻』『那覇の方言－那覇市方言記録保存調査報告書IV』	沖縄芝居の方言 (著者の真喜志康忠氏は那覇市泊出身)
伊芸弘子編著 (1992) 『昔話研究資料叢書別巻 沖縄・首里の昔話』	屋取方言 (話者は屋取集落である南風原町大名出身)

首里・那覇方言の主語について論じている田代 (2015) は、「沖縄芝居の方言は沖縄島の広い地域で理解される首里・那覇方言が用いられているが、言い回しが芝居がかっている。しかし、文法的な形式や意味に首里・那覇方言とのちがいはほとんどなく、本論文の用例としてあつかっていく上で問題はないと判断した」(p. 45) と述べ、上記の那覇市教育委員会, & 沖縄言語研究センター (1994a) からの用例を使用している。

首里方言のヴォイスについて論じている當山 (2012a) および當山 (2012b) と比較しながら、沖縄中南部方言のヴォイスについて再分析を試みている宮良 (2015) は、「當山が用いているデータは主に

³² 「本文中の例文は、沖縄中南部方言の中でも、現在演劇とかで標準的に使われている首里や那覇の方言が中心になっている。しかし、その方言は『沖縄語辞典』(1963) で採録されている上流社会男子による首里方言とは厳密な意味で異なる」と断りを入れている (宮良, 2002, p. 80)。

首里のことばで、本稿で採用しているのは那覇のことばなので、両者間には語彙的な相違がいくつかある。しかし、ここで取り上げられている音韻・形態・統語分析は原則として両者にそのまま当てはまるものと仮定される」(p. 19)と述べており、さらに首里方言話者から得たデータを一部使用していて、厳密には異なるレベルの方言の用例を混ぜて使用している。宮良の言う「語彙的な相違」とは、二つの方言において、異なる形式が用いられているが、意味的な違いが認められないものを指す。

本研究でも、那覇市教育委員会他(1994)で用いられる沖縄芝居の方言や伊芸弘子(1992)等で用いられる屋取方言は、モダリティ分析の上では差し支えがないと判断される場合に限って使用する³³。

2.1.5 男女差について

『沖縄語辞典』には、「階級、性別、年齢の差異に従って嚴重に敬語が使い分けられ」という記述がみられ、首里方言には男女差があったことが指摘されている(p. 19)。

男女差を表す最もよく知られた表現が丁寧さを表す終助辞 *tai/sai* であろう。首里方言では、女性は *tai* を、男性は *sai* を用いなければならない³⁴。次のように、*tai/sai* は文節や文の末尾に配置されて、その文や文節の丁寧さの度合いを上げることができる³⁵。

- 16) *i: ?wa:teitei ja-ibi:η=ja:=tai* 「いいお天気でございますね。」
良い 天気 COP-POL=SFP=POL.F
- 17) *tcassa=ga=sai* 「いくらです？」
いくら=WHQ=POL.M
- 18) *?anu=jo:=sai* 「あのですね...」
あの=IP=POL.M

その他、次のような語彙や表現が主に女性が用いとされているものとされている。

³³ 例えば、次に挙げる用例は、那覇市教育委員会他(1994)収録の「口なしの花」という芝居の台詞である。

- A: *satunuei=tu ?itea:te-i k^wi-nso:r-e:=na:* 「^{サトウシ}里之子と 会わせて 下さいませ。」
里之子=COM 会わせる-SEQ BEN-HON-IMP2=POL
- B: *nar-an=di ?ir-e:=kara nar-an=sa* 「だめと 言ったら だめだ！」
なる-NEG=QT 言う-CND=ABL なる-NEG=SFP (芝居, 614)

上記下線の *na:* という表現は、通常の首里方言でいうと、*tai/sai* にあたる丁寧さを付加する終助辞である。上の文を *k^winso:re:=tai* と言い換えても、当該文の「依頼文」というモダリティは変わらない。

次の用例も同様である。理由を表す *kutu* が *gutu* であらわれている。首里方言では、理由を表す *kutu* が *gutu* と濁って発音されることはない(仲原穰, personal communication, 2015年10月)。また、首里那覇音声データベースによると、首里方言では「ない」を表す語に *ne:n* を用いるのが一般的である(音声「ネーン」)。下記の用例に限っていえば、*ne:ran* と *ne:n* は単に語形が違うだけであり、置き換えても意味的な違いは生じない。

- tteu=ni n:r-att-i-n φu:dze: ne:ran-gutu, kuma=kara ?akku=na*
人=DAT 見る-PASS-SEQ=ADD 風儀.TOP ない-CSL ここ=ABL 歩く=PROH
 「人に見られたらみつともないから、ここを歩くな！」(芝居, 616)

³⁴ 方言によっては、男女ともに *hai=sai* を用いることが許容される。また、*tai/sai* を一切使用しない方言も存在する。

³⁵ 現代社会において *tai/sai* はジェンダーの問題を抱えている。英語では Miss/Mrs. を Ms. に、serviceman/ servicewoman を serviceperson に変えたように、*tai/sai* にも変化が求められている。タイ語の挨拶には、男性の使用する *sawasdi:krab* と女性の使用する *sawasdi:ka* に加え、セクシャルマイノリティー等が使用する中性的な *sawasdi:ha:* という表現があるという(ピヤタムロンチャイ・ラッチャニー, personal communication, 2015年11月4日)。

表9 女性が用いる語彙・表現

形式	意味・解説
ja:ɸunnu	感動詞。気の毒な様を見て言う。(儀間, 2000, pp. 62-63)
ʔakito:na:	感動詞。「おやまあ。あらまあ」(『沖縄語辞典』 p. 110)
micina:ku	感動詞。「めっそうな。あきれた場合, あるまじいことを見聞きした場合等に, 多くは指を鳴らしながらいう」(『沖縄語辞典』 p. 382)
-jo:ɸu:	フーは鼻にかかったように発音される。上記の用例 18 の女性的な言い方。ʔanujo:ɸu: (あのですね)。(儀間, 2000, p. 47)

このように、首里方言には女性的な表現がいくつも存在するため、男女差を認めることができるだろう³⁶。しかし、これらの性別による表現の違いも、モダリティの違いにはほとんど関わりがないため、問題にはなりにくい。

2.1.6 第2章1節のまとめ

本研究のいう「琉球語首里方言」とは、言語学的な用語としての琉球諸語の下位カテゴリーである「首里階層方言」と「首里地域方言」(場合によっては「首里那覇社会方言」)を首里方言とし、研究の対象とする。また、モダリティ分析上差し支えがないと判断される場合に限り、首里那覇社会方言や隣接方言(屋取方言・芝居の方言)も使用する。

以上、「首里方言」と研究対象に関して述べてきたが、首里方言のモダリティ研究は、未だ明らかでないことが多いため、全体像を明らかにするには、まず、本研究が目指すように、様々な談話資料を駆使して、包括的な研究を行う必要がある。今後、研究が進むにつれて、談話資料を絞り込む等して、より詳細で正確な研究が進むことが可能になるだろう。

2.2 首里方言の音声(音韻)・形態・語彙的特徴

本節では、本論を読む上で欠かせないと思われる首里方言の音声(音韻)・形態・語彙的特徴についておさらいする。

2.2.1 音声的特徴

首里方言には、ゆるやかな声たて(グラジュアルビギニング)と声門破裂音(グロッタルストップ)の間に音韻的な対立がある。「ʔがある場合は声門破裂音を際立たせ」、そうでない場合は「反対に声門破裂音がないことを際立たせて発音しなければならない」(国立国語研究所編, 1963, p. 30)。代表的なものに次のようなものが挙げられる。

19) ja:

家

20) ʔja:

2SG

21) wa:

1SG

22) ʔwa:

豚

³⁶ 性別による表現の違いに関する研究は少ない。挙げるとすれば、かりまた (2013a) を挙げることができる。男女間のイントネーションに関する研究はない。性差による使用言語の違いについては今後の詳細な研究が待たれる。

母音 (a, e, i, o, u) で始まる声門破裂を伴う単語が文頭にある場合、常に声門破裂音を伴って発音されるが、文中では発音されないことが多い。しかし、本論では、文中においても声門破裂音を付して表記する（下線部参照）。また、ゆるやかな声たてに関しては、文頭でも文中でも一切表記しない（波線部参照）。母音で始まる場合は、音環境によっては[w]や[j]等の渡り音が生じるが、そのような場合でも特殊な場合を除いては表記はしない（波線部参照）。

23) t̃ẽu=nu ?aware: sugai=ee: wakar-an=do:

人=GEN 哀れ.TOP 格好=INST.TOP わかる-NEG=SFP

「人の哀れは格好ではわからないよ。」

24) ur-an cidzi=du=n jar-e: mudut-i t̃ẽu:-ru ?e:da mat̃eo:t̃eun

いる-NEG.ADN FN=FOC=ADD COP-CND 戻る-SEQ 来る-ADN 間 待っておく

「いなかろうが戻って来るまで待っておく。」

2.2.2 形態的および語彙的特徴

2.2.2.1 動詞の活用

動詞の活用については、『沖縄語辞典』（国立国語研究所編、1963）に従った。動詞の語幹には、基本語幹・連用語幹³⁷・音便語幹・融合語幹・短縮形語幹がある。本論で扱うモダリティ形式と関わる形式に焦点をあてて、次の通り表にまとめた。尚、短縮形語幹は、融合語幹のひとつであるが、モダリティ分析上の必要性から別々に記述する。

表 10 首里方言の動詞の語幹³⁸

	基本語幹	連用語幹	音便語幹	融合語幹	短縮形語幹	
語幹	kam-	kan(/m)-	kad-	kan(/m)ur-	kamu-	
叙述のモダリティ	kam-an 否定	kam-abi:n 丁寧	kad-an 過去	kamur-a 疑い	kamu-n 断定	
	kam-a 意志		kad-e:n 完了	kamur-a:条件 5	kamu-n=do:主張	
	kam-a:条件 1		kad-o:n 継続	kamur-e:条件 6	kamu-n=de:控えめ	
	kam-e:条件 2		kad-i=n 第二中止形 +も	kam-abir-a 丁寧意志	kamu-n=te:説明	
	kam-awa 条件 3				kamu-n=ne: sun 印象	
	kam-una 禁止		(連用形)	kamut-an 証拠性過去	kamut-e:n 証拠性過去 2	kamu-ru 連体
	kam-i-wa 条件 4					kamu-kutu 理由
	kam-i-busan 願望					kamu-eiga 逆接
	kam-i-gisan 目撃判断					kamu-ei 名詞化
	kam-i=n 第一中止形+も					kamu=sa 感情
kam-i-bitei: ~べき	kamu=ee:思い出させる					
実行のモダリティ	kam-a 勧誘		kad-i=ma: してみる	kam-abir-a		
	kam-i 第一命令		kad-i=ma:ni してみ	丁寧勧誘		
	kam-e: 第二命令		る 2			

³⁷ 現代首里方言では、「連用語幹」はほとんど用いられない。「基本語幹」に合流してしまっている。

³⁸ 『沖縄語辞典』（国立国語研究所編、1963）を基に作成した。

質問のモダリティ	kam-an=i 否定真偽質問		kad-i:過去真偽質問	kamur-a=ja:念押し的な質問	kamu=ga 補充質問
	kam-ant=i: 否定過去真偽質問			kamut-i:証拠性過去真偽質問	kamu=gaja:間接質問
	kam-an=ga 否定補充質問			kamut-a=ga 証拠性過去補充質問	kamu-m=i 真偽質問 kamu-ru=i -ru 結び真偽質問

2.2.2.2 「名詞 + する」の動詞

日本語の「早起きする」のように、動作を名詞化してその後に「する」を付けて全体を動詞にする表現方法がある。首里方言では、日本語とは異なった表現をするものが多い。多出するため、混乱を避けるために、以下でいくつかをまとめて紹介しておく。

tẽa:tu:i + sun 続けて行く, そのまま休まず行く, 連続して行く, 等

tẽa:tu:i の tẽa: は、動詞が名詞化した語の前に置かれ、その動作が継続する様を表す。tu:i は tu:in (通る, 行く) が名詞化したものである。したがって、tẽa:tu:i は継続して行く事を表し、「続けて行く」という動作を表すために、sun (する) が後接して用いられる。

- 25) to:, ?ance:, ?akasa-ru ?uf̃ei=uti tẽina:band̃zu tẽiŋcira-wa=dunai-gutu ?unumama tẽa:tu:i ss-a=ja:
INTJ CNJ 明るい-ADN うち=LOC (地名) 着ききる -CND=OBLG-CSL そのまま 続けて行く事 する-HORT=SFP
「そう, では, 明るいうちに喜納番所に到着しておかないといけないからそのまま行こう。」(芝居, 752)

?uφuabi: + sun 大声で言う

?uφu は古語の「おほ(大)」であり、語中の abi: は動詞 ?abi:n (叫ぶ, 大声で言う) が名詞化したものである。したがって、?uφuabi: は「大声で言う事」を指す。それを動詞にするために、sun (する) が後接して用いられる (直訳すると「大声で言う事をする」)。

- 26) ha: to:to:, ?aja:=jo:. ?unijo:nakuto: ?ansuka ?uφuabi:=ja e-e: nar-an=do:
INTJ INTJ 母さん=VOL そのような事.TOP あまり 大声=TOP する-SEQ.TOP なる-NEG=SFP
「おい, まあ, 母さんよ. そのような事はあまり大声で言ってはいけないよ。」(実践, 30)

watẽaku + sun からかう

watẽaku は「からかう事」を意味する。したがって、watẽaku sun は直訳すると「からかう事をする」「からかいをする」である。

- 27) [民話の語り。王様が大変かわいがっていた渡嘉敷ペークーの話]

to:, kunu tukacitẽipe:ku: tẽu:=ja jub-a:ni na: kure:
INTJ この (人名).ACC 今日=TOP 呼ぶ-SEQ FIL FIL
「よし, この渡嘉敷ペークーを今日は呼んでもうこれは」
?ihe: watẽaku ei-wa=runai=ssa:=nditẽ-i
ちょっと からかい する-CND=OBLG=SFP.MON=QT.言う-SEQ
「ちょっとからかってやらなきやなあと言って...」(那民, 75)

so:ei + sun 本気を出す, まともにやる

so:は根性とか本気とかを表す名詞である。ei:というのは, sun (する) の連用形で名詞化したものである。したがって, so:ei:というのは「本気でする事」なので, so:ei: sun を直訳すると, 「本気でする事をする」である。

28) [相撲をとったが加減をしらないと言って責めたてる]

nindzino: kagin=di ?i-ei=n eiri-wa=dunajuru. so:ei: sun=tei³⁹ ?am=i
 人間.TOP 加減=QT 言う-NLZ=ADD 知る-CND=OBLG まともに する=QT ある=YNQ
 「人間は加減って言うのも知らなくちゃ。まともにやるってあるか。」(芝居, 700)

na:dziki + sun 名付ける

29) ?ance: ?abasa:=ja harisembon=tei na:dziki s-a=na

CNJ (魚名)=TOP ハリセンボン=QT 名付け.ACC する-INT=SFP
 「それじゃあ, アバサー(という魚)はハリセンボンと名付けましょう。」(猿, 8)

murū waeiri sun ど忘れする

30) taru:=ja ?ukattu: ja-kutu, murū waeiri s-o:-ru hadzi=do:. ?e:dz̄i e-i k-u:=wa⁴⁰
 (人名)=TOP うっかり者 COP-CSL 全部 忘れ する-PROG-ADN INFR=SFP.ASS 合図 する-SEQ 来る-IMP=SFP
 「タルーはうっかり者だから, ど忘れしていると思うよ。呼んでこい。」(音声「ウカットゥー」)

その他の例

kanasa + sun (可愛がり + する) = 可愛がる

nanjurumi: + sun (おのずと生えること + する) = 自生する

kaei:kaei: + sun (急ぐ様 + する) = 急ぐ, 機敏に動く, すばやく行動する

nitei φa:φa: + sun (熱が上がってほてる様 + する) = 熱が出てほてる

2.2.2.3 否定形の中止形

動詞の否定形は形を変えずにそのまま中止形になれる。

31) kasa=n mut-an-φ ?ami=nu na:ka ndit-i ?atte-an=na:

傘=ADD 持つ-NEG-SEQ 雨=GEN 中 濡れる-SEQ 歩く-PST=YNQ2
 「傘も持たないで雨の中濡れて歩いたの？」(語遊「ンディユン」2010/7/25, p. 13)

以下では, グロスに SEQ と表記するに留め, ゼロ (-φ) を記すことはせず, 全ての用例で省略する。

2.2.2.4 否定形の連体形

動詞の否定形は形を変えずにそのまま連体形になれる。

³⁹ 内容に合うように少し修正を加えた。

⁴⁰ 原文は, ?e:dz̄i ku:wa だが, 筆者が ei (して) を加筆し, 「合図して来い」とした。

- 32) kame:naeiku=ni nar-an- \emptyset ?uŋci=ni ma:gara=ŋkai jaraei-wa=rularu⁴¹
 煩わしい事=DAT なる-NEG-ADN うち=DAT どこか=DAT やる-CND=OBLG
 「煩わしい事にならないうちにどこかにやらなければ。」(昔話, 58)

2.2.2.5 コピュラ jan および存在動詞 ?an の否定形の丁寧形

コピュラ jan および存在動詞 ?an (ある) の否定形の丁寧形は、形づくりの上で二重否定の形を持つ。

- 33) ?anu mun-tca:=ga kukurukawai=n e-i=n eikata: ne:-ibir-an=sa
 あの 者-PL=NOM 心変わり=ADD する-SEQ=ADD 仕方.TOP ある.NEG-POL-NEG=SFP
 「あの人たちが心変わりしても仕方ありません。」(芝居, 896)

- 34) ?ane: ?a-ibir-an=sa
 そう.TOP COP-POL-NEG=SFP
 「そうではありませんよ。」(猿, 2)

ただし、便宜上、以下では、次のようにグロスを付す。

ne:-ibiran

ない-POL

?a-ibir-an

COP-POL-NEG

⁴¹ kame:naeikuni は『沖縄語辞典』にも記載されていないし、調査協力者も知らない語だと言う。したがって、原文の訳である「煩わしい事に」をそのまま記載した。

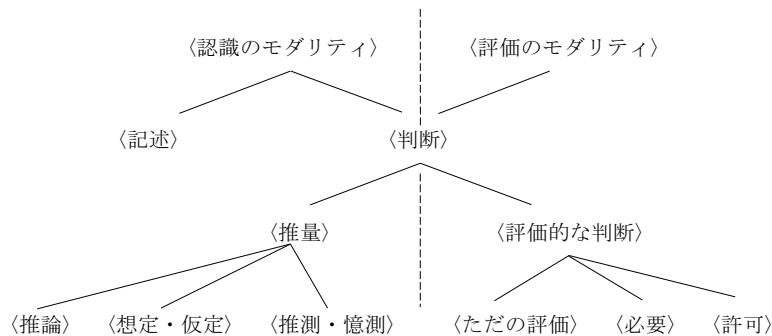
第Ⅱ部 首里方言の叙述・実行・質問のモダリティ

第3章 叙述のモダリティ

3.0 はじめに

本論では、〈叙述〉のモダリティをひとまず〈認識〉のモダリティと〈評価〉のモダリティの二つに大別する。この分類は、宮崎他（2002）や日本語記述文法研究会（2003）等の従来の日本語のモダリティ研究に倣ったものであり、暫定的なものであると言わざるを得ない。モダリティ研究のピークは〈叙述〉に始まり、〈叙述〉に終わると言っても過言ではない。それほど、複雑で緻密なのが〈叙述〉の文の特徴である。このような複雑で緻密な〈叙述〉の文の分類を、琉球諸語のモダリティ研究の手始めに決めてかかることは到底不可能である。従来の研究を用いながら、試験的に分類を行うことが目的としてある。まとめると、以下の図のようになる。

表 11 叙述のモダリティの諸相



従来のモダリティ研究では、なぜか〈認識〉よりも〈評価〉について先に述べることが多いのだが、本論では、〈認識〉のモダリティについて述べた後、〈評価〉のモダリティについて述べる。理由は、〈認識〉の方が現実世界の出来事に対する話し手の〈確認〉という、叙述文の土台となるモダリティがよりはっきりとあらわれていると考えるからである。

また、叙述文では終助辞が果たす役割が大きい。本研究では、終助辞の付いている文について詳しく分析を試みた。終助辞の付かない断定形でいいきる文の全体像については今後の課題とし、主に、分析の進んでいる終助辞の付いている文について詳しく述べながら叙述文の記述を行う。

3.0.1 終助辞が用いられる文のモダリティ

おおよそ一ないしは二モーラで構成され、文末に配置されて聞き手配慮等を主な機能とする接辞類は、終助詞・文末詞・終助辞等と呼ばれ、モダリティの観点から様々な記述が行われている。本論では、このような接辞類を単語ではないという意味を込めて「終助辞」と呼び表している。

終助辞のモダリティ研究の傾向として、終助辞自体が何らかの文法的な意味を表すと捉えられがちであったが、終助辞の付かない文、あるいは終助辞が付いていても、その文の《対象的な内容》がすでに文の土台的な文法的意味＝モダリティを表していることが多い。そして、終助辞はそのような土台的な文法的意味をもった文を、聞き手との関係からどのように伝達するか、聞き手に強く訴えながら伝えるのか、それとも、客観視して伝えるのか等の機能・意味あいを付け加える、という視点が終助辞

のモダリティ分析には必要である。例えば、次の *te:* を述語にもつ文（以下、*te:* の文）は、話し手の間接確認からの〈推量〉を表している。つまり、「手足お腹も腫れている」という事実から、「腎臓病にかかっている」という判断を下している。

- 35) *teimugurugi:na: ti:φisa wata=n φukk^wit-o:=sa.⁴² ei:su kakat-o:n=te:*
 かわいそうに 手足 お腹=ADD 腫れる-PROG=SFP 腎臓病 かかる-PROG=SFP
 「かわいそうに手足お腹も腫れているよ。腎臓病にかかっているんだよ。」（音声「シース」）

しかし、この〈推量〉という文の土台的な文法的意味＝判断は、*te:* が実現しているわけではない。次のように *te:* なしでも〈推量〉の意味を表すことが可能である。それは《対象的な内容》がすでに〈推量〉を表しているからである。述語が断定形いきりの文であっても、間接確認できる事象から別の事象を推し量るといふ《推し量りの構造》がそのような意味を可能にする（工藤, 2015）。

- 36) *teimugurugi:na: ti:φisa wata=n φukk^wit-o:=sa. ei:su kakat-o:n*
 かわいそうに 手足 お腹=ADD 腫れる-PROG=SFP 腎臓病 かかる-PROG
 「かわいそうに手足お腹も腫れているよ。腎臓病にかかっている。」

したがって、述語に断定形をもつ文が〈推量〉の意味を実現する場合、終助辞 *te:* は必須ではない。しかしながら、話し手が聞き手との関係の中で、その文をどのように伝えるのかというニュアンスあるいは意味あいを付け加える必要があるれば、*te:* のような終助辞が用いられる。どのようなモダリティの文にどのような終助辞が用いられて、どのような機能を果たしているのかを細かくみていく視点こそが終助辞のモダリティ研究に求められる。

ただし、終助辞がある特定のモダリティを表すのに必要な場合もある。例えば、首里方言の質問文は *i* や *na:* といった終助辞（あるいは活用語尾）なしでは質問文になりえない。それでも尚、《対象的な内容》の分析の重要性は変わらない。なぜなら、首里方言の質問文において終助辞の存在は必須だとしても、日本語の質問文では終助辞「か」がなくても質問文として機能できるからである。それがなぜ可能かという点、《対象的な内容》がすでに〈質問〉を表しているからである（もちろん、上昇イントネーションという音声的な補助を必要とする）。

3.0.2 《聞き手めあて⁴³》および《主張の強さ》について

ここでは、終助辞分析に必要となる《聞き手めあて》および《主張の強さ》という用語について述べておく。終助辞の付いた文の分析には、これらふたつの用語《聞き手めあて》および《主張の強さ》が表す文法的な要素の分析が重要である。

《聞き手めあて》という用語は、「対話的」という意味で用いられ、聞き手利益と関わる用語として用いられることもあるが、ここでは、聞き手に対して訴えたり、働きかけたり、語りかけたりする方向性の強さのような話し手の聞き手に対する関わり方のことを指す。

⁴² 原文は *φukk^witito:sa* だが、筆者が修正した。

⁴³ 《聞き手めあて》という要素を表すのに《聞き手利益(性)》や《聞き手配慮》という表現を用いていたこともあったが、終助辞を含む文全体が大なり小なり《聞き手配慮》をもっていること、そして、《対象的な内容》がすでに《聞き手利益》を表しているような用例も多くみられたので、混乱を避けるために、本論では、これらの用語をより狭い意味で使用する。《聞き手めあて》という用語のネーミングは、かりまた (2016) にならったものである。

例えば、次の二例を比べてみる。下記の一つ目の *do*: の文は、その情報が聞き手のために必要なこと、肝要なことだと話し手が決め込んでいて、さらに《聞き手めあて》があるために、「洗濯物を取り込め」あるいは「洗濯物を取り込んだほうがいい」という話し手の評価的なニュアンスが含意されている。しかし、二つ目の *te*: の文には《対話性》はあるが《聞き手めあて》が弱く、単に話し手の判断を説明的に述べているにすぎない。

37) *ʔattani kuradzo:rit-o:-eiga, ʔami ɸuin=do:*

急に 暗くなる-PROG-ADVRS 雨 降る=SFP

「急に暗くなっているが雨降るよ（だから、洗濯物取り込め）。」

38) *ʔattani kuradzo:rit-o:-eiga, ʔami ɸuin=te:*

急に 暗くなる-PROG-ADVRS 雨 降る=SFP

「急に暗くなっているが雨降るんだよ。」

終助辞 *do*: の文は、《対象的な内容》とも関わりあいながら、このような《聞き手めあて》があるために、しばしば聞き手に何らかの動作の実行を働きかける二次的な意味あいが生じる。《聞き手めあて》がない文では、ただ話し手内部の感情をもらすような文となる。

例えば、次の二例を比べてみる。どちらも話し手の〈意志〉を伝えていて、《対象的な内容》が話し手が動作を実行することによって聞き手に何かしら利益をもたらす内容の文となっている。しかし、下記の一つ目の *do*: の文は、聞き手に対して訴えかけるような、聞き手へのベクトルの強さ＝《聞き手めあて》が前面化している一方、二つ目の *sa* の文では、聞き手の発話を受けての話し手側の認識あるいは感情の変化が *sa* にあらわれているだけである。結果としてどちらの文も《聞き手利益》はあるが、聞き手に積極的に訴えるのか、ただただ話し手側の認識を述べるのかというニュアンスの違いがみられる。

39) *jarate-i kʷi:m=i jarate-i kʷi:-ru-mun=du=n jar-e: du:=nu*

やらす-SEQ BEN=YNQ やらす-SEQ BEN-ADN-もの=FOC=ADD COP-CND 自分=GEN

「預らせてくれるか！預らせてくれるものならば自分の」

wata jamate-i nate-e:-ru kkʷa=nu gutuku, teanne:ru riecein eimi:n=do:

腹.ACC 痛める-SEQ 産む-RES-ADN 子=GEN 如く どんな 立身 させる=SFP.ASS

「腹を痛めて産んだ子の如く、どんな立身でもさせるよ。」（芝居, 588-590）

40) [病院にて。看護師に患者が症状を訴える]

A: *du:=nu ʔamakuma ʔwi:go:sa=ssa:*

体=NOM あちこち かゆい=SFP.MON

「体があちこちかゆいなあ。」

B: *ʔance: nuigusui mutte-i te-a:bi:=sa*

CNJ 塗り薬.ACC 持つ-SEQ 来る-POL=SFP.MIR

「それじゃあ塗り薬を持って来ますよ。」（暮らし, 87）

このように、ときには、あるいは多くは、《対象的な内容》がすでに《聞き手利益》や《聞き手配慮》を表している。《対象的な内容》とも関わりあいながら、*do*: が持つ《聞き手めあて》の強さが《聞き手利益》や《聞き手配慮》、さらには《働きかけ》という意味あいの付け加えを助けている（あるいはそのような意味あいを強めている）。

次に《主張の強さ》についてだが、このネーミングが適切なのかはわからない。ただし、次のようなニュアンス・意味あいの違いがある。例えば、話し手の心内で確認しながら、ストレートに伝えにくいことを控えめに、あるいは、婉曲的に述べ伝えるときに、*de:*が用いられている。

41) A: *ʔja:=n ʔunu ɸe:sa ʔukit-i, nu:ga kakio:~ei⁴⁴ munu=nde:=nu=ru ʔa-ru=i*
 2SG=ADD この 早さ 起きる-SEQ 何か 間に合わず-NLZ もの=等=NOM=FOC ある-ADN=YNQ
 「お前もこんな早くに起きて、何か間に合わせのものでもあるのかい？」

B: *ʔu:. watta: eikutei=g^wa:=nu ʔuɸe: tei:tei=nu wassan-u=ru ja-ibi.n=de:*
 はい 1PL.GEN 仕事=DIM=NOM 少し.TOP 景気=NOM 悪い-CSL=FOC COP-POL=SFP
 「はい。私達の仕事が少し景気が悪いからなのですよ。」(実践, 13)

42) A: *ʔundzo: mata nu:ntei ʔunu ɸe:sa ʔuk-imiso:te-a=ga*
 2SG.HON.TOP また なぜ この 早さ 起きる-HON-PST=WHQ
 「貴方はまたどうしてこんなに早く起きなさったのか？」

B: *wanne: ʔakateiɸeiuke: ʔar-an=do: ju:akidu:ei:=du s-o:n=de:*
 1SG.TOP 早起き.TOP COP-NEG=SFP.ASS 徹夜=FOC する-PROG=SFP
 「私は早起きなのではないよ。徹夜をしているんだよ。」(実践, 13)

*de:*を *do:*に置き換えても差し支えはない。ただし、*do:*の文では《聞き手めあて》が前面化するとともに、*de:*の文とは逆に強く主張するニュアンスが付け加わる。*de:*の文は *do:*の文と比べて控えめに述べる際に使用されるために、あるいは《主張の強さ》に関してはニュートラルなため、《聞き手めあて》が自ずと弱くなる。

しかし、控えめに述べるというニュアンスのため《聞き手めあて》が自ずと弱くなる *de:*の文にも、次のような主語が二人称の文が用いられることから、場面状況によっては聞き手への《働きかけ》が幾分か生じることがある。

43) [昔は親友同士だった話し手と聞き手だが、試合に勝った話し手だけ身分が上になり]
ʔi:-bueiko:-ne:n-eiga, muto: tage:=ni k^wit-a-i k^war-a-i s-a-ru naka jat-i=n,
 言う-DES-ない-ADVRS 元.TOP 互い=DAT BEN-PST-INF 食う-PST-INF する-PST-ADN 仲 COP-SEQ=ADD
 「言いたくはないが、元は互いに何でも分け合ったりした仲であつても」
nama: ʔja:=tu watta:=tu=ndi ʔi-ee:, mibun=nu teigat-o:-gutu
 今.TOP 2SG=COM 1PL=COM=QT 言う-NLZ.TOP 身分=NOM 違う-PROG-CSL
 「今はお前と俺達と言うのは、身分が違っているから」
duku kuma=kara haikaie-i ʔatte-e: nar-an=de:ja:
 あまりに ここ=ABL 徘徊する-SEQ 歩く-SEQ.TOP POT-NEG=SFP
 「あまりにここを徘徊して歩いてはいけないよな。」(芝居, 890)

このように、*do:*と *de:*の文の間には《直接的な強い主張》と《婉曲的で控えめな伝達》という対立が認められよう。本論ではこの要素・概念を《主張の強さ》とラベルづけする。本論では、上で述べたような《聞き手めあて》と《主張の強さ》という観点からも分析・分類していく。

⁴⁴ 原文ママ。首里・那覇方言音声データベースでは、「カキア^アシムン。期限付きのもの」とある。

認識のモダリティ

認識のモダリティ (epistemic modality) とは、日本語の先行研究では「事態に対する話し手の認識的なとらえ方を表すもの」(日本語記述文法研究会, 2003, p. 133), 「情報伝達文の構成にあたって, その文によって示される事柄や情報に対する話し手のさまざまな認識的態度を表し分けるもの」(同上, p. 134), 「事態に対する話し手の認識的なとらえ方を表す文法的カテゴリー」(宮崎他, 2002, p. 121) 等と説明されている。本論では, 特に規定はせず, 話し手の〈評価的な判断〉を表すもの以外の叙述文を認識のモダリティに含めて記述を行う。

論述の順番はわかりやすさを考慮して, はじめに, レアルな事象を差しだす〈記述〉の文から述べることにする。次に, ポテンシャルな事象を差しだす**推量文・疑い文等の文**について述べ, 再び, レアルな事象を差しだす**思い出させる文・〈前提〉を表す文・説明文等**について論じる。

3.1 〈記述〉の文⁴⁵

〈記述⁴⁶〉の文は, 話し手が直接〈確認〉したレアルな⁴⁷事象や出来事⁴⁸をありのまま述べるような文である。したがって, 未来テンスではあらわれない。事象が現在のこと, あるいは反復・習慣を表す場合⁴⁹, *sun* 形式 (完成・非過去) や *so:n* 形式 (継続・非過去) を伴って表現される。事象が過去のことである場合は, *san* 形式 (単純過去) や *sutan* 形式 (証拠性過去) を伴って表現される。

44) [娘 A と母 B の電話での会話]

A: da: ?anci, oto:sano:
INTJ CNJ 父さん.TOP
「それで, 父さんは？」

⁴⁵ 叙述文には大きく分けて次の二つのタイプがある。ひとつは, 〈記述〉の文で, 話し手が現実世界を通して〈確認〉した事象や出来事をありのまま述べるような文である。もうひとつは, 話し手が〈確認〉したことを通して, 話し手が〈判断〉したことを述べる文である (仁田, 2014, p. 564)。ふたつを線引きするのが困難な用例もあるが, とりあえず, 本研究では二つを分けて記述している。なぜなら, 〈記述〉の文は話し手が直接確認したレアルな事象・出来事を述べる文であるのに対して, 〈判断〉の文は, 非常に主観的で話し手の想像の域をでないポテンシャルな判断を差しだしているからである。ただし, 〈記述〉の文も現実世界に対する話し手の〈確認〉という主観性を持っている。〈記述〉の文は, これまでモダリティを持たない文として扱われがちであったが, 工藤 (2014) が明記するように, どんな事象や出来事であっても, 話し手の現実世界の〈確認〉という認識を通して発話が行われる限り, その文には〈話し手の事象の確認〉というモダリティが常につきまとう。このことに関しては, 工藤 (2014) の「第1章 2. モーダルな意味による文の分類」を参照されたい (pp. 23-26)。したがって, 〈記述〉の文も〈話し手の事象の確認〉というモダリティをもつ文として記述を行う。

⁴⁶ 〈記述〉という用語は, 〈説明〉との対立関係においても用いられる用語だが, ここでは, 話し手の〈判断〉と対立する用語として試験的・暫定的に用いる。試験的・暫定的にならざるを得ないのは, 先行研究において, このような文を差し示す用語が見つからないからである。〈確認〉の文, 〈事実〉の文等, さまざまな候補が挙げられようが, 本論では, 不完全ながらもとりあえず, 「記述」という用語を用いる (目差 2017 においては〈事実〉という用語が用いられている)。

⁴⁷ 工藤 (2014) にならって, 本論でも, 《レアル》という用語を用いる。《レアル》とは, 知覚体験として直接確認=事実確認が可能な現在あるいは過去時における一時的な具体的事象を形容した用語である (工藤, 2014)。

⁴⁸ 以下, 工藤 (2014) にならってなるべく「事象」で統一する (同左, p. 640)。

⁴⁹ 本論では, 反復習慣的な事象について述べる文を, 一旦, レアルな事象を差しだす文として考え, 〈記述〉の文に含めて記述する。理由は, 「毎晩酒を飲む/飲んでいる」のように, 発話時までは話し手の経験によって語られているレアルな事象について述べているからである。ただし, 工藤 (2014) も述べるように「発話後も反復習慣的に事象が実現されるだろう」というポテンシャルな側面も含意されているため, 本論での記述は暫定的なものである。

B: sampo ei:ga nama ʔndz-o:n=jo:
 散歩 する-PUR 今 出る-PROG=SFP
 「散歩しに今出ているよ。」(芝居 2, 1344)

終助辞なしでも〈記述〉を表すことが可能なため、終助辞の使用は〈記述〉を表すために必須ではない。しかし、終助辞の付かない断定形でいきる〈記述〉の文は少ない。大抵の場合、実際の〈はなしあい⁵⁰⁾〉の場面においては、上記の用例のように、終助辞が用いられて、聞き手に配慮しながら伝えられる。すなわち、〈はなしあい〉という場面においては、文をどのように伝えるかという聞き手への配慮をなしに文を伝えることはありえないため、終助辞の使用は必要不可欠なものとなる。用いられる終助辞には、do:, sa, de:等がある⁵¹⁾。以下では、これら3つの終助辞が用いられる〈記述〉の文について述べる。

3.1.1 終助辞 do:の文

〈記述〉を表す終助辞 do:の文は、《聞き手めあて》を前面に押しだしながら、話し手の強い主張として伝えられ、しばしば、二次的に聞き手に何かしらの動作の実行を働きかける意味あいを助ける(機能的に日本語の「よ」に近い)。その《対象的な内容》は、話し手と聞き手との間に共有されていない情報を伝える。独り言での使用は原則不可である。

主語が一人称

一人称を主語にした〈記述〉を表す do:の文の《対象的な内容》は、聞き手に共有されていない話し手の動作を伝える。伝え方は、聞き手に訴えるような《聞き手めあて》の強いものである。

45) [お祝いの日にお手伝いをしに行きなさいと言われて]

A: ʔu:. nama=kara ʔaja: tigane: e-i:ga ʔite-abir-a
 はい 今=ABL 母.CH.GEN 手伝い.ACC する-PUR 行く-POL-INT
 「はい。今から母上の手伝いをしに行きます。」

<お手伝いをしにお母さんのところへ向かうが母が言う>

B: na: kuma: sugaimanugai eimate-an=do:
 もう ここ.TOP 準備.ACC 済ます-PST=SFP.ASS

「もうここは準備を済ませたよ(だからもう手伝いは要らないよ)。」(入門, 89)

46) A: wa:=ga ʔawatir-i=ndi ʔi:-ne: ʔuɸe: ʔawatir-e:
 1SG=NOM 慌てる-IMP1=QT 言う-CND 少し.TOP 慌てる-IMP2

「私が急げと言ったら少しは急げ。」

B: ʔu:. ʔippe: ʔawatit-o:-ibi:n=do:
 はい とても 慌てる-PROG-POL=SFP.ASS

「はい。とても急いでいますよ。」(実践, 29)

⁵⁰⁾ 本論では、工藤(2014)に準じて〈はなしあい〉という用語を用いている。小説の地の文のような〈かたり〉ではなく、聞き手が存在する対話や会話のことを指す。詳細については工藤(2014)の第2章「〈はなしあい〉における文の2つの側面」を参照されたい。

⁵¹⁾ do:, sa, de:以外の終助辞(例えば jo:)が〈記述〉の文で用いられることもあるだろうが、本論では、とりあえず、このみつつの終助辞について述べるに留めておく。

47) [妊娠している娘 B とその母親 A の会話。サトゥヌシは B の夫]

A: ʔja:=ja du:=nu kawat-o:=ee:. satunuci=ŋkai ʔunnuki-ti:
2SG=TOP 体=NOM 変わる-PROG=SFP 里之子=DAT 言う.HUM-PST.YNQ

「おまえは体が変わっているだろう(妊娠しているだろう)。サトゥヌシに申し上げたかい?」

B: ma:da=do:, ʔappa:⁵²

まだ=SFP.ASS お母さん

「まだよ, お母さん。」

A: ʔucitiramun kakusum=i

そのような事.ACC 隠す=YNQ

「そのような(大事な)事を隠すのかい?」(芝居, 576)

主語が二人称

二人称を主語にした〈記述〉を表す do: の文はまれである。次の用例のように、話し手が〈確認〉した聞き手の知らない聞き手の動作や事象について、《聞き手めあて》を前面に押しだしながら伝える場合にあらわれる。例えば、「自分の行動についてまったく記憶をうしなっている場合等である(かりまた, 2004, p. 234)。述語に sutan 形式(証拠性過去)が用いられる。次の用例は首里方言ではなく、沖縄中部の安慶名方言の用例だが、参考程度に挙げておくのには差し支えない。首里方言でもほとんど同じような言い回しが用いられると予想される(用例の収集は今後の課題)。

48) [昨夜、酔っ払って帰ってきた息子がなんだか頭が痛むと言ったので、母親が答える]

A: wanne: kusui numu-ti:
1SG.TOP 薬.ACC 飲む-PST2.YNQ

「俺は薬を飲んだか?」

B: ʔi, ʔja:=ja numu-tan=do:

うん 2SG=TOP 飲む-PST2=SFP.ASS

「ああ、お前は飲んでたぞ。」(かりまた, 2004, p. 234)

主語が三人称

三人称を主語にした〈記述〉を表す do: の文は、話し手が〈確認〉した話し手と聞き手以外の動作や事象について、《聞き手めあて》をもって伝える。意志動詞の場合、sutan 形式が用いられやすい。

49) A: ʔeu: ugan-abir-a, ʔmme:=sai. guburi: ja-ibi:-eiga kurika:=ŋkai mi:kuni

今日 拝む-POL-INT 婆さん=POL.M ご無礼 COP-POL-ADVRS この辺=DAT 新しく

「こんにちは⁵³, おばあさん。失礼ですがこの辺に新しく」

ʔeukur-att-a-ru subaja: eittē-o:-mice:m=i

作る-PASS-PST-ADN そば屋.ACC 知る-PROG-HON=YNQ

「できたそば屋を知っていらっしゃるか。」

B: ʔanu kadu nidziri=ŋkai magat-i matto:ba ʔndz-a-ru tukuru=ŋkai ʔan=do:

あの 角.ACC 右=DAT 曲がる-SEQ 真っ直ぐ 行く-PST-ADN 所=DAT ある=SFP.ASS

「あの角を右に曲がって真っ直ぐ行ったところにあるよ。」(入門, 115)

⁵² ʔappa: は首里方言ではない。芝居の場面が離島なので、演出のために現地方言として時々使用される。

⁵³ ʔeu: ugan-abir-a は直訳すると、「今日拝みましょう」だが、「こんにちは」という挨拶表現。

50) [明治生まれの A が古地図を見ながら昭和生まれの B に昔の話をしている]

A: ʔanu tan̩ka:=ja watta:=ga eo:gakko:=nu ʔit̩cininen s-o:-ine:

あの 向かい=TOP 1PL=NOM 小学校=GEN 一・二年 する-PROG-CND
「あの向かいはまた私達が小学校の一・二年の時には」

ʔwa:g^wa:ʔuimatei jat-an=do:

豚市場 COP-PST=SFP.ASS

「豚市場だったよ。」

B: ʔuma=na:=ɸu:

ここ=YNQ2=POL

「ここですか？」(方談, 300-301)

51) ʔja:=n sugar-e: i:ka:gi ja-eiga=ndi ʔite-i, ʔan t̩teu=ga sata su-tan=do:

2SG=ADD おしゃれする-CND 綺麗 COP-ADVRS=QT 言う-SEQ あの 人=NOM 噂 する-PST2.DIREV=SFP.ASS

「お前もおしゃれしたら綺麗なのと言って、あの人が噂していたよ。」(実践, 34)

〈記述〉の do:の文のうち、話し手が〈確認〉したことをただ伝えるだけでなく、話し手が〈確認〉した内容を知らせることによって、聞き手に何かしらの行動を起こしてほしいというニュアンスを伝えるような場合、聞き手に動作の実行を働きかける意味あい前面化する。

例えば、次の用例では、聞き手(周囲)が不利益を被るかもしれないという差し迫った特定の場面あるいは《対象的な内容》において、話し手は「捕まえろ！」という前にまず何が起きているのか、その差し迫った場面の具体的な内容を聞き手に周知させる必要がある。

52) [どろぼうを目撃して周囲にむかって叫ぶ]

nusudu=do:

どろぼう=SFP.ASS

「どろぼうだぞ!」(沖辞, 177)

場面内容だけを伝えて間接的に「捕まえろ！」等の〈指示・忠告・警告〉を伝えることができるのは、文の《対象的な内容》が聞き手にまだ共有されていない差し迫った場面を伝えているからである。また、do:が用いられるのは、どろぼうに向けてではなく、聞き手である「周囲」に向けるためである。do:は聞き手めあてを明示する終助辞である。それも非常に強い訴えるようなものである。

次の用例では、具体的な〈指示〉が do:の文の後に示されている。ただし、その後の〈指示〉の文がなくても do:の文自体が指示的・命令的な意味あいを間接的に表せる。それは、《対象的な内容》が聞き手に共有されていない初対面の人物、それも聞き手よりも目上の話し手の母親を紹介するという場面を背景に持っているからである。そのような場面で do:が用いられるとき、聞き手めあてが前面に押し出されて、聞き手に訴えるようなニュアンスを伴わせながら伝えられる。do:が用いられることでより指示的・命令的なニュアンスが強まる。

53) [話者 A の母が目の前に現れて]

A: ʔusa=g^wa: watta: ʔaja: ja-miee:n=do:. gue:satei ugam-e:⁵⁴

(人名)=DIM 1PL.GEN 母.CH COP-HON=SFP.ASS ご挨拶 拝む.HMB-IMP2

「ウサ、私の母上でいらっしゃるぞ。ご挨拶しなさい。」

⁵⁴ gue:satei ugamun は直訳すると、「ご挨拶を拝む」だが、ここでの ugamun(拝む)は動詞(する)の謙譲語。

B: hadzimit-i ugan-abir-a

はじめる-SEQ 会う.HMB-POL-INT

「はじめてお目にかかります。」(芝居, 558)

話し手の内的かつ一時的な状態や感情を聞き手に伝える場合も *do:* が用いられて⁵⁵, 聞き手に自分の状態や心情を訴える文となり, 聞き手に働きかける意味合いが強くなる。次の用例では, 「背中がきつい」という症状を伝えることで, 「症状を診てほしい」「症状を軽減してほしい」と言った働きかけが含意されている。

54) [病院にて看護師 A が患者 B の体の状態を確認している]

A: ?ndzute-i:ne: ma:=n jam-imiso:r-an=i

動く-CND どこ=ADD 痛む-HON-NEG=YNQ

「動くところも痛くないですか。」

B: kuci=nu du:gurisan=do:

背中=NOM きつい=SFP.ASS

「背中がきついよ (だから診てくれ)。」(暮らし, 88)

〈再認識〉

一人称を主語にした〈記述〉の文のうち, 話し手の過去の動作が発話以前に聞き手に対して一度実行されているか, あるいは, その内容がすでに伝えられている場合, *do:* を用いて再度同じことを伝えることで, 聞き手に対してその動作を〈再認識〉させるという意味合いを付け加える。

55) [「やめておけ」と注意したのに, それを守らなかったので]

jakutu jamito:k-i=ndi ?ite-an=do:

だから やめておく-IMP1=QT 言う-PST=SFP.ASS

「だからやめておけと言ったんだよ。」(全国, 3-2-1-1_1)

56) [首里からの役人 B が若い頃, 力仕事をよくやっていたという話をうけて]

A: gute:fa e-imiso:te-i

ご冗談 する-HON-SEQ

「ご冗談なさって。」

B: te:fa: ?ar-an dzinto: haru ha-i jama ha-i s-an=do:

冗談.TOP COP-NEG 本当に 畑 走る-INF 山 走る-INF する-PST=SFP.ASS

「冗談ではない。本当に畑や山をかけまわっていたんだぞ⁵⁶。」(芝居, 538)

do:の文のまとめ

終助辞 *do:* は, 〈記述〉や〈再認識〉だけでなく, 〈推量・意志・評価・証拠に基づく判断・不許可／非許容・必要／義務・評価的な可能〉の文等にもあらわれる(各々のモダリティについてはそれぞれの項を参照)。この〈記述〉や〈推量〉といった文の文法的な意味は, 原則, 文の〈対象的な内容〉が

⁵⁵ 話し手の内的な状態や感情は, 動的事象をありのまま描写するような典型的な〈記述〉の文とは若干異なっている。しかし, 本論では, 便宜的に〈記述〉の文の下位に位置づけて記述を行う。なぜなら, 話し手が直接知覚したことをありのまま述べるという規定からは外れないからである。

⁵⁶ 直訳は, haru hai jama hai sando:「畑かけ山かけしたよ」である。hai は, 動詞 hajun (hain) の第一中止形(連用形)。「走る。動物・舟・急流などが走るのをいう」(『沖縄語辞典』, 201)。

すでに表している、do:が実現しているわけではない。話し手が聞き手との関係において、文を強く訴えながら伝えたい場合、do:を用いて伝えることで《聞き手めあて》が前面化し、聞き手に話し手の強い主張として伝えられる。そして、しばしば、二次的に聞き手に何かしらの動作の実行を働きかける意味あいを強める。

表 12 do:の sa, de:, te:との比較⁵⁷

	do:	sa	de:	te:
文のタイプ	叙述文	叙述文	叙述文	叙述文
共有情報	×	×	×	×
独りごと	×	×	×	×
聞き手めあて	○	×	△(弱)	×
主張の強さ	強い	強い	控えめ	控えめ

} 共通点

表 13 do:が用いられる文の一覧

(a) 《ポテンシャル》	(b) 《リアル》
(i) 〈推量〉	(i) 〈記述〉
(ii) 〈証拠に基づく判断〉	(ii) 〈再認識〉
(iii) 〈意志〉	
(iv) 〈評価〉	
〈不許可・非許容〉	
〈必要・義務〉	
〈評価的な可能〉	

3.1.2 終助辞 sa の文

〈記述〉を表す終助辞 sa の文は、話し手の強い主張として伝えられる点で do:と共通しているが⁵⁸、《聞き手めあて》は弱く、発話時における話し手の認識あるいは感情の変化を含意しながらその文を述べる⁵⁹。その《対象的な内容》は、話し手と聞き手との間に共有されていない情報である。また、独り言での使用は原則不可である。多くは主語が二人称か三人称の文であられる。主語が一人称の場合は、〈意志〉を表すことが多いので、意志文を参照されたい(また、〈記述〉以外のモダリティについても、それぞれの項を参照)。

主語が一人称

一人称を主語にした〈記述〉を表す sa の文の《対象的な内容》は、話し手の認識の変化を含意しながら、話し手の事象について述べる。述語に継続相の形をとるか、あるいは、述語の第一中止形に ne:n が後接した形(してしまう)をとって、事象が成立した結果が継続していることを伝える。

⁵⁷ te:の文は、叙述文にあられること、聞き手に共有されていない情報を伝えること、独り言では使用できないことのみつつの点で do:, sa, de:の文と共通しているため、表にして比較できるようにした。しかし、te:の文は〈記述〉を表すことができないという、do:, sa, de:の文と決定的に異なる特徴がある。

⁵⁸ ただし、do:の《主張の強さ》は《聞き手めあて》の強さから来るもので、sa の《主張の強さ》と厳密には質的に違いがある。

⁵⁹ 尚、この認識・感情の変化をある種の mirative な意味あいだと捉え、グロスに MIR と付す。

57) [看護師 A が患者 B に向かって]

A: t̃ea: ei-miso:t̃e-a=ga

どう する-HON-PST=WHQ

「どうなさいましたか。」

B: kurub-a:ni t̃einei wat-o:=sa

転ぶ-SEQ ひざ.ACC 割る-PROG=SFP.MIR

「転んでひざを傷めているよ。」

A: jami-mise:-ra=ja: eo:doku ee-i ?usagir-a

痛む-HON-DUB=YNQ3 消毒 する-SEQ BEN.HMB-INT

「痛むでしょう？ 消毒して差しあげよう。」(暮らし, 89)

58) ?ai, nu: ?in=t̃ei jat-a=gaja: t̃ei:-wacit-i ne:n=sa

INTJ 何.ACC 言う=QT COP-PST=DUB PFX⁶⁰-忘れる-SEQ CPL=SFP.MIR

「あれっ、何を言うってだったかなあ。すっかり忘れてしまったよ。」(語遊「チーシッタイン」2011/11/13, p. 19)

59) na:çin beŋk'o: s-o:t-e:r-e: eikeno: ?utir-ant-a-ru hadzi ja-εiga

もっと 勉強 する-PROG-PST3-CND 試験.TOP 落ちる-NEG-PST-ADN INFR COP-ADVRS

「もっと勉強していたら試験は落ちなかっただろうが」

da:, ?utit-i ne:n=sa

INTJ 落ちる-SEQ CPL=SFP.MIR

「ほら、落ちてしまったよ。」(調査, 2015/6/3)

60) ?ai, da:, na: juntaku=ni mut̃eik^wa:tt-i ?ukurit-i ne:-ibiran=sa

INTJ INTJ FIL おしゃべり=DAT 夢中になる-SEQ 遅れる-SEQ CPL-POL=SFP.MIR

「あら、あら、もうおしゃべりに夢中になって遅れてしまっているよ。」(実践, 14)

あるいは, sun 形式(完成・非過去)をとったとしても, すでにそういう状態にあることを, 認識・感情の変化のニュアンスを伴わせながら述べる。so:n 形式(継続相)に置き換えることができる。

61) [聞き手が気に入らないことを言うので, 気分が悪くなってきたという話し手]

?ja: kutuba=nu φirigusasan-u. watago:ru: su=sa

2SG.GEN 言葉=NOM 下しそうな程気分が悪い-MIR お腹がゴロゴロする様 する=SFP.MIR

「お前の言葉で下しそうだ。お腹がゴロゴロするよ。」(実践, 34)

動詞 wakain(わかる)の継続相の形に sa が付いた wakato:sa(わかっているよ)は, 常套句のように用いられる。話し手が出来事をきちんと理解していることを聞き手に強調して述べる場合と, 発話直前あるいは発話時に新たに気づいたり, 理解したことを述べる場合に用いられている。次の二例は前者で, その後の一例は後者である。

62) A: kana:, t̃eu: d̃zu:tu munu ?um-a:e-i=jo:. wakat-o:-ra=ja:

(人名) 強く もの 思う-CAUS-IMP1=SFP わかる-PROG-DUB=YNQ3

「カナー, しかと分からせてやれよ。わかっているだろう。」

⁶⁰ 首里方言には述語の前に付いて「少し～する・すっかり～する」を意味する接頭辞がある。「少し」と「すっかり」は全く逆の意味だが, 同一形式が文脈によってどちらかを表す。接頭辞の形式は述語によって異なる。例えば, waei:n (忘れる) は, ke:-waei:n と t̃ei:-waei:n の両方が可能だが, ma:sun (亡くなる) は, ke:-ma:sun のみ可。

B: wakat-o:=sa

わかる-PROG=SFP.MIR

「わかっているわ。」(芝居, 692)

63) [相撲の稽古をすると言って]

A: jaϕatte:ng^wa: mimig-i=j^o:.⁶¹ wakat-o:-ra=ja:

お手柔らかに しごく-IMP1=SFP わかる-PROG-DUB=YNQ3

「お手柔らかにしごいてやれ。わかっているな。」

B: wakat-o:=sa

わかる-PROG=SFP.MIR

「わかっているさ。」(芝居, 696)

64) [ここでの wakat^o:sa は、会話の途中での認識の変化 = 〈気づき〉を表している]

A: ʔja:=ja ta:ta=nu tamme:=tu nu:gana jaŋ=ja:

2SG=TOP (人名)=GEN 爺=COM 何か COP=SFP

「あんたは多和田のおじいと何かあるだね。」

B: ʔan-tteu=tu nu: jan=di=ga. nu:=n ʔar-an. ʔaŋguto:ru hagiŋeiburu=tu nu: ja=ga

あの-人=COM 何 COP=QT=WHQ 何=ADD COP-NEG あのような 禿頭=COM 何 COP=WHQ

「あの人と何だと言うのか。何でも無いよ。あのような禿頭と何だい。」

A: wakat-o:=sa, nabit^u:. ʔja:=n daija i:t-e:n=te:

わかる-PROG=SFP (人名) 2SG=ADD ダイヤ.ACC 貰う-RES=SFP

「わかった, ナビトウー。お前もダイヤをもらったんだね。」

B: wa:=ga eitŋe-o:m=i wanne: ŋkaei=kara hagi:=ja eikannu: ja-ru-munnu

1SG=NOM 知る-PROG=YNQ 1SG.TOP 昔=ABL 禿の人=TOP 嫌い COP-ADN-FN

「さあどうだろう。私は昔から禿の人は嫌いだもの。」(実践, 34)

〈感情の吐露〉

一人称を主語にした現在テンスの sa の文のうち、あるいは人称とは関係なく《対象的な内容》が話し手の内的な状態や感情のようなものを表す場合、話し手の認識・感情の変化を含意しながら、話し手の内的な状態や感情をありのまま聞き手に述べる。話し手の内的な状態や感情は、事前に聞き手には知り得ないものである。《聞き手めあて》はない。

65) [病院にて。看護師に患者が症状を訴える]

A: kuei=nu du:gurisan=do:

背中=NOM きつい=SFP.ASS

「背中がきついよ。」

B: mud-i ʔusagir-a

揉む-SEQ BEN.HMB-INT

「揉んで差し上げよう。」

A: ʔa: i: ʔambe: ja=sa

INTJ 良い 接配 COP=SFP.MIR

「ああ、良い気持ちだ。」(暮らし, 88) (用例 54 と一部重複)

66) A: ʔaja:=tai, jattŋe:=ja ʔanci ʔumudui=nu ususa-ibi:-ru=ja:

母.CH=POL.F 兄.CH=TOP 本当にお戻り=NOM 遅い-POL-ADN=SFP

「母上、兄さんは本当にお戻りが遅いですねえ。」

⁶¹ mimidzun の命令形, (1) (野菜等を) もむ, (2) いじめる。とっちめる (『沖縄語辞典』 p. 378)。

B: ʔan ja=sa. ʔasateigaki ee-i ʔndz-o:-kutu, na: ke:t-i ku:-wa-ru nai-eiga
 そう COP=SFP 早起き する-SEQ 出る-PROG-CSL FIL 帰る-SEQ 来る-CND-FOC POT-NASS
 「そうだねえ。朝早起きして出ているから、もう帰って来なくちゃいけないのだけれど。」

A: tutteitei=n ne:ran ʔuguciku=kara=nu ʔujubidaci nu:gutu⁶² ja-ibi:-ra
 突拍子=ADD ない-ADN お城=ABL=GEN お呼び出し 何事 COP-POL-DUB
 「急にお城からのお呼び出し何事でしょうか。」

eiwa=eei na-ibir-an=sa

心配=INST なる-POL-NEG=SFP.MIR

「心配でなりません。」(芝居, 828)

67) [唄の歌詞]

A: su:=ni nigaj-a:i mi:tu nar-a=ja:
 父.CL=DAT お願いする-SEQ 夫婦 なる-HORT=SFP
 「お父さんをお願いして夫婦になろうな。」

B: tea:=ga ja-ra=ja:. (中略) watta: guto:-ru janaka:gi:=ja ʔafi:-g^{wa}a: tudzi=ne:
 どう=FOC COP-DUB=SFP 1PL.GEN ようだ-ADN 不美人=TOP 兄.CL-DIM.GEN 妻=DAT.TOP
 「どうかしら。私達のようなブスは兄さんの妻には」

nar-ari:=gaja:=ndiʔitei eiwa=ei: nar-an=sa

なる-POT=DUB=QT 心配=で POT-NEG=SFP.MIR

「なれるのかしらと心配でたまらないわ。」(芝居, 1012)

68) [息子 B と息子の幼馴染の親友が勝負するといつて気をもむ母親 A]

A: ʔan jar-e: eimu-eiga. nu:=ga ja-ra eiwa=ei nar-an=sa
 そう COP-CND 済む-ADVRS 何=FOC COP-DUB 心配=で なる-NEG=SFP.MIR
 「そうならいいけど...何だか心配でならないよ。」

B: ta:=ga kätte-i=n ʔurami ku:minu nukui-ru naka: ʔa-ibir-an=sa
 誰=NOM 勝つ-SEQ=ADD 恨み つらみの 残る-ADN 仲.TOP COP-POL-NEG=SFP.MIR
 「誰が勝っても恨みつらみの残る仲ではありませんよ。」(芝居, 868)

69) to:, ʔanee: ʔisudz-i ʔik-e:. ʔiteitumit-i guburi: nat-o:=sa ʔippe: niʔe:do:
 INTJ CNJ 急ぐ-SEQ 行く-IMP2 引きとめる-SEQ 失礼 なる-PROG=SFP.MIR とても ありがとう
 「さあ、では急いで行け。引きとめて失礼しているよ。本当にありがとう。」(実践, 14)

述語が過去テンスをとる場合は、発話直前に生じた話し手の感情を述べる。

70) [夫の浮気ではないかと心配する A。「夫が私の手をひいていながら、隣の女の人をじっと見ていた」という女 A に対して、女 B が「それはね...」と何か意見を言おうとした瞬間に A はその発言をさえぎって言う]

wan utu=nu kukuru=nu wassan=di=ga ʔi-mice:-ra=ntei wanne: eiwa ja-ibi:t-a=sa
 1SG.GEN 夫=GEN 心=NOM 悪い=QT=FOC 言う-HON-DUB=QT 1SG.TOP 心配 COP-POL-PST=SFP.MIR
 「私の夫の心が悪いとおっしゃるのかと私は心配でしたの。」

ʔan=de: ʔi-miso:r-an=da-ra=ja:=tai⁶³
 そうだ=QT.TOP 言う-HON-NEG=FOC.ある-DUB=YNQ3=POL.F
 「そうはおっしゃらないですわよねえ。」(実践, 18)

⁶² 述語が ra 推量形をとる場合、文中に焦点化助辞 ga があらわれやすいが(例えば, nu:gutu=g^{ga} jaibi:ra のように)、用例ではそれがみられない。焦点化が行われない例として貴重である。ga と ra 推量形がいわゆる従来の「係結び」の関係ではなく、単に ra 疑い文にて〈疑い〉の部分を取りたてる場合に ga が用いられるということを示している。

⁶³ 述語の否定形に raja: があらわれる場合、否定形に raja: が直接は後接せず、否定形+daraja: という形をとる。

71) [追剥に持ち物を奪われた後に違う男から声をかけられて]

A: wanne: mata satei=nu tteu=tu niteo:ru:=ga ja-ra=ndi ?umut-i, tamaei nugit-a=sa
 ISG.TOP また 先=GEN 人=COM 似た人=FOC COP-DUB=QT 思う-SEQ 魂 抜ける-PST=SFP.MIR
 「私はまたさっきの人と似たようなやつだろうかと思って、驚きましたよ。」

B: nu:ga, na:. ta:=tu nite-o:n=di i-nee:=ga
 なぜ FIL 誰=COM 似る-PROG=QT 言う-HON=WHQ
 「どうして、また。誰と似ているとおっしゃるのか。」(芝居, 768)

主語が二人称

二人称を主語にした〈記述〉を表す sa の文の《対象的な内容》は、話し手の認識の変化を含意しながら聞き手の動作や事象について述べる。

72) [?uming^wa と呼ばれると恥ずかしいので名前で呼んでくれと言ったのに]

A: ?anu, ?uming^wanume:

あの 御嬢さん
 「あの、御嬢さん...」

B: ?unutteu=jo: na: mata ?uming^wa=ndi ?i-mice:=sa
 この 人=IP FIL また 御嬢さん=QT 言う-HON=SFP.MIR
 「この人はもうまた御嬢さんっておっしゃって...」

A: kuteigueti nat-i⁶⁴ eigu=ntee: no:e-iju:s-an hadzi ja=ssa:
 口癖 なる-SEQ すぐ=QT.TOP 直す-POT-NEG INFR COP=SFP.MON
 「口癖だからすぐには直せないだろうなあ。」(芝居, 1090)

主語が三人称

二人称を主語にした〈記述〉を表す sa の文の《対象的な内容》は、話し手の認識の変化を含意しながら第三者の動作や事象について述べる。

73) [首里の古地図を見ながら、昔の首里の街の話をしている]

A: ?anu, nama hakubutsuk^wan=nakai ?wa:-g^wa:-?ui=nu ?anu ji:=nu ?a=ce:ja:
 FIL 今 博物館=LOC 豚-DIM-売り=GEN FIL 絵=NOM ある=SFP

「あのう、今博物館に豚売りのあのう絵があるだろう。」

?are: kuma=uto:ti hadzimit-e:-ru ji: ja=sa
 あれ=TOP ここ=LOC 始める-RES-ADN 絵 COP=SFP.MIR

「あれはここで売買をしている絵だよ。」

B: ?aha:

INTJ
 「あはあ...」(方談, 304)

認識の変化を表現する sa の文は、その特徴から聞き手の言動に対して否定したり、拒否したり、

⁶⁴ 動詞 nain (なる) は、本来、直接目的語がはだか格をとり、物事がある状態に変化したり、成立したりする語彙的な意味を持つが、nain が差し示す《対象的な内容》が変化の側面を捉えず、ただの《状態》や《特性》を差し出す場合、「成る」という本来の語彙的な意味は失われて、ほとんどコピュラと同じような機能を担うか、先行する名詞と結びついて格助詞的に機能する(ただし、その結びつきは非常にゆるやかである)。意味的には、理由・原因、対象、様態を表すもの等がある。グロス上は「なる」に統一している。

反論・反発したりする場合に用いられやすい。

74) A: ʔamma:, bira=tu t̄eiribira=ndi ʔi-ce: junumun=lu ja=gaja:
お母さん ビラ=COM チリビラ=QT 言う-NLZ.TOP 同じ物=FOC COP=YNQ3
「お母さん、ビラとチリビラと言うのは同じ物かしら？」

B: ʔar-an=do:. bira=ndi ʔi-ce: negi, t̄eiribira: nira ja=sa
COP-NEG=SFP.ASS ビラ=QT 言う-NLZ.TOP 葱 チリビラ.TOP 蕪 COP=SFP
「違うよ。ビラと言うのは葱、チリビラは蕪だよ。」(リア, 12)

75) A: ʔuʔuso: ʔaʔi:g^wa:=ja waeciri:=ru s-an=na:. su:=ni nigaj-ai tai=ja
間抜け 兄さん=TOP 忘れる=FOC する-PST=YNQ2 父=DAT 願う-SEQ 二人=TOP
「間抜け兄さんは忘れたんですか。父にお願いして二人は」

mi:tu nar-a=ja:=ndi ʔi-ta=ce
夫婦 なる-HORT=SFP=QT 言う-PST2=SFP
「夫婦になろうって言ったじゃないか。」

B: ʔe:, ʔunu kutu=na:. waecit-e:-uran=sa
INTJ その 事=YNQ2 忘れる-SEQ.TOP-いない=SFP
「ああ、その事か。忘れていないよ。」(芝居, 1010-1012)

76) [話し手 B: 王様の臣下 → 聞き手 A: 王様の病を診るようお願いされたユタ]

A: ʔja:=ja ʔansuka ʔi:t̄eī ʔukate-i nu:=ga. gudʒirao:=ja ma:ei-gata:=du ja-ru=i
2SG=TOP そんなに 息.ACC ふかす-SEQ 何=WHQ (人名)=TOP 死ぬ.HON-そう=FOC COP-ADN=YNQ
「お前はそんなに息を切らしてどうした？グジラ王は死にそうなのかい。」

B: ʔane: ʔa-ibir-an=sa. ʔisudz-imiso:r-e:⁶⁵
そう.TOP COP-POL-NEG=SFP 急ぐ-HON-IMP2
「そうではありませんよ。急ぎなさい。」(猿, 2)

77) [昔、豆腐を食べてお腹を壊したという B に対して]

A: to:ʔu kad-i ʔi:n=t̄eī=n ʔa=gaja:
豆腐.ACC 食べる-SEQ 下す=QT=ADD ある=DUB
「豆腐を食べて下すってあるかなあ？」

(中略)

B: to:ʔu kamu-ei=to: madzo:n eigu ha:e: jat-a=sa
豆腐.ACC 食べる-NLZ=COM.TOP 同時 すぐ 走る事 COP-PST=SFP
「豆腐を食べると同時にすぐ(トイレに)走ったよ。」(実践, 33)

sa の文のまとめ

終助辞 sa は、話し手が発話時以前に持っていた認識とは違う認識を述べる時、話し手の認識に変化がみられる場合にあらわれやすい。変化後の話し手の認識を sa の文で述べ伝える。認識とは、話し手の内的状態・感情あるいは考え・意見・判断・評価のようなものである（以下では、前者を「感情」とし、後者を統一して「判断」とする）。したがって、〈発話時に気づいたり、思いついたりした話し手の感情・判断〉を吐露したり、聞き手の認識に対して反対／反論する場合に用いられやすい。do: の文のような《聞き手めあて》や《働きかけ性》はないが、do: のように強く主張するようなニュアンスを伴う。

⁶⁵ ʔisudzun (急ぐ) と ʔawati:n (慌てる) は両方とも意志動詞として命令形をとり、命令文で用いられる。ʔawati:re (慌てる/急げ) のように ʔawati:n の方が口語ではよく用いられる。

表 14 sa の do:, de:, te: との比較

	do:	sa	de:	te:
文のタイプ	叙述文	叙述文	叙述文	叙述文
共有情報	×	×	×	×
独りごと	×	×	×	×
聞き手めあて	○	×	△(弱)	×
主張の強さ	強い	強い	控えめ	控えめ

表 15 sa が用いられる文の一覧

(a) 《ポテンシャル》	(b) 《リアル》
(i) 〈推量〉	(i) 〈記述〉
(ii) 〈評価〉	〈感情の吐露〉
(iii) 〈意志〉	

3.1.3 終助辞 de: の文

〈記述〉を表す終助辞 de: の文は、do: や sa の文のように、話し手と聞き手との間にいまだ共有されていない情報を伝えるが、その情報を控えめに、あるいは《主張の強さ》に関してはニュートラルに伝えるという特徴がある⁶⁶。控えめに述べるという性質上、《聞き手めあて》の程度はだいぶ弱くなる。独り言での使用は原則不可である(判断や推量を表す de: の文については、それぞれの項を参照)⁶⁷。

主語が一人称

一人称を主語にした〈記述〉を表す de: の文の《対象的な内容》は、話し手の動作や事象について控えめにあるいは主張の強さはニュートラルにありのまま述べ伝える。

78) [亡くなった父にお世話になったと言って若い役人 B が訪ねてきて。A は娘で、C は母]

A: ?utca ?usaga-mice:-bir-i

お茶.ACC 飲む.HON-HON-POL-IMP1

「お茶をお召し上がり下さい。」

B: niφe:-de:biru. ja-ibi:-eiga ?attanni ju:gawai nat-i, inagudatei=n⁶⁸ eindo: ei-miso:te-a-ra=ja:

有難う-POL COP-POL-ADVRS 急に 世変わり なる-SEQ 女達=ADD 心労 する-HON-PST-DUB=YNQ3

「有難うございます。ですが急に世が変わって、女達も苦勞してらしたでしょう。」

C: nama: ?ujakk^wa ?unu hanaci=du s-o:t-an=de:

今.TOP 親子 その 話=FOC する-PROG-PST=SFP.NASS

「今親子でその話していたんだよ。」(芝居, 1080)

42') A: ?undzo: mata nu:n̄tei ?unu φe:sa ?uk-imiso:te-a=ga

2SG.HON.TOP また なぜ この 早さ 起きる-HON-PST=WHQ

「貴方はまたどうしてこんなに早く起きなさったのか？」

⁶⁶ この意味あいをグロスには NASS=non-assertive で示す。

⁶⁷ 二人称を主語にした〈記述〉を表す de: の文を文献から見つけることはできなかった。しかし、話し手しか知らない聞き手の過去のことを言いくそうに控えめに述べるような場合、述語が sutan 形式(証拠性過去)をとり、de: が用いられるだろう。

⁶⁸ 原文では =nu であったが、筆者が内容に合うように =n に修正した。

B: wanne: ʔakateiʔeiuke: ʔar-an=do:. ju:akidu:ei:=du s-o:n=de:
 1SG.TOP 早起き.TOP COP-NEG=SFP.ASS 徹夜=FOC する-PROG=SFP.NASS

「私は早起きなのではないよ。徹夜をしているんだよ。」(実践, 13)

- 79) [自分と親友が戦って勝った方が出世できるという話を断って来たという話]

eikkaku=nu i: ʔuhanaci ʔeimpani kutuwa-ine: guburi: nai-gutu nisannitee:
 せっかく=GEN 良い お話 簡単に 断る-CND ご無礼 なる-CSL 二・三日.TOP

「せっかくの良いお話簡単に断ったら失礼になるから二・三日は」

kange:r-atē-i kʷi-mice:-bir-i=nʎi ʔite-i, ʔiteisagat-i ʔe-an=de:
 考える-CAUS-SEQ BEN-HON-POL-IMP1=QT 言う-SEQ 引き下がる-SEQ 来る-PST=SFP.NASS

「考えさせて下さいませと言って、引き下がって来たよ。」(芝居, 838)

次の用例の de: に付いている na: という終助辞は、芝居でのみ用いられる丁寧さを付加する終助辞で、いわゆる tai/sai と全く同じ意味を表す。一般大衆を相手にする芝居では男女差や方言差をなくすためか、特殊な言い回しや語彙が用いられるが、ほぼ de: の文とみなしても差し支えはない。

- 80) [沖縄芝居・多幸山。旅人 A が通りすがりの村人 B に尋ねる。知らない人に突然話しかけられたからだろうか, de: が用いられている]

A: ʔitta:=ja hakame:=du ja-ru=i

2PL=TOP 墓参り=FOC COP-ADN=YNQ

「お前達は墓参りなのか？」

B: watta: ʔwe:ka=nu su:ko: nat-i,⁶⁹ hakame: e-i:ga=du jan=de:=na:

1PL.GEN 親類=GEN 法事 なる-SEQ 墓参り.ACC する-PUR=FOC COP=SFP.NASS=POL

「私達の親戚の法事で墓参りをしにですよ。」(芝居, 776-778)

- 81) [沖縄芝居・多幸山。旅人 B におそるおそる追い剥ぎ A が声をかける]

A: na:=ja ta: ja-nee:=ga

2SG.HON=TOP 誰 COP-HON=WHQ

「貴方は誰でいらっしゃるか。」

B: wanne: kunu ʔeikaku=ni eimat-o:-ru mun ja-eiga, jamacigutu sun=di

1SG.TOP この 近く=DAT 住む-PROG-ADN 者 COP-ADVRS 山仕事 する=QT

「私はこの近くに住んでいる者だが、山仕事をしていたら」

ju: jukkʷ-atte-i, nama ja:=ŋkai mudut-i ʔiteu-ru tukuru na:=ga

夜.ACC 更ける-CAUS-SEQ 今 家=DAT 戻る-SEQ 行く-ADN 所 2SG.HON=NOM

「夜を更けさせてしまって、今家に帰って行くところ貴方が」

turubat-o:-ei n:dz-a:ni, kʷi: kakit-a-ru ba:=du jan=de:=na:

ぼんやりする-PROG-NLZ 見る-SEQ 声.ACC かける-PST-ADN FN=FOC COP=SFP.NASS=POL

「ぼーっとしているのを見て、声をかけたわけなんだよ。」(芝居, 766)

次の de: の文にはさらに ja: が付加されて、de:ja: の文となっている。de:ja: の文では de: の文に〈念押し〉や〈同意要求〉といった意味あいが付加される。

- 82) [初雷がアヤーの上に落ちると悪口を言う男 A。アヤーは密かにそれを聞いて男 B の前に出て来る。すると、とっさの事に驚き男は当たり障りのない事を言ってごまかそうとする]

⁶⁹ 註 64 を参照。

A: ʔaja:=me:=sai, kunu ʔatai=nu de:kuni teassa s-abi:=gaja:

母=HON=POL この 位=GEN 大根 いくら する-POL=YNQ3

「お母様、このくらいの大根いくらしますかね？」

B: nu:=ja de:kuni. kutɕi=nu ʔaku-mama ʔabi:-ne: gattino: s-an=do:ja:. je:, kamesuke

何=TOP 大根 口=NOM 開く-まま 言う-CND 合点.TOP する-NEG=SFP INTJ (人名)

「何が大根だ！口の開くまま物言うと承知しないわよ！なあ、亀助よ。」

kundu=nu hateigan nai=ja wan ʔi:=ri=na:

今度=GEN 初雷 鳴り=TOP 私.GEN 上=QT=YNQ2

「今度の初雷鳴りは私の上ってかい？」

A: ʔa-ibir-an. kundu=nu hateigan nai=ja nama nar-an=ja:=ndi=ru nama: ʔite-o:j-abi:n=de:ja:

COP-POL-NEG今度=GEN 初雷 鳴り=TOP 今 鳴る-NEG=SFP=QT=FOC 今 言う-PROG-POL=SFP.NASS

「違います…今度の初雷鳴りはまだ鳴らないねって今言っていたんですよ。」(芝居 2, 1410-1412)

主語が三人称

三人称を主語にした〈記述〉を表す *de:* の文も、話し手が聞き手に言いにくい第三者が動作主体の内容を話し手が確認したままに遠慮がちに、あるいは、控えめな態度で伝える。または、主張の強さはニュートラルである。

83) A: ʔaja:=sai, jattei:=ja ʔugueiku=kara mudut-i menso:te-o:-ibi:-ti:

母.CH=POL.M 兄.CH=TOP お城=ABL 戻る-SEQ 来る.HON-PROG-POL-PST.YNQ

「母上、兄上はお城から戻っていらっしゃってますか？」

B: na:da ke:t-e: k-u:n=de:

まだ 帰る-SEQ.TOP 来る-NEG=SFP.NASS

「まだ帰っては来ないよ…」

A: ʔune, ʔasateigaki ʔndzit-o:-mice:-eiga nu:=gaja:

INTJ 早朝 出る-PROG-HON-ADVRS 何=DUB

「あれ、朝早くから出ていらっしゃるのにどうしたんだろうか。」(芝居, 830)

84) A: matɕa:çi: maruke:ti=nu na:ʔakembutei:ja-gutu ʔamakuma micit-i k-u:=çi:=na:

(人名) 時々=GEN 那覇見物 COP-CSL あちこち 見せる-SEQ 来る-INT=SFP=POL

「マチャー兄さん、たまの那覇見物だからあちこち見せて来ますね。」

(中略)

B: ʔe:, na: ʔusaki:na: d̄zin k^wit-e:n=de:

INTJ FIL こんなに お金 くれる-RES=SFP.NASS

「あら、まあこんなにお金くれたわよ…」(芝居 2, 1482-1484)

85) A: ʔai, had̄zimiti=ja:. ʔndzi⁷⁰ ʔja:=ja kamid̄za: tud̄zi-g^wa:=i. wanne: ʔitta: kamid̄za:=to:

INTJ 初めて=SFP INTJ 2SG=TOP (人名) 妻-DIM=YNQ 1SG.TOP 2PL.GEN (人名)=COM.TOP

「あら、初めまして。そう、貴方がカミジャーの嫁かい？私は貴方達カミジャーとは」

ʔujakk^wa=nu gutu çirat-i te-a-ru naka=do:. mi:sitte-o:t-i turac-e:=ja:

親子=NOM ように 付き合う-SEQ 来る-PST-ADN 仲=SFP 見知る-PROG-SEQ BEN-IMP2=SFP

「親子のように付き合ってきた仲よ。よろしくお願ひね。」

ʔanei ʔja:=ja na:=ja nu:=ndi ʔi=ga

CNJ 2SG=TOP 名前=TOP 何=QT 言う=WHQ

「それで、貴方は名前は何て言うの？」

⁷⁰ 話の真偽を確かめるときに発する語 (首里那覇方言音声データベース「ウンジ」)。

B: na:=ja makate:g^wa:=ndi ʔi-eiga=jo:. na: hadz̄ikasaʔumi: nat-i⁷¹ tteu=to: nandz̄u

名前=TOP (人名)=QT 言う-ADVRS=IP FIL 恥ずかしがり屋 なる-SEQ 人=COM.TOP あまり
「名前⁷¹はマカテというんだけどよ。もう恥ずかしがり屋で人とあまり」

muno: ʔir-an=du ʔan=de:=na:

もの.TOP 言う-NEG=FOC ある=SFP.NASS=POL
「話をしないんですよ⁷²。」

A: inago: ʔuri=du maçi ja-ru

女.TOP それ=FOC まし COP-ADN
「女はそれでよいのよ。」(芝居 2, 1476-1478)

言にくいというよりも、理由がわからず不思議そうに、話し手の心内で確認しながら述べるような場合でも、de:が用いられる。

86) A: ʔanu tabint̄eu ʔiφu:na: kutu=du tu:in=de:

あの 旅人 変な 事=FOC 問う=SFP.NASS
「あの旅人変な事を尋ねるんだよ。」

B: nu:=ga. nu: tu:i-ta=ga

どうした 何.ACC 問う-PST2=WHQ
「どうした?何を尋ねたのかい?」

A: nama=kara nidz̄u:guninme: kunu mura=nu tteu=ηkai kurus-att-a-ee:

今=ABL 25 年前 この 村=GEN 人=DAT 殺す-PASS-PST-NLZ.TOP
「今から 25 年前この村の人の中に殺されたものは」

uran=i=ndi=du ʔi-nee:n=de:=na:

いない=YNQ=QT=FOC 言う-HON=SFP.NASS=POL
「いないかとおっしゃるんですよ。」(芝居, 778)

87) [ジュリ (芸妓) の女が思いを寄せる士族の男 A に会いに来たが下男 B が大声で追っ払う]

A: nu:=ga, jama:.. ʔudz̄o: t̄eikaku=uti ʔuppina: ʔabi:-ru

何=WHQ (人名) 御門 近く=LOC そんなに 大声を出す-ADN
「どうした、ヤマー?御門近くでそんなに大声出して。」

B: ʔanu inagu=nu ʔundz̄u=ηkai ju:d̄zu=nu ʔan=di=ru ʔij-abi:n=de:

あの 女=NOM 2SG.HON=DAT 用事=NOM ある=QT=FOC 言う-POL=SFP.NASS
「あの女が貴方に用事があると言うんですよ。」

A: ʔai, makatu:

INTJ (人名)
「あ、真加戸 (マカトゥー) ...」(芝居, 884)

de:の文のまとめ

終助辞 de:は、人称制限は特になく用いられるが、二人称の場合は、特別な文脈が必要となる。主に〈記述〉や〈判断〉を表す文に用いられ、基本的には、《主張の強さ》は控えめか、あるいは、ニュートラルにまだ聞き手に共有されていない情報を伝える。文脈によっては、《聞き手利益性》を伴うが、控えめに述べるという性質上、《聞き手めあて》の意味あいはいはだいぶ弱く、聞き手への《働きかけ》も

⁷¹ 註 64 を参照。

⁷² 意訳。直訳すると、「人とはあまり物を言わないんですよ」。

自ずと弱くなる。

表 16 de:の do:, sa, te:との比較

	do:	sa	de:	te:
文のタイプ	叙述文	叙述文	叙述文	叙述文
共有情報	×	×	×	×
独りごと	×	×	×	×
聞き手めあて	○	×	△(弱)	×
主張の強さ	強い	強い	控えめ	控えめ

表 17 de:が用いられる文の一覧

(a) 《ポテンシャル》	(b) 《リアル》
(i) 〈評価〉	(i) 〈記述〉
(ii) 〈推量〉	

3.1.4 〈記述〉の文のまとめ

本節では、主に終助辞 do:, sa, de:を述語に含んだ〈記述〉を表す叙述文について述べた。〈記述〉の文は、話し手が〈確認〉したことをそのまま描写し、聞き手に述べ伝える文である。そのような文を、do:は聞き手に向かって主張するような《聞き手めあて》を明示する。sa は聞き手に向けてというよりも、話し手の発言なり主張なりを述べるとき感情の変化を文に添える。de:の文の話し手の主張は聞き手に向かってはいるが、婉曲的で控えめな伝達となる。実際の〈はなしあい〉の場面では、終助辞が用いられないことの方が少ない。都市方言であり階層方言でもある首里方言では、他の沖縄諸方言と比べても、聞き手への配慮、言葉の選択をより意識しながら文を述べ伝える。場面状況に応じて、その時々聞き手との関係のし方によって、聞き手に対する配慮のし方も変わるため、用いられる終助辞もさまざまである。したがって、do:, sa, de:以外の終助辞についても詳しく調べる必要がある。

3.2 推量文

本論でいう〈推量〉とは、話し手がいまだ直接確認していない事象を、確認されている事実から想像したり、推論したりして導きだした話し手の〈主観的な判断 (judgement)〉のことを指し、そのような話し手の〈主観的な判断〉を聞き手に対して述べ伝える文のことを推量文と呼ぶことにする (Palmer, 2001)。

先行研究

首里方言を含む沖縄中南部諸方言において何らかの形で〈推量〉に関わる形式として、形式名詞 hadzi や活用語尾 ra があることは研究されて知られている。例えば、かりまた・島袋 (2007) は、安慶名方言の〈推量〉形式として、hadzi と ra を挙げている。

また、砂辺 (2012) によると、座喜味方言では、hadzi や ra の他に、述語の結果相 (resultative) 形式を用いた「セーンおしはかり文」や、ある種のおしはかりの構造をもつ文として gaja:を用いた「熟考疑問文」があると述べている。

ただし、これら従来の研究と本論の違いは、hadzi の文は基本的に《はなしあい》の中でのみ用いられるが、ra の文は《独り言・つぶやき》あるいは《心内発話》といった状況で用いられるため、モダリティの観点からは hadzi の文は推量文に分類され、ra の文は疑い文に分類されることである。また、同様に〈疑い〉を表す gaja: の文も対話的な性質を持たないため、疑い文に分類される。

砂辺 (2012) のいう結果相 (resultative) 形式を用いた「セーンおしはかり文」は、述語のアスペクト形式が文脈や場面状況によっては〈推量〉を表すものである。本論では、工藤 (2014) に倣って ee:n 形式⁷³を述語に含む文が表す推量を〈推定〉と呼ぶことにし、本論でも推量文の一つとして扱う。「ee:n 推定文」のような文は、工藤 (2014) も述べているように、テンスやアスペクトとムード・モダリティが切り離されたものではなく、相互に関係しあって同時に表現される例の一つとして挙げられる。また、「ee:n 推定文」では終助辞 te: があられやすい。実際に、砂辺 (2012) に記載されている「セーンおしはかり文=ee:n 推定文」の用例の多くに終助辞 te: があられている。

砂辺は日本語の〈推量〉形式である「だろう」と比較しながら推量文全体の分析を試みている研究として注目すべき研究の一つである。しかしながら、後述するように、いまだ解決できていない点がある。例えば、次の hadzi の意味・機能の分類表にある(a)と(b)に関しては、もう少し突き詰めて考える必要がある。

表 18 沖縄座喜味方言の hadzi の意味・機能 (砂辺 2012)

- (a) 客観的根拠をもとにしたおしはかり
- (b) 主観的根拠をもとにしたおしはかり
- (c) 予定
- (d) 反実仮想
- (e) 記憶

(c), (d), (e)については、文法的な違いあるいは制限によってそれぞれ明確に区別できる⁷⁴が、(a)と(b)に関しては、《客観的根拠》と《主観的根拠》を区別するための定義づけが、どのような言語学的な根拠に基づいているのか、はっきりしない。本研究でも、このような砂辺の「だろう」と hadzi の比較分析に注目しつつ、モダリティの観点から首里方言の〈推量〉について、それから「だろう」の表す様々なモダリティについて以下のいくつかの点にも留意したい。

表 19 推量形式の分析に関わる留意点

- (a) hadzi を述語に含む文のモダリティについて → 〈推量〉以外のモダリティはあるのか
- (b) ra を述語に含む文のモダリティについて → 疑い文で記述を行う
- (c) ee:n 形式を述語に含む文の〈推量〉のモダリティについて
- (d) 終助辞 te: を述語に含む文のモダリティについて

⁷³ ee:n 形式は、述語の結果相の形式を動詞 sun (する) で代表させた名づける的なものである。首里方言では、/se/ という音節は、[ee]と発音されることが多いため、se:n ではなく、ee:n とした。

⁷⁴ (c)の予定は、?iteuru hadzi jatan (行くはずだった) のように述語動詞が非過去のかたちをとりながら、hadzi が過去のかたち hadzi jatan になる場合に限る。(d)の反実仮想は、「~jaine:, ~jataru hadzi」(~だったら、~だったはず) のように、先行する条件文の存在と述語動詞が過去テンス (第一過去) であらわれるという制限がある。(e)の記憶は、話し手が過去に直接確認した出来事が現在あいまいであるという文脈であられる。詳しくは砂辺 (2012) を参照。

- (e) gaja:を述語に含む文のモダリティについて → 疑い文および質問文で記述を行う
- (f) 工藤 (2014) に記載されている日本語の「だろう」の表す意味・機能は、首里方言においてどの形式が用いられるのかについて（「だろう」との比較）

(a)日本語の「だろう」に相当する、首里方言の推量形式 *hadzi* を述語に含む文のモダリティについて分析する。〈推量〉を表すことは先行研究からも明らかだが、〈推量〉以外のモダリティはどうなっているのか、具体的なことはいまだ明らかではないため、詳細に分析を行う。(b) *ra* の文は、先述の通り、次節の「疑い文」で扱う。*ra* の文についても〈疑い〉以外のモダリティは存在するのか、詳しく分析する。(c), (d), (e)については先に述べた通りである。(f)については、工藤 (2014) と Palmer (2001) を参考に *hadzi* の文について下記の(i)と(ii)の方法・手順で分析を試みた。

表 20 本研究における *hadzi* の文の分析方法・手順

- (i) 工藤 (2014) の認識的ムードの分析において使用されている《事実確認》と《事実未確認》という観点から分類する。それによって、推量用法としての *hadzi* の文とそうではないものに分ける。
- (ii) 対象的な内容が《事実未確認》の場合、〈間接確認による推量〉を表すが、そこからさらに、Palmer (2001) のモダリティ研究を参考に *hadzi* による推量文の下位分類を行う。

事実確認と事実未確認

工藤 (2014) で用いられている《事実確認》と《事実未確認》という話し手の確認（認識）のし方の対立は、次のような奥田靖雄の構文論に基づいている⁷⁵。

すでにのべてあるように、おしはかりの文は、おしはかりから生じてくるはなし手の想像なり判断を表現している。しかも、この想像あるいは判断のなかにとらえられている出来事は、その真偽がまだ経験的な事実によってたしかめられてはいない。想像や判断のわくのなかにとどまっている。これにたいして、いいきりの文が差し出す出来事は、直接的な経験によってとらえられたものであって、考えるまでもない、うたがう余地のない事実である。こうして、いいきりの文とおしはかりの文とでは、それぞれがことなるし方の認識によってとらえられた出来事をえがきだして、その意味において相互に、がんこに対立する。ここでは、はなし手の気分でどちらをえらんでもいい、というような自由はゆるされない（奥田, 1985a, p. 48）。

工藤 (2014) によれば日本語の認識的ムードでは、断定形スルと推量形スルダロウという形式が対立していて、スルダロウには、〈間接確認＝事実未確認〉と〈聞き手も知っている事実＝事実確認〉の事象を伝える働きがある。以下に、日本語のスルダロウの意味・機能を列挙する。

⁷⁵ 尚、句読点の形式は本論のルールに従い、統一させるために変更し、引用した。

表 21 日本語の推量形スルダロウの意味・機能 (工藤 2014)

(1) 〈事実未確認＝話し手の推量 (間接確認)〉

- a. 事実未確認
- b. 事実仮想 (反リアル)
- c. 推量した帰結の聞き手への念押しの確認

(2) 〈事実確認〉

- a. 共有情報
- b. 聞き手にとっての新情報

したがって、直接確認 (事実確認) なのか、間接確認 (事実未確認) なのかで hadzi の文を分類することは、分析の出発点として必須であると思われる。

結果を先に述べると、上記の表のうち、(1a)の〈推量〉および(1b)の反事実仮想という意味あいには hadzi の文で表すことができ、(1c)の意味あいには raja: の文で表すことができる。(2)の〈事実確認〉の意味あいについての研究はこれまでほとんど存在しなかったが、後述するように、終助辞 ee: や ee:ja: を述語に含む文が表せることを明らかにした。先にまとめを行うとすれば、以下の表のようにまとめられる。

表 22 首里方言の hadzi, ra, gaja: および関連形式のパラダイム

《事実未確認》の事象		非過去	第1過去	第2過去	
叙述法	推量	〈推量〉	kateu-ru hadzi	katea-ru hadzi	kateuta-ru hadzi
		〈確信的断定〉	kateun	katean	kateutan
	疑い	〈疑い1〉	kateur-a	katear-a	kateutar-a
		〈疑い2〉	kateu=gaja:	katea=gaja:	kateuta=gaja:
	断定	〈断定無標〉	kateun	katean	kateutan
		〈断定強調〉	kateu-ru	katea-ru	kateuta-ru
質問法	〈真偽質問〉	〈無標〉	kateum=i	kate=i:	kateut=i:
		〈有標1〉	kateu-ru=i	katea-ru=i	kateuta-ru=i
		〈有標2〉	kateun=na:	katean=na:	kateutan=na:
		〈間接的な質問1〉	kateu=gaja:	katea=gaja:	kateuta=gaja:
		〈間接的な質問2〉	kateabi:r-a	kateabitar-a	kateabi:tar-a
		〈念押し的な質問〉	kateur-a=ja:	katear-a=ja:	kateutar-a=ja:
	〈補充質問〉	kateu=ga	katea=ga	kateuta=ga	
		kateu=gaja:	katea=gaja:	kateuta=gaja:	

《事実確認》の事象		非過去	第1過去	第2過去
叙述法	〈共有情報・前提〉	kateu=ee:(ja:)	katea=ee:(ja:)	kateuta=ee:(ja:)
	〈新情報・理由づけ〉	kateu=ee:(ja:)	katea=ee:(ja:)	kateuta=ee:(ja:)

工藤 (2014) の《事実確認》と《事実未確認》という文法的概念について確認した。次に Palmer (2001) の judgement の分類について述べる。

Palmer の judgement の分類について

Palmer (2001) は、類型論の立場から世界の言語をみたときに、Speculative, Deductive, Assumptive という大きく三つのタイプの judgement (判断) を表現する文があると分析している (同上, pp. 24-25)。それぞれをまとめると次の表の通りである。

表 23 Palmer (2001) の judgement の 3 つの分類 (pp. 24-31)

Speculative:	文に差し込まれた事象や出来事が不確かながらも起こりうることを表す。直接確認できる根拠はないか、根拠の有無には無関心で、発話前あるいは発話時の状況や成り行きから出来事を推し量る (例: John may be in his office because he's not at home)。
Deductive:	直接確認による具体的な事象や出来事を根拠に別の事象や出来事を推し量る (例: Yes, the lights are on, so John must be in his office)。
Assumptive:	パターン化された出来事, 例えば, 過去の経験を通して, あるいは習慣や一般的な知識・常識に基づいて推し量ることを表す (例: It's nine o'clock - John'll be in his office now)。

上の表でみるように、Speculative と Deductive は、認識的に可能 (possible) か必然 (necessary) かという観点によって区別され、Deductive と Assumptive は、根拠の種類 (直接確認の事象からの間接確認＝推量か、一般的事象からの推論か) が異なる点で区別される。

砂辺 (2012) では、座喜味方言の hadzi の働きを「客観的根拠をもとにしたおしはかり」と「主観的根拠をもとにしたおしはかり」とに分けて記述しているが、前者はほぼ Palmer の Deductive にあてはまり、後者は Speculative と Assumptive を足したものにあてはまる。

こうして、砂辺 (2012) の《客観的根拠》や《主観的根拠》が類型論の観点から再度分析することによって、ある程度、その妥当性を証明することができる。ただし、《主観的根拠》として分類された文は、Speculative なものと Assumptive なものに分けて記述したほうがよいだろう。

さらに、世界の諸言語では、推論された情報が視覚によるものか、聴覚によるものか等、情報獲得の方法が形式の違いに関わるという。したがって、情報獲得の方法についてもみていく⁷⁶。

⁷⁶ hadzi のシンタグマティックな解釈について少し触れておく。首里方言にも次にみるように、話し手の判断を推量形式ではなく、動詞の断定形の文で差し込めることができる。

- A: ?ari=ga saku eipu:=ja ur-an=te:
 3SG=GEN ほど しぶとい人=TOPいる-NEG=SFP
 「あいつほどしぶとい奴はいないだろうね。」
- B: nanduru mitei=ni=n teimi tatit-i tateun=do:
 だろどろ 道=DAT=ADD 爪.ACC 立てる-SEQ 立つ=SFP.ASS
 「泥んこ道にも爪を立てて立つよ。」 (語遊「シブー」 2011/3/27, p. 19)

上の tateun=do: (立つよ) を tateu-ru hadzi=do: (立つだろうよ) と hadzi の文に置き換えても意味上差し支えはない。下地 (2015) は、日本語のスルダロウの文がパラディグマティックに解釈されるべきでなく、シンタグマティックに解釈されるべきだと主張しているが、それは、スル形式 (本研究の断定形) の文には「必ずしも断定の意味がない」として、「明日たぶん友達に来る」のように、ダロウなしのスルの文においても、非断定の用法があるからだと指摘している (同上, p. 171)。

これに対し、宮崎 (2015) 「奥田論文を読む」『奥田靖雄著作集刊行記念国際シンポジウム予稿集』の中の「構文論研究としての「おしはかり」」という論文では、スルとスルダロウのパラディグマティックな対立とシンタグマティックな対立の両方を、これらの形式の中にみる。つまり、奥田も「いいきりの文とおしはかりの文とでは、それぞれがことなる

次に、上で述べたきたことに基づきながら、hadzi の文のモダリティについてみていく。構成としては、hadzi の最も基本的な機能だと考えられる〈間接確認=推量〉について概観し、hadzi という形式の接続のし方および形態論的な特徴について述べた後、《事実未確認》の用例から分析・論述する。

3.2.1 hadzi の文

3.2.1.1 概観

hadzi の文の最も基本的な機能は〈推量〉である。すなわち、話し手が《想像》や《思考》によって間接的に捉えた事象を話し手の〈主観的な判断〉として伝えることである。よって、文に差し込まれる《対象的な内容》はいまだ確認されていないポテンシャルな事象である。

- 88) [咳, 熱などの症状が観察できることから, 風邪にかかっていることを推論]
 sakk^wi:=nu ʔndz-i:, nitei φα:φα: s-o:-kutu hanacitei kakat-o:-ra hadzi
 咳=NOM 出る-INF 熱 ファーフーフーフーフ する-PROG-CSL 鼻風邪 かかる-PROG-DUB INFR
 「咳が出て, 熱でぼーっとしてるから鼻風邪にかかっていると思う。」(全国, 1-3-3)

hadzi の文は、従来の研究では、「だろう」のみで訳されることが多かった。しかし、「だろう」がもつばら書き言葉あるいは形式ばった場面で使用されることが多いのに対して、hadzi は口語的な表現である。場面によって「だろう」「～と思う」「～じゃないかな」等、様々な日本語訳が可能である。したがって、場面状況に応じて「だろう」あるいは「～と思う」のどちらかで訳す。

さて、hadzi の文は、日本語の断定文と「だろう」を伴う推量文のように、《事実確認》と《事実未確認》という話し手の確認(認識)のし方において断定形 sun の文と対立している⁷⁸。下の用例のように、〈断定〉の文は話し手が捉えた現実世界における事実を表している。このような事実は、経験や知識によって話し手がすでに知っていることである。

- 89) hanacitei kakat-o:-n
 鼻風邪 かかる-PROG-IND
 「鼻風邪にかかっている。」

hadzi の文は、日本語のダロウカのように、質問文あるいは質問の形になることはなく、独話的に用いられることもない。

さらに、《事実確認》の事象を表す hadzi の文は、〈推量〉の意味から離れて、〈予定の不実現〉や〈断定回避〉等といった派生的な意味・機能を持つ。本節では、〈推量〉のみについて述べ、〈反事実仮想〉および《事実確認》の用例については別で記述を行う。

し方の認識によってとらえられた出来事をえがきだして、その意味において相互に、がんこに対立する」と述べているように、〈断定〉と〈推量〉のパラディグマティックな対立は、スルとスルダロウの対立の中に確かにある。それと同時に、「確認=根拠・前提→未確認=想像・判断」というシンタグマティックな関係も働いて、〈推量〉を形作る。

⁷⁷ 熱が出てぼてぼてしている様子を表すオノマトペ。

⁷⁸ 日本語については工藤(2014)を参照。

3.2.1.2 接続の仕方

述語に \widehat{hadzi} が後接する場合、述語の連体形で結ぶ $-ru \widehat{hadzi}$ と疑いの形 $-ra$ で結ぶ $-ra \widehat{hadzi}$ という二つの形がある⁷⁹。現在の首里方言では $-ru \widehat{hadzi}$ の使用が優勢であり、意味的にも $-ru \widehat{hadzi}$ は制限がなく、 \widehat{hadzi} の持つ大方の機能において用いられる。一方、 $-ra \widehat{hadzi}$ は、推論の根拠がある場合や、話し手が確信している場合などにあらわれやすい。

また、 \widehat{hadzi} に接続する述語が否定形の場合は、形を変えずに接続する。例えば、 ?iteun 「行く」の否定形 ?ikan と \widehat{hadzi} が結びつく場合、 $\text{?ikan } \widehat{hadzi}$ となる。

さらに、 \widehat{hadzi} の文は、動詞述語文・形容詞述語文・名詞述語文の過去形・非過去形に接続する。ただし、動詞述語文で用いられることが圧倒的に多い。

[動詞述語・非過去]

i: tint̃ei=ŋkai nai-ra \widehat{hadzi}

良い 天気=DAT なる-DUB INFR

「良い天気になると思う。」

[動詞述語・過去]

?irana: haru=ŋkai mut̃e-i nd̃z-a-ru \widehat{hadzi}

鎌.TOP 畑=DAT 持つ-SEQ 行く-PST-ADN INFR

「鎌は畑に持って行ったと思う。」

[形容詞述語・非過去]

φuka: φi:sa-ra \widehat{hadzi}

外.TOP 寒い-DUB INFR

「外は寒いと思う。」

[形容詞述語・過去]

?unu ei:k^wa: takasat-a-ru \widehat{hadzi}

この スイカ.TOP 高い-PST-ADN INFR

「このスイカは高かったと思う。」

[名詞述語・非過去]

kari=nu na: ja-ru \widehat{hadzi}

仮=GEN 名前 COP-ADN INFR

「仮の名であるだろう。」

[名詞述語・過去]

?asati=nu jakusuku jat-a-ru \widehat{hadzi}

明後日=GEN 約束 COP-PST-ADN INFR

「明後日の約束だったと思う。」

また、 \widehat{hadzi} の後ろにコピュラがついて過去・非過去の対立がある。

- 90) na:çin beŋk'o: s-o:t-e:r-e: eikeno: ?utir-ant-a-ru \widehat{hadzi} ja-eiga, da: ?utit-i ne:n=sa
 もっと 勉強 する-PROG-PST3-CND 試験.TOP 落ちる-NEG-PST-ADN INFR COP-ADVRS INTJ 落ちる-SEQ CPL=SFP
 「もっと勉強していたら試験は落ちなかっただろうが、ほら落ちてしまったよ。」(用例 59 と重複)

⁷⁹ また、『沖縄語辞典』(1963, p. 68)や仲原(2014, pp. 139-140)にも、述語の連体形に後接する形と、述語の ra 形に後接する2つの形が存在するという記述がある。

- 91) $\widehat{te}inu: b\acute{o}:i\eta=kai \ ?i\widehat{te}u-ru \ had\widehat{z}i \ jat-an$
 昨日 病院=ALL 行く-ADN INFR COP-PST
 「昨日病院に行くはずだった。」

$\widehat{had\widehat{z}i}$ の後ろに終助辞の $do:$ や $te:$ や $ja:$ が共起する。

- 92) $jakusuko: \widehat{te}inu: jat-a-ru \ had\widehat{z}i=do:$
 約束.TOP 昨日 COP-PST-ADN INFR=SFP.ASS
 「約束は昨日だったと思うよ。」

- 93) $\widehat{tt\acute{e}u}=\nu u \ dukumadi \ ?u\phi\acute{o}:ku \ ?nd\widehat{z}it-i \ ?nd\widehat{z}ute-i=n \ nar-an \ had\widehat{z}i=te:$
 人=NOM 非常に 多く 出る-SEQ 動く-INF=ADD POT-NEG.ADN INFR=SFP
 「人が非常に多く出て動きもできないと思うよ。」

- 94) $kun\widehat{g}uto:ru \ i: \ hanace: \ mata=to: \ ne:ran \ had\widehat{z}i=ja:$
 このような 良い 話.TOP また=COM.TOP ない.ADN INFR=SFP
 「このような良い話はまたとはないだろうなあ。」

$te:$ や $do:$ や $ja:$ のような終助辞自体は文法的な意味を持たず、ある特定のモダリティの文にあらわれて「話し手の認識と通達のさまざま」を表す(かりまた, 2016, p. 12)。 $do:$ を含む文は、《聞き手めあて》を前面化させ、話し手の強い主張として文を聞き手に伝える。 $te:$ を含む文は、《聞き手めあて》とは無関心のまま説明的に聞き手に伝える。

$ja:$ の文は未分析なので省くと、 $te:$ と $do:$ の文はどちらも聞き手に共有されていない事象を述べ伝えるが、圧倒的に $\widehat{had\widehat{z}i}=do:$ であらわれる場合が多い。理由は明らかではないが、 $te:$ を用いて〈判断〉を述べる場合、断定形に直接後接していきる場合が多いからだと考えられる。また、調査協力者の内省によると、 $\widehat{had\widehat{z}i}=do:$ の文に比べて、 $\widehat{had\widehat{z}i}=te:$ の文のほうがよりはっきり確信しているニュアンスが感じられると言う(調査協力者、面接調査, 2015年6月3日)。

- 95) [藤の木は沖縄では識名園⁸⁰にしかなかったのかという質問に対して答える]
 $\phi u\widehat{d\widehat{z}i}=ndi \ ?i-ee: \ ?u\widehat{te}ina:=\nu u \ ki:=ndi \ ?i-ei=jaka: \ jamatu=\nu u \ ki:=du \ ja-ibi:-kutu$
 藤=QT 言う-NLZ.TOP 沖縄=GEN 木=QT 言う-NLZ=CMPR.TOP 大和=GEN 木=FOC COP-POL-CSL
 「藤というのは、沖縄の木というよりは日本本土の木ですから。」
 $ja-eiga, \ ?ure: \ \eta kaci=kara=\nu u \ ki: \ jat-a-ru \ had\widehat{z}i \ ja-ibi:n=te:$
 COP-ADVRS それ.TOP 昔=ABL=GEN 木 COP-PST-ADN INFR COP-POL-SFP
 「それでも、それは昔から生えていた木であっただろうと思いますけど。」(方談 6, 347)

3.2.1.3 $\widehat{had\widehat{z}i}$ の文の〈推量〉のモダリティ

上述した通り、 $\widehat{had\widehat{z}i}$ の文の基本的な機能は、〈推量〉という話し手の主観的な判断を伝えることである。最も典型的な推量文は、直接確認できる事象から別の事象を推し量るような文であろう。このような文を Palmer (2001) に倣って、〈推論〉deductive と呼んでおく。このほかに、パターン化された事象を基に別の事象を推し量る〈想定・仮定〉assumptive の文と、《根拠》の有無には無関心な〈推測・憶測〉speculative の文等がある。まずは、最も典型的な〈推論〉deductive の文からみていく。

⁸⁰ 王家の別宅兼庭園。現在は、一般公開されている。

3.2.1.3.1 〈推論〉 Deductive⁸¹

〈推論(deductive)〉は、直接確認による事象や出来事を根拠に別の事象や出来事を推し量る。直接確認のし方(情報獲得の種類)は、視覚(visual)によるもの、聴覚(auditory)によるもの、伝聞(reported)によるもの等がある。例えば、次に挙げる用例は、視覚(visual)あるいは話し手の直接体験によるものである。

- 96) [夜空にたくさん星が出ているのを見て、明日の天気(晴れ)を推論]

φuei=nu ?ndz̄it-o:-kutu, ?atēa=n i: tint̄ei=ŋkai nai-ra had̄zi

星=NOM 出る-PROG-CSL 明日=FOC 良い 天気=DAT なる-DUB INFR

「星が出てるから、明日も良い天気になるだろう。」(全国, 1-3-1a)

- 97) [空などの今の様子を見て、明日の天気(雨)を推論し、さらにそこから遠足が取り止めになることを推論している]

nama=nu jo:ei=kara ei:-ne:, ?atēa=n ?ami ja-ru(/ja-ra) had̄zi ja-kutu

今=GEN 様子=ABL する-CND 明日=ADD 雨 COP-ADN(/COP-DUB) INFR COP-CSL

「今の様子からすると、明日も雨だろうから」

jensuko: tuijami=ŋkai nai-ra had̄zi

遠足.TOP 取り止め=DAT なる-DUB INFR

「遠足は取り止めになるだろう。」(全国, 1-7-2-5)

- 98) [先生と家庭の事情で学校に通えていない生徒の会話。気分が優れないというのに、薪運びをしている弟子とのやり取りを通して、「何か深い事情がある」ことを推論]

A: nu:=ga, ?ja:=ja tēikaguro: gakko:=ŋkai mi:t-a-ru ka:gi=n ne:ran-eiga

何=WHQ 2SG=TOP 近頃.TOP 学校=DAT 見える-PST-ADN 顔=ADD ない-ADVRS

「何だ、お前はこの頃は学校に全く来てもないが」

nu:=ga nu: ja=ga

何=NOM 何 COP=WHQ

「一体どうした？」

B: kibun=nu sugurir-an guburi: s-o:j-abi:n

気分=NOM 優れる-NEG 失礼 する-PROG-POL

「気分が優れませんかでごめんなさい。」

A: kibun=nu wassa-ru ttēu=nu nu:ga kunu tamuno: nu: ja=ga

気分=NOM 悪い-ADN 人=NOM 何か この 薪.TOP 何 COP=WHQ

「気分が悪い人がなんだこの薪は。どうした？」

B: mo:eiwake: ne:j-abir-an

申し訳 ない-POL-NEG

「申し訳ありません。」

A: tacikani φukaei: d̄zidzo:=nu ?a-ru had̄zi. eieo:=tu dici=nu naka, ?itē-i n|-i

確かに 深い 事情=NOM ある-ADN INFR 師匠=COM 弟子=GEN 仲 言う-SEQ 見る-IMP1

「きっと深い事情があるのだろう。師匠と弟子の仲だ、言ってみろ。」(芝居, 594)

- 99) [旅人が昔自分が誤って殺した男のことについて子供に尋ねる。それを知らない子供は母親に尋ねる。母親 A とその子供 B, 旅人 C の会話。目の前で子供が母親に説明している様子を見て推論している]

⁸¹ 直接確認による別の具体的な事象や出来事を根拠に推論: X must be Y (Palmer, 2001)。

- A: nidzu:gunimme: tteu=ni kurus-att-a-ru tteu=ndi=na:
 二十五年前 人=DAT 殺す-PASS-PST-ADN 人=QT=YNQ.EQ
 「二十五年前、人に殺された人だって？」
- B: ?amma:, ?unguto:ru hanace: teite-i n:tei=na:
 母 そのような 話.TOP 聞く-SEQ 見る.PST.YNQ=POL
 「お母さん、そのような話は聞いたことありますか？」
- C: hadzimitija:na: nama mijarabinutea:=kara teitei-nso:te-a-ru hadzi ja-eiga nama=kara
 初めまして 今 お子さん達=ABL 聞く-HON-PST-ADN INFR COP-ADVRS 今=ABL
 「初めまして。今、お子さん達からお聞きになっただろうが今から」
- nidzu:gunimme: kunu tako:jama=uti kurus-att-a-ru tteo: ur-an=i=na:
 二十五年前 この (地名)=LOC 殺す-PASS-PST-ADN 人.TOP いる-NEG=YNQ=POL
 「二十五年前、この多幸山で殺された人はいませんか。」(芝居, 778)

hadzi を用いた推量文でも do: が用いられる。ただし, do: が〈推量〉を表すというより, do: を添えることで《聞き手めあて》が前面化する。不確か(推量)であっても, しっかりと話し手の判断を聞き手に伝えるという目的が果たされる。

100) [おじいが鎌を研いでいたのを見たことを根拠に畑に持って行ったことを推論]

- A: ?irana ne:n nat-o:n
 鎌 ない.SEQ なる-PROG
 「鎌がなくなっている。」
- B: namasatei odzi:=ga ?irana tudz-e:t-e:kutu, haru=ŋkai mutteindz-a-ru hadzi=do:
 さっき おじい=NOM 鎌.ACC 研ぐ-RES-PST3-CSL 畑=DAT 持って行く-PST-ADN INFR=SFP
 「さっきおじいが鎌を研いでいたから、畑に持って行ったと思うよ。」(調査, 2015/5/21)

101) [若奥さん A とベテラン奥さん B の会話。南瓜を買う時に冬瓜を見ていたので、その嫁は本当は冬瓜が好きなのだらうと推論]

- A: teiŋk^wa:=ndi ?i-ee: waka-inagu-nutca:=ja ?ansuka: eite-abir-an=do:=tai
 かぼちゃ=QT 言う-NLZ.TOP 若-女-PL=TOP あまり 好き-POL-NEG=SFP=POL.F
 「かぼちゃって言ったら、若い女たちはあまり好きじゃないですよ。」
- B: watta: jume: ju:kama:=do:
 1PL.GEN 嫁.TOP よく食べる人=SFP
 「うちの嫁はよく食べるわよ。」
- A: ?undzu=ga kutu ?umut-i=du teiŋk^wa: kad-o:-ru⁸² hadzi ja-ibi:n=do:
 2SG.HON=GEN 事.ACC 思う-SEQ=FOC かぼちゃ.ACC 買う-PROG-ADN INFR COP-POL=SFP
 「貴方のことを思ってこそかぼちゃを買っているんでしょうよ。」
- B: nu:nte: ?an ?i:=ga. ma:sa-kutu=ru kamu-ru ma:ko:-ne:n muno: kam-ano: ?ar-an=i
 なぜ そう 言う=WHQ 旨い-CSL=FOC 食べる-ADN おいしく-ない 物.TOP 食べる-NEG.TOP COP-NEG=YNQ
 「わからないわ。おいしいからこそ食べるのであって、おいしくないものは食べないのではないの。」
- A: ?undzuna: jume: teiŋk^wa:=jaka eibui=du eite-abi:n=do:
 2SG.HON.GEN 嫁.TOP 南瓜=CMPR 冬瓜=FOC 好き-POL=SFP
 「貴方の嫁は南瓜より冬瓜が好きですよ。」
- B: nu:=ga nu:nte:
 何=NOM どうして

⁸² 原文は kado:ibi:ru だが、首里方言話者に相談の上、修正した。

「どうして？」

A: t̃eiŋk^wa: ko:-igatei: eibui n̄te-o:-ibi:t-an
南瓜.ACC 買う-SIM 冬瓜.ACC 見る-PROG-POL-PST

「南瓜を買いながら冬瓜を見ていました。」(実践, 18)

- 102) [若奥さん A とベテラン奥さん B の何気ない会話。現在の気候の様子から作物が豊富に実っていることを推論]

A: kunuguro: kad̃ziφutei=n ne:n ça:i=n s-an, jugaφu: ?ami=n φu-ibi:η=ja:=tai
最近.TOP 台風=ADD ない.SEQ 日照り=ADD する-NEG.SEQ 恵 雨=ADD 降る-POL=SFP-POL.F

「最近台風もなく日照りもしないし、恵の雨も降りますねえ。」

B: ?ansukutu mid̃zi=nu eiwa=n ne:n mud̃zukui=n dikit-o:-ru had̃zi=do:ja:
だから 水=GEN 心配=ADD ない 耕作=ADD できる-PROG-ADN INFR=SFP

「だから水の心配もなく耕作もできているだろうね。」

A: ?ansabi:kutu. jace:=n ?ippe: ?uφo:ku dikit-o:-ru had̃zi ja-ibi:-eiga
そうですから 野菜=ADD とても たくさん できる-PROG-ADN INFR COP-POL-ADVRS

「そうですわね。野菜も本当にたくさんできているんでしょうけれども」

nu:nt̃eiga ja-ra takamun nat-i=ja:=tai

なぜか COP-DUB 高いもの なる-SEQ=SFP-POL.F

「なぜかしら (値段が) 高くなってねえ。」(実践, 17)

次の用例は、話し手が直接聴いたこと (auditory) を基に、別の事象を〈推論〉している。

- 103) [新聞が郵便ポストに投函されるような音を聞いて、現在の時間を推論]

namasatei eimbunhaitatsu=nu ?utu=nu s-a-kutu, na: gud̃ze: eid̃zit-o:-ra had̃zi
さっき 新聞配達=GEN 音=NOM する-PST-CSL もう 五時.TOP 過ぎる-PROG-DUB INFR

「さっき新聞配達の音がしたから、もう五時は過ぎていると思う。」(全国 2, 1-3-4)

次の三例は、他人から聞いたこと (reported) を基に、別の事象を〈推論〉している。

- 104) [GW に外国旅行に行くと言っていたのを思い出して。本人達から直接旅行に行くと言っていたので、たぶんそうだろうと推論している]

?anu t̃teu-ta:=ja tabun g^waikoku r̃oko:=kai menee:-ra had̃zi
あの 人-PL=TOP 多分 外国 旅行=ALL 行く.HON-DUB INFR

「あの人たちは多分外国旅行に行くと思う。」(調査, 2015/5/28)

- 105) [追剥が旅人から刀を奪い取ってきて相方に言う。刀は持ち主である旅人が先祖代々から受け継いできた家宝であると聞いている]

kunu katana=n mutt̃eo:k-e: takara nai-ru had̃zi
この 刀=ADD 持って置く-CND 宝 なる-ADN INFR

「この刀も持っておけば宝になるだろう。」(芝居, 762)

- 106) [10月頃に家を建てる予定だと言っていたのを思い出して。本人達から直接聞いているので、たぶんそうだろうと推論している]

tabun d̃zu:g^watei-guru=kara ja:teukui eikaki:-ra had̃zi=do:
多分 10月-頃=ABL 家作り.ACC しかける-DUB INFR=SFP

「多分10月頃から家作りを始めるだろうよ。」(調査, 2015/6/11)

3.2.1.3.2 〈想定・仮定〉 Assumptive

〈想定・仮定 (assumptive)〉は、パターン化された出来事、例えば、過去の経験を通して、あるいは習慣や一般的な知識・常識に基づいて、現在あるいは未来の具体的な事象に対する判断を表す。判断の《根拠》には、《特性》あるいは《質》を表す事象・出来事が差し込まれる。

三人称・現在の文

30) [うっかり者で忘れやすいという《特性》から、今もまた忘れていたろうと判断している]

taru:=ja ʔukattu: ja-kutu, muru waciri s-o:-ru hadzi=do: ʔe:dzic-i ku:-wa⁸³

(人名)=TOP うっかり者 COP-CSL 全部 忘れ する-PROG-ADN INFR=SFP.ASS 合図する-SEQ 来る-IMP

「タルーはうっかり者だから、ど忘れしていると思うよ。呼んでこい。」(音声「ウカットウー」)

107) [今日は日曜日だという《質》的な特徴から、デパートが混んでいることを判断している。主語の《質》的な特徴だけでは《根拠》にならない。そこに「日曜日は混む」という話し手にとってパターン化された過去の経験や記憶が付け加わっているからこそ判断が成り立つ]

A: t̄eu:=ja depa:to: t̄eu=nu ʔufo:ku ʔitte-o:ŋ=ja:

今日=TOP デパート.TOP 人が たくさん 入る-PROG=SFP

「今日はデパートは人がたくさん入っているねえ。」

B: niteijo:bi ja-kutu=du ja-ru hadzi=ja:

日曜日 COP-CSL=FOC COP-ADN INFR=SFP

「日曜日だからだろうね。」(全国, 1-6-2)

三人称・未来の文

108) [酒を飲んで女遊びをしているマサンルーに怒って会いに来る伯父 B。女 A はいつもならこの時間に戻ってくるだろうと想定して述べている。つまり、「今は何時だ」という《質》的な特徴から推し量っている。ここでも、主語の《質》的な特徴だけでは《根拠》にならない。そのような特徴に「いつもこの時間に帰って来る」という話し手のパターン化された経験や記憶が加わってこそ判断が成立している]

A: masanlu:=ja nama ʔutei=ne: u-ibir-an

(人名)=TOP 今 家=DAT.TOP いる-POL-NEG

「マサンルーは、今、家にはいません。」

B: ur-an eidzi=du=n jar-e:, mudut-i t̄eu:-ru ʔe:da matteo:t̄eun

いる-NEG.ADN FN=FOC=ADD COP-CND 戻る-SEQ 来る-ADN 間 待っておく

「いなかろうが、戻って来るまで待っておく。」

A: jagati mudut-i t̄eu:-ru hadzi ja-ibi:-kutu, ʔuku=ndzi ʔumateini nat-i ʔutabimice:-bir-i

やがて 戻る-SEQ 来る-ADN INFR COP-POL-CSL 奥=LOC お待ちに なる-SEQ BEN.HON-POL-IMPI

「そろそろ戻って来るでしょうから、奥でお待ちになって下さいまし。」(芝居, 554-556)

109) [大綱引きの日だという《質》的な特徴から多くの人が集まるだろうと予想している。その判断は、「毎年、那覇の大綱引きには多くの人が集まる」という話し手の経験に基づいている]

t̄eu:=ja na:ɸa: t̄einaçitei ja-eiga, t̄eu ʔufo:ku ʔateimai-ru hadzi

今日=TOP 那覇.TOP 綱引き COP-ADVRS 人 多く 集まる-ADN INFR

「今日は那覇は綱引きだが、人が多く集まると思う。」(調査, 2015/4/27)

⁸³ 原文は、ʔe:dzic-i ku:-wa だが、筆者が ei (して) を加筆し、「合図して来い」とした。

- 110) [方言は無くなるという人に対して日本語で反論している人がいるので、もし筆者が日本語でしか表現できない君がそれを証明しているじゃないかと言ったら、相手はこう返すだろうという文脈。相手の《特性》あるいは性格のパターンから仮定して述べている]

ʔan ʔi-ne: mata ʔuri=tu kuri=tu=ja hanaci=ja bitci jan. gakumuntekina

そう 言う-CND また それ=COM これ=COM=TOP 話=TOP 別 COP 学問的な

「そう言えば『またそれとこれとは話は別だ。学問的な』

hanaci=nu ho:gen=ei naim=i. ho:geŋ=ja maduɸi:ɗzi:=nu kuracigata=nu

話=NOM 方言=INST POT=YNQ 方言=TOP 日常=GEN 生活=GEN

「話が方言でできるか、方言は日常生活の」

kutuba=du ja-ru=ntci ke:su-ru hadzi=do: ʔunu ʔatai=ja wannin wakat-o:n

言葉=FOC COP-ADN=QT 返す-ADN INFR=SFP.ASS その 位=TOP ISG.ADD わかる-PROG

「言葉である』と(あいつは)返すだろうよ。それぐらいは私も解っている。」(琉球弧, 216)

hadzi の文による〈推量〉には《根拠》があってもなくてもよい。ここでいう《根拠》とは、上で述べたような根拠が直接確認によるもの (deductive) なのか、パターン化された一般的な事象や出来事によるもの (assumptive) なのかである (Palmer, 2001)。次に列挙する用例にはそのような《根拠》が見当たらない。《根拠》の有無には無関心である。このような文を〈推測・憶測〉speculative と呼ぶ⁸⁴ (Palmer, 2001)。

3.2.1.3.3 〈推測・憶測〉Speculative⁸⁵

〈推測・憶測 (speculative)〉は、話し手の不確かさを文の中に差しだし、文に差しだされた事象や出来事が起こりうることを表す(以下、〈推測〉)。直接確認できる《根拠》はないか、《根拠》の有無には無関心で、発話前あるいは発話時の状況や成り行きから出来事を推し量る。

例えば、次の聞き手あるいは第三者の内部の認識や心情・感情のようなものは、話し手が事前に行うことができない。発話時の状況から現在または未来のポテンシャルな内部の認識や心情・感情を推し量る時に hadzi が用いられる。

主語が二人称

- 111) [話し手が首討ちに逢おうとしているところを、息子のカマダーとサンダーが発見する。なぜ突然見たこともない連中に父が首討ちにあうのか全く状況が飲み込めないカマダーとサンダーに向かって一言]

kamada:, sanda:. ntea. ɗziɗzo: ʔj-an-ne:, nu:=gaja:=ndi ʔumui-ru hadzi

(人名) (人名) INTJ 事情 言う-NEG-CND 何=DUB=QT 思う-ADN INFR

「カマダー、サンダー。そうか。事情を言わないと、どうしてかと思うだろう。」(芝居, 810)

- 112) [話し手=旅人→聞き手=追剥の息子。話し手が聞き手の父親に襲われた時に正当防衛で誤って殺害してしまったことを息子である聞き手が知り、聞き手は親の仇を取ろうと、話し手を殺そうとする。聞き手は父親が追剥であったことは知らなかったが、その後、実は聞き手の父親が当時話し手を襲った相手であったということが明らかになって、たじろぐ聞き手に話し手が語りかける。直接確認できる確固たる根拠はないが、これまでのやり取りや話の成り

⁸⁴ speculative と deductive は、根拠に関心があるかどうかによって区別され、deductive と assumptive は、根拠の種類(直接確認による間接確認=推論か、一般的事象からの推論か)が異なる点で区別される。

⁸⁵ epistemically possible, signals uncertainty: X may be Y (Palmer, 2001, p. 25)。

行きから、聞き手あるいは第三者の内的な情態について「たぶんそうだろう」という話し手の判断を差しだしている]

to: ni:ee: ʔja:=n ʔusuʔusu d̥zid̥zo:=ja wakat-a-ru had̥zi
INTJ 若者 2SG=ADD うすうす 事情=TOP わかる-PST-ADN INFR

「さあ、若者よ。お前もうすうす事情はわかっただろう。」(芝居, 816)

- 113) [ジュリ (芸妓) のチルーと久しぶりに再会した身分の高い若按司 (男) だが、身分が違うため別れなければならない旨を伝える話し手の台詞。薄情な言葉を言うので、たぶんそう受け取るだろうと推測している]

teiru:, sadamiti hakud̥zo:na ikiga=ndi ʔumui-ru had̥zi ja-eiga d̥ziri=nu
(人名) 改めて 薄情な 男=QT 思う-ADN INFR COP-ADVRS 義理=GEN

「チルー、さぞ薄情な男だと思うだろうが義理の」

kunu eike:=ja kukuro: nate-o:t-i jat-i=n, wakarir-an-de: nar-an

この 世界=TOP 心.TOP 泣く-PROG-SEQ COP-SEQ=ADD 別れる-NEG-CND なる-NEG

「この世界では心は泣いていても、別れなければならん。」(芝居, 628)

主語が三人称

- 114) [正当防衛で誤ってだが聞き手の父親を殺してしまった事を告げた旅人が言う]

wa:=ga nu:=ndi ʔite-i=n wa: ʔi:buno: tu:r-an had̥zi
1SG=NOM 何=QT 言う-SEQ=ADD 1SG.GEN 言い分.TOP 通る-NEG.ADN INFR

「私が何を言っても言い訳は通じないだろう。」(芝居, 798)

- 115) [父が死んだと聞いて泣くカマダーを見る A と B。根拠はなく状況的に可能性を述べている]

A: teimugurisaŋ=ja:

可哀そうだ=SFP

「可哀そうだな。」

B: kk^wa=ee: jasund̥zir-ar-an had̥zi=ja:

子供=INST.TOP 諦める-POT-NEG INFR=SFP

「子供なら諦められないだろうな。」(芝居, 948)

また、聞き手の内的な状態と同様、未来のポテンシャルな事象については事前に知ることができない。したがって、次の用例のように、未来の不確かな事象について、発話状況や文脈から話し手の判断を差しだす時にも had̥zi の文が用いられる。

一人称・未来の文

- 116) [妹を結婚させると約束したのに裏切った親友の元へ妹を連れて行って話をしようと言う兄 B とその兄を気遣う弟 A の会話。相手の所に乗り込んで行く覚悟のためただでは済まないだろうという話し手の判断があらわれている]

A: jattei:=sai, ʔatu=nu kuto: eiwa ei-miso:n=na. ja-ibi:-eiga ʔund̥zo:
兄.CH=VOC.POL.M 後=GEN 事.TOP 心配 する-HON=PROH COP-POL-ADVRS 2SG.HON.TOP

「兄さん、後の事は心配なさらないで。ですけど、兄さん…」

B: teu:=ja tada: mudut-e: k-u:n had̥zi

今日=TOP ただ.TOP 戻る-SEQ.TOP 来る-NEG INFR

「今日はただでは戻って来ないだろう。」(芝居, 908)

117) [昔、女 B の旦那にお世話になったという役人 A が訪ねてきて、困ったことがあったら何でも言
って下さいと言ってきたので、女 B は世替わりで仕事がないと相談したら、お金はいくらでも
貸してやるから着物縫いをして儲けなさいと言われたが遠慮する]

A: $\widehat{d}zin=nu$ kuto: eiwa ei-miso:n=nake:. $\widehat{d}zino:$ $\widehat{t}cassa$ jat-i=n
 お金=GEN 事.TOP 心配 する-HON=PROH お金.TOP いくら COP-SEQ=ADD

「お金の事は心配なさらないで。お金はいくらでも」

wa:=ga karate-i $\widehat{?}usagij-abi:-kutu$
 1SG=NOM 貸す-SEQ BEN.HMB-POL-CSL

「私が貸して差し上げますから。」

B: kunu $\widehat{?}ujakk^w a=nu$ $\widehat{t}cin$ nu:ja: sun=di $\widehat{?}i:-ne:$, wad $\widehat{z}ika=nu$ $\widehat{d}zin=ce:$ nar-an⁸⁶ had $\widehat{z}i$ ja-ciga
 この 親子=NOM 着物 縫い する=QT 言う-CND 僅か=GEN お金=INST.TOP POT-NEG INFR COP-NASS

「私達親子が着物縫いすると言ったら、僅かなお金ではできないと思うが...」

A: $\widehat{?}aja:=sai.$ (中略) $\widehat{d}zin=nu$ kuto: eiwa ei-miso:n=nake:
 おばさん=POL.M お金=GEN 事.TOP 心配 する-HON=PROH

「おばさん。お金の事は心配なさらないで...」(芝居, 1082)

主語が二人称

118) [身分のある者との間にできた子供を泣く泣く養子に出すジュリ (芸妓) A と里親になってくれ
るという女 B の会話]

A: wanne: kuri=cei $\widehat{?}uwakari$ s-abir-a
 1SG.TOP これ=INST お別れ する-POL-INT

「私はこれで失礼します。」

B: $\widehat{t}cu:$ wakari-e: na: $\widehat{?}iteaju-ru$ kuto: nar-an had $\widehat{z}i$. $\widehat{?}uri$ na: $\widehat{t}cukeno:$ $\widehat{?}uja=ndi$ $\widehat{?}ite-i$
 今日 別れる-CND もう 会う-ADN 事.TOP POT-NEG INFR INTJ もう 一回.TOP 親=QT 言う-SEQ

「今日別れればもう会う事はできないだろう。さあ、もう一回は親だと言って」

$\widehat{t}cu:ku$ date-i n-a:n=i
 強く 抱く-SEQ 見る-NEG=YNQ

「強く抱いてみないか。」

A: dak-ate-i k^wi-mice:m=i
 抱く-CAUS-SEQ BEN-HON=YNQ

「抱かせてくださるの...」(芝居, 644)

119) [昔別れた女にあげた自分の形見の品を持っている青年が現れたので名を聞く]

A: kamid $\widehat{z}a:=ndi$ $\widehat{?}i-ce:$ ju:=nu naka einubu-ru kari=nu na: ja-ru had $\widehat{z}i$
 (人名)=QT 言う-NLZ.TOP 世=GEN 中 忍ぶ-ADN 仮=GEN 名 COP-ADN INFR

「カミジャーというのは、世の中を忍ぶ仮の名であるだろう。」

$\widehat{?}ja:$ $\widehat{d}zitei=nu$ na:=ja nu:=ndi $\widehat{?}i:=ga$
 2SG.GEN 実=GEN 名=TOP 何=QT 言う=WHQ

「お前の実の名は何と言うのか。」

B: turad $\widehat{z}u:=ndi$ $\widehat{?}ite-o:-ibi:n$
 (人名)=QT 言う-PROG-POL

「トゥラジューと言います。」(芝居, 706)

⁸⁶ 原文では、wad $\widehat{z}ikana$ $\widehat{d}zince:$ ne:ranとあるが、文の意味に合うように naran に修正した。

主語が三人称

120) [下男たちが働き者のカミジャーのせいで休む暇がないのでどうにか辞めさせる方法を考える。旦那様の前で腕相撲をして思いっきり負かしたらどうかと提案する A]

A: ikiga=tucei hadzikasan-u ur-ar-an nat-i, du:kuru jamit-i ?iteu-ru hadzi

男=として 恥ずかしい-CSL いる-POT-NEGなる-SEQ 自ら 辞める-SEQ 行く-ADN INFR
「男として恥ずかしくて居られなくなって、自分から辞めて行くだろう。」

B: i: kanje: ja=sa

良い 考え COP=SFP

「いい考えだな。」(芝居, 688)

121) [演技で勝負をするのだとしても、強い二人がやり合えば体を傷つけてしまう可能性がある]

A: kanje:t-i n:d-e:(中略)katte-i=n makit-i=n du: sundzi:-ru hadzi

考える-SEQ 見る-IMP2 勝つ-SEQ=ADD 負ける-SEQ=ADD 体.ACC 損じる-ADN INFR

「考えてみる。勝っても負けても体を損ねるだろう。」

?e:=ni jutt-e:, eininun ?ndzi:=ga su-ra wakar-an=do:

場合=DAT よる-SEQ.TOP 死人.ADD 出る=FOC する-DUB わかる-NEG=SFP.ASS

「場合によっては、死人も出るかもわからないぞ。」

B: ?an ja=saja:

そう COP=SFP

「そうだなあ。」(芝居, 852)

122) [結婚を控えた若い男女。お互いの兄の勝負の行方によっては兄たちが不仲になり、自分たちの関係も危ういかもかもしれないという話し手の主観が述べられている]

A: ?ikana ducei=nu naka=ndi ?ite-i=n, kateimaki=nu wakar-e:=kara tai=ja funaka

いくら 友達=GEN 仲=QT 言う-SEQ=ADD 勝ち負け=NOM わかる-CND=ABL 二人=TOP 不仲

「いくら友達の仲だと言っても、勝ち負けがわかったら二人は不仲に」

nat-i ?iteu-ru hadzi. ?an na-ine: watta: tai=ja tea: nat-i ?iteu=gaja: (中略)

なる-SEQ 行く-ADN INFR そう なる-CND 1PL 二人=TOP どう なる-SEQ 行く=DUB

「なっていくだろう。そうなれば私達二人はどうなっていくか...」

B: wannin satciφudu=kara ?uri ?umut-i eiwa s-o: ibi:n

1SG.ADD 先程=ABL それ.ACC 思う-SEQ 心配 する-PROG-POL

「私も先程からそれを思って心配している。」(芝居, 858-860)

123) [特に根拠はない。場面状況的にそうなるかもしれない可能性を述べている]

A: ?unu ?ato: watta: tai ja=sa

この 後.TOP 1PL 二人 COP=SFP

「この後は俺たち二人だな。」

B: watta:=n jub-ar-i: s-a=gaja:

1PL=ADD 呼ぶ-PASS-INF する-PST=DUB

「俺たちも呼ばれたりするのかな。」

A: ?anu: kunu: s-a-ru teime: ?a-ru hadzi=ja:

あの方 このう する-PST-ADN 罪.TOP ある-ADN INFR=SFP

「はっきり言わなかった罪はあるだろうな...⁸⁷⁾

B: eikam-aj gutu sa:ranai ?ir-e: eimut-e:-ru-munnu

驚く-NEG よう さっさと 言う-CND 済む-RES-ADN-FN

「ビビらんでさっさと言えよかったものを。」(芝居, 978)

⁸⁷⁾ 直訳は「あの方このうした罪はあるはずな」であるが、意識した。

過去の事象であっても、話し手が直接確認していないことを、発話時の状況から想像したり、推測したりする場合、その《対象的な内容》は不確かであり、話し手の想像上の事象である。そのような事象も *hadzi* の文が差しだせる。

主語が二人称

124) [役人 A が殺人の容疑者である B を尋問する場面。特に根拠はない。狭い村なので、噂にでも聞いているはずだと確信して述べている]

A: *sassoku ja-eiga, ?ndz-a-ru hateig^watei-dzu:sannitei=nu juru, kamijamape:teij=ga kurus-att-an*
 早速 COP-ADVRS 行く-PST-ADN 八月十三日=GEN 夜 (人名)=NOM 殺す-PASS-PST
 「早速だが、去る八月十三日の夜、神山親雲上が^{へーちん}88殺された。」

B: ……

A: *?unu kuto: ?ja:=n teite-a-ru hadzi=ja:*
 その 事.TOP 2SG=ADD 聞く-PST-ADN INFR=SPF
 「その事はお前も聞いただろうな。」

B: *?uwasa: teite-abi:t-a-eiga*
 噂.TOP 聞く-POL-PST-NASS
 「噂は聞きましたが。」(芝居, 962)

主語が三人称

125) [ヤマーに追いかけて逃げてきた旅人をかくまう女チルーの台詞。旅人だからお金も無くご飯も食べられなかった、というのは直接確認によるものではなく、想像上の根拠である]

?e:, jama:. nu:ga ?ja:=ja de:kuni-g^wa: ti:tei tur-ari=dunee: ?ansuka de:dzi naim=i
 INTJ (人名) どうして 2SG=TOP 大根-DIM 一つ 取る-PASS=FOC そんなに 大変 なる-YNQ
 「おい、ヤマー。どうしてお前は大根一つ取られたぐらいでそんなに大事か？」

?anu ni:ee: jat-i=n tabi=nu ?wi:=ja ja:sa: nar-an
 あの 若者 COP-SEQ=ADD 旅=GEN 上=TOP 空腹.TOP なる-NEG
 「あの若者だって旅の途中ひもじくて仕方なく」

?ja: de:kuni tut-i kad-a-ru hadzi
 お前.GEN 大根.ACC とる-SEQ 食べる-PST-ADN INFR
 「お前の大根を取って食べたんだろう。」

nindzin=nu cinasaki=ndi ?i-ee:, ma:tei=nu pha:=ni=n teiteim-ari:n=tei
 人間=GEN 情=QT 言う-NLZ.TOP 松=GEN 葉=DAT=ADD 包む-PASS=QT
 「『人間の情と言うのは、松の葉にも包める』と」

?a-i=du su-ru. ?unu ?atai=nu nasake: tabininukai kakir-ar-an=i
 ある-INF=FOC する-ADN その 位=GEN 情.TOP 旅人.DAT かける-POT-NEG=YNQ
 「あるじゃないか⁸⁹。そのくらいの情は旅人にかけれられないの。」(芝居, 668)

「縁があるからこうだ」「運命だからこうだ」という類の発話は、《根拠》の無さの表れである。

⁸⁸ 琉球王朝時代の役人の階級名。「一村を領する。satunuei pe:tein (里之子親雲上) と teikudun pe:tein (筑登之親雲上) の二種があり、王子から数えて前者は四番目、後者は六番目に位する」(『沖縄語辞典』p. 442)。

⁸⁹ 原典の日本語訳には、「人間の情というものは、できないことさえやっつてのける」とあるが、ここでは「情けがあるなら大根一本あげるくらいなんでもないことじゃないか」という意味で述べている。

- 126) *kane-i* *ʔiteai-ci=n* *nu:gana=nu* *in=nu* *ʔat-i=du* *ja-ru* *hadzi*
 こうする-SEQ 会う-NLZ=ADD 何か=GEN 縁=NOM ある-SEQ=FOC COP-ADN INFR
 「こうして会ったのも何かの縁があつてのことだろう。」
do:rin *nasaki* *ʔat-i* *teu: iteija*, *ʔitta:=ni* *tum-arate-i* *k^wi-nso:r-aŋ=gaja:*
 どうか 情け ある-SEQ 今日 一夜 2PL=DAT 泊まる-CAUS-SEQ BEN-HON-NEG=YNQ3
 「どうか情けで今日一夜、お前の所に泊まらせて下さらんかね？」(芝居, 770)

次の「言い方が違っている」のような話し手個人の解釈による理由づけは《根拠》とは言えないだろう。*hadzi* はこうした話し手の漠然とした理由を基に推測する場合にも用いられる。

- 127) [食べる物がなくて仕方なく大根を盗んだ旅人に向かって次からは「盗む」のではなく「取る」ように A が忠告するが、仲間 B から「盗む」と「取る」は何が違うのかとツッコミを入れられる]
 A: *namakara: teu=nu* *muno: nusum-an* *gutu tu-i=du* *sun=do:*
 今=ABL.TOP 人=GEN 物.TOP 盗む-NEG ように 取る-INF=FOC する=SFP.ASS
 「これからは人の物は盗まないで取るんだぞ！」
 B: *nusumu-ci=n* *tui-ci=n* *inu muno: ʔar-an=i*
 盗む-NLZ=ADD 取る-NLZ=ADD 同じ 物.TOP COP-NEG=YNQ
 「盗むのも取るのも同じ事じゃないか。」
 A: *inu muno: ʔar-an hadzi=do:* *ʔi:kata=nu teigat-o:-ru-munnu*
 同じ 物.TOP COP-NEG INFR=SFP.ASS 言い方=NOM 違う-PROG-ADN-FN.CSL
 「同じ事ではないだろうよ。言い方が違っているんだもの。」(芝居, 670-672)

3.2.1.3.4 〈確信〉 Confidence/belief

この他に, Palmer (2001) や Chafe (2000) では, 《根拠》に無関心の〈確信〉(confidence/belief)の用例が挙げられているが, 次の用例でみるように, 「きっと」のような確信度の高さを示す副詞があらわれている用例が相当するのだろう。*hadzi* は *e:din* と共起して話し手の判断を確信度の高いものとして差し出すことができる。

- 128) [パソコンの調子が悪いと言って]
 A: *ja:utei:=nu ʔatu=kara* *pasokon=nu ʔambe:=nu wassan*
 引越し=GEN 後=ABL PC=GEN 調子=NOM 悪い
 「引越しの後から PC の調子が悪い。」
 B: *ʔure: ʔe:din hakubu-ru basu=ni ʔutute-a-kutu=du ja-ra hadzi=do:*
 それ.TOP きっと 運ぶ-ADN 時=DAT 落とす-PST-CSL=FOC COP-DUB INFR=SFP.ASS
 「それはきっと運ぶ時に落としたからだろうよ⁹⁰。」(全国, 1-6-6)
 129) [頑張っている姿を見てきているので, きっとそうであるはずと確信または推論している]
kungutu teibat-e:-ru-munnu, ʔe:din kundo: dikit-o:-ra hadzi
 こんなに 頑張る-RES-ADN-CSL きっと 今度.TOP できる-PROG-DUB INFR
 「こんなに頑張っているんだから, きっと今度はできていると思う。」(全国 2, 2-2-1-1)

hadzi はもともと日本語のハズに相当する形式である。上で挙げた用例にハズで日本語訳が可能なものもいくつか存在するが, 日本語のハズ相当形式が首里方言では〈推量〉を表しているため, 日本

⁹⁰ 実際の調査内容は, 「それは, 運ぶときに落としたからに違いないよ」。

語のようにスルダロウの文が表す〈推量〉とハズの文が表す〈みこみ〉のような区別がつきにくい。したがって、本論では〈みこみ〉の記述は行わないことにした⁹¹。

3.2.1.4 hadzi の文のまとめ

このように, hadzi の文は, 《根拠》の有無だけでなく, 直接確認による《根拠》か, パターン化された事象からの《根拠》なのかという《根拠》の種類も問わない。また, hadzi の文の《根拠》は, その情報獲得の方法(視覚・聴覚等)も問わない。

また, -ru hadzi の文と-ra hadzi の文の違いについて, 断言はできないが, 傾向として-ru hadzi はあらゆる場面で用いられていて, 制限が少ない。あるいは, 直接確認による《根拠》がないか, 〈推測 speculative〉の文のように《根拠》には無関心である場合にあらわれやすい。一方, -ra hadzi の用例では, 《対象的な内容》が直接確認できる事象か, 直接確認できる《根拠》が提示されている場合か, 話し手が確信している場合にあらわれやすい。

つまり, -ra hadzi のあらわれ方が意味的に限定されていて, -ru hadzi の用例の方が制限もなく使用数が圧倒的に多い。話者によっては-ru hadzi しかあらわれない場合もあるため, 時代の変化とともに, -ra hadzi の使用は廃れ, -ru hadzi が〈推量〉を表す専用形式になりつつあるかもしれない。

Arakaki (2016) は, 日本語のハズが「論理的な整合性を重視する」一方で, hadzi は「話者の確信度や情報の信頼性に関する判断を重視する傾向が見られた」と指摘していて(pp. 24-25), その指摘は, 首里方言の hadzi が deductive/assumptive/speculative のいずれも表せることと合致していて注目に値する。つまり, hadzi は《根拠》があろうがなかろうが, 話し手の判断中心の形式であり, 日本語のハズは《根拠》あるいは出来事と出来事の整合性を重視した形式なのだろう。

表 24 hadzi の文が表せるモダリティ一覧

(1) 《事実未確認(ポテンシャル)》	(2) 《事実確認(リアル)》
(a) 〈推量〉	(a) 〈予定不実現〉
〈推論〉	(b) 〈思い出し(記憶)〉
〈推定・仮定〉	(c) 〈さとり〉
〈推測・憶測〉	(d) 〈断定回避〉
〈確信〉	
(b) 〈反事実仮想〉	

3.2.2 断定形の文

断定形を述語に含む文でも, 文の《対象的な内容》が未来の事象の場合, 直接確認できない事象のため, 〈話し手の確信的断定〉という推量を表す(工藤 2014, pp. 113-120)。

⁹¹ 〈みこみ〉とは, 話し手の論理的・確信的な〈当然としての出来事の判断〉のことを指す(奥田, 1993)。「この種の文は, 論理の道すじをおえば, 当然のこととして, あるいはかならず生じてくる出来事を判断のなかにくみかたてているのである。それがリアルに存在しているか, それともリアルな存在へ移行するか, ということは, 判断する人にとって確信的であるとしても, まだ確認されておらず, そうなるのが当然であることを, 文は主張するにとどまる」(奥田, 1993, p. 180)。

130) [徘徊中の男 A と商売人の女 B の会話。男が女に物を売ると言ったが女が買わないので]

A: ?itta:=ja nu:ŋk^{wi}:n=di ?j-agatei:, nu:ŋk^{wi}:no: ?ar-an-mun=na:
 2PL=TOP 何もかも=QT 言う-SIM 何もかも.TOP COP-NEG-FN=YNQ2

「お前たちは何もかも(買う)と言いながら、何もかもではないのか。」

B: watta:=ga ?ut-ai ko:t-ai su-œ:, nu:ŋk^{wi}:n ja-ibi:-eiga ?undzuna:=ga
 1PL=NOM 売る-PST-INF 買う-PST-INF する-NLZ.TOP 何もかも COP-POL-ADVRS 2PL.HON=NOM

「私達が売ったり買ったりするのは、何もかもですが貴方達が売ると」

?uin=di ?i-ei nu:ŋk^{wi}:n ko:-ine: ?ateine:=ja to:rij-abi:n

売る=QT 言う-NLZ 何もかも 買う-CND 商売=TOP 倒れる-POL

「言う物を何もかも買ったら商売は倒れます。」(実践, 39)

131) [妻 A と夫 B の会話]

A: wanne: ?undzu=ga mama=du ja-ibi:n=do:
 1SG.TOP 2SG.HON=GEN まま=FOC COP-POL=SFP

「私は貴方に従順ですよ。」

B: ?an ?i:-gatei: kuei tunke:t-i eiba ne:t-o:n

そう 言う-SIM 後ろ 振り返る-SEQ 舌 だす-PROG

「そう言いながら後ろを振り返って舌を出している。」

(中略)

A: ta:ri:=tai. ?unujo:na kuto: wanne: s-abir-an=do:=tai

父=POL.F そのような 事.TOP 1SG.TOP する-POL-NEG=SFP=POL.F

「お父さん。そのような事は私はしませんよ。」(実践, 29)

ただし、ここでも断定形でいきる例は少ない。《はなしあい》の場面では、終助辞の使用がほとんど必須である。

3.2.2.1 終助辞 do:の文

このような〈確信的断定=推量〉の文を聞き手に伝える場合も do:が用いられる。しかし、この do:は〈推量〉を表すというよりも hadzi=do:の文と同様に、do:を添えることで、《聞き手めあて》および《主張の強さ》といった意味あいを付け加えながら文を伝える。一人称文ではあらわれにくい。なぜなら、話し手自身のことについて〈推量〉することが少ないからであろう。

主語が二人称

主語が二人称文の場合は、二人称という人称性からしばしば何らかの《働きかけ》が生じる。そして、do:を添えることで、《聞き手めあて》および《主張の強さ》が前面化し、《働きかけ》のニュアンスも強まる。また、事象の実現は、聞き手にとって利益あるいは不利益をもたらす。聞き手がその利益を得られるよう(あるいは不利益を被らないよう)働きかける。

132) ?uma=ndzi ?wi:dz-i:ne: de:dzi nain=do:

ここ=LOC 泳ぐ-CND 大変な事 なる=SFP.ASS

「ここで泳いだら大変な事になるぞ。」(語遊「デージナトーン」2010/8/8, p. 21)

133) [風邪をひいている患者に向かって医者が]

kusui ʔusagar-e: eigu maei na-ibi:n=do:
薬ACC 飲む.HON-CND すぐ 良く なる-POL=SFP.ASS

「薬をお飲みになったらすぐ良くなりますよ。」(入門, 66)

134) [首里には行かないとダダをこねる孫に対して祖母が]

sui=ŋkai ʔite-i:ne: ʔja:=ga=ru raku=n sun=do:. ʔane mai=nu ʔubunun
首里=DAT 行く-CND 2SG=NOM=FOC 楽=ADD する=SFP.ASS INTJ 米=GEN ご飯.ADD

「首里に行けばお前が楽もするんだよ。ほら、白いご飯も」

teuɸa:ra kar-i teurasa-ru ʔico:=n ʔuteikasabi kasabi ʔja:=ga=ru tei:n=do:
腹一杯 食べる-SEQ きれい-ADN 衣装=ADD 打重ね 重ね 2SG=NOM=FOC 着る=SFP.ASS

「腹一杯食べて、きれいな衣装もたくさん重ねてお前が着るんだよ。」

ja-gutu ta:ri:=tu madzun sui=kai ʔik-e:=ja:

COP-CSL 父.CH=COM 一緒に 首里=ALL 行く-IMP2=SFP

「だから、父上と一緒に首里に行きなさいね。」(芝居, 590)

上記用例のようなパターン化された事象から別の具体的な事象を推し量ったことを断定形を用いて述べる場合、話し手の経験から何度も〈確認〉された事象であるため、話し手の〈つよい確信的な断定〉を表す。

主語が三人称

主語が三人称文の場合は、話し手と聞き手以外の第三者のことに関する〈話し手の確信的断定〉を伝える。第三者に関する事象を述べると言っても、話し手と聞き手にも関わる内容が伝えられる。ここでも、何らかの利益・不利益について述べているが、直接的な働きかけではなく、間接的に利益・不利益が聞き手または話し手にも及ぶかもしれないというニュアンスを含意する。不利益をもたらす内容なら、事象の実現に対する心配・危惧のようなものが述べられる。

135) [まだ知られていない琉球国王の逸話を本に書くという話から]

dekici=ndi ʔi-ce: eo:dzikini kaki-wa=ru=ja:. ʔatu=nu ju:=madi ʔure: (中略) nukuin=do:⁹²
歴史=QT 言う-NLZ.TOP 正直に 書く-CND=FOC=SFP 後=GEN 時代=LIM これ.TOP 残る=SFP.ASS

「歴史というのは正直に書かないとね。後の時代までこれ(本)は残るよ。」(方談, 352)

136) [村中の女をうばっていく侍の男をとちめてやるという話をきいて]

mat-i. kunu samure: takkurusu=saja:. ʔitta:=dake: ʔar-an, muradzū:=nu tteu de:dzi najun=do:
待つ-IMP この 侍 とちめる=SFP 2PL=だけ.TOP COP-NEG 村中=GEN 人 大事 なる=SFP.ASS

「待て。この侍とちめるよな。お前たちだけじゃない、村中の人が大変な事になるぞ。」(芝居, 566)

137) [素行の悪い夫に対して怒り狂う伯父にたじろぐ義母 A と妻 B]

A: to: kunu tteu=nu mimi=ŋkai ʔitte-a-ru ʔidzo:=ja tada: eim-an=do:
INTJ この 人=GEN 耳=DAT 入る-PST-ADN 以上=TOP ただ.TOP 済む-NEG=SFP.ASS

「もうこの人の耳に入った以上は(息子は)ただでは済まないよ。」

B: ʔaja:=tai, tea: nat-i ʔite-abi:=gaja:

母.CH=POL.F どう なる-SEQ 行く-POL=DUB

「お母さん、どうなって行きますのやら。」(芝居, 556)

⁹² 文中のフィラー表現等を省略して転載した。

3.2.2.2 終助辞 sa の文

終助辞 sa の文は、〈話し手の確信的断定〉の文を《主張の強さ》も加味しながら述べる。その時、話し手の感情・認識の変化が文に添えられる。《聞き手めあて》がなく、ただ感情をもらすような文なため、《働きかけ》が弱い。主語が二人称なら聞き手に関する話し手の判断を述べ、主語が三人称なら第三者に関する話し手の判断をひたすら述べる（一人称文は意志文になりやすい。意志文を参照）。

主語が二人称

138) [引退相撲だから華を持たせるためにわざと負ける約束をしたが、実際に組んだら本気になってしまって負ける気がしなくなったと言う B。約束が違うと責め立てる A]

A: nu:=ga ?an jar-a: jakusuko: s-an ?uteu-tan=te:ja:

何=WHQ そう COP-CND 約束.TOP する-NEG.SEQ 置く-PST2=SFP

「何だと。それなら約束はしないで置いたのに。」

B: jakusuku e-i=n s-ant-i=n, nama=kara: na:=ga wan=ninjkai=ja cima: kan-a:n=sa

約束 する-SEQ=ADD する-NEG-SEQ=ADD 今=ABL.TOP 2SG.HON=NOM 1SG=DAT=TOP 相撲.TOP 敵う-NEG=SFP

「約束してもしなくても、今からは貴方が私には相撲はかなわないよ。」(芝居, 1004-1006)

139) [動悸を訴える受験者 A と試験官 B の会話。いつから動悸しているのか尋ねる B]

A: ?undzu=ga ?itte-i mence:-ci=tu madzo:η=kara

2SG.HON=NOM 入る-SEQ 来る.HON-NLZ=COM 同時=ABL

「貴方が入っていらしてからすぐに。」

B: ?anee:eiken=nu ?uwat-i, waη=ga kuma=kara ?ndzit-i ?ik-e: no:i=sa

CNJ 試験=NOM 終わる-SEQ 1SG=NOM ここ=ABL 出る-SEQ 行く-CND 治る=SFP

「それじゃあ、試験が終わって、俺がここから出て行けば治るさ。」

A: ja-ibi:=gaja:

COP-POL=DUB

「そうですかねえ。」(実践, 46)

主語が三人称

140) [急に王城に向かうよう言われた息子がなかなか帰ってこないの、家族があれこれ思案する]

A: mateige: ne:ran ?ugueiku=nu ?uteitumi e-imirasun=di ?ite-i ja=sa

間違い ない お城=GEN お勤め する-CAUS=QT 言う-SEQ COP=SFP

「間違いない。お城のお勤めさせようと言うのだよ。」

B: jattci:=ja budzi:gakumun=nu ?a-miee:-kutu, (中略) i: hanaci=ga ja-ra wakaj-abir-aη=ja:

兄.CH=TOP 武芸学問=NOM ある-HON-CSL 良い 話=FOC COP-DUB わかる-POL-NEG=SFP

「兄さんは武芸・学問がありますから、良い話かもわかりませんね。」(芝居, 832)

141) [B の証言が犯人逮捕に貢献。上部から褒美をもらえると聞いた B と妻 A]

A: date:n φu:bi ?utabimice:n=li

たくさん 褒美.ACC BEN.HON=QT

「たくさん褒美をくださるって。」

B: tca:ga ?uφe: tuidukuru=nu ?a-ra=ja:

いくらか 少し.TOP 取り分=NOM ある-DUB=SFP

「いくらか少しは取り分があるだろうねえ。」

A: ?uφi dukuru jam=i. murū tuidukuru ja=sa

少し どころ COP-YNQ 全部 取り分 COP=SFP

「少しどころか！全部取り分よ。」(芝居, 982)

次の用例のように、確実にこれから起こる未来の事象も表せる。このような文では、何の妨げもなく、順調に事が進めば、自ずと実現する未来の事象が述べられる。この場合、むしろ推量形が用いられにくくなり、断定形が用いられる。確実に実現するという場面状況と話し手の確信的な態度が述語の形式にもあらわれる。

142) [そろそろ順番が回って来る頃になって]

ʔunu ʔato: watta: tai ja=sa

この 後.TOP IPL 二人 COP=SFP

「この後は俺たち二人だな。」(芝居, 978) (用例 123 と重複)

3.2.2.3 終助辞 de:の文

終助辞 de:の文は、〈話し手の確信的断定〉の文を強く主張しないで控えめに、あるいは《主張の強さ》はニュートラルに述べ伝える。主語が三人称の ja:が後接した用例しかみつからなかった。第三者のことに推し量ったことを控えめに聞き手に伝える。ja:の文は聞き手に寄り添うような伝え方となる。結果、聞き手へ同意を求めたり、念押ししたりする意味あいをさらに付け加える。

主語が三人称

143) A: nu: jan. ma:ca:ci:=ga ke:t-i te-o:n=di=na:. ʔure: ʔitei ja=ga

何 COP (人名)=NOM 帰る-SEQ 来る-PROG=QT=YNQ2 それ.TOP いつ COP=WHQ

「何だって?! マチャー兄さんが帰って来ているですって?! それはいつなの?」

B: ʔure: wa:=ga=du ʔja:=ŋkai teite-o:-e: s-an=i. ma:ca:=ja n[-an-ti:

それ.TOP 1SG=NOM=FOC 2SG=DAT 聞く-PROG-INF.TOP する-NEG=YNQ (人名)=TOP 見る-NEG-PST.YNQ

「それは俺がお前に聞いているんじゃないか。マチャーは見なかったか?」

A: wanne: ma:ca:ci:=ga ke:t-i te-an=di ʔumut-a=sa. tteu ʔussa eimit-i

1SG.TOP (人名)=NOM 帰る-SEQ 来る-PST=QT 思う-PST=SFP 人.ACC 嬉しさ CAUS-SEQ

「私はマチャー兄さんが帰って来たんだと思ったよ。人を喜ばせて。」

C: ʔa:ci:, kunu inagu=nu eir-an-de: ma:da ma:ca:=ja ke:t-i te-e: uran=de:=na:

兄 この 女=NOM 知る-NEG-CND まだ (人名)=TOP 帰る-SEQ 来る-SEQ.TOP いない=SFP=POL

「兄さん、この女が知らないならまだマチャーは帰って来ていないんですよ。」(芝居 2, 1432)

144) A: teu:=nu kuto: ta:=ni=n ʔj-an-k-a=na

今日=GEN 事.TOP 誰=DAT=ADD 言う-NEG.SEQ-おく-HORT=SFP

「今日の事は誰にも言わないでおこうな。」

B: munu jum-i:ne: ma:ca:=ni s-ari:n=do:

もの よむ-CND (人名)=DAT する-PASS=SFP

「何か言ったらマチャーに殺されるぞ。」

A: ʔari=ga: sun=de:ja:

3SG=NOM.TOP する=SFP

「あいつならやりかねんな。」(芝居, 930-932)

145) [ぬれぎぬを着せられて死んでいったカマダーの父の容疑が晴れて]

kamada:-ta: su:=n namajibuno: guso:=uto:ti jurukur-o:n=de:ja:

(人名)-PL 父=ADD 今頃.TOP あの世=LOC 喜ぶ-PROG=SFP

「カマダーたち父ちゃんも今頃はあの世で喜んでいるだろうな。」(芝居, 982)

3.2.2.4 終助辞 te:の文

〈現在・未来の事象の推量〉

終助辞 te:は、文を客観的あるいは説明的に聞き手に述べ伝えるという特徴がある。したがって、《対象的な内容》が事実未確認の事象を差しだす述語が断定形の文に te:が用いられるときは、〈推量―話し手の確信的断定〉という意味あいを客観的あるいは説明的に述べ伝える。しばしば、強く主張しない、聞き手と一定の距離を置くようなニュアンスを伴う。

その《対象的な内容》は、話し手と聞き手との間に共有されていない情報で、現在あるいは未来の事象を伝える。現在の事象や発話状況から現在の事象を判断することもあるし、未来の事象を判断することもある。現在の事象を判断する場合は、述語に sun 形式(完成・非過去), so:n 形式(動作継続・非過去), ee:n 形式(結果継続・非過去)が用いられ、未来の事象を判断する場合は、sun 形式(完成・非過去)のみが用いられる。独り言での使用は原則不可である。

調査協力者によれば、te:が用いられると、物事をストレートに述べるというよりは「横滑りする(伝え方)」と表現していて(調査協力者、面接調査、2015年11月2日&9日)、《聞き手めあて》はない。《主張の強さ》も特に明示しない。

te:の文は人称によってモダリティが変化しやすく、〈話し手の確信的断定〉という文のモダリティがはっきりするのは三人称を主語にした文なので、はじめに主語が三人称の文から述べる。

主語が三人称

三人称を主語にした〈話し手の確信的断定〉を表す te:の文は、《対象的な内容》が聞き手に共有されていない第三者に対する話し手の〈推量〉、つまり話し手が直接確認できない事象への〈判断〉を差しだしている。《聞き手めあて》はない。

第三者の未来の事象を判断する

次の用例では、《対象的な内容》が話し手の〈推量〉、あるいは直接確認できない未来の自然現象の実現に対する〈判断〉を表している。話し手は、現在確認できる自然現象から未来の起こりうる自然現象について〈判断〉している。

146) ?attani kuradzo:rit-o:-eiga ?ami=ru jan=te:

急に 暗くなる-PROG-ADVRS 雨=FOC COP=SFP

「急に暗くなっているが雨だよ。」(音声「クラジョーリユン」)

この現在の発話状況から推し量った、未来の起こりうる自然現象についての判断は、繰り返すが、終助辞 te:そのものが表しているわけではなく、《対象的な内容》がすでにそれを述べている。そして、話し手はその判断をつよくは主張せず、客観的なものとして聞き手に対して述べ伝える。これを伝えることによって、話し手は聞き手に何かを執行してほしいとは思っていない。ただ一方的に判断を述べているだけである。

次の用例でも、《対象的な内容》が話し手の推量あるいは直接確認できない未来の事象への判断(今日は良い事がある)を表している。ここでも、話し手は現在確認できる事象から未来の事象について判断している。また未来の事象が聞き手に《利益》をもたらす内容である場合、話し手の〈願い〉といった意味あいを付け加える。

147) $\widehat{t\acute{e}i}ni\phi i:\widehat{d\acute{z}i}:=ja\ ni:buika:bui\ s-o:-ru$ $\widehat{t\acute{t}\acute{e}u}=\nu\ \text{?asa}uki\ s-o:t-a-kutu,$ $\widehat{t\acute{e}u}:=ja\ ji:kutu=\nu\ \text{?ante}:$
 日頃=TOP 眠たそうに する-PROG-ADN 人=NOM 早起き する-PROG-PST-CSL 今日=TOP 良い事=NOM ある=SFP
 「日頃は眠たそうにしている人が早起きしているから、今日は良いことがあるよ。」(音声「アサウキ」)

第三者の現在の事象を判断する

次の用例は、第三者の現在の内的な状態(腎臓病にかかっていること)について、話し手が直接確認できる現在の事象(手足とお腹が腫れていること)から推し量っている(あるいは判断している)。話し手が直接確認できる事象には終助辞saが用いられ、その後の間接確認の事象にte:が用いられて、その対比が直接確認からの間接確認という談話構造をよく示している。この用例でも、話し手は文脈から判断したことを説明的・論理的に伝えていて、聞き手への《働きかけ》に関してはニュートラルである。用例35)を再掲する。

35) $\widehat{t\acute{e}i}mugurugi:na:\ ti:\phi isa\ wata=n\ \phi ukk^{wit-o}:=sa.^{93}$ $ei:su\ \underline{kakat-o:n=te}:$
 かわいそうに 手足 お腹=ADD 腫れる-PROG=SFP 腎臓病 かかる-PROG=SFP
 「かわいそうに手足お腹も腫れているよ。腎臓病にかかっているんだよ。」(音声「シース」)

主語が二人称

主語が二人称のte:の文も、聞き手に対する話し手の推量、あるいは話し手が直接確認できない聞き手に対する判断を述べる文であらわれていた。《聞き手めあて》はないか、あっても強くはない。したがって、do:の文のような《働きかけ》は生じない。

聞き手の現在の事象を判断する

例えば、次の主語が二人称の例では、《対象的な内容》である「(聞き手が)お疲れでいらっしゃる」は、聞き手の内的な状態であるため、話し手が直接確認できないことである。発話時の状況から導きだされた話し手の〈推量〉あるいは直接確認できない判断を表している。聞き手が話し手より社会的上位の立場にあるため、敬語表現を用いていて、さらに te:を添えることで、つよく主張せず、控えめな態度で述べ伝える。

148) A: $sari,$ $\widehat{gud\acute{z}e:bannume}:\widehat{t\acute{e}u}:=ja\ muramigui:=ja\ \text{?ussa}$ $\epsilon\text{-imiso}:\widehat{t\acute{e}}\text{-i}$
 INTJ.M 御在番様 今日=TOP 村巡り=TOP このくらいに する-HON-SEQ

「えー、御在番様。今日は村巡りはこのくらいになさって」

$kuri=kara\ muraja:=nai\ \text{?utumu}\ s\text{-abir-a}$

これ=ABL ムラヤー=ALL お供 する-POL-INT

「これからムラヤー⁹⁴までお供します。」

B: $\widehat{t\acute{e}u}:=ja\ \text{?asa}=\text{kara}=\nu\ muramigui\ \widehat{t\acute{e}i}karit\text{-a-ra}:=ja:$

今日=TOP 朝=ABL=GEN 村巡り 疲れる-PST-DUB=YNQ3

「今日は朝からの村巡り疲れただろう?」

A: $watta:=jaka\ \widehat{gud\acute{z}e:bannume}:=\nu=\nu\ \text{?uteikari}\ ja\text{-mice:n}=\text{te}:$

1PL=CMPR 御在番様=NOM=FOC お疲れ COP-HON=SFP

「わたしたちより御在番様のほうがお疲れでいらっしゃるでしょうよ。」(芝居, 540)

⁹³ 原文は $\phi ukk^{witito}:sa$ だが、筆者が修正した。

⁹⁴ かつて各村落に存在した役場のような役割をはたした家。ムラの事務を執り行った所 (『沖縄語辞典』p. 394)。

次の用例では、聞き手がずぶ濡れになっていることは話し手にとって明らかである。直接確認したこと(聞き手がずぶ濡れになっている状態の目撃や停留所から歩いて来たことのヒアリング)から聞き手の現在の状態になった理由を推し量っている。

149) kasa=n mut-an ?ami=nu na:ka ndit-i ?atte-an=na:
傘=ADD 持つ-NEG.SEQ 雨=GEN 中 濡れる-SEQ 歩く-PST=YNQ2

「傘も持たないで雨の中濡れて歩いたの？」

te:r'u:dz̄o=kara=ndi ?i:-ne:, eipu:tu nat-o:n=te:

停留所=ABL=QT 言う-CND ずぶ濡れ なる-PROG=SFP

「停留所からだ、ずぶ濡れだろうねえ(ずぶ濡れにちがいないねえ)。」(話遊「ンディユン」2010/7/25, p. 13)

次の用例では、初めの文で聞き手の行動に対する話し手の未確認の判断が否定質問のかたちで差しだされている。その判断について聞き手が否定したため、次の発話で、「いや、そうだと思う」という話し手の発話状況をもとにした判断を te: の文で差しだしている。「いや、そうだ」いう判断は、発話時点においていまだ未確認のことである。

150) A: t̄eurasugaice-i ?ama=kai=du jae:san=i

おしやれする-SEQ あそこ=ALL=FOC じゃない=YNQ

「おしやれてあそこにじゃないか？」

B: ?ar-an. ?ama=kae: ?ar-an=do:

COP-NEG あそこ=ALL.TOP COP-NEG=SFP.ASS

「いや。あそこにはないぞ。」

A: jan=te:. ?ja: t̄eira=ŋkai kak-att-o:=ce:

COP=SFP 2SG.GEN 顔=DAT 書く-PASS-PROG=SFP

「いや、そうだろう。お前の顔に書いてあるぞ。」

B: jukuei ja=sa. wanne: nama: ?ama=kae: ?ik-an=do:ja:

嘘 COP=SFP 1SG.TOP 今.TOP あそこ=ALL.TOP 行く-NEG=SFP

「嘘だね。私は今はあそこへは行かないぞ。」(実践, 33)

次の二例では、発話状況から判断した聞き手に対する話し手のネガティブな評価のようなものが te: の文で差しだされている。これらのネガティブな評価は直接確認した事実的な内容ではなく、発話状況を基にした話し手の判断や意見である。次の te: の文では、側に立っているのに手伝おうとしない男 B に対して、「起きていながら寝ている」という皮肉を込めた比喩的・批判的な判断を述べている。

151) A: ?untt̄e-u-ta:=ja mi:=ja φurate-o:t-i nint-i=ru mence:-e:sabiran=i

この人-PL=TOP 目=TOP 開ける-PROG-SEQ 寝る-SEQ=FOC いる.HON-のではありません=YNQ

「この人たちは目を開けながら寝ていらっしやるんじゃないですか？」

B: ?e:, inagu. nu:=ndi=ga. ?ukit-o:n=do:

INTJ 女 何=QT=WHQ 起きる-PROG=SFP

「おい、女。何だと？起きてるぞ。」

A: ?ukit-o:t-i hana φute-o:-mice:n=te:

起きる-PROG-SEQ 鼻 ふく-PROG-HON=SFP

「起きていながらいびきをかいていらっしやるのね。」(実践, 37)

次の用例での「色気に魅かれて目がくらんでいる」という聞き手に対する判断は、話し手が直接確認した事実的な事象ではなく、発話状況から思いついた話し手のただの憶測である。本当にそのように思っているのではなく、聞き手を非難する皮肉を込めた比喩表現としての話し手の判断が述べられている。ee:n形式が用いられているのは、ee:n形式が〈結果継続〉も表せるからである。

152) [運転免許試験場にて、女に甘い試験官 B に後回しにされているとクレームをつける男 A]

A: wanne: ʔakateiʔeiukiee-i ʔe-o:-ibi:-eiga, kunu inagu=nu eijo:mujo:=ŋkai
 1SG.TOP 早起きする-SEQ 来る-PROG-POL-ADVRS この 女=GEN あれこれ=DAT

「私は早起きして来ていますが、この女のあれこれに」

babak^wa:s-att-i, ʔatu nat-o:-ibi:n=do:

ごまかす-PASS-SEQ 後 なる-PROG-POL=SFP.ASS

「ごまかされて、(順番が)後になってますよ。」

B: eijo:mujo:=ŋkai babak^wa:s-ari:-ei=ga=du wassa-ru. ʔiru=ni ʔik-as-att-i

あれこれ=DAT ごまかす-PASS-NLZ=NOM=FOC 悪い-ADN 色=DAT ひく-CAUS-PASS-SEQ

「あれこれにごまかされる方が悪い。色気に魅かれて」

kukutuming^wa:⁹⁵e-e:n=te:, ʔja:=ja

目がくらむこと する-RES=SFP 2SG=TOP

「目がくらんでいるんだろ、お前は。」(実践, 48)

聞き手の未来の事象を判断する

次は芝居の用例である。ここでも、対象的な内容が話し手の直接確認できない未来の事象に対する判断を述べている。しかし、この用例では、現在確認できる具体的な事象から未来の事象を判断しているのではない。「～ならば、～だ」のように、ある条件が満たされれば、事象が成立するというような判断が述べられている。ここでも、事象は話し手に利益をもたらす内容のため、話し手の〈願い〉という意味合いが付け加わっている⁹⁶。

153) A: jattʔei:=ga ʔugueiku=nu ʔutʔitumi=nu na-mice:i-ne:, kuri=kara:

兄=NOM お城=GEN 勤め=NOM POT-HON-CND これ=ABL.TOP

「兄さんがお城の勤めができれば、これからは」

tʔe=nu ʔa-ru-gutu su-ru-gutu kurate-i ʔiteu-ru kutu=n na-ibi:n=te:

人=NOM ある-ADN-ように する-ADN-ように 暮らす-SEQ 行く-ADN 事=ADD POT-POL=SFP

「人並みに⁹⁷暮らして行くこともできますよ。」

B: ʔuridake: ʔar-an. ʔja:=tu masan[ʔu:=tu=nu ni:biʔei=n he:ku najun=te: ja:=sai, ʔaja:

それだけ.TOP COP-NEG 2SG=COM (人名)=COM=GEN 結婚=ADD 早く なる=SFP INTJ=POL.M 母

「それだけではない。お前と真三郎との結婚も早くなるよ。ねえ、母さん。」(芝居, 832)

次も聞き手の未来のことについての話し手の〈判断〉をただ客観的に述べているだけである。do:の文のような明らかな《聞き手めあて》あるいは《働きかけ》はない。

⁹⁵ kukutuming^wa:とは、めまいすること、目がくらむことの意。

⁹⁶ 厳密には、初めの te:の文は、一・二人称、二つ目は、三人称の文だが、聞き手に起こりうる出来事であるため、論じるには差し支えがないと判断し、こちらに含めた。

⁹⁷ 「人並みに」は意識。直訳は「人が あるように するように」

154) ?ari=tu ?o:in=di: i:. de:d̄zi ja=ssa:. eigu kurus-ari:n=te:

3SG=COM 喧嘩する=QT EQ 大変な事 COP=SFP.MON すぐ 殴り飛ばす-PASS=SFP

「あいつと喧嘩するって？やばいなあ。すぐ張り倒されるよ。」(語遊「デージナトーン」2010/8/8, p. 21)

te:の文のまとめ

終助辞 te:は、叙述文にあらわれて、話し手が聞き手との関係の中で、直接確認できる事象や発話状況等を基にして、その文を説明的あるいは論理的に述べる場合に用いられる。また、te:の文の《対象的な内容》は、聞き手に共有されていない情報で、独り言では用いられない点で do:, sa, de:の文と共通している。しかし、te:の文は、《記述》の文を差しだすことができない点で、これらみっつの終助辞の文と大きく異なる。te:の文の《対象的な内容》の多くは、話し手がいまだ確認していない発話時における《推量》を差しだすが、一部に事実確認している例があり、そのような場合でも、文を説明的・論理的に述べるという働きを一貫して担っていた。te:の文の《推量》以外のモダリティについてはそれぞれの項を参照されたい。

表 25 te:の do:, sa, de:との比較

	do:	sa	de:	te:
文のタイプ	叙述文	叙述文	叙述文	叙述文
共有情報	×	×	×	×
独りごと	×	×	×	×
聞き手めあて	○	×	△(弱)	×
主張の強さ	強い	強い	控えめ	控えめ
《記述》	○	○	○	×

表 26 te:が用いられる文の一覧

(1) 《ポテンシャル》	(2) 《リアル》
(a) 《推量》	(a) 《当然のこととして答える》
(b) 《反事実仮想》	(b) 《説明》
(c) 《成り行きの意志》	

3.2.3 ee:n 推定文

述語の ee:n 形式は、《客体結果・非過去》を表す形式である⁹⁸。《意外(驚き)》のような《推定》を表さない例もあるが、しばしば、動作主体の《推定》を含んだ《客体結果》や《痕跡⁹⁹》に基づく過去の動作の《推定(間接確認)》を表す。《痕跡》の場合は、過去に実現された事象の《痕跡》が発話時まで続いている状態を話し手が直接知覚することで、間接的に動作主体や過去の動作の《推定》を表す。他に、《伝聞》による《推定》や発話時の状況からの《推定》等、判断の《理由(根拠)》あるいは

⁹⁸ 述語に ?aki:n(開ける)や tei:n(切る)等の主体動作客体変化動詞が用いられて、《客体結果・現在(動作主体の推定)》《形跡に基づく過去の動作の推定(間接確認)》《伝聞による間接確認》《意外性(動作自体の直接確認)》を表す(工藤他, 2007, pp. 168-169)。

⁹⁹ 工藤他(2007)では《形跡》という用語が用いられている。工藤(2014)では《形跡》も用いられるが、主に《痕跡》という用語が用いられているため、それに従った。また、かりまた(2004a)も《痕跡》を用いている。

情報獲得のし方はさまざまである。

尚、〈推定〉という用語は、《客体結果＝痕跡》を基にする推量文に特化した名づけであり、工藤(2014)に従ったものである。本論では、*ee:n* 形式を伴う文が〈推量〉を表す場合に限って、〈推定〉という用語を使用する。また、《理由(根拠)》としたのは、*hadzi* の文で述べたように、話し手の非常に「主観的な根拠」を基に推し量る〈推測・憶測 *speculative*〉の場合は、Palmer の規定では《根拠》とは言えないため、*ee:n* を伴う推量文の分析の際は、判断の材料となる《根拠》や《理由》をまとめて《理由(根拠)》と表現する。

さて、例えば、次の用例のように、話し手が動作主体の動作を直接見たわけではないが、事象の《痕跡》を見ることで、動作主体を〈推定〉しているような場合がそうである。このようなとき、述語が *ee:n* 形式(客体結果・非過去)をとっている。

155) [太郎の姿は見えないが、雨戸が大きく開いているのを見て太郎が開けたことを推定]

taru:=ga haeciru ?akit-e:n

太郎=NOM 雨戸.ACC 開ける-RES.INFR

「太郎が雨戸を開けてアル¹⁰⁰(開けたんだ)。」(工藤, 2007, p. 168)

《対象的な内容》が直接確認していない結果的な出来事を含む場合に限り、《客体結果・非過去》の形式が、文の中で《痕跡》や《出来事の結果》を述べながら〈推定(推量)〉を表すのは、首里方言の大きな特徴である。また、終助辞が用いられない上記のような用例は、《はなしあい》の場面では、聞き手配慮に無関心な味気のない文となってしまう。このような《客体結果》や《痕跡》を基にする推量文を聞き手に伝えるときは、終助辞 *te:* が共起しやすく、実際の用例も *te:* を伴ったものが多い。〈推定〉という話し手の判断の《理由(根拠)》を述べること自体が説明的なので、論理的あるいは説明的に文を述べるときに用いられる *te:* と共起しやすいのだろう(つまり、〈説明〉の文にも *te:* が用いられやすい)。したがって、以下では主に *te:* を伴った〈推定〉の文について述べる。

3.2.3.1 終助辞 *te:* の文

主語が三人称

主語が三人称で、述語に *ee:n* 形式を伴う〈推定〉の文は、現在確認できる事象(痕跡等)から、過去の第三者の事象(動作主体や過去の動作)を判断している。事象は過去のことだが、直接確認していない想像上の判断を述べるため *san* 形式(単純過去)は用いられない。*te:* を用いることで、論理的あるいは説明的にその文を聞き手に述べ伝える。

第三者の過去の事象を判断する

次の用例では、A は目の前に作られた夕飯(痕跡)があるのをみて、ヨーコが作ったことを〈推定〉している。A はヨーコが夕飯を作ったのを直接見てはいない。この場合、ヨーコがいつも夕飯を作ってくれるという背景・文脈が必要である。ただし、先述の通り、〈推定〉という意味あいを表すのに *te:* は必須ではない。〈推定〉の文を論理的あるいは説明的に聞き手に伝える場合に用いられる。《聞き手めあて》はない。

¹⁰⁰ カタカナ表記は直訳であり、擬似日本語である。日本語ではこういう言い方はできない。筆者が原文の日本語訳を若干修正して転載した。

156) A: jo:ko=ga ju:ban nife-e:n=te:

(人名)=NOM 夕飯.ACC 煮る-RES=SFP

「ヨーコが夕飯を煮ているよ(/煮たんだよ)。」

B: makutu=i

まこと=YNQ

「本当？」(Arakaki, 2013, 72)

次の用例では、発話状況を基に話し手が〈推定〉したことを、論理的・説明的に述べている文で te: が用いられている。その〈推定〉は話し手が直接確認していない過去の事象の判断なので、ここでも ce:n 形式が用いられている。

157) [昔、豆腐を食べてお腹を壊したという B に対して、原因は豆腐ではなく、フカを食べたからじゃないかと疑う A]

A: to:φu kad-i φi:n=tei=n ?a=gaja: ju:saine: ju:binukk^wa:ʔuja:=ga ?atte-e:n=te:

豆腐.ACC 食べる-SEQ 下す=QT=ADD ある=DUB ひよとして フカ売り=NOM 歩く-RES=SFP

「豆腐を食べて下すつてあるかなあ？ひよとしてフカ売り¹⁰¹が歩いていたんじゃないのか。」

B: to:φu kamu-ei=to: madzo:n eigu ha:e: jat-a=sa

豆腐.ACC 食べる-NLZ=COM.TOP 同時 すぐ 走る事 COP-PST=SFP

「豆腐を食べると同時にすぐ(トイレに)走ったよ。」(実践, 33) (用例 77 と同文)

158) [話し手が昔、地方の古老から聞いた尚影王が実際はどう亡くなったかという話。海の上で薩摩の役人に取り囲まれた尚影王だが、自害しようと石を着物の裾に入れて海に飛び込んだため沈んでしまったので、一緒にいた琉球の役人が驚いて、すぐさま遣いの者にすくいあげて来いと言う。話し手は聞いた話なので、遣いがどのような人間かは知らないが、状況から察するにそうだったのだろうという話し手の判断を述べている]

ʔja:, sukuiagit-i k-u:=ndi ?ife-a-kutu=jo:, na: ?ukad-e: k-u:n=ee:

2SG すくいあげる-SEQ 来る-IMP=QT 言う-PST-CSL=IP FIL 浮かぶ-SEQ.TOP 来る-NEG=SFP

「お前、すくいあげて来いと言ったからね、もう浮かんで来ないだろう？」

na:, ?iei ?itt-o:-kutu. mata ?ure: ei:me: dzo:dzi jat-e:n=te:

FIL 石.ACC 入れる-PROG-CSL また 3SG.TOP 潜り.TOP 上手 COP-RES.INFR=SFP

「あのう、石を入れているから。またそいつは潜りは上手だったんだろうな。」(方談, 345)

主語が二人称

主語が二人称で〈推定〉を表す te: の文は、聞き手に対する話し手の〈推定〉を論理的あるいは説明的に伝える。その判断内容は、話し手が直接確認したことではない。発話時に直接確認できる《理由(根拠)》に基づいて、間接的に判断する。二人称の場合も同様に、テンス制限があり、san 形式(単純過去)ではあらわれない。

聞き手の過去の事象を判断する

次の用例は、《対象的な内容》が話し手の直接確認できない聞き手の過去の事象に対する判断を差しだしている。したがって、述語が ce:n 形式をとる。聞き手が眠れない理由を「濃いお茶を飲んだ」等、話し手の知識や経験に基づき、あれこれ推測しながら論理的・説明的に述べていて、そのようなとき、

¹⁰¹ ju:binukk^wa:uja: は、フカを売る者の意。調査協力者によると、フカは腐りやすく、下等な魚だという認識があるという。

te:が用いられている。

159) A: ?an ja=sa. mi:guɸaice-i nind-ar-aŋ=jo:. ju:=nu ?akir-an ma:du=kara

そう COP=SFP 目が覚める-SEQ 寝る-POT-NEG=SFP 夜-NOM 明ける-NEG 間=ABL

「そう。目が覚めて寝れないんだよ。夜が明けないうちから」

kuma=ndzi ?attea: ?attea: s-o:-ru-ba: ja=sa

ここ=LOC 歩き 歩き する-PROG-ADN-FN COP=SFP

「ここでウォーキングしているわけなんだよ。」

B: mi:guɸai ja-ibi:n=na:. kata-dza:-ju:=nde: ?usaga-miso:te-e:n=te:

不眠 COP-POL=YNQ2 固-茶-湯=でも 飲む.HON-HON-RES=SFP

「不眠ですか。濃いお茶でもお飲みになられたんでしょう。」

A: i:i. nud-a-ru ?ube: ne:n=do:

いや 飲む-PST-ADN 覚え.TOP ない=SFP

「いや。飲んだ覚えはないぞ。」(実践, 13)

次の用例は、Bが多和田という男からダイヤの指輪をもらったという話が先行していて、Aはあの人はやめておいた方がいいと、Bに対して忠告している場面である。《対象的な内容》は話し手のまだ確認できていない過去の事象であり、発話状況や文脈をもとにしたAの判断(もしかするとBも過去に「多和田という男からダイヤをもらったんじゃないか」という判断)がte:の文で差しだされている。したがって、述語がee:n形式をとる。

160) A: ?ja:=ja ta:ta=nu tamme:=tu nu:gana jaŋ=ja:

2SG=TOP (人名)=GEN 爺=COM 何か COP=SFP

「あんたは多和田のおじいと何かあるのね。」

B: ?an-tteu=nu nu: jan=di=ga nu:=n ?ar-an ?anguto:ru hagiteiburu=nu nu: ja=ga

あの-人=COM 何 COP=QT=WHQ 何=ADD COP-NEG あのような 禿頭=COM 何 COP=WHQ

「あの人と何だと言うの。何でもないわ。あのような禿頭と何だって言うのよ。」

A: wakat-o:=sa, nabitu:. ?ja:=n daija i:t-e:n=te:

わかる-PROG=SFP (人名) 2SG=ADD ダイヤ.ACC 貰う-RES=SFP

「わかったわ、ナビトゥー。あんたもダイヤをもらったのね。」

B: wa:=ga eitte-o:m=i. wanne: ŋkaci=kara hagi:=ja eikannu: ja-ru-munnu

1SG=NOM 知る-PROG=YNQ 1SG.TOP 昔=ABL 禿の人=TOP 嫌い COP-ADN-FN

「さあどうかしら。私は昔から禿の人は嫌いですの。」(実践, 34) (用例 64 と同文)

主語が一人称

主語が一人称のee:nの文が〈推定〉をあらわすのは、過去の時点で話し手が気づいていなかった話し手自身の《過去》の事象を差しだす場合である。つまり、話し手の過去の動作や事象について、話し手が知覚・認識できていなかった場合に、「そうだったんだ」というような発話時における〈発見・気づき〉のような意味あいを表す。

次の用例のような《対象的な内容》が、話し手が知覚・認識できていなかった話し手自身の過去の事象に対する判断あるいは〈気づき〉を述べているときは、話し手の判断を説明的に、第三者が述べるかのようにte:の文が差しだしている。

- 161) A: ʔja: kutuba=nu ɸirigusasan-u. watago:ru: su=sa
 2SG.GEN 言葉=NOM 下しそうな程気分が悪い-MIR お腹がゴロゴロする様 する=SFP
 「あんたの言葉で下しそうだ。お腹がゴロゴロするよ。」
- A: wanne: ʔansukana: ɸirigusarimun kad-e:n=te:
 私.TOP そんなに 腐ったもの.ACC 食べる-RES=SFP
 「私はそんなに腐ったものを食べたんだなあ。」
- B: na: eimu=sa. ʔja:=ga t̄ca: nar-awa=n wa:=ga eit̄te-o:m=i
 もう 済む=SFP 2SG=NOM どう なる-CND=ADD 1SG=NOM 知る-PROG=YNQ
 「もう結構。あんたがどうなるうが私が知ったことか。」(実践, 34) (用例 61 と一部重複)

3.2.3.2 推定文のまとめ

《客体結果》を表す述語の *ee:n* 形式を伴った推量文の伝える意味あいを〈推定〉と呼び、概略的な記述を行なった。〈推定〉の意味あいを表すのに終助辞 *te:* は必須ではない。しかし、〈推定〉の文と *te:* が共起しやすいのは、〈推定〉の文がある事象を《理由》に結果を述べたり、《痕跡》を基に過去の事象を述べたりと、説明的であることと深く関わっている。文を論理的あるいは説明的に述べるときに用いられる *te:* は、説明的な《対象的な内容》とそれを伝える聞き手との関係が密接に関わりあいながら、その役割を果たしている。

その他の推量に関わる文

話し手が〈確認〉した事象をどのように知覚したのかを示しながら聞き手に伝える叙述文がある。日本語の「ようだ」「そうだ」等が当てはまるが、首里方言では、*ɸu:d̄zi*, *guto:n*, *gisan*, *ne: sun* 等が挙げられる。ここでは、これらの形式が用いられる文について述べる。

これらの形式が用いられる文は、知覚したことをありのまま述べる〈記述〉の文と、知覚したことを通して〈判断〉を述べる文がある。以下では、主に後者の〈判断〉の文について簡単に記述する。

3.2.4 *ɸu:d̄zi* の文

*ɸu:d̄zi*¹⁰² の文は、話し手が見たり聞いたりしたことを通して、話し手が〈判断〉したことを（あるいは見たり聞いたりした内容をそのまま）述べる文である。

次の用例は、民話の語り始めに *ɸu:d̄zi* の文があらわれている。話し手が人から聞いた、直接は確認していない過去の事象を述べる文である。このような〈判断〉を表す *ɸu:d̄zi* の文では、*ɸu:d̄zi* に先行する文が *ee:n* 形式（結果相・非過去）をとり、文末に終助辞 *te:* が用いられやすい。

《伝聞》を基にした〈判断〉

- 162) kure: d̄zu:tu ʔu:ŋkaei jat-e:r-u ɸu:d̄zi jan=te:
 これ.TOP ずっと 大昔 COP-RES-ADN DIREV COP=SFP
 「これはずっと大昔(のこと)であるようだよ。」(昔話, 41)

次の用例では、話し手の漠然とした感覚あるいは認識を基にした〈判断〉を *ɸu:d̄zi* の文が述べてい

¹⁰² *ɸu:d̄zi* は、形式名詞であるため、述語になるときは、コピュラ *jan* を伴う。あるいは、コピュラなしで *ɸu:d̄zi* でいきることも可能である。

る。《はなしあい》の場面では、 $\phi u:\widehat{d}zi$:と語尾が長く発音されることも多い。

163) [沖縄が米国統治時代から日本帰属の時代になり、どう変わったかという質問に対して答える]

wanne:=ja:=sai. jamatu=nu ju: ?ar-an, ?uteina: ju: $\phi u:\widehat{d}zi$: ja=ssa:
ISG.TOP=IP=POL.M 大和=GEN 世 COP-NEG 沖縄 世 DIREV COP=SFP.MON

「私はね。日本の時代ではなく、沖縄の時代であるようだなあ(沖縄の時代だという感じ)。」

watta: jamatun $\widehat{t}e$ u=nu ?ieiki ne:n-munnu

IPL 日本人=GEN 意識 ない-FN

「俺たち、日本人だという意識はないもの。」(対談, 46-47)

次の二例は、話し手の何らかの直接体験、あるいは、持っている情報や知識に基づいた判断を $\phi u:\widehat{d}zi$ の文が差しだしている。特に、二番目の用例では、事象全体が $\phi u:\widehat{d}zi$ だけでなく、推量を表す $had\widehat{z}i$ や引用を表す $ndi(n\widehat{l}i)$ を伴って述べられていて、事象が話し手の不確かな判断であることを示している。また、二番目の用例は、 $\phi u:\widehat{d}zi$ の文が do :と共起できることも示している(do :が主張を強める)。

164) [芝居の衰退の原因について語る]

ken=tueee: muke:bun $\widehat{k}ad\widehat{z}ai$ = η kai eite: s-o:-eiga, ken=ja kuni=no¹⁰³ kikan \widehat{g} =ga
県=として.TOP 無形文化財=DAT 指定 する-PROG-ADVRS 県=や 国=の 機関=NOM

「県としては(沖縄芝居を)無形文化財に指定しているが、県や国の機関が」

sudati:-ru $\widehat{t}e$ imo: muru ne:ran $\phi u:\widehat{d}zi$: ja-kutu

育てる-ADN つもり.TOP 全く ない.ADN DIREV COP-CSL

「育てる気が全くないようだから…」(対談, 55)

165) [上の続き]

A: hod $\widehat{z}oki$ \widehat{g} =ja

補助金=TOP

「補助金は…」

B: ?are: kumi?udui= η kai ?nd $\widehat{z}ate$ -o:-ru $\phi u:\widehat{d}zi$:=do:. eibai=n ke \widehat{g} =ga ?nd $\widehat{z}ate$ -o:-ru
あれ.TOP 組踊=DAT 出す-PROG-ADN DIREV=SFP.ASS 芝居=ADD 県=NOM 出す-PROG-ADN

「あれは組踊に出しているようだよ。芝居も県が出している」

$\phi u:\widehat{d}zi$: ja-eiga. ja-eiga, ?uri= \widehat{g} ga bibitaru mun ja-ru had $\widehat{z}i$. seikatsu=nu taci=ni

DIREV COP-ADVRS COP-ADVRSそれ=NOM 微々たるもの COP-ADN DIREV 生活=GEN 足し=DAT

「ようだが。だけど、それは微々たるものだと思う。生活の足しに」

nai-ru muno: ?ar-an= $\widehat{l}i$

なる-ADN もの.TOP COP-NEG=QT

「なるものではないんだと。」(対談, 55)

3.2.5 guto:n の文

$guto:n$ ¹⁰⁴の文も、話し手が見たり聞いたりしたことを通して、話し手が判断したことを(あるいは見たり聞いたりした内容をそのまま)述べる文である。次の用例では、話し手が観察したことを通して、

¹⁰³ 「県や国の」は日本語である。日本語を混ぜて話をしている。

¹⁰⁴ $guto:n$ は、そのまま述語になったり、連体形 $guto:r-u$ になれる。 $maja:=nu guto:n$ (猫のようだ) のように、名詞に $=nu$ (の) が付いたものや $?iteige: jur-u guto:n$ (生き返るようだ) のように、動詞の連体形と結びつく。また、 $guto:=ru ?a-ru$ (ようなのだ) のように代動詞は $?an$ をとる。

聞き手のことを〈判断〉している。

《観察》を基にした〈判断〉

- 166) ?ja:=ja inagu=nu guto:=ru ?a-eiga, eima: tut-i n:te-i:
2SG=TOP 女=GEN DIREV=FOC ある-ADVRS 相撲.TOP とる-SEQ 見る-PST.YNQ
「お前は女のようだが、相撲は取ったことあるのか？」(芝居 2, 1234)

次の用例では、民話の語り始めである guto:n の文に te:があらわれている。ここでは、話し手が人から聞いた、直接は確認していない過去の事象が述べられている。したがって、述語が ee:n 形式をとる。

《伝聞》を基にした〈判断〉

- 167) tea:cin kuri=ja wa: ti:=nu ?utei=ŋkai ?iriri-wa=runairu=nteĩ
どうしても 3SG=TOP 1SG.GEN 手=GEM 内=DAT 入れる-CND=OBLG=QT
「何としてもこいつは私の手の内に入れないとと言って」
?unu gaci:dzira=ndi-ee: maduŋi:dzi: ?umut-o:t-e:-ru guto:n=te:ja:
この (人名)=QT-NLZ.TOP 常日頃 思う-PROG-PST3-ADN DIREV=SFP
「このガシージラというのは日頃から思っていたようなんだよな。」(昔話, 100)
- 168) kure: teo:de: kuŋasan-u, nu:=nu kutu-n na: ?aka=nu tannin=to: inumun wakarit-i=jo:
これ.TOP 兄弟 仲が悪い-CSL 何=GEN 事-ADD FIL 赤=GEN 他人=COM.TOP 同じ 別れる-SEQ=SFP
「これは兄弟仲が悪くて、何をするにももう赤の他人のように別々に暮らしてね。」
maduŋi:dzi:=ja kuŋasar-u teo:de:=nu jusu=to: ?ippe: teo:de:=juka=nin
普段=TOP 仲が悪い-ADN 兄弟=NOM よそ=COM.TOP とても 兄弟=CMPR=ADD
「普段は仲が悪い兄弟がよそとはとても兄弟よりも」
nakajuku s-o:t-e:r-u guto:n=te:
仲良く する-PROG-PST3-ADN DIREV=SFP
「仲良くしていたようだよ。」(昔話, 25)

次の用例では、話し手が人から聞いた情報に基づく、いまだ直接確認していない第三者の現在のことについての話し手の判断を guto:n の文が述べている。文の《対象的な内容》は、健在する第三者の現在の《質》的な特徴であるため、ee:n 形式(jate:n)ではなく、断定・非過去の形(jan)が用いられている。

- 169) [村中の女をうばっていく侍の男をとちめてやるという話を聞いて]
mat-i. kunu samure: takkurusu=saja:. ?itta:=dake: ?ar-an, muradzu:=nutteu
待つ-IMP この 侍.ACC とちめる=SFP 2PL=だけ.TOP COP-NEG 村中=GEN 人
「待て。この侍をとちめるよな。お前たちだけじゃなく、村中の人」
de:dzi najun=do:. nu:ga=du=n jar-e:, kunu tteo: tada=nu samure:=ja ?ar-an
大事 なる=SFP.ASS なぜか=FOC=ADD COP-CND この 人.TOP ただ=GEN 侍=TOP COP-NEG
「大変な事になるぞ。なぜかというこの人はただの侍ではない。」
sui ?we:guni=uti=n juico ?a-ru ?i:gara=nu kk^wammaga ja-ru guto:n=do:
首里 親国=LOC=ADD 由緒 ある.ADN 家柄=GEN 子孫 COP-ADN DIREV=SFP.ASS
「首里本国でも由緒ある家柄の子孫であるようだよ。」(芝居, 566) (用例 136 と一部重複)

3.2.6 gisan の文

gisan¹⁰⁵の文は、話し手が見たことを通して、あるいは話し手が直接体験したこと、感じたことを通して、話し手が判断したことを述べる文である。

《観察》あるいは《直接体験》を基にした〈判断〉

170) [暖かそうなセーターやコートを着けていると、友達がうらやましそうに言う]

?ippe: nuku-gisa=ssa:

とても 暖かいそうだ=SFP.MON

「とても暖かそうだなあ。」(語遊「シダギサン」2010/1/24, p. 13)

171) A: nama=ni=n ?ami=nu φui-gisa: ja=ssa:=ja:

今=DAT=ADD 雨=NOM 降る-DIREV COP=SFP.MON=SFP

「今にも雨が降りそうだね。」

B: jaŋ=ja: φur-an ma:du φe:ku ke:r-a=na

COP=SFP 降る-NEG 間 早く 帰る-HORT=SFP

「そうだな。降らないうちに早く帰ろうよ。」

A: ?an sum=i. to: ?anee: φe:ku tu:r-e:. kađzi çite-i gisa: ja-kutu, ndi:-ne: de:đzi nai-n

そう する=YNQ INTJ それでは 早く 通る-IMP2 風邪 ひく-INF DIREV COP-CSL 濡れる-CND 大変 なる-IND

「そうするか。さあそれでは早く行こう。風邪ひきそうだから、濡れたら大変だ。」(語遊「シダギサン」)

172) A: ?aie:, nama=madi harit-o:t-a-ru-mun, ?ami φui-gisan-u 2010/1/24, p. 13)

INTJ 今=LIM 晴れる-PROG-PST-ADN-FN 雨 降る-DIREV-MIR

「あらら、今まで晴れていたのに雨降りそうだなあ。」

tea: s-abi:=gaja:. eintakumun ?itto:te-abi:=gaja:

どう する-POL=YNQ3 洗濯物.ACC 入れて置く-POL=YNQ3

「どうしましょうかねえ。洗濯物を入れておきましょうかねえ。」

B: eimu=sa. wa:=ga n:teo:teu-kutu ?ja:=ja ko:imun e-i:ga ?ndz-i k-u:=wa

済む=SFP 私=NOM 見ておく-CSL 2SG=TOP 買い物 する-PUR 行く-SEQ 来る-IMP=SFP

「大丈夫。私が見ておくからお前は買い物しに行って来い。」(リア, 19)

3.2.7 ne: sun の文

ne: sun の文は、話し手内部の漠然とした感覚、感じ取った印象を述べる時に用いられる。

173) wakaku nat-an-ne: s-o:n

若く なる-PST-IMPRS する-PROG

「若くなったかのようにだ(若くなった気がする)。(音声「ネー」)

174) A: ?ja:=n sugar-e: i:ka:gi ja-eiga=ndi?itei ?antteu=ga sata su-tan=do:

2SG=ADD お洒落する-CND 美人 COP-ADVRS=QT あの人=NOM 噂 する-PST2=SFP

「お前もおしゃれをすれば美人なのにとあの人噂していたよ。」

B: jukuci ja=sa. φirigusarimuni: e-i ?mmarika:=kara ju:binakk^wa: ?uja:=ga

嘘 COP=SFP 嘘臭い物言い する-SEQ この辺=ABL フカ売り=NOM

「嘘だね。嘘臭い物言いして。この辺からフカ売りが」

¹⁰⁵ gisan は、そのまま述語になったり、連体形 gisar-u をとったり、感嘆形 gisan-u をとったり、また -san という形作りの上でも形態的には形容詞のようにふるまう。述語になるときは、gisan のままいいきる場合や gisa: jan とコンピュータを伴う形、さらに gisa: so:n と sun(する)の継続相の形と結びつく場合がある。分析不足だが、間違いを恐れずに言うならば、形容詞と結びつく場合は、gisan でいいきり、動詞と結びつくときは、gisa: jan や gisa: so:n の形をとりやすい。

ʔat̪t̪eʊ-tan-ne: su=sa

歩く-PST2-IMPRS する=SFP

「歩いていたんじゃないかと思うほどだよ。¹⁰⁶」(実践, 34) (用例 51 と一部重複)

φu:ḍzi, guto:n, gisan, ne: sun の文のまとめ

本節では, φu:ḍzi, guto:n, gisan, ne: sun を述語に持つ, 広い意味としての周辺的な推量文について簡単な記述を行なった。これらの文は, 《証拠性》あるいは情報獲得のし方を明示あるいは暗示しながら, 話し手の判断を述べる文である。どの文がどのような《証拠》に基づけるのか, つまり, 視覚情報なのか, 聴覚情報なのか, あるいは発話時における漠然とした感覚や認識なのか等について詳細な分析が今後必要となろう。今回は見つかった用例が少ないため, 詳細な分析は今後の課題である。

3.2.8 反事実仮想文 (Counterfactual)

かりまた (2004a) によると, 話し手の直接確認を表す *sutan* 形式を述語に含む文は, 条件節を伴って, 「その条件が欠けていたために成立しなかった現実に対して, その条件が欠けていなければ成立したであろうと仮定される非リアルな出来事」(=反事実仮想) を表せる (p. 238)。かりまた (2004a) は, 沖縄中南部安慶名方言に関する論考だが, このことは下記の用例をみてもわかるように, 首里方言にもあてはまる。しかし, *sutan* 形式で言い終える文が〈反事実仮想〉を表す例を見つけられなかった。《はなしあい》の場面では, 下記のように *hadzi* や終助辞 *te:*等を伴って〈反事実仮想〉を伝える¹⁰⁷。

3.2.8.1 *hadzi* の文

日本語の「だっただろう」のように首里方言の *hadzi* の文は, もし従属文の事象が実現していたら, 主文に差し込まれた事象が実現していただろうというような〈反事実仮想〉も表す。従属節に過去の起こりえた事象 (実際には起こらなかった事象) が差し込まれ, 主文に述語の第二過去形 (証拠性過去) を伴う場合に限る。次の用例がそうである。従属文に差し込まれた「(もし)おちよくって見ただけと言ったら」という事象が実現されていたならば, 主文に差し込まれた事象が起こっていただろうという話し手の想像のなかで組み立てられた反事実的な事象である。

175) [方言は無くなるという人に対して日本語で反論している人がいるので, もし筆者が日本語でしか表現できない君がそれを証明しているんじゃないかと言ったら, 相手はこう返すだろうという文脈。相手の《特性》あるいは性格のパターンから仮定して述べている]

ʔan ʔi:-ne: mata ʔuri=tu kuri=tu=ja hanaci=ja biḥei jan. gakumuntekina hanaci=nu

そう 言う-CND また それ=COM これ=COM=TOP 話=TOP 別 COP 学問的な 話=NOM

「そう言えば『またそれとこれとは話は別だ。学問的な話が』

ho:gen=ei naim=i. ho:geŋ=ja maduḥi:ḍzi:=nu kuracigata=nu kutuba=du ja-ru=nḥei

方言=INST POT=YNQ 方言=TOP 日常=GEN 生活=GEN 言葉=FOC COP-ADN=QT

「方言のできるか, 方言は日常生活の言葉である」と

ke:su-ru hadzi=do:. ʔunu ʔatai=ja wannin wakat-o:n. tada wateakut-i=du nḥe-a-ru,

返す-ADN INFR=SFP.ASS その 位=TOP ISG.ADD わかる-PROG ただ からかう-SEQ=FOC 見る-PST-ADN

「(あいつは) 返すだろうよ。それぐらいは私も解っている。ただおちよくって見ただけ」

¹⁰⁶ ここでのフカは, 非常に臭いことの代名詞のように用いられて, 嘘臭さが甚だしいという意味。

¹⁰⁷ かりまた (2004a) では, 終助辞 *ja:* が用いられている例が見られた (同左, 用例 80)。他に《聞き手めあて》を明示する終助辞 *do:* や, 控えめに述べる際に用いられる *de:* 等も使用可能だと思われる。

ʔaninde: ʔi:-ne: ʔusumasa wad̥zir-ate-i ʔuturumun nai-ta-ru had̥zi

そんな風に 言う-CND すごく 怒る-CAUS-SEQ 恐ろしい事 なる-PST2-ADN INFR

「そう言ったら酷く怒らせて怖い思いをしていただろう。」(琉球弧, 216) (用例 110 と一部重複)

3.2.8.2 終助辞 te:の文

第二過去形(sutan 形式)に te:が付いた文も〈反事実仮想〉を表せる。その事象は話し手にとって未確認の事象であり、過去の時点における話し手のポテンシャルな成り行き的な動作を差しだしている。過去の時点で A の態度(相撲を組んだら負けずにはいられなかった)を知っていたならば、約束なんかしなかったらというように、成り行き的な行為の不実行を差しだしている。必ず述語がsutan形式をとるが、〈反事実仮想〉という意味あいの実現に te:は必須ではない。《対象的な内容》がすでにその意味あいを表している。te:は《はなしあい》の場面において、先行・後続の説明的・論理的な関係を聞き手に述べる場合にあらわれる。

176) A: na:=ga ʔagid̥zima ja-gutu=ndi ʔite-i hana mutate-i kʷir-i=ndi ʔite-a-gutu,
2SG.HON=NOM 引退相撲 COP-CSL=QT 言う-SEQ 華.ACC 持たせる-SEQ BEN-IMP1=QT 言う-PST-CSL

「貴方が引退相撲だからといって華を持たせてくれと言ったから」

makit-i=n eimun=di ʔumut-a-eiga, da: ʔanee: tuikur-a-gutu makir-ar-an=du ʔa-ru-munnu

負ける-SEQ=FOC 済む=QT 思う-PST-ADVRS INTJ そうして 取り組む-PST-CSL 負ける-POT-NEG=FOC ある-ADN-FN

「負けてもいいと思ったけど、ほらそうして組んだら負けられないんだもの。」

B: nu:=ga. ʔan jar-a: jakusuko: s-an ʔuteu-tan=te:ja:

何=WHQ そう COP-CND 約束.TOP する-NEG.SEQ 置く-PST2.DIREV=SNP

「何だと。それなら約束はしないで置いたのにな。」

A: jakusuku e-i=n s-ant-i=n, nama=kara: na:=ga wan=niŋkai=ja eima: kan-a:n=sa

約束 する-SEQ=ADD する-NEG-SEQ=ADD 今=ABL.TOP 2SG.HON=NOM 1SG=DAT=TOP 相撲.TOP 敵う-NEG=SNP

「約束してもしなくても、今からは貴方が私には相撲は敵わないよ。」(芝居, 1004) (用例 138 と一部重複)

まとめると,sutan形式がすでに反事実的な意味を持っていたとしても、〈はなしあい〉の場面においては、聞き手に述べ伝えるために had̥zi や te:を補助的に伴うことが多い。これらの形式は、文が話し手の〈判断〉であるということを聞き手に伝えるという役割も果たしている。

3.3 疑い文 (Dubitative sentences)

《心内発話》や《つぶやき》等、非対話的な場面での話し手の〈疑問・疑い〉を表す文を疑い文と呼ぶ。〈疑い〉はいまだ言語化されていない、あるいは聞き手に伝えられていない話し手自身の内部に留まっている疑念である。日本語の「かな」や「だろうか」の文のように、基本的には非対話的な性質をもつ文が聞き手の目の前で発せられた場合、対話的な要素を帯びる(日本語記述文法研究会, 2003)。また、対話的な用法の場合、しばしば〈断定回避〉や〈婉曲的な質問〉という意味あいに派生する。

3.3.1 ra の文

3.3.1.1 形態・構文的特徴

述語の語尾が ra の形をとり、主に〈疑い〉を表す ra の文は、文中で話し手が疑問に思っている事象

に ga をすえて焦点化を行う。

形態的あるいは構文的な特徴については、中松（1973）や van der Lubbe（in press）に詳しいが、ここでも簡単に述べておく。例えば、最もわかりやすい例が疑問詞を用いて疑問の焦点をおく場合である。この場合、疑問詞に ga が後接し、埋め込み文の述語が ra の形をとる。

177) t̄ca:=ga nat-i ?it̄cu-ra wakar-an

どう=FOC なる-SEQ 行く-DUB わかる-NEG

「どうなって行くかわからない。」（沖辞, 23）

178) ?uma=uti t̄ca:e-i=ga ja-ra jukui=n wakar-an ?atai, na: t̄eu=nu eid̄z-o:t-e:-ru guto:n=te:ja:

そこ=LOC どうする-SEQ=FOC COP-DUB 行方=ADD わかる-NEG.ADN 位 FIL 人=NOM 死ぬ-PROG-PST3-ADN DIREV=SEP

「そこでどうしてか行方もわからない位、もう人が死んでいたらしいんだよな。」（昔話, 227）

「誰が」あるいは「何が」（主語・主体）に疑問の焦点をおく場合は、主語（主体）を表す名詞句に ga が後接する。述語の ra の形は、述語の断定形の末尾の n の位置に ra が置き換わった形である。

179) kura:-nut̄ca:=nu=ga kume: ϕitt-o:t-a-ra wakar-an-eiga

雀-PL=NOM=FOC 米.TOP 拾う-PROG-PST-DUB わかる-NEG-ADVRS

「雀たちが米は拾っていたのかわからんが」（昔話, 80）

180) ta:=ga=ga t̄eu:sa-ra tanjka:na: tat̄e-i n:d-a=na

誰=NOM=FOC 強い-DUB 対面 たつ-SEQ 見る-HORT=SPF

「誰が強いかタイマン張ってみよう。」（音声「タンカーナー」）

「いつ」「どこに」「どこで」等、時間や場所を表す状況語に疑問の焦点をおく場合は、状況語全体（格助辞含む）に ga が後接する。

181) nannin ?atu=ni=ga ?ure: ?ikusa jucit̄e-a-ra

何年 後=DAT=FOC FIL 戦 やって来る-PST-DUB

「何年後にあのう戦やって来たか...」（昔話, 84）

182) t̄eu: wakarit-i ?ik-e:, mata ?it̄ei=ga ?it̄eaju-ra¹⁰⁸ wakari=nu sakad̄zitei:

今日 別れる-SEQ 行く-CND また いつ=FOC 会う-DUB 別れ=GEN 盃

「今日別れて行けば、またいつ会うだろうか別れの盃。」（芝居, 908）

183) ma:=n̄kai=ga ?nd̄z-a-ra wakar-an nat-i

どこ=DAT=FOC 行く-PST-DUB わかる-NEG なる-SEQ

「どこに行ったかわからなくなって...」（芝居, 802）

客体（対象）に疑問の焦点をおく場合は客体を表す語に ga が後接する。

184) einte=nu nu:=ga kange:t-o:-ra wakar-an-ei=to: t̄imu=kara: ϕira:r-an

心底=NOM 何.ACC=FOC 考える-PROG-DUB わかる-NEG-NLZ=COM.TOP 肝=ABL.TOP 付き合う-NEG

「心底が何を考えているのかわからん者とは心からは 付き合えない。」（音声「シンティイー」）

185) nu:=nu ei:jand̄zigutu=ga s-a-ra takaturubai e-e-i ?e:d̄zi e-e-i=n ϕid̄zi=n s-an

何=GEN 失敗.ACC=FOC する-PST-DUB ぼーっと する-SEQ 合図 する-SEQ=ADD 返事=ADD する-NEG

¹⁰⁸ 原文では ?it̄cara だが、内容に合うように ?iteajura に修正した。

「何の失敗をしたのかぼーっとして呼んでも返事もしない。」(音声「タカトゥルバイ」)

名詞述語に疑問の焦点をおく場合は、コンピュータに先行する名詞に *ga* が挿入され、コンピュータ *jan* が *jara* (非過去) あるいは *jatara* (過去) となる。丁寧形の場合は、*jaibi:ra* もしくは *jaibi:tara* である。

- 186) *?aja:=ga ?i-mice:-ru tu:i, teu:=ja i: hanaci=ga ja-ra wakaj-abir-aŋ=ja:*
母=NOM 言う-HON-ADN 通り 今日=TOP 良い 話=FOC COP-DUB わかる-POL-NEG=SFP
「お母さんが仰る通り、今日は良い話かもわかりませんね。」(芝居, 832) (用例 140 と重複)
- 187) *?are: ?itei=nu kutu=ga jat-a-ra ?ubiteikanasa=ssa:*
あれ.TOP いつ=GEN 事=FOC COP-PST-DUB 覚えがない=SFP.MON
「あれはいつの事だったかはっきり覚えていないねえ。」(音声「ウビチカナサン」)
- 188) *?undu=nu hatake: eiteigakai=ga jaj-abi:-ra*¹⁰⁹
2SG.HON=GEN 畑.TOP 湿地=FOC COP-POL-DUB
「貴方の畑は湿地でしょうか。」(沖文, 78)
- 189) *duku eiwa s-a-ru jui=ga ja-ibi:t-a-ra*
あまりに 心配 する-PST-ADN せい=FOC COP-POL-PST-DUB
「あまりに心配したせいでしたでしょうか...」(沖辞, 23)

動詞述語の *sun* 形式 (断定・非過去) に疑問の焦点をおく場合、第一中止形の形に *ga sura* という形がつづく。

- 190) [断定形 *einun* (死ぬ) の第一中止形 *eini* (死に)]
ei:ai=ndi ?i:-ne: tage:ni ein-i=ga su-ra nu:=ga su-ra wakar-aŋ-kutu
試合=QT 言う-CND 互いに 死ぬ-INF=FOC する-DUB 何=DUB する-DUB わかる-NEG-CSL
「試合と言えば互いに死ぬかどうかかわからないから」(昔話, 122)
- 191) [断定形 *?an* (ある) の第一中止形 *?ai* (あり)]
kawat-a-ru tukuru=n ?a-i=ga su-ra ma:ŋk^{wi}=n eirabit-i
変わる-PST-ADN 所=ADD ある-INF=FOC する-DUB あちこち=ADD 調べる-SEQ
「変わった所もあるかどうかあちこち調べて...」(昔話, 207)

動詞述語の *san* 形式 (断定・過去) に疑問の焦点をおく場合、先行する本動詞は第一中止・非過去の形に焦点化の *ga* が付き、後ろの代動詞が *sara* (疑い・過去) となる。ただし、*van der Lubbe* (in press) によれば、若い話者の間では、この形はもはや使用されない¹¹⁰。

- 192) [何々の噂があったんだと言われて、驚いた様子で返答する A]
A: *ha: ?unto:=na: ?anutteu n:te-an=di=na:*
INTJ 本当=YNQ2 あの 人 見る-PST=QT=YNQ2
「えっ? 本当か? あの 人 見たってか?」

¹⁰⁹ *jajabi:ra* は古風な言い方で、今の首里方言では、*jaibi:ra* という言い方が普通である。

¹¹⁰ 若い話者の間では、先行する本動詞が過去形をとり、後ろの代動詞が非過去形をとる傾向がある (*van der Lubbe*, in press)。本研究では、比較的年齢の高い話者 (明治・大正・昭和一桁代生) が話す方言をデータとして用いているため、上で述べたような調査結果を得ることができなかったが、若い話者を調査対象とした場合、この記述に留まらず全体としても本研究の記述とかなり異なった結果が得られることは大いにありえる。

B: n:dz-i=ga s-a-ra tteu=nu hanaci teite-i=ga s-a-ra ?ure: wakar-an=sa
 見る-INF=FOC する-PST-DUB 人=GEN 話.ACC 聞く-INF=FOC する-PST-DUB それ.TOP わかる-NEG=SFP
 「見たのかどうか人の話を聞いたのかどうかそれはわからないよ。」(調査, 2015/10/19)

次の「のだ」文のような複雑な例もみられる。代動詞である *san* が連体形となって後続の形式名詞 (*mun*) と結びつき、末尾のコピュラが *ra* の形をとる。

193) [瓦屋節の由来。元夫の子供が今の夫を殺したという内容を話者が語っている]

?uri=ga kurute-e:n=tei inagu?uja: waka-i=ga s-a-ru mun ja-ra
 3SG=NOM 殺す-RES=QT 女親.TOP わかる-INF=FOC する-PST-ADN FN COP-DUB
 「こいつ(元夫の子供)が殺したんだと母親はわかったのか」(昔話, 206)

動詞述語の *so:n* 形式(継続)に疑問の焦点を置くなら、非過去は第二中止形の形に *ga ura*、過去は第二中止形の形に *ga utara* があらわれる。

194) utat-i=ga u-ra teikaguro: garacimagai bike:n sun
 疲れる-SEQ=FOC いる-DUB 最近.TOP 手足がつる事 ばかり する
 「疲れているのか最近は手足がつってばかりいる。」(音声「ガラシマガイ」)

195) utat-i=ga u-ra ja:sa=ga ?a-ra wi:bate-e:n
 疲れる-SEQ=FOC いる-DUB ひもじい=FOCある-DUB むかむかする-RES
 「疲れているのか腹がへっているのかむかむかする。」(音声「ファイバチュン」)

196) ?are: teikaguro: mo:kit-i=ga u-ra hana furate-o:n=di-ru sata=nu ?an
 3SG.TOP 最近.TOP 儲ける-SEQ=FOC いる-DUB 鼻 振らす-PROG=QT-ADN 噂=NOM ある
 「あいつは最近は儲けているのか天狗になっているという噂がある。」(音声「フラチュン」)

197) damas-att-i=ga ut-a-ra wakar-an-eiga
 騙す-PASS-SEQ=FOC いる-PST-DUB わかる-NEG-ADVRS
 「騙されていたのかわからんが」(昔話, 226)

形容詞述語に疑問の焦点をおく場合は、述語の末尾の *n* を取り去った形に *ga ?ara* あるいは *ga ?atara* が後接する。丁寧形の場合は、*ga ?aibi:ra* または *ga ?aibi:tara* となる¹¹¹。

198) jusande: eikara:sa=ga ?a-ra turubaio:bai s-o:n
 夕方.TOP 寂しい=FOC ある-DUB ぼーっとする事 する-PROG
 「夕方は寂しいのかぼーっとしている。」(音声「トゥルバイオーバイ」)

199) teikaguru=nu dze:muko: ?o:sa=ga ?a-ra ju: sakijun
 最近=GEN 材木.TOP 青い=FOC ある-DUB よく 裂ける
 「最近の材木は青いのかよく裂ける。」(音声「サキユン」)

200) ?anu subaja:=ja ni:sa=ga ?at-a-ra eigu eimat-i ne:n
 あの そば屋=TOP まずい=FOC ある-PST-DUB すぐ 閉まる-SEQ CPL
 「あのそば屋はまずかったのかすぐ閉店したよ。」(調査, 2015/10/19)

201) A: ?anee: ?udi kakit-i jutasa=ga ?a-ibi:-ra
 それでは 腕 かける-SEQ よろしい=FOC ある-POL-DUB

¹¹¹ ただし、*?aibi:tara* (疑い・丁寧・過去) は未調査。

「それでは腕相撲してもよろしいでしょうか。」

B: jutasa-kutu madzi kakit-i nd-i
よろしい-CSL まず かける-SEQ 見る-IMP1
「よいからまずやってみろ。」(芝居, 692)

動詞述語の否定形に疑問の焦点をおく場合は、述語の否定形の形にそのまま *ga ?ara* あるいは *ga ?atara* があらわれる。丁寧形の場合は、*ga ?aibi:ra* または *ga ?aibi:tara* (未調査) となる。

202) [目の前にあるのに相手が見えないと言うので、鳥目ではなく *φirumi*: (昼目) なのかと言ったら、昼目なんて言葉あるの?とされた男のセリフ]

φiro: mi:r-aŋ=ga ?a-ra=ndi ?umut-a-ru ba:=te:
昼.TOP 見える-NEG=FOC ある-DUB=QT 思う-PST-ADN FN=SFP
「昼は見えないのかなって思ったんだよ。」(実践, 40)

8') [若い連中が噂をしているのを聞いて村の老人が]

kundu=n mata *kamaraei*: kuto: ?ar-aŋ=ga ?a-ra=ja:
今度=ADD また ややこしい 事.TOP COP-NEG=FOC ある-DUB=SFP
「今度もまたややこしいことではないだろうね。」(芝居, 546)

203) ?usume:=ja *teura:sa* *kanihandit-i* ne:n, *muno*: kami=ga s-a-ra

祖父=TOP すっかり ぼける-SEQ CPL ご飯.TOP 食べる=FOC する-PST-DUB
「おじいちゃんはすっかりぼけてしまって、ご飯は食べたか」

kam-aŋ=ga ?at-a-ra *wacirit-i* ne:n

食べる-NEG=FOC ある-PST-DUB 忘れる-SEQ CPL
「食べなかったか忘れてしまっている。」(調査, 2015/10/13)

204) *tiφuno*: ne:ŋ=ga ?aj-abi:-ra¹¹²

手本.TOP ない=FOC ある-POL-DUB
「手本はないのでしょうか。」(沖文, 79)

述語の否定形が代動詞をとるが、述語以外に疑問の焦点がある場合、焦点化の *ga* は疑問となる部分だけにくっつき、述語の否定形には *ga* がつかない。つまり、*ga* は一つの文に一つしかあらわれない¹¹³。

205) *wan* nate-a-ru *inagu=nu* ?uja: tei:dzi=nu *dzuri*. *mata* *ikiga=nu* ?uja: *mibun* ?a-ru

私.ACC 産む-PST-ADN 女=GEN 親.TOP 辻=GEN 芸妓 また 男=GEN 親.TOP 身分 ある
「私を産んだ女の親は辻の芸妓。また男の親は身分ある」

sui=nu *samure:=ndi?ite-i* *sudati=nu* ?uja=*kara* teik-asatt-o:-ibi:-eiga

首里=GEN 侍=QT 育て=GEN 親から=ABL 聞く-PASS-PROG-POL-ADVRS
「首里の侍だと育ての親から聞かされていますが」

in=nu=ga ne:ran ?a-ra *namateikiti* *jukui=ga* *wakaj-abir-an*

縁=NOM=FOC ない ある-DUB 未だに 行方=NOM わかる-POL-NEG
「縁がないのか未だに行方がわかりません。」(芝居, 706)

¹¹² ?ajabi:ra は古風な言い方で、現在の首里方言では、?aibi:ra という言い方が普通である。

¹¹³ 補足すると、述語が肯定形で述語以外に疑問の焦点がある場合は、その述語は上記のように代動詞をとらず、述語がそのまま疑い形となるが、述語が否定形の場合は、述語は形を変えることなく、後ろに代動詞を伴い、代動詞が疑い形となる。

次の用例でも、*ʔutiti* に *ga* がついて焦点化を受けてもよさそうだが、文の中で焦点化の *ga* は一つしかあらわれない。

206) *du:kuru=kara=ga ma: ʔidzi-n ʔutit-i s-a-ra wakar-an*
 自分で=ABL=FOC どこ 行く-ADD 落ちる-SEQ する-PST-DUB わかる-NEG
 「自分でなのかどこかに行って落ちたのかわからず…(後略)」(昔話, 223)

3.3.1.2 ra の文による〈疑い〉のモダリティ

〈疑い〉は、文の〈対象的な内容〉に対する話し手の疑念のようなものを《独り言》や《つぶやき》のような非対話的な文脈で差しだす意味あいのことを指す。*ra* の文の主語が一人称の場合、話し手が話し手自身の事象に対する〈疑い〉を自問のように投げかける。独話的に発話しながらも、聞き手に暗に伝えるような用法も多くみられる。未来の事象なら、これからおこりうる未来の事象に対する〈疑い〉を表す。

また、疑問のタイプ(真偽・補充)によって、具体的な可能性を話し手が提示するのか、あるいは疑問詞を伴ってその疑問については全く判断ができていないことを伝えるのか等、さまざまなタイプの〈疑い〉の文がある¹¹⁴。

主語が一人称

次の主語が一人称の *ra* の文は、話し手の未来の事象への〈疑い〉を表している。具体的に「抱く時もある」という一つの可能性を提示しながら〈疑い〉を表現するのは、真偽疑問の特徴といえる。

207) A: *makatu:, natei=n su=na. nadzitei=n suna. kannadzi na:tamacidamaci*
 (人名) 泣き=ADD する=PROH 嘆き=ADD する=PROH 必ず 皆それぞれ
 「マカトゥー、泣きもするな。嘆きもするな。必ず皆それぞれ」
naeimunukk^wa=n ʔutabi-mice:-kutu. ʔance: nadzite-e: k^wi:n=na
 生みの子=ADD 授かる-HON-CSL だから 嘆く-SEQ.TOP BEN=PROH
 「生みの子も授かるのだから。だから嘆いてくれるな。」
 B: *wa:=ga ʔakang^wa dateu-ru eitei=n ʔai=ga s-abi:-ra*
 私=NOM 赤ん坊.ACC 抱く-ADN 時=ADD ある=FOC する-POL-DUB
 「私が赤ん坊を抱く時もあるのでしょうか…」
 A: *nindzin=nu naeihandzo:=ja ʔutingutu. magukuru teikute-i nigai=dunee: kannadzi*
 人間=GEN 出産=TOP 御天事 真心 尽くす-SEQ 願う=FOC.CND 必ず
 「人間の出産は神のみぞ知る事。真心尽くして願いさえすれば必ず」
mi:ng^wa u:ng^wa ʔutabimice:n
 女の子 男の子 お授かりになる
 「女の子・男の子をお授かりになる。」(芝居, 638)

次の主語が一人称の *ra* の文も、話し手の未来の事象への〈疑い〉を表しているが、具体的な可能性を提示するのではなく、疑問詞を伴って疑問をそのまま投げかける補充疑問である。

¹¹⁴ 宮崎他 (2002) では、〈疑い〉の文を〈判断不明・思考過程・疑念〉の3つに分けて分析を試みている (p. 184)。

208) A: ?aneɪ nu:gana tur-a:ri=du ei-nso:te-i:
 それで 何か 取る-PASS=FOC する-HON-PST.YNQ

「それで何か取られたりしなされたの？」

B: mutte-o:-ru dzɪŋkani tur-att-i ?ujag^wasu=kara judzɪrattite-a-ru katana=madi ?ubaitur-att-an=do:
 持つ-PROG-ADN 金銭 取る-PASS-SEQ 親先祖=ABL 譲り受けて来る-PST-ADN 刀=LIM 奪い取る-PASS-PST=SFP.ASS
 「持っている金銭取られて親先祖から譲り受けてきた刀まで奪い取られたよ。」

A: tabisatei=uti dzɪŋkani tur-att-i na:=n eindo: de:n=na:
 旅先=LOC 金銭 取る-PASS-SEQ 2SG.HON=ADD 心労 COP2=YNQ2
 「旅先で金銭取られて貴方も大変ですねえ。」

B: ?ansu-kutu. tea:ci=ga eimu-ra
 そうする-CSL どうする=FOC 済む-DUB
 「そうなんだよ。どうしたらよいか。」(芝居, 768)

209) (前略) janawaraba: ?uteike:r-ate-i turasu-ru kanje:=ru wane jat-a-eiga
 悪ガキ 討ち返す-CAUS-SEQ BEN-ADN 考え=FOC 1SG COP-PST-ADVRS

「悪ガキやっつけてやろうと考える俺だったが」

?ubiradzɪ ?ut-att-i hadzɪkasan-u tea:e-i=ga muduju-ra
 思わず 討つ-PASS-SEQ 恥ずかしい-MIL どうする-SEQ=FOC 戻る-DUB
 「思わずやられて恥ずかしくてどうやって戻ろうか。」(芝居, 996-998)

次の二例は、述べている内容は同じだが、焦点化の位置が異なる。しかし、これらの文の間に意味的に大きな違いはなさそうである。

210) [男と女が父親 B に結婚の許しを乞うが、父親 B は認めない。A は男の台詞]

A: musub-ate-i k^wi-nsor-e:, su:
 結ぶ-CAUS-SEQ BEN-HON-IMP2 父
 「結婚させて下さい、お父さん。」
 (中略)

B: ?itta:=ga mi:tuni n-ate-i k^wir-i=ndi ?in-ee:¹¹⁵ nu:=ndi=ga ?ite-i eimu-ra waka-ran¹¹⁶
 2PL=NOM 夫婦 なる-CAUS-SEQ BEN-IMP1=QT 言う-CND 何=QT=FOC 言う-SEQ 済む-DUB わかる
 「お前たちが夫婦にさせてくれと言ったら何と言っていいかわからん。」
 su:=ja teimu jamun=do:ja:
 父さん.TOP 胸 痛む=SFP
 「父さんは胸(が)痛むよな。」(芝居, 1016)

211) [相撲の勝負に負けてあげれば、マサンルーと妹を結婚させてくれる約束だったが、マサンルーの兄である親友に裏切られた A。しかし、嘆き苦しむ妹を見ていられず、親友の家に直談判しに行く。そして親友とみんなの前でもう一度勝負し、親友を打ち負かす。そして、親友の弟のマサンルーに声をかける]

masan[ɔ:, ?ja:=ŋkai=ja nu:=ndi ?ite-i=ga eimu-ra wakar-an. teu:=nu kuto: jurute-i turac-e:=ja:
 (人名) 2SG=DAT=TOP 何=QT 言う-SEQ=FOC 済む-DUB わかる-NEG 今日=GEN 事.TOP 赦す-SEQ BEN=IMP2=SFP
 「マサンルー、お前には何と言っていいかわからん。今日の事は赦してくれよ。」(芝居, 920)

¹¹⁵ 原文ママ。?i=n ee: (言う=ADD する-CND)「言いもすれば」か。

¹¹⁶ 原文では nu:ndi=ga ?ite-i eimu=ga wakaran であるが、修正した。

次の例のように、*ra* の文が話し手の過去の事象を表しているならば、記憶がはっきりしない場合等、話し手が自身の過去の事象についての〈疑い〉を表す。

212) A: nu:=nu ʔurami=n ne:ran t̃c̃u nu:=ndi-ʔite-i kurus-an=de:naran-ta=ga

何=GEN 恨み=ADD ない.ADN 人.ACC 何=QT-言う-SEQ 殺す-NEG=OBLG-PST=WHQ

「何の恨みもない人をどうして殺さなければならなかったのか。」

B: ʔanu tut̃e: mut̃e: ke:-nat-i, t̃ca:e-i=ga kurute-a-ra ʔubij-abir-an

あの 時.TOP 夢中 PFX-なる-SEQ どうする-SEQ=FOC 殺す-PST-DUB 覚える-POL-NEG

「あの時はすっかり夢中になってしまい、どのように殺したのか覚えていません。」(芝居, 790)

主語が一・二人称

ra の文の主語が一・二人称の場合、話し手と聞き手に関わる事象に対する〈疑い〉を表す。例えば、次の用例では、疑問詞「いつ」に疑問の焦点が置かれ、別れたら今度はいつ会えるだろうか、話し手と聞き手の未来の事象への〈疑い〉を表している。

182') t̃c̃u: wakari-i ʔik-e:, mata ʔitei=ga ʔiteaju-ra¹¹⁷ wakari=nu sakadzitei:

今日 別れる-SEQ 行く-CND また いつ=FOC 会う-DUB 別れ=GEN 盃

「今日別れて行けば、またいつ会うだろうか別れの盃。」(芝居, 908)

主語が一人称の場合と違って、《対象的な内容》が話し手と聞き手の両方に関わる内容の場合、〈疑い〉を聞き手と確認する対話的な用法もみられる。話し手と聞き手に関わる事象についての〈疑い〉を *ra* の文を用いて表す時、積極的に聞き手に伝えるような場合は、*raja*: という形をとる。これらの文の《問かけ性》は弱く、いまだ質問文にはなりきっていない。〈疑い〉の文のまま聞き手に伝えるような文である(もし *raja*: による質問文なら、補充疑問文になれず、*ga* による焦点化が行われない)。

213) [B の証言が犯人逮捕に貢献。上部から褒美をもらえると聞いた B と妻 A]

A: date:n ʔu:bi ʔutabimice:n=ʎi

たくさん 褒美.ACC BEN.HON=QT

「たくさん褒美をくださるって。」

B: t̃ca:=ga ʔuʔe: tuidukuru=nu ʔa-ra=ja:

どう=FOC 少し.TOP 取り分=NOM ある-DUB=SFP

「いくらか少しは取り分があるだろうねえ。」

A: ʔuʔi dukuru jam=i. muru tuidukuru ja=sa

少し どころ COP-YNQ 全部 取り分 COP=SFP

「少しどころか! 全部取り分よ。」(芝居, 982) (用例 141 と同文)

214) A: su:=ni nigaj-a:i mi:tu nar-a=ja:

父=DAT 願う-SEQ 夫婦 なる-HORT=SFP

「お父さんをお願いして夫婦なろうな。」

B: t̃ca:=ga ja-ra=ja: ʔaʔi:g^wa:ʔumuja:=ja ʔama=ni=n kuma=ni=n ba:kiwaki ja=sa

どう=FOC COP-DUB=SFP 兄思い=TOP あそこ=DAT=ADD そこ=DAT=ADD 策分け COP=SFP

「どうかしら。お兄さんを思っている人はあそこにもそこにも策に分けるほどよ。」

¹¹⁷ 原文では ʔiteara だが、内容に合うように ʔiteajura に修正した。

ting^wasag^wasa ja=sa (後略)
 うようよいる様 COP=SFP
 「うようよいるわ。」(芝居, 1012) (用例 67 と重複)

主語が二人称

二人称を主語にした ra の文は、聞き手の事象に対する〈疑い〉を表すが、文末ではなく、-ndi ?umuin (と思う) 等を伴う引用節にあらわれて、聞き手に伝えられる。

215) [目の前にあるのに女 B が見えないと言うので...]

A: ?ja:=ja ?uri mi:r-an=i. φirumi:=du ja-ru=i
 2SG=TOP これ 見える-NEG=YNQ 昼目=FOC COP-ADN=YNQ
 「お前はこれ見えないのか。昼鳥目なのか。」

B: ?e:=tai, ?undzu=jo:. φirumi:=n^{widehat}tei=n ?a-ibi:m=i
 INTJ=SFP 2SG.HON=VOC 昼目=QT=ADD ある-POL=YNQ
 「あら、貴方。昼鳥目ってありますの？」

A: ?ancei ?uφina:na:=nu munu mi:r-an=di ?i-kutu=te:
 だって このくらい=GEN もの 見える-NEG=QT 言う-CSL=SFP
 「だってこんな大きなものが見えないって言うからさあ。」

φiro: mi:r-an=ga ?a-ra=ndi ?umut-a-ru ba:=te:
 昼.TOP 見える-NEG=FOC ある-DUB=QT 思う-PST-ADN FN=SFP
 「昼は見えないのかなって思ったんだよ。」(実践, 40) (用例 202 と重複)

216) [追剥に持ち物を奪われた後に違う男から声をかけられて驚く]

A: wanne: mata satei=nu t^{widehat}eu=tu niteo:ru:=ga ja-ra=ndi ?umut-i tamaci nugit-a=sa
 私.TOP また さっき=GEN 人=COM 似たような人=FOC COP-DUB=QT 思う-SEQ 魂 脱げる-PST=SFP
 「私はまたさっきの人と似たようなやつだろうかと思って驚きましたよ。」

B: nu:=ga=na: ta:=tu nite-o:n=di ?i-nee:=ga
 何=WHQ=POL 誰=COM 似る-PROG=QT 言う-HON=WHQ
 「どうした。誰と似ているとおっしゃるのか。」(芝居, 768) (用例 71 と同文)

217) A: ?ja:=ndi ?i:-ru dippana tudzi=nu u-eiga, tu:tei dzuri jub-i, sakinumi ee-i

2SG=QT 言う-ADN 立派な 妻=NOM いる-ADVRS いつも 芸妓 呼ぶ-INF 酒飲み する-SEQ

「お前と言う立派な妻がいるが、いつもジュリ(芸妓)を呼び、酒を飲んで」

ja:teine:=ni=n kakar-an
 家庭=DAT=ADD かかる-NEG

「家にも帰らん…」

B: nama tucⁱ wakasa-ibi:-ru-munnu eikata: na-ibir-an=sa

今 年 若い-POL-ADN-CSL 仕方 POT-POL-NEG=SFP

「今、年が若いですから仕方ないですよ。」

A: tudzi tume:t-i turae-e:, ho:to:=n no:i=ga su-ra=ndi ?umut-a-eiga tatta φurimun nat-i

嫁.ACC 迎える-SEQ BEN-CND 放蕩=ADD 治る=FOC する-DUB=QT 思う-PST-ADVRS 段々 馬鹿 なる-SEQ

「嫁を迎えてあげたら、放蕩も治るかしらと思ったが段々馬鹿になって。」(芝居, 552)

218) [酒を飲んでジュリの女を家に連れてきたマサンルーA に対して伯父 B が]

A: eimanagai sun=di-ru ?i-miee:-ru=i. na: sui na:φa=nu kuracⁱ=n ?ateihatit-i

島流し する=QT-ADN 言う-HON-ADN=YNQ もう 首里 那覇=GEN 暮し=ADD 飽き果てる-SEQ

「島流しするとおっしゃるのか。もう首里那覇の暮しも飽き果てて」

i:ba: ja-ibi:=sa, tamme:

いい折 COP-POL=SFP おじい様

「ちょうどよかったですよ、おじい様。」

B: eimanagaei sun=di ?i:=ruce: ?udurutci=ga su-ra=ndi ?umur-e:,

島流し する=QT 言う=CND 驚く=FOC する-DUB=QT 思う-CND

「島流しすると言えば驚くかと思えば」

i:ba: ja=sa=ndi-ru ?i:-ru=i. kuniça: φurimun

いい折 COP=SFP=QT-ADN 言う-ADN=YNQ この 馬鹿者

「ちょうど良かったと言うのか。この馬鹿者！」(芝居, 562)

219) A: watta: ?udanna=ŋkai ti: ne:i-ne: wa:=ga gattino: s-an=do:ja:

IPL.GEN 旦那様=DAT 手.ACC 出す-CND 私=NOM 承知.TOP する-NEG=SFP

「私達の旦那様に手を出したら私が承知しないぞ。」

B: kundzan=ute: ?iteigami=ga ja-ra nu:=ga ja-ra wakar-an-eiga kuma=uto:te:

国頭=LOC.TOP 生神=FOC COP-DUB 何=FOC COP-DUB わかる-NEG-ADVRS ここ=LOC.TOP

「国頭では生神だか何だかわからんが、ここでは」

ttcukurusa: φe:re:=du ja-ru

人殺し 追剥=FOC COP-ADN

「人殺しの追剥である。」(芝居, 808)

次の raja: の用例も、質問文ではなく、ra による〈疑い〉の文に ja: がついた用例である。主語は三人称なので、主語が三人称の文としてカテゴライズした方がよさそうだが、内容的には二人称のことについて述べている。内容的に二人称のことについて、聞き手を目の前にして〈疑い〉を述べているような場合は、ja: を伴いやすいのだろう。

220) [腕相撲で負けたので]

A: kundo: φidzai=nu ?udi kakir-ate-i k^wi-miso:r-i

今度.TOP 左=GEN 腕.ACC かける-CAUS-SEQ BEN-HON-IMP1

「今度は左の腕でやらせて下さい。」

B: φidzai=ja: nidziri=nteo:n kan-a:n-munnu, φidzai=ja jukun tea:=ga ja-ra=ja:

左=IP 右=できえ 敵う-NEG-CSL 左=TOP 余計 どう=FOC COP-DUB=SFP

「左か。右できえ敵わないのに、左は余計どうだろうか?」

A: wanne: φidzaigatti ja-ibi:-ru

私は 左きき COP-POL-ADN

「私は左ききなんです。」(芝居, 694)

主語が三人称

ra の文の主語が三人称の場合は、話し合いの場面にはない第三者の事象についての話し手の〈疑い〉を表す。多くは思考途中であることを表したり、はっきりしない記憶を引き出しながら話したりする際に用いられ、自問のような非対話的な用いられ方が多い。

次の三例では、疑問詞に ga が付くことによって話し手の疑問が焦点化されている。

221) [B が豆腐屋に行くと言って。あそこの店の豆腐はおいしいかどうか聞かれて、どうだろうか考えている。思考途中であることを表している]

A: ʔama=nu to:ho: ma:sam=i
 あそこ=GEN 豆腐.TOP おいしい=YNQ
 「あそこの豆腐はおいしいか。」

B: t̄ea:=ga ja-ra. wannin hadzimiti=du jan=de:
 どう=FOC COP-DUB 私.ADD 初めて=FOC COP=SPF
 「どうだろう。私も初めてだよ。」

A: narabite-e: ʔama=ndze: ko:n=na=jo:
 並ぶ-SEQ.TOP あそこ=LOC.TOP 買う=PROH=SPF
 「並んでまではあそこでは買うなよ。」(実践, 33)

222) [首里に帰った B の元夫が子供を連れに再び島に帰って来る。里之子とは元夫のことで役職名。子供の祖母 A と B の会話。離れ離れになってしまう親子の将来はどうなっていくのかと A が自問している]

A: biru:, ʔiteide:d̄zi nat-o:-eiga
 (人名) 一大事 なる-PROG-ADVRs/(NASS)
 「ビルー、大変な事になっているよ…」

B: nu:=ga. ʔappa:, nu: ja=ga
 何=WHQ お母さん 何 COP=WHQ
 「どうしたの？お母さん、何？」

A: biru:, sui=nu satunuei=ga menso:t̄e-o:-eiga
 (人名) 首里=GEN (人名)=NOM 来る.HON-PROG-ADVRs/(NASS)
 「ビルー、首里の里之子がいらっしやったが…」

B: satunuei=ga
 (人名)=NOM
 「里之子が…」

A: guni:d̄zi ʔaja:me:=n madzun ja-mie:-eiga
 御内儀 奥様=ADD 一緒 COP-HON-ADVRs/(NASS)
 「御内儀の奥様も一緒にいらっしやるが…」

B: ha:me:
 祖母.CL
 「おばあちゃん！」

A: kunu warabe: so:-iga: ʔar-an=i
 この 子供.TOP 連れる-PUR.TOP COP-NEG=YNQ
 「この子供を連れにではないのか…」

(B は子どもを強く抱きしめる)

ʔakijo:, kunu ʔujakk^{wa} t̄ea:=ga nat-i ʔiteu-ra
 INTJ この 親子 どう=FOC なる-SEQ 行く-DUB
 「ああ、この親子どうなって行くやら。」(芝居, 584-586) (用例 7 と一部重複)

223) [可哀そうなわが子の運命はどうなのか、自分に問いかけている]

A: ʔiteitui-busa-ru kukuro: jamajama samadzama ʔa-eiga, samure:=nu d̄ziri kado:
 引き取る-DES-ADN 心.TOP やまやま 様々 ある-ADVRs 侍=GEN 義理 格式.TOP
 「引き取りたい気持ちはやまやま様々あるが、侍の義理格式は」
 ʔuɕi:mun jan ja-gutu, ʔja: t̄eui=ga kk^{wa}=tucei sudatit-i turac-i
 大きな物 COP COP-CSL 2SG 一人=NOM 子供=として 育てる-SEQ BEN-IMP1
 「大層なものだから、お前一人で子供を育ててくれ。」

B: samure:=nu d̄ziri=ndi ʔi-ee: ʔansuka ʔuçi:mun ja-ibi:m=i
 侍=GEN 義理=QT 言う-NLZ.TOP それ程 大きな物 COP-POL=YNQ
 「侍の義理と言うのは、それ程大層なものですか。」

watta: guto:ru eimudzimu=no: wakaj-abir-an
 IPL.GEN ような 身分の低い者=NOM.TOP わかる-POL-NEG
 「私のような身分の低い者ではわかりません。」

A: teiru: jurute-i k^wir-i
 (人名) 許す-SEQ BEN-IMP1
 「チルー、許してくれ。」
 (歌「皆売り賛成節」)

B: ʔakijo:, kunu ʔumig^wa. nu:=nu ʔmmari jat-a-ra. mibun ne:n wami=ni
 INTJ この 子 何=GEN 生まれ COP-PST-DUB 身分 ない 我身=DAT
 「ああ、この子よ。何の生まれだったのか¹¹⁸。身分のない私に」
 nas-att-a-ru tamini ikig=nu ʔuja=ni=n mieitir-arit-i
 産む-PASS-PST-ADN 為に 男の 親=DAT=ADD 見捨てる-PASS-SEQ
 「生まれたために男の親にも見捨てられて…」(芝居, 626)

224) [心内の疑問を表現しているともいえるし、間接的な質問ともいえる]

A: ʔaja:=tai. jattei:=ja ʔanci ʔumudui=nu ususa-ibi:-ru=ja:
 母=POL.F 兄=TOP とても お戻り=NOM 遅い-POL-ADN=SFP
 「母上。兄さんは本当にお戻りが遅いですねえ。」

B: ʔan ja=sa. ʔasateigaki ee-i ʔnd̄-o:-kutu na: ke:t-i ku:-wa=ru nai-eiga
 そう COP=SFP 早起き する-SEQ 出る-PROG-CSL FIL 帰る-SEQ 来る-CND=FOC POT-NASS
 「そうだねえ。朝早起きして出ているから、もう帰って来なくちゃいけないのだけれど。」

A: tutteitei=n ne:ran ʔuguciku=kara=nu ʔujubidaci nu:gutu ja-ibi:-ra
 突拍子=ADD ない.ADN お城=ABL=GEN お呼び出し 何事 COP-POL-DUB
 「急にお城からのお呼び出し何事でしょうか。」

eiwa=eei na-ibir-an=sa
 心配=で なる-POL-NEG=SFP.MIR
 「心配でなりません。」(芝居, 828) (用例 66 と同文)

次の二例では、具体的な可能性が提示された〈疑い〉の文である。事象が過去のことなら、はっきりしない記憶から引き出した不確かな情報であることを表し、現在の事象なら、現在のポテンシャルなことについて、一つの可能性としての話し手の判断を述べる(つぶやく)文となっている。

225) [話者は元貴族の女性。昔の事について語る。過去のはっきりしない記憶から情報を引き出しながら話している]

ʔanci d̄zu:itei na-i=nu eigi^watsu=ga ja-ra:¹¹⁹ ʔanu ʔuφud̄zund̄zanci:me:=ga to:k'lo:=nakai
 そして 十一 なる-INF=GEN 四月=FOC COP-DUB FIL おじい様.CH=NOM 東京=LOC
 「そして11歳になる四月かしら。あのうおじい様が東京に」

ʔutee:-nee:-kutu kanna:d̄zi ʔanu: nna so:t-i k-u:=nditei=nu (後略)
 いる.HON-HON-CSL 必ず FIL 皆 連れる-SEQ 来る-IMP=QT=GEN
 「いらっしゃるので、必ずあのう皆連れて来いと…」(琉総, 460)

¹¹⁸ 直訳は「何の生まれだろうか」だが、意識した。

¹¹⁹ 思考途中のため, jara: と語尾の音が長めに発音されているのだと思われる。

205) [縁がないからなのだろうか、事象の理由・原因の可能性について述べている]

wan nate-a-ru inagu=nu ?uja: tei:dzi=nu dzuri. mata ikiga=nu ?uja: mibun ?a-ru
 私.ACC 産む-PST-ADN 女=GEN 親.TOP 辻=GEN 芸妓 また 男=GEN 親.TOP 身分 ある
 「私を産んだ女の親は辻の芸妓。また男の親は身分ある」
 sui=nu samure:=ndi?ite-i sudati=nu ?uja=kara teik-asatt-o:-ibi:-eiga
 首里=GEN 侍=QT 育て=GEN 親から=ABL 聞く-PASS-PROG-POL-ADVRS
 「首里の侍だと育ての親から聞かされていますが」
 in=nu=ga ne:ran ?a-ra namateikiti jukui=nu wakaj-abir-an
 縁=NOM=FOC ない ある-DUB 未だに 行方=が わかる-POL-NEG
 「縁がないのか未だに行方がわかりません。」(芝居, 706)

次のような主語が三人称の ra の文では、文末ではなく文中の従属節としてあらわれ、述語に wakaran(わからない)等、話し手に知識や情報等がないことを表す表現を伴って、「~かどうかわからない」という文を作り、対話的な用法となる(文全体としては、一人称文)。

226) A: nama=nu ?uta: nu:=ndi ?i-ru ?uta ja-ibi:=ga

今=GEN 歌.TOP 何=QT 言う-ADN 歌 COP-POL=WHQ
 「今の歌は何と言う歌ですか。」

B: nu:=ndi ?i-ru ?uta=ga ja-ra wakar-an-eiga, wa:=ga warabi=nu dzibun ?ubi:t-a-ru ?uta

何=QT 言う-ADN 歌=FOC COP-DUB わかる-NEG-ADVRS 私=NOM 子供=GEN 時 覚える-PST-ADN 歌
 「何と言う歌かどうか分からないが、私が子供の時覚えた歌」

ja-gutu kunu ?uta=nu teimue: teitei-busat-a-gutu=ru jan=de:

COP-CSL この 歌=GEN 意味.ACC 聞く-DES-PST-CSL=FOC COP=SFP
 「だからこの歌の意味を聞いたかったんだよ。」(芝居, 542)

227) A: n:te-an=do: nu:=ga ?unu tabinteo: ?itta:=ga nu: nat-o:=ga

見る-PST=SFP 何=NOM あの 旅人.TOP 2PL=GEN 何 なる-PROG=WHQ
 「見たぞ。どうしたあの旅人はお前たちの何なのか。」

B: wa: ?uja nat-o:-ibi:-eiga tako:jama ?irigutei=uti jukut-i ?utturu?utturu su-ru ?utei=ni

私.GEN 親 なる-PROG-POL-ADVRS (地名) 入口=LOC 休む-SEQ うとうと する-ADN 内=DAT
 「私の親ですが多幸山入口で休んでうとうととしている内に」

ma:=nkai=ga ?ndz-a-ra wakar-an nat-i, nama kame:t-i ?attcu-ru ba:=du ja-ibi:-ru

どこ=DAT=FOC 行く-PST-DUB わかる-NEG なる-SEQ 今 探す-SEQ 歩く-ADN 訳=FOC COP-POL-ADN
 「どこに行ったのかわからなくなって、今探して歩いている訳です。」(芝居, 802) (用例 183 と一部重複)

228) A: sari. ?uteina:=nkai=nu ?uni=nu nama ?a-ibi:-eiga, kuri nugae-i:ne: mata ?une:

あの.M 沖縄=DAT=GEN 舟=NOM 今 ある-POL-ADVRS これ.ADD 逃す-CND また 舟.TOP
 「あのう。沖縄への舟が今ありますが、これを逃すとまた舟は」

?itei=ga ?a-ra wakaj-abir-an-eiga, tea: s-abi:=ga satunuei

いつ=FOC ある-DUB わかる-POL-NEG-ADVRS どう する-POL=WHQ 里之子
 「いつあるかわかりませんが、どうしますか？里之子。」

B: eigu ?iteu-kutu jutaeiku kange:t-i turae-i

すぐ 行く-CSL 宜しく 考える-SEQ BEN-IMP1
 「すぐ行くから宜しく取り計らってくれ。」(芝居, 582)

229) A: mateige: ne:ran. ?ugueiku=nu ?utcitumi e-imirasun=di ?ite-i ja=sa

間違い ない お城=GEN お勤め する-CAUS=QT 言う-SEQ COP=SFP
 「間違いはない。お城のお勤めさせようと言うのだよ。」

B: jattei:=ja budzi:gakumun=nu ?a-miee:-kutu, (中略) i: hanaci=ga ja-ra wakaj-abir-an=ja:
 兄.CH=TOP 武芸学問=NOM ある-HON-CSL 良い 話=FOC COP-DUB わかる-POL-NEG=SFP
 「兄さんは武芸・学問がありますから、良い話かもわかりませんね。」(芝居, 832) (用例 140, 186 と重複)

nu:ga jara (何だか) という形がフレーズとして定着し、副詞の機能を果たしている。

230) A: dzitee: kannu:na hanacinu ?at-i=ru ja-ibi:-eiga

実.TOP 大切な 話=NOM ある-SEQ=FOC COP-POL-ADVRS
 「実は大切な話があるのですが。」

B: nu:gutu ja-ibi:=gaja:

何事 COP-POL=YNQ3
 「何事ですか。」

A: sari, ?uming^wanume:

INTJ.M お嬢様
 「あのですね, お嬢様。」

B: tari. na: ?uming^wa=ndi ?ite-e: k^wi-miso:n=nake: . nu:=ga ja-ra hadzikasa-ibi:-eiga

INTJ.F FIL お嬢様=QT 言う-SEQ.TOP BEN-HON=PROH 何=FOC COP-DUB 恥ずかしい-POL-ADVRS
 「あの, もうお嬢様と言っては下さいますな。何だか恥ずかしいですわ。」

A: nu:=nu hadzikasa-ibi:=ga

何=NOM 恥ずかしい-POL=WHQ
 「何が恥ずかしいのですか。」(芝居, 1088)

231) [荒くれ者に追いかけていた若い旅人 B とそれを助けてくれた女 A]

A: wanne: teu:=ja du:=nu wata jamate-i nate-e:-ru kk^wa=tu ?iteat-o:-ru kukurumutei sun

私.TOP 今日=TOP 自分=GEN 腹.ACC 痛める-SEQ 産む-RES-ADN 子=COM 会う-PROG-ADN 心地 する
 「私は今日は自分の腹を痛めて産んだ子と会っている気がするよ。」

B: wannin nu:=ga ja-ra na:=ja tanin=de: ?um-a:r-an=do:ja:

私.ADD 何=FOC COP-DUB 2SG.HON=TOP 他人=等 思う-POT-NEG=SFP
 「私も何だか貴方は他人とは思えないよ。」(芝居, 678)

232) teu:=nu jattei:ta: budzi:=nu su:bo: , nu:=ga ja-ra wanne: n:dzu-ei=n ?uturusau-u

今日=GEN 兄達.GEN 武芸=GEN 勝負.TOP 何=FOC COP-DUB 私.TOP 見る-NLZ=ADD 怖い-CSL
 「今日の兄さん達の武芸の勝負, 何だか私は見るのも怖くて」

na-ibir-an. ja-ibi:-kutu ?uguciku=ηkai ?ik-e:ja:=ndi ?umuj-abir-an

POT-POL-NEG COP-POL-CSL お城=DAT 行く-INT=QT 思う-POL-NEG
 「仕方ありません。だからお城に行こうと思いません。」(芝居, 858)

233) ?an jar-e: eimu-eiga. nu:=ga ja-ra eiwa=ei nar-an=sa

そう COP-CND 済む-ADVRS 何=FOC COP-DUB 心配=INST POT-NEG=SFP
 「そうならいいけど...何だか心配でならないよ。」(芝居, 868) (用例 68 と重複)

234) teikaguru nu:=ga ja-ra munu=nu teiteigamarasan-u, ?irunna hanaci=nu teik-ari:-gutu=te:

近頃 何=FOC COP-DUB もの=GEN 聞くにたえない-MIR 色んな 話=NOM 聞く-PASS-CSL=SFP
 「近頃何だか噂が聞くにたえなくて, 色んな話が聞こえるからねえ。」(芝居, 900)

235) [世替わりの時代で粗末な服を着ているので...]

A: ?ai, ?uming^wanume: nage:sa kuri=madi gutaceani⁷

INTJ お嬢さん 久しぶり これ=LIM 御達者に.YNQ3
 「おお, お嬢さん久しぶりこれまで元気ですか?」

B: kunujo:na eigata=ei nu:=ga ja-ra hadzikasan-u

このような 姿=INST 何=FOC COP-DUB 恥ずかしい-CSL

「このような姿で何だか恥ずかしくて…」

A: nu:=nu hadzikasa-ibi:=ga. ?uri=n kuri=n dzici:=du ja-ibi:-ru

何=NOM 恥ずかしい-POL=WHQ それ=ADD これ=ADD 時世=FOC COP-POL-ADN

「何が恥ずかしいのですか。それもこれもご時世ですよ。」(芝居, 1058)

次にみる用例のように, ra の文の中には, 〈疑い〉の文から派生し, 結果的に〈反語解釈〉の意味合いも併せもつようになった文もみられる。

236) A: teiru:, teiciti hajamatta kange:=ja su=na=jo:ja:. wanne: ?itta: ?ujakk^wa=nu mumutu

(人名) 決して 早まった 考え=TOP する=PROH=SFP 1SG.TOP 2PL 親子=NOM 百代

「チルー, 決して早まった考えはするなよな。私はお前達親子がこれからもずっと」

?itei=madi=n eijawaei=ni kurasu-ei kaminige: sun=do:ja:

いつ=LIM=ADD 幸せ=DAT 暮らす-NLZ 神願い する=SFP

「いつまでも幸せに暮らすこと天にも願う気持ちだよ。」

B: eijawaei de:-bi-ru. ?undzu=tu wakarit-i kuri=kara=nu ?atu watta: ?ujakk^wa=ηkai

幸せ COP2-POL-ADN 2SG.HON=COM 別れる-SEQ これ=ABL=GEN 後 1PL 親子=DAT

「幸せですか? 貴方と別れてこれからの後私達親子に」

eijawaei=ndi ?i:-ru kutu=nu ?ai=ga s-abi:-ra=ja:

幸せ=QT 言う-ADN 事=NOM ある=FOC する-POL-DUB=SFP

「幸せという事がありますでしょうか。」

A: teiru:, jurute-i k^wir-i

(人名) 許す-SEQ BEN-IMP1

「チルー, 許してくれ。」(芝居, 630)

主語が三人称の場合も, 《対象的な内容》が結果的に話し手と聞き手の両方に関わる内容を差し出す場合, 〈疑い〉を聞き手と確認する対話的な用法がみられる。ここでも raja: という形をとるが, 質問文の raja: の文とは異なる。これらの文の《問いかけ性》は弱く, いまだ質問文にはなりきっていない。〈疑い〉の文のまま聞き手に伝える。話し手の疑いが文中で ga によってとりたてられている。

237) [役人が村人に収集をかけていると聞いた若い連中がまた税金を取り立てに来たのではないかと不安になって噂をしている。それを聞いた村の老人 B の台詞]

to: ni:ee:-ta:. ?e:guni=kara jakunin=nu mencee:-ru ka:dzi i:kutu=nu ?at-a-ru

INTJ 青年-PL 親国=ABL 役人=NOM 来る.HON-ADN 度 良い事=NOM ある-PST-ADN

「そうだ, 若者よ。親国(首里王府)から役人がいらっしゃる度よい事があった」

tamee: ne:ran. kundu=n mata kamaraci: kuto: ?ar-aη=ga ?a-ra=ja:

試し.TOP ない 今度=ADD また ややこしい 事.TOP COP-NEG=FOC ある-DUB=SFP

「試しはない。今度もまたややこしいことではないだろうか。」(芝居, 546) (用例 8 と一部重複)

238) [素行の悪い夫に着物を用意してくれと頼まれたが断ったので別の女のところに行った夫の話]

A: nabema:-me:=ηkai tein eiko:r-ae-i:ga=nji ?ite-i ?ndz-a-eiga, tea:=ga¹²⁰ nat-a-ra=ja:

(人名)-HON=DAT 着物.ACC 準備する-CAUS-PUR=QT 言う-SEQ 行く-PST-ADVRS どう=FOC なる-PST-DUB=SFP

¹²⁰ 筆者が調査協力者に確認後, ga を加筆・修正した。

「ナベマーさんに着物用意させにと行って出て行ったが、どうなったんだろうか。」

B: ?an ja=saja=na:, ?appa:

そう COP=SFP=POL 母

「そうですね、お母さん…」(芝居, 578)

次の用例は、〈疑い〉というよりも、話し手の判断はほぼ正しいと決めつけている。その決めつけの具体的な内容が ga による焦点化で明示されている。

239) [友だちにいじめられて泣いてかえってくる孫 A と祖母 B]

A: ducig^wa:-ta:=ga su: uranu:=n|j ?ite-i, nak-e: su-tan

友達-PL=NOM 父 いない人=QT 言う-SEQ 泣け-IMP2 する-PST2

「友達がお父さんいないと言って泣かされた。」

B: kuni-ça: tuka:=ga jat-a-ra=ja:. ha:me:=ga ?ndz-a:ni ?akkuc-i k-u:

そいつ-PEJ (人名)=NOM COP-PST-DUB=SFP 祖母=NOM 行く-SEQ 叱る-SEQ 来る-INT

「そいつはトッカーだっただろう。婆ちゃんが行って叱って来よう。」(芝居, 584)

ra の文のまとめ

ここでは、主に〈疑い〉を表す ra の文について記述した。話し手の疑念を心内でつぶやいたり、独り言で述べたりする〈疑い〉というモダリティは、ra の文の基本的な働きである。そのような話し手の〈疑い〉を聞き手の目の前で発話することによって、意図的あるいは間接的に〈疑い〉を聞き手に伝える対話的な用法もある。また、聞き手の目の前で〈疑い〉を述べることで、間接的に聞き手から情報を引き出すような ra でいいきる文は、〈疑い〉の文から派生し〈間接的な質問〉を表す。これらの文については、質問文の章を参照されたい。

表 27 ra が用いられる文の一覧

(a) 《ポテンシャル》	(b) 《質問》
(i) 〈疑い〉	(i) 〈間接的な真偽質問〉
	(ii) 〈間接的な補充質問〉

3.3.2 gaja: の文

gaja: の文は、〈はなしあい〉という場面では頻用される形式で、話し手の〈疑い〉を表したり、真偽質問文や補充質問文にもなれる。ここでは、〈疑い〉の意味あいについて記述する。

主語が一人称の場合は、話し手の事象についての〈疑い〉を表し、主語が二人称の場合は、聞き手の事象についての〈疑い〉を表し、主語が三人称の場合は、第三者の事象についての話し手の〈疑い〉を表す。

主語が一人称

一人称を主語にした〈疑い〉を表す gaja: の文は、話し手自身に関わる過去・現在・未来の不確かなことについて話し手の疑念を述べる。次の用例のように、《対象的な内容》が過去の事象ならば、話し手が忘れてしまっている話し手自身の過去のことを差し出す。

240) ?ai, nu: ?in=tei ja-ta=gaja:. tei:-waeit-i ne:n=sa (用例 58 と同文)

INTJ 何.ACC 言う=QT COP-PST=DUB PFX-忘れる-SEQ CPL=SFP

「あれっ、何を言うってだったかなあ。すっかり忘れてしまったよ。」(語遊「チーシッタイン」2011/11/13, p. 19)

《対象的な内容》が現在の事象ならば、話し手自身に関わる不確かな現在の事象についての話し手の〈疑い〉を表す。

241) A: teikaguro: taru:=nu teidzin=nu wassar=ja:

近頃.TOP (人名)=GEN 機嫌=NOM 悪い=SFP

「近頃タルーの機嫌が悪いね。」

B: wa:=ga dziru:=nu kutu=bike:dzi φumi:-kutu=du ja=gaja:

私=NOM (人名)=GEN こと=ばかり ほめる-CSL=FOC COP=DUB

「私がジルーのことばかりほめるからじゃないかねえ。」(全国, 1-6-4)

《対象的な内容》が未来の事象ならば、話し手の未来の動作についての〈迷い〉や〈思考途中の考え〉を表す。

242) na: de:dzi nat-o:n. ta:ri:=ŋkai tea: e-i φinto: su=gaja:

もう 大変な事 なる-PROG 父.CH=DAT どう する-SEQ 返答 する=DAB

「もう大変な事になった。父さんにどうやって返答しようかなあ。」(語遊「デージナトーン」2010/8/8, p. 21)

243) A: ?ant^heo: dziko: janamun=do:

あの人.TOP とても 嫌な奴=SFP.ASS

「あの人とはとても嫌な奴だぞ。」

B: ?ansuka jam=i

それ程 COP=YNQ

「そんなになのか?」

A: jan=do:

COP=SFP.ASS

「そうだぞ。」

B: ?ance: na: ?ik-an ?uteu=gaja:

それでは もう 行く-NEG.SEQおく=DUB

「それじゃあもう行かないでおこうかなあ。」(実践, 33)

未来の不確かな、しばしば不安なことについて「(私はこの先) どうしたらいいだろうか」と悩むような場面では、常套句のように用いられる。

244) [民話。独り身の青年が台風続きのため、食料が尽きてしまつてつぶやく]

tea: s-a-re: eimu=gaja:

どう する-PST-CND 済む=DUB

「どうしたらいいだろうか。」(大沖 34, 32)

245) watta: gudzira o:sama b'o:tee: ?arikuri teikute-i=n ateiran mace: na-miso:r-an

IPL (人名) 王様 病気.TOP あれこれ 尽くす-SEQ=ADD (不明) まし.TOP なる-HON-NEG

「私達グジラ王様の病気はあれこれ尽くしても一向によくならない」

tea: e-e: jutasa=gaja:

どう する-CND よろしい=DUB

「どうしたらいいだろうか。」(猿)

- 246) [民話。助けてもらった恩返しにこっそり竜宮城から人間の男にご馳走を運んでいた人間の女に化けた魚だが、男に姿を見られてしまっって言う]

tteu=ni eigata n:r-att-a-ru ?i:=ja mutu=nu ?iju=ηkai mudur-ar-an

人=DAT 姿.ACC 見る-PASS-PST-ADN 上=TOP 元=GEN 魚=DAT 戻る-POT-NEG

「人に姿を見られた以上は元の魚に戻れないし」

k^wattei: hakubu-ru kutu=n na-ibir-an. tea: s-a-re: eim-abi=gaja:

ご馳走.ACC 運ぶ-ADN 事=ADD POT-POL-NEG どう する-PST-CND 済む-POL=DUB

「ご馳走を運ぶ事もできません。どうしたらいいのしょう...」(大沖 35, 40)

主語が聞き手も含んだ一・二人称の場合、話し手と聞き手の双方に関わる事象についての話し手の〈疑い〉を表す。

- 247) A: ?unu ?ato: watta: tai ja=sa

この 後.TOP 1PL 二人 COP-SFP

「この後は俺たち二人だな。」

B: watta:=n jub-ari: s-a=gaja:

1PL=ADD 呼ぶ-PASS する-PST=DUB

「俺たちも呼ばれたりするのかな。」

A: ?anu: kunu: s-a-ru teime: ?a-ru hadzi=ja:

あの方 このう する-PST-ADN 罪.TOP ある-ADN INFR=SFP

「はっきり言わなかった罪があるだろうな... (lit. あの方このうした罪はあるだろうな)」

B: eikam-aη-gutu sa:ranai ?i-re: eimut-e:-ru-munnu

怖じける-NEG-で さっと 言う-CND 済む-RES-ADN-FN

「ビビらんでさっと言えばよかったものを。」(芝居, 978) (用例 123 と同文, 142 と一部重複)

主語が二人称

二人称を主語にした〈疑い〉を表す gaja: の文は、聞き手について不確かな事象に対する話し手の疑いを述べる。

- 248) [B は A が殺人の犯人だと証言するが、A が否認。A は B を脅す]

A: bitei=kara citi=nu ?agai-ne: ?itta:=ja ?iteite-e:-uk-an=do:. tacika wan jat-i:

別=ABL 犯人=NOM あがる-CND 2PL=TOP 生きる-SEQ.TOP-おく-NEG=SFP 確か 1SG COP-PST.YNQ

「別の所から犯人があがったらお前達は生きてはおかないぞ。確かに俺だったか?!」

B: na:=ndi ?umut-a-eiga, ?ance: na:=ja ?ar-an=du ?at-a=gaja:

2SG.HON=QT 思う-PST-ADVRS CNJ 2SG.HON=TOP COP-NEG=FOC ある-PST=DUB

「(怖気ながら)貴方だと思ったけど、それじゃあ貴方ではなかったのかなあ。」

ndzi, jama:. ?ja:=ja tea: ?umui=ga

INTJ (人名) 2SG=TOP どう 思う=WHQ

「どうだ? ヤマー。お前は どう思う?」(芝居, 966)

主語が三人称

三人称を主語にした〈疑い〉を表す *gaja:* の文は、話し手と聞き手以外の第三者に対する過去・現在・未来の不確かなことについて話し手の疑いを述べる。

249) ?ami ϕ ut-o:-ei \acute{g} a, masaci:, sentakumono ?itt-e:=gaja:/?irit-a=gaja:

雨 降る-PROG-ADVRS (人名) 洗濯物 入れる-RES=DUB/入れる-PST=DUB

「雨が降ってるけど、正志、洗濯物入れたかなあ。」(調査, 2015/10/19)

250) [民話。独り身の青年が台風続きのため、食料が尽きてしまったが、ある朝目が覚めると、枕元にご馳走が置いてあったので不思議そうにつぶやく]

kunujo:na k^wat \acute{t} ei: hakud-i \acute{t} eu:-ee: ma:=nu ta: ja=gaja:

このような ご馳走.ACC 運ぶ-SEQ 来る-NLZ.TOP どこ=GEN 誰 COP=DUB

「このようなご馳走を運んで来るのはどこの誰だろうか。」(大沖 34, 33)

251) A: nu:gana i: kange:=ja ne:ran=gaja:

何か 良い 考え=TOP ない=DUB

「何か良い考えはないかなあ。」

B: to: nna=eei \acute{t} eiburu migurae-e:

INTJ 皆=INST 頭.ACC 回す-IMP2

「さあみんなで頭を回せ。」(猿, 4)

252) [男 A が女を家から追い出そうと女の家に行く]

\acute{t} eu:=ne: ?amma:-g^wa: so:dan ee-i subite-i ?nd \acute{z} aei-wa=dujaru

今日=DAT.TOP 婆-DIM.PEJ 相談 する-SEQ 引きずる-SEQ 出す-CND=OBLG

「今日こそババア(と)話をつけて追い出さないとな。」

hei, ?amma:=jo:.. ?amma:=jo:.. ?une ur-an=du ?a=gaja:

INTJ 婆=VOC 婆=VOC INTJ いる-NEG=FOC ある=DUB

「おい、おばさん。おばさん。あれ、いないのかな。」(芝居, 716)

253) A: ?aja:, ?i \acute{t} eu=do:

母.CH 行く=SFP.ASS

「お母さん、行くよ。」

B: ?ja:=n daigaku sotsug^o:su=saja:.. ta:ri:=nu mence:-ne: ?ikira ?ussat-a=gaja:

2SG=ADD 大学.ACC 卒業する=SFP.MIR 父.CH=NOM いる.HON-CND どれ程 嬉しい-PST=DUB

「お前も大学を卒業するんだねえ。父さんが生きていたらどれ程嬉しかったらろうか...」(リア, 29)

次の用例は、主語が不特定多数の一般的な事象を文が差し込んでいる。聞き手の発話を話し手の経験や常識と照らし合わせてみたとき、通常では考えられないという話し手の〈疑い〉が差し込まれている。

254) [昔、豆腐を食べてお腹を壊したという B に対して、原因は豆腐ではなく、フカを食べたからじゃないかと疑う A]

A: to: ϕ u kad-i ϕ i:n= \acute{t} ei=n ?a=gaja:

豆腐.ACC 食べる-SEQ 下す=QT=ADD ある=DUB

「豆腐を食べて下すってあるかなあ?」

ju:saine: ju:binukk^wa: ?uja:=ga ?at \acute{t} e-e:n=te:

ひょっとして フカ売り=NOM 歩く-RES=SFP

「ひょっとしてフカ売りが歩いていたんじゃないのか。」

B: to:φu kamu-ei=to: madzo:n eigu ha:e: jat-a=sa

豆腐.ACC 食べる-NLZ=COM.TOP 同時 すぐ 走る事 COP-PST=SFP

「豆腐を食べると同時にすぐ(トイレに)走ったよ。」(実践, 33) (用例 77 および 157 と同文)

次の用例のように、引用節でも用いられる。

255) A: su:=ni nigaj-a:i mi:tu nar-a=ja:

父=DAT 願う-SEQ 夫婦 なる-HORT=SFP

「お父さんをお願いして夫婦なろうな。」

B: tea:=ga ja-ra=ja: ʔaφi:gʷa:ʔumuja:=ja ʔama=ni=n kuma=ni=n ba:kiwaki ja=sa

どう=FOC COP-DUB=SFP 兄思い=TOP あそこ=DAT=ADDそこ=DAT=ADD 策分け COP=SFP

「どうかしら。お兄さんを思っている人はあそこにもそこにも策に分けるほどよ。」

tingʷasagʷasa ja=sa. watta: guto:-ru janaka:gi:ja ʔaφi:gʷa: tudzi=ne:

うようよいる様 COP=SFP 1PL.GEN ようだ-ADN 不美人=TOP 兄.GEN 妻=DAT.TOP

「うようよいるわ。私達のようなブスはお兄さんの妻には」

nar-ari:=gaja:=ndiʔitei eiwa e-i: nar-an=sa

なる-POT=DUB=QT 心配 する-SEQ なる-NEG=SFP

「なれるのかしらと心配でたまらないわ。」(芝居, 1012) (用例 67, 214 と同文)

gaja:の文のまとめ

ここでは、〈疑い〉を表す gaja:の文について記述した。gaja:の文の基本的な働きを定めるのは難しい。〈疑い〉は gaja:の文が表せるモダリティのひとつにしか過ぎず、文脈によってモダリティが変化しやすい。〈真偽質問〉や〈補充質問〉としての働きも gaja:の文の主要なモダリティである。質問文としての機能については、質問文の章を参照されたい。

表 28 gaja:が用いられる文の一覧

(a) 《ポテンシャル》	(b) 《質問》
(i) 〈疑い〉	(i) 〈間接的な真偽質問〉
	(ii) 〈間接的な補充質問〉

3.3.3 疑い文のまとめ

〈疑い〉を表す主な形式として、ra の文と gaja:の文があることを述べた。ra は歴史的に推量形式であったものが現在〈疑い〉を表していて、基本的には独話的な性質が強い。したがって、〈疑い〉は ra の文の基本的な働きと位置づけることができよう(質問文としての使用は周縁的かつ衰退気味)。また、文中で疑問の焦点となる部分に ga による焦点化を非常に受けやすいという特徴をもっている。

一方、gaja:の文は ra の文と比べ、〈はなしあい〉の場面で使用される頻度が高く、文脈に応じて、質問文に派生・移行しやすいという特徴があり、対話的な性質が強い。焦点化のあらわれ方に関してはニュートラルだが、もし疑問部分に焦点を当てる場合は du が用いられる。

思い出させる文と前提を表す文

ここでは、再びリアルな事象を差しだす「思い出させる文」と「〈前提〉を表す文」について述べる。

〈前提〉を表す文とは、工藤（2014）で述べられている日本語の「だろう」の〈事実確認〉用法、つまり「《聞き手の既知情報＝話し手と聞き手との共有情報》であることを明示し、「《はなしあい》の前提として機能する」文のことである。首里方言の ee:ja: という形式を述語に含む文は、このような〈前提〉を表す文として機能する。日本語で推量形であられるのとは異なる。

一方で、聞き手が忘れていたり、気づいていなかったりする場面において〈聞き手が知っているべき情報〉を差しだし、思い出させたり、気づかせたりする機能を持つ文がある。日本語ではこのような文も推量形で表される。しかし、思い出させる文を〈前提〉を表す文と区別するのは、〈前提〉を表す文が《聞き手の既知情報＝話し手と聞き手との共有情報》を差しだすのに対して、思い出させる文は、《聞き手が知っているべき情報＝聞き手が忘れていたり、気づいていない情報》を伝えて、聞き手の認識を変えようと働きかける機能がある点で、〈前提〉を表す文と機能が異なっているからである。

また、〈前提〉の文は、話し手が聞き手に最も伝えたいことの前置きを述べる文であるが、思い出させる文は、話し手が聞き手に最も伝えたいことそのものである。

名護市幸喜方言では、さらに〈前提〉を表す文と思い出させる文とであられる形式が異なっている。〈前提〉を表す文では、ee:ja: が用いられ、思い出させる文では、主に muna: と mune: という形式が用いられている（かりまた, 2016）。用いられる形式が異なるのは、これら二つの文の機能が異なっているからである。日本語と首里方言と名護市幸喜方言の〈推量・前提・思い出させる〉の基本形式の関係をまとめるとの図のようになる¹²¹。

表 29 日本語・首里方言・幸喜方言の〈推量・前提・思い出させる〉の基本形式

	〈推量〉	〈前提〉	〈思い出させる〉
日本語	だろう	だろう	だろう
首里方言	hadzi	ee:ja:, (ee:)	ee:
幸喜方言	padzi	ee:ja:	muna:, mune:, (ee:)

本論では、圧倒的に使用頻度の多い思い出させる文について述べてから、〈前提〉を表す文について述べる。思い出させる文では主に ee: が用いられ、〈前提〉を表す文では主に ee:ja: が用いられる。首里方言の〈前提〉を表す文と思い出させる文は、基本的には形式の上でも対立していると言えるが、厳密に言えば、主に ee:ja: が表せる意味領域に ee: が入りこんでいる。このことは、〈前提〉を表す文と思い出させる文が完全に切り離されて存在しているわけではなく、連続性を持っていることを示している。

3.4 思い出させる文

3.4.1 終助辞 ee: の文¹²²

聞き手が完全に忘れていていることを思い出させたり、全く気づいていない事象について、指摘し

¹²¹ 「ではないか」等の否定質問形式を除く。

¹²² ee: の起源については明らかではないが、形式名詞 ei (の) にとりたて助辞 ja (は) がついた形が歴史的・音韻的に融合した形である可能性がある（白田 & Rieser, 2016）。ee: の文のイントネーションは常に下降調である。ee: には〈推量〉の意味あいはないが、「だろう」や「ではないか」で日本語訳されることが多い。後述の ee:ja: の文と区別するために、「だろう」以外の形式（「ではないか」等）で訳す。

たり、気づかせたりする場合に **ee**: の文が用いられる。同時に、話し手は出来事内容について聞き手も知らなければならないと思っているか、聞き手も知っているべきだという態度で文を述べる。

主語が一人称

一人称を主語にした **ee**: の文は、聞き手が忘れていたり、気づいていない話し手自身の事象について述べながら、聞き手に対してそのことを思い出させたり、気づかせたりしようとしている。

256) A: kuri=kara φiradzu=kai ?utte:ʔndzi:-kutu, ?itta:=ja ?iteidzu:ku=tueci tatte-i¹²³ k^{wi}-nso:r-e:
 これ=ABL 裁判所=ALL 訴え出る-CSL 2PL=TOP 証人=として 立つ-SEQ BEN-HON-IMP2

「これから裁判所に訴え出るから、お前達は証人として立ってくれ。」

B: matca:=tu ?ane-i:ne: çittcia:=ee:

(人名)=COM そうする-CND 引き合わす=SFP

「マチャーとそうしたら引き合わせになるじゃないか。」(芝居, 952)

主語が二人称

二人称を主語にした **ee**: の文は、聞き手が忘れていたり、気づいていない聞き手の事象について述べながら、聞き手に対してそのことを思い出させたり、気づかせたりしようとしている。

例えば、次の用例では、聞き手の過去の動作について聞き手自身が完全に忘れていて、話し手がそのことについて **ee**: の文を用いて聞き手に思い出してもらおうと仕向けている。文の《対象的な内容》は、話し手が直接知覚した聞き手が主体の過去の事象なので、述語が **sutan** 形式であらわれている。**sutan** 形式は、聞き手も直接知覚したはずの過去の具体的な意志動作を **ee**: の文を用いて話し手が気づかせようと試みる場合にあらわれやすい。

257) A: ?uφuso: ?aφi:g^wa:=ja waçiri:=ru s-an=na:.. su:=ni nigaj-ai tai=ja
 間抜け 兄さん=TOP 忘れる=FOC する-PST=YNQ2 父=DAT 願う-SEQ 二人=TOP

「間抜け兄さんは忘れたんですか。父にお願いして二人は」

mi:tu nar-a=ja:=ndi ?i-ta=ee:

夫婦 なる-HORT=SFP=QT 言う-PST2=SFP

「夫婦になろうって言ってたじゃないか。」

B: ?e:, ?unu kutu=na:.. waçit-e:-ur-an=sa

INTJ その 事=YNQ2 忘れる-SEQ.TOP=いる-NEG=SFP

「ああ、その事か。忘れていないよ。」(芝居, 1010-1012) (用例 75 と同文)

次の主語が二人称の用例では、A は殺人犯であるが、知らないふりをしている。C は A が知っているはずの出来事を **ee**: の文を用いて伝えることで、A に自白させようとしている。

258) A: tuku:=ni jama:.. ta:=ni tamum-att-i, wan ?utus-a=ndi su=ga. tacika ko:ga:kic-i:
 (人名)=DAT (人名) 誰=DAT 頼む-PASS-SEQ 1SG.ADD 落とす-INT=QT する=WHQ 確か 頼被りする-SEQ

「トククーにヤマー。誰に頼まれて、俺を陥れようとしているのか。本当に頼被りして」

wanne: kamijamaduntci=kara ?ndzit-i tçu:-ti:

1SG.TOP (場所)=ABL 出る-SEQ 来る-PST2.YNQ

¹²³ 原本では, **tatei** (立ち) とあるが, 筆者が **tattei** (立って) に修正の上, 引用した。

「私は神山殿内から出て来たのか？」

(ドスをきかして、トゥクーBとヤマーCをにらむ殺人犯A)

B: ?anee: na:=ja ko:ga:kic-i: ?ndz̄it-i t̄eu:-ta-e: s-an=i. ja:, jama:
CNJ 2SG.HON=TOP 頬被りする-SEQ 出る-SEQ 来る-PST2-INF.TOP する-NEG=YNQ INTJ (人名)

「だって貴方は頬被りして出て来たじゃないか。なあ？ヤマー。」

C: ja=sa. na:=ja ho:t̄ea:-g^wa: susui-ta=ce:
COP=SFP 2SG.HON=TOP 包丁-DIM 拭く-PST2=SFP

「そうだ。お前は短刀を拭いていたじゃないか。」

A: ?ane-i:ne: kamijamape:t̄eino: wa:=ga kurute-a-ru t̄eimu ja=saja:
そうする-CND(人名).TOP 1SG=NOM 殺す-PST-ADN FN COP=SFP

「じゃあ、神山親雲上は私が殺したというんだな。」(芝居, 964)

次の用例では、主語が二人称というよりも、聞き手に直接関わる事象を聞き手が認識できていないため、*ce:*の文を用いてそのことを皮肉を込めながら知らせようと仕向けている。

259) A: t̄eurasugaice-i ?ama=kai=du ja-e: s-an=i

おしゃれする-SEQ あそこ=ALL=FOC COP-INF.TOP する-NEG=YNQ

「おしゃれしてあそこにじゃないですか？」

B: ?ar-an. ?ama=kae: ?ar-an=do:

COP-NEG あそこ=ALL.TOP COP-NEG=SFP.ASS

「違う。あそこにはないぞ。」

A: jan=te:. ?ja: t̄eira=ŋkai kak-att-o:=ce:

COP=SFP 2SG.GEN 顔=DAT 書く-PASS-PROG=SFP

「そうだろう。お前の顔に書いてあるじゃないか。」

B: jukuei ja=sa. wanne: nama: ?ama=kae: ?ik-an=do:ja:

嘘 COP=SFP 1SG.TOP 今.TOP あそこ=ALL.TOP 行く-NEG=SFP

「嘘だね。私は今はあそこには行かないんだよ。」(実践, 33) (用例 150 と同文)

主語が三人称

三人称を主語にした*ce:*の文は、聞き手が忘れていたり、気づいていない第三者の事象について述べながら、聞き手に対してそのことを思い出させたり、気づかせたりしようとしている。

例えば、次の用例は 嫁との関係に悩むベテラン主婦 A と、知り合いの年下の主婦 B との会話であるが、嫁に嫌われていると話す A に対して B が「嫌われてない。むしろ、よく考えてくれてますでしょう」と聞き手にそのことについて気づいてもらおうと試みている。

260) A: t̄teu:=nu kuto: ju:sa: ja-eiga, wan kuto: nu: ti:t̄ei=n s-an=do:

他人=GEN 事.TOP よくやる人 COP-ADVRs 私.GEN 事.TOP 何 一つ=ADD する-NEG=SFP

「他人の事はよくやる人だが、私の事は何一つもしないよ。」

?are:=jo:, ?ippe: wan mikk^wasa sun

3SG.TOP=IP とても 私.ACC 嫌う事 する

「あいつはね、本当に私を嫌っている。」

B: ?aja:=tai. ?undzu=ga kutu=n ?ippe: ju:sa: ja-ibi:=ce:

母=POL.F 2SG.HON=GEN 事=ADD とても よくやる人 COP-POL=SFP

「お母さん。貴方の事も本当によくやってくれる人じゃないですか。」

A: $\widehat{t\acute{e}a}:\acute{e}-i$ wakai=ga

どうして わかる=WHQ

「どうしてわかるのか。」(実践, 17)

次の用例では、年寄りの男性 A が商人の女 B から縁談を呼びよせるという品物を勧められて購入するが、もう一つないのかと B に尋ねる。しかし、A と顔見知りである女 B は、A に娘が一人しかいないことを知っており、一人しかいないのになぜもう一つ買うのかと A に問いかける。最後の話のオチが「ばあさん(妻)がいる」というジョークを含んだ内容なのだが、ここでは、男 A には妻である ?mme : (ばあさん) がいることを前提に、聞き手である女 B にそのことを思い出させている。

261) A: na: $\text{ti}:\widehat{t\acute{e}e}$: ne:n=i

もう 一つ.TOP ない=YNQ

「もう一つないのか?」

B: nu:=ga=tai. ?undzuna : inagung^wa: $\widehat{t\acute{e}ui}=\text{du}$ mence:-bi:t-a-e: s-abir-an=i

何=WHQ=POL.F 2SG.HON 娘.TOP 一人=FOC いる.HON-POL-PST-INF.TOP する-POL-NEG=YNQ

「どうしてですか? 貴方娘さんは一人しかいらっしゃらないのではないですか。」

A: ?ar-an . $\text{?mme}:=\text{ga}$ $\underline{u}=\widehat{c\acute{e}}$:

COP-NEG 婆さん=NOM いる=SFP

「違う。ばあさんがいるじゃないか。」(実践, 22)

次の用例は、これまでの用例とは若干異なる。指摘したい内容を直接文に差し出すのではなく、共有されている目の前の情報や事象を差し出すことで、その情報や事象が原因・契機となっている、聞き手が気づいていない別のことを指摘する。ここでは、不利益(被害)を被ったことを指摘している。

262) A: da:, $\widehat{t\acute{e}o}:\text{de}:\text{o}:\text{e}$: s-o:-ru $\text{?utei}=\text{ni}$ tabinino : $\underline{c\acute{i}ngate-a}=\widehat{c\acute{e}}$:

ほら 兄弟喧嘩 する-PROG-ADN うち=DAT 旅人.TOP 逃す-PST=SFP

「ほら、兄弟喧嘩しているうちに旅人は逃したじゃないか。」

B: nu:=ja nugate-an . nama=kara jat-i=n mania:in. dikka, ?atu ?u:r-e :

何=TOP 逃す-PST 今=ABL COP-SEQ=ADD 間に合う INTJ 後.ACC 追う-IMP2

「何が逃がした。今からでも間に合う。さあ、後を追え。」(芝居, 752)

次の用例でも同様に、直前に起こった共有された出来事(叱られたこと)を $\widehat{c\acute{e}}$: の文で伝えることで、出来事の結果生じた事態、つまり不利益(被害)を被ったことを指摘したい、気づかせたいという意図が話し手側に感じられる。

263) da:= $\acute{c}a$:, ?ja : $\text{tami}=\text{nakai}$ $\text{?aja}:\text{me}:=\text{ni}$ $\text{kanteige}:\text{s-att-i}$ $\text{wam}=\text{madi}=\text{n}$

INTJ=PEJ 2SG.GEN 為=LOC 奥様=DAT 勘違いする-PASS-SEQ 1SG=LIM=ADD

「ほら、お前のせいで奥様に勘違いされて俺までも」

$\underline{\text{?unde}}$: $\text{s-att-a}=\widehat{c\acute{e}}$:. $\text{?e}:\text{ku}$ kuma=kara mudut-i $\text{?ik-an}=\text{de}$: gattino : $\text{s-an}=\text{do}:\text{ja}$:

叱咤 する-PASS-PST=SFP 早く ここ=ABL 戻る-SEQ 行く-NEG=CND 承知.TOP する-NEG=SFP

「叱られたじゃないか。早くここから戻って行かんと承知はしないぞ。」(芝居, 616)

次のような用例もそうであろう。つまり、これらの文は出来事そのものを思い出させたり、意識化

させたりすることが伝達の目的ではなく、出来事の伝達の向こう側にある話し手が聞き手に本当に指摘したいことに気づいてもらうことが最終的な目標としてある。

264) wanne: ʔij-an=un ʔar-an. ʔite-an=do:. da:, ʔite-a-ru tu:i nat-a=ce:
 ISG.TOP 言う-NEG=ADD COP-NEG 言う-PST=SFP.ASS INTJ 言う-PST-ADN 通り なる-PST=SFP (語遊「イチャン・イ
 「私は言わなかったのではない。言ったぞ。ほら、言った通りになっただろう！」 タン」 2010/10/10, p. 11)

次の二例は、思い出させる文としては周辺のものだろう。少し前にすでに知覚している事象をあ
 たかも今発見したかのように聞き手に伝えている点では、後述する〈発見・気づき〉の例に近い。

265) A: da:, ʔuφusu:=ja
 INTJ おじさん=TOP
 「それで、おじさんは。」
 B: ʔane, ʔama=kara teira:-g^wa:=ga so:t-i teu:=ce:
 INTJ あそこ=ABL チラー-DIM=NOM 連れる-SEQ 来る=SFP
 「ほら、向こうからチラーが連れて来るよ。」(芝居, 798-800)

266) A: da:, ʔanci kamada:-ta: su:=ja
 INFJ それで (人名)-PL.GEN 父=TOP
 「ほら、それでカマダーのお父さんは。」
 B: ʔane, ʔama=kara kamada:=ga so:t-i teu:=ce:
 INTJ あそこ=ABL カマダー=NOM 連れる-SEQ 来る=SFP
 「ほら、あそこからカマダーが連れて来るよ。」(芝居, 984)

ただし、〈発見・気づき〉の用例が「だろう」で訳すことができないのに対し、これらの用例で文末の
 「よ」や「わ」を「だろう」に置き換えて訳すことが可能であるのは、実際には、事象や出来事が話し手
 にとってすでに知覚した事象・出来事であるからである。

また、情報が目の前にあって、即座に知覚可能という点で、「あそこにビルが見えるだろう？」のよう
 な目の前の情報を指し示すような〈前提〉を表す文とも近いが、聞き手にとって《新情報》であり、話
 の前置きではないという点ではやはり思い出させる文に分類するのがよい。

ce:の文のまとめ

表 30 ce:の文が表せるモダリティー一覧

モダリティー	文法的特徴	話し手と聞き手の 情報量	対象的な内容と話し 手・聞き手との関係	機能
〈思い出させる〉		話>聞	聞き手が知っているべ き情報だが、忘れてい るか、気づいていない	思い出させたり、気づ かせたりする
〈前提〉		話=聞	話し手と聞き手の共 有情報	より重要なことを述べ る前の前置きを述べる
〈聞き手に対する判断〉		話>聞	聞き手は知らない (話し手は既知)	聞き手についての話し 手の判断を伝える

〈発見・気づき〉	話>聞	聞き手は知らない (話し手も認識した ばかり)	認識したばかりの出 来事を伝える
----------	-----	-------------------------------	---------------------

ここでは, *ce*: の文の〈思い出させる〉というモダリティについて記述した。 *ce*: の文全体のまとめを先に述べるならば, *ce*: の文は, 《対象的な内容》を文脈上聞き手も認識しているべきこととして一方的に伝えるという性質があって, その結果, (1) 思い出させる, (2) 前提, (3) 聞き手に対する判断, (4) 発見・気づき, という四つのモダリティに分類できる。これらをまとめると上記の表の通りである¹²⁴。

尚, 〈思い出させる〉以外のモダリティについては, それぞれの節や項を参照されたい。

3.4.2 真偽質問文

真偽質問文が〈思い出させる〉あるいは後述の〈前提〉の文となる場合がある。次の用例では文の《対象的な内容》は聞き手にも共有されている当然の内容である。その当然の内容を質問文の形で差し出すことで, そのことをより気づかせたり, 意識させたりする働きがある。働きかけが強い文脈では〈思い出させる〉文となり, 話の前置きとして述べる文脈では〈前提〉の文となる。

267) [無職の男たちがちよっかいを出して, 手伝いもせず邪魔ばかりするので]

A: *ʔuntɕu-ta:=jatattɕ-o:t-i, tɕu nabak^wi:gutu=bike:n ʔj-abi:-kutu, wadʒit-i na-ibir-an*

この人-PL=TOP 立つ-PROG-SEQ 人.ACC 馬鹿にする事=ばかり 言う-POL-CSL 怒る-SEQ POT-POL-NEG

「この人達はただ立っただけいて, 人を馬鹿にすることばかり言うから, イライラして仕方ありません。」
(中略)

B: *ʔitta:=n ikiga ja-e: sum=i. ʔukit-o:t-i hana ɕute-e: nar-an=do:. to: tɕibat-i*

2PL=ADD 男 COP-INF.TOP する=YNQ 起きる-PROG-SEQ 鼻 吹く-SEQ.TOP POT-NEG=SFP.ASS INTJ 気張る-SEQ

「お前達も男だろう。起きていていながら, いびきをかいていてはいけないぞ。さあ, 頑張って」

ʔumani:-ta: tigane: ce-i=ma:

姉さん-PL.GEN 手伝い.ACC する-SEQ=見る.IMP

「女達の手伝いをしてしろ。」(実践, 37)

3.4.3 否定質問文¹²⁵

述語に否定質問形式を伴って, 〈思い出させる〉文となる場合もある。日本語の「ではないか」「のではないか」に相当する。 *ce*: の文と同様, 話し手と聞き手の認識が異なるという文脈が必須である。例えば, 聞き手が忘れていたり, 気づいていなかったり, 勘違いしていたり, 知らないふりをしていたりする場合等, さまざまである。

268) *me:me:=kara de:dʒi nain=do:=ntci ʔite-ano: ʔar-an=i*

前々=ABL 大変な事 なる=SFP.ASS=QT 言う-PST.TOP COP-NEG=YNQ

「前々から大変な事になるぞと言ったではないか。」(語遊「イチャン・イタン」2010/10/10, p. 11)

269) A: *nu: jan. matɕa:ɕi:=ga ke:t-i tɕe-o:n=di=na:. ʔure: ʔitei ja=ga*

何 COP (人名)=NOM 帰る-SEQ 来る-PROG=QT=YNQ2 それ.TOP いつ COP=WHQ

「何だって?! マチャー兄さんが帰って来ているですって?! それはいつなの?」

¹²⁴ ただし, これらの文には連続性がある, 分類が難しい用例もある。

¹²⁵ 首里方言の否定質問形式には二種類ある。詳細は, その他の質問文の「否定質問文」を参照されたい。

B: ʔure: wa:=ga=du ʔja:=ŋkai t̄eite-o:-e: s-an=i. matea:=ja n[-an-ti:
 それ.TOP 1SG=NOM=FOC 2SG=DAT 聞く-PROG-INF.TOP する-NEG=YNQ (人名)=TOP 見る-NEG-PST.YNQ
 「それは俺がお前に聞いているんじゃないか。マチャーは見なかったか？」

A: wanne: matea:çi:=ga ke:t-i t̄e-an=di ʔumut-a=sa. t̄eu ʔussa cimit-i
 1SG.TOP (人名)=NOM 帰る-SEQ 来る-PST=QT 思う-PST=SFP 人.ACC 嬉しさ CAUS-SEQ
 「私はマチャー兄さんが帰って来たんだと思ったよ。人を喜ばせて。」(芝居2, 1432) (用例143と重複)

270) A: tuku:=ni jama:. ta:=ni tanum-att-i, wan ʔutus-a=ndi su=ga. taeika ko:ga:kic-i:
 (人名)=DAT (人名) 誰=DAT 頼む-PASS-SEQ 1SG.ADD 落とす-INT=QT する=WHQ 確か 頼破りする-SEQ
 「トクーにヤマー。誰に頼まれて、俺を陥れようとしているのか。本当に頼破りして」

wanne: kamijamadunt̄e=kara ʔnd̄zit-i t̄eu:-ti:
 1SG.TOP (場所)=ABL 出る-SEQ 来る-PST2.YNQ
 「私は神山殿内から出て来たのか？」

(ドスをきかして、トクーBとヤマーCをにらむA)

B: ʔance: na:=ja ko:ga:kic-i: ʔnd̄zit-i t̄eu:-ta-e: s-an=i. ja:, jama:
 CNJ 2SG.HON=TOP 頼破りする-SEQ 出る-SEQ 来る-PST2-INF.TOP する-NEG=YNQ INTJ (人名)
 「だって貴方は頼破りして出て来たじゃないか。なあ？ヤマー。」

C: ja=sa. na:=ja ho:t̄ea:-g^wa: susui-ta=ee:
 COP=SFP 2SG.HON=TOP 包丁-DIM 拭く-PST2=SFP
 「そうだ。お前は短刀を拭いていたじゃないか。」

A: ʔane-i:ne: kamijamape:t̄eino: wa:=ga kurut̄e-a-ru t̄eimu ja=saja:
 そうする-CND(人名).TOP 1SG=NOM 殺す-PST-ADN FN COP=SFP
 「じゃあ、神山親雲上は私が殺したというんだな。」(芝居, 964) (用例258と同文)

3.5 〈前提〉を表す文

〈前提〉を表す文とは、先に述べた通り、日本語の「だろう」の〈事実確認〉用法、つまり「《聞き手の既知情報＝話し手と聞き手との共有情報》であることを明示」し、「《はなしあい》の前提として機能する」文のことである。日本語では「だろう？」や「じゃないですか？」等の形式が用いられるが、文の《対象的な内容》は、話し手と聞き手との共有情報なので、実際の機能としては質問ではなく、《はなしあい》の〈前提〉である。首里方言では、断定形に終助辞 ee:ja:および ee:の付いた文が〈前提〉を表すことができるが、推量形や否定質問文で〈前提〉を表すことができない点で日本語と異なる。

3.5.1 終助辞 ee:ja:の文¹²⁶

ee:ja:の文は、話し手と聞き手との間にもともと共通の認識としてあったと思われる情報や事象、あるいは両者の目の前にある事象に対して、その情報や事象を思い出させたり、特別意識していない事象への聞き手の意識を向けさせたりして、これから話す話題の前置き、つまり〈前提〉を述べるという意味あいを表す。

例えば、次の用例もそうである。《対象的な内容》は、聞き手にすでに共有されている事象である。

¹²⁶ ee:ja:は、先の ee:という形式に終助辞 ja:が後接した複合終助辞である。ee:ja:は「だろう」で日本語訳されることが多いが、ee:ja:という形式自体にも、ee:ja:の文全体にも〈推量〉の意味あいはない。ee:ja:は〈前提〉としてしか機能できず、他のモダリティを持たないため、〈前提〉を表す文の基本的な形式とみなすことができる。イントネーションは常に下降調である。名詞述語、形容詞述語、動詞述語のいずれでもあらわれる。

そのことを聞き手にあえて伝えることで、《はなしあい》の〈前提〉として機能している(後述するが, *saja*:の文も〈前提〉の意味あい¹²⁷で用いられる。波下線で示す)。

271) [首里の古地図を見ながら昔の首里のことについて A が B に教えている。当時活躍していた文化人たちの話をしている]

A: *ʔansa:ni bunʔkabu=ndiŋc-i nakaguŋeikuʔudun=nu ʔagata=ŋkai ʔat-a=ŋe:ja:*
 CNJ 文化部=QT.言う-SEQ 中城御殿=GEN あちら=DAT ある-PST=SFP
 「それから文化部と言って中城御殿のあちらにあっただろう？」

B: *ʔu:*

「はい。」

A: *minamoto takeo, maeda giken=un ʔut-a=ŋe:ja:*
 (人名) (人名)=ADD いる-PST=SFP
 「(その文化部に) 源武雄, 真栄田義見もいたただろう？」

B: *hai*¹²⁷

「はい。」

A: *ʔunni:=nu tŋeu maŋgura (中略)=ga ʔari tŋeukur-aŋimit-a=saja:*
 あの頃=GEN 人 辺り=NOM あれ.ACC 作る-CAUS-PST=SFP
 「あの頃の人なんかがあれ(守礼門)を作らせたよな。」(方談, 326)¹²⁸

次の用例では、聞き手は「中山門が作られていない」という情報を知っている。話し手はそのことをあえて聞き手に伝えることで、次の話題に繋げるための前置きを述べている。そのような時、*ŋe:ja:*が用いられている(ここでも、〈前提〉を表す *saja:*の文がみられる。波下線で示す)。

272) [守礼門と対になっていた中山門の話をしている]¹²⁹

A: *tŋeu:dzammon tŋeukui-ru tami=ni* (後略)
 中山門.ACC 作る-ADN ため=DAT
 「中山門を作るために」

B: *ʔu:* 「はい。」

A: *ʔmma, nama=nu mijakohoteru=ntŋei ʔa=saja:*
 そこ 今=GEN (地名)=QT ある=SFP
 「そこ, 今の都ホテルってあるよな。」

B: *ʔu:* 「はい。」

A: *ʔmma=nu me:=ŋkai ki: kundzansabakui ɛ-i ʔiŋc-a-ŋe: ʔu-bir-an=i* (中略)
 そこ=GEN 前=DAT 木.ACC 国頭サバクイ する-SEQ 引く-PST-NLZ.TOP 覚える-POL-NEG=YNQ
 「その前に木を国頭サバクイを歌って引いたのは覚えてないか。」

ʔunni:ne: kuri tŋeukuin=dite-i
 その時に これ.ACC 作る=QT.言う-SEQ

「その時にこれ(中山門)を作ると言って。」

B: *ʔu:* 「はい。」

A: *ɛ-e:-ru dzaimoku* (中略)
 する-RES-ADN 材木

¹²⁷ 日本語を使用。

¹²⁸ 戦後、旧中城御殿跡に存在した現沖縄県立博物館の文化部のこと。源・真栄田両氏は、当時の関係者。

¹²⁹ 字数の関係で、言い淀みやフィラー等を省いて掲載。

「集めた¹³⁰材木。」

B: ʔu: ʔuri=made: hanace:

はい それ=LIM.TOP 話.TOP

「はい。それまでは話は(聞いています)。」

A: (前略) ja-eiga, nama teukut-e: ne:n=ee:ja:

COP-ADVRS 今 作る-SEQ.TOP ない=SFP

「だけど、まだ作ってはいないだろう？」

B: ʔu: 「はい。」(方談, 305-307)

次の用例では、文の《対象的な内容=／尚秦王が首里城を明け渡した後、中城御殿(旧博物館跡地)に移動したこと／》は、聞き手にも共有されている情報である。共有情報をあえて伝えることで、これから話す話題の前置きを述べている。また、二つ目の ee:ja: の文の《対象的な内容=／時代が変わって ɸiradzu (平等所・王国時代の裁判所) はもう要らなくなってしまった／》も聞き手にも共有されているか、話し手が聞き手も当然、理解していることとして述べている。そうすることで、《はなしあい》の前置きとして機能している。

273) [中城御殿の話の流れで、尚秦王が中城御殿に移ったという話になって]

A: euriɖzo:=kara ʔakewataci: e-imiso:te-i, ʔama=ŋkai menso:te-a=ee:ja:

首里城=ABL 明け渡し する-HON-SEQ あそこ=DAT いる.HON-PST=SFP

「首里城から明け渡ししなさって、あそこにいらっしゃっただろう。」

B: ʔu: 「はい。」

A: sakutu kuma=n ɸiradzu=n|i-ee: ʔir-an=ee:ja:

だから ここ=ADD 平等所=QT.言う-NLZ.TOP 要る-NEG=SFP

「だからここも平等所¹³¹というのは要らないだろう？」

B: ʔu: ʔu:

「はい、はい。」(方談, 303)

ee:ja: の文は ee: の文に比べて圧倒的に使用頻度が少ない。《対象的な内容》が共有情報であったとしても、首里方言では、ee: でいいきる傾向があると思われる。つまり、《共有された情報》を伝える文脈において、あたかも《新情報》を伝えるかのように伝えるのである。このような文脈と用いられる形式が合わない現象が首里方言ではしばしば起こっている¹³²。

3.5.2 終助辞 saja: の文

先の ee:ja: の用例をみてもわかるように、しばしば saja: の文も〈前提〉として機能する。したがって、文の《対象的な内容》は聞き手にも共有されている情報である¹³³。日本語の「よね」や「よな」の文が表す〈前提〉に近い。先述の ee:ja: の用例も参照されたい。

¹³⁰ 直訳は「してアル」だが、意識した。

¹³¹ ɸiradzu/ɸiradzu (平等所) とは、「廃藩前の役所の名。警察署・裁判所・刑務所を兼ねた役所」のこと(国立国語研究所編, 1963, p. 239)。

¹³² 他にも例えば、文脈上明らかに話し手の〈想像〉を伝えている場面において、推量形は用いられず、しばしば断定形でいいきる傾向がみられる。このような傾向は、より詳細な談話研究を行うことで明らかになることだろう。

¹³³ 聞き手に共有されていない情報を差しだす saja: の文は、話し手の〈納得〉を表す。感嘆文を参照されたい。

274) [中城御殿の話の流れで、尚泰王が中城御殿に移ったという話になって。対象的な内容は、聞き手も既知のことである。saja:の文が話の前置きを述べている]

A: euriḁzo:=kara ?anu eo:taiwo:=ja nakagueiku?udun=unḁkai ?ufe-i-miso:te-a=saja:
 首里城=ABL FIL (人名)=TOP (地名)=DAT 移る-HON-PST=SFP

「首里城からあのう尚泰王は中城御殿にお移りになったよな？」

B: ?u: 「はい。」 (方談, 302)

275) [首里の古地図を見ながら、昔の首里の街の様子について A が B に語る。saja:の文が話の前置きを述べている]

A: kuma=ḁkai makanduntei ?a=saja:
 ここ=ABL (地名) ある=SFP

「ここに真壁殿内あるよな？」

B: ?u: 「はい。」 (方談, 302)

276) [首里の古地図を見ながら、昔の首里の街の様子について A が B に語る。saja:の文が話の前置きを述べている]

A: ?anu:, ?mma nama=nu kunu mijakohoteru=nḁtei ?a=saja:
 FIL ここ 今=GEN FIL (地名)=QT ある=SFP

「あのう、ここ今のその都ホテルってあるよな？」

B: ?u: 「はい。」

A: ?mma=nu me:=ḁkai ki: ?ari s-a:ni
 ここ=GEN 前=DAT 木.ACC あれ する-SEQ

「その前に木をあれして (倒して) …」 (方談, 305-306) (用例 272 と重複)

277) [那覇市の旧垣花町にあるガジャンピラという道にまつわる民話の語り]

?ansa:ni nama kateinuhana=nu gadzambira=nu ?a=saja: ?uma=uti jat-e:-ru guto:n=te:ja:
 CNJ 今 (地名)=GEN (地名)=NOM ある=SFP そこ=LOC COP-RES-ADN ようだ=SFP

「それで今垣花のガジャンピラがあるよな？そこで起こった話だそうだよ。」 (昔話, 17)

3.5.3 終助辞 ee:の文

ee:の文でも、《対象的な内容》に共有情報が差し込まれ、〈前提〉を表すことがある。ただし、先に述べた ee:の〈思い出させる〉というニュアンスが強まって、聞き手が発話時点では特別意識していない既知の情報を意識させる、あるいは注目させるという意味合いが強まる。また、思い出させる文に限りなく近い用例もあり、きれいに分類できるわけではなく、連続性がある。しかしながら、今回は、文脈上情報が聞き手にも共有されていて、話題の前置きとなっている ee:の文はこちらに分類した¹³⁴。

次の主語が一・二人称の過去の用例では、述語が *sabitan* と *sun* 形式 (単純過去) ではなく *sabi:tan* と *sutan* 形式 (証拠性過去) であらわれている。*sutan* 形式は、過去の反復的な事象を表せる (かりまた, 2004, pp. 237-238) ため、ここでは、動作主体である話し手と聞き手の過去の反復的な事象 (習慣) について述べている。したがって、聞き手も知っているはずの遠い過去の事象について、ee:の文を用いて伝えることで、事象を思い出させると同時に、話題の前置きとして機能させている。

278) nama=kara kanḁe:-ne: na: ?ippe: ?ari ja-ibi:ḁ=ja: ?unukuro: ?aeibu-ru
 今=ABL 考える-CND FIL 非常に あれ COP-POL=SFP その頃.TOP 遊ぶ-ADN

「今から考えるともう非常にあれですね。その頃は遊ぶ」

¹³⁴ 〈前提〉を表す場合でも、ee:の文のイントネーションは常に下降調である。ここでも、ee:ja:の文と区別するために、「だろう」以外の形式 (「ではないか」等) で訳す。

kutu=ntē-i=n ?ansuka: ne:ran, ju: ?anu: ?umentu:tēi s-abi:-ta=ee:
 事=QT.言う-SEQ=ADD あまり ない-SEQ よく FIL メンコ.ACC する-POL-PST2=SFP
 「事と言ってもあまりなく、よくあのうメンコをやったじゃないですか。」(琉総, 460)

次の用例では、聞き手は一度、「自分が負けて勝負を譲る」ということを承知しているが、聞き手が渋っているため、話し手が ee: の文を用いて聞き手を説得している。「勝負というものは、どちらか一方が負けなければいけない」という内容は、文脈の中で聞き手にも共有されている。そのことをあえてもう一度念を押す形で聞き手に伝えることで、そのことを強調し意識させながら、話題の前置きとして機能している。また、未来の事象について伝える場合は、〈前提〉の意味あいに加えて、話し手にある行動をするよう働きかける含みを持つ（それが「だから～」以降で具体的に述べられている）。

279) wan=niŋkai hana mutatē-i, ?ja:=ja makit-i kʷir-an=na:. (中略) ja: tarugani, ta:gana
 私=DAT 花.ACC 持たせる-SEQ お前=TOP 負ける-SEQ BEN-NEG=YNQ2 INTJ (人名) 誰か
 「私に花を持たせて、お前は負けてくれないか。なあ樽金よ、誰か」
 tēui=ja dzīphi makir-an=de: nar-an=ee: ja-gutu kundu wan=niŋkai judzit-i turae-e:
 一人=TOP 必ず 負ける-NEG=CND なる-NEG=SFP COP-CSL 今度 私=DAT 譲る-SEQ BEN-IMP2
 「一人は必ず負けなければならないじゃないか。だから今度私に譲ってくれ。」(芝居, 856)

次の主語が不特定多数の文は、誰もが知っている諺や常識のようなものを ee: の文を用いて伝えることで、そのことを意識させつつ、話題の前置きとして機能している。

280) ŋkaci=kara tēiriakuta=nu me:=ne: i:r-ari:t-i=n phīnsu:mun=nu suba=ne: ur-ar-an=tēi
 昔=ABL ごみ=GEN 前=DAT.TOP 座る-POT-SEQ=ADD 貧乏人=GEN 側=DAT.TOP いる-POT-NEG=QT
 「昔から『ごみの前には座れても貧乏人の側にはいられないって』」
 ?a-ibi:=ee:. ?anu mun-tēa:=ga kukurukawai=n e-i=n eikata: ne:-biran=s
 ある-POL=SFP あの 者-PL=NOM 心変わり=ADD する-SEQ 仕方.TOP ない-POL=SFP
 「あるじゃないか。あの人たちが心変わりしても仕方ありません。」(芝居, 896) (用例 33 と重複)

次の ee: の文では、聞き手が「はい」と返答していることから、《対象的な内容＝「中山門がまだ復元されていないこと」》は聞き手にも共有されている情報である。この共有情報をあえて伝えることで、最後の「中山門を作らせないといけない」という結論を述べるための前置きあるいは〈前提〉を述べるという意味あいを表している。

281) [首里の古地図を見ながら昔の首里の街について A が B に教えている。A が中山門を復元しようとして主張したがまだ作っていないという話]

A: ?anu:, mata ?mma=kara satēi tēukur-an=na:=ndi wanne: ?ite-aŋ=jo:ja:
 FIL また そこ=ABL 先 作る-NEG=YNQ2=QT 私.TOP 言う-PST=SFP
 「あのう、またそこから先に作らないかと私は言ったんだよな。」

B: ?u: 「はい。」

A: tēukut-e: ne:n=ee:
 作る-SEQ.TOP ない=SFP

「(しかしまだ) 作ってはいないじゃないか。」

B: ?u: 「はい。」(中略)

A: euriemin=tu=nu jakusuku=n ja-kutu, teukur-aei-wa=ruja-e: s-an=i=ndite-i
 首里市民=COM=GEN 約束=ADD COP-CSL 作る-CAUS-CND=OBLG-TOP する-NEG=YNQ=QT
 「首里市民との約束でもあるから、作らせないといけないんじゃないかと」
 wanne: ?umut-o:-ru ba:
 私.TOP 思う-PROG-ADN FN
 「私は思っているわけだ。」(方談, 309-310)

思い出させる文・〈前提〉の文のまとめ

ここでは、思い出させる文および〈前提〉の文について述べた。どちらの文でも、首里方言では *ee:*、日本語では「だろう」が用いられることからわかるように、これら二つの意味あいには連続性をもって存在している。しかしながら、共有情報の有無という点でこれらの文を分けて記述した。また、思い出させる文は聞き手への〈働きかけ〉のニュアンスが強く、〈前提〉の文は単に話の前置きを述べるといった機能的な違いからも、これらの文は区別されなければならない。暫定的ではあるが、日本語と首里方言で用いられる形式について以下に図でまとめる。形式のあらわれ方に違いがある。

表 31 日本語と首里方言の〈思い出させる・前提〉の諸形式

	〈思い出させる〉	〈前提〉
首里方言	<i>ee:</i> 、否定質問形式	<i>ee:ja:</i> , <i>saja:</i> , <i>ee:</i>
日本語	だろう、ではないか ¹³⁵	だろう、よね、じゃない(か) ¹³⁶

3.6 説明文

説明文は、先行する文あるいは文脈を論理的に結びつけて説明するために、事象の〈事情〉や〈帰結〉や〈根拠〉や〈理由〉等を後で述べる文である(奥田, 1990; 宮崎他, 2002; 日本語記述文法研究会, 2003)。論理的な態度の観点から、〈記述〉と対立する(宮崎, 2014, p. 2011)。さまざまなタイプの文で〈説明〉を表すことが可能だが、本論では、とりたて表現による説明文と、*te:*の文による説明文、そして *ba:*を用いた説明文等について、限定的に記述を行う¹³⁷。詳細は今後の課題である。

説明文が《はなしあい》の場面であらわれる場合、その《はなしあい》の〈前提〉としても機能する。つまり、説明文にも〈前提性〉がある。ただし、先述の〈前提〉を表す文との異なりは、説明文における《対象的な内容》は、聞き手にとって《新情報》なことである¹³⁸。

3.6.1 とりたて形式による説明文

述語の連体形でいいきる文が〈説明〉をあらわす。述語が連体形でいいきる場合、焦点化の *du* が文中にあらわれやすい。例えば、次の用例では、「どのような苦勞をしているのか?」という聞き手の質問を受けて、「人には聞かせられない苦勞だ」という〈説明〉をしている。その時、文中に焦点化の *du* があらわれ、文末が連体形をとっている。

¹³⁵ 「よね?」は〈質問〉の性質が強いので除外。

¹³⁶ 「じゃない?」「じゃん?」「じゃないですか?」等。ただし、「ではないか・じゃないか」は不可。

¹³⁷ 形式が何もつかない、いいきりの文が表す〈説明〉の分析も行う必要がある。

¹³⁸ 〈前提〉を表す文における《対象的な内容》は、聞き手にとっても事実確認済みの情報か、あるいは、情報が聞き手の目の前に存在するため、その場で直接確認することが可能。

282) [祖母 A と孫 B の会話。戦争で苦勞したという A に対して自分も苦勞していると打ち明ける B]

A: ʔanee:, wannin ʔippe: ʔawari s-o:-ibi:=ssa:

CNJ 1SG.ADD とても 哀れ する-PROG-POL=SFP.MON

「それじゃあ、私もとても苦勞していますね。」

B: ʔi:na:. madzi nu:=nu ʔawari s-o:=ga. ʔanei ʔukubuku:tu s-o:t-i ʔawari s-o:n=na:

INTJ まず 何=GEN 哀れ する-PROG=WHQ これ程 小太りな様 する-PROG-SEQ 苦勞 する-PROG=YNQ2

「ええっ！まず何の苦勞しているの？こんなにふくよかにしていて苦勞しているのかい？」

A: dziko: ʔawari s-o:-ibi:n

とても 苦勞 する-PROG-POL

「とても苦勞しています。」

B: nu:=nu ʔawari s-o:=ga. ʔmme:=ŋkai ʔite-i teik-ate-i=ma:

何=GEN 苦勞 する-PROG=WHQ お婆=DAT 言う-SEQ 聞く-CAUS-SEQ=見る.IMP

「何の苦勞しているの？お婆ちゃんに言って聞かせてごらん。」

A: ʔure: tteu=ŋkae: teik-as-ar-an ʔawari=du ja-ibi:-ru

それ.TOP 人=DAT.TOP 聞く-CAUS-POT-NEG 苦勞=FOC COP-POL-ADN

「それは人には聞かせられない苦勞なのです。」(実践, 26)

〈説明〉の文に終助辞 *de:* があらわれやすい。その場合、末尾の *ru* は、断定形(n 終わり)に戻る。*de:* 自体に〈説明〉の意味あいがあるというわけではなく、《対象的な内容》自体に〈説明〉の機能が備わっている。そのような〈説明〉を表す文に *de:* が用いられる。*de:* は、文を控えめに述べるというニュアンスを付け加える。

283) A: ʔja:=ja kunu ʔuta wakajum=i

2SG=TOP この 歌 わかる=YNQ

「お前はこの歌わかるか？」

B: teanguto:ru ʔuta ja-ibi:=ga

どのような 歌 COP-POL=WHQ

「どのような歌ですか？」

(A が歌を歌って聴かせる) (中略)

B: wakaj-abir-an

わかる-POL-NEG

「わかりません。」

A: wakar-an=ja:

わかる-NEG=SFP

「わからんよな…」(と言って A はがっかりする)

B: nama=nu ʔuta: nu:=ndi ʔi-ru ʔuta ja-ibi:=ga

今=GEN 歌.TOP 何=QT 言う-ADN 歌 COP-POL=WHQ

「今の歌は何と言う歌ですか。」

A: nu:=ndi ʔi-ru ʔuta=ga ja-ra wakar-an-eiga, wa:=ga warabi=nu dzibun ʔubi:t-a-ru ʔuta

何=QT 言う-ADN 歌=FOC COP-DUB わかる-NEG-ADVRS 1SG=NOM 子供=GEN 時 覚える-PST-ADN 歌

「何と言う歌かわからないが、私が子供の時覚えた歌」

ja-gutu, kunu ʔuta=nu teimue: teitei-busat-a-gutu=ru jan=de:

COP-CSL この 歌=GEN 意味.ACC 聞く-DES-PST-CSL=FOC COP=SFP

「だから、この歌の意味を聞いたかったんだよ。」(芝居, 542) (用例 226 と一部重複)

上の用例では、一番最後の説明文に《理由》が述べられている。説明文では、理由・結果の関係が先行・後続の形で示される。その場合、結果を先に述べてから、理由が述べられる。しかし、上の文や次の文ではその理由の《結果》がはっきりとは述べられていない。実際の《はなしあい》の場面では、第三者の事象に対する客観的な描写ではなく主語が一人称だったりして、《説明されの文》が言語化されることが少ない。先行する文脈や発話状況自体に《説明》のきっかけが示されている。

284) [BにAもゲートボールをやってみたらと勧められるが断る。その理由を de:の文が述べている]

A: ?ja=n sum=i

2SG=ADD する=YNQ

「お前も（ゲートボールを）やるか？」

B: ei:-busa-ibi:-eiga, wanne: namateikiti munuk^we:dzuku=nu ?iteunasa-ibi:-kutu

する-DES-POL-ADVRS 1SG.TOP 未だに 食べていく事=NOM 忙しい-POL-CSL

「したいのですが、私は未だに食べていくだけで精一杯ですから」

?uri su-ru çima=n ne:ran=du ?a-ibi:n=de:

それ する-ADN 暇=ADD ない=FOC ある-POL=SFP

「それする暇もないんですよ。（後略）」（実践, 14）

285) [昔話を基にした芝居。王様の病気は猿の生肝を飲まないと治らないと霊媒師に言われ猿を呼び出しているシーン。猿 Bは何も知らずに待っていると、タコ Aが言う]

A: ?a:, sa:ru:=sai. ?undzo: teimugurisa: ja-miee:n

INTJ 猿=POL.M 2SG.HON.TOP 可哀想な人 COP-HON

「ああ、お猿さん。貴方は可哀想な人でいらっしゃる。」

B: nu: s-a-ru teimuguri:=ga. ?une, nama k^wattei:=ηkai ?unteike:s-att-i ?iteu-ru

何 する-PST-ADN 可哀想=WHQ INTJ 今 ご馳走=DAT ご案内する-PASS-SEQ 行く-ADN

「何が可哀想なのか！ほら、今ご馳走の席に案内されているのだぞ！」

A: ?ane: ?a-ibir-an=do:. dzitee: gudzirao:sama=nu b^o:tei no:sun=tei sa:ru:=nu

そうだ.TOP COP-POL-NEG=SFP 実.TOP (人名)=GEN 病気.ACC 治す=QT 猿=GEN

「そうではありませんよ。実はグジラ王様の病気を治そうと猿の」

namadzimu=nu=du φusa-ru. ?undzo: ?ama ?itei:-ne:, kurus-ari:=du su-ru

生肝=NOM=FOC 欲しい-ADN 2SG.HON.TOP あそこ 行く-CND 殺す-PASS=FOC する-ADN

「生肝が欲しいんだよ。貴方はあそこに行くと、殺されるんだよ。」（猿, 5-6）

次の例でみるように、焦点化の du は必須ではない。文中の du なしに、文末が連体形をとって強調文あるいは説明文となっている。いわゆる「係り結び」の法則は、あくまでも、任意で発生する。

286) [腕相撲で負けたので]

A: kundo: φidzai=nu ?udi kakir-ate-i k^wi-miso:r-i

今度.TOP 左=GEN 腕.ACC かける-CAUS BEN-HON-IMP1

「今度は左の腕でやらせて下さい。」

B: φidzai=ja:. nidziri=n^{te}o:n kan-a:m=munnu, φidzai=ja jukun tea:=ga ja-ra=ja:

左=IP 右=でさえ 敵う-NEG-CSL 左=TOP 余計 どう=FOC COP-DUB=SFP

「左か。右でさえかなわないのに、左は余計どうだろうか？」

A: wanne: φidzaigatti ja-ibi:-ru

私は 左きき COP-POL-ADN

「私は左ききなんです。」（芝居, 694）（用例 220 と同文）

3.6.2 終助辞 te:の文

《対象的な内容》がレアルな事象を表す te:の文は〈説明〉を表す。厳密に言えば、〈説明〉を表す文に te:という終助辞が付いて、《はなしあい》の潤滑剤として機能する。《説明性》は、ポテンシャルな事象を表す te:の文にも、一貫してみられる te:の文の特徴である。レアルな事象を表す文においては、話し手の主観的な判断が欠如し、ただの〈説明〉の文となる¹³⁹。

287) [先行文脈の説明,あるいはこれから話す話題の前置きにもなる]

wanne: dzino:n=te:

1SG.TOP 宜野湾=SFP

「私(出身は)宜野湾なんだよ。」(調査, 2015/11/2)

288) wa=ga ?ite-an=te:

1SG=NOM 言う-PST=SFP

「私が言ったんだよ。」(調査, 2015/11/2)

これらの文の《対象的な内容》は、話し手が直接確認した事象なので、述語が san 形式(単純過去)をとることができるが、小説の地の文で過去の事象を非過去で述べるように、sun 形式(完成・非過去)や so:n 形式(継続・非過去)を用いることもできるのも、この種の te:の文の特徴である。

ただし、次に挙げる用例は首里方言ではないため、今回はあくまでも可能性として参考程度に紹介する(音声表記にせず、原文ママ記載)。首里方言の用例の収集は今後の課題である。

289) ワッター クヌ ナマヌ オバー, 家内ヌ ^{カナイ}オバサントウ オトーサントウ
(私たちの この 今の おばあちゃん, 家内の 叔母さんと お父さんと)
ワン, ミッチャイ 壕カラ ミジ クミーガ ンジョーンター。ワンネー
(私, 三人 壕から 水を 汲みに 行っているんだよ。私は)
ワカサグトウ シッタンバクー ターチ, チュカタミ カタミティ。
(若いから シッタン箱を 二つ, 一組 担いで。) ¹⁴⁰

290) アンサーニヨ, 「看護婦サン 蛆虫取ッテチョウダイ」リ言ルエーマー
(それからね, 「看護師さん... (後略)」って言う間は)
イチチョール チュリチ ワカインター。アンシ ウリガ ナー
(生きている 人って わかるんだよ。そして その人が もう)
1,2分アトウ ナリワカラー アビランナイルバーヨーヤー。
(1,2分後 なったら 何も言わなくなるわけよね。) ¹⁴¹

291) グラマンガワーガ チェーウイ, 偵察^{テイサツ}チェーウイスン。ヨーンナーヨーンナー
(グラマン機が 来たり, 偵察したりする。ゆっくりゆっくり)
トゥバーナカイ。ナー ドウク ティーハゴーサヌ, ナー タマシ
(飛んで。もう あまりにも はがゆくて, もう 弾で)
ウチクルシェーナー, リチ ヤタルムー。タマー (グラマンガワーガ)
(撃ち殺してしまえ, と 言ったから。弾は (グラマン機が))
ウマカイ チャグトウ タマー ウッチャンター。アンシカラ ナー

¹³⁹ te:の持つ《説明性》というニュアンスが、レアルな事象を述べる際に前面化し、説明的に述べるという働き、つまり、上記のような説明的・間投的な働きになるのではないかと考えられる。また、間投用法の「ね」と同様に、te:も上昇イントネーションをとる。

¹⁴⁰ (琉球弧を記録する会, 2003, p. 127)。話者は、具志頭村具志頭出身。

¹⁴¹ (琉球弧を記録する会, 2003, p. 100)。話者は、嘉手納町屋良出身。

(ここに 来たので 弾は 撃ったんだよ。そしたら もう)
 タマ ウッチャグトゥ ケーティカラ ヌラーティヨー。タマヤ
 (弾を 撃ったから 帰ってから 怒られてさ。弾は)
 ウツナヨー, 絶対 ウチーネー 目標 ナイグトゥ ウツナヨーリ。
 (撃つなよ, 絶対 撃ったら 目標 なるから 撃つなよって。) 142

首里方言の用例としては、後述の ba: (わけ) に te: が用いられている用例が見つかった。この te: も上記の三例のように間投的・説明的な働きを持つ te: だろう。

292) [戦争体験。沖縄島南部で子供達が被曝したので]

ʔuma=uti ʔarisu-ei=jaka=ne:, watta: ta:ri:=ga junu eini jar-a:
 ここ=LOC あれする-NLZ=CMPR=DAT.TOP 1PL.GEN 父=NOM 同じ 死 COP-CND
 「ここであれする(死ぬ)より、私達の父が同じ死なら」
 sui=ndzi einu-ee: maei ja-kutu, nna ʔik-a=ja:=ri-j-a:ni=ja:
 首里=LOC 死ぬ-NLZ.TOP まし COP-CSL 皆 行く-HORT=SFP=QT-言う-SEQ=IP
 「首里で死ぬのがいいから、皆行こうと言ってね。」
 sui=ŋkai ʔŋkat-i tu:i-ru-ba:=ni takara=nu ʔi:=ritei ʔa-ru ba:=te:
 首里=DAT 向かう-SEQ 通る-AND-FN=DAT 高良=GEN 上=QT ある-AND FN=SFP
 「首里に向かって行く時に高良の上って (所が) あるわけね。」
 ʔuma=kara tea: ʔattei ei:=ne:, ʔarakatei=nu eima=kara
 そこ=ABL ずっと 歩き する-CND (地名)=GEN 集落=ABL
 「そこからずっと歩いて、新垣という村から…」 (琉球弧を記録する会, 2003, p. 138)

3.6.3 ba: jan (わけだ) の文

話し手の現在の動作の理由について〈説明〉するとき用いられる。

- 293) A: ʔundzo: ju:bi=kara jukut-e: menso:r-an=du ʔa-mice:-ru=i
 2SG.HON.TOP タベ=ABL 休む-SEQ.TOP いる.HON-NEG=FOC ある-HON-ADN=YNQ
 「貴方はタベから休んでいらっしやらないんですか？」
 B: ʔan ja=sa. mi:guɸaice-i nind-ar-aŋ=jo:. ju:=nu ʔakir-an ma:du=kara
 そう COP=SFP 目が覚める-SEQ 寝る-POT-NEG=SFP 夜-NOM 明ける-NEG 間=ABL
 「そう。目が覚めて寝れないんだよ。夜が明けないうちから」
kuma=ndzi ʔattea: ʔattea: s-o:-ru ba:ja=sa
 ここ=LOC 歩き 歩き する-PROG-ADN FN COP=SFP
 「ここでウォーキングしているわけなんだよ。」
 A: mi:guɸai ja-ibi:n=na:. kata-dza:-ju:=nde: ʔusaga-miso:te-e:n=te:
 不眠 COP-POL=YNQ2 固-茶-湯=でも 飲む.HON-HON-RES=SFP
 「不眠ですか。濃いお茶でもお飲みになられたんでしょう。」 (実践, 13) (用例 159 と一部重複)
- 294) A: n:te-an=do:. nu:=ga ʔunu tabinteo: ʔitta:=ga nu: nat-o:=ga
 見る-PST=SFP 何=NOM あの 旅人.TOP 2PL=GEN 何 なる-PROG=WHQ
 「見たぞ。どうしたあの旅人はお前たちの何なのか。」

142 (琉球弧を記録する会, 2003, p. 163)。話者は、宜野座村松田出身。

B: wa: ʔuja nat-o:-ibi:-eiga tako:jama ʔirigutei=uti jukut-i ʔutturuʔutturu su-ru ʔutei=ni
 私.GEN 親 なる-PROG-POL-ADVRS (地名) 入口=LOC 休む-SEQ うとうと する-ADN 内=DAT
 「私の親ですが多幸山入口で休んでうとうととしている内に」
 ma:=ŋkai=ga ʔndz-a-ra wakar-an nat-i, nama kame:t-i ʔattcu-ru ba:=du ja-ibi:-ru
 どこ=DAT=FOC 行く-PST-DUB わかる-NEG なる-SEQ 今 探す-SEQ 歩く-ADN 訳=FOC COP-POL-ADN
 「どこに行ったのかわからなくなって、今探して歩いている訳です。」(芝居, 802) (用例 183, 227 と重複)

説明文が強調文としても機能することがある。次の用例では、話し手の〈願い〉のわけを述べながら、そのことを強調しつつ伝えている。

295) [民話の最後に話者がいう]

mukaei=kara kadzuʔo:ku keiken eis-e:-ru kuto:, k^waʔmmaga=kai hanaei e-i=ru
 昔=ABL 数多く 経験 する-RES-ADN 事.TOP 子孫=ALL 話=FOC する-SEQ=FOC
 「昔から数多く経験した事は、子や孫に話をして」
 ʔteite:judzur-e:ja:=ndi-ru kimotei, wane: onegai su-ru ba: ja-ibi:n
 伝え譲る-INT=QT-ADN 気持ち.ACC 私.TOP お願い する-ADN FN COP-POL
 「伝えていかなければいけないという気持ちを、私はお願いするわけです。」(那民, 28)

次の用例では、第三者の事象について〈説明〉する時に、ba: jan の文が用いられている。

296) [祖母 A と孫 B の会話。孫 B が祖父のことについて話を聞かせてくれと祖母 A にお願ひする]

A: ʔja:=ja ʔntea tamme: kuto: nu:=n wakar-an=saja:. ʔitta: ta:ri:=ga mi:tei nai=ni
 2SG=TOP INTJ 祖父.GEN 事.TOP 何=ADD わかる-NEG=SFP 2PL.GEN 父=NOM 三つ なる=DAT
 「お前はそうかお爺ちゃんの事は何もわからないんだねえ。お前のお父さんが三つなる時に」
 tamme:=ja bo:e:tai=ŋtai ʔndz-i=jo:. ʔunumama ke:t-e: k-u:n ba: ja=sa
 祖父=TOP 防衛隊=DAT 行く-SEQ=IP そのまま 帰る-SEP.TOP 来る-NEG.ADN FN COP=SFP
 「お爺ちゃんには防衛隊に行っただね。そのまま帰って来ないわけなんだよ。」
 B: senei=du s-abit-a=gaja:
 戦死=FOC する-POL-PST=YNQ3
 「戦死したのですか?」(実践, 25)

3.6.4 munna:の文

条件複文の主文に munna:のかたちで na:の文があらわれるとき、従属文に差し込まれる事象が実現すると、主文に差し込まれる不利益となる事象が当然として実現するだろうという事象の論理的帰結を話し手の判断として伝える。na:の文は〈質問〉を表すが、munna:の文は聞き手から情報を引きだしているとは言えず、伝える側面が強いため《問いかけ性》はない。

297) [島の男達が噂をする。里之子(サトゥヌシ)は王府から島流しにあった役人で素行が悪い]

A: hassamijo:, kunu satunuci=ga inagu tui-ei=jo
 INTJ この (人名)=NOM 女 取る-INF-NLZ=IP
 「はあ、この里之子の女遊びといたら…」
 B: na: dzu:nin=to: teik-ano: ʔar-an=i
 もう 十人=COM.TOP 聞く-NEG.TOP COP-NEG=YNQ

「もう軽く十人はいってるよな？(lit. 十人とは聞かないのではないか?)」

C: ka:gi-g^wa:=nu ?a-kutu kunu eima=nu inago: muru ?unu tteu=nu katti
顔-DIM=NOM ある-CSL この 島=GEN 女.TOP 全部 この 人=GEN 勝手
「顔がいいからこの島の女は皆この人の勝手。」

D: nama=nu gutu=ru=n ?ar-e:, watta:=ga inago: ?atar-an-mun=na:
今=GEN 様=FOC=ADD ある-CND 1PL=NOM 女.TOP あたる-NEG-FN=YNQ2
「今のままなら、俺たちが女はあたらないものな。」(芝居, 564)

次の munna:のかたちをとる主語が二人称の na:の文も、事象の論理的帰結としての聞き手に対する話し手の判断を伝えている。聞き手から情報を引きだしてはいないので《問いかけ性》はない。

298) A: tigane:=ndi ?ite-i=n nu: s-abi:=ga. tada ?mbusan ?mbusan su-eiga, nu:=nu=ga
手伝い=QT 言う-SEQ=ADD 何.ADD する-POL=WHQ ただ 重い 重い する-ADVRS 何=NOM=FOC
?mbusa-ra waka-ibir-an=de:
重い-DUB わかる-POL-NEG=SFP.NASS

「手伝いと言っても何をするんですか。ただ重い重い言ってるが、何が重いかわからないんですよ。」

B: ?ja:=ja ntea, so:mikk^wa:=du ja-ru-mun=na:. ?umani:-ta:=ga?aneï ?aeï so:so: s-o:-ei=n
2SG=TOP INTJ 盲人=FOC COP-ADN-FN=YNQ2 姉-PL=NOM こんな 汗 流れる様 する-PROG-NLZ=ADD
mi:r-an=du ?a-ru=i
見える-NEG=FOC ある-ADN=YNQ

「お前はそうだ、盲人だな。姉さんたちがこんなに汗をかいているのに見えないってあるのか。」

A: kissa=kara n:te-o:-ibi:n
さっき=ABL 見る-PROG-POL

「さっきから見えています。」(実践, 37)

299) [酒を飲んでジュリの女を家に連れてきたマサンルーB に対して伯父 A が怒りをあらわにする。C は B の母]

A: eimanagai sun=di ?i:=ruce: ?uduru^wei=ga su-ra=ndi ?umur-e:,
島流し する=QT 言う=CND 驚く=FOC する-DUB=QT 思う-CND
「島流しすると言えば驚くかと思えば」

i:ba: ja=sa=ndi-ru ?i:-ru=i. kuniça: ðurimun
いい折 COP=SFP=QT-ADN 言う-ADN=YNQ この 馬鹿者

「ちょうど良かったと言うのか。この馬鹿者！」

B: gaŋku: tamme:-g^wa:=ja:, hanaci=n nar-an. mata ?usa-g^wa:=kai=ru nai-ru
頑固 父-DIM.PEJ=IP 話=ADD POL-NEG また (人名)-DIM=ALL=ADD なる-ADN
「頑固親父め、話にもならない。またウサさんの所へ行こう。」
(マサンルー, 家を出ていく)

A: makatu:, teuig^wa=tiramun eitit-a-ru-mun=na:
(人名) 一人子=というもの.ACC 捨てる-PST-ADN-FN=YNQ2
「マカトゥー, 一人子というものを捨てたな。」

C: mo:eiwake: ne:j-abiran
申し訳 ない-POL

「申し訳ございません。」(芝居, 562) (用例 218 と一部重複)

3.7 感嘆文

従来、感嘆のモダリティは、「何らかの誘因によって引き起こされる、驚きを伴った感動を表す」意味あいの中で、そのような働きをもつ文を感嘆文と呼んでいる(日本語記述文法研究会, 2003, p. 82)。本論では、このような〈感動〉の意味あいよりも、〈驚き〉や〈意外〉,そして〈発見〉や〈気づき〉といった意味あいを表す文を中心に、これらの文を感嘆文に分類して簡単な記述を行う。

3.7.1 終助辞 *ee*: の文

3.7.1.1 聞き手に対する話し手のミラティブな判断

ee: の文には、〈驚き・意外〉あるいは〈発見・気づき〉のようなミラティブなニュアンスを伴って「聞き手に対する判断を話し手の認識として示す」ような文がある。先の思い出させる文や〈前提〉の文と違って、《対象的な内容》は聞き手に対して過去に一度も共有されていない《新情報》である。ただし、聞き手がそのことについて知っているべきだというニュアンスは保たれている。したがって、このような *ee*: の文の意味あいは、思い出させる文にみられる「話し手と同じような認識をもつように仕向ける」という意味あいの延長線上にあって、そのような意味あいから派生したものであろう。

例えば、次の主語が二人称の *ee*: の文は、聞き手 A についての話し手 B の判断（聞き手が久しぶりに会っても全然変わっていないこと）を差しだしている。話し手 B にとって《対象的な内容》はすでに確実なものであるが、聞き手 A にとってその話し手 B の判断は事前には知りえないことである。そして、B は聞き手 A もそのことを知っているべきだという態度で述べている。

300) [八重山出張から久しぶりに帰郷する B]

A: ?ane, kamada:. ?itei je:ma=kara

INTJ (人名) いつ 八重山=ABL

「あれ、カマダー。いつ八重山から...」

B: teu: te-an=do:=na:

今日 来る-PST=SFP=POL

「今日来ましたよ。」

A: je:ma=nu midzi=to: ?atat-o:t-e:=saja:. teuraku nat-i

八重山=GEN 水=COM.TOP 合う-PROG-PST3=SFP 綺麗に なる-SEQ

「八重山の水とは合っていたんだねえ。綺麗になって。」

B: na:=n muru kavar-an=ee:

2SG.HON=ADD 全く 変わる-NEG=SFP

「貴方も全然変わらないじゃないか。」(芝居, 940)

次の主語が二人称の *ee*: の文が差しだす話し手 B の判断（聞き手が太ったこと）は、話し手 B にとってはすでに認識済みのことだが、聞き手 A にとっては未確認の話し手 B の判断である。《発見性》という観点からは、〈発見・気づき〉の用例に近い。

301) [八重山出張から久しぶりに帰郷する A]

A: heina: ?a?i:

INTJ 兄

「どうも兄さん。」

B: k^we:t-o:=ee: t̄euraku nat-i

肥える-PROG=SFP 綺麗に なる-SEQ

「がっちりしたじゃないか。かっこよくなって。」(芝居, 940)

また、述語の断定形に終助辞の ja: を後接させて〈聞き手に対する話し手の判断〉を表すことができるが、ee: の文と用いられる場面が異なる。ja: の文は、話し手の認識が聞き手とほぼ同一であろうと予測できる場面で用いられるが、ee: の文は、聞き手が事前に話し手の認識を知りえない場面での〈聞き手に対する話し手の判断〉を表す。ja: の文について詳しくは、[崎原 \(2015a\)](#) を参照されたい。

3.7.1.2 発見・気づき

ee: の文が、〈発見・気づき〉の意味あいを持つのは、話し手と聞き手が事象をほぼ同時に認識する、あるいは話し手が認識した直後に聞き手にも認識させるという場面においてである。文の《対象的な内容》は、聞き手に共有されていない《新情報》である。〈発見・気づき〉の ee: の文は、発見したことを聞き手に共有する場合しか使えない（独り言は不可）。

302) A: su:-g^wa:-ta:=n mudut-i t̄eu:-ru d̄zibun ja-eiga

父-DIM-PL=ADD 戻る-SEQ 来る-ADN 頃 COP-ADVRS

「父ちゃん達も戻って来る頃だけど…」

B: ?it̄eid̄zu:ku tatte-i kuri=ute: ikiga ?agat-aŋ=ja:

証人 立つ-SEQ これ=LOC.TOP 男 上がる-PST=SFP

「証人になってこれで男が上がったわね。」

A: kamada:-ta: su:=n ?anuju:=kara jurukud-o:n=te:

(人名)-PL 父=ADD あの世=ABL 喜ぶ-PROG=SFP

「カマダーの父ちゃんもあの世から喜んでいるだろうね。」

B: ?an su=sa ?ane su:-g^wa:-ta:=ja t̄eu:=ee:

そう する=SFP INTJ 父-DIM-PL=TOP 来る=SFP

「そうね。あら父ちゃん達が来るよ。」(芝居, 970)

303) A: eunume: kure: makutu jam=i=na:

(人名) これ.TOP まこと COP=YNQ=POL

^{シュヌメー}
「主前、それは本当ですか。」

B: ?anu-qa: ?ama=kara t̄eu:=ee:

あの-PEJ あそこ=ABL 来る=SFP

「あいつあそこから来るぞ。」

(あいつと呼ばれた男が C に縄を打たれて出てくる)

C: ?atte-i micir-e:

歩く-SEQ 見せる-IMP2

「歩け。」(芝居, 980-982)

3.7.2 終助辞 saja: の文

saja: の文の《対象的な内容》が聞き手に共有されていない話し手の判断等を差しだすとき、〈納得〉や〈驚き・意外〉あるいは〈発見・気づき〉を表す感嘆文となる。ただし、saja: という形式自体がミラティブな意味あいを実現しているわけではなく、文全体がそのような意味あいを実現している。

304) [昼間からほっつき歩く相手に職業を尋ねると、「仕事はないが、首里の侍だ」と告げられて]

nama=n samure:=ntc-i=n ?a-ibi:=saja:

今=ADD 侍=QT-SEQ=ADD ある-POL=SFP

「今でも侍ってあるんですね。」(実践, 39)

305) [村の暮らしを眺める役人たち。あまりにも閑散としている村の様子を見て言う]

?itei=nu ju: nat-i=n cakuco:=ja ?awari ja=saja:

いつ=GEN 世 なる-SEQ=ADD 百姓=TOP 哀れ COP=SFP

「いつの世になっても百姓は哀れだなあ。」(芝居, 536)

?e:や ntea 等の感嘆詞が文中にあらわれやすい。

306) A: (前略) ma:=nu=ga¹⁴³

どこ=GEN=WHQ

「どこの家のものか？」

B: kuniei=nu makate: ja-ibi:n

(人名)=GEN (人名) COP-POL

「国吉のマカテーです。」

(中略)

A: ?e:, sunduneci=nu ko:tei-nume:=nu kuniei=saja:. ?aja:=n ta:ri:=n ?ugandzu:

INTJ (地名)=GEN (人名)-HON=GEN (人名)=SFP 母=ADD 父=ADD お元氣

「ああ、首里殿内の幸地さんの国吉だねえ。お母様もお父様もお元気で」

?wa:tei-mice:m=i

COP.HON-HON=YNQ

「いらっしやるか？」(実践, 46)

307) [祖母 A と孫 B の会話。孫 B が祖父のことについて話を聞かせてくれと祖母 A にお願ひする]

?ja:=ja ?ntca tamme: kuto: nu:=n wakar-an=saja:. ?itta: ta:ri:=ga mi:tei nai=ni

2SG=TOP INTJ 祖父 事.TOP 何=ADD わかる-NEG=SFP 2PL.GEN 父=NOM 三つ なる=DAT

「お前はそうかお爺ちゃんの事は何もわからないんだねえ。お前のお父さんが三つなる時に」

tamme:=ja bo:e:tai=ntai ?ndz-i=jo:. ?unumama ke:t-e: k-u:n ba: ja=sa

祖父=TOP 防衛隊=DAT 行く-SEQ=IP そのまま 帰る-SEP.TOP 来る-NEG.GEN FN COP=SFP

「お爺ちゃんは防衛隊に行つてね。そのまま帰つて来ないわけなんだよ。」(実践, 25) (用例 296 と重複)

308) ?ai, nabitu:. nage:=saja:. ?ja:=ja ma:=kai=ga

INTJ (人名) 久しぶり=SFP 2SG=TOP どこ=ALL=WHQ

「おお、ナビトウー。久しぶりだねえ。お前はどこに行くのかい？」(実践, 33)

工藤他 (2007) によると、次の3つの文脈で次の用例を用いることができるという。ただし、ここでも《対象的な内容》がすでにミラティブな意味あいを実現している。つまり、述語の *ce:n* 形式にミラティブな意味あいがあるが備わっていて、そのような文に *saja:* があらわれやすい。

309) [(1)太郎の姿は見えないが、玄関にお土産があるのを見た場合、(2)太郎の姿は見えないが、発話現場で人から太郎が来たことを聞いた場合、(3)来ないと思っていたのに、太郎が玄関にいるのを見た場合(工藤他, 2007, p. 152)]

¹⁴³ かつて同じコミュニティ内では、全住民が顔見知りであった。「どこの家の者だ」と伝えれば、どの家族の誰か特定できた。目上の人が目下に向かってそのような時に使う定番のフレーズ。直訳は「どこのか？」

taru:=ja te-e:=saja:

太郎=TOP 来る-RES=SFP

「太郎が来ているんだなあ！」(太郎, 来たんだなあ!)」(工藤他, 2007, p. 152)

310) [テーブルの上に作られた夕飯があるのを見て]

ju:ban nite-e:=saja:

夕飯.ACC 煮る-RES=SFP

「夕飯が煮てあるよ！」(Arakaki, 2013, p. 84)

311) [目の前で猫が死んでいるの(猫の死体)を見て。「『元気な猫だったのに死んでいる』』といった、予想外な新事実であることを表す(工藤他, 2007, p. 152)』

maja:-g^wa:=ja cidz-e:=saja:

猫-DIM=TOP 死ぬ-RES=SFP

「猫が死んでいる！」(工藤他, 2007, p. 152)

3.7.3 真偽質問文

3.7.3.1 i/mi の文

次のような場面では、-ti k^wi:mi(してくれるか)の文だとしても、もはや〈依頼〉として働いてはいない。そして、聞き手に尋ねて聞き手から情報を引きだしてもいない。質問文なのは、まだ確定していない不確かな事象の成立をいまだ信じきれない気持ちからであろう。そのような感情の高ぶりや驚きが表されている。

312) [子供を首里に連れて行かないでと懇願する B だが A と C の説得に応じて]

A: (前略) biru:, sui=ŋkai jar-atē-i turac-i

(人名) 首里=DAT 遣る-CAUS-SEQ BEN-IMP1

「ビルー, 首里に行かせてくれ。」

B: çakuso:=nu wa:=ga teassa ?umi:kanasa e-i=n, ?uming^wa=nu tami=ne: nar-aŋ-gutu

百姓=GEN 私=NOM どのように 思い可愛がり する-SEQ=ADD 子供=GEN ため=DAT.TOP なる-NEG-CSL

「百姓の私がどのように思って可愛がっても、この子のためにはならないから…」

C: jarate-i k^wi:m=i, jarate-i k^wi:-ru-mun=du=n jar-e: du:=nu

やらす-SEQ BEN=YNQ やらす-SEQ BEN-ADN-もの=FOC=ADD COP-CND 自分=GEN

「預らせてくれるか! 預らせてくれるものならば自分の」

wata jamate-i nate-e:-ru kk^wa=nu gutuku teanne:ru ricein eimi:n=do:

腹.ACC 痛める.SEQ 産む-RES-ADN 子=GEN 如く どんな 立身 させる=SFP.ASS

「腹を痛めて産んだ子の如くどんな立身でもさせるよ。」(芝居, 588-590) (用例 39 と一部重複)

次の三例でも、《問いかけ性》は弱く、もはや質問文としての機能は失われている。発話直前に与えられた情報に対する話し手の受け止め方あるいは評価のようなものを疑いながら、あるいはいまだ信じきれないという態度で文を述べている。このような文は、情報を引きだすことが目的ではないとすれば、話し手の判断の不成立を表出するだけの〈疑い〉の文に近づく。与えられた情報が話し手にとって心外なものなら、〈驚き〉や〈意外〉の文となってあらわれる。

313) A: nu:=nu hanaci s-o:-mice:t-a=ga

何=GEN 話.ACC する-PROG-HON-PST=WHQ

「何の話をしていらっしゃったのですか。」

B: ge:tobo:ru=nu hanaei ja=sa

ゲートボール=GEN 話 COP=SFP

「ゲートボールの話だよ。」

A: nama: ge:tobo:ru s-an tt̃eo: u-ibir-aŋ=ja:

今.TOP ゲートボール.ACC する-NEG.ADN 人.TOP いる-POL-NEG=SFP

「今はゲートボールをしない人はいないですね。」

B: ?an jam=i. ?ansuka φe:t-o:m=i

そう COP=YNQ そんなに 流行る-PROG=YNQ

「そうなのか。そんなに流行っているのか。」

A: ?undzu=n s-o:-mice:-e: s-an=i

2SG.HON=ADD する-PROG-HON-INF.TOP する-NEG=YNQ

「貴方もしていらっしゃるんじゃないの？」(実践, 14)

314) [ある人と付き合っていると云ったら、やめとけと言われたので、何かあるのかと尋ねたら]

A: ?an=te:ma: ?ar-an. ?ja:=ja mi:waku sun=do:

ある=どころ COP-NEG 2SG=TOP 迷惑 する=SFP.ASS

「あるどころじゃない。お前は迷惑するよ。」

B: ?ansukana: ?ir-ant-i=n eim-e: s-an=i

そんなに 言う-NEG-SEQ=ADD 済む-INF.TOP する-NEG=YNQ

「そんなに言わなくてもいいんじゃないか¹⁴⁴。」

A: wa: tudzi kit-an=do:¹⁴⁵ ?ant̃eo: d̃ziko: janamun=do:

1SG.GEN 妻 (註参照)-PST=SFP.ASS あの人.TOP とても 嫌なやつ=SFP.ASS

「俺の妻大変だったぞ。あの方は本当に悪いやつだぞ。」

B: ?ansuka jam=i

そんなに COP=YNQ

「そんなになのか。」

A: jan=do:

COP=SFP.ASS

「そうだぞ。」(実践, 33) (用例 243 と一部重複)

315) A: karimen=di-ei ?mma=nd̃zi ?ukir-arij-abi:m=i

仮免=QT-NLZ ここ=LOC 受ける-POT-POL=YNQ

「仮免ってのここで受けられますの。」

B: ?i: kuma: ?unu eikendzo: ja=sa

うん ここ.TOP その 試験場 COP=SFP

「ああ。ここはその試験場だよ。」

A: ?e:=tai

VOC=POL.F

「あう(手を挙げる)。」

B: nu:=ga, makate: na:φin ?am=i

何=WHQ (人名) もっと ある=YNQ

「何だ、マカテー。まだあるのか。」

A: wanne: tutt̃ei: mutt̃e-e: u-ibir-an-eiga, t̃ea: e-e: jutas-aibi:=ga

1SG.TOP 時計.ACC 持つ-SEQ.TOP いる-POL-NEG-ADVRS どう する-CND よろしい-POL=WHQ

「私は時計を持っていませんが、どうすればよろしいですか？」(実践, 46)

¹⁴⁴ 後略。

¹⁴⁵ 動詞 kijun 「接触する。さしさわる。かち合って支障を生ずる」(首里那覇方言音声データベース「キユン」)。

3.7.3.2 ba:i/basui の文

形式名詞 ba:または basu は、「の」や「わけ」等と訳され、述語で i と結びついて ba:i/basui の形であらわれる。basui はやや古めかしい表現である(調査協力者, 面接調査, 2015 年 10 月 5 日)。次に挙げる用例は全て主語が二人称の ba:i/basui の文で、話し手の聞き手に対するネガティブな評価をあえて質問(あるいは詰問)の形で伝えながら、話し手の〈驚き〉を表すと同時に聞き手に対する〈非難〉あるいは〈蔑み〉も表す。驚きや蔑みの程度を表す ?ancei や ?ansuka(それ程), kuŋguto:ru(このような)等の修飾語を伴いやすい。したがって、《問いかけ性》は弱い。《対象的な内容》は、話し手にとっていまだ信じがたいことである¹⁴⁶。

316) [息子 A が芸妓を家に連れて来たために、母 B が追いつく]

A: t̃e:u:=jo:=sai, ?aja:.. maḏziru:=n maḏzun ?acibun=[i ?itea-ibin]=[e:¹⁴⁷
 今日=IP=POL.M 母 (人名)=ADD 一緒に 遊ぶ=QT 会う-POL=SFP.NASS
 「今日はずいね、母上。マジルーも一緒に遊ぼうかと会ってたのに…」

B: ?akisamijo:, ?ja:=ja ?ancei t̃eimu φurit-a-ru ba:=i
 INTJ 2SG=TOP それ程 肝 狂う-PST-ADN FN=YNQ
 「ああ、お前はそんなに気が狂ったのか。」(芝居, 560)

317) [酔っぱらってジュリの女を家に連れてきたマサンルーに対して伯父が]

A: masan|u:, ?ja:=ja saki=du nud-o:-ru=i
 (人名) 2SG=TOP 酒=FOC 飲む-PROG-ADN=YNQ
 「マサンルー、お前は酒を飲んでるのか！」

B: tamme:=sai nud-o:-ibi:=sa
 爺=POL.M 飲む-PROG-POL=SFP
 「伯父さん、飲んでますよ。」

A: ?ja:=ça: ?ansuka=madi φurimun nat-a-ru ba:=i
 2SG=PEJ それ程=LIM 馬鹿 なる-PST-ADN FN=YNQ
 「お前ってやつはそれ程まで馬鹿になったのか。」(芝居, 560-562)

318) [首里から本妻のマジルーを連れて久しぶりに小浜島に戻ってきたマサンルー]

A: maḏziru:, kunu ja: ja=sa
 (人名) この 家 COP=SFP
 「マジルー、この家だぞ。」

B: kuŋguto:ru tukuru=ŋkai ?undzo: eimat-o:t-a-ru basu=i
 このような 所=DAT 2SG.HON.TOP 住まう-PROG-PST-ADN FN=YNQ
 「このような(みすばらしい)所に貴方は住んでいたのか。」(芝居, 586)

3.7.3.3 na:の文

次の主語が二人称の na:の文は、聞き手から情報を引きだしてはいないので、《問いかけ性》はない。聞き手の動作あるいは事象に対する話し手の〈驚き〉を表す。

319) ?uŋguto:ru t̃eiteimateige:=n sun=na:

このような 聞き間違い=ADD する=YNQ2
 「このような聞き間違いもするのか。」(音声「チチマチゲー」)

¹⁴⁶ 用例はすべて過去の文であるため、非過去の文を収集・分析することは今後の課題である。

¹⁴⁷ 原文訳は「言ったのですよ」とあるが、?iteaibi(:n)は「会います」という意味なので、誤訳か。

次の主語が三人称の *na:* の文でも、聞き手から情報を引き出すというよりは、話し手の事象に対する〈驚き〉のような感情を表現している。《問かけ性》はない。*madzi* は事象に先行してあらわれ「驚き」の意をあらわす(首里那覇方言音声データベース「マジ」)。

320) A: *?ama=nu to:φu kam-i:ne: eigu φi:n=di=do:*

あそこ=GEN 豆腐.ACC 食べる-CND すぐ 下す=QT=SFP.ASS

「あそこの豆腐食べるとすぐお腹壊すってよ。」

B: *çi:na: madzi φunto:=na:*

INTJ INTJ 本当=YNQ2

「ええっ。なんだって本当か。」

A: *wannin ?atat-i dziko: teu:atai jat-an=do:*

1SG.ADD あたる-SEQ とても 強当たり COP-PST=SFP.ASS

「俺もあたってすごくひどかったぞ。」(実践, 33)

次の三人称の *na:* の文は, *tada* (たった) という程度を表す副詞を用いることで、話し手の〈驚き〉を強調している。

321) [久しぶりに会った祖母と孫の会話]

A: *?ancei duei=n mando:m=i*

CNJ 友達=ADD たくさんいる=YNQ

「それじゃあ友達も多いのか。」

B: *?u: tai=bike:no: u-ibi:n=sai*

はい 二人=だけ.TOP いる-POL=POL.M

「はい。二人だけはおります。」

A: *tada tai-g^wa:=na:*

たった 二人-DIM=YNQ2

「たった二人なの。」(実践, 25)

次の *na:* を伴う三人称を主語にした、形容詞述語文は、話し手の第三者に対する評価を〈驚き〉というかたちで伝えている。発話直前に「野菜の値段が高い」という情報が共有されている。共有情報をあえて質問というかたちで伝えることで〈驚き〉を表す。

322) [野菜はたくさん出回っているが、値段が高いと聞いて]

namaeikiti takasan=na: ?ance: ta:gana ju:ku:-mo:ki s-o:-ei=ga un=te:

未だに 高い=YNQ2 CNJ 誰か 欲-儲け する-PROG-NLZ=NOM いる=SFP

「未だに高いのか。それじゃあ、誰かぼろ儲けしているのがあるんだろうね。」(実践, 17)

3.8 《事実確認》の *hadzi* の文

ここでは、《事実確認》の事象を差し出す *hadzi* の文について述べる。*hadzi* の文の多くは《事実未確認》の事象、つまり〈間接確認の推量〉を表すが、《対象的な内容》が《事実確認》の事象を差し出すなら、〈予定の不実現〉〈思い出し(記憶)〉〈さとり〉〈断定回避〉といった意味あいを表す。

3.8.1 予定の不実現 (was supposed to)

述語の非過去形+hadzi jatan で、「～するはずだった」という過去の設定時での動作主体の予定を表し、その結果、〈予定の不実現〉を表す¹⁴⁸。

例えば、次の用例では、動詞の非過去形 ?iteun の連体形 ?iteuru に hadzi jatan が後接して、「昨日病院に行くはずだった」という主体（ここでは「私」）の過去の予定を表している。「忘れてしまった」という後続の文からもわかるように、この予定の文は実現しなかったことも含意する。

- 323) wanne: teinu: b'oi:ij=kai ?iteu-ru hadzi jat-a-eiga waeirit-i ne:n
 ISG.TOP 昨日 病院=ALL 行く-ADN ハズ COP-PST-ADVRS 忘れる-SEQ CPL
 「私は昨日病院へ行くはずだったが忘れてしまった。」(調査, 2015/6/3) (用例 91 とほぼ同文)

3.8.2 思い出し (記憶)

〈思い出し〉は、記憶を媒介にして間接的に情報を引き出すことである。思い出しの文に差し込まれた《対象的な内容》は、一度、話し手の経験として蓄積された事象や出来事を表してはいるが、忘れていたり、はっきり覚えていないため、すぐには引き出すことのできない情報であり、記憶を媒介にして間接的に取りださなければならない。したがって、文に差し込まれる話し手の判断はまだ想像の域を出てはいないため、hadzi が用いられるのだろう。

- 324) [刀が旅人本人の物である証拠を見せてみろと言われて]

su:ku=ja:. kunu katana=nu teiriφa=kara guεin=nu tukuru=ηkai kidzi=nu teutukuru
 証拠=IP この 刀=GEN 切り羽=ABL 五寸=GEN 所=DAT 傷=NOM 一カ所

「証拠か。この刀の切り羽から五寸の所に傷が一カ所」

?a-ru hadzi. to:, taekamit-i n:d-i

ある-ADN INFR INTJ 確かめる-SEQ 見る-IMP1

「あるだろう。さあ、確かめて見ろ。」(聞き手が確かめる)

?a-ra=ja:. ?uri=kara katana=nu teika=nakai ro:dzi=nu φuiteika=nu teik-a:tt-o:-ru hadzi

ある-DUB=SFP それ=ABL 刀=GEN 柄=LOC 龍=GEN 紋様=NOM 使う-PASS-PROG-ADN INFR

「あるだろう？それから刀の柄に龍の紋様が使われているはず。」

to:, ?uri=made: n:te-i nd-e:

INTJ それ=LIM.TOP 見る-SEQ 見る-IMP2

「さあ、それまで見てみろ。」(芝居, 814)

次の用例においても、「私の本の中に説明ごと書いてある」という対象的な内容（事象）について、話し手は一度知覚しているが、記憶があいまいである。自分の記憶を媒介にして間接的に事象を引きだしている。

- 325) [自分の本の前編に書いてあるはずだと主張する A]

A: ?unu kuni=nu dzi: hagate-imij-a-ni, su-ru e:ka: wanne: ?unu dzempenu=ηkai

その 国=GEN 字.ACC 剥がす-CAUS-SEQ する-ADN 間.TOP ISG.TOP その 前編=DAT

「その国の字を剥がさせて、その間は私はその前編に」

¹⁴⁸ 「はずだった」の文は「／予定された動作のし手の、過去の予定をはなし手の《私》がいま確認する／という意味を実現する (奥田, 1993, p. 197)。

ʔunu gaku ʔurute-e:-ru eaeinu=n tut-e:-i, mata ʔatu=nu munu=ni=n
 その 額.ACC 下ろす-RES-ADN 写真=ADD とる-RES-INF また 後=GEN もの=DAT=ADD
 「その額を下ろした写真も撮ってあるし、また後のものにも」

wan honu=ŋkai ʔa-ru hadzi=do:
 1SG.GEN 本=DAT ある-ADN ハズ=SFP.ASS
 「私の本にあると思うよ。」

B: ʔan ja-ibi:m=i
 そう COP-POL=YNQ
 「そうですか。」

A: ʔansukutu, ʔunu setsumei=ci:ti ʔa-ru hadzi=do:
 CNJ その 説明=ごと ある ハズ=SFP.ASS
 「だから、その説明ごとあると思うよ (あるはずだよ)。」 (方談, 329)

次の用例では、最近物忘れのひどくなった男が、友人との約束がいつだったか忘れてしまったので、物覚えのよい妻に明日だったか尋ねるが、妻も自分のことではないため、はっきりは覚えていない。しかし、前に夫が「明後日の約束だ」ということを言っていた気がするため、「明後日の約束だった」だろうというような判断を夫に伝えている。ここでも、妻の判断は記憶から間接的に引き出した情報である。

326) [友人との約束がいつだったか忘れてしまったので、明日かどうか妻に聞いてみる]

A: ʔasati=nu jakusuku jat-a-ru hadzi=do:
 明後日=GEN 約束 COP-PST-ADN ハジ=SFP.ASS
 「明後日の約束だったと思うよ。」

B: ʔan=du jat=a=gaja:
 そう=FOC COP-PST=DUB
 「そうだったっけ？」 (調査, 2015/5/28)

3.8.3 さとり

hadzi を述語にもつ文は、日本語の「道理で～なはずだ」のような〈さとり〉の意味あいも表す¹⁴⁹。調査協力者の内省では、「確実であることを自分に確認」しているのだと言う。

327) [店員になぜ安いか聞いたら、中国製だと聞いて]

teu:goku seiçin jar-e: jassa-ru hadzi=ja:
 中国 製品 COP-CND 安い-ADN ハジ=SFP
 「中国製品なら安いはずだなあ。」 (調査, 2015/6/11)

Arakaki (2016) では、首里方言¹⁵⁰の hadzi には〈さとり〉の用法がないと結論づけているが、上のような用例が使用可能であるとすれば、必ずしもそうとは言いきれないだろう。もちろん、日本語の影響を受けてあらわれた表現か、もしくは、調査方法に問題がある可能性も十分にあるが、首里方言

¹⁴⁹ 「条件の真相をしって、現状が当然の帰結であると、さとるばあい」 (奥田, 1993, p. 183)。

¹⁵⁰ Arakaki (2016) では Ryukyuan という語があてられているが、対象言語は首里方言あるいは首里・那覇方言を中心とした共通語的な社会方言 (當山 2015b でいう首里・那覇社会方言) を指す。したがって、本論の分析に適用できるとみなした。

は時代とともに変化して、新たな用法や意味あいを常に獲得し、自らの言語体系に取り込んでいくのであるならば、それもまた、首里方言の持つ意味あいとして記述していくのがよいだろう。

3.8.4 断定回避

〈断定回避〉は、話し手の聞き手への配慮から、文字通り〈断定〉を回避することである。下記の用例のような、状況的に、現実を突き付けたり、ありのままを伝えたりすることが好まれないと判断されるような場面が想定される。

次の用例では、「Aの父親は死んだ」という事実をAに伝えるのは好ましくないと判断しているのだろう、hadziの文を用いて断定を回避した表現となっている。

328) [芝居。離島勤めを終えて、久しぶりに村に帰って来たA(カマダー)だが...]

A: watta: su:=ja n:r-an-t=i: ja:=ne: ur-an-eiga
 1PL.GEN 父.CL=TOP 見る-NEG-PST=YNQ 家=DAT.TOP いる-NEG-ADVRS
 「うちの父ちゃん見なかった?家には居ないが。」

B: ?itta: su:=na:
 2PL.GEN 父.CL=YNQ2
 「お前の父ちゃんか...」

C: ?itta: su:=ja uran hadzi
 2PL.GEN 父.CL=TOP いない ハズ
 「お前の父ちゃんは...いないと思う...」

A: nu:=ga=na: ?anci ?iφu:na munui:kata ei-nee:-ru
 何=WHQ=POL そんな 変な 言い方 する-HON-ADN.MIR
 「どうしたんですか。そんな変な言い方なさって」

D: kamada:, ?itta: su: kutu ?i:-ne: satei naju-ee: nada=du ja-ru
 (人名) 2PL.GEN 父.CL.GEN 事 言う-CND先 なる-NLZ.TOP 涙=FOC COP-ADN
 「カマダー、お前の父ちゃんの事言ったら先に出るのは涙でしかない...」

A: nu:=ga=na: nu: jat-i ?an ?i-nee:=ga
 何=WHQ=POL 何 COP-SEQ そう 言う-HON=WHQ
 「どうしてか?なぜそうおっしゃるのか」

D: ?uduruku=na=jo:ja: ?itta: su:=ja kunu ju: ?ueinat-an=do:
 驚く=PROH=SFP 2PL.GEN 父.CL=TOP この 世 失う-PST=SFP.ASS
 「驚くなよな。お前の父ちゃんは亡くなったんだよ...」(芝居, 942-944)

次の用例でも、目の前にいる犯人が怖くてはっきり断定することができないため、hadziを用いて言葉を濁している。

329) [殺すのを見た時の犯人の様子を役人Bに語る村人A。対象的な内容は、話し手がはっきりと目撃したことである。しかし、目の前にいる犯人が睨みをきかせているので物怖じしている]

A: ho:tea:-g^{wa}=ja ko:ga:ki: s-o:t-a-ru ti:sa:dzi=ηkai susuj-a:ni kannij-g^{wa}: s-a:ni
 包丁-DIM=TOP 頬かむり する-PROG-PST-ADN 手拭い=DAT 拭く-SEQ こう-DIM する-SEQ
 「短刀は頬かむりしていた手ぬぐいに拭いてこんな風にして」
 teitei=kai ?atit-i n:te-i (中略) tei:=nu ?teite-o:=gaja:=ndi
 月=ALL 当てる-SEQ 見る-SEQ 血=NOM 付く-PROG=DUB=QT

「月に当てて見て...血が付いているかなあと」

n:te-a-ru hadzi ja-ibi:n. ?ansa:ni

見る-PST-ADN ハズ COP-POL CNJ

「見たはずですよ。それで...」

B: ?unu muno: ma:=nu ta:=nditei wakajum=i

この 者.TOP どこ=GEN 誰=QT わかる=YNQ

「この者はどこの誰とわかるか」(芝居, 958-960)

3.9 その他の周辺のリアルな文

3.9.1 hadzi の文以外の断定回避

上記の hadzi の文以外にも〈断定回避〉を表す手段はいくつかある。その全てを記述するのは次に譲るとして、ここでは、te: の文と eiga による断定回避の用法について簡単に述べる。

3.9.1.1 終助辞 te: の文

場面状況によっては、te: も〈断定回避〉を表す。例えば、次の用例のように、話し手の評価を伝える文に終助辞 te: が用いられて、その判断を柔らかく伝える(尚、次の用例の人称ははっきりしないが、ここでは仮に主語が二人称であるとみなす)。

330) ja:=nu subiue:¹⁵¹ de:-munu. to:ho: teuhaku ?ateire:ri-wa=rujan=te:

家=GEN 完成祝い COP2-FN 豆腐.TOP ひと箱 あつらえる-CND=OBLG=SPF

「家の完成祝いだもの。豆腐はひと箱あつらえないといけないでしょうよ。」(音声「チュハク」)

主語が二人称の eiwadu jaru の文は、通常、〈必要〉という意味あいから派生して、聞き手に対する〈忠告・警告的な命令〉等を表すが、この場合多くは do: を伴う。上記の用例のように te: が用いられる場合、《対象的な内容》は話し手と聞き手との関係や個人の性格等、何らかの理由により、強く言い切ることができない内容が述べられる。そのような eiwadu jaru の文は、《働きかけ性》を失い、話し手の評価的な判断を言い切らない〈断定回避〉の文となる。

3.9.1.2 eiga の文

eiga は逆接などを表す接続助辞であるが、文末に用いられて〈断定回避〉を表す。

331) [役人が村を視察している所に百姓達が薪を担いで何事もないかのようにやってくる。すると村長が慌てて百姓達に知らせる]

?ane, ?ane, gudze:ban ja-mice:-eiga. teikubo:rani teikubo:rani

INTJ INTJ 御在番 COP-HON-NASS INTJ INTJ

「ほら、ほら、御在番様でいらっしゃるぜよ。控えないか控えないか」(芝居, 536)

332) [役人 A が村を視察している所に百姓達が薪を担いでやってくる。A は百姓達に優しく声をかける。B は村の百姓達。C は地元の役人で A の部下]

A: kuri=kara: dzo:no:mun karuku nate-i ?itta:=ga raku nai-ru gutu

これ=ABL.TOP 上納物.ACC 軽く 成す-SEQ 2PL=NOM 楽 なる-ADN ように

「これからは上納物を軽くしてお前達が楽になるように」

¹⁵¹ 原文ママ。『沖縄語辞典』では eubi ?uiwe:, または, eubi ju:e:。

kange:t-i turasu-gutu teibat-i turae-i=jo:
考える-SEQ BEN-CSL 気張る-SEQ BEN-IMP1=SFP

「取り計らってやるから頑張ってくれよ。」

B: do:rin jutaeiku kange:t-i ?utabimice:-bir-i

どうか よろしく 考える-SEQ BEN.HON-POL-IMP1

「どうかよろしくお願い申し上げます。」

(百姓達は一礼して薪を持ち上げて立ち去ろうとする。それを手伝おうとする役人 A)

C: sari, sari, ?uppina:=nu gudze:ban=nu çakuco:=nu eigutu tigane: ei-mice:-ne:

INTJ.M INTJ.M これ程=GEN 御在番=NOM 百姓=GEN 仕事.ACC 手伝い する-HON-CND

「もし、もし、これ程の御在番様が百姓の仕事を手伝いなさいますと」

φu:dze: ne:j-abir-an-eiga

風情.TOP ない-POL-NEG-ADVRS(/NASS)

「みっともありませんよ…」(芝居, 538)

333) [首里に帰った B の元夫が子供を連れに再び島に現れる。里之子は元夫の事。子供の祖母 A と B の会話。離れ離れになってしまう親子の将来はどうなっていくのかと A が自問している]

A: biru:, ?iteide:dzi nat-o:-eiga

(人名) 一大事 なる-PROG-ADVRS(/NASS)

「ビルー、大変な事になっているよ…」

B: nu:=ga. ?appa:, nu: ja=ga

何=WHQ お母さん 何 COP=WHQ

「どうしたの？お母さん、何？」

A: biru:, sui=nu satunuei=ga menso:te-o:-eiga

(人名) 首里=GEN (人名)=NOM 来る.HON-PROG-ADVRS(/NASS)

「ビルー、首里の里之子がいらっしやったが…」

B: satunuei=ga

(人名)=NOM

「里之子が…」

A: guni:dzi ?aja:me:=n madzun ja-mice:-eiga

御内儀 奥様=ADD 一緒 COP-HON-ADVRS(/NASS)

「御内儀の奥様も一緒にいらっしやるが…」

B: ha:me:

祖母.CL

「おばあちゃん！」

A: kunu warabe: so:-iga: ?ar-an=i

この 子供.TOP 連れる-PUR.TOP COP-NEG=YNQ

「この子供を連れにではないのか…」

(B は子どもを強く抱きしめる)

?akijo:, kunu ?ujakk^wa tea:=ga nat-i ?iteu-ra

INTJ この 親子 どう=FOC なる-SEQ 行く-DUB

「ああ、この親子どうなっていくやら。」(芝居, 584-586) (用例 7 と一部重複, 222 と同文)

3.9.1.3 終助辞 de:の文

先述の通り, de:の文も〈断定回避〉を表すことができる。文を控えめに述べるというニュアンスから生じる意味あいである。詳しくは, 〈記述〉を表す de:の文を参照されたい。

83') A: ʔaja:=sai, jat̃ei:=ja ʔugueiku=kara mudut-i menso:tẽ-o:-ibi:-ti:
 母.CH=POL.M 兄.CH=TOP お城=ABL 戻る-SEQ 来る.HON-PROG-POL-PST.YNQ
 「母上, 兄上はお城から戻っていらっしゃってますか?」

B: na:da ke:t-e: k-u:n=de:
 まだ 帰る-SEQ.TOP 来る-NEG=SFP.NASS
 「まだ帰っては来ないよ...」(芝居, 830)

84') A: matea:çi: maruke:ti=nu na:ɸakembutei:ja-gutu ʔamakuma mieit-i k-u:=çi:=na:
 (人名) 時々=GEN 那覇見物 COP-CSL あちこち 見せる-SEQ 来る-INT=SFP=POL
 「マチャー兄さん, たま的那覇見物だからあちこち見せて来ますね。」
 (中略)

B: ʔe:, na: ʔusaki:na: d̃zin k^wit-e:n=de:
 INTJ FIL こんなに お金 くれる-RES=SFP.NASS
 「あら, まあこんなにお金くれたわよ...」(芝居 2, 1482-1484)

3.9.2 終助辞 te:を用いた〈当然のこととして答える〉文

《対象的な内容》が話し手の直接確認したリアルな事象を表す te:の文のうち, 話し手にとっても聞き手にとってもあたりまえの内容をあえて述べ伝える文となる場合がある。

例えば, 次の主語が一人称の te:の文は, 《対象的な内容》が話し手自身の過去の動作なので, 話し手にとって当たり前のことを差しだしている。これらの用例に共通することは, お互いにとって共有情報であるはずの内容であるにも関わらず, 一方がその内容に関してあえて質問を投げかけていることである。そして, その質問に対する返答が te:の文で述べられている。

334) [腹が減ったという男 B に対して気を遣っておにぎりを差しだす女 A だが男 B が嫌がる]

A: ʔunu ʔubun nid̃ziri: ʔusaga-miso:r-e:
 この 飯 握り.ACC 食べる.HON-HON-IMP2
 「このにぎり飯を召し上がれ。」

B: nu:=ga nu:ñtei wanne: ʔuri kam-an=dare:naraŋ=ga
 何=FOC なぜ 私.TOP それ.ACC 食べる-NEG=OBLG=WHQ
 「一体どうして俺はそれを食べなければならないか。」

A: ʔund̃zo: kissa ja:san-u ɸueig-ar-an=de: ʔi-miso:r-an-ti:
 2SG.HON.TOP さっき ひもじい-CSL 防ぐ¹⁵²-POT-NEG=QT.TOP 言う-HON-NEG-PST.YNQ
 「貴方はさっきお腹がすいて仕方ないなんておっしゃらなかった?」

B: ʔite-an=te:
 言う-PST=SFP
 「言ったけど。」

A: ʔance: ja:sa no:çi ja-ibi:=sa
 CNJ 空腹 凌ぎ COP-POL=SFP
 「それでは空腹凌ぎにですよ。」

B: wanne:=jo:, tẽu=nu k^wi:-ee: kam-an-nu:=du jan=de:
 1SG.TOP=IP 人=NOM くれる-NLZ.TOP 食べる-NEG-人=FOC COP=SFP
 「私はね, 人がくれる物は食べないんだよ。」(実践, 47-48)

¹⁵² フシガランは「防げない」という意味だが, 理由+フシガランで「～で仕方ない」という意味になる。

このようなやりとりをする理由は、お互いにとって当たり前の内容をあえて質問し、あえて答えさせることで、返答文に差し込まれる内容を相手に認識させるという目的があるからである。

上記の用例では、《対象的な内容》の是非については「言ったよ」という返答から見えるように、話し手にとって当たり前の内容である。そのことをあえて答えさせることで、先行する文脈の理由・成り行きを理解させようとしている。したがって、このような文をここでは仮に、〈当然のこととして答える〉の文と呼んでおく。〈当然のこととして答える〉の文における **te:** の使用は必須である。また、《対象的な内容》自体は話し手が直接確認した事象なので、述語が **san** 形式（単純過去）をとることができる（間接確認を表す **te:** の文が **san** 形式をとれないのとは対照的）。

次の二人称を主語にした **te:** の文は、話し手にとってもはっきり認識できていることである。はっきり認識できている内容をあえて質問して、当たり前のことをあえて答えさせることで、その内容を強調している（あるいは強調しながらそのことを理解させようとしている）。

335) [追い剥ぎ同士が兄弟ゲンカをしている]

A: **tabinin** **ʔuda:te-i** **dziŋkani** **ʔubaitui-ru** **kunu** **eiguto:**

旅人.ACC 脅す-SEQ 銭金.ACC 奪い取る-ADN この 仕事.TOP

「旅人を脅して銭金を奪い取るこの仕事は」

ta:=ga **hadzimit-i** **ta:=ga** **nara:te-a=ga**

誰=NOM 始める-SEQ 誰=NOM 教える-PST=WHQ

「誰が始めて誰が教えたか?!」

B: **ʔure:** **ʔja:=ga=te:=ça:**

それ.TOP お前=NOM=SFP=PEJ

「それはお前がだけど…」

A: **ja-ra=ja:**

COP-DUB=SFP

「だろう？」（芝居, 750）

全体的に **te:** の文は、話し手にとって漠然とした認識あるいは判断を説明的に述べるという特徴があると思われる。〈当然のこととして答える〉の文でも、その漠然さは保たれている。先の用例では、聞き手の質問の意図・真意がよくわかっていないという点で、後の用例では、釈然としない話し手の気持ち **te:** にあらわれている。したがって、このような漠然さといったニュアンスが **te:** の文のあらわれ方に関係していると言えよう。

評価のモダリティ

評価のモダリティは、話し手の評価的な判断が述べられる文のモダリティを指す（奥田, 1999b; 日本語記述文法研究会, 2003）。事象を〈必要〉とみなす文のほか、〈許可・許容〉を表す文、〈不必要〉を表す文、〈不許可・非許容〉を表す文がある。従来の研究ではあまり述べられて来なかった〈ただの評価〉を表す文についても記述を行う。

表 32 首里方言の評価のモダリティ形式一覧

〈必要〉	sandare: naran, eiwadu jaru (しなければならない) bi ^h tei: jan (べきだ) ei jasa (のだ) suce: maei (方がいい) ee: maei (したらいい) ee:/sa: maei (したらいい) ee: eimun (すればいい)
〈許可・許容〉	ein eimun (してもいい)
〈不必要〉	santin eimun (しなくてもいい)
〈不許可・非許容〉	ee: naran (してはいけない) kuto: naran (ことはできない)

3.10 〈ただの評価〉の文

〈ただの評価〉(以下、〈評価〉)の文は、話し手が〈確認〉した事象を通して、その事象または別の事象について話し手の評価あるいは判断や意見を述べる文のことである。そのような話し手の評価なり判断なりはポテンシャルなものである(工藤, 2014)。現在の事象について話し手の評価を述べる場合、sun 形式(完成・非過去)や so:n 形式(継続・非過去)を伴って表現される。過去事象について話し手の評価を述べる場合は、san 形式(単純過去)や sutan 形式(証拠性過去)を伴って表現される。

336) to:to:. ?itta: ?i^hcai^hant^hae: ?ussa. ti:tei=n ?mmuko: ne:nt-an

INTJ 2PL.GEN 受け答え.TOP それまで 一つ=ADD 面白く ない-PST

「ほらほら。お前達のおしゃべりはそれまで。一つも面白くなかった。」(実践, 48)

337) eidzikana eima de:n=na:

静かな 島 COP2=SFP.MIR

「静かな島であるなあ。」(芝居, 536)

〈評価〉の文は、述語の語彙的な意味によって〈評価〉を表すので、述語に語彙的な制限がある。〈評価〉あるいは〈評価的な判断〉の文で述語になれるのは、事象に対する評価を表せるものに限られる。したがって、形容詞述語や名詞述語で表すのがふつうである。動詞述語の場合、?at^hceun(歩く)や kamun(食べる)のような運動性の強い運動動詞は用いられないが、diki:n(できる)や k^we:in(肥える)のような《特性》を表す動詞や, teigain(違う)のような《関係》を表す動詞は使用可能である。終助辞の付かない断定形でいきる〈評価〉の文も少ない。実際の《はなしあい》の場面では、終助辞が頻用される。ここでも、do:, sa, および de:の文について述べる。

3.10.1 終助辞 do:の文

〈評価〉を表す終助辞 do:の文は、聞き手に訴えるような《聞き手めあて》の強さを前面に押し出しながら、話し手の強い主張としてある事象に対する話し手の〈評価〉を伝える。判断内容を伝えながら、しばしば、二次的に聞き手に何かしらの動作の実行を働きかける意味あいを強める。その《対象的な内容》は、話し手と聞き手との間に共有されていない情報である。独り言での使用は不可である。

主語が三人称¹⁵³

三人称を主語にした〈評価〉を表す *do:* の文の《対象的な内容》は、《聞き手めあて》を押しだしながらの第三者の事象や出来事に対する話し手の〈評価〉を伝える。判断内容を伝えながら聞き手に何らかの動作を実行してほしいという働きかける意味あいも伝える（あるいは働きかけが前面化する）。

338) [一緒にそば屋に行こうということになって]

A: *ma:=nu miŋci=kara mence:-bi:=ga*
どこ=GEN 道=ABL 行く.HON-POL=WHQ
「どこの道を通って行かれますか。」

B: *ŋzi:bu=nu ciŋca=kara ei:ei tu:t-i ?ik-an=i*
儀保=GEN 下=ABL 末吉.ACC 通る-SEQ 行く-NEG=YNQ
「儀保の下から末吉を通して行かないか。」

A: *?ama: tu:sa-ibi:n=do:*
あそこ.TOP 遠い-POL=SFP.ASS
「あそこは遠いですよ（だから、違う所から行きましょう）。」（入門, 107）

339) *?antŋco: dŋziko: janamun=do:*
あの人.TOP とても 嫌な奴=SFP.ASS
「あいつはとても嫌な奴だよ（だから、付き合わない方がいいよ）。」（実践, 33）（用例 243, 314 と重複）

3.10.2 終助辞 *sa* の文

〈評価〉を表す終助辞 *sa* の文は、《聞き手めあて》はなく、発話時における話し手の認識あるいは感情の変化を含意しながら話し手の〈評価〉を伝える。話し手の強い主張として伝えられる点で *do:* と共通する。その《対象的な内容》は、話し手と聞き手との間に共有されていない情報で、独り言での使用は原則不可である。

主語が一人称

一人称を主語にした〈評価〉を表す *sa* の文は、聞き手の知らない話し手自身に関わる事象についての話し手の評価的な判断を伝える。特に、《聞き手めあて》はない。〈評価〉をただ聞き手にもらすように述べているだけである。

340) A: *ja:φunnu. kate:mun ja-miee:=sa*
INTJ.F 変わり者 COP-HON=SFP
「ふん。変わり者でいらっしゃいますね。」
B: *kate:muno: watta:=madi=te:*
変わり者.TOP 1PL=LIM=SFP
「変わり者は俺たち以外いないよ。」
A: *nu:gana=nu takk^wi: ja-miee:-ra=ja:*
何か=GEN 血筋 COP-HON-DUB=SFP
「何かの血筋でしょうね。」

¹⁵³ 一人称および二人称を主語にした用例を見つけることができなかった。話し手が話し手自身の評価について聞き手に述べる時、あるいは、話し手が聞き手の評価について聞き手に述べる時にあらわれるだろう。

B: wan=na:. ʔamagaka:=nu takk^{wi}: ja=sa
 1SG=YNQ2 天邪鬼=GEN 血筋 COP=SFP
 「俺か？天邪鬼の血筋さ。」(実践, 48)

主語が二人称

主語が二人称の場合、聞き手のことに対する話し手の〈評価〉が述べられている。そのような評価は、事前に聞き手には共有されていない話し手の判断なり意見である。《聞き手めあて》はない。話し手側の認識の変化を含意しながら、聞き手にもらすようにただ述べる。

341) [夫が独り言のように言うが...]

A: ʔenda:dzira s-o:t-i jana-eimuteinamun ja=sa
 優しい顔 する-PROG-SEQ PEJ-根性持ち COP=SFP.MIR
 「優しい顔していてとても意地悪な人だな。」

B: ʔure: wan kutu=du ja-ibi:-ru=i
 それ.TOP 1SG.GEN 事=FOC COP-POL-ADN=YNQ
 「それは私のことですか？」(実践, 29)

342) A: ja:ʔunnu. kate:mun ja-mice:=sa

INTJ 変わり者 COP-HON=SFP.MIR
 「ふん。変わり者でいらっしやいますね。」

B: kate:muno: watta:=madi=te:
 変わり者.TOP 1PL=LIM=SFP
 「変わり者は俺たち以外いないよ。」(実践, 48) (用例 340 と一部重複)

次の用例は、「逃げなさい」のような命令文や「逃げたほうがいい」のような評価文に置き換えることが可能である。意味上、話し手の〈評価〉を伝えている文として差し支えないだろう。

343) [男からダイヤモンドを貰った A に対して B が入れ知恵する]

A: jir-e:=kara: ʔuʔe: ʔirara-wa=ruijae: s-an=i
 貰う-CND=ABL.TOP 少し.TOP 付き合う-CND=OBLG.TOP する-NEG=YNQ
 「貰った以上は少しは付き合わなきゃいけないんじゃない？」

B: eimu=sa. i:-ru ʔussa ij-a:ni eigu hai-ei ja=sa
 済む=SFP 貰う-ADN だけ 貰う-SEQ すぐ 去る-NLZ COP=SFP.MIR
 「大丈夫。貰うだけ貰ってすぐ逃げるのよ。」(実践, 34)

主語が三人称

主語が三人称の場合、話し手と聞き手以外のことについて話し手の〈評価〉という判断あるいは意見を述べる。そのような評価的な判断や意見は、事前に聞き手には共有されていない話し手内部の情報で、《聞き手めあて》はない。話し手側の認識の変化を含意しながら、聞き手にもらすように述べる。

344) [A が人から貰ったダイヤの指輪を B に自慢して見せる]

A: ʔunuʔi:binagi: n:te-i=ma:. ʔe:, daija=ndi=do:. so:mun ja-e: s-an=i
 この 指輪 見る-SEQ=IMP INTJ ダイヤ=QT=SFP 本物 COP-INF.TOP する-NEG=YNQ
 「この指輪見てみる。ほら、ダイヤだとよ。本物だろう？」

- B: so:mun ja=sa. ʔuri handobaggu=ŋkai ʔitt-i=na:
 本物 COP=SFP それ.ACC ハンドバッグ=DAT 入れる-SEQ=YNQ2
 「本物だよ。それをハンドバッグに入れるのか。」
- A: ʔanei ʔiri:ttukuro: ne:n-munnu
 だって 入れる所.TOP ない-FN
 「だって入れる所がないんだもの。」(実践, 34)
- 345) [男からダイヤモンドを貰った聞き手に対して話し手が言う]
 nu:ŋk^wi:n ko:t-i k^wi:-e: ʔja: t̄eimu ɸur-asun=t̄ei ja=sa
 何もかも 買う-SEQ BEN-NLZ.TOP お前.GEN 心.ACC 振る-CAUS=QT COP=SFP.MIR
 「何もかも買ってくれるのはお前の気を引こうってだよ。」(実践, 33-34)
- 346) [病院にて。看護師に患者が症状を訴える]
 A: teibitanda=nu ʔwi:go:sa=ssa:
 お尻=NOM かゆい=SFP.MON
 「お尻がかゆいなあ。」
- B: ʔanee: i: kusuinu ʔa-ibi:=sa. mutte-i te-a:bir-a
 それでは 良い 薬=NOM ある-POL=SFP 持つ-SEQ 来る-POL-INT
 「それじゃあ良い薬がありますよ。持って来ましょう。」(暮らし, 87)
- 347) [民話。寝る所もない貧乏人の夫婦の妻が産気づき困っていたら、大きな家の前を通りかかったので、一晩泊まらせてくれとお願いするが、断られたので、そのままその家の門前で子供を出産する。その家の前には立派な鉄の錠があったので]
kuri=n watta: ʔunt̄ei ja=sa. kunu kk^wa=nu na:=ja kanid̄zo:=tueei rippa=ni sudatir-a=ja:
 これ=ADD 1PL.GEN 運命 COP=SFP.MIR この 子供=GEN 名=TOP (人名)=として 立派=DAT 育てる-HORT=SFP
 「これも私たちの運命だよ。この子供の名前はカニジョー(鉄錠)として立派に育てような。」(大沖 32, 40-41)
- 348) [腹が減ったという男 B に対して気を遣っておにぎりを差しだす女 A だが男 B が嫌がる]
 A: ʔund̄zo: kissa ja:sa-nu ɸueig-ar-an=de: ʔi-miso:r-an-ti:
 2SG.HON.TOP さっき ひもじい-CSL 防ぐ-POT-NEG=QT.TOP 言う-HON-NEG-PST.YNQ
 「貴方はさっきお腹がすいて仕方ないなんておっしゃらなかった?」
- B: ʔite-an=te:
 言う-PST=SFP
 「言ったよ。」
- A: ʔanee: ja:sa no:ei ja-ibi:=sa
 CNJ 空腹 凌ぎ COP-POL=SFP.MIR
 「それでは空腹凌ぎにですよ。」
- B: wanne:=jo:t̄eunu k^wi:e: kam-an-nu:=du jan=de:
 1SG.TOP=IP 人=NOM くれる-NLZ.TOP 食べる-NEG-人=FOC COP=SFP
 「私はね人がくれる物は食べないんだよ。」(実践, 47-48) (用例 334 と重複)
- 349) A: t̄e:u:=ja d̄zuken^lo:=ja t̄ea: na-ibi:=ga
 今日=TOP 受験料=TOP どう なる-POL=WHQ
 「今日は受験料はどうなりますか。」
- B: t̄ea:n nar-an=sa t̄euke:n ʔnd̄zac-e:=kara: ɸikkumir-an=sa
 どう=ADD なる-NEG=SFP.MIR 一回 出す-CND=ABL.TOP 引っ込める-NEG=SFP.MIR
 「どうもならないよ。一回出した以上は戻らないよ。」(実践, 46)

ひとつの表現としてフレーズ化し、ほとんど固定化された *sa* の文もある。次の *i: ba: jasa* (いい気味だ), *i: kange: jasa* (いい考えだ), *eimusa/jutasai: sa* (結構だ・結構です), *tea: n ne: nsa* (どうってことないよ), *nama jasa* (今だぞ) 等が挙げられる。

350) *?i: ba: ja=sa* *nama=ne:* *so: ?it̃e-a-ra=ja:*

いい折 COP=SFP.MIR 今=DAT.TOP 性根 入る-PST-DUB=SFP

「いい経験だよ。これで思い知っただろうよ。」(儀間, 2000, 63)

351) [酒を飲み女遊びをする話し手。伯父が島流しにすると行ったので]

eimanagaei sun=di=ru ?i-mice:-ru=i *na: sui na:φa=nu kuraci=n ?ateihatit-i*

島流し する=QT=FOC 言う-HON-ADN=YNQ FIL 首里 那覇=GEN 暮し=ADD 飽き果てる-SEQ

「島流しするとおっしゃるのか。もう首里・那覇の暮しも飽き果てて」

i: ba: ja-ibi:=sa, *tamme:*

いい折 COP-POL=SFP.MIR 伯父様

「ちょうどよかったですよ、伯父様。」(芝居, 562) (用例 218 と一部重複)

352) [下男たちが働き者のカミジャーのせいで休む暇がないのでどうにか辞めさせる方法を考える。旦那様の前で腕相撲をして思いっきり負かしたらどうかと提案する A]

A: *ikiga=tucei hadzikasan-u ur-ar-an nat-i,* *du:kuru jamit-i ?iteu-ru hadzi*

男=として 恥ずかしい-CSL いる-POT-NEG なる-SEQ 自ら 辞める-SEQ 行く-ADN INFR

「男として恥ずかしくて居られなくなって、自分から辞めて行くだろう。」

B: *i: kange: ja=sa*

良い 考え COP=SFP.MIR

「いい考えだな。」(芝居, 688) (用例 120 と同文)

353) [先の例の続き]

A: *?ja:=ga ?udi=sa:ni ?ateikat-i ?atu,* *kundo: wa:=ga eima=sa:ni ?uttee:çittee: su=saja:*

2SG=NOM 腕=INST 扱う-SEQ 後 今度.TOP 私=NOM 相撲=INST こてんぱんに する=SFP

「お前が腕相撲でやりやっした後、今度は俺が相撲でこてんぱんにするよな。」

?ato: du:kuru=eei φiŋgi:n=jo:

後=TOP 自分=INST 逃げる=SFP

「そしたら (カミジャーは) 独りでに逃げて行くよ。」

B: *to:to: ?ure: i: kange: ja=sa*

INTJ それ.TOP 良い 考え COP=SFP.MIR

「おお。それはいい考えだな。」(芝居, 688)

354) A: *bi:ru teidz-abir-a*

ビール.ACC 注ぐ-POL-INT

「ビールを注ぎましょう。」

B: *to:to:to:, na: ?ussa=ei eimu=sa*

INTJ FIL そのくらい=INST 済む=SFP.MIR

「あー、もうその辺でいいよ。」(リア, 11)

355) [腹が減ったという男 B に対して気を遣う女 A だが]

A: *?usaga-miso:r-e:*

食べる.HON-HON-IMP2

「召し上がれ。」

B: *i:i, eimu=sa*

いや 済む=SFP.MIR

「いや、結構。」(実践, 48)

356) [物売りのフリをした男が本物の物売りの女にちょっかいをだす]

A: wanne: so:muni: s-o:=eiga ?itta:=ja t̃eik-an=du ?an=de:
私.TOP 真実言い.ACC する-PROG=ADVRS 2PL=TOP 聞く-NEG=FOC ある=SFP
「私は本当の事を言っているが、お前達が聞かないんだよ。」

B: na: jutas-a-ibi:=sa watta:=ja b̃itei=nd̃zi ?uri ?ut-i mo:kir-an=dare:na-ibiraj-kutu
もう よろしい-POL=SFP.MIR 1PL=TOP 別=LOC それ.ACC 売る-SEQ 儲ける-NEG=OBLG-POL-CSL
「もう結構です。私達は別のところでそれを売って、儲けなければなりませんので。」(実践, 40)

357) A: wanne: tutt̃e: mut̃e-e: u-ibir-an-eiga, t̃ea: e-e: jutas-aibi:=ga
1SG.TOP 時計.ACC 持つ-SEQ.TOP いる-POL-NEG-ADVRS どう する-CND よろしい-POL=WHQ
「私は時計を持っていませんが、どうすればよろしいですか？」(用例 315 と一部重複)

B: ?a:, ?ure:=jo:, makate:. waŋ=ga to:=ndi ?i=sa. t̃ea:=n ne:n=sa t̃eibar-i=jo:
INTJ それ.TOP=IP (人名) 私=NOM INTJ=QT 言う=SFP どう=ADD ない=SFP.MIR 頑張る-IMP1=SFP
「ああ、それはね、マカテー。私がトー¹⁵⁴と言うよ。どうってことないよ。頑張れよ。」(実践, 46-47)

358) [本に記録した歴史は後世までずっと残るから書くよう助言する A]

A: se:d̃zika=ndi ?i-ee: ?iteidai=nakai ?ari ja-eiga, hono: jujumande: kuni=nu
政治家=QT 言う-NLZ.TOP 一代=LOC あれ COP-ADVRS 本.TOP 世々万代 国=NOM
「政治家というのは一代であれだけ¹⁵⁵、本は未来永劫国の」
?a-ru ?je:ka: (...) jujumande: ?ja: mun=nu=du nukuin=do:ja:
ある-ADN 間.TOP 世々万代 お前.GEN 物=NOM=FOC 残る=SFP
「ある間はずっとお前の物として残るんだよな。」

B: n: 「うん。」

A: nama ja=sa. t̃eibat-i kak-e:
今 COP-SFP.MIR 頑張る-SEQ 書く-IMP2
「今だぞ。頑張って書け。」(方談, 352)

〈記述〉を表す場合と同様に、〈評価〉を表す場合でも、認識の変化を表現する sa の文は、聞き手の言動に対して否定したり、拒否したり、反論・反発したりする場面で用いられやすい。つまり、何かしらの〈評価〉を伝えながら否定・拒否・反論・反発する文となる。

359) A: satunuei=tu ?ite-a:t̃e-i k^wi-nso:r-e:=na:
里之子=COM 会う-CAUS-SEQ BEN-HON-IMP2=POL
「里之子と合わせて下さいませ。」

B: nar-an=di ?ir-e:=kara nar-an=sa
なる-NEG=QT 言う-CND=ABL なる-NEG=SFP
「だめと言ったらだめだ！」(芝居, 614)

360) [非常に仲が良かった家同士なのに、相手が出世して身分が変わってしまい、心まで変わるものかとなげく母に対して息子が言う]

ŋkaci=kara t̃eiriakuta=nu me:=ne: i:r-ari:t-i=n, φinsu:mun=nu suba=ne: ur-ar-an=t̃e-i
昔=ABL ごみ=GEN 前=DAT.TOP 座る-POT-SEQ=ADD 貧乏人=GEN 側=DAT.TOP いる-POT-NEG=QT
「昔からごみの前には座れても、貧乏人の側にはいられないって」
?a-ibi:=e:?. ?anu mun-t̃ea:=ga kukurukawai=n e-i=n cikata: ne:-biran=sa
ある-POL=SFP あの 者-PL=NOM 心変わり=ADD する-SEQ=ADD 仕方.TOP ない-POLNEG=SFP

¹⁵⁴ 「トー」は、何かを始めるときや終わるとき表現・合図である。感動詞。

¹⁵⁵ 「一代であれだけ」というのはここでは「一代でダメになる」という意。

「あるじゃないか。あの人たちが心変わりしても仕方ありませんよ。」(芝居, 896) (用例 33, 280 と重複)
 361) [A が運動不足のようなので, B が A にゲートボールを勧める]

A: wanne: ŋkaci=kara bukusan-u=jo: nu: ti:tei=n naraj-u:s-an=du ?an=de:
 1SG.TOP 昔=ABL 不器用だ-MIR=IP 何 ひとつ=ADD 習う-POT-NEG=FOC ある=SFP

「私は昔から不器用でね。何一つも身につかないんだよ。」

B: t̄ca:=n ne:-ibiran=sa. te:ge:-g^wa:=du ja-ibi:-ru. narat-i n:d̄z-imiso:r-e:
 どう=ADD ない-POL=SFP 適当-DIM=FOC COP-POL-ADN 習う-SEQ みる-HON-IMP2

「どうってことないですよ。適当ですから。習ってみてください(lit. 習いなされ)。」(実践, 14)

3.10.3 終助辞 de:の文

〈評価〉を表す終助辞 de:の文は、話し手と聞き手との間にいまだ共有されていない話し手の〈評価〉を伝える。その伝え方にはその情報を控えめに、あるいは《主張の強さ》に関してはニュートラルに伝えるという特徴がある。控えめに述べる理由は文脈によって様々である。例えば、ぼつが悪い・体調が悪い・聞き手が知らない人等である。控えめに述べるという性質上、《聞き手めあて》の意味あいはいはだいぶ弱い(文脈によっては、《聞き手めあて》を伴う)。独り言での使用は原則不可である。

主語が一人称

主語を一人称にした〈評価〉を表す de:の文は、主に話し手が聞き手に言いにくい話し手自身の〈評価〉を控えめな態度で伝える。次の de:ja:の文の場合は、聞き手の発言に同意しながら話し手の〈評価〉も伝えている。

362) [体の調子が悪いので, お祝いへの参加をしぶるように言う B]

A: tarugani:, su:d̄zi e-i:ga ?iki-wa=runa-e: s-an=i
 (人名) 祝事.ACC する-PUR 行く-CND=OBLG-TOP する-NEG=YNQ

「タルガニー, お祝いをしに行かないといけないんじゃないかい？」

B: ?an ja-ibi:=saja:. ?iki-wa=runa-ibi:n=de:ja:

そう COP-POL=SFP 行く-CND=OBLG-POL=SFP.NASS

「そうですねえ。行かないといけませんよねえ。」

A: wadzawad̄za t̄teu cik̄at-i=madi e:d̄zie-e:-ru-munnu, ?ik-an=de: buri: najun=do:
 わざわざ 人.ACC 遣う-SEQ=LIM 合図する-RES-ADN-FN 行く-NEG=CND 無礼 なる=SFP.ASS

「わざわざ人を遣ってまで知らせているのに、行かないと失礼になるよ。」(芝居, 876)

主語が二人称

主語が二人称で《対象的な内容》が話し手の〈評価〉を表す場合、《聞き手めあて》の意味あいを若干含ませながら、時には言いにくそうに、時には遠慮がちに、あるいは控えめな態度で伝える。したがって、聞き手への《働きかけ》は婉曲的である。

363) A: satunuei

(人名)

「里之子 (サトゥヌシ) ...」

B: jama:, ?ja:=ja ?ama=ŋkai ?nd̄z-o:k-e:

(人名) 2SG=TOP あそこ=DAT 行く-SEQ.おく-IMP2

「ヤマー, お前はあそこに行っている。」

A: satunuei, kunu inagu=tu ʔitea-mice:=ne:, ʔundzo: jattei:=ni ʔunde: s-arij-abi:n=de:¹⁵⁶
 (人名) この 女=COM 会う-HON-CND 2SG.HON.TOP 兄.CH=DAT 叱る事.HON する-PASS-POL=SFP.NASS
 「里之子、この女とお会いしたら、貴方は兄上にお叱りを受けますよ。」

B: nu: jar-awa=n eimu-gutu, ʔja:=ja ʔama=ŋkai ʔndz-o:k-e:
 何 COP-CND=ADD 済む-CSL 2SG=TOP あそこ=DAT 行く-SEQ.おく-IMP2
 「何だろうが構わんから、お前はあそこに行っている。」(芝居, 884)

364) [沖縄芝居・多幸山。追剥 A が旅人 B に向かって言う]

A: ʔe:re:=ni s-att-an=di ʔi-eiga, wa: mi:=kara n:dz-i:ne: ʔja:=ga=du
 追剥=DAT する-PASS-PST=QT 言う-ADVRS 1SG.GEN 目=ABL 見る-CND 2SG=NOM=FOC
 「追剥にやられたと言うが、私の目から見たらお前の方が」

ʔe:re:=nati mi:n=de:=ca:
 追剥=に 見える=SFP.NASS=PEJ
 「追剥に見えるぞ。」

B: nu: jan
 何 COP
 「何だって！」(芝居, 772)

365) nindzino: teu:ku ʔiteite-i¹⁵⁷ ʔik-an=dinaran=de:
 人間.TOP 強く 生きる-SEQ 行く-NEG=OBLG=SFP.NASS
 「人間は強く生きて行かなければならないよ…」(芝居, 922)

de:に ja:が付加された de:ja:の文は、聞き手もそのことについて知っているかもしれない、理解しているだろうという前提のもとに伝える場合にあらわれる。あるいは、聞き手にもそのことを同意してほしいといった話し手の態度・ニュアンスを付け加えながら伝える(用例 43 を再掲)。

43') [昔は親友同士だった話し手と聞き手だが、試合に勝った話し手だけ身分が上になり]

ʔi:-bueiko:-ne:n-eiga, muto: tage:=ni k^wit-a-i k^war-a-i s-a-ru naka
 言う-DES-ない-ADVRS 元.TOP 互い=DAT BEN-PST-INF 食う-PST-INF する-PST-ADN 仲
 「言いたくはないが、元は互いに何でも分け合ったりした仲」(芝居, 890)

jat-i=n, nama: ʔja:=tu watta:=tu=ndi ʔi-ee: mibun=nu teigat-o:-gutu
 COP-SEQ=ADD 今.TOP 2SG=COM 1PL=COM=QT 言う-NLZ.TOP 身分=NOM 違う-PROG-CSL
 「であっても、今はお前と俺達と言うのは身分が違っているから」(芝居, 890)

duku kuma=kara haikaie-i ʔatte-e: nar-an=de:ja:
 あまり ここ=ABL 徘徊する-SEQ 歩く-SEQ.TOP POT-NEG=SFP.NASS
 「あまりここを徘徊して歩いてはいけないよな。」(芝居, 890)

また、上の用例では、二人称文ということではいくらか《働きかけ》が生じている。ただし、(強制)ではなく、de:ja:を用いて相手を諭すように働きかけている。

主語が三人称

主語が三人称で《対象的な内容》が話し手の〈評価〉を表す場合、第三者に対する話し手の判断を控えめに、あるいは主張の強さはニュートラルに述べる。

¹⁵⁶ 原文では, sari sabi:nde:だが, 筆者が内容に合わせて修正した。

¹⁵⁷ 原文では, ʔnte:i とあるが, ʔiteiteun (生きる) の中止形は ʔiteitei のため, 文脈に合わせて筆者が修正した。

366) [結婚を約束していたのに事情が変わって結婚が遠のく姉を思って、弟 B が早くあきらめたいのにとぼすが、母 A が言う]

A: ʔja:=ga ʔi:-ru gutu, ʔanei du:jaceiting^{wa}: ʔumiteir-ari:m=i. inagu=ndi ʔi-ru muno:
 2SG=NOM 言う-ADN ように そんな 簡単に 諦める-POT=YNQ 女=QT 言う-ADN もの.TOP

「お前が言うように、そんな簡単に諦められるかい。女と言うものは」

jukun ʔumuikatei:=ru sun=de:

余計に 思い勝つ=FOC する=SFP.NASS

「余計に思いが募ったりするんだよ...」

B: ʔanguto:ru hakudzo:ikiga ʔumut-i nu: s-abi:=ga

あのような 薄情男.ACC 思う-SEQ 何 する-POL=WHQ

「あのような薄情男を思ってどうしますか。」(芝居, 896-898)

41') A: ʔja:=n ʔunu ʔe:sa ʔukit-i nu:ga kakio:-ei, munu=nde:=nu=ru ʔa-ru=i

2SG=ADD この 早さ 起きる-SEQ 何か 間に合わせ-NLZ もの=等=NOM=FOC ある-ADN=YNQ

「お前もこんな早くに起きて、何か間に合わせのものでもあるのかい？」

B: ʔu: watta: eikutei-g^{wa}:nu ʔuʔe: tei:tei=nu wassan-u=ru j-ai:bi:n=de:

はい IPL.GEN 仕事-DIM=NOM 少し.TOP 景気=NOM 悪い-CSL=FOC COP-POL=SFP.NASS

「はい。私達の仕事が少し景気が悪いからなのですよ。」(実践, 13)

〈評価〉の文のまとめ

本章では、話し手の事象に対する何らかの評価、評価的な判断や意見等を言い表す文を〈(ただの)評価〉とラベル付けして記述を行なった¹⁵⁸。〈評価〉の文は、評価形式を伴わず、述語の語彙的な意味によって〈評価〉という話し手の判断なり見解なりを表す。〈はなしあい〉の場面では、叙述文を断定形のまま文に差し出すことは少ない。多くは、聞き手配慮のもと、何らかの終助辞を伴ってあらわれる。つまり、話し手の〈評価〉を聞き手に対して強く訴えたり、控えめに述べたり、感情の変化を押し出しながら述べる。

次に記述する評価文は、何らかの評価形式を伴わせて話し手の〈評価〉を伝える。必要(義務)・許可(許容)・不必要・不許可(非許容)の文の順に述べることにする。

3.11 必要・義務文

必要・義務文は、話し手が事象の実現を〈必要〉または〈義務〉的だとみなす文のことである。日本語の「しなければならない」相当形式に sandare: naran および eiwadu jaru という二つの形式がみられることから、ここでは始めに、これらの形式を含む文について扱う。前者が二重否定の形でその意味を表すのに対し、後者は否定の形は持たずその意味を表す。これらの形式が意味・機能的にどのように違うのか明らかにする。事象を〈必要〉とみなす文には、このほか、「べきだ」相当形式の bitei: jan, 「すればいい」相当形式の ee: maci 等の形式を用いた文がある。

3.11.0 sandare: naran と eiwadu jaru について

日本語の「しなければならない」相当形式である sandare: naran と eiwadu jaru だが、前者の sandare: naran は形づくりの上でも「しなければならない」にほぼ相当する形式である。つまり、動詞 sun (す

¹⁵⁸ 奥田 (1990) では、〈意見の文〉と呼ばれている。

る)の否定形が条件形をとり、さらに、動詞 **nain** (なる)の否定形が後接する二重否定の形をとる¹⁵⁹。一方、後者の **eiwadu jaru** は、直訳すると「すればこそだ」となり、否定のかたちを一切持たずに、「しなければならない」という〈必要・義務〉といった意味あいを表す(以下では、その土台的な意味合いを〈必要〉で統一する)。

宮崎他(2002)では、「しなければならない」等の「評価的複合形式はそれぞれ基本的意味をもち、当該事態の(1)制御可能性、(2)実現状態、(3)行為者の人称という3つのファクターのあり方により二次的意味を分化させる」とある(同上, p.117)。また、「しなければならない」においては、《客観的必要性・許容性》についても論じなければならない。本稿においても、この3つのファクターおよび《客観的必要性・許容性》について分析することで、**eiwadu jaru** と **sandare: naran** の文のモダリティについて明らかにする。

先行研究

上記の3つのファクターおよび〈客観的必要性・許容性〉について理解するために、宮崎他(2002)をおさらいする。宮崎他(2002)は、森山(1997)の〈当為判断¹⁶⁰〉の考えを踏まえながら、下記のような基本となる枠組みを設定し、評価的複合形式のモダリティについてまとめている。

表 33 制御可能性・実現状態・行為者の人称の三つのファクターの関係(p. 88)

		(1)当該事態の制御可能性	
		制御可能→○〈当為判断〉	制御不可能→×〈当為判断〉
(2) 当該事態の 実現状態	未 実現	(3)行為者の人称 聞き手 →○働きかけ性 聞き手以外 →×働きかけ性	
	既 ／ 非 実現	(3)行為者の人称	

制御可能性、実現状態、行為者の人称および客観的必要性・許容性について

《制御可能性》とは、文の《対象的な内容》が動作主体にとってコントロールできる事象か否かという要素・概念を指す。事象を〈必要〉とみなす判断は、制御可能な事象において実現されるものである(宮崎,2002)。文に制御不可能な事象が述べられている場合、〈必要〉以外のモダリティが表現される。

《実現状態》とは、文の《対象的な内容》に既実現・未実現・非実現のいずれの事象を差しだすのかを表す要素・概念である。発話時においてすでに実現されたことか否か、実現不可能なことなのかは、〈必要〉という判断を下すために重要である。〈必要〉という意味あいはいまだ実現していない

¹⁵⁹ 首里方言の否定形の条件形は、多くの場合、動詞の否定形に=**du ?ar-e**(=FOC ある-CND)が収縮したかたち **dare:**が後接されて作られる。

¹⁶⁰ 〈当為判断〉とは「何々するべきだ、何々するべきでないといった、人の行為の必要性・許容性についての判断の意味が生じるか否かを決定する」ことを表す。「そのような判断は、人が制御可能な事態においてはじめて可能だからである」(宮崎,2002, p.88)。「制御可能性」という概念は、このような森山(1997)の〈当為判断〉という文法的概念が軸となっている。

事象に対して下す判断だからである。事象の実現のタイミングが過ぎ去り、発話時点ではすでに非実現な事象に対して《必要性》を述べる文は、必要の意味からずれて、〈後悔〉や〈不満〉といった意味あいを表すようになる。

《行為の人称性》とは、文の《対象的な内容》における主語あるいは動作主体の人称のことである。主語あるいは動作主体が話し手（一人称）なのか聞き手（二人称）なのか、それともそれ以外（三人称）なのかは、必要文のモダリティにも深く関わっている。一人称文の場合、多くは《意志性》を持ち、意志文となる。二人称文の場合は、多くは《働きかけ性》を持ち、命令文となる。

《客観的必要性・許容性》とは、簡単に言えば deontic な意味あいを表す要素・概念のことである。事象の実現の必要性を話し手個人の主観的な判断として述べるのではなく、社会のルールや決まり、集団の中での規範による《必然性・客観性》を帯びた必要性のことを指す。用例によっては、話し手の主観的な判断なのか客観的な必要性なのか区別しがたいものもあるが、「昨日は歯医者に行かなくてはならなかった」のような過去テンスの事象の場合、〈客観的必要〉を表す文となり、明らかに〈話し手の主観的な評価〉と文法的に対立している。

これらの四つの文法的要素・概念についての詳細は、宮崎他（2002）の第3章「評価のモダリティ」を参照されたい。

3.11.1 sandare: naran の文

3.11.1.1 音声・形態・構文的特徴

sandare: naran 形式は、「しなければならない」相当形式を動詞 sun（する）で代表させた名付け的なものである¹⁶¹。sandare: naran には、santo: naran, sande: naran, san|e: naran, sanne: naran, sandun ?are: naran 等の類似の形式が存在する。文献上の用例を見る限りでは、首里方言では sandare: naran か sande: naran が主に用いられる。しかし、調査協力者は、santo: naran をよく使用すると言う。これらの違いは、地域差・年代差・個人差等の理由によって多少音的に異なりをみせるが、ほぼ同一形式である¹⁶²。したがって、以下では、これらの形式を sandare: naran で統一して呼ぶことにする。

sandare: naran 形式は、動詞の否定形に du ?ar-e: (FOC ある-CND) が収縮したかたちである dare: に nar-an (なる-NEG.IND) が後続したかたちである。

s-an=dar-e: nar-an
 する-NEG=FOC.ある-CND なる-NEG.IND

以下、=dar-e: nar-an のグロスを=OBLG [obligative]と表記する。

s-an=dare:naran
 する-NEG=OBLG

sandare: narantan（しなければならない）のように後ろの述語が過去形をとることもできる。た

¹⁶¹ 「行かなければならない」なら、?ik-an=dare: naran（行く-NEG=OBLG）となる。

¹⁶² また、本論では、モダリティ分析に差し支えがないと判断される場合に限り、首里方言以外の近隣方言を用いた談話資料を使用することもあるため、発音や表現の違いに若干、差がある場合がある。

だし、第一過去（単純過去）形のみで、第二過去（証拠性過去）形をとることはできない。

367) nu:=nu ʔurami=n ne:ran t̃eʉ nu:=ndi-ʔite-i kurus-an=de:narant-a=ga

何=GEN 恨み=ADD ない.ADN 人.ACC 何=QT-言う-SEQ 殺す-NEG=OBLG-PST=WHQ
 「何の恨みもない人をどうして殺さなければならなかったのか。」(芝居, 790)

先述の通り、過去形の場合、〈後悔〉や〈不満〉等、場面状況によっては〈必要〉とは異なるモダリティを表すこともある。しかしながら、本研究では、そのような用例を見つけることができなかった。したがって、過去形の分析・記述は行わない。今後の課題である。

文献では修飾語としての用例も見られる。ただし、これらの用例の全てが日本語のニュースを首里方言に訳したものであり、日本語の直訳あるいは日本語の影響を受けて創作された表現である可能性がある。自然談話およびその他の談話資料において修飾語としての用例は見られなかった。修飾語としては、話し言葉では非常に用いられにくいと言えるだろう。

368) [平和の礎¹⁶³の刻銘についての方言ニュース]

icid̃zi=ŋkai ʔuikum-att-o:-ru t̃eʉ=nu na:ka=ni=n eimei=nu eʉ:sei na: ʔuna:=nu
いしじ
 礎=DAT 彫り込む-PASS-PROG-ADN 人=GEN 中=DAT=ADD 氏名=GEN 修正 つまり お名前=GEN
 mateigat-o:-ei ʔaratamir-an=dare:naran t̃eʉ-nutea:=ga te:ge: junçakunin=bike:đzi=ndi=nu
 間違える-PROG-NLZ.ACC 改める-NEG=OBLG.ADN 人-PL=NOM 大体 400 人=ばかり=QT=GEN
 kutu ja-ibi:-kutu
 こと COP-POL-CSL

「礎いしじに彫り込まれている人の中にも氏名の修正、つまりお名前の間違いを改めなければならない人たちが大体400人ばかりとのことですので…」(ニュ, 77)

369) kennai=nu g'ok'o:=nu seiseke: juʔudu t̃eimuʔite-i ʔik-an=dare:naran d̃zo:k'o:=ŋkai ʔat-i

県内=GEN 漁協=GEN 成績.TOP よほど 努める-SEQ 行く-NEG=OBLG.ADN 状況=DAT ある-SEQ
 akad̃zi=nu ʔnd̃zit-o:-ru g'ok'o:=n ʔan=di=nu kutu
 赤字=NOM 出る-PROG-ADN 漁協=ADD ある=QT=GEN 事

「県内の漁協の業績は、よほど努めて行かなければならない状況にあって、赤字の出ている漁協もあるとのこと…」(ニュ, 35)

また、次のように、述語に nain (なる) 以外の別の動詞を取り、sandare:が条件節になれる。

370) [昔の暮らしについて語る女性。勉強しないと遊べなかったという話]

ʔutei=uto:ti=n kana=nu ʔata'e: narat-i mata ʔuri=n na: k'u:kutsuni ʔippe: ei:t-i
 家=LOC=ADD 仮名=GEN くらい.TOP 習う-SEQ また それ=も FIL 窮屈に とても 強いる-SEQ
 s-a-ssa=madi s-an=dar-e: ʔaeib-ar-an=do:=ndite-i
 する-PST-程=LIM する-NEG=FOC.ある-CND 遊ぶ-POT-NEG=SFP=QT.言う-SEQ

「家でも仮名ぐらいは習って、また、それももう窮屈にととも強制的に終わるまでしないと遊べないよと言って…」(琉総, 460)

sandare: naran の文は、命令形や意志・勧誘形をとることができないが、質問形式を伴って、質問文

¹⁶³ 沖縄島南部・糸満市摩文仁の平和祈念公園内敷地にある、沖縄戦のために亡くなった人々が刻銘された石碑群のこと。

になることができる。

371) [腹が減ったという B に対して気を遣う A だが]

A: ʔunu ʔubun nidziri: ʔusagamiso:r-e:

この 飯 にぎり.ACC 食べる.HON-IMP2

「このにぎり飯召し上がれ。」

B: nu:=ga nu:nt̃ei wanne: ʔuri kam-an=dare:naraŋ=ga

何=FOC どうして 私.TOP それ.ACC 食べる-NEG=OBLG=WHQ

「一体どうして私はそれを食べなければならないか。」(実践, 47) (用例 334 と重複)

3.11.1.2 sandare: naran の文のモダリティ

sandare: naran の文は、文の動作主体の意志にコントロールされない、事象の実現が自ずと生じてくる〈必然〉の文と、事象の実現が動作主体の自由意志の結果生じる〈必要〉を表す文のふたつに分けることができる。さらに、後者の〈必要〉の文には、話し手の主観的・評価的な判断¹⁶⁴を表す場合と、法律・秩序・組織等が取り決めた〈規範的・客観的必要¹⁶⁵〉を表す文がある。形式のもつ語彙的な意味および使用頻度の観点から、sandare: naran の文全体に最も典型的なものがあるとすれば、この deontic な意味あいである〈規範的・客観的必要〉を表すものだろう。

〈記述〉の文が現実世界の事象をありのまま描写しているものだとしても、話し手の〈確認〉というフィルターを通して限り、完全な客観的描写とは言えないのと同様に、〈客観的必要〉の文も話し手の〈確認〉を通じた〈客観的必要〉なのであろう。sandare: naran の文は〈客観的必要〉という意味あいを土台にして〈主観的必要〉や〈必然〉の文に派生する。〈客観的必要〉というモダリティを真っ向から分析しないで、〈主観的必要〉や〈必然〉を分析することはできない。したがって、本研究での分析も必ずしも十分とは言えないが、このような考えに基づくため、〈客観的必要〉という意味あいについてから述べることにする。

主語が一人称の sandare: naran の文

一人称を主語にした〈客観的必要〉を表す sandare: naran の文は、話し手の主観的な評価を表しているというより、話し手自身の事象に対する義務的あるいは客観的な必要性を述べている。そして、文の《対象的な内容》は、法律・法則・社会的な秩序やあり方にしぼられた話し手の行為を差しだしている。したがって、ndi ʔumuin (と思う) を付加できないという特徴がある。このような deontic な意味あいを表す文は、後で述べる話し手の主観的な評価を表す sandare: naran の文とは区別しなければならない。

372) [仕事で那覇に行って来ると言う父 B。仕事は避けられない義務的なものである。「行って来ないといけないと思う」のように「と思う」が言えない]

A: ʔoto:san, na:ʔa=kai mence:-bi:n n:

お父さん 那覇=ALL 行く.HON-POL EQ

「お父さん、那覇へいらっしゃるんですって？」

¹⁶⁴ さらに詳しく言えば、日本語と同様に〈当該事態が実現しないことが許容されないという評価〉を表す。

¹⁶⁵ 〈客観的必要〉という用語に関しては、日本語記述文法研究会に従った。奥田 (1999b) では、〈規範的必要〉あるいは〈義務的な必要〉ともラベルづけされている。

B: ?n, na: t̄eu:=ja d̄ziɸi ?nd̄ziku:r-an=to:naran-eiga

うん FIL 今日=TOP ぜひ 行って来る-NEG=OBLG-NASS

「うん、もう今日は必ず行って来ないといけないんだが。」

A: ?anee: nand̄ziguru ke:-mice:-bi:=ga

CNJ 何時頃 帰る-HON-POL=WHQ

「それじゃあ、何時頃お帰りですか。」

B: denki=nu ju:irie: ke:titeu:n

電気=GEN 夕暮れ 帰って来る

「電気の(つく)夕暮れ時に帰って来る。」(日放, 280-281)

373) watta: eiguto: su:ku su:mun du:i s-an=de:na-ibiranj-gutu kuri ?id̄zo: mat̄eu-ru kuto:

IPL.GEN 仕事.TOP 証拠 証文 通り する-NEG=OBLG-POL-CSL これ 以上 待つ-ADN 事.TOP

na-ibir-an=saja:

POT-POL-NEG=SFP

「私達の仕事は、証拠・証文通りにしなければなりませんので、これ以上待つ事はできませんよ。」(芝居, 1052)

〈主観的な評価〉を表す文は、上記の deontic な意味あいである客観的必要を表す文と対立し、事象を〈必要〉とみなしながら話し手の評価的な判断を述べる文である。判断の根拠に《客観性》がなくともよい。あくまでも話し手の主観的・評価的な判断を述べる。

一人称を主語にした〈主観的な評価〉を表す sandare: naran の文は、〈必要〉という意味あいに〈決意・覚悟・希望〉という評価的な意味あいが付け加わっている(奥田, 1999b; 宮崎他, 2002)。

374) [民話の語り。王の妻に化けた鬼が人々を王に殺させて、殺した人の血を飲んでいたので下の役人が以下のように言う]

kanci e-e: nar-an. kure: t̄ea: e-i=n taid̄zi s-an=are:naran. ?und̄zu=nu tud̄ze:=ja:

こう する-SEQ.TOP POT-NEG これ.TOP どう する-SEQ=ADD 退治 する-NEG=OBLG 2SG.HON=GEN 妻.TOP=IP

me:=nu ?unad̄zara: ?a-miso:r-an

前=GEN 王妃.TOP COP.HON-NEG

「こうではいけない。これは絶対退治しなければならん...貴方の妻は前の王妃ではありません。」(那民, 19)

375) [民話の語り。貧乏な夫婦がある日一晩だけ泊めてくれというお爺さんを快く泊めてあげたら、その褒美に若返ったので、隣の金持ちの夫婦もまねしたら、猿になってしまった。若返った貧乏夫婦がうらやましくて、毎日妬ましく見ていたので次のように言う。猿の尻がなぜ赤くなったのかという話]

?unu sa:ru:=nu i:-ru ma:isa: jat̄eo:t-i kundu t̄eu:=run s-a: t̄eibi jat̄e-i

その 猿=GEN 座る-ADN マー石.ACC 焼いて置く-SEQ 今度 来る=FOC する-CND お尻.ACC 焼く-SEQ

turas-an=de:naran(=ri j-a:ni)

やる-NEG=OBLG(=QT 言う-SEQ)

「その猿の座るマー石を焼いといて、今度来たらば尻を焼いてやらないといけない(と言って...)」(那民, 53)

次は、sandare: naran の後に「～と思う」が付加されていることから、話し手の主観的な評価を表している。動作主体が一人称の文には、話し手の未来の動作に対する《意志性》が付け加わる。

376) [方言ニュース。旅客船を運行する会社の社長の意見]

d̄zissai=ni ϕuni ?akk-asu-ru basu=ne: kaŋko:=nu kutu de:itei=ni tuiagit-i kange:t-i

実際=DAT 船.ACC 歩く-CAUS-ADN 時=DAT.TOP 観光=GEN 事.ACC 第一=DAT 取り上げる-SEQ 考える-SEQ

行く-NEG=OBLG=QT 思う=QT 言う-SEQ 言葉ACC 強める-SEQ HON-話 する-PROG-HON-POL-PST
 「実際に船を走らせる時には、観光の事を第一に取り上げて、考えて行かなければならないと思うと言って、言葉を強めてお話をしておりました。」(ニュ, 41)

次の用例は、計画・予定にしばられているという観点では客観的でもあり、それを理由に「出かけた
い・飲みに行きたい」という目的達成という観点では主観的でもある。

- 377) A: ʔundzo: mata num-i:ga=na:
 2SG.HON.TOP また 飲む-PUR=YNQ2
 「貴方はまた飲みになのか？」
 B: ha:cee. ʔeu:=ja mu'e: ja-ru-mun ʔik-an=de:naran s-an=i
 INTJ 今日=TOP 模合 COP-ADN-CSL 行く-NEG=OBLG する-NEG=YNQ
 「何だと？今日は模合だもの行かないといけないじゃないか。」(リア, 86)

ある目的達成のために必要に迫られて述べる〈必要〉の場合、話し手の〈決意〉や〈覚悟〉を表す。
 また、〈決意〉と〈覚悟〉を区別するとすれば、目的達成が非常に困難なケースでは〈覚悟〉という意
 味あいが強くなる。

- 378) [隠蔽された歴史があるから、本に書いて残さないといけないという話]
 ʔunu hanaei: wanne: gueikuma-na:ka=nu ʔodzi:san=kara ʔeite-a-ru ba:=ja:. ʔunni:=kara
 その 話ACC 1SG.TOP (地名)=GEN お爺さん=ABL 聞く-PST-ADN わけ=SFP その時=ABL
 wanne: kunu rekiei, ʔunto:=nu kutu kak-an=dare:naran=sɑ:=ndi ʔumuihadzimit-a-eiga
 私TOP この 歴史 本当=GEN 事 書く-NEG=OBLG=SFP.MON 思い始める-PST-ADVRS
 「その話を私は城間ナーカのお爺さんから聞いたわけだ。それ以来、私はこの歴史、本当の事を書かないといけな
 いなあ、と思い始めたんだけど。」(方談, 345-346)

- 379) [消費税増税で苦しむ人々についてのニュース]
 nasari-ru daki jassa-ru eina ʔagane:t-i ʔe-a:ni ʔudzini: nai-ru gutu
 できる-ADN だけ 安い-ADN 品ACC 探す-SEQ 来る-SEQ 栄養 なる-ADN ように
 「できるだけ安い品を探して来て栄養になるように」
 ʔeiburu ʔeikat-i ʔik-an=dunʔare:naran=di ʔite-o:-ibi:t-an
 頭ACC 使う-SEQ 行く-NEG=OBLG=QT 言う-PROG-POL-PST
 「頭を使って行かなければならないと(ある主婦が)言っていました。」(ニュ, 119)

- 380) [消費税増税で苦しむ人々についてのニュース。商売人が意見を述べている]
 saki=nu jaeiui su-ru mateija=tu=nu ʔuisu:bu: ee-i ʔika-n=dare:naran-ai
 酒=GEN 安売り する-ADN 店=COM=GEN 売り勝負 する-SEQ 行く-NEG=OBLG-SEQ
 「酒の安売りするお店との販売競争をして行かなければならないし」
 na: ʔea: s-ar-e: maci ja=gaja:=ndi ʔite-i eian s-o:n
 もう どう する-PST-CNDよい COP=DUB=QT 言う-SEQ 思案 する-PROG
 「もうどうすればよいのかなと言って思案している。」(ニュ, 118)

¹⁶⁶ 首里那覇音声データベースによると、強めるは ʔeu:mijun である。ʔeu:miti (強めて) の間違いか。ʔeiwamiti (決
 めて) は、ʔeiwamijun (決める) の連用形である。

動作主体の実益に関わる〈目的達成のための必要〉の文において、先行する文や従属節には、その判断の根拠となる理由が述べられているが、そのような根拠はすでに出来事として起こっているリアルなものである（奥田, 1999b）。

- 381) *sekai=nu d̄zujō:=ja me:nin takamat-o:-jabi:-kutu me:nin seisan|'o:=ja φujas-an=to:na-ibiran*
 世界=GEN 需要=TOP 毎年 高まる-PROG-POL-CSL 毎年 生産量=TOP 増やす-NEG=OBLG-POL
 「世界の需要は毎年高まっていますので、毎年生産量は増やさなくてはいけません。」（沖会, 89）

あるいは、次の用例のように、動作主体の実益に関わること自体が何らかの動作の理由である場合もある。

- 382) [物売りのフリをした男が本物の物売りの女にちょっかいをだす。男が売っている物を見せてくださいと女が尋ねるが、男は見えないのかと言って一向に見せない。女がナンパをしているのかと疑う]

A: *ʔumani:=jo:., kanteige: su=na=jo:., ʔitta: teimu jaφarakit-i tea: su=ga*
 姉さん=IP 勘違い する=PROH=SFP 2PL.GEN 心.ACC 柔らげる-SEQ どう する=WHQ

「姉さん、勘違いするなよ。お前達を誘惑して¹⁶⁷どうするか。」

wanne: so:muni: s-o:-eiga, ʔitta:=ja teik-an=du ʔan=de:
 私.TOP 真実.ACC する-PROG-ADVRS 2PL=TOP 聞く-NEG=FOC ある=SFP

「私は本当の事を言っているがお前達が聞かないんだよ。」

B: *na: jutasa-ibi:=sa. watta:=ja biŋei=nd̄zi ʔuri ʔut-i mo:kir-an=dare:na-ibiran-kutu*
 もう 結構だ-POL=SFP 1PL=TOP 別=LOC それ.ACC 売る-SEQ 儲け-NEG=OBLG-POL-CSL

「もう結構です。私達は他所でそれを売って儲けなければなりませんので。」（実践, 40）（用例 356 と重複）

次の用例では、*sandare: naran* と *eiwadu jaru* が両方用いられているが、話し手の意志やまちのぞみ性は *eiwadu jaru* の文の方により強くあらわれる。*sandare: naran* の文では、〈主観的な評価〉を表していたとしても、いまだどこか出来事を一步引いてみているニュアンスを伴う。

- 383) [芝居。結婚が先延ばしになっている妹を案じる兄 A と母 B の会話（用例 234 と一部重複）]

A: *ʔaja:=sai, makatu:=ja u-ibir-an=i*
 母=POL (人名)=TOP いる-POL-NEG=YNQ

「母上、マカトゥーはいませんか？」

B: *teu:=ja kissa¹⁶⁸=kara n:r-an-eiga. ju: s-an=du=n ʔar-e: masan|u: ʔitea-iga ʔar-an=i*
 今日=TOP さっき=ABL 見る-NEG-ADVRS よく する-NEG=FOC=ADD ある-CND (人名) 会う-PUR COP-NEG=YNQ

「今日はさっきから見えないけど…もしかするとマサンルーに会いにではないか？」

A: *masan|u: ʔitea-i:ga. he:ku tai=ja ni:biŋei e-imir-an=de:na-ibiran=saja:*
 (人名) 会う-PUR 早く 二人=TOP 結婚 する-CAUS-NEG=OBLG-POL=SFP

「マサンルーに会いに…早く二人は結婚させなければいけませんねえ。」

B: *masan|u:=tu makatu:=to: ni:biŋei: nai=gaja:*
 (人名)=COM (人名)=COM.TOP 結婚 POT=DUB

「マサンルーとマカトゥーは結婚できるかねえ。」

¹⁶⁷ 直訳は「心を和らげて」だが、意識した。

¹⁶⁸ 原本は *kisa* だが、筆者が *kissa* に訂正した（音声「キッサ」）。

A: nai-ru s-abi:-ru. nu: jat-i ?an ?i-mice:=ga

POL-ADN する-POL-ADN 何 COP-SEQ そう 言う-HON=WHQ

「できるに決まっています！どうしてそうおっしゃるのか。」

B: teikaguru nu:=ga ja-ra munu=nu teitigamarasan-u ?irunna hanaci=nu teik-ari:-gutu=te:

近頃 何=FOC COP-DUB もの=GEN 聞くにたえない-MIR 色んな 話=NOM 聞く-PASS-CSL=SFP

「近頃何だか噂が聞くにたえなくて色んな話が聞こえるからねえ。」

A: wannin ?uri eiwae-i he:ku ni:bitei e-imi-wa=rundai-ru=n̄tei, kanei ni:biteidzin

1SG.ADD それ.ACC 心配する-SEQ 早く 結婚 する-CAUS-CND=OBLG=QT こうして 結婚衣装.ACC

no:r-ate-i s-abit-an=do:

縫う-CAUS-SEQ する-POL=SFP.ASS

「私もそれを心配して早く結婚させなくちゃと、こうして結婚衣装を縫わせて来たんですよ！」(芝居, 898-900)

全体的に一人称を主語にした〈主観的な評価〉を表す sandare: naran の文は少ない。使用頻度という統計的な理由と形式自体のもつ語彙的な意味あいを考慮すると, sandare: naran の文は, 基本的には〈客観的必要〉を表すが, 場面状況によっては〈主観的評価〉も表すことができる。

主語が二人称の sandare: naran の文

二人称を主語にした sandare: naran の文は, 質問文にあらわれて, 聞き手の現在・未来あるいは過去の動作の必要性について問う文で用いられていた。

384) nu:=ndi-?ite-i na:=ja du:=nu ?ataraci: kk^wa=tu wakari-i kuras-an=de:naran=ga

何=QT-言う-SEQ 2SG=TOP 自分=GEN 大事な 子=COM 別れる-SEQ 暮らす-NEG=OBLG=WHQ

「どうして貴女は自分の大事な子と別れて暮らさなければならないのか。」(芝居, 678)

385) nu:=nu ?urami=n ne:ran t̄teu nu:=ndi-?ite-i kuras-an=de:narant-a=ga

何=GEN 恨み=ADD ない.ADN 人.ACC 何=QT-言う-SEQ 殺す-NEG=OBLG-PST=WHQ

「何の恨みもない人をどうして殺さなければならなかったのか。」(芝居, 790) (用例 212 と重複)

また, 次にみる用例のように, 事象が未実現の場合, 聞き手への《働きかけ性》が生じて, 〈命令・忠告・警告〉といった命令的な意味あいに派生することが多い。この時, 終助辞 do: を伴いやすい。do: を用いることで, 聞き手に働きかける意味あいが強まり, 忠告・警告的な意味あいが強くなる。

386) [孫と祖父の会話。慣習的なきまり。清明祭だからしないといけない, 子供だからしないといけない, などのしほりによって必要を命じられる]

A: teu:=ja ?uei:mi: ja-eiga, ?wa:teitee: tea: nat-o:=ga, taru:

今日=TOP 清明祭 COP-ADVRS 天気.TOP どう なる-PROG=WHQ (人名)

「今日は清明祭¹⁶⁹だが, 天気はどうなってるか, タルー。」

B: makutuni i: tint̄ei de:-biru

本当に 良い 天気 COP2-POL

「本当に良い天気です。」

A: taru:, ?ja:=ja tigane: s-an=dare:naran=do:

タルー 2SG=TOP 手伝い.ACC する-NEG=OBLG=SFP.ASS

¹⁶⁹ 琉球列島でも沖縄地方に見られる伝統的な年中行事。家族・親戚一同が墓参りに行き, ご先祖にお供え・祈祷をした後, 墓前でお供えした重箱や弁当類を食べる。

「タルー、お前は手伝いをしなとな。」

B: ʔu:. nama=kara ʔaja: tigane: e-i:ga ʔite-abir-a
はい 今=ABL 母.CH.GEN 手伝い.ACC する-PUR 行く-POL-INT

「はい。今から母上の手伝いをしに行きます。」(入門, 88-89) (用例 45 と一部重複)

387) [姑が嫁の作った夕飯の味をみる。慣習的・文化的なきまり, あるいは家のしきたりのようなものにしばられた必要]

A: ʔa:sa=nu ʔueiru=tu na:be:ra:mbuei: eiko:-ibit-an
アーサ=GEN お汁=COM ヘチマの煮付.ACC 作る-POL-PST

「アーサのお汁とヘチマの煮付を作りました。」

B: da:, k^wattci: su=saja: ʔakito:na:, ʔunu eiro: ʔanci ni:kuta: s-o:-ru
INTJ ごちそう する=SFP INTJ この 汁.TOP とても たくさん する-PROG-ADN

「どれ、いただくかね。あれまあ、この汁はなんてたくさんたしているの！」

eiru=ndi ʔju-ee: kateu:daci tur-e:=kara:
汁=QT 言う-NLZ.TOP 鯉だし.ACC 取る-CND=ABL.TOP

「汁というのは鯉だしをとってからは」

eigu ʔi:=ja tumir-an=dare:naran=do:ja:

すぐ 火=TOP 止める-NEG=OBLG=SFP

「すぐ火はとめないといけないわよね。」

A: na:be:ra:=ja tea: ja-ibi:=ga
ヘチマ=TOP どう COP-POL=WHQ

「ヘチマはどうですか。」(入門, 126-127)

388) [慣習的なきまり。身分制度にしばられた必要]

nna ʔateimat-o:m=i. teu: su:jo: ʔateimit-a-ee:, (中略) d̄zi:tee: d̄ze:bannume:=ga ʔitta: ʧakueo:=tu
皆 集まる-PROG=YNQ 今日 皆.ACC 集める-PST-NLZ.TOP 実.TOP 在番様=NOM 2PL.GEN 百姓=COM

「皆集まっているか。今日皆を集めたのは、実は在番¹⁷⁰様がお前たち百姓と」

midzikara hanacimunugatai-mice:-busan=[i. ja-gutu guburi:=nu ne:ran gutu
自ら 話物語る-HON-DES=QT COP-CSL ご無礼=GEN ない ように

「自ら話をなさりたいそうさ。だから失礼の無いように」

s-an=de:naran=do:. wakat-o:-ra=ja:
する-NEG=OBLG=SFP.ASS わかる-PROG-DUB=SFP

「しなければならぬぞ！わかっているな。」(芝居, 546)

389) [計画的・予定的なものにしばられた必要 (奥田, 1999b, 245-248)]

na:d̄zu:nid̄zi na-ibi:n=do:. kaei:kaei: ei-miso:r-an=to:
もう 12時 なる-POL=SFP.ASS すばやく する-HON-NEG=OBLG

「もう12時なりますよ。すばやくなさいませんと。」(語遊「ヨーンナーとカシーカシー」, 2008/11/23, p. 19)

390) [安全のためには、気をつけないといけない。実用的な必要。不利益の防止]

A: einci:=sai, ʔijugumui=ute: ʔacid-e: nar-an=di=nu kuto:
先生=POL (地名)=LOC.TOP 遊ぶ-SEQ.TOP なる-NEG=QT=GEN 事.TOP

「先生、龍潭池では遊んではいけないって事は」

waka-ibi:-eiga, ʔuguciku=ŋkai ʔndz-i ʔacid-e: na-ibir-an=na:

わかる-POL-ADVRS 首里城=DAT 行く-SEQ 遊ぶ-SEQ.TOP なる-POL-NEG=YNQ2

「わかりますが、首里城に行って遊んではいけませんか。」

¹⁷⁰ 在番(ざいばん)とは、「(首里)王府から特定の地域に派遣された常駐官」のこと(石垣市総務部市史編集室編, 1993, p. 66)。

B: ʔugueiko: t̄t̄e=nu mando:-kutu t̄ei: t̄eikir-an=dare:naran=do:

首里城.TOP 人=NOM 多い-CSL 気.ACC つける-NEG=OBLG=SFP.ASS

「首里城は人が多いから気をつけないといけないぞ。」

A: ʔu: 「はい。」(入門, 77-78) (用例3と重複)

主語が三人称の sandare: naran の文

主語に行政等の組織・団体や社会全体を表す集合名詞をすえて、個人の感情や意見というよりも、その集団が決定した方針・規定のようなものを表す。必要だとみなす判断の主体が第三者である場合、〈かたり〉という文脈において「引用」という特別な手続きが必要となる(奥田, 1999b, p. 225)。

391) [アメリカ軍の外出禁止令のニュース]

okinawaei eo:ko:kaigico=uto:te: amerika=nu ʔi:tai-nut̄ca:=ga ʔumuna t̄eaku=tu nat-o:-ru

沖縄市 商工会議所=LOC.TOP アメリカ=GEN 兵隊-PL=NOM 主な 客=COM なる-PROG-ADN

mat̄eija=nu ʔuiagi=nu ʔuteikud-i ʔippe: kumat-o:-kutu t̄ca:gana ʔitt̄ei:=n ʔe:ku

商店=GEN 売上=NOM 落ち込む-SEQ とても 困る-PROG-CSL どうか 1日=ADD 早く

taio: kange:t-i ʔik-an=dare:naran=di ʔit̄e-i ʔuhanaei s-o:-mice:-bi:t-an

対応.ACC 考える-SEQ 行く-NEG=OBLG=QT 言う-SEQ お話 する-PROG-HON-POL-PST

「沖縄市商工会議所では、アメリカの兵隊達が主な客となっている商店の売り上げが落ち込んで、大変困っているので、どうか1日も早く対応を考えて行かなければいけないと言って、お話されておりました。」(ニュ, 25)

392) [方言ニュース]

ʔitt̄ei:=n ʔe:ku kakugu s-an=dare:naran jasei seibutsu=nu kutu kacitumit-e:ru okinawaban

一時=ADD 早く 格護 する-NEG=OBLG.ADN 野生 生物=GEN 事.ACC 書き留める-RES-ADN 沖縄版

reddode:tabukku=nu kunu ʔudu keŋ=kara ʔnd̄zas-att-i, nama kennai=uti sanid̄ziri su-ru

レッドデータブック=NOM この 程 県=ABL 出す-PASS-SEQ 今 県内=LOC 絶滅 する-ADN

ʔusuri=nu ʔa-ru do:eo:kubut̄so: eĩnsamb'akuhateid̄zu: ʔan=di=nu kutu=nu wakaj-abit-an

恐れ=NOM ある-ADN 動植物.TOP 千三百八十 ある=QT=GEN 事=NOM わかる-POL-PST

「一時も早く保護しなければならぬ野生生物の事を書き留めてある沖縄版レッドデータブックがこの程県から出版されて、今県内で絶滅する恐れのある動植物は1380種あるとの事がわかりました。」(ニュ, 96)

あるいは、主語に実行をせまられる動作主体をすえて、法律や組織・集団等の規範・決定事項による動作の実行の必要性を述べる。その場合、主語が三人称とは限らない。

奥田(1999b)は、このような〈客観的必要性〉を〈規範的必要性〉と呼び、さらにその下位に〈法的なきまり〉と〈倫理的なきまり〉、そして〈慣習的なきまり〉の三つを分類している。首里方言の sandare: naran の文でもこの三つの分類は有効である。

〈法的なきまり〉

〈法的なきまり〉は、国家機関、行政機関、社会的な集団等の組織が取り決めた法律・命令・義務・規則・約束等、多くは「公的な文書のなかに規定されて、存在している」決まりごとのことを指す。詳細は上記文献を参照されたい。

393) [市民住宅の家賃滞納問題のニュース]

eihare: no:ʔoku=nu ʔa-ru nu:k'oea=nu jat̄ein tuduku:r-asu-ru basu=ne: d̄zo:rei=ni jutt-i

支払い 能力=GEN ある-ADN 入居者=GEN 家賃.ACC 滞る-CAUS-ADN 際=DAT.TOP 条例=DAT よる-SEQ

ʔndz̄it-i ʔik-an=dare:naran=di=nu kutu t̄eu:d̄zu:tu ja:t̄eu: jat̄eu-ru kanʒe: jan=di=nu
 出る-SEQ 行く-NEG=OBLG=QT=GEN 事 強く お灸.ACC 焼く-ADN 考え COP=QT=GEN
 kutu ja-ibi:n
 事 COP-POL

「支払い能力のある入居者が家賃を滞らせる¹⁷¹際には、条例によって出て行かなければならないとの事、強くお灸をすえる考え¹⁷²だとの事です。」(ニュ, 136)

次の用例は、公的な立場にいる個人、あるいは、集団組織の代表者の方針・決定を差しだしている。このような場合も、広い意味で〈法的なきまり〉に分類される。《主観性》や《評価性》がないとは言えないが、少なくとも、主観的・個人的な意見というより、組織や集団が取り決めた考えを、ある種の《客観性》をもって代弁している。

394) [方言ニュース。知事の話の引用]

ʔuteina:=nu kanʒo:=ja nama=nu tukuro: d̄zu:bun=ni ʔuteina:=nu ʔumi=nu jusu=tu kunabit-i
 沖縄=GEN 観光=TOP 今=GEN 所.TOP 十分=DAT 沖縄=GEN 海=NOM よそ=COM 比べる-SEQ
 masat-o:n=di=nu kutu ʔiruku eir-at̄e-i ʔit̄eu-ru gutu s-an=dare:naran ʔunutami=ni=n
 優る-PROG=QT=GEN 事 広く 知る-CAUS-SEQ 行く-ADN ように する-NEG=OBLG その為=DAT=ADD

「沖縄の観光は、今のところは十分に沖縄の海がよそと比べて優れているとの事、広く知らせて行くようにしなければならぬ。その為にも…」(ニュ, 41-42)

〈倫理的なきまり〉

「人びとの、すべての領域での生活実践のなかで、交際過程のなかで再生産されて、社会的な存在としての規範のなかに固定化された」モラルのことを指し、そのようなモラルは、「個人の意識のなかに現象するところの、社会的な意識の特殊な形態である」(奥田, 1999b, p. 240)。

見つかった用例は全て、一人称を主語とし、話し手の「どうにかしてあげたい」という良心あるいは責任にかられた必要性を述べている文であった。

395) [雨が降らなくて雨乞いをしている農民達を見て、王様が言う]

n̄t̄ea. kure: ʔug^wan ʔusagir-an=dare:naran=saja:
 INTJ これ.TOP ご祈願.ACC あげる.HUM-NEG=OBLG=SFP

「そうか。これはご祈願を差し上げなくてはならないなあ。」(那民, 121)

396) [彼氏 A と彼女 B の会話]

A: wan=tu mad̄zun to:k̄o:=nd̄zi kurat̄e-i k^wir-an=i
 1SG=COM 一緒に 東京=LOC 暮らす-SEQ BEN-NEG=YNQ

「俺と一緒に東京で暮らしてくれないか？」

B: ʔan ei:-busa-ibi:=eiga, ʔuja=nu jamme: kakat-i tund̄zaku s-an=de:na-ibiran-kutu
 そう する-DES-POL=ADVRS 親=NOM 病気 かかる-SEQ 看病 する-NEG=OBLG-POL-CSL

「そうしたいのですが、親が病気にかかって看病しないといけないですから…」(リア, 107)

397) [民話。夫が浮気をして苦しんだあげく病気になって死んでしまった妻]

wan tami=nakai=ru ʔure: ma:s-o:-kutu=ja:.. kure: t̄ea:gara s-an=ne:naran
 私.GEN ため=DAT=FOC こいつ.TOP 亡くなる-PROG-CSL=IP これ.TOP どうか する-NEG=OBLG

¹⁷¹ 直訳。「滞納する」という意。

¹⁷² 直訳。「厳しく取り締まる方針」くらいの意。

「私のためにこいつは亡くなっているからな。これはどうにかしないと。」(那民, 144)

- 398) [民話。人を殺めてしまったと正直に告白する者に対して、どうしてもそうは思えない、どうにかしなければと案じる僧のセリフ]

kundzan=ute: ?it̃igami ɸutuki=du ja-ru=ndi ?ite-i ?untasa s-att-o:-ru ?anu tusui=nu
国頭=LOC.TOP 生神 御仏=FOC COP-ADN=QT 言う-SEQ 慕われる事 する-PASS-PROG-ADN あの 年寄=NOM
ɸe:re: jat-an=de: ?um-a:r-an. kunu eiwa: miɸutuki=nu ɸikari kagajak-at̃e-i ?anu tabint̃e
追剝 COP-PST=QT.TOP 思う-POT-NEG この 際.TOP 御仏=GEN 光 輝く-CAUS-SEQ あの 旅人.ACC
sukur-an=de:naran

救う-NEG=OBLG

「国頭では生き神・御仏だと言って慕われているあの年寄りが追剝だとは思えない。この際だから、御仏のお力を借りてあの旅人を救わねばならん。」(芝居, 804-806)

- 399) ?a:, kunu t̃eiru:=n t̃eimuguri: mun=du ja-ru. waka?ad̃zi-nume:=tu=nu naka=nakai

INTJ この (人名)=ADD 可哀相 者=FOC COP-ADN 若按司-HON=COM=GEN 仲=LOC

「あー、このチルーも可哀相な者だなあ。若按司様との間に」

ikiga?umig^wa ?mmari=ni nat-o:-eiga, d̃zuribana nat-a-ru tami=ni d̃ziju:ni ?i:t̃e: su-ru
男の子 生まれ=DAT なる-PROG-ADVRS 芸妓 なる-PST-ADN 為=DAT 自由に お会い する-ADN

「男の子がお生まれになったというのに、芸妓であるために自由にお会いする」

kutu=n nar-an. ja-eiga t̃e:=ja d̃ziɸi waka?ad̃zi-nume:=tu ?i:t̃e: ugam-as-an=de:naran-eiga

事=ADD POT-NEG COP-ADVRS 今日=TOP ぜひ 若按司-HON=COM お会い 拝む-CAUS-NEG=OBLG-ADVRS

「こともできない。だけど今日はぜひ若按司様と会わせてやらなければならないが…」

i: kange:=ja ne:raŋ=gaja:

良い 考え=TOP ない=DUB

「いい考えはないものか…」(芝居, 618-620)

〈慣習的なきまり〉

〈法的なきまり〉のヴァリエーションとも言えるもので、いまだ「法令化されてはいない、慣習としてのきまり」のことを指す(奥田, 1999b, p. 241)。「このきまりは、せまい範囲の集団のなかに確立していて、その集団の運営と存続にとって、それを遵守することが、集団に所属する人びとの常識となっている」(同上)。

- 400) [芝居。身分の高い役人が身分の低い芸妓の女を身籠らせる。女は自分は身分が低いので子供の立身のために男に引き取ってくれるよう頼むが、身分上子供とは別れなければならないと断る]

d̃ziri=nu kunu eike=ja kukuro: nat̃e-o:t-i jat-i=n wakaric-an=de:naran

義理=GEN この 世=TOP 心.TOP 泣く-PROG-SEQ COP-SEQ=ADD 別れる-NEG=OBLG

「義理のこの世では心は泣いていたとしても(子供とは)別れなければならない。」(芝居, 628) (用例 113 と重複)

- 401) [芝居。同上]

du:=nu k^wa=du ja-eiga, ɸiteitui-ru kutu=n ei:j-u:s-an ?angutucei mudute-i jar-as-an=de:naran

自分=GEN 子=FOC COP-ADVRS 引き取る-ADN 事=ADD する-POT-NEG どのように 戻す-SEQ やる-CAUS-NEG=OBLG

「自分の子供ではあるが、引き取る事もできない。どのように帰してやらなければならない。」(芝居, 632)

- 402) d̃zi:t̃e: ?ad̃zi:=ga tuppi=ni kunu ju: ?ueina-miso:t̃e-a-ru tami=ni wanne: ?ad̃zi: ?uatu=n

実.TOP 父=NOM 突飛=DAT この 世.ACC 失う-HON-PST-ADN 為=DAT 1SG.TOP 父.GEN お跡=ADD

?utat-i ugam-an=de:naran

御立てる-SEQ 拝む.HON-NEG=OBLG

「実は、父上が突飛にこの世を失われたために、私は父上のお跡を継がなくてはいけない。」(芝居, 622)

403) [本妻との間に子供ができないため前妻との間にできた子供を引き取りたいと懇願する元夫。男は士族であるため、家の存続のためには跡継ぎが必要]

tud̄zi=tu=nu naka=nakai k^wa=nu ʔmmarir-an. kunu warabe: ʔiteiguciku=nu

妻=COM=GEN 仲=DAT 子=NOM 生まれる-NEG この 子供.TOP (家名)=GEN

「妻との間に子供が生まれない。この子供は池城の」

ʔatu tatir-an=de:naran. biru:, jarate-i turac-e

跡.ACC 立てる-NEG=OBLG (人名) やらす-SEQ BEN-IMP2

「跡を継がなければならない。ビルー, 連れさせてくれ」(芝居, 588)

404) [女 A の家の中に逃げ隠れた青年に暴行を働く男 B に対して家主の A が言う]

A: kunud̄zid̄zo:=ja band̄zu=nu jakuniŋ=kai ɕirat̄co:k-an=de:naran=sa

この 事情=TOP 番所=GEN 役人=DAT 知らせておく-NEG=OBLG=SFP

「この事情は番所の役人に知らせておかなければならないよ。」

B: ʔunu ʔatai=nu kutu=ɕei band̄zu=ŋkai ʔutte:nd̄zi:n=te:i:

この 位=GEN 事=INST 番所=DAT 訴え出る=QT.YNQ

「この位の事で番所に訴え出るってかい?」(芝居, 666)

文献資料から得られた用例のうちのほとんどは、このような〈客観的必要〉を表すものであった。また、ニュースで多様されるといった傾向も見られた。

しかしながら、主語を三人称にした sandare: naran の文は、〈主観的な評価〉も表せると思われる。次の用例の主語は三人称ではあるが、話し手と聞き手に直接関わること(属性)である。したがって、好例ではないが、三人称を主語とした sandare: naran の文では、第三者の事象について〈主観的な評価〉を述べる文となる。

405) nu:-jat-i wa:=ga bud̄zi:=nu su:bu ɕ-i jat-i=n, ʔuguciku=nu ʔeitumi su-ɕe: maɕi=ndi

何-COP-SEQ 1SG=NOM 武芸=GEN 勝負 する-SEQ COP-SEQ=ADD お城=GEN 勤め.ADD する-NLZ.TOP まし=QT

「どうして私が武芸の勝負をしてでも、お城の勤めをするのがいいと」

ʔumui-ɕe:, tarugani:=n wannin na: wakako:-ne:ran. muci kuri kutuwa-ine: ʔiteite-o:-ru

思う-NLZ.TOP (人名)=ADD 1SG.ADD もう 若く-ない もし これ.ACC 断る-CND 生きる-PROG-ADN

「思うのは、タルガニーも私ももう若くない。もしこれを断れば生きている」

ʔe:da, ʔugucikuteitumi su-ru kuto: nar-an had̄zi.mata duei=nu jueimi nasaki=ni

間 お城勤め する-ADN 事.TOP POT-NEG.ADN INFR また 友達=GEN よしみ 情け=DAT

「間, お城勤めをする事はできないだろう。また友達のよしみ情けに」

ɕik-assatt-i ʔukutuwai ugam-i:ne:, kunu hanace: tacikani bitei=ŋkai mutte-i ʔik-ari:n.

引く-PASS-SEQ お断り 押む-CND この 話.TOP 確かに 別=DAT 持つ-SEQ 行く-PASS

「引かされてお断りすれば、この話は確実によそに持って行かれる。」

ʔan na-ine: ʔitei=maɕi=n tatukuru=nu ʔeine:=ja ɕinsu: s-an=de:naran. ja-gutu kunu

そう なる-CND いつ=LIM=ADD 二所=GEN 家族=TOP 貧乏 する-NEG=OBLG COP-CSL この

「そうならばいつまでもふたつの家族は貧乏しなければならない。だからこの」

ʔeiwa: tai bud̄zi:=nu su:bu wakate-i, ta: jat-i=n ʔeui ʔugucikuteitumi ugamu-ɕe:

際.TOP 二人 武芸=GEN 勝負.ACC 分つ-SEQ 誰 COP-SEQ=ADD 二人 お城勤め 押む-NLZ.TOP

「際はふたり武芸の勝負をして、誰かひとりでもお城勤めするのが」

maɕi=ndi ʔumuin

まし=QT 思う

「いいと思う。」(芝居, 844)

〈必然〉

必要文の《対象的な内容》が動作主体のコントロールすることができない、自然発生的なリアルな事象を差しだす場合、〈必要〉から〈必然〉の文に移行する。首里方言の場合、「苦しむ」「植える」「死ぬ」のような典型的な無意志動詞が用いられる例はほとんどなく、次のように、受け身表現を伴った例や動作主体の一般化、意志動詞が無意志的に用いられることによって、〈必然〉を表す例が見られた。

次の用例では、*nasun*（産む）という意志動詞ではなく、*?umarasun*（産ませる）という受け身表現を伴って、話し手が「産む」という意志決定をしたのではなく、自然発生的にそうなったことを述べる文となっている。

主語が一人称

406) [子供がうじゃうじゃいると文句を言う夫に対して妻が言う]

kumat-a-ru muno: ?um-aras-an=de:narano: ?ar-an=i
身籠もる-PST-ADN もの.TOP 産む-CAUS-NEG=OBLG.TOP COP-NEG=YNQ
「身ごもった以上は産まなきゃいけないじゃないか。」(芝居, 634)

次の用例では、動作主体の一般化および一般化による動作主体の恒常的な特性あるいは質のようなものが述べられている。

一般人称

407) *ikiga=n inagu=n nindzino: teu:ku ?iteite-i¹⁷³ ?ik-an=dinaran=de:*
男=ADD 女=ADD 人間.TOP 強く 生きる-SEQ 行く-NEG=OBLG=SFP.NASS
「男も女も人間は強く生きていかなければならないのよ。」(芝居, 922) (用例 365 と重複)

次の用例では、先行する理由節にリアルな事象が差しだされ、後続する *sandare: naran* の文にこれから必然的に起こってくる結果が述べられているか、あるいは、動作主体がすでにそのような状態にある。述語に「待つ」という意志動詞が用いられているが、事象は避けることのできない無意志的なものである。

主語が一・二人称

408) [やっとなで見つけたお目当のそば屋だが。人がたくさん並んでいて]

A: *?aie:na:. ?anu mateija: ?a-ibir-an=i*
INTJ あの お店 COP-POL-NEG=YNQ
「あちゃー。あのお店ではありませんか？」
tteu=nu mando:-ibi:-ru-munnu, kure: nage: mat-an=dare:na-ibiran=do:
人=NOM 多い-POL-ADN-FN.CSL これ.TOP 長く 待つ-NEG=OBLG-POL=SFP.ASS
「人が多いですから、これは長く待たなければなりませんよ。」
B: *tteu=nu narad-o:-ee: suba=nu ma:sa-ru su:ku=du ja-ru. watta:=n narabi-bitei: jan=do:*
人=NOM 並ぶ-PROG-NLZ.TOP そば=NOM 旨い-ADN 証拠=FOC COP-ADN 1PL=FOC 並ぶべき COP=SFP.ASS
「人が並んでいるのはそばが旨い証拠だ。俺たちも並ぶべきだよ。」(入門, 116)

¹⁷³ 原文では、*?ntei* とあるが、*?iteiteun*（生きる）の中止形は *?iteitei* のため、文脈に合わせて筆者が修正した。

sandare: naran の文のまとめ

ここでは, sandare: naran の文の〈必要〉と〈必然〉というモダリティについて記述した。前者の〈必要〉は, deontic な意味あいである〈客観的必要〉と epistemic な意味あいである話し手の〈主観的な評価〉の二つに別れる。多くは〈客観的必要〉を表す。〈主観的な評価〉を表す文のうち, 動作主体が一人称の場合, 話し手の〈決意・覚悟・希望〉と言った意味あいを付け加える。また, 動作主体が二人称の場合, 聞き手への働きかけ性が生じて, 〈強制・命令・忠告・警告・義務の押し付け〉のような意味あいも付け加わる。動作主体が一・二人称の文は, 用例が少ないため断言はできないが, おそらく, 話し手の〈決意・覚悟〉を述べながら, 聞き手へ〈忠告・助言〉する文となる。そして, 主語が三人称の場合, 第三者の事象に対する〈必要〉を述べ伝える。

尚, 述語が過去形をとる「後 10 分早く出なければならなかった」のような〈後悔・不満〉の文, 聞き手に対して訴えかける「後 10 分早く出なければならなかったよね」のような〈非難〉の文を見つけることができなかった。

先述の宮崎他 (2002) の表を用いて, sandare: naran の文の基本的な意味と二次的な意味をまとめると, 次の表のようにまとめられる。

表 34 sandare: naran の基本的な意味と二次的な意味の分化¹⁷⁴

		(1)当該事態の制御可能性	
		制御可能→○ 〈当為判断〉	制御不可能→× 〈当為判断〉
(2) 当該事態の実現状態	未実現	(3)行為者の人称 聞き手 →○働きかけ性 聞き手以外 →×働きかけ性	〈必然〉
	既／非実現	(用例なし)	(用例なし)
〈客観的必要・許容性〉あり → 〈客観的・規範的必要〉			

3.11.2 eiwadu jaru の文

3.11.2.1 音声・形態・構文的特徴

eiwadu jaru 形式も, 当形式を動詞 sun (する) で代表させた名付け的なものである。eiwadu jaru のほかに, sawadu jaru および eiwadu nairu 等の類似形式がみられる。jaru と nairu という末尾の述語の違いは文法化した述語のため, 語彙的な意味はなく, 問題にならないが, s-a-wa=du と e-i-wa=du の違いを同一形式とみるには, もう少し分析の余地があるように思える。なぜなら, 首里方言の条件形には, -a で結ぶ系統のものと, -i で結ぶ系統のもの二種類あって, この二つの条件形は文法上意味に違いがあるからである¹⁷⁵。したがって, 本論では, とりあえず, これら二つの形式を別々に記述する。

¹⁷⁴ 宮崎他 (2002) の「ばい」の意味分化の表 (p.91) を sandare: naran にあてはめて, 筆者が修正・転載した。

¹⁷⁵ 「基本語幹の基幹エ段長音でまだ起きていない主節の仮定的な因果関係を示す。一方, 基本語幹の基幹ア段長音では条件節で仮説を示し, 主節で強い希求を示す」(仲原, 2014, p. 141)。

首里方言は d 音優勢方言¹⁷⁶であるが, eiwadu/sawadu の du は eiwaru/sawaru のように ru で発音されることも多い。しかし, これらの類似形式を全てここでは eiwadu jaru 形式あるいは sawadu jaru 形式と統一した名づけで呼び表すことにする。

eiwadu jaru 形式は, 述語の基本語幹に -i-wa を後接させ, 末尾の述語がコピュラもしくは nain (なる) の連体形をとり, sawadu jaru 形式は, 述語の基本語幹に -a-wa を後接させ, 末尾の述語がコピュラもしくは nain (なる) の連体形をとるという形づくりを持っている。

ei-wa=du	ja-ru/nai-ru
する-CND=FOC	COP-ADN/なる-ADN
sa-wa=du	ja-ru/nai-ru
する-CND=FOC	COP-ADN/なる-ADN

以下, =du ja-ru/nai-ru のグロスを =OBLG [obligative] と表記する。

ei-wa=du-jaru/-nairu
する-CND=OBLG
sa-wa=du-jaru/-nairu
する-CND=OBLG

eiwadu jaru および sawadu jaru の末尾の述語が過去形をとる用例を見つけることができなかった。詳細は今後の課題だが, 過去テンスがとれないか, とることが非常にまれであることは確かである。

eiwadu jaru/sawadu jaru 形式の最大の特徴として, 前の述語に存在動詞やコピュラが使用できることである (これは, 先の sandare: naran ではいいにくい)。つまり, 述語が《運動》もしくは《状態》を表すものだけではなく, 《存在・特性・質》でも〈必要〉を表すことができる点は特筆すべきである。

文献では修飾語としての用例を見つけることができなかった。調査協力者によると, 修飾語として用いても意味は理解できるが, 「舌足らずな印象。違和感がある」というコメントがあった (調査協力者, 面接調査, 2016年12月12日)。sandare: naran 形式と同様に, 話し言葉では非常に用いられにくいと言えるだろう。

また, 次のように, 述語に jaru と nairu 以外の別の動詞を取り, eiwadu が条件節になれる。sawadu は条件節になれるか, 本研究では明らかにすることができなかった。今後の課題である¹⁷⁷。

409) [夫と妻の会話。「あれ」という言葉の解釈をめぐって話が噛み合わない。笑い話]

A: ?ari=ga tati-wa=du ikiga=ndi ?j-abi:n=do:=tai

あれ=NOM 立つ-CND=FOC 男=QT 言う-POL=SFP.ASS=POL.F

「あれが立ってこそ男というものよ。」

B: ha:, to:to:, ?aja:=jo:. ?unijō:nakuto: ?ansuka ?uφuabi:=ja e-e: nar-an=do:

INTJ INTJ 母さん=VOL そのような事.TOP あまり 大声=TOP する-SEQ.TOP なる-NEG=SFP

「おい, まあ, 母さんよ。そのような事はあまり大声で言ってはいけないよ。」(実践, 30) (用例 26 と重複)

¹⁷⁶ 沖縄諸方言では, d 音を d 音のまま発音する d 音優勢方言と, r 音で発音する r 音優勢方言の二つある。例えば, 「やもり」は d 音優勢方言である首里方言で ja:du: と発音されるが, r 音優勢方言である那覇方言では ja:ru: と発音される。

¹⁷⁷ 疑問詞を伴って次のような条件節としての用法があるため, 用いられる可能性はある。

?ja:=ga tea: nar-awa=n wa:=ga eitteo:mi (あんた=が どう なろうと=も 私=が 知ったもんか。)

410) [親が病気の子供に向かって]

ma:k-o: ne:nt-i=n num-e: numi-wa=ru hacittu nain=do:

おいしい-TOP ない-SEQ=FOC 飲む-IMP2 飲む-CND=FOC 元気 なる=SFP.ASS

「おいしくなくても飲み。飲んでこそ元気になるぞ。」(語遊「ハシットウナイン」2008/12/14, p. 12)

eiwadu jaru/sawadu jaru の末尾の述語は、命令形や意志・勧誘形をとることができないが、質問形式を伴って、質問文になることができる。ただし、真偽質問文の用例しかみられなかった。補充質問文になれないのかは不明である¹⁷⁸。

411) i:r-e:=kara: t̃ea:cin kami-wa=rujaru=i

貰う-CND=ABL.TOP どうしても 食べる-CND=OBLG=YNQ

「貰った以上は絶対食べなきゃならんか?」(語遊「チャーシン」2011/4/10, p. 18)

412) ir-e:=kara: ʔuφe: φirara-wa=rujae: s-an=i

貰う-CND=ABL.TOP 少し.TOP 付き合う-CND=OBLG.TOP する-NEG=YNQ

「貰った以上は少しは付き合わなきゃいけないんじゃない?」(実践, 34) (用例 343 と重複)

3.11.2.2 *eiwadu jaru* の文のモダリティ

eiwadu jaru の場合も、〈客観的・規範的必要〉と〈主観的な評価〉に分けることができる。典型的な *sandare: naran* の文は〈客観的必要〉を表すものであったが、*eiwadu jaru* の文では、話し手の動作の実現に対する前向きな態度あるいは文の《意志性》や《まちのぞみ性》が前面化し、〈主観的な評価〉としての使用が多い。多くは、「しよう」や「したい」に置き換えて日本語訳することが可能である¹⁷⁹。*eiwadu jaru* の文が〈客観的必要〉を表すには、文脈や場面状況に依存しているケースがほとんどである。

主語が一人称の *eiwadu jaru* の文

一人称を主語にした *eiwadu jaru* の文は、話し手自身の動作の実現の必要性を述べる。その必要性なり判断は、慣習的・文化的なもの、計画的・予定的なもの、倫理的なものにしばられた判断から、話し手の主観的な判断も表すことができる¹⁸⁰。

例えば、次の用例では、事前にすでに予定されていた用務あるいは仕事等の義務的な動作をしたがえて、その動作の必要性を *eiwadu jaru* の文が述べている。

413) A: tarugani:, su: d̃zi e-i:ga ʔiki-wa=runa-e: s-an=i

(人名) 祝事.ACC する-PUR 行く-CND=OBLG-TOP する-NEG=YNQ

「タルガニー、お祝いをしに行かないといけないんじゃないかい?」

B: ʔan ja-ibi:=saja: ʔiki-wa=runa-ibi:n=de:ja:

そう COP-POL=SFP 行く-CND=OBLG-POL=SFP

「そうですねえ。行かないといけませんよねえ。」

A: wad̃zawad̃za t̃ieu t̃eikat-i=madi e:d̃zie-e:-ru-munnu, ʔik-an=de: buri: najun=do:

わざわざ 人.ACC 遣う-SEQ=LIM 合図する-RES-ADN-FN 行く-NEG=CND 無礼 なる=SFP.ASS

¹⁷⁸ 偶然なのか、*sandare: naran* の文において、補充質問文の用例しかみつからなかったのと対照的である。詳細は今後調べる必要がある。

¹⁷⁹ 実際に、「しよう」で日本語訳されている例も多数みられた。

¹⁸⁰ ただし、もっとも規範的な〈法的なきまり〉にしばられた〈必要〉を表す用例は見つからなかった。*eiwadu jaru* の文が話し手の《意志性》や《まちのぞみ性》といった意味あいを強くもっていることと関係があると思われる。

「わざわざ人を遣ってまで知らせているのに、行かないと失礼になるよ。」(芝居, 876) (用例 362 と重複)

次の用例における話し手の動作の実現の必要性は、倫理的なもの、あるいは慣習的・文化的なものにしばられている。

414) [民話。村の災い返しのために配らないといけないという良心と慣習的な背景の両方が作用して判断が述べられている]

kunu maja:=ja mura=ŋkai ge:ke:ei ja-einīte:te:, kure: ɸutute-i n:na=ŋkai ku:te:n=na:

この 猫=TOP 村=DAT 災い返し COP-CSL これ.TOP 屠る-SEQ 皆=DAT 少し=ずつ

「この猫は村に災い返しだから、これは屠って皆に少しずつ」

?atar-ac-iwa=n simu-kutu, ?uri=ga eiei ɸutute-i wappuci-wa=rujaru=nte-i ɸutute-i s-a-kutu

当たる-CAUS-CND=ADD 済む-CSL それ=GEN 肉.ACC 屠る-SEQ 分配する-CND=OBLG=QT.言う-SEQ 屠る-SEQする-PST-CSL

「配ればいから、その肉屠って分配しないとけないと屠ったから」

tein=ŋkai¹⁸¹ kakit-a-kutu jondzittei ?at-an=di=nu hanaei

斤=DAT かける-PST-CSL 40斤 ある-PST=QT=GEN 話

「斤にしたら40斤あったって話。」(昔話, 221)

415) [民話の語り。王様がいじわるをして、冬に夏物を着させてわざと長い間部屋に待たせる。王様の命令だから守らなくてはいけないという良心あるいはモラルのようなものが関わっている]

wanne: ɸi:san-u i:te-i=n i:r-ar-an-mun=nakai, ?usu: guɸu:ku:=ja

1SG.TOP 寒い-CSL 座る-SEQ=ADD 座る-POT-NEG-FN=DAT 王様.GEN ご奉公=TOP

「私は寒くて座っても座れないのに、王様のご奉公は」

?uri e-i jat-i=n, dzifi ei-wa=rujaru=ndite-i

それ.ACC する-SEQ COP-SEQ=ADD ぜひ する-CND=OBLG=QT.言う-SEQ

「それでも、ぜひやらなきやと言って…」(那民, 76)

eiwadu jaru の文は、規範的であろうが主観的であろうが、多くの場合 sandare: naran の文と意味的に何ら変わりがない。形式を置きかえても意味の違いは生じない。実際に、次の用例では、同じ文脈においてふたつの形式が同じ意味で用いられている。それが可能なのは、どちらの形式も基本的に〈必要〉という意味あいをもっているからである。

416) [仕事で那覇に行って来るといふ父 A。仕事・用務は義務的なものである]

A: na:ɸa=kai ?ndziku:ri-wa=rujaru, wanne:

那覇=ALL 行って来る-CND=OBLG 私.TOP

「那覇に行って来ないとけない、私は。」

B: ?oto:san, na:ɸa=kai mence:-bi:n n:

お父さん 那覇=ALL 行く.HON-POL EQ

「お父さん、那覇にいらっしゃるんですって？」

A: ?n:. na: teu:=ja dzifi ?ndziku:r-an=to:naran-eiga

うん FIL 今日=TOP ぜひ 行って来る-NEG=OBLG-ADVRS

「うん。もう今日は必ず行ってこないといけないが。」(日放, 280-281) (用例 372 と重複)

417) [民話の語り。王の妻に化けた鬼が人々を王に殺させて、殺した人の血を飲んでいたので下の役人

¹⁸¹ 原本では「斤(ちん)ぬかい」とあるが、n 終わりの名詞が与格の-ŋkai と結びつく場合、首里方言ではふつう-nunjai となるため、そのように筆者が修正した。

が以下のように言う]

kanci e-e: nar-an. kure: t̄ca: e-i=n taidzi s-an=|are:naran. ?undzu=nu tudze:=ja:
こう する-SEQ.TOP POT-NEG これ.TOP どう する-SEQ=ADD 退治 する-NEG=OBLG 2SG.HON=GEN 妻.TOP=IP
「こうではいけない。これは絶対退治しなければならん...貴方の妻はね」

me:=nu ?unadzara: ?a-miso:r-an. ?uni=ni bakit-i-ru=ja ?undzo: me: nate-o:-mice:-kutu
前=GEN 王妃.TOP COP.HON-NEG 鬼=DAT 化ける-SEQ-ADN=TOP 2SG.HON.TOP 前 なす-PROG-HON-CSL
「前の王妃ではありません。鬼に化けているのを貴方は前にしていらっっしゃいますので」

?ure: d̄ziφi taidzi ei:-wa=ruja-ru

それ.TOP ぜひ 退治 する-CND=OBLG

「これはぜひ退治しなくてははいけません。」(那民, 19) (用例 374 と重複)

しかしながら, eiwadu jaru の文が sandare: naran の文と違いをみせるのは, 次のような話し手が予定されていた事象・出来事について発話直前まで忘れていたという場面においてである。このような場合, eiwadu jaru の文は使えても, sandare: naran の文は使えない(あるいは, 非常に使いにくい)¹⁸²。思い出すという場面状況のため, 発話時の認識の変化を表す終助辞 sa を伴いやすい。

418) [忘れていたが, カレンダーに書いてあった予定に気づいて。計画的・予定的なものにしばられた必要]

t̄eu:=ja ha:ja:=ŋkai ?iki-wa=ruja=sa

今日=TOP 歯医者=DAT 行く-CND=OBLG=SFP

「今日は歯医者に行かなきゃ！」(調査, 2016/10/24)

また, 次のような発話時点で物事を決めたり, 選んだりする場面において, そのような話し手の決定や選択を〈必要〉という判断として述べる場合も, eiwadu jaru の文が用いられる。このような話し手の判断は, 話し手の発話時点での感情や気分でもって〈必要〉とみなされた主観的な判断である。そこに客観的な論理性はなく, 話し手がそうしたいと望んでいる事象を話し手の主観的な判断でもって必要なことだと決めてかかっている。発話時点での判断なので, ここでも sa が多用されている。

419) [市場へ買い物。聞き手に何をかうべきかを説明している]

madze: ku:bu=kara ko:-ibi:n. ku:bu=tu kat̄eu:buce: wacit-e: na-ibir-an
まず.TOP 昆布=ABL 買う-POL 昆布=COM 鯉節.TOP 忘れる-SEQ.TOP なる-POL-NEG

「まずは昆布から買います。昆布と鯉節は忘れてはいけません。」

ja=sa. so:min ko:ri-wa=duja=sa. ?uri=kara jace:=n ko:ri-wa=dujaru-mun

COP=SFP 素麺.ACC 買う-CND=OBLG=SFP それ=ABL 野菜=ADD 買う-CND=OBLG-FN

「そうだ!素麺を買わなきゃね。それから野菜も買わなきゃいけないわね。」

?anda:gi: jar-e: ?mmu=tu go:ja: ja-ibi:ŋ=ja:

揚げ物 COP-CND 芋=COM 苦瓜 COP-POL=SFP

「揚げ物なら芋とゴーヤーですね！」(入門, 137)

420) [市場へ買い物。何をかうのかを説明している]

A: einci:=tai. t̄eu:=ja na:be:ra:=nu ?uφo:ku ?a-ibi:-eiga, t̄ca: ja-ibi:=ga

先生=POL.VOC.F 今日=TOP 糸瓜=NOM 多く ある-POL-ADVRS どう COP-POL=WHQ

「先生。今日は糸瓜がたくさんありますけど, どうですか。」

¹⁸² 調査協力者の内省による(調査協力者, 面接調査, 2016年12月12日)。

B: ʔai, ʔan ja=sa. to:to:, ʔmbuei: e-e-i kami-wa=duja=sa
 INTJ そう COP=SFP INTJ 煮物 する-SEQ 食べる-CND=OBLG=SFP
 「あら、そうね。じゃあ、煮物にして食べなきゃね。」(入門, 137)

主語が一人称の *eiwadu jaru* の文に《意志性》が感じられたとしても、それは〈必要〉という意味あ
 いから生じてくる二次的なものであり、場面状況によるものである。したがって、典型的な意志文で
 はみられない次のようなケースが *eiwadu jaru* の文にはみられる。*eiwadu jaru* の文に差し込まれる話し
 手の評価的な判断がまだ話し手の中で〈疑い〉の状態にあつて、判断としては未完成な場合、否定
 質問形式を伴って、そのような〈疑い〉状態にある判断を表す。

421) [首里城を復元するという話]

d̥ziɸi euriCIMIN=tu=nu jakusuku=n ja-kutu t̥eukur-aei-wa=ruja-e: s-an=i=nditei
 ぜひ 首里市民=COM=GEN 約束=FOC COP-CSL 作る-CAUS-CND=OBLG-TOP する-NEG=YNQ=QT
 「ぜひ首里市民との約束でもあるから作らせないといけないんじゃないかと」
 wanne: ʔumut-o:-ru-ba:
 1SG.TOP 思う-PROG-ADN-FN
 「私は思っているわけだ。」(方談, 310) (用例 281 と重複)

主観的な判断を述べる *eiwadu jaru* の文では、話し手の自己中心的な興味・関心や満足をみやす内容
 が述べられていることが多い。また, *sandare: naran* の文が表す〈仕方なさ〉は, *eiwadu jaru* の文には全
 くない。むしろ、話し手が事象の実現を強く望んでいるというニュアンスが感じられる。

422) [霊感の強い息子がいつも外出先から幽霊と喧嘩して家まで連れて来るといので]

kure: kana:-i=n sun=di ʔi:-ru-mun, mad̥zi t̥eangutu=ga ja-ra tamici=ni e-i ndi-wa=rujaru
 3SG.TOP 敵う-INF=ADD する=QT 言う-ADN-FN まず どう=FOC COP-DUB 試し=DATする-SEQ 見る-CND=OBLG
 「息子は(幽霊に)敵いもすると言うが、まずどうなのか試してみることにしよう。」(昔話, 251)

27) [民話の語り。王様が大変かわいがっていた渡嘉敷ペークーの話]

to:, kunu tukaciteipe:ku: t̥e:u:=ja jub-a:ni, na: kure:
 INTJ この (人名).ACC 今日=TOP 呼ぶ-SEQ FIL FIL
 「よし、この渡嘉敷ペークーを今日は呼んで、もうこれは」
 ʔihe: wateaku ei-wa=runai=ssa:=ndite-i
 ちょっと からかい する-CND=OBLG=SFP.MON=QT.言う-SEQ
 「ちょっとからかってやらなきゃなあと言って…」(那民, 75)

423) [民話。王様がどのくらい知恵があるのか試してみようと言って難題を言いつける]

bo:d̥ziusu:=ga kure: d̥zibummutei=n jan=di-ru-mun, jub-a:ni murutei-gumui
 (人名)=NOM こいつ.TOP 知恵者=ADD COP=QT-ADN-FN 呼ぶ-SEQ (地名)-池
 「坊主御主がこいつは知恵者だから、呼んでムルチ池が」
 ʔikuçiru ʔan=dite-i kuri=ni sag-acimiri-wa=rujaru=ndi ʔite-i
 幾尋 ある=QT.言う-SEQ 3SG=DAT 探す-CAUS-CND=OBLG=QT 言う-SEQ
 「幾尋あるかこいつに調べさせようと言って」
 mo:imi:ja:=ja jud-e:-mice:-ru guto:n=te:ja:
 (人名)=TOP 呼ぶ-RES-HON-ADN ようだ=SFP
 「モーイ新屋はお呼ばれすることになったようだよなあ。」(昔話, 135)

424) [民話]

t̄ea:cin kuri=ja wa: ti:=nu ʔut̄ci=ŋkai ʔiriri-wa=r̄unairu=nt̄ci

どうしても 3SG=TOP 1SG.GEN 手=GEM 内=DAT 入れる-CND=OBLG=QT

「何としてもこいつは私の手の内に入れないと言って」

ʔunu gaci:d̄zira=ndi-ee: maduʔi:d̄zi: ʔumut-o:t-e:-ru guto:n=te:ja:

この (人名)=QT-NLZ.TOP 常日頃 思う-PROG-PST3-ADN ようだ=SNP

「このガシージラというのは日頃から思っていたようなんだよな。」(昔話, 100) (用例 167 と同文)

事象の実現の必要性は必ずしも働きかける対象にとって実益・有益なものとは限らない。次の用例では、話し手の実益あるいは個人的な理由のために、第三者に危害を加えたり、ネガティブな働きかけを行う必要性を述べている。そのような〈必要〉は話し手自身にとっての〈必要〉である。

425) [若者を叩きのめす荒くれ者たちに女 A が止めに入る]

A: mat-i. ʔitta:=ja ʔussa ʔit̄e-i=n t̄eik-an. kunu ni:ee: kuruei-wa=dunairu=i

待つ-IMP1 2PL=TOP こんなに 言う-SEQ=ADD 聞く-NEG この 若者 やっつける-CND=OBLG=YNQ

「待て！お前達はこんなに言っても聞かん。この若いのやっつけないといけないのか？」

B: ʔut̄eikurute-i=n so:=ja ʔiriri-wa=dunairu

ぶん殴る-SEQ=ADD 根性=TOP 入れる-CND=OBLG

「ぶん殴っても根性を入れてやらなくちゃな。」

A: ʔe:, ʔan=i:

ああ そう=YNQ

「ああ、そうかい。」(芝居, 664)

426) [男 A が女を家から追い出そうと女の家に行く]

t̄eu:=ne: ʔamma:-g^{wa}: so:dan ee-i subit̄e-i ʔnd̄zaei-wa=dujaru

今日=DAT.TOP 婆-DIM.PEJ 相談.ACC する-SEQ 引きずる-SEQ 出す-CND=OBLG

「今日こそババアと話を付けて追い出さないとな。」

hei, ʔamma:=jo:. ʔamma:=jo:. ʔune, ur-an=du ʔa=gaja:

INTJ 婆=VOC 婆=VOC INTJ いる-NEG=FOC ある=DUB

「おい、おばさん。おばさん。あれ？いないのかな。」(芝居, 716) (用例 252 と同文)

427) [民話。飼い犬が夜な夜な出かけるのを不審に思って後をつけていったところ、女の幽霊がいて、犬のことを尋ねたところ、犬は後日飼い主の命を取るために墓を掘っているところだと言う。それを防ぐにはご馳走を作って飼い主を桶の中に隠して待っておれというので、そうしたら当日幽霊やら動物やらがやって来て、ご馳走を食べるが…]

A: di:, kuri kad-i mudur-a

INTJ これ.ACC 食べる-SEQ 戻る-HORT

「さあ、これを食べて戻ろう。」

B: ʔanee: nar-an. d̄ziʔi ʔunu t̄eo: turi-wa=r̄uja-kutu ʔanee: nar-an

CNJ なる-NEG ぜひ この 人.TOP 取る-CND=OBLG-CSL それでは POT-NEG

「それではダメだ。必ず飼い主は(命を)取らないといけないからそれではダメだ。」(昔話, 217)

428) [民話。人間の王様を滅ぼして代わりに王になった化物の話。話し手は先回りして化物をやっつけるという文脈。取り返すのは玉座とか天下のことだと思われる]

ʔama=ŋkai=nu eisatsu=nu ʔa-kutu, he:ku ʔid̄z-a:ni mat̄eiuikit-o:t-i

あそこ=DAT=GEN 視察=NOM ある-CSL 早く 行く-SEQ 待ち受ける-PROG-SEQ

「あそこには視察があるから、早く行って待ち受けていて」

?ama=uti kure: tuike:ei-wa=rujaru

あそこ=LOC 3SG.TOP 取り返す-CND=OBLG

「あそこでこいつは取り返さなければならない。」(昔話, 212)

次の二例は、神秘的・奇跡的なものの遭遇や体験から来る感動に基づく話し手の判断が〈必要〉となつてあらわれていて、そのような判断の根拠となるものは、思想的なものにしばられている。このような思想が話し手個人によるところのものなのか、文化的・慣習的なものなのかは区別しがたい。

429) [民話。阿麻和利の話。蜘蛛が巣を作っているのを見て、いたく感動して]

?a:, ?iteimuci=nu=n ?unujo:nakutu su-ru-mun. nindzin ?umarit-i kuriari

INTJ 動物=NOM=ADD このような事 する-ADN-FN 人間 生れる-SEQ これあれ

「ああ、動物でもこんな風にするんだもの。人間(として)生まれて」

s-an=ne:naran. tea:cin kange:t-i ei-wa=rujaru

する-NEG=OBLG どうしても 考える-SEQ する-CND=OBLG

「あれこれしないと。何とか考えてしないとな。」(昔話, 58)

430) [民話の語り。川に落ちたが、木にひっかかって助かったので大切にとっておいたという話]

kunu ho:ga:gi:, ?ataraci-wa=rujaru

この (植物名¹⁸³) 大切にする-CND=OBLG

「このミツバハマゴウの木、大切にしなくちゃ」(那民, 120)

事象の実現に多くの困難が待ち受ける、あるいは、決断するのに苦しみ・辛さ等のネガティブな感情を伴うような場合、〈覚悟〉といった意味あいが強まる。

431) [仕事をしなくても金に困らない家が、子供に盗みをさせていると村人から噂されて]

kuri ?ute-o:te:i:ne:, watta:=madi ?atumutte: de:dzi ja-kutu, kure: na: teimugurisano:

3SG.ACC 置く-SEQ.おく-CND 1PL=LIM 後の方で 大変 COP-CSL FIL FIL 可哀想だ.TOP

「この子を置いておくと、私達まで後で大変な事になるから、これはもう可哀相では」

?a-eiga, kame:naciku=ni nar-an ?utei=ni ma:gara=ηkai jaraci-wa=rujaru¹⁸⁴

ある-ADVRS 煩わしい事=DAT なる-NEG.ADN うち=DAT どこか=DAT やる-CND=OBLG

「あるが、煩わしい事にならないうちにどこかにやらなければ。」(昔話, 58) (用例 32 と重複)

主語が二人称の eiwadu jaru の文 (必要—命令)

主語が二人称の eiwadu jaru の文は、〈必要〉という意味あいに《働きかけ性》が加わって、〈忠告・警告的な命令〉あるいは〈義務の押しつけ〉を表す。多くは、終助辞 do:を伴う。do:が用いられることで、聞き手に働きかける意味あいが前に押しだされて、忠告・警告的な意味あいが強くなる。

432) ?ja:=ga sum=i. nu:ntei s-aη=ga. ei:-wa=rujan=do:

君=NOM する=YNQ なぜ する-NEG=WHQ する-CND=OBLG=SFP.ASS

「君がやるか。なぜしない？やるべきだよ。」(語遊「スン」, 2009/6/28, p. 18)

¹⁸³ ミツバハマゴウ。萩の一種。

¹⁸⁴ 調査協力者に確認後、原文の「ちむぐりさんよ」を teimugurisano:に変更した。kame:nacikuni は『沖縄語辞典』にも記載されていないし、調査協力者も知らない語だと言う。したがって、原文の訳である「煩わしい事に」をそのまま記載した。

- 433) [二十歳の頃, 地域の行事をすっぽかしたら母親が言う]
 hatatci=n ʔamar-e:=kara: muraguge:=n ci:-wa=rujan=do:
 二十歳=ADD 余る-CND=ABL.TOP 村付き合い=ADD する-CND=OBLG=SFP.ASS
 「二十歳も超えてからは村付き合いもしないといけないよ。」(語遊「クゲーとヒレー」2011/6/26, p. 19)
- 434) [新婚当時, 伯母が言う]
 maduʔi:ɖzi:=ja kubame:t-i tɛikat-i ɖzino: taburi-wa=rujan=do:
 普段=TOP 節約する-SEQ 使う-SEQ お金.TOP 蓄える-CND=OBLG=SFP.ASS
 「普段は節約して使ってお金は蓄えないといけないよ。」(語遊「タブユン」2011/6/12, p. 19)
- 435) [素行の悪い夫マサンルーを巡って, 妻と義母に対して怒り狂う伯父 A. Bは義母]
 A: tɛu:=ja tai=ci ʔitein e-i, ʔancin so: ʔir-an=de: kuni=ça: masan[u:=ja
 今日=TOP 二人=INST 意見 する-SEQ それでも 根性.ACC 入れる-NEG=CND これ=PEJ (人名)=TOP
 「今日は二人で相談して, それでも根性を入れかえなければこいつマサンルーは」
 ʔuni nuci:-ru kange: su-gutu, ʔitta:=n ʔunu tuitɛiwami ci-wa=rujan=do:
 船 乗せる-ADN 考え する-CSL 2PL=ADD その 覚悟.ACC する-CND=OBLG=SFP.ASS
 「船に乗せる¹⁸⁵考えだから, お前たちもその覚悟をしなきゃな。」
 B: to:, kunu tɛu=nu mimi=ŋkai ʔitte-a-ru ʔidzo:=ja tada: cɛm-an=do:
 INTJ この 人=GEN 耳=DAT 入る-PST-ADN 以上=TOP ただ.TOP 済む-NEG=SFP.ASS
 「さあ, この人の耳に入った以上はただでは済まないよ。」(芝居, 556) (用例 137 と一部重複)

ただし, 《対象的な内容》に強く言い切ることができない話し手の判断や意見が差しだされて, そこに te:が用いられる場合, 話し手の判断をただ柔らかく伝えるという文となる(用例 330 再掲)。

- 330*) ja:=nu subiue:¹⁸⁶ de:-munu. to:ho: tɛuhaku ʔateire:ri-wa=rujan=te:
 家=GEN 完成祝い COP-FN 豆腐.TOP ひと箱 あつらえる-CND=OBLG=SFP
 「家の完成祝いだもの。豆腐はひと箱あつらえないといけないでしょうよ。」(音声「チュハク」)

主語が三人称

sandare: naran の文と同様に, 主語(動作主体)が行政等の組織の場合も用いられて, その組織や集団が必要とするところの判断 = 〈客観的必要〉を述べる。eiwadu jaru の文では, その場合でも, その組織や団体が事象の実現に対して前向きな態度を持っているニュアンスを伴う。

- 436) [市民住宅の家賃滞納問題。支払い能力がある滞納者は強制退去になるというニュース]
 ʔunu ʔakiwataci=nu kutu=nitei:ti saibansu=uti nu:tuk^wi:tu kimiri-wa=rujaru=ndi
 その 明け渡し=GEN 事=について 裁判所=LOC 何もかも 決める-CND=OBLG=QT
 「その明け渡しの事について裁判所でははっきりと決めなければいけないと」
 ʔite-i soeo: ʔukute-i=kara na: ɖzu:nin tatte-o:-ru nahaei=tueee:
 言う-SEQ 訴訟.ACC 起こす-SEQ=ABL もう 10年 立つ-PROG-ADN 那覇市=として.TOP
 「言って訴訟を起こしてからもう 10年経っている那覇市としては…」(ニュ, 134)
- 437) [沖縄版レッドデータブックについてのニュース]
 hogotaisaku=nu kisoei^o:ŋkai ʔikate-i ʔiki-wa=rujaru=ndi=nu ʔumui=kara
 保護対策=GEN 基礎資料=DAT 生かす-SEQ 行く-CND=OBLG=QT=GEN 思い=ABL

¹⁸⁵ ʔuni nuci:n「島流しにする」の意。直訳は「船(に)乗せる」。

¹⁸⁶ 原文ママ。『沖縄語辞典』では eubi ʔuiwe:, または, eubi ju:e:。

「対策の基礎資料に生かして行こうとの思いから」

keŋkaŋk'o:hokembu=uti kudzu=kara kento:i:ŋkai t̄eukut-i

県環境保健部=LOC 去年=ABL 検討委員会.ACC 作る-SEQ

「県環境保健部で去年から検討委員会を設立して…」 (ニユ, 97)

条件節や理由節と共に起して、論理的な思考の結果的・必然的な判断を表す。

438) [帰りが遅い兄を心配する女 A]

A: ʔaja:=tai, jatt̄ei:=ja ʔanei ʔumudui=nu ʔususa-ibi:ŋja:

母.CH=POL.VOC.F 兄.CH=TOP なんて お戻り=NOM 遅い-POL=SFP

「お母さん、兄さんはなんてお戻りが遅いのでしょうかね。」

B: ʔan ja=sa ʔasa t̄eigaki e-i ʔndz-o:-gutu, na: ke:t-i ku:-wa=runai-eiga

そう COP=SFP 朝 励み する-SEQ 出る-PROG-CSL もう 帰る-SEQ 来る-CND=OBLG-NASS

「そうだね。朝早く出ているから、もう帰って来ないといけないけど…」 (芝居, 828) (用例 66, 224 と重複)

主語が一般人称等

話し手の経験・常識・思想に基づく、一般的な〈義務〉や〈必要〉を表す。「～と言うのは」「～という言う者は」等、物事を一般化するフレーズが先行して語られる。尚、話し言葉では、eiwadu jaru あるいは nairu 後ろの述語 (jaru/nairu) が省略されることがある。

439) [相撲をとったが加減をしらないと言って C を責めたてる]

A: ʔikana nu: jar-awa=n, ʔja:=ja ʔansukana: k^wamat̄ei ʔut̄eun=t̄ei ʔam=i

いくら 何 COP-CND=ADD お前=TOP そんなに 強い投げ.ACC 打つ=QT ある=YNQ

「いくら何でも、お前はそんなに強い投げを打つてあるか。」

B: nindzino: kagin=di ʔi-ei=n eiri-wa=dunajuru. so:ei: sun=t̄ei¹⁸⁷ ʔam=i

人間.TOP 加減=QT 言う-NLZ=FOC 知る-CND=OBLG まともに する=QT ある=YNQ

「人間は加減って言うのも知らなくちゃ。まともにやるってあるか。」

C: ʔja:=ga=du ʔi-tano: ʔar-an=i. eima=ndi ʔi-ee: mut̄e-a:ni ʔut̄e-ei=ndi

お前=NOM=FOC 言う-PST2.DIREV.TOP COP-NEG=YNQ 相撲=QT 言う-NLZ.TOP 持つ-SEQ 打つ.NLZ=QT

「お前が言ったんじゃないか。相撲って言うのは持って打つんだって。」 (芝居, 700) (用例 28 と重複)

440) [まだ知られていない琉球国王の逸話を本に書くという話から]

A: kun=nakai ʔwa:bamuno: ʔirin=na. dekici=ndi ʔi-ee: eo:d̄zikini kaki-wa=ru=ja:

この=LOC 不要な物.TOP 入れる=PROH 歴史=QT 言う-NLZ.TOP 正直に 書く-CND=FOC=SFP

「この中に不要な物を入れるな。歴史というのは正直に書かないとね。」

ʔatu=nu ju:=madi ʔure: (中略) nukuin=do:¹⁸⁸

後=GEN 時代=LIM これ.TOP 残る=SFP.ASS

「後の時代までこれは残るよ。」

B: ʔu:「はい。」 (方談, 352) (用例 135 と一部重複)

次の一般人称を述語にもつ eiwadu jaru の文では、存在動詞が述語に用いられている。eiwadu jaru の文では、運動動詞だけでなく、存在動詞が述語に用いられて〈必要〉をあらわすことができる。

¹⁸⁷ 内容に合うように少し修正を加えた。

¹⁸⁸ 文中のフィラー表現等を省略して転載した。

441) [腕相撲をしようと言って]

A: kamidza:=ga ?udi kaki:-ei nudzud-o:n=di=na:. kamidza: ikiga=ndi ?i-ru muno:
 (人名)=NOM 腕.ACC かける-NLZ.ACC 望む-PROG=QT=YNQ2 (人名) 男=QT 言う-ADN者.TOP

「^{カミジヤ}亀寿が腕相撲をするのを望んでるとな。^{カミジヤ}亀寿、男と言う者は」

?unu ?atai=ja ?idzire: ?ari-wa=dunairu

その くらい=TOP 意地.TOP ある-CND=OBLG

「そのぐらいは意地はないとな。」

B: ?ance: ?udi kakit-i jutasa=ga ?a-ibi:-ra

CNJ 腕.ACC かける-SEQ よろしい=FOC ある-POL-DUB

「それでは腕相撲してもよろしいでしょうか。」(芝居, 692) (用例 201 と一部重複)

3.11.3 sawadu jaru の文

sawadu jaru の文も、事象の実現の〈必要性〉を述べる。法律・慣習・倫理的なものにしばられた必要を述べる場合、その判断は規範的・客観的な必要を表す。話し手の実益や個人的な目的の達成のために述べる必要性は、話し手の主観的な評価・判断を表す。

主語が一人称

法律・慣習・倫理的なものにしばられた必要を述べる場合、その判断は話し手自身の動作に対する規範的・客観的な必要を表す。ただし、法的なきまりにしばられた用例はみつからなかった。

442) [民話。道を作る責任者が死んでしまってどうすればいいのか悩む王様。計画的・予定的なもの]

A: kure: d̄ziφi mice: eikakit-e:-i, tea:cin tudzumira-wa=runai-eiga (中略)

これ.TOP ぜひ 道.TOP 仕掛ける-RES-INF 何とか 仕上げる-CND=OBLG-NASS

「これは絶対道は仕掛けてあるし、何とか完成させないといけないが」

kure: teangutu=du su=gaja: (中略)

これ.TOP どのように=FOC する=DUB

「これはどうすればいいかなあ。」

B: wan=niŋkai mak-acimit-i k^{wi}-miso:r-i

私=DAT 任せる-CAUS-SEQ BEN-HON-IMP1

「私に任せて下さい。」(昔話, 146)

443) [護佐丸は沖縄の有名な歴史上の偉人。そんな人の臣下ならば救う必要があるだろうと判断している。倫理的なしばり]

to:rit-o:-ei n:d̄z-a:ni taeik-i:ga=nteĩ, taeikani kunu t̄teo: ?anu gusamaru=nu

倒れる-PROG-NLZ.ACC 見る-SEQ 助ける-PUR=QT 確かに この 人.TOP あの (人名)=GEN

「倒れているのを見て助けようと、確かにこの人はあの護佐丸の」

eĩŋka ja-eĩnteĩ:te:, d̄ziφi sukuiagira-wa=rujaru=ndi ?ite-i

臣下 COP-CSL ぜひ 救い上げる-CND=OBLG=QT 言う-SEQ

「臣下だから、必ず助けてあげなければと言って...」(昔話, 72)

444) [親が死にそうになっていると聞いて慌てる。倫理的なしばり]

?untaki nat-o:-ru-mun=du=n jar-e:, kure: φe:ku ?ika-wa=rujaru

それ程 なる-PROG-ADN-FN=FOC=ADD COP-CND これ.TOP 早く 行く-CND=OBLG

「それ程までになってるのならば、これは早く行かないと。」(昔話, 269)

- 445) [民話。血の気の多い一人息子をどうにかしないと悩む母親が言う。相手のために何かしてあげなければいけないという必要性は倫理的なきまりにしたがう典型的な例である]
 kunumama so:te-i:ne:, kure: ?ato: kigaē-i teu:-kutu, kure: no:sa-wa=ruja=ssa:
 このまま しておく-CND 3SG.TOP 後.TOP 怪我する-SEQ 来る-CSL これ.TOP 治す-CND=SFP.MON
 「このままにしておくど、こいつは後は怪我して来るから、これは治さなければ。」(那民, 149)

話し手の実益や個人的な目的の達成のために述べる必要性は、話し手の主観的な評価・判断を表す。

- 446) [家が焼けてなくなったキジムナー (木の精) の話]
 wa: ja:=ja jakit-i ne:n-mun. ?asatu=nakai ?usukugi:=nu ?a-kutu, ?uma=kai ?ika-wa=rujaru
 1SG.GEN 家=TOP 焼ける-SEQ CPL-FN.CSL 安里=LOC ウスクの木=NOM ある-CSL そこ=ALL 行く-CND=OBLG
 「私の家は焼けてないもの。安里にウスクの木があるから、そこに行かなくちゃ。」(昔話, 225)

- 447) duku maku nai-kutu, ?iφe: bammikasa-wa=rujaru
 あまりに 腕白 なる-CSL 少し ばんとやる-CND=OBLG
 「あまりに腕白だから、少しこらしめてやらないと。」(音声「バンミカスン」)

- 448) [民話。主観的な判断]
 na: φittei:=ru=n e-e:, teime: hari:t-a-ru-mun. teimi hari:-ru tami=nakai=ja
 もう 1日=FOC=ADD する-CND 罪.TOP 晴れる-PST-ADN-FN.CSL 罪 晴れる-ADN ため=DAT=TOP
 「あと1日もすれば、罪は晴れるから。罪が晴れるためには」
 wanne: ?inaka=ηkai ?urira-wa=rujaru
 1SG.TOP 田舎=DAT 降りる-CND=OBLG
 「私は田舎に降りなくては...」(昔話, 127)

- 449) [息子が帰ってきたらあげようと自分の食べるものを隠した母親の話]
 kanci ma:sa-ru munu, (中略) k^wa=nu tci:-ne: mieira-wa=rujaru=nte-i
 こんなに 美味しい-ADN 物.ACC 子=NOM 来る-CND 見せる-CND=OBLG=QT.言う-SEQ
 「こんなに美味しい物、子供が来たら見せなきゃと言って」
 du:=nu jitte-o:-ru muciru=nu eitca=ηkai ti:tei=na: ti:tei=na: kadzimit-e:t-an=di=jo:
 自分=NOM 座る-PROG-ADN 筵=GEN 下=DAT 一つ=ずつ 一つ=ずつ 隠す-RES-PST=QT=SFP
 「自分の座っている筵の下に一つずつ一つずつ隠してあったんだってよ。」(昔話, 188)

- 450) [自らの実益あるいは目的達成のために必要なこと]
 kundo: wa: einkano: kan-a:η-kutu, wa:=ga ?ika-wa=runairu
 今度.TOP 私.GEN 臣下.TOP 敵う-NEG-CSL 私=NOM 行く-CND=OBLG
 「今度ばかりは私の臣下では敵わないから、私が行かないとな。」(昔話, 212)

- 451) [夫婦の会話。一山越えなければならぬので、夫が妻を気遣う (用例 25 と重複)]
 A: ?usag^wa: utat-e: ur-an=i
 (人名) 疲れる-SEQ.TOP いる-NEG=YNQ
 「ウサよ。疲れてはいないか？」
 B: ?açig^wa:=tu madzun ja-ru-munnu. nu:=n nandze: ?ar-an=jo:
 あなた=COM 一緒 COP-ADN-CSL 何=ADD 難儀.TOP COP-NEG=SFP
 「あなたと一緒に。何も難儀ではないわ。」
 A: to:, ?anee: ?akasa-ru ?utei=uti teina:bandzu teiteira-wa=dunai-gutu, ?unumama tea:tu:i ss-a=ja:
 INTJ CNJ 明るい-ADN うち=LOC (地名) 着ききる-CND=OBLG-CSL そのまま 続けて行く事 する-HORT=SFP
 「さあ、では明るいうちに喜納番所に到着しておかないといけないから、そのまま行こう。」(芝居, 752)

sawadu jaru あるいは eiwadu jaru の文が《意志性》を帯びるのは、場面状況による二次的な意味あい

の付け加えであるが、多くの用例で「しよう」で訳されていて、そのような場合、意志・勧誘形に置き換えても差し支えはないことがほとんどである。

例えば、次の用例の意志・勧誘形(ʔukusana)を必要形式(ʔukusawadu jaru あるいは ʔukueiwadu jaru)に置き換えても、意味的な違いはみられない。ただし、意志・勧誘形による〈意志〉は述語の形式が主体との関係のなかで直接的に〈意志〉を表しているのに対し、必要形式による〈意志〉は〈必要〉という話し手の判断から間接的に、あるいはプラグマティカルに生じてくる意味あいである。

452) [動物保護に関する方言ニュース]

ʔiteimuci-g^wa:-ta: mamuju-ru tami=nu undo: ʔukus-a=na=ndi ʔite-i,
 動物-DIM-PL 守る-ADN ため=GEN 運動.ACC 起こす-HORT=SFP=QT 言う-SEQ
 「動物たちを守るための運動を起こそうと言って」
 inu=ja neko=o sutenaide=ndiʔite-i kaŋe-e:-ru tatikamban rukume:
 犬=や 猫=を 捨てないで=QT 書く-RES-ADN 立て看板 六枚.ACC
 「『犬や猫を捨てないで』と書かれてある立て看板六枚を... (後略)」(ニュ, 39)

主語が二人称 (必要—命令)

主語が二人称の sawadu jaru の文では、〈必要〉という意味あいに《働きかけ性》が加わり、〈強制〉や〈命令〉といった意味あいを付け加える。

453) [質問しても返事がないので]

A: waŋga ʔi-ci ŋeik-ari:m=i. ŋeik-ari:r-a: ʔire:φidzi=n sa-wa=dujaru
 1SG=NOM 言う-NLZ 聞く-POT=YNQ 聞く-POS-CND 受け答え=ADD する-CND=OBLG
 「私が言う事聞こえるか。聞こえるなら受け答えもしないとな。」
 B: nu:=ga nu:ntei=sai
 何=FOC なぜ=POL.M
 「なぜですか。」(実践, 46)

454) [民話。一番鶏が泣く。話し手は幽霊なので朝になると帰らないといけない]

je:, je:, ʔukir-e:. na: tui=n ʔutai-kutu ke:ra-wa=ruja-kutu, ʔja: φe:ku ke:r-e:
 INTJ INTJ 起きる-IMP2 もう 鶏=ADD 歌う-CSL 帰る-CND=OBLG-CSL 2SG 早く 帰る-IMP2
 「おい、おい、起きろ。もう鶏も鳴くから帰らないといけないから、お前早く帰れ。」(昔話, 253)

sawadu jaru の文においても、否定質問形式を伴って、〈疑い〉の状態にある未完成な話し手の評価的な判断を表すことができる。

455) [男からダイヤモンドを貰った B に対して A がアドバイスする]

A: nu:ŋk^wi:n ko:t-i k^wi:-ce:, ʔja: ŋeimu φur-asun=ŋei ja=sa
 何もかも 買う-SEQ BEN-NLZ.TOP お前.GEN 心.ACC 振る-CAUS=QT COP=SFP
 「何もかも買ってくれるのは、お前の気を引こうってだよ。」
 k^wi-mice:-ce: i:t-i=n φiŋgi:-ce: maei=do:
 くれる-HON-NLZ.TOP 貰う-SEQ=ADD 逃げる-NLZ.TOP いい=SFP.ASS
 「いただいたのは貰っても逃げるのがいいよ。」
 B: jir-e:=kara: ʔuφe: φirara-wa=rujae: s-an=i
 貰う-CND=ABL.TOP 少し.TOP 付き合う-CND=OBLG.TOP する-NEG=YNQ

「貰った以上は少しは付き合わなきやいけないんじゃない？」

A: eimu=sa. i:-ru ʔussa ij-a:ni eigu hai-ei ja=sa
済む=SFP 貰う-ADN だけ 貰う-SEQ すぐ 去る-NLZ COP=SFP

「大丈夫。貰うだけ貰ってすぐ逃げるんだ。」(実践, 33-34) (用例 343, 345, 412 と一部重複)

次の用例では、前の述語にコンピュータが用いられている。sandare: naran の文では、述語にコンピュータがとれないのとは対照的である。

456) [夫が妻に対して皮肉を言うが、妻に問い詰められて否定する]

A: ʔenda:dzira s-o:t-i jana-eimuteinamun ja=sa
優しい顔 する-PROG-SEQ PEJ-根性持ち COP=SFP

「優しい顔していても意地悪な人だな。」

B: ʔure: wan kutu=du ja-ibi:-ru=i
それ.TOP 1SG.GEN 事=FOC COP-POL-ADN=YNQ

「それは私のことですか？」

A: ha: ʔar-an=do:. watta: ʔaja:=ja teimudzuramun
INTJ COP-NEG=SFP.ASS 1PL.GEN 母さん.CH=TOP 心優しい者

「いや違うよ。俺達母さんは心優しいひと。」

B: jara-wa=duja-ibi:ru. teimugukuru=nu teurasa: watta:=madi=du ja-ibi:-ru
COP-CND=OBLG-POL 心=GEN 綺麗さ.TOP 1PL=LIM=FOC COP-POL-ADN

「そうできなきゃね。心の綺麗さは私たちが一番ですもの。」(実践, 29) (用例 341 と一部重複)

eiwadu jaru/sawadu jaru の文のまとめ

ここでは、eiwadu jaru と sawadu jaru の文について、人称ごとに記述した。一人称を主語とする場合、話し手自身の動作についての〈必要〉を述べる。場面状況によっては、《意志性》や《まちのぞみ性》を伴い、〈希望・決意・覚悟〉といった意味あいを表す。したがって、そのような文は、意味的に意志文に近づく。

二人称を主語とする場合、聞き手の動作に対する〈必要〉を述べる。そうすることで、多くの文脈で聞き手への《働きかけ》が生じて、〈命令〉する・〈強制〉するといった意味あいが付け加わる。したがって、そのような文は、意味的に命令文に近づく。

三人称を主語とする場合、第三者の動作に対する〈必要〉を述べる。多くは組織や社会的集団を主語にして、第三者の動作について〈客観的な必要〉を述べる。

本研究では、eiwadu jaru と sawadu jaru の間に特別な違いを見つけることはできなかった。詳細は今後の課題である。

3.11.4 e:ja:形式

動詞の条件形に終助辞 ja: が後接した e:ja: 形式は、一人称主語をとって引用文で用いられ、話し手自身の動作に対する〈意志〉や〈決意〉等を表す。このような ee:ja: 形式による〈意志〉にも、次の用例にみるように、「～しなければならない」の訳があてられている場合がある。ここでは、一例だけ示す。詳細は意志のモダリティ「e:ja: の文」を参照されたい。

457) [方言ニュース。新設の郵便局について]

ju:binnt̃eiku=tucei ʔidziri mutt̃e-i, eikutei ʔumihamat-i ʔik-e:ja:=ndi ʔumut-o:-ibi:-n
郵便局=として 自覚.ACC 持つ-SEQ 仕事 励む-SEQ 行く-e:ja:=QT 思う-PROG-POL-IND
「郵便局として自覚を持って、仕事に励んで行かなければならないと思っています。」(ニュ, 114)

3.11.5 bit̃ei: jan (べきだ) の文

日本語の「べき」にはほぼ対応する bit̃ei:は、『沖縄語辞典』(1963)によると、「文語的な接尾辞」とある。しかし、使用例は多くないが、〈はなしあい〉の場面でも用いられている例があった。述語になるときは、コピュラ jan を後接させる。連体用法も可能で、その場合、コピュラは伴わない。

意味的にもほぼ「べき・べきだ」に相当し、事象の成立が妥当だとする話し手の判断を表す。

458) [やっつとで見つけたお目当のそば屋だが]

A: ʔaie:na:, ʔanu matei:ja: ʔa-ibir-an=i. t̃e:nu mando:-ibi:-ru-munnu
INTJ あの お店 COP-POL-NEG=YNQ 人=NOM 多い-POL-ADN-CSL
「あちゃー、あのお店ではありませんか？人が多いですから、これは長く」
kure: nage: mat-an=dare:na-ibir-an=do:
これ.TOP 長く 待つ-NEG=OBLG-POL=SFP.ASS
「待たなければなりませんよ。」

B: t̃e:nu narad-o:-e:, suba=nu ma:sa-ru su:ku=du ja-ru
人=NOM 並ぶ-PROG-NLZ.TOP そば=GEN おいしい-ADN 証拠=FOC COP-ADN
「人が並んでいるのは、そばがおいしい証拠だ。」

watta:=n narab-i-bit̃ei: jan=do:
IPL=ADD 並ぶ-INF-べき COP=SFP.ASS
「俺たちも並ぶべきだよ。」(入門, 116) (用例 408 と同文)

459) e-i:-bit̃ei: kuto: ʔe:ku=na: s-e:=wa

する-INF-べき 事.TOP 早く=FPC する-IMP2=SFP
「やるべき事はさっさとやれ。」(語遊「スン」2009/6/28, p. 18)

3.11.6 ei jasa (のだ) の文

動詞の短縮形語幹に名詞化の ei(の)が付き、さらにコピュラと終助辞 sa が後接する形式を述語にもつ文は、二人称を主語にして、聞き手に対して動作の必要性を訴える文となる。

460) [出世したいが、義理を曲げてまでは出世したくないという弟に対して喝を入れる兄]

ʔja:=ja nama kaŋge:=nu ʔo:san-u. ju=nu naka eir-an. nindzino: nu:=ni t̃eikit-i=n
2SG=TOP 今 考え=NOM 青い-MIR 世=GEN 中 知る-NEG 人間.TOP 何=DAT つける-SEQ=ADD
「お前はまだ考えが甘い。世の中を知らん。人間は何につけても」
rieicin su-ei ja=sa. kunnage: kunu naka=nu ʔawari waeit-i nar-an=do:
立身 する-NLZ COP=SFP こんなに長い この 中=GEN 衰れ 忘れる-SEQ POT-NEG=SFP
「出世するべきだ。これまでの長い間の苦労を忘れてはいけなぞ。」(芝居, 910)

461) [苦労をしているという孫 B だが、その苦労が彼女をふたりもほしいという相談だったので、彼女たちを悲しませることになるから、彼女はふたりは持てないよと諭す祖母 A]

A: t̃e:nu ʔa:ʔa: e-imit-e: nar-an=do:
人.ACC あーあー する-CAUS-SEQ.TOP POT-NEG=SFP
「人を悲しませてはいけなよ。」

B: wanne: tea: na-ibi:=gaja:

1SG.TOP どう なる-POL=DUB

「僕はどうなるでしょうか…」

A: ?ure: ka:minuku:=nu=n wakar-an. ?ja:=kuru ?awari s-o:t-i kange:i-ei ja=sa

それ.TOP 亀の甲=NOM=ADD わかる-NEG 2SG=自身で 苦勞 する-PROG-SEQ 考える-NLZ COP=SFP

「それは神のみぞ知ること。自分で苦勞して考えることだね。」(実践, 26)

3.11.7 suce: maeci (方がいい) の文

suce: maeci は、動詞述語に名詞化の働きをもつ ei(の)がとりたて助辞 ja(は)と融合した ee:と、日本語の「まし」にほぼ対応する maeci が結びついたものである。意味的には「方がいい」と「方がまし」の両方表せる。つまり、何か別の事象と比較して、主文に差し込まれる事象の実現の方が望ましいと述べる文(「方がいい」)、あるいは、事象の実現が望ましくないと述べる文(「方がまし」となる(日本語記述文法研究会, 2003, p. 103-105)。

主語が一人称

462) titei=ni kurus-ari:-ei=juka=ne: du:kuru einu-ee: maeci

敵=DAT 殺す-PASS-NLZ=CMPR=DAT.TOP 自分で 死ぬ-NLZ.TOP まし

「敵に殺されるよりは、自分で死ぬ方がいい(と言って実際に自害しようとする)。」(昔話, 71)

463) [民話。登場人物の台詞部分だけを抜粋]

A: ?itta:=ja ?we:kinteu nai-ei=tu wakaku nai-ei=tu dziro: maeci ja=ga

2PL=TOP 金持ち なる-NLZ=COM 若く なる-NLZ=COM どれ.TOP まし COP=WHQ

「お前達はお金持ちになると、若くなるのとどっちがいいか？」

B: mutu=nu wakasa=ηkai mudur-ari:-ru-mun=dare:, wakaku nai-ee: maeci ja-ibi:n

元=GEN 若さ=DAT 戻る-POT-ADN-FN=CND 若く なる-NLZ.TOP まし COP-POL

「元の若さに戻れるのであれば、若くなるのがいいです。」(昔話, 34)

464) [民話。登場人物の台詞部分だけを抜粋。父親が諸事情により仕方なく無人島に置き去りにした子供の台詞]

kuma=nakai u-ine:, wane: ?an e-i=n kan e-i=n, einu-ei=ru ja-gutu wane:

ここ=LOC いる-CND 1SG.TOP そう する-SEQ=ADD こう する-SEQ=ADD 死ぬ-NLZ=FOC COP-CSL 1SG.TOP

「ここにいたら、私はどうあがこうが、死ぬのだから私は」

?umi=ηkai ?utit-i, einu-se: maeci

海=DAT 落ちる-SEQ 死ぬ-NLZ.TOP まし

「海に落ちて、死ぬ方がいい(と言って実際に海へ飛び込む)。」(昔話, 58)

465) [民話の語り。題目を「雪払い」といって、有名な組踊の演目でもある。継母が娘に辛くあたる]

kungutu suso:=ni s-ariju-ei=jaka=ne:, ?idz-o:-ru ?uja=nu mi:=kai ?iteu-ee:

このように 粗末=DAT する-PASS-NLZ=CMPR=DAT.TOP 行く-PROG-ADN 親=GEN もと=ALL 行く-NLZ.TOP

「このように虐待されるよりは、亡くなった(母)親の所へ行くのが

maeci=ndite-i, na: ?iφe: janadzimu ?ukurit-o:n=te:ja:

まし=QT.言う-SEQ FIL 少し.TOP 悪い心 起こる-PROG=SFP

「いいと言って、これは少し悪い考えが出てきてるようだったらしい。」(昔話, 23)

sueiga maeci や sueidu maeci の文は、ee: maeci の文のヴァリエーションである。意味的な違いはほとんどない。

466) [民話。優秀な百姓ならどのくらい出世できるかを尋ねたら、それ程出世はできないと聞いて]

?a:, na inu nindzin ?mmarit-i, mi:=tu ei:=nu ?idzi:-ru ?atai hatarate-i=n, ?utte:, sabakui¹⁸⁹
INTJ もう 同じ 人間 生まれる-SEQ 目=COM 血=NOM 出る-ADN 位 働く-SEQ=ADD 掟 さばくい
「あー、もう同じ人間に生まれて、血眼になって働いても、掟、さばくい」

su-ru ?atai=ru=n jar-e:, na: ?ure:, eikin=ni sata nukui-ei=ga maei ja-ibi:n
する-ADN 位=FOC=ADD COP-CND もう これ.TOP 世間=DAT 噂 残す-NLZ=NOM まし COP-POL
「するくらいならば、もうこれは、世間に名を残すのがいいです。」(昔話, 111)

467) ?itta: utu su-ei=jaka=ne:, ?itei-jagusami (su)ei=du maei ja-ru
2PL.ADD 夫 する-NLZ=CMPR=DAT.TOP 生き-やもめ (する)-NLZ=FOC まし COP-ADN
「お前達の夫になるくらいなら、一生独身でいた方がましだわ。」(芝居 2, 1224)

主語が二人称

動作主体が聞き手である場合、〈忠告〉や〈勧め〉といった意味あいが付加される。

468) [年寄りのBが眠れないのは運動不足のせいなので、ゲートボールでもしたらどうかと勧めるA]

A: nu:=nu ?undo: s-o:-mice:=ga
何=GEN 運動 する-PROG-HON=WHQ
「何の運動をなさっているのですか？」

B: kan e-i me:nitei ?attea: ?attea: s-o:=sa
こう する-SEQ 毎日 歩き 歩き する-PROG=SFP
「こうして毎日ウォーキングしているよ。」

A: ?ussa=cee: tar-a:n=do:=sai. ge:tobo:ru ei-mice:-ee: maei ja-ibi:=sa
それ程=INST.TOP 足りる-NEG=SFP=POL.M ゲートボール する-HON-NLZ.TOP まし COP-POL=SFP
「それだけじゃあ足りませんよ。ゲートボールなさった方がいいですよ。」(実践, 13-14)

469) [男からダイヤモンドを貰ったBに対してAがアドバイスする]

A: nu:ŋk^{wi}:n ko:t-i k^{wi}:i:-ee:, ?ja: teimu φur-asun=tei ja=sa
何もかも 買う-SEQ BEN-NLZ.TOP お前.GEN 心.ACC 振る-CAUS=QT COP=SFP
「何もかも買ってくれるのはお前の気を引こうってだよ。」

k^{wi}:i-mice:-ee: i:t-i=n φingi:-ee: maei=do:
くれる-HON-NLZ.TOP 貰う-SEQ=ADD 逃げる-NLZ.TOP いい=SFP.ASS
「いただいたのは貰っても逃げるのがいいよ。」

B: jir-e:=kara: ?uφe: φirara-wa=ruijae: s-an=i
貰う-CND=ABL.TOP 少し.TOP 付き合う-CND=OBLG.TOP する-NEG=YNQ
「貰った以上は少しは付き合わなきゃいけないんじゃない？」(実践, 33-34) (用例 343, 345, 412, 455 と重複)

470) A: ?untteu-ta:=ja mi:=ja φurate-o:t-i, nint-i=ru mence:-e:sabiran=i
この人-PL=TOP 目=TOP 開ける-PROG-SEQ 寝る-SEQ-FOC いる.HON-のではありません=YNQ
「この人たちは目は開けていて、寝ていらっしやるんじゃないですか？」

B: ?e:, inagu. nu:=ndi=ga. ?ukit-o:n=do:
INTJ 女 何=QT=WHQ 起きる-PROG=SFP
「おい、女。何だって。起きてるぞ。」

A: ?ukit-o:t-i, hana φute-o:-mice:n=te:
起きる-PROG-SEQ 鼻 ふく-PROG-HON=SFP
「起きていて、いびきをかいていらっしやるのね。」

¹⁸⁹ ?utte: は、「廃藩前の村長。土着の平民になる」(首里那覇音声データベース「ウッチ」)。sabakui も地方役人の役職。

B: ʔe:, inagu. ʔja:=ja ʔuʔe: jaʔatte:ŋg^{wa}: sa-wa=ru ʔikiga=n tigane: ei:-bu-ku nai-ru.
 INTJ 女 2SG=TOP 少し.TOP 優しく する-CND=FOC 男=ADD 手伝い.ACC する-DES-INF なる-ADN
 「おい、女。少しは優しくしてこそ男も手伝いしたくなるってもんだ。」

ʔanei kuʔagutce: s-an=e-e: ma-ci=do:

そんなに きつい物言い する-NEG=NLZ.TOP まし=SFP.ASS

「そんなにきつい言い方しない方がいいぞ。」(実践, 37) (用例 151 と一部重複)

471) [とても嫌なやつだから付き合わない方がいいと B が A に忠告する]

A: ʔansuka jam=i

それ程 COP=YNQ

「そんなに(嫌な奴)なのか？」

B: jan=do:

COP=SFP.ASS

「そうぞ。」

A: ʔance: na: ʔik-an ʔuteu=gaja:

CNJ もう 行く-NEG.SEQ おく=DUB

「それじゃあ、もう行かないでおこうかなあ。」

B: ʔik-an-ee: ma-ci ja=sa. teannagito:k-e:

行く-NEG-NLZ.TOP まし COP=SFP 放っておく-IMP2

「行かない方がいいぞ。放っておけ。」(実践, 33) (用例 243, 314 と一部重複)

472) A: ʔmmi:=tai. ʔunu tteu=ga ʔju-ru kuto: teik-an-ee: ma-ci ja-ibi:=sa. te:ge:muni:=du

姉=POL.F その 人=NOM 言う-ADN 事.TOP 聞く-NEG-NLZ.TOP まし COP-POL=SFP 適当な物言い=FOC

「姉さん。その人が言う事は聞かない方がいいですよ。適当な事を」

s-o:-ibi:n=do: kuma=ne: nu:=n ʔui-bitei: muno: ne:-ibiran-munnu

する-PROG-POL=SFP ここ=DAT.TOP 何=ADD 売るべき 物.TOP ない-POL-FN

「言っていますよ。ここには何も売るべき物はないんですから。」

B: ha: ʔe:, inagu=jo: ʔane: ʔi=nake: te:ge:muni:=ja ʔar-an=do:

INTJ INTJ 女=IP そう.TOP 言う=PROH 適当な物言い=TOP COP-NEG=SFP.ASS

「はっ？おい、女よ。そうは言うなよな。適当な事じゃあないぞ。」(実践, 40)

473) A: wa: muno: de:daka:=ga ʔmbumun ja-eiga, ko:i-ee: ma-ci=do:

1SG.GEN 物.TOP 代高=?? 重い物 COP-ADVRS 買う-NLZ.TOP まし=SFP.ASS

「俺の物は高価で重い物だが買った方がいいぞ。」

B: ʔmbumuno: na-ibir-an=tai

重い物.TOP POT-POL-NEG=POL.F

「重い物はだめですわ。」(実践, 39)

主語が三人称

次の三人称を主語にした文では、「と思う」を後接させて第三者の動作の必要性について話し手の〈意見〉を述べる文となっている。

474) nu:-jat-i wa:=ga buʔzi:=nu su:bu e-i jat-i=n, ʔuguciku=nu teitumi su-ee: ma-ci=ndi

何-COP-SEQ 1SG=NOM 武芸=GEN 勝負 する-SEQ COP-SEQ=ADD お城=GEN 勤め.ADD する-NLZ.TOP まし=QT

「どうして私が武芸の勝負をしてでも、お城の勤めをするのがいいと」

ʔumui-ee:, tarugani:=n wannin na: wakako:-ne:ran. muc-i kuri kutuwa-ine: ʔiteite-o:-ru

思う-NLZ.TOP (人名)=ADD 1SG.ADD もう 若くない もし これ.ACC 断る-CND 生きる-PROG-ADN

「思うのは、タルガニーも私ももう若くない。もしこれを断れば生きている」

ʔe:da, ʔugueikuteitumi su-ru kuto: nar-an hadzi.mata duei=nu jueimi nasaki=ni
 間 お城勤め する-ADN 事.TOP POT-NEG.ADN INFR また 友達=GEN よしみ 情け=DAT
 「間、お城勤めをする事はできないだろう。また友達のよしみ情けに」

çik-assatt-i ʔukutuwai ugam-i:ne:, kunu hanace: tacikani bitei=ŋkai mutte-i ʔik-ari:n
 引く-PASS-SEQ お断り 拜む-CND この 話.TOP 確かに 別=DAT 持つ-SEQ 行く-PASS
 「引かされてお断りすれば、この話は確実によそに持って行かれる。」

ʔan na-ine: ʔitei=madi=n tatukuru=nu teine:=ja çinsu: s-an=de:naran. ja-gutu kunu
 そう なる-CND いつ=LIM=ADD 二所=GEN 家族=TOP 貧乏 する-NEG=OBLG COP-CSL この
 「そうならばいつまでもふたつの家族は貧乏しなければならない。だからこの」

teiwa: tai budzi:=nu su:bu wakate-i, ta: jat-i=n teui ʔugueikuteitumi ugamu-ee:
 際.TOP 二人 武芸=GEN 勝負.ACC 分つ-SEQ 誰 COP-SEQ=ADD 二人 お城勤め する-NLZ.TOP
 「際はふたり武芸の勝負をして、誰かひとりでもお城勤めするのが

maei=ndi ʔumuin

まし=QT 思う

「いいと思う。」(芝居, 844) (用例 405 と同文)

3.11.8 ee:sa:maei (したらいい) の文

ee:maei または sa:maei の文は、疑い文にあらわれて、話し手の思考途中の〈疑い〉を表す。

475) [民話。中国から来た坊さんがお土産に弥勒を持ってきたが...]

mirukujugaɸu:=nu ʔunige: su-ru miruku ja-eiga, ma:=ŋkai kadzat-ar-a:maei ja=gaja:
 豊年=GEN お願い.ACC する-ADN 弥勒 COP-ADVRS どこ=DAT 飾る-PST-CND 良い COP=DUB
 「豊年のお願いをする弥勒だが、どこに飾ったらよいだろうか。」(那民, 123)

476) [民話。警備の武士たちをやっつけて女を手に入れようと企みあれこれ考える男のつぶやき]

du:teui=ei=ja (中略)uri ɸurubasu-ru kuto: tea:ein nar-an-eiga, kure: teangutu:
 ひとり=INST=TOP これ.ACC 滅ばす-ADN 事.TOP どうしても POT-NEG-ADVRS これ.TOP どのように
s-ar-a:maei ja=gaja:

する-PST-CND まし COP=DUB

「一人ではこれ(武士達)をやっつける事はできないが、これはどのようにしたらよいだろうか。」(昔話, 100)

477) [消費税増税で苦しむ人々についてのニュース。商売人が意見を述べている]

saki=nu jaciui su-ru mateija=tu=nu ʔuisu:bu: ee-i ʔika-n=dare:naran-ai
 酒=GEN 安売り する-ADN 店=COM=GEN 売り勝負 する-SEQ 行く-NEG=OBLG-SEQ

「酒の安売りするお店との販売競争をして行かなければならないし」

na: tea: s-ar-e:maei ja=gaja:=ndi ʔite-i eian s-o:n

もう どう する-PST-CND よい COP=DUB=QT 言う-SEQ 思案 する-PROG

「もうどうすればよいかなどと言って思案している。」(ニュ, 118) (用例 380 と同文)

3.11.9 ee:aimun (すればいい) の文

ee:aimun は、ほぼ「すればいい」に相当する形式である。事象の実現が望ましいという判断を述べる。

478) muru ʔja: ʔir-e: eimu-ru-munnu. kannadzi wa:=madi:

全部 2SG 言う-CND 済む-ADN-FN 必ず 1SG=LIM.EQ

「全部お前が言えばいいものを。必ず俺までか?(=いつも俺まで巻き込むんだから...)」(芝居, 958)

事象がなかなか実現しない状況なら、その事象の実現を待ち望むという意味あいが生じる。

479) he:ku ke:t-i ku:r-e: eimu-ru-munnu

早く 帰る-SEQ 来る-CND 済む-ADN-FN

「早く帰って来ればいいのに…」(芝居, 900)

事象がすでに過ぎ去った過去の事象であるならば、〈後悔〉といった意味あいを表す。

480) A: wannin ?ik-e:, eimut-e:=saja:=tai

1SG.ADD 行く-CND 済む-RES=SFP=POL.F

「私も行けば、よかったですわねえ。」

B: ?ansugutu. ?ja:=n so:t-i kur-e:=ja:=n?i ?i:-ta=sa

INTJ 2SG=ADD 連れる-SEQ 来る-CND=SFP=QT 言う-PST3.DIREV=SFP

「そうなんだよ。お前も連れて来ればよかったのにと言っていたよ。」(日放, 311)

補充質問文にあらわれて、どのような事象の実現が望ましいか聞き手に尋ねる文となる。真偽質問文の用例は見つけることができなかった。

481) [民話。登場人物の台詞部分だけを抜粋]

A: ?undzo: kuma=nakai nagau i:ne:, de:dzi nai-kutu cingir-i

2SG.HON.TOP ここ=LOC 長居 する-CND 大変な事 なる-CSL 逃げる-IMP1

「貴方はここに長居したら、大変な事になるから逃げろ。」

B: ?anee: wanne: ma:=kai cingir-e: eimu=ga

CNJ 1SG.TOP どこ=ALL 逃げる-CND 済む=WHQ

「それでは、私はどこへ逃げればいいのか？」(昔話, 60)

3.12 許可・許容文

3.12.1 ei(n) eimun (して(も)いい)の文

動詞の連用形(第二中止形、いわゆるテ形)にとりたて助辞 n(も)が付き(付かない場合もある)、さらに eimun が後接した ei(n) eimun の文は、事象の実現の〈許可・許容〉を表す。

主語が一人称

一人称を主語にした ei(n) eimun の文は、話し手自身の動作あるいは事象の実現に対する〈許容〉を表す。

482) [民話。登場人物の台詞部分だけを抜粋。お腹の中の赤ちゃんの声がしてこう言う]

A: ?aja:=sai. wa:=ga ?umari:-ne: ?undzu=ga nutse: ne:j-abiran-eiga, teangutu s-abi:=gaja:

母.CH=POL 1SG=NOM 生まれる-CND 2SG.HON=GEN 命.TOP ない-POL-ADVRS どのように する-POL=WHQ

「母上。私が生まれたら貴方の命はありませんが、どのようにいたしましょうか。」

B: wanne: tea: nat-i=n eimu-kutu, ?ja:=ga genki=ni ?umari:-ru eidzi=ru=n jar-e: jutasan

1SG.TOP どう なる-SEQ=ADD 済む-CSL 2SG=NOM 元気=DAT 生まれる-ADN FN=FOC=ADD COP-CND よい

「私はどうなってもいいから、お前が元気に生まれるのであればいい。」(昔話, 83)

主語が二人称

二人称を主語にする場合は、聞き手の未実現の動作に対する〈許容〉あるいは〈許可〉を表す。

483) [畑で採れたヤマイモ¹⁹⁰を友人に配ったが困惑気に尋ねる]

A: ?ure: t̄ea: e-i kamu=ga

これ.TOP どう する-SEQ 食べる=WHQ

「これはどうやって食べるのか？」

B: ka: n:t̄e-a:ni nira-wa=n taeira-wa=n mata ?agit-i=n eimu-i, t̄ea:e-i kad-i=n eimu=sa

皮.ACC 剥く-SEQ 煮る-CND=ADD 炒める-CND=ADD また 揚げる-SEQ=ADD 済む-INF どうする-SEQ 食べる-SEQ=ADD 済む=SFP

「皮を剥いて、煮ても炒めても、また揚げてもよし、どんな食べ方でもいいよ。」

(語遊「チャーシン」2011/4/10, p. 18)

484) nind̄zo: t̄eui=n tai=n ?uφusa-ee: maei ja-gutu, nind̄zu=ηkai kuba:t-i eimu-eiga

人数.TOP 一人=ADD 二人=ADD 多い-NLZ.TOP まし COP-CSL 人数=DAT 加える-SEQ 済む-ADVRS

「人数は一人二人と多い方がいいから、人数に加えてもいいけど」

ja-eiga, du:φummo:=ja su-na=jo:ja:

COP-ADVRS 自分勝手=TOP する-PROH=SFP

「だけど、自分勝手はするなよな。」(芝居 2, 1162)

485) wa=ga maki:ne:, (中略) ?ja:=ga su-ru gutu s-att-i eimun

1SG=NOM 負ける-CND 2SG=NOM する-ADN ように する-PASS-SEQ 済む

「俺が負けたら、お前の勝手にすればよい(lit. お前がするようにされてよい)。」(昔話, 108)

運動性のある名詞に具格の **eei**(で)が付き、さらに **eimun** が後接する場合も、その動作に対する〈許可・許容〉を表す。

486) sui ?ut̄ei=ru ja-kutu, tund̄ziφe:d̄zi: ee-i eimu=sa

首里 内=FOC COP-CSL ちょっとした外出着 する-SEQ 済む=SFP

「首里内だから、ちょっとカジュアルな着こなしでいいよ。」(音声「トウンジフェージャー」)

動詞に名詞化の **ei** と **ja** が融合した形である **ee:**が付き、**eimun** が後接した用例も、〈許可・許容〉を表している。動作をとりたてて、対比する場合に用いられる。

487) ?acibu-ee: eimu-eiga, tu:sa=kai jama=kai=ja ?iku-na=jo:ja:¹⁹¹

遊ぶ-NLZ.TOP 良い-ADVRS 遠く=ALL 山=ALL=TOP 行く-PROH=SFP

「遊ぶのはいいが、遠くへ山へは行くなよな。」(那民, 131)

3.12.2 命令形(しろ)の文

命令形を述語にもつ文が〈許可〉を表すのは、さきに聞き手側(動作主体)から動作の実行についての意志が示されていて、それに対して命令文という形で返答する場合である。例えば、次の用例が

¹⁹⁰ 「南方系の沖縄のヤマイモは、巨大で黒っぽい。ジネンジョと違ってグロテスクに見える」(語遊「チャーシン」2011/4/10, p. 18)。

¹⁹¹ 原文は「行(い)ちゅなよーやー」であったが、内容に合うように筆者が修正した。

もっとも典型的な例として挙げられる。

- 12') A: ?ai da:na:, juntu=ni mufeik^wa:tt-i, ?ukurit-i ne:-ibiran=sa wanne: guburi: s-abir-a=u:=sai
INTJ INTJ おしゃべり=DAT 夢中になる-SEQ 遅れる-SEQ CPL-POL=SFP 1SG.TOP ご無礼 する-POL-INT=SFP=POL
「あっ、ほら、おしゃべりに夢中になって、遅くなってしまいました。私は失礼します。」
- B: to:, ?ance: ?isudz-i ?ik-e: φiteitumit-i guburi: nat-o:=sa
INTJ CNJ 急ぐ-SEQ 行く-IMP2 引き止める-SEQ ご無礼 なる-PROG=SFP
「そう、それじゃ急いで行け。引きとめてごめんよ。」(実践, 14) (用例 60 および 69 と一部重複)

〈許可〉の文は、話し手の関与（意向や希望の有無）という観点から、聞き手の行為の実行を許可したり、承認したりする機能をもつ（高木, 2009, p. 109, 村上, 1993, p. 78）。つまり、さきに聞き手側（動作主体）から行為の実行についての意志が示されていて、それに対して命令文という形で返答することで〈許可・承認〉という意味あいを付け加えている。首里方言の命令形には, *ee*:形式, *eijo*:形式等があるが, *eijo*:形式やその尊敬形である *eimiso:rijo*:形式の使用例は見つからず, *ee*:形式やその尊敬形である *eimiso:re*:等が用いられやすい。尚, 聞き手の行為の実行の意志を表す文を波線で示す。

3.12.2.1 ee:形式の〈許可〉

上に挙げた用例のような *ee*:命令形式を用いた〈許可〉を表す文がよく用いられる。次の用例は、家の前まで訪ねて来て、「ごめんください」と挨拶をするという一連の行動自体が「家に入れてほしい」という話し手の意志を表している。

- 488) A: juerij-abit-an
参る-POL-PST
「ごめんください¹⁹²。」
- B: te-e:=saja:. ?ir-e:
来る-RES=SFP 入る-IMP2
「来たな。入れ。」
- A: ?u:. eidu:gaφu:
「はい。ありがとうございます。」(方談 10, 255) (用例 15 と重複)

また、次のような用例は、「～なら～しろ」のようなフレーズを伴って、放任的な〈許可〉あるいは許可的な〈命令〉（〈命令－許可〉）を表す。行為の実行に関しては、聞き手の意志に委ねられていて、話し手は関与しないという態度を示している。尚、「～なら」の部分には *a*:条件形が用いられる¹⁹³。条件節の部分に波線で示す。

- 489) A: na:, eimu=sa. ?ja:=ga tea: nara-wa=n wa:=ga eitte-o:m=i. ?itei-busa-ra: φe:ku na: ?ik-e:
もう 済む=SFP 2SG=NOM どう なる-CND=ADD 1SG=NOM 知る-PROG=YNQ 行く-DES-CND 早く もう 行く-IMP2
「もう、いい。お前がどうなろうが私が知ったもんか。行きたかったら早くもう行け。」
- ja-eiga=jo:, ?antteu=tu wan sata: su-na=jo:
COP-ADVR=IP あの人=COM 1SG.GEN 噂.TOP する-PROH=IP

¹⁹² ごめんください, は意識である。

¹⁹³ 首里方言の条件形には終わりが *e*:になるものと, *a*:になるものの二種類ある。

「だけど、あの人と私の話はするなよ。」

B: nabitu:=jo:, nama=ne: wakat-a=sa. ?ja:=ja ta:ta=nu tamme:=tu nu:gana jaŋ=ja:
(人名)=IP 今=DAT.TOP わかる-PST=SFP 2SG=TOP (人名)=GEN お爺=COM 何か COP=SFP

「ナビトゥー、今わかった。お前は多和田のおじいと何かあるんだな。」(実践, 34) (用例 161 と重複)

490) [動悸を訴える受験者 A と試験官 B の会話。いつから動悸しているのか尋ねる B に対して A が返答する]

A: ?undzu=ga ?itte-i mence:-ei=tu madzo:ŋ=kara
2SG.HON=NOM 入る-SEQ 来る.HON-NLZ=COM 同時=ABL

「貴方が入って来たと同時から。」

B: ?ance: eiken=nu ?uwat-i, waŋ=ga kuma=kara ?ndzit-i ?ik-e: no:i=sa
CNJ 試験=NOM 終わる-SEQ 1SG=NOM ここ=ABL 出る-SEQ 行く-CND 治る=SFP

「それじゃあ試験が終わって、俺がここから出て行けば治るさ。」

A: ja-ibi:=gaja:

COP-POL=DUB

「そうですかねえ。」

B: ja=sa. ?ar-an=di ?umui-ra: ja:=kai ?ik-e:

COP=SFP COP-NEG=QT 思う-CND 家=ALL 行く-IMP2

「そう。じゃないと思うなら家に行け。」

A: eikeno: tea: na-ibi:=gaja:

試験.TOP どう なる-POL=DUB

「試験はどうなりますかねえ。」(実践, 46) (用例 139 と一部重複)

3.12.2.2 eimiso:re:形式の〈許可—依頼〉

次の用例は、お年寄りの患者と看護師の会話である。看護師が自分よりも目上のお年寄りの患者に対して、*eimiso:re:*形式¹⁹⁴を伴った文を用いている。しかし、ここで「熱を測らせる」あるいは「熱を測るのを許可する」のは話し手ではなく、聞き手である。*nitei hakarasun* (熱を測らせる) や *na:ku turasun* (脈をとらせる) 等の使役表現が用いられることで、話し手がこれから行う動作の〈許可〉を聞き手に〈依頼〉するという意味あいに変化する。全く別の文に変わるというわけではなく、〈許可〉という意味あいを土台に使役という文法的な手続きを経て、〈依頼〉という意味あいが実現される。そして、〈許可—依頼〉の文では、聞き手の意志がさきに表示されてなくてもよい(用例では聞き手がお年寄りのため *eimiso:re:*形式が用いられているが、*eimiso:re:*形式に限らないだろう)。

491) [お年寄りの患者 A と看護師 B の会話]

A: teiburu=nu ?iŋig^wa: jamu=ssa:

頭=NOM 少し 痛む=SFP

「頭が少し痛むなあ。」

B: ?ance: nitei hakar-aci-miso:r-e: (熱を測る) nitce: ?ansuka: ?ar-aŋ-kutu, na:ku tur-aci-miso:r-e:
CNJ 熱.ACC 測る-CAUS-HON-IMP2 熱.TOP それ程 COP-NEG-CSL 脈.ACC とる-CAUS-HON-IMP2

「それでは熱を測らせてください。熱はそれ程でもないの、脈をとらせてください¹⁹⁵。」(暮らし, 86)

¹⁹⁴ sun(する)に尊敬を表す *mieen* の命令形 *miso:re:*が付いた形である *eimiso:re:*は、*ee:*命令形式の尊敬形である。

¹⁹⁵ 「ください」という訳をあてているが、意識であり、依頼文ではない。直訳すると、それぞれ「測らせなされ」「とらせなされ」である。

3.12.2.3 eimice:bire形式の〈許可〉

次の用例では、家を訪ねてきた伯父に対して、門の近くにいた姪が家に入るよう〈許可〉している。伯父は親雲上身分のため、特別に丁寧な言葉遣いが必要なのであろう、eimice:bire形式¹⁹⁶が用いられている。

492) [伯父が怒りをあらわにしてあらわれる。マカトゥーはBの母親(会話ではCのこと)]

A: kuma, ʔitta: makatu:=ja ur-an=i

INTJ 2PL.GEN (人名)=TOP いる-NEG=YNQ

「おい、お前の母親のマカトゥーはいないか。」

B: tamme:=tai, ʔi-mice:-bir-e:

父=POL.F 入る-HON-POL-IMP2

「伯父様、お入りください。」

C: ʔunteu:=tai, mence:-bi:-ti:

伯父=POL.F 来る.HON-POL-PST.YNQ

「伯父様、いらっしゃったのですか。」(芝居, 554)

次の用例も、行為の実行がさきに聞き手から示されているため〈許可〉の文である。次の用例をみるとやはり ee:形式が〈許可〉の文で用いられやすいことを示している。行為要求文のときには、eimice:birijo:形式が用いられているのと対照的だからである(波線部)。

493) [那覇に仕事で行くと言う夫Aと妻Bの会話。何時に帰ってくるのか尋ねる妻B]

A: denki=nu ju:irie: ke:t-i teu:n

電気=GEN 夕暮れ時 帰る-SEQ 来る

「電気の着く夕暮れ時に帰ってくる。」

B: ʔance: bo:dza: i:rimun ko:t-i mence:-bir-i=jo: ʔiteiban kica: ma:ei s-o:-ibi:-kutu

CNJ 子供.GEN 玩具.ACC 買う-SEQ 来る.HON-POL-IMP1=SFP 一番 汽車 まし する-PROG-POL-CSL

「それでは子供の玩具を買っていらっしやい。一番汽車が好きですから。」

A: ʔn:, ʔn:

「うん、うん。」

B: ʔance: he:sa-ru ʔutei=ni ke:t-i mence:-bir-i=jo:ja:

CNJ 早い-ADN 内=DAT 帰る-SEQ 来る.HON-POL-IMP1=SFP

「それでは早い内に帰っていらっしやいね。」

A: ʔn:, ʔn:

「うん、うん。」

B: to:, ʔance: ʔndzi-mice:-bir-e:

INTJ CNJ 出る-HON-POL-IMP2

「はい、それではいつてらっしやいませ。」

A: ʔo:, ʔo: ʔance ʔndz-i k-u:

うん うん CNJ 行く-SEQ 来る-INT

「うん、うん。それじゃ行ってくる(lit. 行って来よう)。」(日放, 281)

3.12.2.4 eimice:biri形式の〈許可〉

eimice:biri形式の〈許可〉の文が一例だけみつかった。したがって、eijo:形式や eimiso:rijo:形式の〈許

¹⁹⁶ eimiso:re:に丁寧さを表す-ibiが付いた eimice:bire:形式は、eimiso:re:よりも、もう一段階敬度の高い表現である。

可) の文も理論上ありえると思われるため、用例の収集は今後の課題である。

494) [王様の臣下 A とお姫様のお供 B とお姫様 C の会話。B と C が王様の見舞いにやって来る]

A: ta: ja-ibi:=ga

誰 COP-POL=WHQ

「誰ですか!?(怒った調子で)」

B: niraikanai=nu kuni=kara gudziraosama=nu ?umime: ei:-ga jucirij-abit-an

(地名)=GEN 国=ABL (人名)=GEN お見舞い する-PUR 参る-POL-PST

「ニライカナイの国からグジラ王様のお見舞いをしに参りました。」

A: kure: na: guburi: na-ibit-i. eidigaφu:na kutu de:biru. ?i-mice:-bir-i

これ.TOP もう ご無礼 なる-POL-SEQ ありがたい 事 COP3.POL 入る-HON-POL-IMP1

「これはもう失礼いたしまして。ありがたい事でございます。お入りなさいませ。」

C: gudziraosama=nu ?ambe:=ja tca: ja-mice:-bi:=ga

(人名)=GEN 按配=TOP どう COP-HON-POL=WHQ

「グジラ王様の調子はいかががでしょうか。」(猿, 7)

次の用例は、〈許可〉というより、相手の要求に対して〈承諾〉するような文である。〈許可〉の文では、要求よりさきに相手(動作主体)の方からその行為を実行する意志が示されているが、〈承諾〉の文では、逆に、要求がさきにあり、要求内容と同等の内容を動作主体が繰り返すことで〈承諾〉という意味あいを付け加えている。

495) A: kunu warabi=nu φuduφudu nat-i (...) ?ujaku=nu nanui su-ru tciwa=nu su:ku=nu

この 子=NOM 年頃 なる-SEQ 親子=GEN 名乗り.ACC する 時=GEN 証拠=GEN

「この子が大きくなって親子の名乗りをする時の証拠の」

eina=tu ee-i kuridake: mutte-i ?ndz-i turae-i

品=COM する-SEQ これ=だけ.TOP 持つ-SEQ 行く-SEQ BEN-IMP1

「品としてこれだけは持って行ってくれ。」

B: kunu kugatanadake: katami=nu eina=tu ee-i ?utabi-mice:-bir-i

この 小刀=だけ.TOP 形見=GEN 品=COM する-SEQ 貰う.HMB-HON-POL-IMP1

「この小刀だけは形見の品としてちょうだいませ。」(芝居, 630)

3.13 不必要の文

3.13.1 santin eimun (しなくてもいい) の文

一人称を主語にした *santin eimun* の文は、文に差し込まれる話し手の動作が〈不必要〉であることを述べる。そのような〈不必要〉という話し手の判断は、話し手の自由意志によるところの話し手の決断であり発話時における判断である。

496) A: nama=uto:ti ?igun=un so:k-e:=ça:

今=LOC 遺言.ACC しておく-IMP2=PEJ

「今で遺言でもしておくがよい。」

B: ?ut-att-i einu-ra: dziçi-ne:mun. ?igun=un s-ant-i=n eimu=sa=na:

打つ-PASS-SEQ 死ぬ-CND 仕方がない 遺言=ADD する-NEG-SEQ=ADD 済む=SFP=POL

「打たれて死ぬのなら仕方がない。遺言なんかしなくてもいいですよ。」(芝居, 996)

497) wa:=ga ma:ei:-ne: (中略) bano: s-ant-i=n eimun=do:

1SG=NOM 亡くなる-CND (墓)番.TOP する-NEG-SEQ=ADD 済む=SFP

「俺が亡くなったら、墓番はしなくてもいいよ。」(昔話, 258)

あるいは、《対象的な内容》が話し手に直接関わる事象を述べているとき、その事象の実現が〈不必要〉であることを述べる。

498) [芝居。勝負して勝った方がお城勤めができると言われるが、親友同士なのでなるべくは争いたくないので、わざと負けると言う話し手]

?an=du=n jar-e:=jo:. kundu=nu su:bo:=jo:. wa=gā maki:=sa. ei:t-i ?arasur-ant-i=n

そう=FOC=ADD COP-CND=IP 今度=GEN 勝負=IP 1SG=NOM 負ける=SFP 強いる-SEQ 争う-NEG-SEQ=ADD

eimi=du su-ru

済む=FOC する-ADN

「そうであるならばだな。今度の勝負はな。俺が負けるよ。無理して闘わなくもいいんだ。」(芝居, 854-856)

499) [民話。登場人物の台詞部分だけを抜粋。山賊に襲われて]

A: d̥zin tur-ae-i

金.ACC 取る-CAUS-IMP1

「金を出せ。」

B: d̥zino: tur-as-an

金.TOP 取る-CAUS-NEG

「お金は出さん。」

A: ?an=da:r-a: t̥ein had̥zir-i

そう=FOC.ある-CND 着物.ACC 脱ぐ-IMP1

「そうならば、着物を脱げ。」

B: t̥einun had̥zir-an

着物.ADD 脱ぐ-NEG

「着物も脱がん。」

A: ?an=du=n jar-a: nut̥ee: ne:n-eiga

そう=FOC=ADD COP-CND 命.TOP ない-ADVRS

「そうならば、命はないが。」

B: ?a: nut̥ee: ne:nt-i=n eimu-kutu ?unna mun tur-asu-ru kuto: nar-an

INTJ 命.TOP ない-SEQ=ADD 済む-CSL そんな物 取る-CAUS-ADN 事.TOP POT-NEG

「あー、命はなくてもいいから、そのような物をあげるわけにはいきません。」(昔話, 98)

二人称を動作主体とした *santin eimun* の文は、聞き手の動作に対して《働きかける》という意味あいが付け加わって、聞き手の動作を制御したり、免除したりする働きをもつ。

5') φisamant̥ee: s-ant-i=n eimu=sa. φirakunar-e:

正座 する-NEG-SEQ=ADD 済む=SFP 足を崩す-IMP2

「正座しなくてもいいよ。足を楽にしなさい。」(音声「フィラクナユン」)

500) ?ansukana: ?acigak-ant-i=n eimu=sa. nanjkuru nai=sa

それほど やきもきする-NEG-SEQ=ADD 済む=SFP ひとりでに なる=SFP

「それほど、やきもきしないでもいいよ。なんとかなるさ。」(語遊「ナンクルミー」2009/9/13, p. 13)

501) [商売人だと嘘を言ってからかう男 B と本物の商売人である女 A とのかけあい。喜劇]

A: ʔundzo: nu:gana ʔui-ee: ne:-miso:r-an=i
 2SG.HON.TOP 何か 売る-NLZ.TOP ない-HON-NEG=YNQ
 「貴方は何か売り物はございませんの？」

B: ʔan=do: ko:t-i kʷi:m=i
 ある=SFP.ASS 買う-SEQ BEN=YNQ
 「あるぞ。買ってくれるか？」

A: muno: n:te-i=kara=du ko:-ibi:-ru
 物.TOP 見る-SEQ=ABL=FOC 買う-POL-ADN
 「物は見ないと買えません。」

B: wannin ʔan=do: de:=ja har-a:nt-i=n eimun=do: ko:t-i kʷir-e:
 1SG.ADD ある=SFP.ASS 代=TOP 払う-NEG-SEQ=ADD 済む=SFP.ASS 買う-SEQ BEN-IMP2
 「俺もちゃんとあるぞ。お金は払わなくてもいいぞ。買ってくれ。」

A: dzin harat-i ko:i-ei=du ʔateine: ja-ibi:-ru
 金.ACC 払う-SEQ 買う-NLZ=FOC 商売 COP-POL-ADN
 「お金を払って買うのが商売というものです。」(実践, 39)

502) [上の続き。商品を見せてくれと女が頼むと、男は目の前にあると言う。女が見えないので、指差しをして見せてくれと頼むが…]

A: to:, ʔanee: ʔi:binutei ee-i micit-i kʷi-miso:r-e:¹⁹⁷
 INTJ CNJ 指差し する-SEQ 見せる-SEQ BEN-HON-IMP2
 「そう、それじゃあ指で差しを見せて下さいな。」

B: to:to:, na: eimu=sa. mi:r-an mun=nu=n ko:r-ari:m=i. ko:r-ant-i=n eimu=sa. na: ʔik-e:
 INTJ もう 済む=SFP 見える-NEG 物=NOM=ADD 買う-POT-YNQ 買う-NEG-SEQ=ADD 済む=SFP もう 行く-IMP2
 「はいはい、もう結構。見えないものなんか買えるか！買わなくても結構だ。さっさと行け。」(実践, 40)

503) [役人 B が村を視察している所に百姓達が薪を担いで何事もないかのようにやってくる。すると村長 A が慌てて百姓達に知らせる]

A: ʔane ʔane, gudze:ban ja-miee:-eiga. teikubo:rani, teikubo:rani
 INTJ INTJ 御在番 COP-HON-NASS INTJ INTJ
 「ほらほら、御在番様でいらっしゃるぜよ。控えないか、控えないか」

B: ʔanee: kaekumar-ant-i=n eimi=ru su-ru (後略)
 CNJ かしこまる-NEG-SEQ=ADD 済む=FOC する-ADN
 「そんなにかしこまらなくてもよいのだ。」(芝居, 536-538) (用例 331 と一部重複)

一人称と二人称文の混用例である。どちらの文も動作の不必要を述べることで、聞き手に対しての〈気遣い〉を示している。

504) [芝居。早朝から妻を起こしてしまったので]

tea:n num-ant-i=n eimu=sa, munu=n ʔateiras-ant-i=n eimun=di ʔite-i, cidzuru:
 茶=ADD 飲む-NEG-SEQ=ADD 済む=SFP 食事=ADD 温める-NEG-SEQ=ADD 済む=QT 言う-SEQ 冷めた
 「お茶も飲まなくていい、食事も温めなくていいと言って、冷めた」

to:ʔu=nu kasidzu:ei: ʔawatit-i ʔuteikʷaj-ai
 豆腐=GEN 粕雑炊.ACC 慌てる-SEQ 食らう-SEQ
 「豆腐の粕入り雑炊を慌ててかきこんで…」(芝居, 1020-1022)

¹⁹⁷ 原文では、miciti mimiso:re:とあるが、筆者が内容に合うように修正した。

eimun が過去形をとって、文の《対象的な内容》がポテンシャルな反事実的な判断を述べる場合、話し手の〈不満・後悔〉を表す。

- 6) [芝居。島流しにあった役人を夫にした女だが、あまりに女遊びがひどいので、母親が嘆く]
 eima=nu ne:tuke:tu=nu utu mut-e:, ?an e-e: ein|o:=ja s-ant-i=n eimut-a-ru-munnu
 島=GEN まずまず=GEN 夫.ACC 持つ-CND そう する-SEQ 心労=TOP する-NEG-SEQ=ADD 済む-PST-ADN-FN
 「島のまずまずの夫を持てば、こうして心労しなくてもよかったのに…」(芝居, 568)
- 505) [芝居。島流しにあった役人を夫にした女だが、あまりに女遊びがひどいので、母親が嘆く]
 su:, ?an e-i=made: teime: haric-ant-i=n eimut-a-ru-munnu
 父 そう する-SEQ=LIM.TOP 罪.TOP 晴れる-NEG-SEQ=ADD 済む-PST-ADN-FN
 「お父さん、そんなにしてまで罪を晴らさなくてもよかったのに…」(芝居, 1038)

主語を二人称にした不必要の文が否定質問であらわれると、不必要という判断を〈提案・アドバイス〉という形で差しだす文となる。働きかけは生じず、聞き手に動作の実行の選択を委ねる文となる。

- 506) A: kuri=kara wa:=ga d̥zid̥zo: teite-i n:d-e:ja:=ndi ?umuju-eiga, tẽa:=ga
 これ=ABL 1SG=NOM 事情.ACC 聞く-SEQ 見る-INT=QT 思う-ADVRS どう=WHQ
 「これから私が事情を聞いてみようと思うのだが、どうか。」
- B: du:=kara nanui ?nd̥zit-o:j-abi:-ru-munnu. d̥zid̥zo:=ja teik-ant-i=n eim-e: s-abir-an=i
 自分=ABL 名乗り 出る-PROG-POL-ADN-CSL 事情=TOP 聞く-NEG-SEQ=ADD 済む-INF.TOP する-POL-NEG=YNQ
 「自分から名乗り出て来ているのだから、事情は聞かなくてもいいんじゃないか。」(芝居, 788)
- 507) A: çi:ku nar-an ?utei=uti, kune:da=nu kad̥zi-g^{wa}:ni jand-att-a-ru tukuro:
 寒く なる-NEG-ADN 内=LOC こないだ=GEN 風-DIM=DAT 破る-PASS-PST-ADN 所.TOP
 「寒くならないうちに、こないだの風で破れた所を」
 no:ei-wa=r̃una-ibi:-eiga, d̥zin=nu sata ?umuju-ru gutu=n nar-an
 直す-CND=OBLG-POL-ADVRS お金=GEN 都合 思う-ADN ように=ADD なる-NEG
 「直さなくちゃいけません、お金の都合が思うようにいかず…」
- B: nu:=ga. to:buno: ?unumama s-o:t-i=n, de:d̥zi nai-ru munu=n ?ar-an
 何=WHQ 当分.TOP そのまま する-PROG-SEQ=ADD 大事 なる-ADN もの=ADD COP-NEG
 「何だ。当分はそのままにしている、大事に至るものでもないから。」
 ?ance:, ?awatit-e:¹⁹⁸ no:s-ant-i=n eime: s-an=i
 CNJ 慌てる-SEQ.TOP 直す-NEG-SEQ=ADD 済む-INF.TOP する-NEG=YNQ
 「だから、急いで直さなくてもいいんじゃない？」(芝居, 892-894)

3.13.2 suce: ?aran (するほどでもない) の文

suce: ?aran の文は、〈不必要〉を表す文となる。用例が一例だけ見つかった。

- 508) [民話。男が前妻の手をつかんで元気だったか？と声をかけたら、女がびっくりして今の夫に告げるところ、今の夫が裁判所に申し立てたが、男が歌を詠むと、役人が感動して気が変わり...]
 kure: eimanagaei su-ee: ?ar-an=saja:
 これ.TOP 島流し する-NLZ.TOP COP-NEG=SFP
 「これはもう島流しするほどではないよな。」(那民, 128)

¹⁹⁸ 原文は ?awate:だが、筆者が内容に合うように修正した。

3.14 不許可・非許容の文

3.14.1 ee: naran (してはいけない) の文

一人称を主語にした ee: naran の文は、まだ実現していない話し手の動作の〈非許容〉を表す。その事情が実現させないよう自分に言い聞かせたり、実現を危惧したりする文となる。

509) [一人息子が二十歳くらいになって、女遊びしたりして遊びほうけているのを見て母親が言う]

kure: kanc-e: nar-an-mun=na:

これ.TOP こうする-SEQ.TOP POT-NEG-CSL=YNQ2

「これはもうこのままではいけないな。」(那民, 148)

510) [市場へ買い物。聞き手に何をかうべきかを説明している]

madze: ku:bu=kara ko:-ibi:n. ku:bu=tu katcu:buce: waecit-e: na-ibir-an

まず.TOP 昆布=ABL 買う-POL 昆布=COM 鯉節.TOP 忘れる-SEQ.TOP なる-POL-NEG

「まずは昆布から買います。昆布と鯉節は忘れてはいけません。」

ja=sa. so:min ko:ri-wa=duja=sa. ?uri=kara jae:=n ko:ri-wa=dujaru-mun

COP=SFP 素麺.ACC 買う-CND=OBLG=SFP それ=ABL 野菜=ADD 買う-CND=OBLG-FN

「そうだ！素麺を買わなきゃね。それから野菜も買わなきゃいけないわね。」(入門, 137) (用例 419 と重複)

511) ?amma:, na:da=n hanaci=n ei:-busa:-eiga, ju: jukk^w-atc-e: nar-an-mun, ?ik-a=çi:

姉 まだ=ADD 話=ADD する-DES-ADVRS 夜 更ける-CAUS-SEQ.TOP POT-NEG-CSL 行く-INT=SFP

「姉さん、まだ話もしたいが、夜を更けさせてはいけないから、行くね。」(芝居, 680)

二人称を主語とした ee: naran の文は、事象がまだ実現していない場合、聞き手に対する《働きかけ》が生じて、これからの動作に対する〈不許可〉あるいは〈忠告・警告的な禁止〉を表す。しばしば、終助辞 do: を伴って、忠告・警告的な意味あいが強くなる。

512) ?ama=nu ja:=ja kume:kit-o:-mice:-kutu, du:=nu ja:=nu gutuei ?arappamuni: e-e: nar-an=do:

あそこ=GEN 家=TOP 節約する-PROG-HON-CSL 自分=GEN 家=GEN ように 乱暴な口利き する-SEQ.TOP POT-NEG=SFP

「あそこの家はしつけに厳しくいらっしやるから、自分の家のように乱暴な口利きをしてはいけないよ。」

(語遊「クメーキュン」2010/12/12, p. 13)

513) [昨日大雨が降って]

kumui ntē-a-kutu midzi=nu ?andit-o:t-an. ja-kutu tēu:=ja kumui=uto:ti ?acid-e: nar-an=do:

池.ACC 見る-PST-CSL 水=NOM 溢れる-PROG-PST COP-CSL 今日=TOP 池=LOC 遊ぶ-SEQ.TOP なる-NEG=SFP.ASS

「池を見たところ水が溢れていた。だから今日は池で遊んではいけないよ。」(入門, 76-77)

514) [実の母親は平民だと言って継母が息子に対して辛くあたる]

gakumun sun=di ?ite-i kange:t-e: nar-an=do: tatui ?iteigueiku=nu tēi:sudzi ?ukit-i

学問 する=QT 言う-SEQ 考える-SEQ.TOP POT-NEG=SFP 例え 池城(家名)=GEN 血筋.ACC 受ける-SEQ

「学問すると言って考えてはいけないよ！たとえ池城の血筋を受けて」

?mmarit-an-de: ?ite-i=n, ?ja:=ja çakueo:inagu=nu natē-e:-ru mun (後略)

生まれる-PST=QT.TOP 言う-SEQ=ADD 2SG=TOP 百姓女=NOM 産む-RES-ADN 者

「生まれたとは言っても、お前は百姓女が産んだ者…」(芝居, 602)

ei naran は、ee: naran のヴァリエーション (異形態) である。意味的な違いはない。

- 515) [出世したいが、義理を曲げてまでは出世したくないという弟に対して喝を入れる兄]
 ?ja:=ja nama kaŋge:=nu ?o:san-u. ju=nu naka eir-an. niŋd̄zino: nu:=ni teikit-i=n
 2SG=TOP 今 考え=NOM 青い-MIR 世=GEN 中 知る-NEG 人間.TOP 何=DAT つける-SEQ=ADD
 「お前はまだ考えが甘い。世の中を知らん。人間は何につけても」
 riecin su-ei ja=sa. kunnage: kunu naka=nu ?awari waeit-i nar-an=do:
 立身 する-NLZ COP=SFP こんなに長い この 中=GEN 衰れ 忘れる-SEQ POT=SFP
 「出世するべきだ。これまでの長い間の苦労を忘れていけないぞ。」(芝居, 910) (用例 460 と同文)

ein naran も ee: naran のヴァリエーションだろう。述語を n(も)でとりたててはいるが、〈非許可〉という意味あいには大きな違いはない。

- 516) A: ?ukurit-i=n nar-an-munnu tu:t-i n:d-a=na
 遅れる-SEQ=ADD POT-NEG-CSL 通る-SEQ 見る-HORT=SFP
 「遅れてもいけないから、もう行こうか。」
 B: t̄cu=ni n[-att-i=n nar-an-munnu, ?ja:=ja t̄cuφica sat̄ei nar-e:
 人=DAT 見る-PASS-SEQ=ADD POT-NEG-CSL 2SG=TOP 一足 先 なる-IMP2
 「人に見られてはいけないから、お前は一足先になれ。」(芝居, 858)

- 517) [身分のある男性との間に子供を産む女。子供を養子に出した後事情を察しお別れを言う]
 jusumi=ni kaganat-i=n na-ibir-an. wanne: kuri=eei ?uwakari s-abir-a
 他所目=DAT 関わる-SEQ=ADD POT-POL-NEG 1SG.TOP これ=INST お別れ する-POL-INT
 「人目についてもいけません。私はこれで失礼します。」(芝居, 644)

もちろん, do:がなくても〈忠告・警告〉を表せる。その場合、《働きかけ》は弱まり、強制力はなく、相手を諭すようなニュアンスの文になる。

- 518) [親友に裏切られた B。しかし、妹の結婚のために再度親友に勝負を挑む。A は B の母親]
 A: ti:=ja kakit-e: nar-an, tarugani:
 手=TOP かける-SEQ.TOP POT-NEG (人名)
 「手はかけてはいけない。タルガニー。」
 B: turad̄zu:, ?itta: ?atai=nu mun=kai ti: kaki-ne: ti:=nu teigari
 (人名) 2PL.GEN 位=GEN 者=ALL 手.ACC かける-CND 手=GEN 汚れ
 「トラジュー、お前のような者に手をかければ手が汚れる。」(芝居, 920)

先述の通り, de:が用いられると, do:の文と比べてだいぶ控えめな主張となる。

- 43') [昔は親友同士だった話し手と聞き手だが、試合に勝った話し手だけ身分が上になり]
 ?i:-buciko:-ne:n-eiga, muto: tage:=ni k^wit-a-i k^war-a-i s-a-ru naka
 言う-DES-ない-ADVRS 元.TOP 互い=DAT BEN-PST-INF 食う-PST-INF する-PST-ADN 仲
 「言いたくはないが、元は互いに何でも分け合ったりした仲」
 jat-i=n, nama: ?ja:=tu watta:=tu=ndi ?i-ee:, mibun=nu teigat-o:-gutu
 COP-SEQ=ADD 今.TOP 2SG=COM 1PL=COM=QT 言う-NLZ.TOP 身分=NOM 違う-PROG-CSL
 「であっても、今はお前と俺達と言うのは、身分が違っているから」
 duku kuma=kara haikaie-i ?at̄t̄e-e: nar-an=de:ja:
 あまり ここ=ABL 徘徊する-SEQ 歩く-SEQ.TOP POT-NEG=SFP

「あまりここを徘徊して歩いてはいけないよな…」(芝居, 890)

すでに起こっている事象を主語が二人称の *ee: naran* の文が差しだしている場合、〈不満・非難〉といった意味あいが付加わる。

519) [無職の男たちがちよっかいを出して、手伝いもせず邪魔ばかりするので]

?itta:=n ikiga ja-e: sum=i. ?ukit-o:t-i hana Φute-e: nar-an=do:. to: teibat-i
2PL=ADD 男 COP-INF.TOP する=YNQ 起きる-PROG-SEQ 鼻 吹く-SEQ.TOP POT-NEG=SFP.ASS INTJ 気張る-SEQ
「お前達これでも男なのか。起きていながら、いびきをかいてはいけないぞ。さあ、頑張って」
?umani:-ta: tigane: ee-i=ma:

姉さん-PL.GEN 手伝い.ACC する-SEQ=見る.IMP

「女達の手伝いをしてみる。」(実践, 37) (用例 267 と重複)

520) [若奥さん A とベテラン主婦 B の会話。B が自分の嫁の悪口を A に言うと]

A: ?aja:=tai. ?undzuna: jumi nasagata-e: na-ibir-an=do:=tai. ?angutu ja:mu^htea: jumi
姉=POL.F 2SG.HON.GEN 嫁 陰口を言う-SEQ.TOP POT-POL-NEG=SFP=POL.F あんな やりくり上手 嫁
ja-ibi:-ru-munnu
COP-POL-ADN-FN

「姉さん。自分の嫁の悪口を言っではいけませんよ。あんなにやりくり上手な嫁なんですよ。」

B: i:i. ?itta:=ga: ?ari=ga kundzo:=ja wakar-an. ?are:=jo: ?ippe: cimute^hinamun
いいえ 2PL=NOM.TOP 2SG=GEN 根性=TOP わかる-NEG 3SG.TOP=IP とても 意地悪

「いやいや。あなたにはあいつの根性の悪さはわからない。あいつはね、とても意地悪よ。」(実践, 17)

あるいは、次の用例のように、すでに起こっている、起こりかけている事象がこれ以上悪化しないように〈制止〉する文となる。

521) [父親が粗末にされて黙ってはおけない息子 B と事情のわからない息子をなだめる父親 A]

A: kamada:, sanda:, ?arasu:t-e: nar-an
(人名) (人名) 争う-SEQ.TOP POT-NEG

「カマダー、サンダー、争っではいけない。」

B: su:. nu:ndi-?ite-i na:=ja kunu mun-nutea:=ηkai janagutei s-ari:=ga
父 どうして 2SG.HON=TOP この 者-PL=DAT 悪口 する-PASS=WHQ

「父さん。どうして貴方はこの者達に悪口言われるのか？」(芝居, 810)

文の《対象的な内容》が何らかの規範にしばられた事象を差しだす場合、〈客観的非許容〉を表す。次の用例は、「人間は」等の一般人称を伴って、長年培ってきた知識や経験に基づく倫理的あるいは文化・慣習的な〈非許容〉を述べている。

522) nindzino: tteu=nu mitei=kara hadzirit-e: nar-an=do:, tarugani:

人間.TOP 人=GEN 道=ABL 外れる-SEQ.TOP POT-NEG=SFP (人名)

「人間は人の道から外れてはいけないぞ、タルガニー。」(芝居, 840)

523) [生き別れとなった父親 A と息子 B の再会シーン。昔会った女は実の母だと告げる A]

A: kunu dz̄i:φa: k^wit-a-ru inago:, makutu ?ja: nate-a-ru inagu=nu ?uja ja=sa
この 簪.ADD くれる-PST-ADN 女.TOP まこと 2SG.ACC 産む-PST-ADN 女=GEN 親 COP=SFP

「何を隠そう。この簪(かんざし)をくれた女は、実際にお前を産んだ母親だ。」

B: ?anu ?amma:=ga

あの 姉=NOM

「あの姉さんが…？」

A: ?n: kk^wa=ni ?mm-arit-i ?uja=nu ?undze: waeit-e: nar-an. kunu d̄zi:ɸa: su:ku=ni

うん 子=DAT 産む-PASS-SEQ 親=GEN 恩義.TOP 忘れる-SEQ.TOP POT-NEG この 簪.ACC 証拠=DAT

mutte-i ?ate=nu ?akiaki, (中略) ?amma: ?iteat-i k-u:

持つ-SEQ 明日=GEN 明け方 母 会う-SEQ 来る-IMP

「うん。子供に生まれて親の恩義を忘れてはいけない。この簪を証拠に持って行って、明日の明け方に母親に会って来なさい。」(芝居, 714)

3.14.2 kuto: naran (ことはできない) の文

kuto: naran の文は、一人称を主語にして、まだ実現していない話し手の動作に対する〈非許容〉を表す。二人称や三人称主語ではあらわれないか、あらわれにくい。

524) A: nu: jan. kunu warabi wan=niŋkai ɕiteitui-i k^wir-i=ndi=na:

何 COP この 子供.ACC 1SG=DAT 引き取る-SEQ BEN=QT=YNQ2

「何だって？この子供を俺に引き取ってくれどとな？」

B: ?an ja-ibi:n

そう COP-POL

「はい、そうです。」

A: kunu warabi nama ɕiteitui-ru kuto: nar-an

この 子供.ACC 今 引き取る-ADN 事.TOP POT-NEG

「この子供を今引き取ることはできない。」(芝居, 624)

525) masan[ɸu: matte-i k^wir-e: masan[ɸu: ?ja:=madi=n wan eiti?iteu-ru ba:=i teu:=nu kutu=nu

(人名) 待つ-SEQ BEN-IMP2 (人名) 2SG=LIM=ADD 1SG.ACC 捨て行く-ADN わけ=YNQ 今日=GEN 事=NOM

「マサンルー、待ってくれ。マサンルー。お前までも俺を捨てていくのか…今日の事が」

eikin=kai eiri:-ne: eikin=kara teira mutte-i ?atteu-ru kuto: nar-an-eiga. ?a: wanne: teā: su=ga

世間=ALL 知れる-CND 世間=ABL 顔 持つ-SEQ 歩く-ADN 事.TOP POT-NEG-ADVRS INTJ 1SG.TOP どう する=WHQ

「世間に知れたら、世間から顔向けできないが…。あー、どうすれば…」(芝居, 924)

526) watta: eiguto: su:ku su:mun du:i s-an=de:na-ibiraŋ-gutu kuri ?idzo: matteu-ru kuto:

1PL.GEN 仕事.TOP 証拠 証文 通り する-NEG=OBLG-POL-CSL これ 以上 待つ-ADN 事.TOP

na-ibir-an=saja: (用例 373 と重複)

POT-POL-NEG=SFP

「私達の仕事は、証拠・証文通りにしなければなりませんので、これ以上待つ事はできませんよ。」(芝居, 1052)

527) A: ?aka=nu tannin=nu ?ja: tumi:-ru kuto: nar-an

赤=GEN 他人=GEN 2SG.ACC 泊める-ADN 事.TOP POT-NEG

「赤の他人のお前を泊める事はできない。」

B: ?uridaki tanud-i=n teite-e: k^wi-nso:r-an=i

これだけ 頼む-SEQ=ADD 聞く-SEQ.TOP BEN-HON-NEG=YNQ

「これだけ頼んでも聞いては下さらないのか…」(芝居, 770-772)

528) [継母が自分に対して辛くあたることを告白する]

tatui ?iteiguciku=nu tei:sudzi ?ukit-i jat-i=n, ɕakuo:inagu=nu nate-e:-ru mun=uŋkai=ja

例え 池城(家名)=GEN 血筋.ACC 受ける-SEQ COP-SEQ=ADD 百姓女=NOM 産む-RES-ADB者=DAT=TOP

「たとえ池城(いちぐすく)の血筋を受けていても、百姓女が産んだ者には」

gakumun e-imi:-ru kuto: nar-an=li ?ite-i kan e-i ?asajusa dzinin=nu su-ru eigutu
 学問.ACC する-CAUS-ADN事.TOP POT-NEG=QT 言う-SEQ こう する-SEQ 朝夕 下男=NOM する-ADN 仕事.ACC
 「学問をさせる事はできないと言って、こうして朝夕、下男がする仕事を」

e-imir-att-o:j-abi:n
 する-CAUS-PASS-PROG-POL
 「させられています。」(芝居, 594)

3.14.3 可能動詞を用いた文

可能表現をモダリティの分野で扱う研究はまだ少ないが、可能表現を用いて話し手の判断や評価を表すことができるため、「可能」もモダリティという観点から分析する必要がある(宮崎, 2013; 蔣, 2010)。

例えば、次の二人称を主語にした可能文は、可能を表す述語が否定形をとり、聞き手に対して〈不許可・非許可〉という話し手の判断あるいは評価を述べる文となっている。

529) [民話。家を造るよう頼んだが、一週間しても道具ばかり磨いて造る様子がないので]

na: (中略) ?ja:=ga: nar-an. (中略) bitei=nu e:ku=ŋkai teukur-asu-kutu, ?ja:=ja na:
 FIL 2SG=NOM.TOP POT-NEG 別=GEN 大工=DAT 造る-CAUS-CSL 2SG=TOP FIL
 「もうお前ではだめだ。別の大工に造らせるから、お前はもう」
 kuma=kara ja:=kai ke:t-i ?ik-i
 ここ=ABL 家=ALL 帰る-SEQ 行く-IMP1
 「ここから家に帰りなさい。」(那民, 138)

主語を二人称とし、「～なら～できない」という否定的な可能表現を伴って、聞き手の未来の動作が不可能になる可能性を〈忠告・警告〉する文となる。その可能性は、話し手の〈評価的な判断〉である。do:を添えることで聞き手への《働きかけ》が強まり、忠告・警告的な意味合いが強くなる。

530) [仕事を怠けて遊んでいたら父に殴られて泣いている子どもに対して祖父が]

du:=nu eikutee: dippa s-an-ne:, muno: kam-ar-an=do:
 自分=GEN 仕事.TOP 立派 する-NEG-CND ご飯.TOP 食べる-POT-NEG=SFP.ASS
 「自分の仕事はちゃんとしないと、ご飯は食べられないよ。」(入門, 97)

また、受け身表現を伴った〈警告〉を表す意志文(「3.18.2.1 断定形 + 終助辞 do:の文」を参照)のように、ここでも「先行する条件節で述べられている内容が実現すれば、聞き手にとって不利益な事象が起こりえる」という警告文となる。つまり、条件節で述べられている内容(仕事をちゃんとしない)をしないようにしろ(仕事をちゃんとしろ)、という命令文として結果的に機能する。

評価のモダリティまとめ

本章では、話し手の〈評価的な判断〉を述べる文を評価のモダリティとして分類し、記述を行なった。分類・記述にあたって、本研究の特徴は、〈ただの評価〉を表す文を〈記述〉の文と区別して分類・記述したことである。評価文全体としては、まだまだ十分な記述とはいえないが、詳細な分類・分析を今後行うにあたって、以下の通り、評価文の全体的な特徴をとらえることができた。

一人称を主語にした評価文は、《聞き手めあて》が強く出ている文では、話し手の動作に対する《意志》や《まちのぞみ性》が前面化し、意志文に近い意味合いをもつようになる。二人称を主語にした

評価文は、《聞き手めあて》がある文において、動作の実行に対する聞き手への《働きかけ》が前面化し、命令文に近い意味あいをもつようになる。三人称を主語とする場合は、このような前面化の現象は特別みあたらず、第三者に対する話し手の評価なり判断なりをただ聞き手に伝える文となる。

ただし、このことは全体的な傾向であって、場面状況によっては、このような《意志性・まちのぞみ性・働きかけ》等の前面化はみられない場合もある。既実現・未実現あるいは非実現の事象なのか、話し手の自由意志で実現できる事象なのかどうか、主観的か客観的・規範的か等、さまざまな要素や場面状況が関わりあって、モダリティが変化している。

希求のモダリティ

3.15 希求文

希求のモダリティとは、ある事象の実現に対する話し手の〈願望〉や〈希望〉といった意味あいを表すモダリティである（以下、*busan* の文では〈願望〉それ以外では〈願い〉に統一する）。そのような文を希求文と呼ぶ。話し手の〈願望〉を聞き手に積極的に伝える場合と、〈つぶやき〉や〈心内発話〉のような独話的な文もある。

3.15.1 *busan* の文

busan は述語の連用形（第一中止形）に後接して、話し手の〈願望〉を表す。人称制限があり、主語が一人称の場合しかあらわれない。基本的には聞き手に積極的に伝える場合に用いられる。述語の客体は、はだか格（対格）をとる。

531) [民話。二人の娘のどちらかを嫁にやろうと言われた男のセリフ]

i:ka:gi=nu ?uttuwunai=ja wa:=ga tudzi ei:-busan

美人=GEN 妹=TOP 1SG=NOM 妻 する-DES

「美人の妹は私が妻にしたい。」（大沖 33, 81）

532) jattēi:=sai. wanne: makatu:=tu ni:bifei ei:-busa-ibi:n

兄=POL.M 1SG.TOP (人名)=COM 結婚 する-DES-POL

「兄さん。私はマカトゥーと結婚したいです。」（芝居, 910）

533) [身分が釣り合わないと思ってなかなか言い出せなかったが、結婚してくれとお願いをすると、女はその事は母親に伝えて下さいと言ったので]

?aja:me:=ne: ?aratamit-i guso:dan sun. ?unu me:=ni ?ja: kukuru teifei:-busan

母上=DAT.TOP 改める-SEQ ご相談 する その 前=DAT 2SG.GEN 心.ACC 聞く-DES

「母上には改めてご相談する。その前にお前の気持ちが聞きたい。」（芝居, 1090-1092）

534) [役人 A が村を視察している所に百姓達が薪を担いでやってくる。A は百姓達に優しく声をかける。B は村の百姓達。C は地元の役人で A の部下]

A: kuri=kara: dzo:no:mun karuku nate-i, ?itta:=ga raku nai-ru gutu

これ=ABL.TOP 上納物.ACC 軽く 成す-SEQ 2PL=NOM 楽 なる-ADN ように

「これからは上納物を軽くして、お前達が楽になるように」

kange:t-i turasu-gutu, teibat-i turac-i=jo:

考える-SEQ BEN-CSL 気張る-SEQ BEN-IMP1=SFP

「取り計らってやるから、頑張ってくれよ。」

B: do:rin jutaɛiku kanʒe:t-i ʔutabimice:-bir-i

どうか よろしく 考える-SEQ BEN.HON-POL-IMP1

「どうかよろしくお願い申し上げます。」

(百姓達は一礼して薪を持ち上げて立ち去ろうとする。それを手伝おうとする役人 A)

C: sari sari. ʔuppina:=nu gudʒe:ban=nu ɕakueo:=nu ɛigutu tigane: ɛi-mice:-ne:

INTJ.M INTJ.M これ程=GEN 御在番=NOM 百姓=GEN 仕事.ACC 手伝い する-HON-CND

「もしもし。これ程の御在番様が百姓の仕事を手伝いなさいますと」

ɸu:dʒe: ne:j-abir-an-ɛiga

風情.TOP ない-POL-NEG-ADVRS/(NASS)

「みっともありませんよ…」

A: ɛigutu=nu tigane: su-ɛi=nakai ɸudʒe: ne:ran=ditei ʔam=i. ɸunto:=ja wannin hataratei-busan

仕事=GEN 手伝い.ACC する-NLZ=LOC 風情.TOP ない=QT ある=YNQ 本当=TOP 1SG.ADD 働く-DES

「仕事の手伝いをするのにみっともないってあるか。本当は私も働きたい。」(芝居, 538) (用例 332 と重複)

busan が過去テンスをとるとき、過去の時点から発話時点までずっと事象の実現を待ち望んでいたことを表す。次の用例のように、事象がすでに実現済みであれば、実現の〈喜び〉や〈うれしさ〉も同時に伝える。

535) [生き別れになった母 A と子 B の再会。母は身分の低い百姓で、子は出世し役人となる]

A: ko:ni:, ɸeuraku na-miso:te-i ʔutuna na-miso:te-i

(人名) 綺麗に なる-HON-SEQ 大人 なる-HON-SEQ

「コーニー、綺麗になられて…大人になられて…」

B: ʔappa:, ɸiteai-busat-an. makutu ʔiteai-ru ɛitei=n ʔat-e:=saja:

母 会い-DES-PST まこと 会う-ADN 節=ADD ある-RES=SFP.MIR

「お母さん、会いたかった。本当に会える時が来たんだね…」(芝居, 608-610)

事象が実現できなかった場合は、残念に思う気持ちを伝えるとともに〈不満〉や〈悔しさ・後悔〉のような意味あいを表す。終助辞 de:は控えめに述べるというニュアンスを文に添える。

536) A: nama=nu ʔuta: nu:=ndi ʔi-ru ʔuta ja-ibi:=ga

今=GEN 歌.TOP 何=QT 言う-ADN 歌 COP-POL=WHQ

「今の歌は何と言う歌ですか。」

B: nu:=ndi ʔi-ru ʔuta=ga ja-ra wakar-an-ɛiga, wa:=ga warabi=nu dʒibun ʔubi:t-a-ru ʔuta

何=QT 言う-ADN 歌=FOC COP-DUB わかる-NEG-ADVRS 1SG=NOM 子供=GEN 時 覚える-PST-ADN 歌

「何と言う歌かわからないが、私が子供の時覚えた歌」

ja-gutu, kunu ʔuta=nu teimue: teitei-busat-a-gutu=ru jan=de:

COP-CSL この 歌=GEN 意味.ACC 聞く-DES-PST-CSL=FOC COP=SFP

「だから、この歌の意味を聞いたかったんだよ。」(芝居, 542) (用例 226 と同文, 283 と一部重複)

つぶやきや独り言で述べる場合、busa=ssa:のように、ssa:を後ろに付けて表す。

537) [民話。運玉義留という男を追って来たが、隠れられてしまって。目の前にいたら突き刺してやるのと言って、目の前にあった蓮の葉を突き刺すとちょうどそこに隠れていた運玉義留に当たってしまう]

ʔuntamagiru:-ta:=ga u-ru-mun jar-e:, kuŋgutuei nuŋci-busa=ssa:

(人名)-PL=NOM いる-ADN-FN COP-CND このように ぬく-DES=SFP.MON

「運玉義留たちがいたなら、こんな風にして突き刺してやりたいが…」(昔話, 121)

主語が二人称をとって、文末に質問形式を伴い、聞き手の〈願望〉を尋ねる質問文となる。

538) nu:=i: ʔja: ʔuɸu-ja:=ŋkai ʔi:-busam=i

何=YNQ 2SG 大-家=DAT 入る-DES=YNQ

「何だ？お前大きな家に住みたいのか？」(昔話, 176)

539) A: ʔja: k^wa, ʔja: mi:-busam=i

2SG.GEN 子 2SG 見る-DES=YNQ

「お前の子、お前は見たいのか？」

B: ʔu:, na: micit-i k^wi-miso:r-i

はい FIL 見せる-SEQ BEN-HON-IMP1

「はい、ぜひ見せて下さいませ。」(昔話, 239)

次のような文脈で、文の《対象的な内容》が聞き手にとって不利益を被るような内容を質問文で差し出す場合、話し手の聞き手に対する〈からかい・挑発〉あるいは〈脅迫〉となる(詳細は後述)。

540) A: ʔja:=n cini-busam=i

2SG=ADD 死ぬ-DES=YNQ

「お前も死にたいか？」

B: nuŋci ti:tee:

命 一つ.TOP

「命だけは…」(芝居, 974)

一人称以外の主語(主体)の〈願望〉を話し手が述べ伝える場合には、busa: jan あるいは busa: sun (busa: so:n) というかたちが用いられる。主語が一人称の文で用いられる場合は、「～したがる」または「～したそうだ」のような主語(話し手)が事象の実現を〈願望〉している状態にあることを表す。

541) A: ʔja:=ja tu:ŋci wan=ninŋkai nu:gana ʔi:-busa: s-o:ŋ=ja:

2SG=TOP ずっと 私=DAT 何か 言う-DES する-PROG=SFP

「お前はずっと俺に何か言いたそうにしているなあ。」

B: nu: wan=ga ʔundzu=ŋkai ʔi:-busa: s-abi:=ga

何.ACC 1SG=NOM 2SG.HON=DAT 言う-DES する-POL=WHQ

「何を私が貴方に言いたそうにしますか。」

wanne: ʔundzu=ga mama=du ja-ibi:=do:

1SG.TOP 2SG.HON=GEN まま=FOC COP-POL=SFP

「私は貴方に従順ですよ。」(実践, 29)

542) [兄 A と弟の会話。長男である兄は母親にとって実の子ではないため、弟に跡を継がせたがっているが、兄思いの弟は納得がいかない。それに対して兄 A が言う]

ta: jat-i=n du:=nu wata jam-ate-i nate-e:-ru kk^wa=du kanasa-ru. ʔaja:=ga ʔja:=ŋkai

誰 COP-SEQ=ADD 自分=GEN 腹.ACC 痛む-CAUS-SEQ 産む-RES-ADN 子=FOC 可愛い-ADN 母=NOM 2SG=DAT

「誰だって自分のお腹を痛めて産んだ子の方が可愛い。お母さんがお前に」

kunu ʔiʔeigʊeiku=nu ʔatu ʔeig-aei-busa su-ei=n nindzo: ja-gutu, wanne: ta:=n ʔuramir-an=do:
 この (家名)=GEN 跡.ACC 継ぐ-CAUS-DES する-NLZ=ADD 人情 COP-CSL 1SG.TOP 誰=ADD 恨む-NEG=SFP.ASS
 「この池城家の跡を継がせたがるのも人情だから、私は誰も恨まないよ。」(芝居, 604)

543) [運転試験場にて。お腹がすいたのでそばを食べて来てもいいかと問う B に対して厳しく対応する試験官 A]

A: kuma: ma:=ndi ʔumut-o:=ga. eikendzo:=du jan=do:ja:

ここ.TOP どこ=QT 思う-PROG=WHQ 試験場=FOC COP=SFP

「ここをどこだと思っているのか? 試験場だぞ!」

ʔja:=ga suba kʷat-o:-ru ʔe:ka, watta:=ja matteo:ʔeu-ru ba:=i. eikeno: ʔuwain=do:

2SG=NOM そば.ACC 食う-PROG-ADN 間 1PL=TOP 待っておく-ADN わけ=YNQ 試験.TOP 終わる=SFP

「お前が沖縄そばを食っている間、俺たちは待っておくってわけかい? 試験は終わってしまうよ。」

B: ja:san-u ʔucig-ar-an=du ʔa-ibi:n=de:=sai

ひもじい-CSL 防ぐ-POT-NEG=FOC ある-POL=SFP=POLM

「お腹がすいて我慢ができませんんですよ。」

A: ʔja:=ja ʔatama=ni ʔuti:-busa: ja=saja:

2SG=TOP 頭=DAT 落ちる-DES COP=SFP

「(さては)お前は最初から落ちるつもりだな(落ちたいんだな)。」(実践, 47)

3.15.2 評価形式を用いた〈願い〉

ce:naran の文の《対象的な内容》が話し手の意志ではどうすることもできない事象を差し出す場合、文は事象が実現しないしてほしいという話し手の〈願い〉を表す。

544) [夫がある男の恨みを買ひ、男の企みによって斬られてしまう。台詞は妻]

ta:ri:=tai. ʔei:=ja taecika=ni. nama: eicdz-e: na-ibir-an

父=POL.F 気=TOP 確か=DAT 今.TOP 死ぬ-SEQ.TOP POT-POL-NEG

「お父さん! お気を確かに。今死んでしまっはなりません。」(芝居, 650)

3.15.3 命令形を用いた〈願い〉

命令形を述語にもつ文の働きかける対象=動作主体が意志をもたない無情物の場合や、その対象に対して直接働きかけることが困難な場合、その文は《働きかけ》が意味をなさず、ただの話し手の〈願い〉あるいは〈祈り〉を表す文となる。

545) [粟国島の民話。欲しい物を何でも出してくれるという臼に塩を出してくれるようお願いしたが、塩が出るのが止まらなくなって]

kunu jana-ʔu:ce: tumar-e: ta:gana taecikit-i kʷi-miso:r-i. tumit-i kʷi-miso:r-i

この PEJ-臼.TOP 止まる-IMP2 誰か 助ける-SEQ BEN-HON-IMP1 止める-SEQ BEN-HON-IMP1

「このバカ臼は止まれ! 誰か助けて下さい! 止めて下さい!」(大沖, 86)

14') [沖縄で広く普及しているわらべ歌。首里で採集されたもの]

sakaja=nu midzi kʷat-i ku: kʷat-i ʔutir-i=jo: dzindzin. sagar-i=jo: dzindzin

酒屋=GEN 水.ACC 食う-SEQ 粉.ACC 食う-SEQ 落ちる-IMP1=SFP 蛍 下がる-IMP1=SFP 蛍

「酒屋の水を飲んで粉を食って落ちよ、蛍さん。下がれよ、蛍さん。」(童歌, 33)

546) [童歌。天から落ちて来る餅を食べて暮らしていたが、落ちてこなくなったという伝え話から]

ʔuʔu-muʔei jatu-muʔei ʔutabi-miso:r-i, ʔatto:me:

大-餅 大-餅 BEN.HON-HON-IMP1 お月様

「大きな大きなお餅を下さいます、お月様。」(童歌, 54)

547) [マブイ(魂)を込める儀式の祈りの言葉]

mabuja:, mabuja:, ʔu:t-i k-u:=jo:

魂 魂 追う-SEQ 来る-IMPI=SFP

「魂よ、魂よ、追って来なさい。」(音声「ウフメーヤトゥメー」)

3.15.4 依頼文による〈願い〉

命令文と同じく、述語に依頼形式をもつ文の《対象的な内容》が、話し手の意志によってどうすることもできない内容を差し出す場合、事象の実現に対する話し手の〈願い・祈り〉を表す。

548) [わらべ歌]

magi-ʔami jat-i=n, guma-ʔami jat-i=n, kirama=nu kuci=ndzi harit-i kʷi-nsor-i

大-雨 COP-SEQ=ADD 小-雨 COP-SEQ=ADD (地名)=GEN 後ろ=LOC 晴れる-SEQ BEN-HON-IMPI

「大雨だろうが、小雨だろうが、慶良間の後でやんで下され。」(童歌, 45)

3.15.5 意志・勧誘形を用いた〈願い〉

意志・勧誘形が無意志動詞であられると、話し手の〈願い〉を表す。つぶやきや独り言で用いられると、話し手自身に言い聞かせる文となり、聞き手を誘い込んで伝えるような対話的な場面では、〈説得・提案〉のような意味あいを表すようになる。

549) ʔe:u:=nu kutu muru waɛi-r-a

今日=GEN 事 全部 忘れる-INT

「今日の事全部忘れよう。」(調査, 2017/1/23)

3.16 からかい・挑発の文

命令文で聞き手にとって、その動作を実行することが不可能あるいは非常に困難な状況の場合か、聞き手の意志・意向にそぐわない内容の場合、聞き手に対する〈からかい〉や〈挑発〉を表す。

550) [わらべ歌]

na:mi na:mi wan wateakur-i

波 波 1SG.ACC くすぐる-IMPI

「波さん、波さん。僕をくすぐってみろ。」(童歌, 41)

551) [殺したのは正当防衛であって、本意ではない。正直に殺したことを告白したが、当時の事情を知らない息子達に罵倒されてしまう]

to:, watta: su: kurute-an=ne: ɛɛ-i tatte-i=ma:ni. nu:=ga tat-an ʔa-ru

INTJ 1PL.GEN 父 殺す-PST=ように する-SEQ 立って=みる.IMP 何=FOC 立つ-NEG ある-ADN

「さあ、俺の父さんを殺したときのように立ってみろ！どうした、なぜ立たない？！」(芝居, 798)

不必要を表す文で、聞き手の意志や意向にそぐわない内容を述べる場合、〈からかい〉や〈挑発〉を表す。

552) [喧嘩の場面か]

nu: ʔo:, na: ʔatca:=kara k-u:nt-i=n eimu=sa
 何 INTJ もう 明日=ABL 来る-NEG-SEQ=ADD 済む=SFP
 「何だよ！おお、もう明日から来なくても結構だ！」(不明)

このようなからかい・挑発の文は、二人称文であったとしても、もはや聞き手に働きかける文とは言えないだろう。どちらかと言えば、反語のような、あえて聞き手の気持ちと相反する内容を伝えることで、話し手の判断を強調して伝えるような文であろう。

また、希求文で文の《対象的な内容》が聞き手にとって不利益を被るような内容を質問文で差し出す場合、話し手の聞き手に対する〈からかい・挑発〉あるいは〈脅迫〉となる。

540) A: ʔja:=n eini-busam=i

2SG=ADD 死ぬ-DES=YNQ
 「お前も死にたいか？」

B: nutei ti:tee:

命 一つ.TOP
 「命だけは…」(芝居, 974)

553) A: ʔja:=ja eini-busa=ru ʔa-ru=i

2SG=TOP 死ぬ-DES=FOC ある-ADN=YNQ
 「お前は死にたいのか？」

B: ʔar-an. ʔitei-busan

COP-NEG 生きる-DES
 「いや。生きたい…」(芝居, 974)

554) A: ʔja:=n du: jami-busam=i

2SG=ADD 体 痛む-DES=YNQ
 「お前も怪我したいのか？」

B: o:, o:, o:

INTJ
 「おお、おお、おお…」(芝居, 976)

3.17 非難の文

3.17.1 質問形式を用いた〈非難〉

述語に質問形式を含んでいたとしても、次のような場合はもはや質問文とは言えないだろう。すでに起きていること、知っていることをあえて質問文という形で問い直すことで、話し手にそのことを自覚させ、そのことを〈非難〉するという意味あいを表す。iの文でも、na:の文でもあらわれる(詳細については質問文も参照されたい)。

555) [妊娠している娘 B とその母親 A。サトゥヌシは B の夫]

A: biru:, sui=kara=nu gudzo:=nli ʔi:-eiga, mucija ke:tik-u:=nli ʔi:-ru eirase: ʔar-an=i
 (人名) 首里=ABL=GEN 御状=QT 言う-ADVRS もしや 帰って来る-IMP=QT 言う-ADN 知らせ.TOP COP-NEG=YNQ
 「ビルー、首里からの御状と言うが、もしや(首里に)帰って来いと言う知らせじゃないか。」

B: ʔappa: 「お母さん…」

A: ʔja:=ja du:=nu kawat-o:=ee:. satunuei=ŋkai ʔunnuki-ti:
 2SG=TOP 体=NOM 変わる-PROG=SFP 里之子=DAT 言う.HUM-PST.YNQ
 「おまえは妊娠しているだろう (lit. 体が変わっているだろう)。サトウヌシに申し上げたかい？」

B: ma:da=do: ʔappa:

まだ=SFP.ASS お母さん
 「まだよ、お母さん。」

A: ʔuritiramun kakusum=i

そのような事.ACC 隠す=YNQ
 「そのような (大事な) 事を隠すのかい。」

B: muc̄i sui=kai ke:tik-u:=n̄lj ʔi:-ru gud̄zo: ja-ine:, ʔmmari:-ru kk̄wa: t̄ca:naju=gaja:

もし 首里=ALL 帰って来る-IMP=QT 言う-ADN 御状 COP-CND 生まれる-ADN 子.TOP どうなる=DUB
 「もし首里に帰って来いと言う御状なら、生まれる子はどうなるやら。」

A: ʔan su-gutu

そう する-CSL
 「だから言ってるのよ…」 (芝居, 576) (用例 47 と一部重複)

556) A: ʔja:=ja turusan-u. tu:t̄ei waka-ibir-an=tai=na:

2SG=TOP 鈍い-MIR ずっと わかる-POL-NEG=POL.F=YNQ2
 「お前は鈍すぎる。ずっとわかりませんか？」

B: ʔancei wakar-an=du ʔa-ibi:-ru-munnu

CNJ わかる-NEG=FOC ある-POL-ADN-CSL
 「だって、わからないんですもの。」 (実践, 29)

主語が二人称の ba:i/basui の文は、話し手の聞き手に対するネガティブな評価をあえて質問(あるいは詰問)の形で伝えながら、話し手の〈驚き〉を表すと同時に聞き手に対する〈非難〉を表す(詳細は「3.7.3.2 ba:i/basui の文」を参照)。

316') [息子 A が芸妓を家に連れて来たために、母 B が追い返す]

A: t̄cu:=jo:=sai, ʔaja:. mad̄ziru:=n mad̄zun ʔacibun=[i ʔitea-ibin]=[e:¹⁹⁹

今日=IP=POL.M 母 (人名)=ADD 一緒に 遊ぶ=QT 会う-POL=SFP.NASS
 「今日はですね、母上。マジルーも一緒に遊ぼうかと会ってたのに…」

B: ʔakisamijo:, ʔja:=ja ʔancei t̄eimu ʔurit-a-ru ba:=i

INTJ 2SG=TOP それ程 肝 狂う-PST-ADN FN=YNQ
 「ああ、お前はそんなに気が狂ったのか。」 (芝居, 560)

二人称文において、否定質問形式を用いてすでに過ぎ去ってしまった事象を差しだすような場合、転じて〈非難〉を表す。

557) A: d̄ziru:-ta: ja:=ŋkai ʔacib-i:ga ʔik-an=i

(人名)-PL.GEN 家=DAT 遊ぶ-PUR 行く-NEG=YNQ
 「ジルーの家に遊びに行かないか。」 (中略)

B: d̄zu:su-g^wa:=tu k^wa:ei-g^wa: ko:t-i=kara ʔik-a

ジュース-DIM=COM お菓子-DIM.ACC 買う-SEQ=ABL 行く-HORT

¹⁹⁹ 原文訳は「言ったのですよ」とあるが、ʔiteaibi(:)n は「会います」という意味なので、誤訳か。

「ジュースとお菓子を買ってから行こう。」

A: ʔai, d̄zin=nu ne:ran. ʔja: mutte-o:m=i

INTJ 金=NOM ない お前 持つ-PROG=YNQ

「あ、お金がない！お前持ってるか？」

B: wannin ne:ran=do:. t̄ca: su=ga

1SG.ADD ない=SFP.ASS どう する=WHQ

「俺もないよ。どうする？」

A: na: d̄ziru:-ta: ja:=ŋkae: ʔat̄ca ʔik-a

もう (人名)-PL.GEN 家=DAT.TOP 明日 行く-HORT

「もうジルーの家には明日行こう。」

B: hassamijo:. t̄aeikamit-i=kara ʔabir-an=i

INTJ 確かめる-SEQ=ABL 言う-NEG=YNQ

「ええっ！確かめてから言わないか！」(入門, 34)

また, na:が述語の第二中止形に後接する na:の文は, 話し手の聞き手の行為に対する〈非難〉を表す。相手のしている非難されるべき行為, あるいは非常識な行為をあえて質問することで, 聞き手にその事実を強く認識させようとする働きがある。情報の引きだしはなく, 《問いかけ性》はない。

558) [A が人から貰ったダイヤの指輪を B に自慢して見せる]

A: ʔunuʔi:binagi: n:t̄e-i=ma:. ʔe:, daija=ndi=do:. so:mun ja-e: s-an=i

この 指輪 見る-SEQ=IMP INTJ ダイヤ=QT=SFP 本物 COP-INF.TOP する-NEG=YNQ

「この指輪見てみ？ほら, ダイヤだとよ。本物だろう？」

B: so:mun ja=sa. ʔuri handobaggu=ŋkai ʔitt-i=na:

本物 COP=SFP それ.ACC ハンドバッグ=DAT 入れる-SEQ=YNQ2

「本物だよ。それをハンドバッグに入れるのか。」

A: ʔancei ʔiri:ttukuro: ne:n-munnu

CNJ 入れる所.TOP ない-FN

「だって入れる所がないんだもの。」(実践, 34) (用例 344 と重複)

559) A: ʔe:=tai

INTJ=POL.F

「あもう。」

B: ʔane, mata kuma nu: ja=ga

INTJ また こちら 何 COP=WHQ

「おや, またこちら何か。」

A: ʔund̄zo: duku i:ka:gi-me:sa: nat-i watta:=ja ʔatunainai e-imit-i=na:=tai

2SG.HON.TOP あまりに 美人-最良 なる-SEQ 1PL=TOP 後回し する-CAUS-SEQ=POL.F

「貴方はあまりに美人びいきになって, 私達は後回しにさせてですか。」

B: nu:=ga waŋ=ga ʔitei i:ka:gi=nu me:ei su-ta=ga

何=WHQ 1SG=NOM いつ 美人=GEN 最良 する-PST2=WHQ

「何だと。俺がいつ美人のひいきをしたか。」(実践, 48)

主語を二人称とした raja:の文が《問いかけ性》を失って, 聞き手に対するネガティブな判断を伝える場合は〈非難〉という意味あいを付け加える(「5.1.3 raja:の文」も参照されたい)。

560) A: ja:φunnu. kate:mun ja-miee:=sa

INTJ.F 変わり者 COP-HON=SFP

「ふん。変わり者でいらっしやいますね。」

B: kate:muno: watta:=madi=te:

変わり者.TOP 1PL=LIM=SFP

「変わり者は俺たち以外いないよ。」

A: nu:gana=nu takk^wi: ja-miee:-ra=ja:

何か=GEN 血筋 COP-HON-DUB=YNQ3

「何かの血筋でしょうね。」

B: wan=na: ʔamagaka:=nu takk^wi: ja=sa

1SG=YNQ2 天邪鬼=GEN 血筋 COP=SFP

「俺か？天邪鬼の血筋さ。」(実践, 48) (用例 340 と同文, 342 と一部重複)

561) i:ba: ja=sa. nama=ne: so: ʔitte-a-ra=ja:

いい折 COP=SFP 今=DAT.TOP 根性 入る-PST-DUB=YNQ3

「いい経験だよ。これで、思い知っただろう。」(儀間, 2000, 63) (用例 350 と同文)

562) [注意したのに、泥んこになって帰って来た子供に対して]

ja:, ja:, tteu=nu ʔi-ee: teik-an-kutu du: jamate-a-ra=ja:

INTJ INTJ 人=NOM 言う-NLZ.TOP 聞く-NEG-CSL 自分.ACC 痛める-PST-DUB=YNQ3

「ほら、な？人の言う事聞かないから怪我したんだろう？」(語遊「ヤー」2010/9/26, p. 13)

3.17.2 実行文による〈非難〉

非実現の事象を命令形式を用いて文に差しだすとき、つまり、命令の実行がすでに不可能な場面で、命令表現を用いる場合は、聞き手に対して注意したり、非難したりする文となる(高木, 2009)²⁰⁰。「行為が行われなかったことに対する話し手のマイナス評価(非難)」を表しているため、機能的にはもはや命令文というよりも評価文と言った方がよい。こちらでも論ずように言う場合は eijo:形式を用い、話し手が怒っていたり、きつめに注意する場合は ee:形式を用いる。

563) [公演中に私語をしていたが、その場では注意できなかったのに、公演後に呼び出す]

tteu=nu hanaci su-ru ba:=ne: ju: teik-i=jo:

人=NOM 話 する-ADN 時=DAT.TOP よく 聞く-IMP1=SFP

「人が話をする時はよく聞けよ↓」(調査, 2016/5/2)

564) tteu=nu hanaci su-ru ba:=ne: ju: teik-e:

人=NOM 話 する-ADN 時=DAT.TOP よく 聞く-IMP1=SFP

「人が話をする時はよく聞け。」(調査, 2016/5/2)

禁止表現を用いてすでに過ぎてしまった動作を述べるような場合は、もはや動作を制止あるいは禁止することはできないため、そのような動作をしたことを〈非難〉する文となる。

565) A: ʔmmi:=tai. ʔunu tteu=ga ʔju-ru kuto: teik-an-ee: maci ja-ibi:=sa. te:ge:muni:=du

姉=POL.F その 人=NOM 言う-ADN 事.TOP 聞く-NEG-NLZ.TOP まし COP-POL=SFP 適当な物言い=FOC

²⁰⁰ 「違反矯正の機会をすでに逃してしまっているのにもかかわらず、命令表現が用いられることがある。もはや違反を矯正しようのない段階におけるこのような表現は、行為が行われなかったことに対する話し手のマイナス評価(非難)を表す」(高木, 2009, p. 110)。

「姉さん。その人が言う事は聞かない方がいいですよ。適当な事を」

s-o:-ibi:n=do:. kuma=ne: nu:=n ?ui-biŋci: muno: ne:-ibiran-munnu
する-PROG-POL=SFP ここ=DAT.TOP 何=ADD 売る-べき 物.TOP ない-POL-FN
「言っていますよ。ここには何も売るべき物はないんですから。」

B: ha:. ?e:, inagu=jo:. ?ane: ?i=nake:. te:ge:muni:=ja ?ar-an=do:
INTJ INTJ 女=IP そう.TOP 言う=PROH 適当な物言い=TOP COP-NEG=SFP.ASS

「はっ？おい、女よ。そうは言うなよな。適当な事じゃあないぞ。」(実践, 40) (用例 472 と重複)

566) A: ka:gi=ndi ?i:-ne: watta:=madi=ja:

容姿=QT 言う-CND IPL=LIM=SFP
「容姿と言ったら俺の右に出るものはないよな。」

B: nu:=ndi: i:. war-a:s-aŋ=ke:. ?ja:=ja jugura-ka:gi:=du jan=do:ja:
何=QT EQ 笑う-CAUS-NEG=PROH 2SG=TOP 汚れ-顔=FOC COP=SFP

「は？笑わせるな。お前なんか汚れ顔だわ！」(語遊「ユグラーカーギー」2010/4/25, p. 13)

3.17.3 評価文による〈非難〉

すでに起こっている事象を二人称を主語にした *ce: naran* の文が差しだしている場合、〈不満・非難〉といった意味あいが付加わる。

519') [無職の男たちがちよっかいを出して、手伝いもせず邪魔ばかりするので]

?itta:=n ikiga ja-e: sum=i. ?ukit-o:t-i hana ŋute-e: nar-an=do:. to: teibat-i
2PL=ADD 男 COP-INF.TOP する=YNQ 起きる-PROG-SEQ 鼻 吹く-SEQ.TOP POT-NEG=SFP.ASS INTJ 気張る-SEQ
「お前達これでも男なのか。起きていていながら、いびきをかいてはいけないぞ。さあ、頑張って」
?umani:-ta: tigane: ce-i=ma:

姉さん-PL.GEN 手伝い.ACC する-SEQ=見る.IMP
「女達の手伝いをしてみる。」(実践, 37) (用例 267 と重複)

520') [若奥さん A とベテラン主婦 B の会話。B が自分の嫁の悪口を A に言うとき]

A: ?aja:=tai. ?undzuna: jumi nasagate-e: na-ibir-an=do:=tai. ?angutu ja:mutea: jumi
姉=POL.F 2SG.HON.GEN 嫁 陰口を言う-SEQ.TOP POT-POL-NEG=SFP=POL.F あんな やりくり上手 嫁
ja-ibi:-ru-munnu
COP-POL-ADN-FN

「姉さん。自分の嫁の悪口を言っはけませんよ。あんなにやりくり上手な嫁なんですもの。」

B: i:i:. ?itta:=ga: ?ari=ga kundzo:=ja wakar-an. ?are:=jo: ?ippe: eimuteinamun
いいえ 2PL=NOM.TOP 2SG=GEN 根性=TOP わかる-NEG 3SG.TOP=IP とても 意地悪

「いやいや。あんたにはあいつの根性の悪さはわからない。あいつはね、とても意地悪よ。」(実践, 17)

意志のモダリティ

意志・勧誘のモダリティは、事象の実現に動作主体の意志が関わるものである。文自体に「人称性が潜在して」(宮崎他, 2002, p. 11), 意志文の動作主体は一人称であり、勧誘文の動作主体は聞き手を含んだ一・二人称である。テンスの対立がない。また、述語には意志動詞しか取れないという語彙的な制約がある(無意志動詞と意志・勧誘形は共起できるが、文のモダリティが〈意志・勧誘〉ではなくなり変化する)。

3.18 意志文

意志文は、未実現の動作に対する「話し手の行為実現への〈意志〉を取り立てて」述べる文である(仁田, 2014, p. 564)。日本語では主に「しよう」が勧誘形と併せて用いられ、「他者への伝達を意図することなく」発せられる(同上)が、首里方言では、基本語幹に a を後接させた形式²⁰¹が意志・勧誘ともに用いられ、主に他者への伝達を意図する場合に用いられるという特徴がある。

首里方言の意志文には、この意志形(?ik-a 行こう)を用いるもののほかに、非過去断定形(?iŋc-u-n 行く)を用いるものがある。また、周辺のなものとして、希望形(?iŋc-i-busan 行きたい)を用いるもの、および sandare:naran (しなければならない) や eiwadu:jaru (すればこそだ・しなくてはいけない) のような話し手の〈評価²⁰²〉を表す形式を用いた文も、一人称の未実現の動作を表す文として、広い意味で意志文に含まれるだろう(宮崎, 2006)。しかし、本節では主に、意志形を用いるものと非過去断定形を用いるものについての記述を行う(詳細は希望形を用いるものについては希求のモダリティを、評価文については評価のモダリティを参照されたい)。

分析の前に、意志文に関する先行研究についておさらいしておく。首里方言の意志文に関しては、『沖縄語辞典』(1963)²⁰³や仲原(2014)²⁰⁴、當山(2015a)²⁰⁵等で断片的に述べられているのみである。ここでは、本研究で参考にした日本語の「しよう」に関する研究についておさらいする。

先行研究

日本語記述文法研究会(2003)や宮崎他(2002)等の従来の研究では、〈意志の表出〉を「しよう」の基本的な意味あいとして位置づけている。〈意志の表出〉は、「しよう」の非対話的な用法、つまり、樋口(1992)が冒頭で述べている「ひとりごとや心のなかでのつぶやき等」で述べられる話し手の〈決心〉のような意味あいのことを指す(p. 176)。

しかし、宮崎(2006)は、「意志の『ショウ』」には、「聞き手への伝達を意図した使い方が普通に認められるという事実も無視できない」(p. 43)とし、必ずしも「しよう」の本質が非対話的なものだとは言えないと疑問を投げかけている。また、宮崎(2006)は、奥田(1986)「文のさまざま(2) まちのぞみ文(上)」の「まちのぞみ文」について触れ、「しよう」の文が「したい」の文とともに、「まちのぞみ性」をもつ文だとして、「まちのぞみ」という観点から分析がなされるべきだと結論づけている²⁰⁶。

²⁰¹ 本研究では、これを「意志形」と呼んだり、「勧誘形」と呼んだり、「意志・勧誘形」と併せて呼び表したりする。?ik-a 行こう, kam-a 食べよう等。語幹は動詞のタイプによって変化する。付録資料4の「動詞の活用表」を参照。

²⁰² この〈評価〉という用語の規定は、「ある事態が実現することに対する、必要だ、必要でない、許容される、許容されないといった評価を表している」という宮崎(2002)の記述に準じている(p. 80)。

²⁰³ 「意志動詞の場合は近い将来に行なおうとする意志、または仲間への誘いかけを表わし、無意志動詞の場合は近い将来起ころうとしている動作・変化への推測を表わす」という記述が見られる。冒頭部分が意志文に関する説明となっていて、「仲間への誘いかけ」は勧誘文としての意味あいを説明したものである。後半部分の「無意志動詞の場合は～」の記述に関してだが、当辞典では ne:nga ?ara (ないのだろうか) のような〈疑い〉を表す ra 推量形を無意志動詞の意志・勧誘形だと考えていることからそのような記述となっている。ただし、実際には意志・勧誘形と ra 推量形は異なる(例えば、動詞 nain「なる・できる」の意志・勧誘形は nar-a であり、ra 推量形は nai-ra)。また「jumaii」は「仲間へ親しく誘いかけて同意を求める表現」という記述がある(p. 67)。「誘いかけ」を〈勧誘〉という意味で用いているならば、この記述は誤りである。「意志形 + u:/i の文」は〈勧誘〉の意味あいを表さない。「仲間へ親しく語りかけるようなニュアンスで話し手の未来の動作に対する実行の意志を述べる表現」くらの記述が妥当かと思われる。

²⁰⁴ p. 139。

²⁰⁵ pp. 59-60。

²⁰⁶ 首里方言の意志形には非対話的な用法が非常に少ない。したがって、話し手の〈意志〉というモダリティは、対話的な用いられ方を基本にしているのだろうと推測される。

逆に、首里方言の意志形には非対話的な用法が少ない。したがって、宮崎（2006）のこの指摘は首里方言の分析にとって重要である。また、「まちのぞみ性」を軸に分析することで、希望形を用いた文を意志文という同じカテゴリーの中で記述することも可能であろう。

3.18.1 意志形を述語に含む文

意志形は、そのみを述語に含むだけで意志文になれる。ただし、終助辞が用いられるケースが非常に多く、意志形に *u:* や *i:* という終助辞が後接し、意志文であることを明示することもある²⁰⁷。《聞き手めあて》を明示する終助辞 *do:* とは共起しない。文自体に一人称という人称性が内在しているため、主語がしばしば省略される。

また、日本語とは異なり、非対話的な用法（つぶやきや独り言での使用）が少なく、原則「～と思う」等の引用文に埋め込むことができない（引用文に埋め込む場合は、動詞の基本語幹に *e:ja:* が後接した形式を用いる²⁰⁸）。

567) **na:* *godzi* *ja-kutu* *?ik-a=ndi* *?umut-an*²⁰⁹

もう 五時 COP-CSL 行く-INT=QT 思う-PST

「（もう五時だから行こうと思った。）」（調査, 2017/1/23）

568) **wanne:* *tabi=kai* *?ik-a=ndi* *?umut-i* *ja:=kara* *?ndzit-an*

1SG.TOP 旅=ALL 行く-INT=QT 思う-SEQ 家=ABL 出る-PST

「（私は旅に行こうと思って家を出た。）」（調査, 2017/1/23）

例外として、二人称を主語にして「（聞き手が今にも）～しようとする」の場合は、*ndi* との共起が可能である（ただし、用例は多くない。また、一人称文ではないので意志文ではない）。

569) *nu:=nu* *?urami=nu* *?at-i,* *watta:* *su:* *kurus-a=ndi* *su-ga*

何=GEN 恨み=NOM ある-SEQ 1PL.GEN 父.ACC 殺す-INT=QT する-WHQ

「何の恨みがあって、俺の父を殺そうとするのか?」（芝居, 808）

したがって、首里方言の意志形は対話的な性質を基本とし、話し手の未実現の未来の動作を聞き手に伝えることで、話し手の意志・決意を表明したり、聞き手に利益あるいは不利益になる動作を申し出たりする意味あい伝える（本研究では、用例が少ないため、非対話的な意味あいと対話的な意味あいは区別して記述するが、対話的な意味あいの下位分類は原則行わない²¹⁰）。

〈意志・決意表明〉

570) [商店で]

saki *ko:j-abir-a*

酒.ACC 買う-POL-INT

²⁰⁷ また、終助辞は《聞き手配慮》の機能も併せ持っている。*u:* は目上に対して用いられ、*i:* は対等／目下に対して用いられる。

²⁰⁸ 例えば、動詞 *?iteun*（行く）なら、基本語幹 *?ik-* に *e:ja:* を後接させて、*?ik-e:ja:* となり、引用文では *?ik-e:ja:=ndi*（行く-INT=QT）となる等（*?ik-a=ndi* とはならない）。

²⁰⁹ *は非文であることを表す。

²¹⁰ 意志文の詳細な分析については、宮崎他（2002）および日本語記述文法研究会編（2003）を参照。

「酒を買いましょう（酒下さい）。」（沖会, 59）
〈申し出〉

571) bi:ru teidz-abir-a

ビール.ACC 注ぐ-POL-INT

「ビールを注ぎましょう。」（リア, 11）（用例 354 と一部重複）

意志形のみ意志文は、上記の用例のように話し手の動作が発話直後に行われるのが普通である（あるいは発話直後に行うのを前提として発話する）。動作の実行時期が未定の場合や時期に開きがある場合は、断定形を用いた意志文で表現する（詳細は後述の「断定形の意志文」を参照）。

動詞の意志形が普通体²¹¹のまま用いられる場合は、非常に打ち解けた仲、例えば親友同士等では問題にならないが、シチュエーションによっては非常にぞんざいな、あるいはぶっきらぼうな言い方となるため、そのような特殊な文脈、あるいは聞き手との関係が必要となる場合もある。例えば、だいぶ目上の方が目下の者に向かって話す（会社なら偉い人）、高圧的に物を言う、沖縄芝居での台詞等のような場合である（「ぶっきらぼうさ」は文脈や場面状況によって変化する）。

572) wa:=ga ?ik-a

1SG=NOM 行く-INT

「私が行こう。」（調査, 2017/1/23）

573) ?ance: wanne: ?ik-a

CNJ 1SG.TOP 行く-INT

「それでは私は行こう（もう行くよ）。」（調査, 2017/1/23）

574) ?ance: wanne: satei nar-a

CNJ 1SG.TOP 先 なる-INT

「それじゃ私は先なる（先帰るよ）。」（調査, 2017/1/23）

575) nda wa:=ga ko:r-a

INTJ 1SG=NOM 買う-INT

「では私が買おう。」（那民, 130）

動詞 teu:n（来る）は、不規則動詞のため、意志形が a 終わりにならず、ku: という形になる。この ku: という形は、勧誘形のみならず、第一命令形²¹²とも同音であるが、次のような場面では、意志形として認識される（調査協力者、面接調査, 2017 年 1 月 23 日）²¹³。

576) ?ance: mutte-i k-u:

CNJ 持つ-SEQ 来る-INT

「それじゃあ持って来よう。」（調査, 2017/1/23）

意志形のみ意志文には、「～してやる」「～してあげる」等のフレーズを伴ってあらわれる場合が多い。以下、四例とも、やりもらい表現にしばられている。「してやる」や「してあげる」の語彙的な意味によって「話し手から聞き手へ」という動作の方向性が示されている（したがって、意志文であること

²¹¹ 丁寧さのカテゴリーのなかの無標のかたち。⇔丁寧体

²¹² 首里方言では-i 終わりになる第一命令形と、-e: 終わりになる第二命令形がある。teu:n（来る）は不規則動詞のため、第一命令形が-i 終わりにならない。詳細は「命令文」を参照。

²¹³ また、ku:=i: 〈意志〉と ku:=wa/ku:=jo: 〈命令〉のように、共起する終助辞が異なるため、区別しやすい。

が明白)。

577) A: ʔja:=ja nu:=n ʔuturu-ko:-ne:n. ho:t-i k-u:=wa. kadziga: kumpit-i turas-a

2SG=TOP 何=ADD 怖い-INF.TOP-ない 這う-SEQ 来る-IMP=SFP 首筋 踏んづける-SEQ BEN-INT

「お前など何も怖くない。這って来いよ。首筋踏んづけてやろう。」

B: nai-ra: to: kumpit-i=ma:

できる-CND INTJ 踏んづける-SEQ=見る.IMP

「できるならさあ踏んづけてみる。」(語遊「ウーユーサン」2008/7/13, p. 17)

578) teira=nu jun-hago:s-a.mintcaba:²¹⁴ ho:te-i turas-a

顔=NOM PEG-汚い-NLZ 横っ面 張る-SEQ BEN-INT

「顔の嫌らしさよ。横っ面張り飛ばしてやろう。」(語遊「チラミックワサン」2010/5/9, p. 13)

579) [病院にて。看護師に患者が症状を訴える]

A: kuci=nu du:gurisan=do:

背中=NOM きつい=SFP.ASS

「背中がきついよ。」

B: mud-i ʔusagir-a

揉む-SEQ BEN.HMB-INT

「揉んで差し上げよう。」

A: ʔa:, i: ʔambe: ja=sa

INTJ 良い 按配 COP=SFP

「ああ、良い気持ちだ。」(暮らし, 88) (用例 54 と一部重複, 用例 65 と同文)

580) [看護師 A が患者 B に向かって]

A: te'a: ei-miso:te-a=ga

どう する-HON-PST=WHQ

「どうなさいましたか。」

B: kurub-a:ni teinei wat-o:=sa

転ぶ-SEQ ひざ.ACC 割る-PROG=SFP

「転んでひざを傷めているよ。」

A: jami-mice:-ra=ja: eo:dokuce-i ʔusagir-a

痛む-HON-DUB=YNQ3 消毒する-SEQ BEN.HMB-INT

「痛むでしょう? 消毒して差し上げよう。」

B: kange:t-i k^wir-e:

考える-SEQ BEN-IMP2

「お願いね (lit 考えてくれ)。」

A: ho:tai mate-i ʔusagir-a

包帯.ACC 巻く-SEQ BEN.HMB-INT

「包帯を巻いて差し上げよう。」(暮らし, 89) (用例 57 と一部重複)

現時点では用例が少ないので、さらなる調査が必要だが、「私が～しよう〈指定〉」や「私も～しよう〈共存〉」のような場面では、圧倒的に「断定形 + 終助辞 sa」の文か、あるいは「意志形 + 終助辞 u:i:」の文の場合が多く、意志形のみでの文ではあらわれにくい。

丁寧形を伴う場合は、上で述べたような語彙的な制限はほとんどない。「手伝いをしに行く」のよう

²¹⁴ 耳からほほにかけての部分を使う。卑語 (首里那覇方言音声データベース「ミンチャバー」)。

な、動作の実行が一人称なのか・二人称なのかがあいまいになりやすい動作でも用いられる。

581) [孫がおじいちゃんにお母さんの手伝いをしなさいと言われて]

nama=kara ?aja: tigane: e-i:ga ?ite-abir-a

今=ABL 母.GEN 手伝い.ACC する-PUR 行く-POL-INT

「今から母さんの手伝いをしに行きます (lit. 行きましょう)。」(入門, 89) (用例 45, 386 と重複)

多くは動詞の語彙的な意味によって話し手が動作主体であることが明確である場合がほとんどである。例えば、「失礼する」「お供する」「行って来る」「ビールを注ぐ」のような動作は聞き手を動作主体に誘い込みづらいため、おのずと話し手主体の動作となり、意志文となる。

582) niφe:de:biru. ?ance: guburi: s-abir-a

ありがとう.POL それでは 失礼 する-POL-INT

「ありがとうございます。それでは失礼します (lit. 失礼しましょう)。」(猿, 4)

583) ?ance: ?ndz-i te-a:bir-a

CNJ 行く-SEQ 来る-POL-INT

「それじゃあ行って来ます (lit. 行って来ましょう)。」(実践, 14)

584) [そばを食べに行くという先輩と一緒にどうかと誘われて]

?u: teu:=ja nu:=n ne:-ibiraj-kutu ?utum s-abir-a

はい 今日=TOP 何=ADD ない-POL-CSL お供 する-POL-INT

「はい。今日は何もありませんのでお供しましょう。」(入門, 106)

585) A: bi:ru teidz-abir-a

ビール.ACC 注ぐ-POL-INT

「ビールを注ぎましょう。」

B: to:to:to:, na: ?ussa=ei simu=sa

INTJ FIL その位=INST 済む物=SFP

「あー、もうその辺でいいよ。」(リア, 11) (用例 354, 571 と重複)

また、首里方言で「失礼する」や「行って来る」が意志形で表現することができるのは、日本語で「失礼します」「行って来ます」のように断定形でしか表現されないのと対照的である。「失礼する＝その場を去る」「行って来る」という動作は、発話時点では未実現であり、これから行う動作なので、首里方言では〈意志・決意表明〉として意志形で表現する。これらの文を断定形で表すことはできない(上の文脈で guburi: sabi:n や ?ndzi tea:bi:n は不可あるいは非常に言いにくい。調査協力者、面接調査, 2017年1月23日)。

586) niφe:de:biru. *?ance: guburi: s-abi:-n

ありがとう.POL CNJ 失礼 する-POL-IND

「ありがとうございます。*それでは(失礼します)。」

587) ???ance: ?ndz-i tea:bi:-n

CNJ 行く-SEQ 来る-POL-IND

「??それでは(行って来ます)。」

また、次にあげる用例のように、動作主体が一人称であることが文脈によって示されている場合も

ある。医者や看護師が患者に対して行う動作の場合は、動作主体が話し手（一人称）である医者や看護師であることが明確である。

588) [病院にて。患者を診る医者 of セリフ]

nama: $\phi e:t-o-i-ibi-kutu$, ?uteit-i ne:j-abiran=ja:. kusui ?ndzas-abir-a

今.TOP 流行る-PROG-POL-CSL うつる-SEQ CPL-POL=SFP 薬.ACC 出す-POL-INT

「今は流行っていますので、うつってしまったんですね。薬を出しましょう。」(入門, 66)

589) [病院にて。看護師に患者が症状を訴える]

A: teibitanda=nu ?wi:go:sa=ssa :

お尻=NOM かゆい=SFP.MON

「お尻がかゆいなあ。」

B: ?ance:, i kusui=nu ?a-ibi:=sa . mutte-i te-a:bir-a

CNJ 良い 薬=NOM ある-POL=SFP 持つ-SEQ 来る-POL-INT

「それじゃあ、良い薬がありますよ。持って来ましょう。」(暮らし, 87) (用例 346 と同文)

次のように、動詞の語彙的な意味が〈意志〉なのか〈勧誘〉なのかあいまいになりやすい「準備する」等のような文脈の場合、主語（波線部）が明示されて、意志文であることが明確になっている。

590) $\text{?ance:, wanne: ?ug^wan=nu eiko:i s-abir-a}$

CNJ ISG.TOP 拝み=GEN 準備.ACC する-POL-INT

「それじゃあ、私は拝みの準備をしましょう。」(猿, 2)

591) wanne: $\text{ti:çisa ?arat-i te-a:bir-a}$

ISG.TOP 手足.ACC 洗う-SEQ 来る-POL-INT

「私は手足を洗って来ますね (lit. 洗って来ましょう)。」(芝居, 1056)

まとめると、意志形による意志文では、非対話的な意味あいを表せないか、表しにくい。普通体の場合は、特に親しい間柄では問題にならないが、そうでない場合は特殊な文脈が必要となる。また、やりもらい表現を伴いやすい。丁寧形の場合は、語彙的な制限は特にない。勧誘形と同音のため、〈意志〉か〈勧誘〉かがあいまいになりやすい。したがって、形式の区別だけでなく、文脈というプラグマティカルな側面によって〈意志〉というモダリティが支えられている場合もあるし、一人称主語を添えて意志文であることを明示する場合もある。

3.18.1.1 意志形 + 終助辞 u/i の文

終助辞 u:あるいは i:は動詞の意志形に付いて、動作が話し手によって行われる意志文であることを明示する。特に、意志形のみでは〈意志〉を表しにくい普通体においては、頻用される。u:は聞き手への敬意を表す形式で、i:は聞き手への敬意に関しては無標である。i:は動詞の普通体に付くことがほとんどだが、u:は普通体にも丁寧体にも付くことができる。

u/i:は意志文であることを明示するだけでなく、終助辞特有の聞き手に語りかけるような伝達的なニュアンスが含まれるため、u/i:なしの意志文よりも聞き手への配慮が感じられる文となる。従来の研究では、u/i:の文は「聞き手に許諾や同意を求める(中松, 2000, 91)」のような記述が見られがちだが、話し手はほとんど決めてかかっている、〈同意要求〉の意味あいはほとんどない。〈意志〉をやわらかく、

聞き手に配慮するようなニュアンスで伝えている²¹⁵。

3.18.1.1.1 意志形 + i:の文

動詞の意志形・普通体に i:が付く場合は、聞き手が目下か対等な関係にあるときである。i:は意志文であることを明示するだけでなく、聞き手配慮のニュアンスも伝える。

592) ?ance: wanne: satei nar-a=i:

CNJ 1SG.TOP 先 なる-INT=SFP

「それじゃあ私は先に帰るよ (lit. なるうね) ²¹⁶。」(調査, 2017/1/27)

593) A: to: ?ndz-i k-u:=i:

INTJ 行く-SEQ 来る-INT=SFP

「じゃあ行って来るよ (lit. 来ようね)。」

B: waeit-o:-ee: ne:-jabir-an=i

忘れる-PROG-NLZ.TOP ない-POL-NEG=YNQ

「忘れ物はないですか²¹⁷。」(リア, 3)

「～しないでおく」の意志形に i:が付いて、動作の不実行を聞き手に約束する文になる。

594) [今から行こうとしていた豆腐屋の豆腐で腹を下したという噂を聞いて]

?ance: na: ?mma=kai ko:-iga: ?ik-an-k-a=i:

CNJ もう そこ=ALL 買う-PUR.TOP 行く-NEG.SEQ-おく-INT=SFP

「それじゃあもうそこに買いには行かないでおくよ (lit. 行かないでおこうね)。」(実践, 33)

3.18.1.1.2 意志形 (普通体) + u:の文

動詞の意志形・普通体に u:が付く場合は、聞き手が目上か社会的上位の関係にあるときである。ただし、後述する丁寧体に u:が付く場合より丁寧さの度合いは低くなる。丁寧さの度合いが過剰になり、相手との関係に見合っていない場合、逆に失礼になる。したがって、軽く敬意を表したい関係の場合に用いられる。例えば、打ち解けた関係の職場の先輩や夫婦同士等である。

595) [喜劇。王様が病気になったので、ユタ(霊媒師)を呼べと先輩臣下 C が後輩臣下 A に言う]

A: ?ance:, keitai=cei me:ru ?ut-a=u:

CNJ 携帯=INST メール 打つ-INT=SFP.POL

「それじゃあ、携帯でメール打ちましようっと。」

B: ?an ?i-ei=n ?am=i, ?ja:=ja

そう 言う-NLZ=ADD ある=YNQ 2SG=TOP

「そんな言い方もあるか、お前は(Aの頭を叩いてツッコむ)。」

C: ha:e:=nat-i ?ndz-i k-u:=wa

駆け足=で 行く-SEQ 来る-IMP=SFP

「走って行って来い！」(猿, 1)

²¹⁵ 「対等・目下に対する親しみの気持ちを表わす」(西岡, 2002, p. 19)。

²¹⁶ 先に帰るときの決まり文句。

²¹⁷ 直訳は「忘れていないのですか。」

596) [妻から夫へのセリフ。夫が「あそこ」が切れていると言ったので...]

na:ʔiteide:dzi nat-o:-n. k'u:k'u:ca ʔjub-a=u:

もう 一大事 なる-PROG-IND 救急車.ACC 呼ぶ-INT=SFP.POL

「これは大変だ！救急車を呼びますね (lit. 呼びましょうね)。」(実践, 30)

597) [会社の後輩から先輩へ]

bi:ru ʔcidz-a=u:

ビール.ACC 注ぐ-INT=SFP.POL

「ビール注ぎますね (lit. 注ぎましょうね)。」(調査, 2017/1/27)

3.18.1.1.3 意志形 (丁寧体) + u:の文

意志形の丁寧体-a/ibira の後ろにさらに u:が付加されて、-a/ibira=u:となる。調査協力者によれば、この形は丁寧さの度合いが高く、くどくもない表現なので、目上の者に用いる場合に使いやすい(面接調査, 2017年1月27日)。

598) [本例, 次例ともに先に失礼する場合のあいさつ]

guburi: s-abir-a=u:

ご無礼 する-POL-INT=POL

「失礼します。」(調査, 2017/1/27)

599) ʔite-abir-a=u:

行く-POL-INT=POL

「行きます。」(調査, 2017/1/27)

あるいは、意志形の丁寧体-a/ibira の後ろに sai あるいは tai が付加された、-a/ibira=sai, -a/ibira=tai のかたちも先の-a/ibira=u:の形と同様、丁寧さの度合いが高く、くどくもない表現なので、目上の者に用いる場合に使いやすい(調査協力者, 面接調査, 2017年1月27日)。

600) [本例, 次例ともに先に失礼する場合のあいさつ]

guburi: s-abir-a=sai

ご無礼 する-POL-INT=POL.M

「失礼します。」(調査, 2017/1/27)

601) ʔite-abir-a=sai

行く-POL-INT=POL.M

「行きます。」(調査, 2017/1/27)

次の用例は〈意志〉というより、ほとんどフレーズ化して、固定化された挨拶表現となっている。

602) [他人の家へ訪問した場合のあいさつ]

jucirij-abir-a=tai

参る-POL-INT=POL.F

「ごめんください (lit. 参りましょう)。」(芝居, 872)

603) A: ʔe-a:bir-a=sai. ʔe-a:bir-a=sai

来る-POL-INT=POL.M 来る-POL-INT=POL.M

「ごめんください。ごめんください (lit. 来ましょう)。」

B: ta: ja-mice:=ga

誰 COP-HON=WHQ

「どちら様ですか。」(芝居, 841)

3.18.1.1.4 意志形(丁寧体) + u: + sai/tai の文

上記の-a/ibira=u:の後ろにさらに sai(男性が使用)あるいは tai(女性が使用)が付加される。形式的に最も丁寧さの度合いが高くなる。ただし、場面状況や聞き手との関係で、丁寧さの度合いが過剰になりすぎる場合は、かえって失礼になる場合もある。調査協力者によれば、ごく普通のありふれた場面では、u:と sai/tai の両方が付いて「くどい」表現になるようである(面接調査, 2017年1月23日)。

604) [Bにお前もゲートボールをやってみたらと勧められて]

A: ei:-busa-ibi:-eiga, wanne: nama^hteikiti munuk^we:dzuku=nu ?iteunasa-ibi:-kutu

する-DES-POL-ADVERS 1SG.TOP 未だに 食べていく事=NOM 忙しい-POL-CSL

「(ゲートボールを)したいのですが、私は未だに食べていくだけで精一杯ですから」

?uri su-ru çima=n ne:ran=du ?a-ibi:n=de:. ?ai da: na:

それ.ACC する-ADN 暇=ADD ない=FOC ある-POL=SFP INTJ INTJ FIL

「それする暇もないんですよ。あらあらもう」

juntaku=ni mu^hteik^wa:tt-i ?ukurit-i ne:-ibiran=sa. wanne: guburi: s-abir-a=u:=sai

おしゃべり=DAT 夢中になる-SEQ 遅れる-SEQ CPL-POL=SFP 1SG.TOP ご無礼 する-POL-INT=POL=POL

「おしゃべりに夢中になって遅れてしまっていますよ。私は失礼しますね。」

B: to:. ?ance: ?isudz-i ?ik-e:

INTJ CNJ 急ぐ-SEQ 行く-IMP2

「うん。それでは急いで行け。」(実践, 14) (用例 12, 60, 69, 284 と一部重複)

3.18.1.2 意志形 + 終助辞 na の文

終助辞 na:が付加された意志文も見られた。終助辞 na は、主に勧誘文に用いられ²¹⁸、基本的には勧誘文マーカーとして機能することが多いのだが、〈かたり〉という場面における独り言やつぶやき、心内発話等では、話し手が動作主体の意志文となれる²¹⁹。

605) [民話。寝るところもなく困っている貧乏人が大きな家の前を通りかかって一言]

kunguto:ru magi:ja: jar-e:, jukur-at^he-i k^wiju-ru ?uradza:=ja ?a-e: s-an=i

このような 大きい家 COP-CND 休む-CAUS-SEQ BEN-ADN 裏部屋=TOP ある-INF.TOP する-NEG=YNQ

「このような大きい家なら、休ませてくれる裏部屋はあるんじゃないか。」

kutuwaki e-i ?unige: e-i nd-a=na

説明 する-SEQ お願い する-SEQ 見る-INT=SFP

「事情を説明してお願いしてみよう。」(大沖 32, 40)

606) [エッセイ。アンシという言葉の使い方について説明した後に]

?ancei du:jassar-e:, nda teikat-i nd-a=na

そんなに たやすい-CND INTJ 使う-SEQ 見る-INT=SFP

「そんなにたやすいのなら、どれ使って見よう。」(語遊「アンシ」2010/11/14, p. 13)

²¹⁸ 割合的に勧誘文での使用が多い。

²¹⁹ 二例とも「してみる」を伴っているが、必須なのか、偶然なのかは今後の課題である。

3.18.1.3 意志形 + 終助辞 ja: の文

終助辞 ja: が付く場合は、話し手がこれから行う動作によって聞き手が直接何らかの利益あるいは不利益を得る場合に限る（聞き手が話し手の動作の影響・効力を直接受ける）。なぜなら、意志文において ja: は〈念押し〉あるいは〈同意要求〉の意味あいを付け加えるからである。

607) [欲のない夫婦を可哀想に思い、望めば何でも出してくれる石臼を神様がプレゼントする]

ʔitta:=ŋkai ʔieiu:ei k^wir-a=ja:

2PL=DAT 石臼.ACC BEN-INT=SFP

「お前たちに石臼をやろうね。」(大沖 33, 84)

608) [昔の事を知らない若い世代に伝えておこうという思いで昔話をしている]

ʔuri=kara kuri=n hanae: so:k-a=ja:

それ=ABL これ=ADD 話.TOP する.SEQ.おく-INT=SFP

「それからこれも話はしておこうかね。」(方談, 323)

609) kutei=sa:ni ʔite-i=n teik-an-kutu sugur-a=ja:

口=INST 言う-SEQ=ADD 聞く-NEG-CSL なぐる-INT=SFP

「口で言っても聞かないから殴ろうな。」(音声「スグエン」)

610) teu:=ja wa:=ga ei:dza ja=ndi-ttukuro: ʔudidzuku=cei micit-i turas-a=ja:

今日=TOP 1SG=NOM 年上 COP=QT-所.TOP 腕づく=INST 見せる-SEQ BEN-INT=SFP

「今日は俺が兄貴だってところを腕づくで見せてやろう。」(芝居, 750-752)

次の用例のような聞き手を動作主として巻き込む場面状況においては〈勧誘〉を表す。

611) watta: satei nar-a=ja:

1PL 先 なる-HORT=SFP

「俺たち先に帰ろうよ。」(調査, 2017/1/27)

聞き手に特別利害関係のない、話し手側の動作の意志をとりたてて伝える場合は、意志形+ ja: の文は使用できない。意志形でいいきるか、〈はなしあい〉の場面では、終助辞 i: (あるいは u:) の文を用いることが多い。

612) *watta: satei nar-a=ja:

1PL 先 なる-INT=SFP

「*俺たち先に帰るよ。」(調査, 2017/1/27)

613) watta: satei nar-a=i:

1PL 先 なる-INT=SFP

「俺たち先に帰るよ。」(調査, 2017/1/27)

3.18.2 断定形を述語に含む文

動詞の断定形いいきりの文がそのまま〈意志〉を表すこともできる。ただし、丁寧形の場合が多い。普通体のまま用いられる場合は、非常に打ち解けた仲、例えば親友同士等では問題にならないが、シチュエーションによっては非常にぶっきらぼうな言い方となるため、そのような特殊な文脈、あるいは聞き手との関係が必要となる場合もある。

614) A: ʔja:=n ʔiteun=na:

2SG=ADD 行く=YNQ2

「お前も行くのか。」

B: ʔi, ʔiteu-n

うん 行く-IND

「うん、行く。」(調査, 2015/9/2)

615) [酒を飲んで女遊びをしているマサンルーに怒って会いに来る伯父 B]

A: masan[ʉ:=ja nama ʔutci=ne: u-ibir-an

(人名)=TOP 今 家=DAT.TOP いる-POL-NEG

「マサンルーは今家にはいません。」

B: ur-an eidzi=du=n jar-e: mudut-i ʔeu:-ru ʔe:da matteo:ʔeu

いる-NEG.ADN FN=FOC=ADD COP-CND 戻る-SEQ 来る 間 待っておく

「いないのであれば戻って来るまで待っておく。」(芝居, 554) (用例 24, 108 と重複)

616) A: sum=i. s-an=i

する=YNQ する-NEG=YNQ

「するのか? しないのか?」

B: sun / wanne: s-an

する.IND / 1SG.TOP する-NEG

「する。 / 私はしない。」(語遊「スン」 2009/6/28, p. 18)

先述の通り、「私も～しよう〈共存〉」のような場面では、意志形のみで文ではあらわれにくい。

617) A: sum=i. s-an=i

する=YNQ する-NEG=YNQ

「するのか? しないのか?」

B: sun

する.IND

「する。」

C: wannin su=sa

1SG.ADD する=SFP

「私もやるよ。」(語遊「スン」 2009/6/28, p. 18)

次の二例のように、動作の実行時期が未定の場合や時期に開きがある場合は、断定形を用いた意志文で表現する。意志形に置き換えることができない。

618) [独り身の青年が台風続きのため、食料が尽きてしまったが、ある朝目を覚ますと、枕元にご馳走が置いてあったので、誰からかわからないが、空腹に耐えかねて、思わず全部平らげてしまう]

niʔe:de:biru. ʔundze: kanaradzi ke:s-abi:-n / *ke:s-abir-a

ありがとう.POL 恩義.TOP 必ず 返す-POL-IND / *返す-POL-INT

「ありがとうございます。恩は必ず返します。」(大沖 34, 33-34)

619) [上の続き。漁に出たが一匹も釣れず疲れ果てて帰って来ると、再びご馳走が置いてあって]

niʔe:de:biru. nama: nu:=n guri:dzi=n na-ibir-an-eiga, ʔiju=ga tur-ari:-ne:

ありがとう.POL 今.TOP 何=ADD お礼=ADD POT-POL-NEG-ADVRS 魚=NOM 取る-POT-CND

「ありがとうございます。今は何もお礼もできませんが、魚が取れたら」

ʔiṯeiban dzo:tu:=nu ma:sa-ei=kara massatei=ni ʔusagij-abi:-n / *usagij-abir-a
 一番 上等=GEN 美味しい-NLZ=ABL 真っ先=DAT BEN.HMB-POL-IND / *BEN.HMB-POL-INT
 「一番上等の美味しいのから真っ先に差し上げます。」(大沖 34, 34-35)

3.18.2.1 断定形 + 終助辞 do:の文

断定形はdo:と共に起して、対象的な内容が話し手のこれから行う動作を宣言する場合、結果として話し手のこれからの動作の実行に対する〈意志〉を表す。述語に断定形をもつ文が〈意志〉を表すのに、とりわけdo:が必須ではない。しかし、do:がないと不自然になるのは、次の用例でみるような聞き手に強く訴える場面や怒りをぶつける場面等、《聞き手めあて》や《強い主張》を前面に押しださなければならぬという文脈があるからである。

39) A: ɕakuɕo:=nu wa:=ga tɕeassa ʔumi:kanasa ɛ-i=n, ʔuming^wa=nu tami=ne: nar-aŋ-gutu
 百姓=GEN 私=NOM どんなに 思い可愛がり する-SEQ=ADD 子供=GEN ため=DAT.TOP なる-NEG-CSL
 「百姓の私がどんなに思って可愛がっても、この子のためにはならないから。」
 B: jaratɕe-i k^wi:m=i. jaratɕe-i k^wi:-ru-mun=du=n jar-e: du:=nu
 やらす-SEQ BEN=YNQ やらす-SEQ BEN-ADN-もの=FOC=ADD COP-CND 自分=GEN
 「預らせてくれるか！預らせてくれるものならば自分の」
 wata jamatɕe-i natɕe-e:-ru kk^wa=nu gutuku tɕanne:ru ricein eimi:n=do:
 腹.ACC 痛める-SEQ 産む-RES-ADN 子=GEN 如く どんな 立身 させる=SFP.ASS
 「腹を痛めて産んだ子の如くどんな立身でもさせるよ。」(芝居, 588-590)

また、次のような話し手の動作の実行によって、聞き手が不利益を被る内容を伝える場合、話し手の動作の実行の意志を伝えながら〈警告〉する文となる。

620) [B に対して辛くあたる継母 A。カミジューは B の腹違いの弟で、A の実子]

A: (前略) ʔune:, nu:=ga, kunu sumutɕe: kamidzu: muno: ʔar-an=i
 INTJ 何=WHQ この 本.TOP (人名).GEN 物.TOP COP-NEG=YNQ
 「おや、何かね、この本は。カミジューのものではないか。」
 B: kamidzu:=kara ka-ibit-an
 (人名)=ABL 借りる-POL-PST
 「カミジューから借りました。」
 A: (前略) ʔja:=ja ɕakuɕo: inagu=nu natɕe-e:-ru mun. duku mi=ni k^wi:t-i²²⁰
 2SG=TOP 百姓 女=NOM 産む-RES-ADN 者 あまりに 身=DAT 越える-SEQ
 「お前は百姓女が産んだ者。あまりに身分を越えて」
 gakumun=nakke:=ndi i:-ne: gattino: s-an=do:
 学問=など=QT 言う-CND 承知.TOP する-NEG=SFP.ASS
 「学問などと言えば承知しないよ！」(芝居, 602)

意志文というのは、厳密には、発話以前に聞き手に共有されていない話し手の〈意志〉を伝える文である。次の用例でみるような、動作の実行に対する話し手の〈意志〉が発話以前にすでに聞き手にも共有されているような文脈で、「実行のタイミング」を伝えるような場合は、典型的な意志文とは言

²²⁰ mini k^wi:ti は、身分を越えて、身分をわきまえないで、の意。直訳は「身に越えて」

えないだろう。このような場合は, do:がないとかえって不自然な文になる。

621) A: ?aja:, ?itcun=do:

お母さん.CH 行く=SFP.ASS

「お母さん, 行くよ。」

B: ?ja:=n daigaku sotsug^o: su=saja:.. ta:ri:=nu mence:-ne:

お前=ADD 大学.ACC 卒業 する=SFP.MIR お父さん.CH=NOM いる.HON-CND

「お前も大学を卒業するんだねえ。お父さんが生きていたら... (後略)」(リア, 29) (用例 253 と重複)

malefactive な受け身表現を伴った〈意志〉の文

「～されるぞ」というような受け身表現を伴って, 話し手のこれからの動作の〈意志〉を表す。文の《対象的な内容》には, 持ち主の受け身を伴って, 聞き手の体の一部に対して危害・被害が及ぶ内容が述べられている。文には, 動作の客体(被害の及ぶ対象)しか示されていないが, その動作のいない手は話し手である。客体に被害が及ぶことを受け身表現を用いて伝えることで, 間接的に〈意志〉を伝える。この手の文では, do:は必須である。do:を添えることで, 《聞き手めあて》が前面化し, 話し手に危害・被害が及ぶことを〈警告〉している。

622) tikko: magir-ari:n=do:

手.PEJ 曲げる-PASS=SFP.ASS

「手へし折るぞ (lit. 手を曲げられるぞ)。」(沖辞, 522)

623) kamatei war-ari:n=do:

頭.PEJ 割る-PASS=SFP.ASS

「どたまから割るぞ (lit. 割られるぞ)。」(沖辞, 304)

「～なら～されるよ(ぞ)」というフレーズを伴って, 条件が満たされれば話し手が動作を実行する〈意志〉があることを述べる。例えば, 次の用例では, 「横っ面を殴られる」のは聞き手だが, そう述べることで, 話し手が聞き手の「横っ面を殴る」意志があることを伝えながら, 聞き手に対して〈警告〉する文となる。この手の文は首里方言あるいは沖縄諸方言ではよく見られる表現方法である。

624) duku kuteigansu na-ine: mintcaba: sugur-ari:n=do:

あまり 口達者 なる-CND 横っ面 ながる-PASS=SFP.ASS

「あまり口達者になると横っ面**ぶん殴るぞ** (lit. ぶん殴られるぞ)。」(音声「ミンチャパー」)

また, 条件節を伴う警告文が「先行する条件節で述べられている内容が実現すれば, 聞き手にとって不利益な事象が起こりえる」ということを後続の主文で伝える文であるならば, 条件節で述べられている内容(口達者になる)をしないようにしろ(口達者をやめろ), という命令文として結果的に機能するという分析も可能である。

3.18.2.2 断定形 + 終助辞 sa の文

断定形に終助辞 sa が後接した文は, 感情をもらすかのように動作の実行を述べ伝えることで, 副次的に話し手の未実現の動作に対する〈意志〉を表す。ただし, 〈意志〉は sa が実現しているのではなく, 《対象的な内容》が表している。sa は話し手の感情・認識の変化を表す。したがって, sa の文の〈意

志)は、発話以前から決まっていることではない。発話時において瞬間的に生じた〈意志〉を聞き手に伝える。

40) [病院にて。看護師に患者が症状を訴える]

A: du:=nu ?amakuma ?wi:go:sa=ssa:

体=NOM あちこち かゆい=SFP.MON

「体があちこちかゆいなあ。」

B: ?anee: nuigusui mutte-i te-a:bi:=sa

CNJ 塗り薬.ACC 持つ-SEQ 来る-POL=SFP

「それじゃあ塗り薬を持って来ますよ。」(暮らし, 87)

625) [新年。弟 A と兄 B の会話。冒頭で念頭のあいさつをした後]

A: nama=kara: ?we:ka=nu ja: ma:t-i, nintu:=nu ?e:satei e-i:ga ?ite-abi:=sa

今=ABL.TOP 親戚=GEN 家.ACC 回る-SEQ 年頭=GEN 挨拶.ACC する-PUR 行く-POL=SFP

「今から親戚の家を回って、年頭の挨拶をしに行きますよ。」

B: to:, ?ndz-i k-u:=wa. wanne: ja:=uti ?uteaku=nu ?utuimutei su=sa

INTJ 行く-SEQ 来る-IMP=SFP 1SG.TOP 家=LOC お客=GEN おもてなし する=SFP

「おう、行って来い。私は家でお客の相手をするよ。」(暮らし, 78)

述語に否定形が用いられる場合は、その動作を実行しない〈意志〉が示される。

626) [夫 A と妻 B の会話。夫のズボンの股間部分が破れている。今からそのことを告げる]

A: ?aja:=jo:, warar-an:k-i=jo:ja:

母.CH=VOC 笑う-NEG-IMP1=SFP

「母さん、笑うなよな。」

B: wara-ibir-an=sa. nu:n̄tei waŋ=ga wara-ibi:=ga=tai

笑う-POL-NEG=SFP なぜ 1SG=NOM 笑う-POL=WHQ=POL.F

「笑いませんよ。どうして私が笑うのですか。」(実践, 30)

sa の文による意志文をいくつかに分類するとすれば、何が契機となって、そのような判断を下したのか、という観点から分類を試みることができる。例えば、上記の用例および下記の五例は、「相手の発言や言動・質問」が契機となっている。

627) [親 A と子 B の会話。子 B は A に勘当される]

A: ?ja: teira: n:d̄zi-buc-iku=n ne:n. nama eigu ?nd̄zit-i ?ik-e:

2SG.GEN 顔.TOP 見る-DES-INF=ADD ない 今 すぐ 出る-SEQ 行く-IMP2

「お前の顔は見たくもない。今すぐ出て行け。」

B: ?u:. ?nd̄zit-i ?ite-abi:=sa

はい 出る-SEQ 行く-POL=SFP

「ええ。出て行きますよ。」(調査, 2015/11/30)

628) [市場にて。お店の人から豚の食べ方を色々教えてもらって]

buta: nu:=madi=n kam-ari:=saja:. wannin ?iruiru kad-i nd̄zu=sa

豚.TOP 何=LIM=FOC 食べる-POT=SFP.MIR 1SG.ADD 色々 食べる-SEQ 見る=SFP

「豚は何でも食べられるんだねえ。私も色々食べてみるよ。」(暮らし, 84)

629) A: nu: ko:i=ga

何.ACC 買う=WHQ

「何を買うか？」

B: kumaŋ=kai sagat-o:-ru ʔuteuk^{wi}: ʔanci t̄eɽasa-ibi:-ru-mun

ここ=DAT 下がる-PROG-ADN 風呂敷 こんなに きれい-POL-ADN-FN

「ここに下がっている風呂敷こんなにきれいなんですもの。」

ʔiteime: wan=niŋkai ʔu-miee:-bir-e:

一枚 私=DAT 売る-HON-POL-IMP2

「一枚私にお売りになって。」

A: sandzu:goen ja-eiga, ʔja:=ŋkai=ja sandzu:en=ei ʔui=sa

35 円 COP-ADVRS 2SG=DAT=TOP 30 円=INST 売る=SNP

「35 円だけど、お前には 30 円で売るよ。」(日放, 279)

630) [伯父と青年の会話]

A: ʔundzo: ma:=kai mence:-bi:=ga

2SG.HON どこ=ALL 行く.HON-POL=WHQ

「貴方はどこへいらっしゃるんですか。」

B: t̄eɽu:=ja na:ɸa=nu matei=ŋkai suba kam-i:ga ʔiteu=sa. ʔja:=n madzun ʔiteum=i

今日=TOP 那覇=GEN 市場=DAT そば.ACC 食べる-PUR 行く=SNP 2SG=ADD 一緒に 行く=YNQ

「今日は那覇の市場にそばを食べに行くよ。お前も一緒に行くか。」

A: ʔu: 「はい。」(入門, 106)

631) A: wanne: tuttei: mutte-e: u-ibir-an-eiga t̄eɽa: e-e: jutas-aibi:=ga

1SG.TOP 時計.ACC 持つ-SEQ.TOP いる-POL-NEG-ADVRS どう する-CND よろしい-POL=WHQ

「私は時計を持っていませんがどうすればよろしいですか。」(用例 315, 357 と重複)

B: ʔa:, ʔure:jo: makate: waŋ=ga to:=ndi ʔi=sa. t̄eɽa:=n ne:n=sa. teibar-i=jo:

INTJ それはね (人名) 私=NOM INTJ=QT 言う=SNP どう=ADD ない=SNP 頑張る-IMP1=SNP

「ああ、それはねマカテー。私がトー²²¹と言うよ。どうってことないよ。頑張れよ。」(実践, 46-47)

あるいは、「相手の動作の目撃」が判断の契機となっている。

632) [彼女がかばんを持っている]

A: da:da:da:, wa: mutteu=sa

INTJ 1SG 持つ=SNP

「ほらほら、俺持つよ。」

B: mut-ant-i=n eimun=jo: kure: inagu=nu mun=[u ja-kutu

持つ-NEG-SEQ=ADD 済む=SNP これ.TOP 女=GEN 物=FOC COP-CSL

「持たなくても大丈夫。これは女の物だもの。」(リア, 10)

633) [民話。助けてもらった恩返しにこっそり竜宮城から人間の男にご馳走を運んでいた人間の女に化けた魚だが、男に姿を見られてしまったので、魚に戻れなくなってしまったと泣いてしまう。そこで男が女に言う]

mutu=ni mudur-ar-an-ne: t̄eɽa:na kunumama inagu=tucei ut-i turae-e:

元=DAT 戻る-POT-NEG-CND どうか このまま 女=として いる-SEQ BEN-IMP2

「元に戻れないならどうかこのまま(人間の)女としていてくれ。」

²²¹ 「トー」は、何かを始めるときや終わるときの表現・合図である。感動詞。

wa:=ga magukuru teikute-i ?ja:²²² mi:kange: su=sa
 1SG=NOM 真心 尽くす-SEQ お前.GEN 世話 する=SFP
 「私が真心尽くしてお前の世話するよ。」(大沖 35, 40)

次に挙げる用例では、先行する条件節に差し込まれる事象の実現という条件が契機となっている。

634) ta:=n s-an=dar-e:, wan=ga su=sa
 誰=ADD する-NEG=FOC.ある-CND 1SG=NOM する=SFP
 「誰もしないのなら、俺がするよ。」(語遊「スン」2009/6/28, p. 18)

635) A: barito: ʔoko:=nu ?a-eiga, madzum ?ik-an=i
 バリ島 旅行=NOM ある-ADVRS 一緒に 行く-NEG=YNQ
 「バリ島旅行があるけど、一緒に行かないか？」

B: taru:=ga ?iteur-a: ?iteu=sa
 太郎=NOM 行く-CND 行く=SFP
 「太郎が行くなら行くよ。」(語遊「イチユン」2011/5/8, p. 18)

次の用例では、先行する理由節で述べられている理由が契機となっている。

636) wata=nu so:rir-aŋ-kutu, muno: ?atu=kara kamu=sa
 お腹=NOM 減る-NEG-CSL ご飯.TOP 後=ABL 食べる=SFP
 「お腹が減ってないから、ご飯は後で食べるよ。」(語遊「ヤーサン・ウガリユン」2009/7/12, p. 11)

次の用例では、聞き手の動作や言動には直接関わらない、発話状況における話し手の勝手な興味・関心が契機となっている。

637) [ずる賢い金持ちが欲のない正直な貧乏人の家の石垣の間に挟まった黄金石に目をつけて、どうかその石垣の黄金石を手に入れようと企む]

A: kudzu=nu kume: ?ja=ŋkai k^{wi}:ju=sa
 去年=GEN 米.TOP お前=DAT BEN=SFP
 「去年の米はお前にあげるよ。」

B: ?a-ibir-an. wanne: du:=nu mun=ei dzu:bun jan
 COP-POL-NEG 1SG.TOP 自分=GEN 物=INST 十分 COP
 「いえいえ。私は自分の物で十分だ。」(大沖 31, 35)

3.18.2.3 断定形 + 終助辞 saja:の文

文脈上、おのずとこれから行われる動作をあえて聞き手に伝えるときにあらわれる。次の文脈では、嫁の「煮込みを作りました」という発言は、判断の契機になると同時に「食べてみてください」という意味も伝えているので、次に行われる動作は「作った食事を食べてみる」ことである。そのような話し手の〈意志〉を断定形 + saja:の文で伝えている。

²²² 原文では ?ja:nu mi:kange:となっているが、首里方言では本来、人称代名詞が名詞を修飾する際には属格の助辞が不要なため、調査協力者に確認(面接調査, 2016年12月12日)後、削除した。日本語の影響を受けて、助辞を挿入する話者が増えているのかもしれない。

638) [嫁 A が食事を作ったので姑 B に味をみてもらう場面]

A: ʔa:sa=nu ʔuciru=tu na:be:ra: ʔmbuci: eiko:-ibit-an
アオサ=GEN お汁=COM 糸瓜 煮込み.ACC 仕込む-POL-PST
「アオサのお汁と糸瓜の煮込みを作りました。」

B: da:, k^wat̃ei: su=saja:
INTJ ごちそう する=SFP
「では、いただくわね。」(入門, 126-127)

次の用例も、文の《対象的な内容》は聞き手に共有されている。先行する事象が実現した後、後続の事象も話し手の〈意志〉によっておのずと実現されることをあえて伝えている。

639) [ある旦那に仕えている下男同士の会話。旦那が一番可愛がっているカミジャーという別の下男をどうしても追い出したいため、旦那の目の前でこらしめてやろうと企む下男 A と B]

A: ʔja:=ga ʔudi=sa:ni ʔat̃eikat-i ʔatu, kundo: wa:=ga eima=sa:ni ʔut̃ee:cit̃ee: su=saja:
お前=NOM 腕=INST 扱う-SEQ 後 今度.TOP 私=NOM 相撲=INST こてんぱんに する=SFP
「お前が腕相撲でやりやっした後、今度は俺が相撲でこてんぱんにするよな。」

ʔato: du:kuru=eci ʔiŋgi:n=jo:
後=TOP 自分=INST 逃げる=SFP
「そしたら (カミジャーは) 独りでに逃げて行くよ。」

B: to:to:, ʔure: i: kange: ja=sa
INTJ それ.TOP 良い 考え COP=SFP
「おお、それはいい考えだな。」(芝居, 688) (用例 353 と重複)

3.18.2.4 断定形 + 終助辞 te: の文

〈成り行き的な意志〉

主語が一人称の te: の文のうち、《対象的な内容》が話し手の未来の動作を差し出す場合、話し手の未実行の動作に対する〈意志〉を表す。ただし、その話し手の未来の動作は、話し手の積極的あるいは自発的な動作ではない。ある条件が満たされれば、あるいは行為の実行が行われるべきときが来たら、「そうするだろう・そうするはずだ」というような、受動的・成り行き的な動作が差しだされている。そのような話し手の受動的・成り行き的な動作を未来の起こりうる話し手の判断として客観的に聞き手に伝えるとき、te: が用いられる。

例えば、次の用例では、「借金が払えない」という条件が満たされれば、事の成り行きとして、話し手が「家屋敷を没収する」という行為を実現しなければならなくなるだろうというような話し手の成り行き的な動作／意志を伝えている。

640) [借金が払えないという相手に対して]

haraj-u:s-an=du²²³ ʔar-e: eikata: nar-an. ʔund̃zu=nu ja:jacitei tuj-abi:n=te:
払う-POT-NEG=FOC ある-CND 仕方.TOP なる-NEG 2SG.HON=GEN 家屋敷.ACC 取る-POL=SFP
「払えないのであれば仕方がない。あなたの家屋敷を取りますよ。」(芝居, 1050)

²²³ 原文で、ひらがな表記では「さんでどー」だが、音素表記では「sandoo」と記されていて、表記にばらつきがみられる。どちらかあるいは両方が誤記の可能性があるので、筆者が文脈にあうよう修正を加えた。

次の二例でも、話し手の成り行き的な動作あるいは意志を話し手の判断として客観的に伝える文で *te:* が用いられている。「子供が出来たら」「(子供が出来て)子供が泣いたら」という条件が満たされれば、事の成り行きとして、そうしなければならないだろうというような、話し手の成り行き的な動作あるいは意志が文に差し込まれている。

641) A: *kk^wa t̃eui nae-e:, katati ʔueinat-i, kk^wa tai nae-e:, muruti: ʔueinat-i*

子.ACC 一人 産む-CND 片手 失う-SEQ 子.ACC 二人 産む-CND 両手 失う-SEQ

「子を一人産めば、片手失って、子を二人産めば、両手失って」

hambun eigtutu=n nar-an=do:ja:. ja-gutu ʔippe: ʔumihamar-an=de:

半分 仕事=ADD POT-NEG=SFP COP-CSL ととも 頑張る-NEG=OBLG

「半分仕事もできないよね。だから沢山頑張らなくちゃね。」

B: *ʔi:. ʔan sun=te:ja:. ʔumihamajun=te:*

ああ そう する=SFP 頑張る=SFP

「ああ。そうするよ。頑張るよ。」(芝居, 1030)

642) A: *waŋ=ga d̃zo:eĩteisu-ru tũtẽi=ni kk^wa nate-i:ne:, na:=ga ɕĩtẽitut-i*

私=NOM 炊事する-ADN 時=DAT 子供 泣く-CND 2SG.HON=NOM 引き取る-SEQ

「私が炊事する時に子供が泣いたら、貴方が引き取って」

bo:d̃za:=ja na:=ga=ru eikasun=do:ja:. ja-eiga bo:d̃za: eikae-iju:sum=i

子供=TOP 2SG.HON=NOM=FOC あやす=SFP COP-ADVRS 子供.ACC あやす-POT=YNQ

「子供は貴方があやしてよね。でも子供をあやすことできる?」

B: *ju: eikasun=te:. ʔune ʔune, kunu gutu*

上手に あやす=SFP INTJ INTJ こんな ふう

「上手にあやすよ。ほらほら、こんなふうにと行って、赤子を抱えた格好する。」(芝居, 1030)

次の用例も話し手の受動的・成り行き的な動作／意志を差し込んでいるのだろう。「年中仕事をしない」という条件が満たされれば、事の成り行きとして、そうするだろうというような話し手の判断が述べられている。対象的な内容が、話し手によって過去に反復的／習慣的に実現されてきた動作や事象を差し出す場合、その動作がこれからも続くであろうというニュアンスをあたえながら、話し手の判断を伝える。

643) [妻 B が夫 A のお腹を踏んづけたところに、シュヌメーがあらわれて...]

A: *eunume:, kunuɕa:=ga wan wata kudamit-i*

(人名) こいつ=NOM 私.GEN お腹.ACC 踏んづける-SEQ

「^{シュヌメー}主前、こいつが俺のお腹を踏んづけて...」

B: *niŋ=kara nind̃zu: eigtutus-an-de: ei:ku:n ʔaɕanatẽu-ru-munnu²²⁴ma: jat-i=n kudami:n=te:=ɕa:*

年=ABL 年中 仕事する-NEG-?? ?? 寝る.PEJ-ADN-CSL どこ COP-SEQ=ADD 踏んづける=SFP=PEJ

「年から年中仕事しないで寝やがるからどこだろうが踏んづけるしかないさ。」(芝居, 938)

話し手自身を動作主体に指定しながら、動作の実行の〈意志〉を *te:* を用いて伝える次のような場合、〈あきらめ〉という意味合いを付け加える。*wa:=ga sun=do:* (私=が する=よ)と *do:* の文がはっきり意志表示をしているのに比べて、*te:* の文は、「仕方なく」とか「成り行きだから」というニュアンスを伴う。

²²⁴ ʔaɕanatẽun アファナチュン「寝る」の卑語。寝やがる。

644) wa:=ga sun=te:

1SG=NOM する=SFP

「俺がやるよ…(俺がやるしかないね)。」(調査, 2015/11/9)

3.18.3 sandare: naran および eiwadu jaru の文

話し手の〈必要〉という判断を表す動作主体が一人称の sandare: naran および eiwadu jaru の文では、場面状況によっては《意志性》が生じて、意志文に近い意味あいをもつものもある。例えば、次の用例のように、動作の実行が予定されている、あるいは確実に約束されている場合等である。tẽa:ein (どうしても) や d̃ziɸi (ぜひ) のような副詞が共起しやすい。また、「しなければならぬが、でもしない」のような文が言えない。話し手にとって動作の実行は確実なものである。eiwadu jaru の文では sa が共起しやすい。その他、詳細は評価のモダリティのそれぞれの記述を参照されたい。

372) [仕事で那覇に行って来るという父 A。仕事・用務は義務的なものである]

A: ʔoto: san, na: ɸa=kai mence:-bi: n n:

お父さん 那覇=ALL 行く.HON-POL EQ

「お父さん、那覇にいらっしゃるんですって？」

B: ʔn:, na: tẽu:=ja d̃ziɸi ʔnd̃ziku:r-an=to:naran-eiga

うん FIL 今日=TOP ぜひ 行って来る-NEG=OBLG-ADVRS

「うん、もう今日は必ず行ってこないといけないが。」(日放, 280-281) (用例 416 と重複)

374) [王の妻に化けた鬼が人々を王に殺させて、その血を飲んでいたので下の役人が次のように言う]

kanci e-e: nar-an. kure: tẽa: e-i=n taid̃zi s-an=|are:naran

こう する-SEQ.TOP POT-NEG これ.TOP どう する-SEQ=ADD 退治 する-NEG=OBLG

「こうではいけない。これは絶対退治しなければならぬ…」(那民, 19)

417) ʔure: d̃ziɸi taid̃zi ei:-wa=rujaru

それ.TOP ぜひ 退治 する-CND=OBLG

「これはぜひ退治しなくては。」(那民, 19)

418) [忘れていたが、カレンダーに書いてあった予定に気づいて]

tẽu:=ja ha:ja:=ŋkai ʔiki-wa=ruja=sa

今日=TOP 歯医者=DAT 行く-CND=OBLG=SFP

「今日は歯医者に行かなきゃ！」(調査, 2016/10/24)

419) [市場へ買い物。聞き手に何を買うべきかを説明している]

mad̃ze: ku:bu=kara ko:-ibi:n. ku:bu=tu kat̃e: buce: wa:ei-t: na-ibir-an

まず.TOP 昆布=ABL 買う.POL 昆布=COM 鯉節.TOP 忘れる-SEQ.TOP なる-POL-NEG

「まずは昆布から買います。昆布と鯉節は忘れてはいけません。」

ja=sa. so:min ko:ri-wa=duja=sa. ʔuri=kara jae:=n ko:ri-wa=dujaru-mun

COP=SFP 素麺.ACC 買う-CND=OBLG=SFP それ=ABL 野菜=ADD 買う-CND=OBLG-FN

「そうだ！素麺を買わなきゃね。それから野菜も買わなきゃいけないわね。」(入門, 137) (用例 510 と重複)

3.18.4 i/mi の文(真偽質問形式)

主語を一人称にした i の文は、聞き手に問いかけて情報を引きだしているわけではないので、《問いかけ性》はなく、質問文としては機能していない。話し手の未実現の動作の〈意志〉を伝える文

である。話し手は聞き手に意志を質問文の形で伝えることで、／考えをめぐらせた結果、行為を決定した／または／ほとんど決定に傾いている／という意味あいをも「意志」に持たせている。

645) A: eikinaudun=kai sampue-i:ga ?ite-abir-an=i

(地名)=ALL 散歩する-PUR 行く-POL-NEG=YNQ

「識名御殿に散歩しに行きませんか。」

B: ?an ja-ibi:=saja:. maruke:ti ?ite-abi:m=i

そう COP-POL=SFP たまに 行く-POL=YNQ

「そうですね。たまには行きますか。」(楽沖, 101)

646) to:, ?ance: mata teumigui=ja migut-i, na:fa=nu matei=nde: teimbutsize-i teu:m=i

INTJ CNJ また 一巡り=TOP 巡る-SEQ 那覇=GEN 街=など 見物する-SEQ 来る=YNQ

「さあ、それではまた一巡して、那覇の街でも見物して来るか。」(芝居 2, 1530)

3.18.5 e:ja:形式

動詞の基本語幹に e:ja:²²⁵が後接し、さらに、「ndi ?umuin (～と思う)」というフレーズを伴って²²⁶、話し手の「意志」を引用文で表す時に用いられる。言い切りの形(終止用法)ではあらわれないため、先の意志形や断定形の意志文とは本質的には異なるが、引用節で意志形が用いられず、e:ja:の文が用いられるため、記述しておく(先述の通り、sandare: naran も引用節で用いられる)。

647) na: teu-teibai e-e:ja:=ndi ?umu-ibi:-n

もう 一-頑張り する-e:ja:=QT 思う-POL-IND

「もう一頑張りしようかと思えます。」(不明)

648) [方言ニュース]

kanako:kaku=ηkai ?uteina:=uti ?mmarit-a-ru dippana einadzina firumit-i ?ik-e:ja:=ndi

観光客=DAT 沖縄=LOC 生まれる-PST-ADN 立派な 品々.ACC 広める-SEQ 行く-e:ja:=QT

「観光客に沖縄で生まれた立派な品々を広めて行かなければならないと」

?umut-o:n=di ?ite-i, ?uhanaci so:-mice:-bi:t-an

思う-PROG=QT 言う-SEQ お話 する-PROG-POL-PST

「思っていると言って、お話ししておられました。」(ニュ, 66)

649) [無くなってしまった小学校の校舎跡に記念碑ができて]

warabi=nu kuru=nu ?iruiruna kutu ?ubindzate-i, kukuru ja:imai-ru basu=tu

子供=GEN 頃=GEN 色々な 事.ACC 思いだす-SEQ 心 休まる-ADN 場所=COM

「子供の頃の色々な事を思い出して、心休める場に」

nate-i ?ik-e:ja:=ndi ?umut-o:n=di ?ite-i, ?umui kumit-i ?uhanaci s-o:-mice:-bi:t-an

なす-SEQ 行く-e:ja:=QT 思う-PROG=QT 言う-SEQ 思い 込める-SEQ お話 する-PROG-HON-POL-PST

「して行かなければならないと思っていると言って、思い込めてお話ししておられました。」(ニュ, 70)

650) [沖縄芝居。士族だが、百姓の血が入っていることを誇りに思う話し手]

wan kunu karada=nu naka=nakai=ja, kunu kubama=nu cakueo:=nu tei:=nu nagarit-o:n

1SG.GEN この 体=GEN 中=DAT=TOP この (地名)=GEN 百姓=GEN 血=NOM 流れる-PROG

「私のこの体の中には、この小浜の百姓の血が流れている。」

²²⁵ 歴史的には動詞の条件形に終助辞 ja: が後接した形だと考えられる。

²²⁶ ndi ?umuin 以外のフレーズが来れるかどうかは未調査である。

kunu tei:sudzi wanne: φukut-i, kuri=kara te:eitei=ni e-e:ja=ndi ?umuin

この 血筋.ACC 1SG.TOP 誇る-SEQ これ=ABL 大切=DAT する-e:ja:=QT 思う

「この血筋を私は誇りに思っ、これから大切にしようと思う。」(芝居, 606)

話し手個人の〈意志〉というよりも、集団組織の方針や意向、あるいは、動作の実行に対する責任・義務を e:ja: で述べているような場合、日本語訳に「しよう」ではなく「しなければならない」が当てられている。

457) [方言ニュース。新設の郵便局について]

ju:binnteiku=tucei ?idziri mutte-i, eikutei ?umihat-i ?ik-e:ja:=ndi ?umut-o:ibi:n

郵便局=として 自覚.ACC 持つ-SEQ 仕事 励む-SEQ 行く-e:ja:=QT 思う-PROG-POL

「郵便局として自覚を持って、仕事に励んで行かなければならないと思っています…」(ニュ, 114)

651) [民話の最後に話者がいう]

mukaci=kara kadzu?o:ku keiken s-e:ru kuto:, k^wa?mmaga=ŋkai hanaci=ru

昔=ABL 数多く 経験 する-RES-ADV 事.TOP 子孫=DAT 話=FOC

「昔から数多く経験している事は、子や孫に話を」

?teite:judzur-e:ja:=ndi-ru kimotei, wanne: onegai su-ru ba: jai-bi:n

伝え譲る-e:ja:=QT-ADN 気持ち 私.TOP お願い する-ADN FN COP-POL

「語り継いでいかなければいけないという気持ち、私はお願いするわけです。」(那民, 28) (用例 295 と重複)

述語に無意志動詞が用いられると、話し手の〈願い〉を表す。

652) einei=kai nar-e:ja:=ndi ?umut-i

先生=ALL なる-e:ja:=QT 思う-SEQ

「先生になろうと…」(調査, 2017/1/23)

意志のモダリティまとめ

表 35 意志のモダリティまとめ

		意志形を述語にもつ	断定形を述語にもつ
人称		一人称	一人称
テンス		なし	非過去
付加される終助辞	なし	○しばしばぶっきらぼう	○しばしばぶっきらぼう
	u:i:	○親しみ	×
	na	△独話でのみ可	×
	ja:	○聞き手利益・不利益	×
	do:	×	○聞き手めあて
	sa	×	○瞬間的
	saja:	×	○必然的
	te:	×	○成り行きの
周辺の意志文：sandare: naran および eiwadu jaru(/jasa)の文、真偽質問文 引用節における意志：述語の基本語感 + e:ja:			

意志文には、二分すると意志形を述語にもつ文と断定形を述語にもつ文がある。それぞれ付加される終助辞が異なる。意志形を述語にもつ文は、意志形という形式自体が〈意志〉という語彙的な意味を持っていて、一人称文で〈意志〉という意味を実現させる。形式自体にテンスがない。u:/i:およびja:という終助辞が用いられる。断定形を述語にもつ文は、一人称文において形式が非過去形をとり、《対象的な内容》が話し手の未実現の動作を差し出すことで〈意志〉を表す。do:, sa, saja:, te:という終助辞が用いられる。さらに、評価形式が場面状況によって〈意志〉を表すこともある。

第3章 「叙述のモダリティ」まとめ

本章では、叙述のモダリティについて、〈記述〉の文・推量文・疑い文・思い出させる文・〈前提〉を表す文・説明文・感嘆文・評価文・希求文・意志文の順番で記述を行った。記述の順番について、必ずしも最善なものとは言えないだろう。順序良く〈記述〉の文のようなリアルな事象を差し出す文から記述し、推量文や疑い文のようにポテンシャルな事象を差し出す文を記述するのがよいだろう。しかしながら、論述のわかりやすさを考慮すると、思い出させる文や〈前提〉の文のような周辺的なものを後に記述せざるを得なかった。さらに、宮崎他(2002)や日本語記述文法研究会(2003)等の従来の研究では、「したい」の文を含む希求文についての記述がなく、また、意志文については勧誘文や命令文等と同列に分類・記述されることが多かった。したがって、希求文や意志文を認識・評価のモダリティの枠組みから一旦外して記述することにした。記述の順番や分類方法については、今後さらなる検討が必要である。

第4章 実行のモダリティ

〈実行〉のモダリティは、動作主体に必ず聞き手(二人称)を含み、聞き手に〈働きかけ〉を行う文のモダリティである。勧誘文・命令文・依頼文・禁止文が含まれる。〈実行〉のモダリティを勧誘文から書き始めるのは従来からすると珍しい。本論の流れとして、意志文のすぐ後に勧誘文を述べておく必要があると考え、ここでは、一・二人称を動作主体とする勧誘文から述べ、その後、二人称を動作主体とする命令文・依頼文・禁止文について述べる。

〈実行〉のモダリティは、先の述べた通り、文自体に二人称という人称性が潜在していて、さらに、勧誘文では、話し手も主体に入りこんで一・二人称という人称性が潜在している。テンスの対立がない。また、述語には意志動詞しか取れないという語彙的な制約がある。無意志動詞と意志・勧誘形は共起できるが、文のモダリティが〈意志・勧誘〉ではなくなり変化する。

4.1 勧誘文

勧誘文は、動作主体が話し手と聞き手(一・二人称)であり、未実行の動作を共同で行おうと働きかける文である。形式としては、述語に勧誘形を含む文、勧誘形に終助辞ja:やnaが付いた文、否定質問文、述語に断定形をもつ文等がある。日本語の「しようか」のような疑問化の形式は存在しない。引用は、終助辞ja:かna付きなら可能である。

引用文での使用例

653) na:=ga jurusa-ba, ?ujakk^wa sannin m^uteimaciku ?uteiju kuras-a=ja:=ndi ?ite-i
 2SG.HON=NOM 許す-CND 親子 三人 睦まじく 浮世 暮らす-HORT=SFP=QT 言う-SEQ

jakusuku=n s-o:-gutu, mama n-aŋe-i k^wi-nso:r-e:, su:
 約束=ADD する-PROG-CSL 儘 なる-CAUS-SEQ BEN-HON-IMP2 父

「お父さんが許せば、親子三人睦まじく暮らそうねと言って、約束もしているから、結婚させて下さい、お父さん。」
 (芝居, 1014-1016)

452) [動物保護に関する方言ニュース]

ʔiteimuci-g^wa:-ta: mamuju-ru tami=nu undo: ʔukus-a=na=ndi ʔite-i,
 動物-DIM-PL 守る-ADN ため=GEN 運動.ACC 起こす-HORT=SFP=QT 言う-SEQ

「動物たちを守るための運動を起こそうと言って」

inu=ja neko=o sutenaide=ndiʔite-i kate-e:-ru tatikamban rukume:
 犬=や 猫=を 捨てないで=QT 書く-RES-ADN 立て看板 六枚.ACC

「『犬や猫を捨てないで』と書かれてある立て看板六枚を... (後略)」(ニュ, 39)

4.1.1 終助辞なしの文

終助辞なしの勧誘文は、非常にぞんざいなニュアンスを伴う。したがって、非常に打ち解けた間柄同士で用いられる。madzun (一緒に) や ʔe:ku (早く) 等の副詞を伴うことも多い。

654) A: nna matteo:-kutu ʔe:ku ʔik-a

みんな 待つ.PROG-CSL 早く 行く-HORT

「みんな待っているから早く行こう。」

B: ʔi:na=na:

もう=YNQ2

「もう行くの？」(リア, 4)

655) [草刈りをしないで遊んでいたら怒られて泣いている弟への兄のセリフ]

na: nak-aŋk-e:. to:, madzun kusa ka-iga ʔik-a

もう 泣く-NEG-IMP2 INTJ 一緒に 草.ACC 刈る-PUR 行く-HORT

「もう泣くな。さあ、一緒に草を刈りに行こう。」(入門, 98)

656) [友達の家遊びに行こうと言って]

A: dzu:su-g^wa:=tu k^wa:ei-g^wa: ko:t-i=kara ʔik-a

ジュース-DIM=COM お菓子-DIM.ACC 買う-SEQ=ABL 行く-HORT

「ジュースとお菓子を買ってから行こう。」

B: ʔai, dzin=nu ne:ran. ʔja: mutte-o:m=i

INTJ 金=NOM ない 2SG 持つ-PROG=YNQ

「あ、お金がない！お前持ってるか？」

A: wannin ne:ran=do:. ŋea: su=ga

1SG.ADD ない=SFP.ASS どう する=WHQ

「俺もないよ。どうする？」

B: na: dzu:ru:-ta: ja:=ŋkae: ʔatea ʔik-a

もう (人名)-PL.GEN 家=DAT.TOP 明日 行く-HORT

「もうジルーの家には明日行こう。」(入門, 34) (用例 557 と重複)

657) [友達同士、複数人でバリ島旅行に行こうと盛り上がる]

A: dzu:ru:=n so:t-i ʔik-a

次郎=ADD 連れる-SEQ 行く-HORT

「次郎も連れて行こう。」

B: kudzu ʔndz-o:-kutu eimun=tisa

去年 行く-PROG-CSL 済む=QT.ASS

「去年行ったからいいんだとき。」(語遊「イチュン」2011/5/8, p. 18)

丁寧形が用いられる場合は、ぞんざいさはなくなる。したがって、終助辞なしの用例も多い。聞き手が目上か、あまり親しくない間柄で用いられる。聞き手が目上でも、述語に尊敬語は用いられない。

658) \widehat{teu} :=ja ko:ju-ru mun=nu $\text{?u}\phi$:ku ?a -ibi:-kutu, maci \widehat{tei} =nu ko:setsuiteiba= η kai ?ite -abir-a
今日=TOP 買う-ADN 物=NOM 多く ある-POL-CSL (地名)=GEN (地名)=DAT 行く-POL-HORT

「今日は買う物がたくさんありますので、牧志の公設市場に行きましょう。」(中略)

?wa :=nu nakami=tu mimiga: ko:-ibir-a
豚=GEN 中身=COM 耳の皮.ACC 買う-POL-HORT

「豚の内臓と耳の皮を買きましょう。」(実践, 136-138)

659) [上の続き。牧志の公設市場で買い物をしていたら、お腹がすいてきて。市場の二階は食堂街]

ni:ke:= η kai nubut-i ?iju =nu eiru k^w attei: e-i na:-bir-a
二階=DAT 上る-SEQ 魚=GEN 汁.ACC ご馳走 する-SEQ 見る-POL-HORT

「二階に上って魚の汁をご馳走になってみましょう。」

nu:di:=n kawate-o:-ibi:-kutu, oriombi:ru num-abir-a. k ampai s-abir-a
喉=ADD 渴く-PROG-POL-CSL オリオンビール.ACC 飲む-POL-HORT 乾杯 する-POL-HORT

「喉も渴いていますので、オリオンビールを飲みましょう。乾杯しましょう！」(入門, 139)

4.1.2 終助辞 na の文

終助辞 na が付いた勧誘文は、〈勧誘〉という意味あい聞き手配慮のもと、やわらかく、あるいは親しみを込めて伝える。

次に挙げる用例は、動作の実行を共同で行おうと〈提案〉する文である(宮崎他, 2002)。〈提案〉の文では、まだ完全に聞き手を取り込んではいない。動作の実行の選択は聞き手に委ねられている。動作自体がどちらか一方が行うか、もしくはそれぞれ別々の独立した動作が差しだされる場合があるが、共同でまたは同時に行うものである。

660) [ずる賢い金持ちが欲のない正直な貧乏人の家の石垣の間に挟まった黄金石に目をつけて、どうにかその石垣の黄金石を手に入れようと企む]

A: kudzu=nu kume: ?ja = η kai k^w i:ju=sa
去年=GEN 米.TOP お前=DAT くれる=SFP

「去年の米はお前にあげるよ。」

B: ?a -ibir-an. wanne: du:=nu mun=ei \widehat{dzu} :bun jan
COP-POL-NEG 1SG.TOP 自分=GEN 物=INST 十分 COP

「いえいえ。私は自分の物で十分だ。」

A: $\widehat{?ite}$ anda=e \widehat{ei} k^w ino: ?ar -an. ?ja =ga \widehat{teid} -e:-ru $\widehat{?ie}$ igatei= \widehat{ja} $\widehat{teimu}\phi\widehat{udz}$ -o:n
タダ=INST BEN.TOP COP-NEG 2SG=NOM 積む-RES-ADN 石垣=TOP 気に入る-PROG

「タダであげるのではない。お前が積んである石垣が気に入った。」

?uri =tu kura ?ippe :=nu kudzu=nu kumi=tu $\widehat{ke:r}$ -a=na
それ=COM 蔵 いっぱい=GEN 去年=GEN 米=COM 替える-HORT=SFP

「それと蔵いっぱい去年の米と替えよう。」(大沖 31, 35) (用例 637 と重複)

661) [首里から地方の離島に赴任した役人 B と地元出身の役人 A との会話]

A: gudze:ban=nu $\widehat{?ute}$ ikara=e \widehat{ei} \widehat{caku} eo:-nu \widehat{tea} :=ga \widehat{tateid} zuku nai-ru gutu
御在番=GEN お力=INST 百姓-PL=NOM 自立 できる-ADN ように

kange:t-i ?utabi-mice:-bir-i

考える-SEQ BEN.HON-HON-POL-IMPI

「御在番のお力で百姓達が自立できるように、考えて下さいませ。」

B: kuri=kara ?utage:ni t̄sikara ?ut̄ciawate-i, çakueo:-nut̄ea:=ga eiawaei=ni

これ=ABL お互いに 力.ACC 合わせる-SEQ 百姓-PL=NOM 幸せ=DAT

「これからお互いに力を合わせて百姓達が幸せに」

nai-ru gutu hakarat-i ?ik-a=na

なる-ADN ように 計らう-SEQ 行く-HORT=SFP

「なるように取り計らって行こう。」(芝居, 536)

662) A: nama=ni=n ?ami=nu φu-i-gisa: ja=ssa:=ja:

今=DAT=ADD 雨=NOM 降る-INF-そう COP=SFP.MON=SFP

「今にも雨が降りそうだね。」

B: jar̄=ja:.. φur-an ma:du φe:ku ke:r-a=na

COP=SFP 降る-NEG 間 早く 帰る-HORT=SFP

「そうだな。降らないうちに早く帰ろうよ。」(語遊「シダギサン」2010/1/24, p. 13)

663) [子供が体調が悪いと言って]

?ance:, kunu niteihakaja:=sa:ni hakat-i nd-a=na

CNJ この 体温計=INST 測る-SEQ 行く-HORT=SFP

「それじゃあ、この体温計で測ってみよう。」(入門, 52)

664) [民話。欲張りな夫婦が何でも叶える不思議な石臼を奪おうと企んで]

?anu ?u:ei tuj-a:i, kunujo:na ?inaka eitit-i, sui=nd̄zi d̄zi:taku=ni kuras-a=na

あの 臼.ACC 取る-SEQ このような 田舎 捨てる-SEQ 首里=LOC 贅沢=DAT 暮らす-HORT=SFP

「あの臼を(奪い)取って、このような田舎捨てて、首里²²⁷で贅沢に暮らそう。」(大沖 33, 85)

次の用例は、話し手の動作の実行に聞き手を積極的に誘い込む(引き込み)を表す(宮崎他, 2002)。

665) A: di:, ?uteina:gutei=eei hanaei:-g^wa: s-a=na

INTJ 沖縄言葉=INST 話-DIM する-HORT=SFP

「さあ、沖縄言葉で話をしよう。」

B: ?an sum=i

そう する=YNQ

「そうするか。」(語遊「サーイ」2010/2/28, p. 19)

666) [民話。急いで出て来たのでおにぎりに塩を入れるのを忘れてしまい、何でも願えば出してくれる石臼に塩を出してもらおうようお願いする]

?e:, eiwa su=nake:.. mad̄zi tihad̄zimi=ni ma:sa ma:su ?nd̄zas-a=na

INTJ 心配 する=PROH まず 手始め=DAT 美味しい 塩.ACC 出す-HORT=SFP

「なに、心配するな。まず手始めに美味しい塩を出そう。」(大沖 33, 86)

次の用例は、動作の実行のタイミングを伝える文(促し)である(宮崎他, 2002)。

667) [目的のそば屋の場所がわからず、通りすがりの女性に道を聞いた]

guri:d̄zi ?unnukij-abi:n. to: san[u: ?isud̄z-i tu:r-a=na

御礼儀 言う.HUM-POL INTJ (人名) 急ぐ-SEQ 通る-HORT=SFP

²²⁷ 琉球王朝時代の王都。

「どうもありがとうございます。さあ、サンルー急いで行こう (lit. 通ろう)。」(入門, 115)

もちろん、丁寧形にも *na* が接続する。次の用例は〈提案〉の例である。

668) [王様の病気を治すには猿の生肝が必要だと言って、何も知らずにこのこやって来た猿だが、タコがそれを暴露したので、慌ててその場を去ろうと嘘を付く]

A: ʔan ja=sa. ntea. dzitee: wanne: teimu ki:=ŋkai ɸute-e:t-a-ru-munnu, ʔunumama teimu
そう COP=SFP INTJ 実.TOP 1SG.TOP 肝.ACC 木=DAT 干す-RES-PST-ADN-FN そのまま 肝.ACC

「そうだ！ そうそう。実は私、肝を木に干したんだ。そのまま肝を」

wacit-i te-o:-ibi:=sa

忘れる-SEQ 来る-PROG-POL=SFP.MIR

「忘れて来ていますよ。」

B: nu: jan=di:. teimu wacit-i te-an=di=na:. na: jakke: nat-an

何 COP=QT.EQ 肝.ACC 忘れる-SEQ 来る-PST=QT=YNQ2.MIR もう 厄介 なる-PST

「何だと？ 肝を忘れて来たとな？ これはもう厄介だな。」

A: ʔanee:, teimu tu-i:ga muduj-abir-a=na

CNJ 肝.ACC 取る-PUR 戻る-POL-HORT=SFP

「それじゃあ、肝を取りに戻りましょう。」

B: eikata: ne:n. mudujum=i

仕方 ない 戻る=YNQ

「仕方がない。戻るか。」(猿, 6)

4.1.3 終助辞 *ja* の文

終助辞 *ja* が付いた勧誘文は、〈引き込み〉の文では〈念押し〉、〈提案〉の文では〈同意要求〉の意味あい付け加わる。

669) [海外旅行となると、いつも尻込みする友人を誘うときに。念押しして説得している]

kundo: hawai ʔoko: de:-mun. madzun ʔik-a=ja:

今度=TOP ハワイ 旅行 COP2-FN.CSL 一緒に 行く-HORT=SFP

「今度はハワイ旅行だもの。一緒に行こうよねえ。」(語遊「ヤー」2010/9/26, p. 13)

670) A: kanɛi takidaki mijamija ugad-i, ʔug^wan ei:-ne:, ɸunto: naɛimunukk^wa=ni migumarij-abi:=gaja:

このように 巖々 宮々 拝む-SEQ 拝み する-CND 本当 子宝=DAT 恵まれる-POL=DUB

「このようにあちらこちらの御嶽やお宮に拝み回りすれば、本当に子宝に恵まれますでしょうか…」

B: teittu ʔmmari:n. ja-gutu, teimu=nu nindzi de:itei=do:, makatu:. to:, kundo: ɸutimma=ŋkai

きっと 生まれる COP-CSL 肝=GEN 念じ 第一=SFP.ASS (人名) INTJ 今度.TOP (地名)=DAT

ʔndz-i g^wantati ss-a=ja:

行く-SEQ 願立て する-HORT=SFP

「きっと生まれる。だから、念じることが大事だよ、マカトゥー。さあ、今度は普天間に行って願立てしよう。」

(芝居, 634)

671) [嫁 A と姑 B が一緒に夕飯を準備すると言って。同意するものだという態度で述べる]

A: teu:=ja nu: s-abi:=ga

今日=TOP 何 する-POL=WHQ

「今日は何にしますか。」

B: so:min taeija: ss-a=ja:

素麺 炒め する-HORT=SFP

「素麺の炒め物にしようね。」(実践, 128)

672) [同意要求。共同で行うよう提案しつつ, 聞き手に賛同してほしい]

A: ?ure: wa: mun=du ja-eiga

これ=TOP 1SG.GEN 物=FOC COP-ADVRS.NASS

「これは俺の物だが。」

B: ?ance:, tan̄ka:wa:ki: ss-a=ja:

CNJ 山分け する-HORT=SFP

「それじゃあ, 山分けしようよ。」(語遊「チュクイワーキー」2011/8/14, p. 11 & 調査, 2017/1/23)

673) [動作は共同作業。同意要求 (用例 347 と同文)]

kuri=n watta: ?untei ja=sa. kunu kk^wa=nu na:=ja kanidzo:=tucci rippa=ni sudatir-a=ja:

これ=ADD 1PL.GEN 運命 COP=SFP.MIR この 子供=GEN 名=TOP (人名)として 立派=DAT 育てる-HORT=SFP

「これも私たちの運命だよ。この子供の名前はカニジョー(鉄錠)として立派に育てようね。」(大沖 32, 40-41)

次の用例では, 文が同じ内容を差しだしているが, 初めの文は〈同意要求〉で, 後の文は〈念押し〉である。動作の働きかけが一度実行されているかどうか意味あいの違いに関わっている。

674) A: ?appa:, kuri=kara wan=tu mad̄zun kuras-a=ja:

母 これ=ABL 私=COM 一緒に 暮らす-HORT=SFP

「お母さん, これから私と一緒に暮らそうね。」

B: ?usuri na-ibir-an. wanne: ?uming^wa teumi n:te-e:-ibi:-gutu, na: ?umuinukusu-ru kuto: ne:j-abir-an

恐れ なる-POL-NEG 1SG.TOP 我が子.ACC 一目 見る-RES-POL-CSL FIL 思い残す-ADN 事.TOP ない-POL-NEG

「恐れ入ります。私は我が子を一目見ただけで, もう思い残す事はありません…」

A: nu:=n[i ?i-nee:=ga. wanne: na: so:-iga=ru wad̄zawad̄za te-an=do:ja: (中略)

何=QT 言う-HON=WHQ 私.TOP 2SG.HON 連れる-PUR=FOC わざわざ 来る-PST=SFP

「何ておっしゃるか。私は貴方を連れにわざわざ来たんだよ。」

ja-gutu, kuri=kara: mad̄zun kuras-a=ja:

母 これ=ABL 一緒に 暮らす-HORT=SFP

「だから, これから一緒に暮らそうね。」(芝居, 611)

次も〈提案—同意要求〉の例である。その提案に対しても「しよう」と勧誘形+ja:の文で返答することで, 同意を表すことができる。

675) A: (前略) su:=ni nigaj-ai mi:tu nar-a=ja:

父=DAT 願う-SEQ 夫婦 なる-HORT=SFP

「お父さんをお願いして, 夫婦になろうね。」

B: ?an s-abir-a=ja:

そう する-POL-HORT=SFP

「そう, しましようね。」(芝居, 1013)

4.1.4 否定質問文

一・二人称を主語にした否定質問形式を述語に含む文は〈勧誘〉を表す。

676) $\widehat{d}ziru$:-ta: ja:= η kai ?aeib-i:ga ?ik-an=i

(人名)-PL.GEN 家=DAT 遊ぶ-PUR 行く-NEG=YNQ

「ジルーの家に遊びに行かないか。」(入門, 34)

677) [目的のそば屋に行くにはどこを通れば一番近いかを考え中]

A: $\widehat{d}zi$:bu=nu $\widehat{e}itea$ =kara ei:ei tu:t-i ?ik-an=i

儀保=GEN 下=ABL 末吉.ACC 通る-SEQ 行く-NEG=YNQ

「儀保の下から末吉を通って行かないか。」

B: ?ama : tu:sa-ibi:n=do:

あそこ.TOP 遠い-POL=SFQ.ASS

「あそこは遠いですよ。」(入門, 107) (用例 338 と一部重複)

678) A: \widehat{barito} : r'oko:=nu ?a-eiga , \widehat{madzum} ?ik-an=i

バリ島 旅行=NOM ある-ADVRS 一緒に 行く-NEG=YNQ

「バリ島旅行があるけど、一緒に行かないか?」

B: taru:=ga ?iteur-a : ?iteu=sa

太郎=NOM 行く-CND 行く=SFP

「太郎が行くなら行くよ。」(語遊「イチュン」2011/5/8, p. 18) (用例 635 と同文)

4.1.5 断定形の文

動詞の断定形を述語に含む文が、話し手と聞き手がこれから共同で行う動作を表す場合、〈勧誘〉を表す。一・二人称文にて未実現の動作の実行を〈宣言〉することで、〈勧誘〉といった意味あいを表している(宮崎他, 2002, p. 38)。

679) \widehat{teu} :=ja ko:ju-ru mun=nu ?ufo:ku ?a-ibi:kutu , $\widehat{maeitei}$ =nu ko:setsuiteiba= η kai ?ite-abir-a

今日=TOP 買う-ADN 物=NOM 多く ある-POL-CSL (地名)=GEN (地名)=DAT 行く-POL-HORT

「今日は買う物がたくさんありますので、牧志の公設市場に行きましょう。」

\widehat{madze} : ku:bu=kara ko:-ibi:n. ku:bu=tu \widehat{kateu} :buce: wacit-e: na-ibir-an

まず.TOP 昆布=ABL 買う-POL.IND 昆布=COM 鯉節.TOP 忘れる-SEQ.TOP なる-POL-NEG

「まずは昆布から買います。昆布と鯉節は忘れてはいけません。」(入門, 137) (用例 658 と重複)

〈宣言－勧誘〉の文に終助辞 do:が用いられる場合、実行のタイミングを伝える。

680) [姑 A から嫁 B に向かって言う]

A: \widehat{madzun} ju:ban \widehat{eiko} :i sun=do:

一緒に 夕飯 準備.ACC する=SFP.ASS

「一緒に夕飯の準備をするよ。」

B: ?u :. \widehat{teu} :=ja nu: s-abi:=ga

はい 今日=TOP 何 する-POL=WHQ

「はい。今日は何にしましょうか。」(入門, 126-127)

4.1.6 命令形を用いた〈勧誘〉

命令文というのは、基本、聞き手が主語となり、動作主体となる。しかし、次の用例のように、nnacei (みんなで)のような語を伴って、あるいは、文脈上行為の実行に話し手が参与するような命令文、あるいは命令形式を述語に持つ文は、機能的に、もはや〈命令〉から〈勧誘〉に移行している。

681) A: nu:gana i: kange:=ja ne:raŋ=gaja:

何か 良い 考え=TOP ない=DUB

「何か良い考えはないかなあ。」

B: to:, nna=ɛɛi ʔciburu migurac-e:

INTJ 皆=INST 頭 回す-IMP2

「さあ、みんなで頭を回せ。」(猿, 4) (用例 251 と同文)

682) A: nama=ni=n ʔami=nu ʔu-i-gisa: ja=ssa:=ja:

今=DAT=ADD 雨=NOM 降る-INF-そう COP=SFP.MON=SFP

「今にも雨が降りそうだね。」

B: jaŋ=ja:. ʔur-an ma:du ʔe:ku ke:r-a=na

COP=SFP 降る-NEG 間 早く 帰る-HORT=SFP

「そうだな。降らないうちに早く帰ろうよ。」

A: ʔan sum=i. to:, ʔanee: ʔe:ku tu:r-e:. kadzi ʔite-i gisa: ja-kutu, ndi:-ne: de:dzi nain

そう する=YNQ INTJ CNJ 早く 通る-IMP2 風邪 ひく-INF そう COP-CSL 濡れる-CND 大変 なる

「そうするか。さあ、それでは早く行こう (lit. 早く通れ)。風邪ひきそうだから、濡れたら大変だ。」

(語遊「シダギサン」2010/1/24, p. 13) (用例 171, 662 と重複)

勧誘文のまとめ

勧誘文では、勧誘形を述語に含む文、否定質問形式を述語に含む文、断定形を述語に含む文、命令形式を用いた文が〈勧誘〉を表すことを記述した。勧誘形および否定質問形式による勧誘文は、聞き手が拒否する等、動作の実行の選択が聞き手に委ねられている場合は動作が行われぬ可能性があるが、断定形および命令形による勧誘文は、ほとんど自ずと実行される動作が差し込まれる。

勧誘形と否定質問形式による勧誘文を比べると、文全体のニュアンスとして、勧誘形による勧誘文では、話し手は動作の実行を一方向的に決めてかかっているが、否定質問形式による勧誘文では、聞き手の意向を探るような配慮が感じられる。動作主体が一・二人称で、未実現の動作の実行を働きかけるような文ならば、〈勧誘〉を表すことができるので、上記の形式以外にも〈勧誘〉を表す文があるかもしれない。

4.2 命令文

ここでは、首里方言の行為要求文²²⁸のうち、命令文に焦点をあてて、命令文のモダリティについて詳しく論じる。ここでいう〈命令〉とは、「話し手が聞き手に働きかけて、話し手の観点から望ましく思う動作の実行を、聞き手に求める」ことを指す²²⁹。だれにどのように働きかけて、どのくらい求めるのか、場面や文脈によって、強制的なものから、非強制的なものまで命令文といっても様々である。

首里方言の命令形には、基本的²³⁰な形式として*i* 終わりの *e-i* 形式と *e* 終わりの *e-e* 形式の二つがある²³¹。現代首里方言では、*ee* 形式が命令文を形づくる最も基本的な形として位置づけられる。*ei* 形式

²²⁸ 本論では、行為要求文という用語を、動作主体が二人称である命令文と、動作主体が聞き手を含んだ一・二人称である勧誘文という二つの文の総称として用いる。

²²⁹ 本論でのこの規定は、村上 (1993) の命令文のモダリティの規定に従ったものである (p. 68)。

²³⁰ ここでいう「基本的」とは、命令の形式が命令文を形作るという形態論上の理由だけでなく、使用頻度が高いという理由からも判断される。

²³¹ *ei* 形式や *ee* 形式等というのは、最も基本的な二つの命令形式を動詞 *sun* (する) で代表したものであり、抽象的・名付け的なものである。例えば、*ʔikun* (行く) なら、*ei* 形式が *ʔiki*、*ee* 形式が *ʔike* となるように。

は、そのままの形でも用いられるが、多くは、終助辞 jo:を後接させた eijo:という形で用いられ、この eijo:形式は幾分聞き手に配慮した言い方となる。ee:, ei, eijo:の三つの形式の他に、wa 形式がある。wa 形式は、主に命令形が ei や ee:という形であらわれないいくつかの特定の動詞（主に teu:n「来る」）の命令形として用いられる。

4.2.1 〈命令〉というモダリティと場面状況的な意味あい

次にみるように、ee:形式, eijo:形式, ei 形式, wa 形式を述語に含む文は、ニュアンスに程度差はあるが、いずれも命令文を形づくることができる。

- 683) $\phi e:ku$ $\eta irab-e:$ 早く 選べ。
 684) $duce:$ $ju:$ $\eta irab-i=jo:$ 友達は よく 選べよ。
 685) $\phi e:ku$ $\eta irab-i$ 早く 選べ。
 686) $\phi u:saru$ $mu\eta=kara$ $\eta irab-i=wa$ 欲しい もの=から 選べ。

これらの形式（を含む文）がどのように使い分けられているのか、それぞれがどのようなモダリティを実現しているのかについて分析したところ、命令文にも様々なヴァリエーションがあり、また〈命令〉というモダリティだけでなく、〈勧め〉や〈許可〉といった場面状況的なニュアンス・意味あいを含んだモダリティをも表せることがわかった。結論を先に述べると、以下の表のようにまとめられる。

表 36 ee:形式と eijo:形式の〈命令〉のモダリティ

強制	利益性	〈命令〉としての機能	形式	付加された機能	形式
強 ↑ ↓ 弱	聞き手不利益あり	〈強制〉	ee:, ei(古)	+ 〈罵倒〉	ei k ^w e:wa
		〈指示 1〉	ee:, ei(古)	+ 〈同意=念押し〉	ee:ja:
	聞き手不利益 ニュートラル	〈違反矯正〉	厳しく ee: やさしく eijo:	—	—
		〈指示 2〉	eijo:	+ 〈同意=念押し〉	eijo:ja:
		〈丁寧な命令・促し〉	eimiso:re: eimiso:rjjo: eimice:bire: eimice:biri eimice:birijo:	—	—

表 36 の用語の説明：

強制(力)：話し手から聞き手への「動作の実行に対する強制的な態度の度合い」のことを指す²³²。

利益性：動作の実行の実現により生じる利益あるいは不利益のことを指す。命令文（動作の実行を要求する文）は、話し手が望む動作を聞き手に働きかけて仕向ける文なので、原則、話し手側にいつも利益がある。しかしながら、命令形が用いられていたとしても常に命令文になるわけではない。利益の有無および聞き手にも利益あるいは不利益がおよぶかどうかによって、文の意味あい・機能が変化する。

機能：具体的な使用場面におけるプラグマティカルな意味あい・機能のことを指す。命令文では、〈命

²³² 拘束力とも呼ばれ、酒井（2012）では「拘束力が強い場合は、聞き手に行為の実行についての決定権はなく、弱い場合は聞き手に行為の実行権がある」と説明がなされている（p. 20）。

令) という土台的な意味 (あるいはセマンティカルな意味) に、〈要求〉や〈勧め〉といった意味あい が付け加わる。〈要求〉の文は、強制力と利益性の観点からさらに〈強制〉や〈指示〉等に細分化される。

付加された機能: 命令形式の後ろにさらに終助辞やその他の文法化した諸形式が付加されて、それと同時に文に付加される別の意味あいや機能のこと。例えば、〈命令－強制〉の文に k^we:wa という形式が付加されて、〈罵倒〉という意味あい・機能が付け加わり、〈命令－強制－罵倒〉となる等。

このような場面状況的なニュアンス・意味あいは、下記に示す通り、発話にかかわる場面状況的な要素・条件のあり方によって、変化することも明らかになった。

(1)話し手と聞き手との関係

- ・話し手は聞き手より目上か目下か
- ・話し手と聞き手の性別
- ・話し手と聞き手が知り合いかどうか (どのくらい親しいか)
- ・話し手と聞き手の制度的階級 (貴族・士族・平民)
- ・話し手と聞き手の社会的階級 (職業等)

(2)動作の実行によってもたらされる利益性

- ・話し手に利益あるいは不利益がある行為か
- ・聞き手に利益あるいは不利益がある行為か
- ・利益性はニュートラル

(3)動作への意向や希望

- ・聞き手がさきに行為の実行に対する意志・意向・希望を示しているかどうか

(4)どのような動詞が使われているか

- ・動詞の語彙的な意味
- ・動詞の意志性・無意志性
- ・動詞の具体性・抽象性

(5)動作主体は誰か

- ・聞き手 (二人称)
- ・話し手も含む (一・二人称)
- ・不特定多数
- ・無情物

(6)働きかけの効力 (行為の実行はいつ行われるべきか)

- ・発話直後、今
- ・必ずしも発話直後でなくてもよい。いつ実行すべきかが文脈の中で示されている。

(7)場面や発話状況

- ・行為の実行が行われる前か最中かその後か
- ・話し手の望まない聞き手による違反・逸脱行為

(8)時代背景や場面設定

- ・現代社会か、琉球王朝時代か、芝居か、等

本研究では、このような様々な観点から、命令文について分析を行った。以下では、まず *ee*:形式が用いられる、強制的かつ聞き手の利益にならない典型的な命令文からみていき、その次に、*ei*:形式の命令文について述べたあと、*ei*_{jo}:形式の命令文およびその他の命令文のヴァリエーション等について述べる。

4.2.2 *ee*、*ei*、*ei*_{jo}、*wa* 形式の文による〈命令〉

4.2.2.1 *ee*:形式の文による〈命令〉

ee:形式は、聞き手の意向を無視した、一方的で、聞き手利益のない〈強制的な命令〉の文で用いられることが多い。例えば、次の用例の話し手 A の発言は、聞き手に対して行為の実行の決定権を全く与えない強制力の非常に強い命令文である。行為の実行は聞き手にとって利益のない、むしろ不利益なものである。ここでいう不利益には、聞き手へ不快感を与えるかどうかも含まれている。聞き手にとって不利益な命令文は、同時に不快感も与える。

10') [親 A と子 B の会話。子 B は A に勘当される]

A: ?ja: t̄e:ra: n:d̄zi-buc-iku=n ne:n. nama e:igu ?nd̄zit-i ?ik-e:
 2SG.GEN 顔.TOP 見る-DES=ADD ない 今 すぐ 出る-SEQ 行く-IMP2
 「お前の顔は見たくもない。今すぐ出て行け。」

B: ?u:. ?nd̄zit-i ?ite-abi:=sa
 はい 出る-SEQ 行く-POL=SFP
 「ええ。出て行きますよ。」(調査, 2015/11/30)

687) [乱暴な男 A に、女 B が優しく接してくれたらうれしいのにとこぼすが]

A: ?ja:=ga ?wi:rikisat-i=n wanne: ?wi:rikiko: ne:n. kuφamuni:=ja
 2SG=NOM 面白く-SEQ=ADD 1SG.TOP 面白く.TOP ない 口の荒さ=TOP
 wan ?mmari=du ja-kutu, kune:to:k-e:
 1SG.GEN 生まれ=FOC COP-CSL 我慢しておく-IMP2
 「お前が嬉しくても俺は嬉しくない。口が荒いのは生まれつきだから、我慢しておけ。」

B: ?ance:, na: jutas-aibi:=sa
 CNJ もう よろしい-POL=SFP
 「それでは、もう結構です。」(実践, 45)

聞き手利益の観点からは、聞き手に不利益（不快感）を被らせるものと、必ずしもそうではないものとに分けられる。次の用例も、話し手が聞き手に対して行為の実行を要求している命令文ではあるが、聞き手利益の有無に関しては、上の用例ほどははっきりしていないし、聞き手へ不利益・不快感を与えるかどうかに関してはニュートラルである。単に、聞き手に行為の実行を〈要求〉し、〈指示〉を与えている。このように、聞き手の利益・不利益よりも、話し手側に行為の実行に対する利益・希望・欲求、あるいは必要性がある場合、〈指示〉的な命令文となる。「立て・捕まえろ・読め」のような具体的な動作を表す動詞や、「急げ・手伝いしろ・挨拶しろ」等一連の具体動作をまとめた動詞を述語におく。行為の実行は即時行われるのが普通である。

11') mi:=nu kensa had̄zimi:n=do:. makate:, to: kuma=ŋkai tat-e:
 目=GEN 検査 始める=SFP.ASS (人名) INTJ ここ=DAT 立つ-IMP2
 「目の検査始めるぞ。マカテー、さあここに立て。」(実践, 48)

688) [女 B が重い物を持っているので、手伝いを申し出る男 A。C は現場監督の男。D は何もしない]

A: ʔe:, inagu. t̥ɕibi kateimit-i=n ɕimm=i
INTJ 女 尻.ACC 捕まえる-SEQ=ADD すむ=YNQ

「おい、女。端を捕まえてもよいか。」

B: ʔu:. kateimit-i kʷi-miso:r-e:
はい つかまえる-SEQ BEN-HON-IMP2

「はい。捕まえて下さい。」

C: ʔja:=n kateimir-e:
お前=ADD 捕まえる-IMP2

「お前も捕まえろ。」

D: wanne: gute:=nu jo:san-u na-ibir-an=sa:
1SG.TOP 力=NOM 弱い-CSL POT-POL-NEG=SGP

「私は力が弱いのでできませんよ。」(実践, 38)

689) A: kunu maŋga: ʔumusan=do:

この 漫画.TOP 面白い=SFP.ASS

「この漫画面白いよ。」

B: ʔanee: kuma=ŋkai karae-i
CNJ ここ=DAT 貸す-IMP1

「じゃあこちに貸せ。」

A: na:da jud-e:-uran. ʔiteuta: mat-i
まだ 読む-SEQ.TOP-いない 少しの間 待つ-IMP1

「まだ読んでない。ちょっと待て。」

B: ʔe:ku jum-e:
早く 読む-IMP2

「早く読め。」

A: t̥ɕi:be:san-u. ʔagima:s-aŋke:
気が短い-MIR せかす-PROH

「短気だな。急かすなよ。」(入門, 18)

690) [少々乱暴な夫から妻に向かって]

A: wa:=ga ʔawatir=i=ndi ʔi:-ne: ʔuʔe: ʔawatir-e:
1SG=NOM 慌てる-IMP1=QT 言う-CND 少し.TOP 慌てる-IMP2

「私が急げと言ったら少しは急げ。」

B: ʔu:. ʔippe: ʔawatit-o:-ibi:n=do:
はい とても 慌てる-PROG-POL=SFP.ASS

「はい。とても急いでますよ。」(実践, 29) (用例 46 と同文)

691) [文句ばかりで手伝おうとしない A に何か不満があるのか B が尋ねると]

A: nu: ʔusuku=n ne:-ibran
何 不足=ADD ない-POL

「何の不満もありません。」

B: ʔanee:, ʔe:kuna: ʔumani: t̥igane: e-e:
CNJ 早く 姉 手伝い する-IMP2

「じゃあ、早く姉さんの手伝いをしろ。」

A: ʔu:. ma: kateimir-e: jutas-aibi:=gaja:
はい どこ.ACC 捕まえる-CND よろしい-POL=DUB

「はい。どこを捕まえればよろしいでしょうか。」(実践, 38)

692) [話者 A の母が目の前に現れて]

A: ʔusa=g^wa:, watta: ʔaja: ja-mice:n=do: gue:safci ugam-e:
(人名)=DIM 1PL.GEN 母.CH COP-HON=SFP.ASS ご挨拶 拝む.HUM-IMP2
「ウサ、私の母上でいらっしやるぞ。ご挨拶しなさい。」

B: hadzimit-i ugan-abir-a

はじめる-SEQ 会う.HMB-POL-INT

「はじめてお目にかかります。」(芝居, 558) (用例 53 と同文)

このように、文脈によって若干のニュアンスは変化するが、**ee:**形式は強制力のある典型的な命令文で用いられる。聞き手利益性に関しては場面状況的なものであり、形式によるものではない。例えば、聞き手利益のある場面や文脈で〈勧め〉の文も表すことができる(詳細は勧めの文を参照)。したがって、**ee:**形式は、強制力の強さを示すことはできるが、聞き手利益には関与しない。つまり、**ee:**形式の命令文における聞き手利益性は、場面や文脈によるものである。また、**ee:**形式は引用文でも用いられる。

693) ʔuka:sa-kutu jamir-e:=ntci ʔite-e:n=do:

危ない-CSL やめる-IMP2=QT 言う-RES=SFP.ASS

「危ないからやめると言ったんだぞ。」(語遊「イチャン・イタン」2010/10/10, p. 11)

4.2.2.2 ei 形式の文による〈命令〉

ee:形式という基本的な形式のほかに、**ei**形式がある。**ei**形式の文は、現代首里方言では口語的ではなく、形式ばった古風な印象を与える表現である。または、改まった場面で相手をたしなめるような場合に使用される。したがって、芝居で多用される傾向があり、また、ことわざや引用文でも使用される²³³。**ei**形式は、**ee:**形式と同様に、強制力のある命令文になれる。尚、不規則動詞 **teu:n** (来る) の命令形の一つである **ku:** という形は、この **ei** 形式に相当する(後述の「**wa**形式」も参照)。

694) **ei**gu=ni juta=nu ʔabasa:-mme: ʔunteike:e-i

すぐ=DAT 霊媒師=GEN (人名)-婆 ご案内する-IMP1

「すぐに霊媒師(ユタ)のアバサー婆さんをお連れしろ。」(猿, 1)

695) **teu:**=ja ʔuri ʔimacimisun=di ʔite-i **te-an.** masan[u: kuma=ŋkai **jub-i**

今日=TOP それ.ACC 戒める=QT 言う-SEQ 来る-PST (人名).ACC ここ=DAT 呼ぶ-IMP1

「今日はそれを戒めると言って来た。真三郎^{マサンルー}をここに呼べ。」(芝居, 554)

696) ʔance:, **ei**guni ka:mi:tu ʔuka ʔe:dzicee-i, sa:ru: so:tik-u:=ntci **teike:** **jarac-i**

CNJ すぐ=DAT 亀=COM 他.ACC 合図する-SEQ 猿.ACC 連れて来る-IMP1=QT 遣い.ACC やる-IMP1

「では、すぐに亀と他のやつら呼んで、猿を連れて来いと遣いにやれ。」(猿, 5)

697) ʔitta:=n **teite-a-ru** tu:i o:=nu b'o:tee: sa:ru:=nu namadzimu=**ei**=du no:ju-ru

2PL=ADD 聞く-PST-ADN 通り 王=GEN 病気.TOP 猿=GEN 生肝=INST=FOC 治る-ADN

jat-i ʔuri tut-i k-u:

COP-SEQ それ.ACC 取る-SEQ 来る-IMP1

「お前達も聞いた通り王の病気は、猿の生肝でしか直らない。だからそれを取って来い。」(猿, 4)

698) A: kunu manga: ʔumusan=do:

この 漫画.TOP 面白い=SFP.ASS

「この漫画面白いよ。」

²³³ 調査協力者によれば、士族の多い首里の方言に特徴的な表現だという(面接調査, 2015年11月9日)。

B: ʔanee: kuma=ŋkai karae-i

CNJ ここ=DAT 貸す-IMP1

「じゃあこちに貸せ。」

A: na:da jud-e:-uran. ʔiteuta: mat-i

まだ 読む-SEQ.TOP-いない 少しの間 待つ-IMP1

「まだ読んでない。ちょっと待て。」(入門, 18) (用例 689 と重複)

699) wakasai=ni=nu nandze: ko:t-i=n ee-i

若い=DAT=GEN 難儀.TOP 買う-SEQ=ADD する-IMP1

「若い時の難儀は買ってもしろ。」(諺)

700) ʔja:=ga=ru kateimir-i=ndi ʔi-ta-e: s-an=i

2SG=NOM=FOC 捕まえる-IMP1=QT 言う-PST2-INF.TOP する-NEG=YNQ

「お前が捕まえると言ってたじゃないか。」(実践, 38)

701) wa:=ga ʔawatir-i=ndi ʔi:-ne: ʔuʔe: ʔawatir-e:

1SG=NOM 慌てる-IMP1=QT 言う-CND 少し.TOP 慌てる-IMP2

「私が急げと言ったら少しは急げ。」(実践, 29) (用例 46, 690 と重複)

現代首里方言では, ei 形式は時代の変化とともに ee:形式に取って代わられ, 実際の会話において強制力のある命令文としては, ei 形式よりも ee:形式を含んだ文の方がもっぱら用いられる。また, 次の終助辞 jo:が付いた eijo:形式も多用される。

4.2.2.3 eijo:形式の文による〈命令〉

〈命令〉の文において ee:形式の次によく用いられる形式は, ei 形式に終助辞 jo:が付いた eijo:形式である。終助辞 jo:は命令文に付くと, 聞き手への〈強制〉という意味あいを弱め, 直接的な命令を避けさせる働きがある。したがって, ee:形式に比べて, 聞き手を配慮したやわらかい命令表現になる²³⁴。

例えば, 次の用例で〈指示〉的な命令を表す場合に eijo:形式が用いられている²³⁵。ee:の文と比べると, 強制的な意味あいは弱く, 押しつけがましさを伴わない。聞き手に対する不利益性もほとんどなくなり, ee:の文と比較すると同じ〈指示〉的な命令でも, 動作の実行を促す〈促し〉の文に近くなる。〈促し〉の文では, 動作の実行を促すだけで, 聞き手への強制的な態度はあまり感じられない。

702) [試験場に試験官が入ってきて説明を始める]

to:, nna, waŋ=ga ʔiei ju: teik-i=jo:

INTJ 皆 1SG=NOM 言う-NLZ よく 聞く-IMP1=SFP

「さて, 皆さん, 私が言う事よく聞けよ。」

(誰も返事しない)

ʔidzi=n s-an=na:

返事=ADD する-NEG=YNQ2.MIR

「返事もしないのか。」(実践, 45)

703) A: eigu=ni juta=nu ʔabasa:-mme: ʔunteike:e-i

すぐ=DAT 霊媒師=GEN (人名)-婆 ご案内する-IMP1

²³⁴ 終助辞 jo:は, 命令文と叙述文につく場合とで文のモダリティがだいぶ異なる。崎原 (2015a) やかりまた (2016) も参照されたい。

²³⁵ 高木 (2009) では, 発話場面においてどのような意味を持っているかという観点から, 命令文を〈指示〉〈現場指示〉〈違反矯正〉〈確認的指示〉の4つのタイプに分類している (同上, 110)。ここでは, 〈指示〉〈現場指示〉を区別せず, 全て〈指示〉的な命令に含めている。

「すぐに霊媒師(ユタ)のアバサー婆さんをお連れしろ。」

B: ?ance:, keitai=cei me:ru ?ut-a=u:

CNJ 携帯=INST メール 打つ-INT=SFP.POL

「それじゃあ、携帯でメール打ちましょうと。」

C: ?an ?i-ei=n ?am=i, ?ja:=ja

そう 言う-NLZ=ADD ある=YNQ 2SG=TOP

「そんな言い方もあるか、お前は(Aの頭を叩いてツッコむ)。」

A: ha:e:=nat-i ?ndz-i k-u:=wa. ?awatir-i=jō:

駆け足=で 行く-SEQ 来る-IMP=SFP 慌てる-IMP1=SFP

「走って行って来い！急げよ。」

B: ?u: 「はい！」(猿, 1) (用例 595, 694 と重複)

次の用例は、常識や規則に違反した時、あるいはその直後に用いられる〈違反矯正²³⁶〉の命令文であるが、このようにやさしめに諭すように言う場合は, *ei*jo:形式が用いられる。

704) A: wanne: sutumitimun kam-aŋ-jo:i eiken ?uki:=ga te-o:-ibi:-kutu suba-g^{wa}: ti:te:

1SG.TOP 朝食.ACC 食べる-NEG-SEQ 試験.ACC 受ける-PUR 来る-PROG-POL-CSL そば-DIM 一つ.TOP

「私は朝飯を食べないで試験を受けに来ましたので、そば一つだけ」

kad-i k-u:=naja:=ndi ?umut-o:-ibi:-eiga jutasa=ga ?a-ibi:-ra

食べる-SEQ 来る-INT=SFP=QT 思う-PROG-POL-ADVRS よろしい=FOCある-POL-DUB

「食べて来ようかと思っていますが、よろしいでしょうか。」

B: ?e:, ni:ce:. ?uφe: kange:t-i munu ?ir-i=jō: kuma: ma:=ndi ?umut-o:=ga.

INTJ 若者 少し.TOP 考える-SEQ もの 言う-IMP1=SFP ここ.TOP どこ=QT 思う-PROG=WHQ

eikendzo:=du jan=do:ja:

試験場=FOC COP=SPF

「おい、若造。少しは考えてもの言えよ。ここはどこだと思ってるか。試験場だぞ。」(実践, 47)

次の *ei*jo:形式を伴った〈違反矯正〉の例と、その次の *ce*:形式を伴った〈違反矯正〉の例を比べる。これら二つの文を比べると、*ei*jo:形式が聞き手を配慮したいいい方で、*ce*:形式が強制力の強い命令文として用いられていることがはっきりする。これら二つの用例は同じ登場人物・同じ場面で用いられていて、前者の後に後者の発話が展開される。前者で一度、*ei*jo:の文を用いて諭すように注意したのにも関わらず、注意を守らなかったため、後者の発話では *ce*:形式を用いた強制的な命令文となっている。

705) [横暴な試験官と受験者のやり取り]

A: waŋ=ga ?i-ei teik-ari:m=i teik-ari:r-a: ?ire:φidzi=n sa-wa=dujaru

1SG=NOM 言う-NLZ 聞く-POT=YNQ 聞く-POS-CND 受け答え=ADD する-CND=OBLG

「私が言う事聞こえるか。聞こえるなら受け答えもしないとな。」

B: nu:=ga nu:ntei=sai

何=FOC なぜ=POL.M

「なぜですか。」

A: ?ai, kuni-ça:ja. suba=kara ?atta-?abi: e-i: k^{wa}at-i. eitsumon jar-a: ti: ?agir-i=jō:

INTJ こいつ-PEJ=SFP 側=ABL 急-言う事 する-INF やがる-SEQ 質問 COP-CND 手.ACC 上げる-IMP1=SFP

²³⁶ 「すでに実行されているべき行為がまだ実行されていないという違反を正そうとするもの」(高木, 2009, 110)。

「おい、この野郎。横から急に話かけやがって。質問なら手を挙げろよな。」

B: ʔunige: s-abir-a. ti: ʔagit-o:-ibi:n=do:

お願い する-POL-INT 手.ACC 上げる-PROG-POL=SFP.ASS

「お願いします。手を挙げていますよ。」(実践, 46) (用例 453 と一部重複)

706) [上の続き。A が手を挙げずに質問しようとする]

A: ʔe:=sai

INTJ=POL.M

「あろう。」

B: ʔane, kuni-ça:. mata ʔatta-muni: e-i: kʷat-i. ti: ʔagit-i=kara ʔir-e:

INTJ こいつ-PEJ また 急-言う事 する-INF やがる-SEQ 手.ACC 上げる-SEQ=ABL 言う-IMP2

「おい、こいつめ。また急に話やがって！手を挙げてから言え！」

A: kissa=kara ti: ʔagit-o:-ibi:-eiga, ʔundzo: ʔanu ʔumani:=ŋkai mutɕikʷa:tt-i

さっき=ABL 手.ACC 上げる-PROG-POL-ADVRS 2SG.HON.TOP あの 姉=DAT 夢中になる-SEQ

「さっきから手を挙げてますが、貴方はあの姉さんに夢中で」

waŋ=ga ti: ʔagit-i=n n:ɖz-i=n s-abir-an-munnu

1SG=NOM 手.ACC 上げる-SEQ=ADD 見る-INF=ADD する-POL-NEG-FN

「私が手を挙げても見もしませんですもの。」(実践, 47)

話し手が自分の家に聞き手を招くような〈招待〉の文でも *eijo*:形式が用いられやすい。〈招待〉の文は、行為の実行を勧めているようにも感じられるが、聞き手にとって利益があるかどうかというよりも、話し手が望んでいる要素が強く、命令文や勧誘文といった聞き手に働きかける行為要求文に近い。聞き手利益のある〈勧め〉の文とはとりあえず区別し、命令文の下位に位置づけておく。

707) [道でばったり会う A と B。用事を済ませたら A の所に寄るよう B に言う]

A: mudui-ne: ʔutei tte-i jukut-i ʔutea=nde: nud-i ʔik-i=jo:

戻る-CND うち 来る-SEQ 休む-SEQ お茶=など 飲む-SEQ 行く-IMP1=SFP

「戻ったら、うち来て休んでお茶でも飲んで行って。」

B: ʔu:. niɸe:de:biru

はい ありがとう.POL

「はい。ありがとうございます。」(日放, 278-279)

708) A: nage: nuntei ʔugami:-ga=n jueirij-u:s-abir-an, ʔusuri ʔitte-o:-ibi:n

長い間 顔.HON 拝む.HUM-PUR=ADD 来る.HUM-POT-POL-NEG.SEQ 恐れ 入る-PROG-POL

「長いことお顔を拝見しにも来れませんが、申し訳ございません。」

B: ʔn:, nna ʔiteunasu su-kutu=ja:. ʔiɸina: k-u:=jo:

うん 皆 忙しく する-CSL=SFP 少しずつ 来る-IMP1=SFP

「ああ、みんな忙しいからな。たまには来なさい。」

A: ʔu:. eidu:gaɸu:

はい ありがとう.POL

「はい。ありがとうございます。」(方談 10, 255-256) (用例 15 と重複)

次の用例は、日本語における上昇イントネーションを伴った「今度は～しろよ↑」のような命令文で、事象が終わって後に、次回同じような場面があれば、二度と同じあやまちはくり返さないように釘をさしている場合の用例である。このような時にも、ふつう、*eijo*:形式が用いられる。調査協力者の内省によれば、この場合、*ee*:形式は非常に使いづらい(面接調査, 2016年5月16日)。

709) [聞き手が公演中に私語をしていた。その時は注意できなかったのですが、公演後に呼び出して、今後、似たような場面のときはちゃんと話を聞くように注意する]

nama=kara: ju: teik-i=jo:

今=ABL.TOP よく 聞く-IMP1=SFP

「今度からはよく聞けよ↑」(調査, 2016/5/16)

4.2.2.4 ee:ja:, eijo:ja:形式

命令の ee:形式や eijo:形式は、さらに終助辞 ja:を後接させることができ、ee:ja:や eijo:ja:となる。ee:や eijo:の文の意味あいには終助辞 ja:の意味あいがさらに付加されて、〈念押し〉といった意味あいを表すことができる。ee:ja:や eijo:ja:の文のモダリティを理解するためには、ee:と eijo:の文が表せる全ての意味あいに関する理解が必要なため、本節の一番最後に述べることにする（したがって、詳細は本節末の「ee:ja:, eijo:ja:の文のモダリティ」を参照されたい）。

4.2.2.5 mice:n を伴った ee:, eijo:, ei 形式の文による〈命令〉

k^wi:n (くれる) や turasun (やる) 等の授受補助動詞のつかない、述語に尊敬を表す mice:n を伴った命令文は、聞き手との関係のなかで聞き手を敬う場面で用いられる。見つかった用例のうち、聞き手が目上であったり、階級が上位であったりする等の社会的・文化的な制限が加わるケースがほとんどであるが、実生活では、親しさや個人の性格等より個人的な事情が関わる場合もある。

聞き手を敬う文脈や場面上、強制力は弱まり、ほとんど〈要求〉や〈強制〉の意味あいはなくなるか、弱くなる。多くの場合、〈丁寧な行為の実行の促し〉を表すが、〈要求〉を表したとしても、聞き手に配慮しながらの〈丁寧な行為の実行の要求〉を表す。mice:n を伴った命令文にも、ee:形式、eijo:形式、ei 形式がある。それぞれ、miso:re:, miso:rijo:, miso:ri となる。さらに、丁寧さを表す接辞-ibi:n がついた mice:bire:, mice:birijo:, mice:biri という形もある。

4.2.2.5.1 eimiso:re:形式

次の文は王様が病にかかったので、ユタ(霊媒師)である A に王様の臣下である B が王様の健康祈願を依頼していて、B が A に急ぐようにせかしている場面である。A と B の年齢に関しては、明らかではないが、専門的な知識を持つ A に対して、王様の臣下である B は eimiso:re:を伴った命令文を用いている。王様の容体が良くないため、急いでほしいという気持ちから聞き手に急ぐよう促している。

710) [芝居。話し手 B: 王様の臣下 → 聞き手 A: 王様の病を診るようお願いされた霊媒師]

A: ?ja:=ja ?ansuka ?i:tẽi fukatẽ-i nu:=ga. gudzira:oj=ja ma:ei-gata:=du ja-ru=i
2SG=TOP そんなに 息.ACC ふかす-SEQ 何=WHQ (人名)=TOP 死ぬ.HON-そう=FOC COP-ADN=YNQ

「お前はそんなに息を切らしてどうした？グジラ王は死にそうなのかい。」

B: ?ane: ?a-ibir-an=sa. ?isudzi-miso:r-e:

そう.TOP COP-POL-NEG=SFP 急ぐ-HON-IMP2

「そうではありませんよ。お急ぎなさい。」

A: tẽu:=ja mo:kir-ari:=sa=tai

今日=TOP 儲ける-POT=SFP-POL.F

「(客席に向かって)今日は儲けそうだな。」

B: ?e:=tai ?undzo: ta:tu munu ?itẽ-o:=ga=tai. ?awati-miso:r-e:

INTJ=POL 2SG.HON.TOP 誰=COM もの 言う-PROG=WHQ=POL.F 慌てる-HON-IMP2

「あら、貴方は誰と話してるの。お急ぎなさい。」(猿, 2) (用例 76 と一部重複)

次の用例は、熟年夫婦の会話である。妻 B が夫 A に対して *eimiso:re* を伴った命令文を用いている。昔の首里の家庭内での地位は妻 (女性) よりも、夫 (男性) の方が高かったようである²³⁷。したがって、妻から夫へ行為の実行の要求、あるいは行為の実行を促すときは、敬語を使用していた。

711) [話し手 B: 妻 → 聞き手 A: 夫。夫のズボンの股間部分が破れている]

A: *?ariari, watta: ?aja:jo:, wadzin=na=jo:*

INTJ 1PL.GEN 母=IP 怒る=PROH=SFP

「あらあら、俺の母さんたら、怒るなよ。」

B: *wadzi:=n s-abir-an, warai=n s-abir-an=sa. ϕ e:ku na: ?ite-i teik-aei-miso:r-e:*

怒る.INF=ADD する-POL-NEG 笑う.INF=ADD する-POL-NEG=SFP 早く もう 言う-SEQ 聞く-CAUS-HON-IMP2

「怒りもしないし、笑いもしませんよ。早くもう言って聞かせてくださいな。」

A: *?aja:, wan=ga kissa=kara kuma kateimit-o:-ei n:te-o:m=i*

母 1SG=NOM さっき=ABL ここ.ACC 捕まえる-PROG-NLZ.ACC 見る-PROG=YNQ

「母さん、私がさっきからここを捕まえてるのを見ているか。」(実践, 30)

次の用例では、道で遭遇した女 A と男 B の会話である。一貫として女は男に対して敬語を使用し、男は女にぞんざいな物言いをしている。話の冒頭で、男は女を *?umani* (姐さん) と呼び、女は男を *jattei:tai* (お兄さん) と呼んでいるが、具体的な年齢ははっきりしない²³⁸。男は無職だが首里の士族の家柄だと明かしていて、女の職業は商人だということと、家柄や職業的な要因が関わっているのだろう。ここでは、A は B に配慮しながらも、行為の実行を要求している。

712) [話し手 A: 女 → 聞き手 B: 男]

A: *ti: ϕ uteukuru: s-o:t-i, jumuduigutei=nu takk^wi:ru-kana: juntaku e-imiso:te-i. ?mma dukinamiso:r-e:*

手.ACC 内に入れる様 する-PROG-SEQ 口角=NOM ただれる-程 おしゃべり する-HON-SEQ そこ 退く.HON-IMP2

「手をポケットに入れて、口角がただれる程おしゃべりしなさって。そこおどきなさい。」

B: *?ja:=ja tei:so:=nu ?arasan-u*

2SG=TOP 気性=NOM 荒い-MIR

「お前は気が荒すぎる。」(実践, 38-39)

次の用例では、お店の売り手が道行く人に商品を買うように促している。そのような時、*eimiso:re* 形式を用いている。不特定多数のひとに呼びかける場合は、このように敬語を用いるのがふつうである。

713) [お店の人が道行く人に声をかける]

jassa-ibi:n=do:. ko:-miso:r-e:

安い-POL=SFP.ASS 買う-HON-IMP2

「安いですよ。お買いになれ²³⁹。」(入門, 44)

²³⁷ 調査協力者によれば、首里では、妻が夫より年上であっても、敬語を用いたという。また、士族・平民等、階級に関係なく、そうであった。

²³⁸ *?umani* も *jattei* も士族のものに対して使用する呼称。

²³⁹ 日本語では「買って下さい」または「買った買った！」くらいの意味である。

4.2.2.5.2 eimiso:rijo:形式と eimiso:ri 形式

eijo:形式が mice:n を伴っている場合も、聞き手が話し手よりも目上か、社会的地位の高いものに対して用いられていた。ただし、-ibi:n/-abi:n を伴わず、授受補助動詞も伴わない ei 形式が mice:n を伴うかたち (eimiso:ri) を見つけることができなかった²⁴⁰ (つまり、?imiso:ri や eimiso:ri というかたちではあらわれにくい)。多くの場合、終助辞 jo:を伴った eijo:形式 (eimiso:rijo:) であらわれる。行為の実行の〈要求〉や〈促し〉として用いられる。

714) A: sari. ?uteina:=ηkai=nu φuni=nu nama ?a-ibi:-eiga, kuri nugae-i:ne: mata φune:
あ.の.M 沖縄=DAT=GEN 舟=NOM 今 ある-POL-ADVRS これ.ADD 逃す-CND また 舟.TOP

「あのう。沖縄への舟が今ありますが、これを逃すとまた舟は」

?itei=ga ?a-ra wakaj-abir-an-eiga, tea: s-abi:=ga satunuei
いつ=FOC ある-DUB わかる-POL-NEG-ADVRS どう する-POL=WHQ 里之子

「いつあるかわかりませんが、どうしますか？里之子。」

B: eigu ?iteu-kutu jutaeiku kange:t-i turae-i

すぐ 行く-CSL 宜しく 考える-SEQ BEN-IMP1

「すぐ行くから宜しく取り計らってくれ。」

A: ugad-o:j-abi:n. ?ance: eigu menso:r-i=jo:

拝む-PROG-POL CNJ すぐ 来る.HON-IMP1=SFP

「承知しました。それではすぐいらして下さい。」(芝居, 582) (用例 228 と一部重複)

715) A: ?ure:=jo:

それ.TOP=IP

「それはね…」

B: ?aja:=tai. matteo:tei-miso:r-i=jo:

姐=POL.F 待っておく-HON-IMP1=SFP

「姉さん。待って下さい。」

A: nu:=ga. nu: matteo:k-i=ndi=ga

何=WHQ 何 待っておく-IMP1=QT=WHQ

「何だい。何を待つっていうのかい。」

B: ?a-ibir-an. ?unu ?atu=nu kutuba=nu teigakai=nati nu:gajara wanne: teimu=nu wasamite-o:-ibi:n

COP-POL-NEG その 後=GEN 言葉=NOM 気がかり=で 何だか 1SG.TOP 心=NOM ざわつく-PROG-POL

「いえ。その後の言葉が気がかりで何だか私は心が落ち着かないのです。」(実践, 18)

4.2.2.5.3 eimice:bire:形式

次の用例では、義母(平民身分)から娘の夫(首里出身の役人・士族身分)に向かって eimice:bire:形式の命令文が用いられている。義母は娘の夫に対して、怒った様子で述べているため、押しつけるニュアンスのある eimice:bire:形式が用いられているのだろう。

²⁴⁰ 授受補助動詞を伴う eimiso:ri 形式の文は、芝居において多用される傾向があった。しかし、これらの文は〈命令〉ではなく〈依頼〉の文なので、一例だけ掲示しておく。

A: ?amma:, mura=nu tteu=ni ?u:r-att-o:-gutu kakumat-i k^wi-nso:r-i
おばさん 村=GEN 人=DAT 追う-PASS-PROG-CSL 匿う-SEQ BEN-HON-IMP1

「おばさん、村の人に追われているので匿って下さい。」

B: kuma=ηkai k^wakk^wito:k-e:

ここ=DAT 隠れておく-IMP2

「ここに隠れておきなさい。」(芝居, 662)

716) [浮気性の夫が急遽着物を準備してくれと妻に頼むが、都合のいい話に義母が怒って]

A: to:=tai kunu t̄eiwa: ʔundzo: ʔamata=ni inago: u-ibi:=e: ʔunu inagu-nut̄eɑ:=ŋkai
 INTJ=POL.F この 際.TOP 2SG.HON.TOP あちこち=DAT 女 いる-POL=SFP その 女-PL=DAT
 t̄ein eiko:r-aci-mice:-bir-e:
 着物.ACC 準備する-CAUS-HON-POL-IMP2

「そうだわ。この際貴方はあちこちに女がいるじゃないですか。その女達に着物を準備させなさいよ！」

B: ʔan ja=saja:, ʔamma:. to: ʔanee: nabema:-me:=kara ʔndz-i nd-a
 そう COP=SFP 母 INTJ CNJ (人名)-POL=ABL 行く-SEQ みる-INT

「そうだなあ、お義母さん。それじゃあナベマーさん所から行ってみよう。」(芝居, 578)

現代社会においては、首里方言でも、売り手は買い手に敬語を用いるのが通例であろう。しかし、制度的な階級の名残りのある場面においては、必ずしもそうではない。次の用例は、1883年生の女性Aと1889年生の女性Bがお店の売り手と客の役になりきって、演じている会話である。売り手が買い手よりも社会的上位にある場合や、年齢が上である場合等では、売り手はぞんざいな物言いをし、買い手が敬語を用いることもあった²⁴¹。聞き手である売り手に配慮しながら、買い手が売り手に商品を売るように要求あるいは促している。

717) A: nu: ko:i=ga

何.ACC 買う=WHQ

「何を買うか？」

B: kumaŋ=kai sagat-o:-ru ʔuteuk^{wi}: ʔanci t̄eura-sa-ibi:-ru-mun
 ここ=DAT 下がる-PROG-ADN 風呂敷 こんなに きれい-POL-ADN-FN

「ここに下がっている風呂敷こんなにきれいなんですもの。」

ʔiteime: wan=niŋkai ʔu-mice:-bir-e:
 一枚 私=DAT 売る-HON-POL-IMP2

「一枚私にお売りになって。」

A: sandzu:goen ja-eiga, ʔja:=ŋkai=ja sandzu:en=ei ʔui=sa
 35円 COP-ADVRS 2SG=DAT=TOP 30円=INST 売る=SFP

「35円だけど、お前には30円で売るよ。」(日放, 279) (用例 629 と重複)

4.2.2.5.4 eimice:biri 形式

eimice:biri 形式の〈命令〉でも、聞き手に配慮しながらの〈丁寧な促し〉等を表す。丁寧さを表す*i/abi:n*がついて、*eimiso:ri*形式を用いる場面よりも、さらに聞き手を敬う必要がある状況で用いられる。用例が少ないので、さらなる用例の収集は今後の課題である。

次の用例は、芝居のセリフであるが、話し手は聞き手よりも年上の下男である。年齢は年上でも、社会的地位が聞き手よりもだいぶ低く、聞き手は貴族身分である。

718) [話し手: 老僕 → 聞き手: 若按司]

sari, waka:d̄zinu-me:, waŋ=ga kunu ʔino: banti so:t̄e-abi:-gutu nu:=n t̄eigake:=ja
 INTJ.M 若按司-HON 1SG=GEN この 辺.TOP 番人 しておく-POL-CSL 何=ADD 気がけ=TOP

²⁴¹ 『那覇市史資料編(那覇の民俗)』によれば、那覇のヌヌマチ(古着市場)では、那覇士族の女性が物売りとなるケースが多く、ぞんざいな言い方で商売をしていたので、それを嫌う人もいたという(同上, 288)。

「さあ、若按司様²⁴²、私がこの辺の番人をしておきますので何も心配は」

ei-miso:r-aŋ-gutu ju:ju:=tu hanacimunugatai ei-mice:-bir-i
する-HON-NEG-CSL 悠々=COM 話物語 する-HON-POL-IMP1
「なさらずに、ゆっくりとお話なさいませ。」(芝居, 620)

次の用例は日常会話の例だが、**eimice:biri**形式が用いられると形式ばった印象を与える。ほとんど、「いってらっしゃい」のようなあいさつ表現に近い形で用いられている。

719) [那覇に仕事で行くと言う夫 A と妻 B の会話。何時に帰ってくるのか尋ねる妻 B]

A: denki=nu ju:irie: ke:t-i teu:n

電気=GEN 夕暮れ時 帰る-SEQ 来る

「電気の着く夕暮れ時に帰ってくる。」

B: ?ance: bo:dza: i:rimun ko:t-i mence:-bir-i=jo:. ?iteiban kica: maçi s-o:-ibi:-kutu

CNJ 子供.GEN 玩具.ACC 買う-SEQ 来る.HON-POL-IMP1=SFP 一番 汽車 まし する-PROG-POL-CSL

「それでは子供の玩具を買っていらっしゃい。一番汽車が好きですから。」

A: ?n:, ?n: 「うん、うん。」

B: ?ance: he:sa-ru ?utei=ni ke:t-i mence:-bir-i=jo:ja:

CNJ 早い-ADN 内=DAT 帰る-SEQ 来る.HON-POL-IMP1=SFP

「それでは早い内に帰っていらっしゃいね。」

A: ?n:, ?n: 「うん、うん。」

B: to:, ?ance: ?ndzi-mice:-bir-e:

INTJ CNJ 出る-HON-POL-IMP2

「はい、それではいってらっしゃいませ。」

A: ?o:, ?o: ?ance ?ndz-i k-u:

うん うん CNJ 行く-SEQ 来る-INT

「うん、うん。それじゃ行ってくる (lit. 行って来よう)。」

B: he:ku ke:t-i mence:-bir-i

早く 帰る-SEQ 来る.HON-POL-IMP1

「早く帰っていらっしゃい。」

A: ?n: 「うん。」(日放, 281-282)

4.2.2.5.5 eimice:birijo形式

eimice:birijo形式の場合も、聞き手に配慮しながらの〈丁寧な要求〉あるいは〈丁寧な促し〉を表す。次の用例は、貴族の会話である。妻から夫に対して **eimice:birijo**形式が用いられていた。聞き手が貴族身分等、聞き手に対してさらに配慮が必要な場合、**-ibi:n/-abi:n**形式を伴った形式が用いられるのだろう。尚、二つ目の **eimice:birijo**形式の文は、終助辞 **ja:**がついた用例であるが、先述した通り、〈念押し〉という意味あいが付加加わっている。

720) [仕事で那覇に行って来ると言う父 A。仕事・用務は義務的なものである]

A: na:fa=kai ?ndziku:ri-wa=rujaru, wanne:

那覇=ALL 行って来る-CND=OBLG 私.TOP

「那覇に行って来ないといけない、私は。」

²⁴² 按司は王子に次ぐ貴族階級の称号である。

- B: ʔoto:san, na:ɸa=kai mence:-bi:n n:
お父さん 那覇=ALL 行く.HON-POL EQ
「お父さん、那覇にいらっしゃるんですって？」
- A: ʔn:. na: t̃e:u:=ja d̃ziɸi ʔndziku:r-an=to:naran-eiga
うん FIL 今日=TOP ぜひ 行って来る-NEG=OBLG-ADVRS
「うん。もう今日は必ず行ってこないといけませんが。」
- B: ʔanee: nandziguru ke:-mice:-bi:=ga
CNJ 何時頃 帰る-HON-POL=WHQ
「それじゃあ、何時頃お帰りですか。」
- A: deŋki=nu ju:irie: ke:t̃e:u:n
電気=GEN 夕暮れ 帰って来る
「電気の(つく)夕暮れ時に帰って来る。」
- B: ʔanee: bo:d̃za: i:rimun ko:t-i mence:-bir-i=jo:. ʔiteiban kicia: ma:ci s-o:-ibi:-kutu
CNJ 子供.GEN 玩具.ACC 買う-SEQ 来る.HON-POL-IMP1=SFP 一番 汽車 まし する-PROG-POL-CSL
「それでは子供の玩具を買っていらっしゃい。一番汽車が好きですから。」
- A: ʔn:, ʔn: 「うん、うん。」
- B: ʔanee: he:sa-ru ʔutei=ni ke:t-i mence:-bir-i=jo:ja:
CNJ 早い-ADN 内=DAT 帰る-SEQ 来る.HON-POL-IMP1=SFP
「それでは早い内に帰っていらっしゃいね。」
- A: ʔn:, ʔn: 「うん、うん。」(日放, 280-282) (用例 372, 416 と重複)

ce:形式と eijo:形式のまとめ

ce:形式と eijo:形式はどちらも〈命令〉を表すが、ce:形式は常に押しつけがましさをともない、eijo:形式は聞き手に配慮したい方となる。〈命令〉のうち〈要求〉を表す文は、圧倒的に ce:の文が多い。又吉(1997)を例にとると、主文に命令形式をもつ文 53 例のうち、〈要求〉を表す ce:の文は、17 例(全体の約 32%)であった。これに〈勧め・許可・依頼〉の文を含めると、実に 39 例(約 74%)を ce:の文が占めていた。eijo:の文は〈要求〉の文が 5 例(約 9%)で、〈勧め〉の文を入れてもわずか 7 例(約 13%)しかなかったが、事象の事前に指示を出したり、助言や忠告したりする場面が多ければ、eijo:形式の使用例は増えるだろう(尚, ku:wa の例は全て ce:形式に含めている)。表 36 を再掲する²⁴³。

表 36 ce:形式と eijo:形式の〈命令〉のモダリティ

強制	利益性	〈命令〉としての機能	形式	付加された機能	形式	
強 ↑ ↓ 弱	聞き手不利益あり	〈要求〉	〈強制〉	ce:, ei(古)	+ 〈罵倒〉	ei k ^w e:wa
			〈指示 1〉	ce:, ei(古)	+ 〈同意=念押し〉	ce:ja:
	〈違反矯正〉		厳しく ce: やさしく eijo:	—	—	
	〈指示 2〉		eijo:	+ 〈同意=念押し〉	eijo:ja:	
	聞き手不利益 ニュートラル	〈丁寧な命令・促し〉	eimiso:re: eimiso:rjo: eimice:bire: eimice:biri eimice:birijo:	—	—	

²⁴³ 尚, 表 36 は本文で述べたことをわかりやすく示すための目安であって、多少のずれはある。例えば、eijo:形式を語気を強めて用いた場合、ce:形式と同じくらい強制的な意味合いが伴うこともある。

命令表現にはこの他に、次に示すように wa 形式がある。主に不規則動詞の命令形に用いられる。

4.2.2.6 wa 形式

wa 形式は、主に不規則動詞 $\widehat{t}e:u:n$ や $k^{w}ain$ 等の命令形として用いられるが、規則動詞の命令形としても用いられる。ku:wa(来い), $k^{w}e:wa$ (~(し)やがれ), ?irabiwa (選べ), ?i:wa (言え)という形が見られたが、用例のほとんどが ku:wa での使用だった。

動詞 $\widehat{t}e:u:n$ (来る)は変則的な活用をするため、命令形が ku:となり、ee:や ei のかたちを取らない(語尾が-e:や-iを取らない)。ku:という形は、他の動詞の ei 形式に相当すると考えられ、wa 形式である ku:wa という形は、他の動詞の ee:形式に相当すると考えられる²⁴⁴。なぜなら、ku:wa は使用頻度が高く、ku:は芝居等改まった場面で用いられる傾向があるからである。

つまり、不規則動詞の場合、wa 形式が ee:形式の代わりとなって、命令文で用いられやすい。また、〈強制〉のような意味あいから〈勧め〉に近い意味あいを表す wa の文もあるため、必ずしも〈強制〉や〈要求〉といった命令の意味あいを強めたり、〈蔑み〉を表すようなものではないと思われる。ある特定の聞き手との関係の中で、文を伝えるという終助辞の働きを担っているのだとすれば、「上から物を言う」という話し手の態度があらわれているのかもしれない。「上から物を言う」という話し手の態度がそのまま〈蔑み〉のようなネガティブな意味あいに繋がるわけではないが、そのようなニュアンスがあるために、時々あるいはしばしば、〈蔑み〉や〈罵倒〉、〈強制〉といった意味あいと共起するのだろう²⁴⁵。

強制力の強い〈要求〉

721) ha:e:=nat-i ?ndz-i k-u:=wa. ?awatic-i=jo :
駆け足=で 行く-SEQ 来る-IMP=SFP 慌てる-IMP1=SFP
「走って行って来い! 急げよ。」(猿, 1) (用例 703 と重複)

722) A: ja=sa. ?ar-an=di ?umui-ra : ja:=kai ?ik-e :
COP=SFP COP-NEG=QT 思う-CND 家=ALL 行く-IMP2
「そう。じゃないと思うなら家に行け。」

B: $\widehat{e}ikeno$: $\widehat{t}e$ a: na-ibi:=gaja:
試験.TOP どう なる-POL=DUB
「試験はどうなりますかねえ。」

A: na: $\widehat{t}e$ uke:n k-u:=wa. ?ateanasa
もう 一回 来る-IMP1=SFP 明日の朝
「もう一回来い。明日の朝。」

B: nu:=ga nu:ntei=sai
何=NOM なぜ=POL.M
「どうしてですか?」(実践, 46) (用例 490 と重複)

²⁴⁴ ku:という形はまた、意志・勧誘形と同音なため、終助辞 ja:が後接する場合は、命令形ではなく、意志・勧誘形としての使用である(命令の ei 形式と ja:は共起しない)。

²⁴⁵ 「かなり待遇度が低く、話し手と聞き手との間に年齢差がある場合や聞き手が目下である場合に用いられる」(仲原, 2014, p.139)。しかし、この説明は、ee:形式にもあてはまるし、また、ku:wa の場合はほとんど ee:形式に近い意味あいをもって普通に用いられる。やはり、現代首里方言では ee:という形式の無さを ku:wa が埋めているのだと考える。また、「テーワ (te:wa), おあがり。お食べ。老女が目下に「食べよ」という意をやや丁寧という語。普通の人は kame:(食べる)という」(首里那覇音声データベース「テーワ」という記述もそのことを教えてくれる。ただし、詳細はさらなる調査が必要である。

723) A: $\widehat{t\acute{e}u}:=ja$ $\widehat{d\acute{z}uken}|\acute{o}:=ja$ $\widehat{t\acute{e}a}$: na-ibi:=ga

今日=TOP 受験料=TOP どう なる-POL=WHQ

「今日は受験料はどうなりますか。」

B: $\widehat{t\acute{e}a}$:n nar-an=sa. $\widehat{t\acute{e}uke}$:n $\text{?nd\acute{z}ac-e}:=kara$: çikkumir-an=sa . $\text{?ate\acute{a}=n}$ mata mut $\widehat{t\acute{e}}$ -i $\underline{k-u:=wa}$

どう=ADD なる-NEG=SFP 一回 出す-CND=ABL.TOP 引っ込める-NEG=SFP 明日=ADD また 持つ-SEQ 来る-IMP1=SFP

「どうもならないよ。一回出したら戻らないよ。明日もまた持って来い。」(実践, 46) (用例 349 と重複)

724) o:=nu ?i:teike : ja-kutu, k-u:=ndi ?i:=wa

王=GEN 言い付け COP-CSL 来る-IMP1=QT 言う-IMP1=SFP

「王の言付けだから、来いと言え。」(那民, 59)

725) ?uwai-ru=madi $\underline{\text{matte\acute{o}:k-i=wa}}$

終わる-ADN=LIM 待ってお-IMP1=SFP

「終わるまで待っておけ。」(沖会, 99)

〈指示〉等

726) to:, nna $\phi\acute{e}$:ku kuma η kai $\underline{k-u:=wa}$. mi:=nu kensa had \acute{z} imi:n=do:

INTJ 皆 早く ここ=DAT 来る-IMP1=SFP 目=GEN 検査.ACC 始める=SFP

「さあ、みんな早くここに来い。目の検査を始めるぞ。」(実践, 48)

727) ϕu :sa-ru mu η =kara ?irab-i=wa ²⁴⁶

欲しい-ADN もの=ABL 選ぶ-IMP1=SFP

「欲しいものから選べ。」(大沖, 82)

動詞の連用形(第一中止形)に、 $k^w\acute{e}$:wa が後接した命令文は、〈罵倒〉という話し手のマイナスの評価的な意味あいが付加される。これも動詞 $k^w\acute{a}in$ のもつ語彙的な意味がそのような意味あいの付け加えを実現していて、 wa だけが実現しているわけではない。

728) [親 A と子 B の会話。子 B は A に勘当される]

A: ?ja : $\widehat{t\acute{e}ira}$: n: $\widehat{d\acute{z}i}$ -bue-iku=n ne:n. nama $\acute{e}igu$ $\text{?nd\acute{z}it-i}$ $\text{?it\acute{e}-i}$ $\underline{k^w\acute{e}:=wa}$

2SG.GEN 顔.TOP 見る-DES-INF=ADD ない 今 すぐ 出る-SEQ 行く-INF 食う-IMP1=SFP

「お前の顔は見たくもない。今すぐ出て行きやがれ。」

B: ?u: . $\text{?nd\acute{z}it-i}$ $\text{?it\acute{e}-abi:=sa}$

はい 出る-SEQ 行く-POL=SFP

「ええ。出て行きますよ。」(調査, 2015/11/30)

729) $\underline{\acute{e}in-i}$ $\underline{k^w\acute{e}:wa}$

死ぬ-INF 食う-IMP1=SFP

「死にやがれ。」(調査, 2015/11/30)

730) $\underline{tu-i}$ $\underline{k^w\acute{e}:wa}$

取る-INF 食う-IMP1=SFP

「取りやがれ。」(音声「クウユン」)

²⁴⁶ 調査協力者は、 ?irabiwa という言い方に違和感があると言う(面接調査, 2016年11月7日)。調査後の筆者の印象として、 wa がどのような動詞に付くのかは、個人差が大きいかもしれない。

4.2.3 〈勧め〉

4.2.3.1 ce:形式の〈勧め〉

〈勧め〉の文は、聞き手に利益のあることとして、話し手が聞き手にある行為の実行を勧めたり、忠告・助言したりする文である。聞き手利益のある場面や文脈で、ce:形式と eijo:形式のどちらも用いられるが、先述のように、ce:形式は伝えるニュアンスとして大なり小なり押しつけがましさを伴う。

731) ?ja:=ja φuru-tēiburu. na:φin bintēo:e-e:
2SG=TOP 古-頭 もっと 勉強する-IMP2

「お前は時代遅れだ。もっと勉強しろ。」(実践, 14)

13') [日が暮れてから外出する男 B に対して、女 A が提灯を持っていくよう勧める]

A: habu=nde:=nu u-ine: naran-mun, tēo:tēin tēikit-i ?ik-e:
ハブ=等=NOM いる-CND POT-CSL 提灯 つける-SEQ 行く-IMP2

「ハブなんかがいたらいけないから、提灯をつけて行け。」

B: ikiga-nutēa:=ga ?unu ?ate: nu:=n ?a-ibir-an
男-PL=NOM その 位.TOP 何=ADD COP-POL-NEG

「男だからその位は何でもありません。」(日放, 277)

732) [本に記録した歴史は後世までずっと残るから書くよう助言する A]

A: se:dzika=ndi ?i-ce: ?iteidai=nakai ?ari ja-eiga, hono: jujumande: kuni=nu
政治家=QT 言う-NLZ.TOP 一代=LOC あれ COP-ADVRS 本.TOP 世々万代 国=NOM

「政治家というのは一代であれだけ²⁴⁷、本は未来永劫国の」

?a-ru ?je:ka: (...) jujumande: ?ja: mun=nu=du nukuin=do:ja:
ある-ADN 間.TOP 世々万代 お前.GEN 物=NOM=FOC 残る=SPF

「ある間はずっとお前の物として残るんだよな。」

B: n: 「うん。」

A: nama ja=sa. tēibat-i kak-e:
今 COP-SFP.MIR 頑張る-SEQ 書く-IMP2

「今だぞ。頑張って書け。」(方談, 352) (用例 358 と重複)

733) A: nama: kubaga:-nttēu=tu φirat-o:n
今.TOP (地名)-の人=COM 付き合う-PROG

「今は久場川の人と付き合っている。」

B: ta:ta=nu hagiteiburu tamme:=na:. jo:so:k-e:
(人名)=GEN ハゲ頭 爺=YNQ2.MIR よしておく-IMP2

「多和田のはげおやじか。よしておけ。」

A: nu:=ga. nu:gana ?ai=ru su-ru=i
何=WHQ 何か ある=FOC する-ADN=YNQ

「どうして？何かあるの。」(実践, 33)

次の用例も〈勧め〉の文であるが、聞き手がそれを望んでいない場合は、〈押しつけ・強要〉となる(村上, 1993, 81)。ce:形式はもともと押しつけがましいニュアンスを持っているため、〈押しつけ・強要〉の場合には、ce:形式が用いられやすいのだろう。

²⁴⁷ 「一代であれだけ」というのはここでは「一代でダメになる」という意。

734) [A が人から貰ったダイヤの指輪を B に自慢して見せる]

A: ʔunuʔi:binagi: n:te-i=ma:. ʔe:, daija=ndi=do:. so:mun ja-e: s-an=i
 この 指輪 見る-SEQ=IMP INTJ ダイヤ=QT=SFP 本物 COP-INF.TOP する-NEG=YNQ
 「この指輪見てみ？ほら、ダイヤだとよ。本物だろう？」

B: so:mun ja=sa. ʔuri handobaggu=ŋkai ʔitt-i=na:
 本物 COP=SFP それ.ACC ハンドバッグ=DAT 入れる-SEQ=YNQ2
 「本物だよ。それをハンドバッグに入れるのか。」

A: ʔancei ʔiri:ttukuro: ne:n-munnu
 だって 入れる所.TOP ない-FN
 「だって入れる所がないんだもの。」

B: ʔi:bi=ŋkai nute-i ʔakk-e:
 指=DAT 貫く-SEQ 歩く-IMP2
 「指にはめて歩け。」

A: ʔungutu de:daka: ʔi:bi=ŋkai nute-i ʔakk-ari:m=i
 こんな 高価な物 指=DAT 貫く-SEQ 歩く-POT=YNQ
 「こんな高価な物指にはめて歩けるか。」(実践, 34) (用例 344, 558 と重複)

4.2.3.2 eimiso:re:形式の〈勧め〉

eimiso:re:形式を伴う〈勧め〉の文は、聞き手利益という条件に加えて、聞き手が社会的に上位にある等、社会的な制約等も条件に加わっている。次の二例では、男 B が知り合いの年上の男 A に対して配慮しながら、行為の実行を勧めている。

735) [A が運動不足のようなので、B が A にゲートボールを勧める]

A: ge:tobo:ru=ndi-ee: muteikasa-ru wadza ja-e: s-an=i
 ゲートボール=QT-NLZ.TOP 難しい-ADN 事 COP-INF.TOP する-NEG=YNQ
 「ゲートボールってのは難しいものだろう？」

B: ta:gana=kara nara-miso:r-e:
 誰か=ABL 習う-HON-IMP2
 「誰かから習ってください(lit. 習いなされ)。」(実践, 14)

736) [A が運動不足のようなので、B が A にゲートボールを勧める (用例 361 と重複)]

A: wanne: ŋkaei=kara bukusau-u=jo: nu: ti:tei=n naraj-u:s-an=du ʔan=de:
 1SG.TOP 昔=ABL 不器用だ-MIR=IP 何 ひとつ=ADD 習う-POT-NEG=FOC ある=SFP
 「私は昔から不器用でね。何一つも身につかないんだよ。」

B: tea:=n ne:-ibiran=sa. te:ge:-g^wa:=du ja-ibi:-ru. narat-i n:dz-imiso:r-e:
 どう=ADD ない-POL=SFP 適当-DIM=FOC COP-POL-ADN 習う-SEQ みる-HON-IMP2
 「どうってことないですよ。適当ですから。習ってみてください(lit. 習いなされ)。」(実践, 14)

eimiso:re:形式の〈勧め〉の文でも、聞き手が行為の実行を望んでいない場合は、〈押しつけ・強要〉となる。ee:形式はもともと押しつけがましいニュアンスを含んでいる。

737) [腹が減ったという男 B に対して気を遣っておにぎりを差し出す女 A だが男 B が嫌がる]

A: ʔunu ʔubun midziri: ʔusaga-miso:r-e:
 この 飯 握り.ACC 食べる.HON-HON-IMP2
 「このにぎり飯を召し上がれ。」

- B: nu:=ga nu:n̄t̄ei wanne: ʔuri kam-an=dare:naraŋ=ga
 何=FOC なぜ 私.TOP それ.ACC 食べる-NEG=OBLG=WHQ
 「一体どうして俺はそれを食べなければならないか。」
- A: ʔund̄zo: kissa ja:san-u ʔueig-ar-an=de: ʔi-miso:r-an=ti:
 2SG.HON.TOP さっき ひもじい-CSL 防ぐ-POT-NEG=QT.TOP 言う-HON-NEG=PST.YNQ
 「貴方はさっきお腹がすいて仕方ないなんておっしゃらなかった？」
- B: ʔite-an=te:
 言う-PST=SFP
 「言ったけど。」
- A: ʔance: ja:sa no:ei ja-ibi:=sa
 それでは 空腹 凌ぎ COP-POL=SFP
 「それでは空腹凌ぎにですよ。」
- B: wanne:=jo:, t̄eu=nu k̄wi:-ee: kam-an-nu:=du jan=de:
 1SG.TOP=IP 人=NOM くれる-NLZ.TOP 食べる-NEG-人=FOC COP=SFP
 「俺はね、人がくれる物は食べないんだよ。」
- A: ʔunt̄t̄eu=jo:=na:. ʔansuka bo:t̄eiri muni:=ja ei-miso:r-ant-i=n jutas-aibi:=sa
 この人=IP=MIR あまり 乱暴な 言い方=TOP する-HON-NEG-SEQ=ADD よろしい-POL=SFP
 「なんて人。あまり乱暴な言い方はしなさらなくてもいいですよ。」
- ja:sa s-o:t-e: ʔikusa: na-ibir-an=do:=tai
 空腹 する-PROG-SEQ.TOP 戦.TOP POT-POL-NEG=SFP.ASS=POL.F
 「お腹がすいていては戦はできませんよ。」
- B: wanne: ʔikusa: eik-an-mun
 1SG.TOP 戦.TOP 好く-NEG-FN
 「俺は戦は好きじゃないもの。」
- A: ʔikusa ei-t̄eu-ru t̄eu=nu u-ibi:m=i. mun=nu tatui=du ja-ibi:-ru. ʔusagamiso:r-e:
 戦 好く-ADN 人=NOM いる-POL=YNQ もの=GEN 例え=FOC COP-POL-ADN 召し上がる-IMP2
 「戦好きな人がいますか。物の例えですよ。召し上がれ。」
- B: i:i, eimu=sa
 いや 済む=SFP
 「いや、結構。」(実践, 47-48) (用例 334, 348, 355, 371 と重複)

4.2.3.3 eijo:形式の〈勧め〉

eijo:形式の〈勧め〉の文は、ce:形式に比べて押しつけがましさが無い。聞き手のことをおもんばかりのような、聞き手に配慮した〈勧め〉の文となっている。

738) [市場にて。豚足の食べ方を勧めるお店の人]

- ʔace: ʔacitibitei ce-i ma:sa-kutu, d̄ziʔi kad-i nd-i=jo:
 足.TOP 煮付け する-SEQ 美味しい-CSL ぜひ 食べる-SEQ みる-IMP1=SFP
 「足は煮付けにすると美味しいから、ぜひ食べてみてよ。」(暮らし, 83)

739) A: k̄w̄at̄t̄ei:ce-i ʔnd̄z̄ite-a:bir-a=tai

- ご馳走する-SEQ 行って来る-POT-INT=POL.F
 「ごちそうになって(もう)行きます。」

B: ke:im=i. jo:nna: ʔik-i=jo:

- 帰る=YNQ ゆっくり 行く-IMP1=SFP
 「帰るのか。ゆっくり行けよ。」

- A: ʔu: 「はい。」
- B: ʔmma: miŋci=n wassa-gutu=ja:
 そこ 道=ADD 悪い-CSL=SFP
 「そこは道も悪いから。」
- A: ʔu: 「はい。」
- B: ʔanu:, jo:nna: tu:r-i=jo:
 FIL ゆっくり 通る-IMP1=SFP
 「あのう、ゆっくり通れよ。」
- A: ʔu:. niŋe:de:biru=tai. ʔance: ʔiŋe-abir-a=i=tai
 はい ありがとう.POL=POL.F CNJ 行く-POL-INT=SFP=POL.F
 「はい。ありがとうございます。それでは行きますね。」(日放, 306-307)

eijo:の勧めの文のうち、文脈や場面設定に加えて、〈忠告・注意〉や〈励まし〉という意味あいがある語彙的に固定されたものがある。例えば、次の用例でみる「注意しろ・気をつけろ」や「頑張れ」等がある(村上, 1993, p. 82)。

740) [日が暮れてから外出する男 B に対して、女 A が提灯を持っていくよう勧める]

- A: habu=nde:=nu u-ine: naran-mun, ŋe:ŋein ŋeikit-i ʔik-e:
 ハブ=等=NOM いる-CND POT-CSL 提灯 つける-SEQ 行く-IMP2
 「ハブなんかがいけないから、提灯をつけて行け。」
- B: ikiga-nuŋe:=ga ʔunu ʔate: nu:=n ʔa-ibir-an
 男-PL=NOM その 位.TOP 何=ADD COP-POL-NEG
 「男だからその位は何でもありません。」
- A: ʔuka:eiko: ne:n=i. ŋe:i e-i=jo:
 危なく.TOP ない=YNQ 注意 する-IMP1=SFP
 「危なくはないかね。注意してね。」
- B: ʔu:ʔu:. na: ʔiŋe-abir-a
 はいはい もう 行く-POL-INT
 「はいはい。もう行きますね。」(日放, 277)

- 741) A: wanne: tutŋei: mutŋe-e: u-ibir-an-eiga, ŋe: e-e: jutas-aibi:=ga
 1SG.TOP 時計.ACC 持つ-SEQ.TOP いる-POL-NEG-ADVRS どう する-CND よろしい-POL=WHQ
 「私は時計を持っていませんが、どうすればよろしいですか？」(用例 315, 357, 631 と重複)
- B: ʔa:, ʔure:=jo:, makate:. waŋ=ga to:=ndi ʔi=sa. ŋe:=n ne:n=sa ŋeibar-i=jo:
 INTJ それ.TOP=IP (人名) 私=NOM INTJ=QT 言う=SFP どう=ADD ない=SFP.MIR 頑張る-IMP1=SFP
 「ああ、それはね、マカテー。私がトー²⁴⁸と言うよ。どうってことないよ。頑張れよ。」(実践, 46-47)

4.2.3.4 eimiso:rijo:形式の〈勧め〉

eiso:rijo:形式の〈勧め〉の文も、聞き手が年上だったり、社会的上位にある立場の者に向かって、聞き手を配慮しながら勧めるようなときに、用いられていた。

- 742) A: to:, ʔance: ʔisudz-i ʔik-e:. ŋiŋe:itumit-i guburi: nat-o:=sa ʔippe: niŋe:do:
 INTJ CNJ 急ぐ-SEQ 行く-IMP2 引きとめる-SEQ 失礼 なる-PROG=SFP.MIR とても ありがとう

²⁴⁸ 「トー」は、何かを始めるときや終わるときの表現・合図である。感動詞。

「さあ、では急いで行け。引きとめて失礼しているよ。本当にありがとう。」

ʔja:=ga ʔi:-ru gutu ge:tobo:ru=nde: ɕɕ-i n:dzu=sa

2SG=NOM 言う-ADN ように ゲートボール=等 する-SEQ 見る=SFP

「お前が言うようにゲートボールでもしてみるよ。」

B: ʔan ei-miso:r-i=jo: ʔance: ʔndz-i te-a:bir-a

そう する-HON-IMP1=SFP CNJ 行く-SEQ 来る-POL-INT

「そうなさいませ。それじゃあ失礼します。」(実践, 14) (用例 12, 69, 583, 604 と一部重複)

743) [道端での会話。あいさつのように用いる]

ɸumitee: tatta teu:kuru na-ibi:-kutu, jo:dzin ei-miso:r-i=jo:

熱気.TOP だんだん 強く なる-POL-CSL 用心 する-HON-IMP1=SFP

「熱気はしだいに強くなりますから、用心しなさいませ。」(調査, 2016/7/25)

744) [雨が降った後で]

kuma: nandurusa-kutu, jo:nna: ʔattei-miso:r-i=jo:

ここ.TOP 滑りやすい-CSL ゆっくり 歩く-HON-IMP1=SFP

「ここは滑りやすいから、ゆっくりお歩きなさいませ。」(調査, 2016/7/25)

調査協力者によれば、聞き手が年上であったり、社会的な立場が上位であったりすることは、敬語表現を用いる大きな理由になるが、実際の会話では、より複雑で、年下および対等の者や親しい者に対しても、上の二例のように敬語を用いることもあるという。例えば、知らない人やそれ程親しくない相手との会話の場合や、親しくてもまだ少し距離があり敬語を用いる関係であったりする場合等である。

4.2.4 命令形を用いた〈許可〉

先述の通り、命令形式を述語に持つ文が〈許可〉を表すことがある。それは、動作の実行の意志・意向が聞き手によって先に示されている場面において、そのような意味あいを表すことができる。詳細は、〈許可〉の文を参照されたい。

745) A: ʔuntce:mun s-abir-a

拝借 する-POL-INT

「お借りします。」

B: mutte-i ʔik-e:

持つ-SEQ 行く-IMP2

「持って行け(持って行っていいよ)。」(調査, 2015/11/30)

4.2.5 命令形を用いた〈勧誘〉

命令形式を述語に持つ文の動作主体が一・二人称である場合、結果として〈勧誘〉を表す。詳細は、勧誘文を参照されたい。

4.2.6 命令形を用いた〈願い〉

動作主体が意志を持たない無情物の場合や、動作主体に対して直接働きかけることが困難な場合、その文は話し手のただの〈願い〉を表す文となる。詳細は、〈願い〉の文を参照。

4.2.7 命令形を用いた〈非難〉

非実現の事象を命令形式を用いて文に差し出すとき、つまり、命令の実行がすでに不可能な場面で、命令表現を用いる場合は、聞き手に対して注意したり、非難したりする文となる(高木, 2009)²⁴⁹。詳細は、〈非難〉の文を参照。

4.2.8 *ce:ja:*, *eijo:ja:*の文のモダリティ

*ce:ja:*や *eijo:ja:*の文は用例が少なく、*ja:*の文の分析も不十分なため、全体的に分析が貧弱ではあるが、批判を恐れずに言うならば、終助辞*ja:*には、聞き手に同意あるいは承諾を求めるという働きがあり(崎原 2016)、話し手が提示した命令行為に対して聞き手の同意や承諾を求めるような意味あいを付け加える(仮にこの意味あいを〈同意〉と呼ぶ)。同時に、話し手は聞き手が当然〈同意〉するだろうという態度で文を述べるため、結果として、〈念押し〉という意味あいを表す。ただし、次にみるように *ce:ja:*と *eijo:*の表す〈念押し〉は若干異なる。

*ce:ja:*形式を伴う命令文が用いられる背景として、一度、聞き手に話し手の望みが伝えられているという文脈が必要である。それにも関わらず、話し手が行為の実行を渋ったり、迷ったりしているため、話し手は行為の実行をもう一度〈念押し〉し、聞き手に同意を得てもらおうというような意図が、下記の用例から感じられる。

次の *ce:*の文のモダリティは〈命令〉である。〈命令〉に *ja:*の意味あいが付け加わることによって、その命令行為の同意・承諾を聞き手に求める文となり、結果として、動作の実行を〈念押し〉する。

746) [首里には行かないとダダをこねる孫に対して祖母が]

sui=ŋkai ?ite-i:ne: ?ja:=ga=ru raku=n sun=do:. ?ane, mai=nu ?ubun=un

首里=DAT 行く-CND 2SG=NOM=FOC 楽=ADD する=SFP.ASS INTJ 米=GEN ご飯=ADD

「首里に行けばお前が楽をするんだよ。ほら、白いご飯も」

teuφa:ra kar-i, teurasaru ?ico:=n ?uteikasabi kasabi ?ja:=ga=ru tei:n=do:

腹一杯 食べる-SEQ きれい-ADN 衣装=ADD 打重ね 重ね 2SG=NOM=FOC 着る=SFP.ASS

「腹一杯食べて、きれいな衣装もたくさん重ねてお前が着るんだよ。」

ja-gutu, ta:ri:=tu madzun sui=kai ?ik-e:=ja:

COP-CSL 父.CH=COM 一緒に 首里=DAT 行く-IMP2=SFP

「だから、父上と一緒に首里に行きなさいね。」(芝居, 590) (用例 134 と同文)

次の *ce:*の文は、3.12.2.2「*eimiso:re:*形式の〈許可-依頼〉」で紹介した使役表現を含んだ〈許可-依頼〉の文である。一度依頼した内容について、再度、聞き手の同意を得ようと〈念押し〉している。

747) [男の子が生まれたら連れにくるという約束だったので]

A: *teu: kanei mi:tunda te-a-ei=ru, ?mmarit-a-ru warabi=nu ikigang^wa=nji?itei teite-a-gutu*

今日 こうして 夫婦 来る-PST-NLZ=FOC 生まれる-PST-ADN 子供=NOM 男の子=QT 聞く-PST-CSL

「今日こうして夫婦で来たのは、生れた子どもが男の子だと聞いたので」

so:-iga te-an. biru:, so:r-ate-i turac-e:=ja:

連れる-PUR 来る-PST (人名) 連れる-CAUS-SEQ BEN-IMP2=SFP

²⁴⁹ 「違反矯正の機会をすでに逃してしまっているのにもかかわらず、命令表現が用いられることがある。もはや違反を矯正しようのない段階におけるこのような表現は、行為が行われなかったことに対する話し手のマイナス評価(非難)を表す」(高木, 2009, p. 110)。

「連れに来た。ピルー、連れさせてくれよな。」

B: tari, satunuci. kunu warabe: nama=madi du:i do:rin wan=ni sudatir-ae-imit-i k^wi-miso:r-i
INTJ.F (人名) この 子供.TOP 今=LIM 通り どうか ISG=DAT 育てる-CAUS-CAUS-SEQ BEN-HON-IMP1
「あおう、旦那様。この子どもは今まで通りどうか私に育てさせてください…」(芝居, 586)

一方, **ei**:ja:形式を伴う命令文は, 事前に行為の実行を〈念押し〉する文となる。つまり, 話し手が聞き手に望む動作を事前に伝え, 同意・承諾を得るかたちで, 動作の実行を〈念押し〉する。禁止命令文なら, その行為をしないように同意・承諾を得ながら〈念押し〉する。

748) **dzino:** kume:kit-i **teikar-i=j**:ja:

お金.TOP 節約する-SEQ 使う-IMP1=SFP

「お金は節約して使ってよね。」(語遊「クメーキュン」2010/12/12, p. 13)

749) sari, waka:dzinu-me:, waŋ=ga kunu ŋino: banti so:te-abi:-gutu nu:=n teigake:=ja

INTJ.M 若按司-HON ISG=GEN この 辺.TOP 番人 しておく-POL-CSL 何=ADD 気がけ=TOP

「さあ, 若按司様²⁵⁰, 私がこの辺の番人をしておきますので何も心配は」

ei-miso:r-aŋ-gutu ju:ju:=tu hanacimunugatai ei-mice:-bir-i

する-HON-NEG-CSL 悠々=COM 話物語 する-HON-POL-IMP1

「なさらずに, ゆっくりとお話なさいませ。」

(チルーの方に向けて言う)

to:, teiru:, ?umukuto: ?in[o: sa-ŋ gutu ?unnukir-i=j]:ja:

INTJ (人名) 思う事.TOP 遠慮 する-NEG よう 言う.HUM-IMP1=SFP

「さあ, チルー, 思う事は遠慮しないで申し上げるんだぞ。」(芝居, 620)

750) A: to:, ?ancee: wa:=ga ?isudz-o:-ru waki ?ite-i teikasu=sa

INTJ CNJ ISG=NOM 急ぐ-PROG-ADN 訳 言う-SEQ 聞かす=SFP

「よし, それでは私が急いでいる訳を言って聞かすさ。」

B: ?u:. to:=tai teikate-i k^wi-mice:-bir-e:

はい INTJ=POL.F 聞かす-SEQ BEN-HON-POL-IMP2

「はい。さあ, 聞かせて下さいませ。」

A: ?aja:=jo: warar-aŋk-i=j]:ja:

母=IP 笑う-NEG-IMP1=SFP

「母さん, 笑うなよな。」

B: wara-ibir-an=sa. nu:ntei waŋ=ga wara-ibi:=ga=tai

笑う-POL-NEG=SFP なぜ ISG=NOM 笑う-POL=WHQ=POL.F

「笑いませんよ。どうして私が笑うのですか。」(実践, 30) (用例 626 と重複)

それぞれのモダリティを〈再度念押し〉と〈事前念押し〉に分けるのも可能だろうが, さらなる詳細な分析が必要なため, 現段階では, 二つとも〈念押し〉という一つのカテゴリーに位置づけた。

ee:, ei, eijo:, wa 形式の文のまとめ

以上, 首里方言の命令形 **ee:**, **ei**, **eijo:**, **wa** のよっつの形式を述語に含む文のモダリティについて明らかにしたことを記述した。**ee:**形式は, 命令文の述語に頻繁に用いられる形式であり, 機能的にも, 一方的で強制力のある命令文で用いられるため, 命令形として最も基本となる形式として位置づけられ

²⁵⁰ 按司は王子に次ぐ貴族階級の称号である。

る。ei:jo:形式は、優しく諭すように言いつける場合等、聞き手に配慮した命令文で用いられる他、その機能的な特徴から、聞き手利益のある〈勧め〉の文で用いられやすい。ただし、〈許可〉の文は、ee:形式が主に用いられる。ei形式は、現代首里方言では、古風な印象を与える表現なので、芝居で用いられる他、諺や引用文にあらわれる。wa形式は、主に不規則動詞のee:形式の代わりとして用いられる他、「上から物を言う」という態度で命令文を聞き手に伝えるという通達的な働きがある。

mice:nの命令形を伴った文は、主に聞き手が年上か、話し手よりも社会的・文化的に上位の立場の者に対して用いられる。〈丁寧な要求・促し〉を表すほか、〈勧め〉や〈許可〉の文も表せる。

また、動作主体が話し手にも及ぶ事象の場合、〈勧誘〉という意味あいを表したり、動作主体が無情物等、直接働きかけることができない場合は、ただの〈願い〉を表す等、動作主体が文のモダリティに関与する。働きかける場面が終了している時点での命令文は、もはや要求文として機能せず、話し手の聞き手に対するマイナスの評価を表す〈非難〉の文となる。

尚、日本語の「しろよ↑」や「しろよ↓」のようなイントネーションによるモダリティのさしわけは首里方言にはない。

表 37 ee:, ei, ei:jo:, wa 形式のモダリティの諸相

強制	利益性		機能	形式	付加された機能	形式	
強 ↑ ↓ 弱	話し手利益あり	聞き手不利益	〈強制〉	ee:, ei(古), wa	+ 〈罵倒〉	ei k ^w e:wa	
		聞き手利益 ニュートラル	〈要求〉	〈指示 1〉	ee:, ei(古), wa	+ 〈同意=念押し〉	ee:ja:
				〈違反矯正〉	厳しく ee: やさしく ei:jo:	—	—
				〈指示 2〉	ei:jo:	+ 〈同意=念押し〉	ei:jo:ja:
				〈丁寧な要求・促し〉	eimiso:re: eimiso:rijo: eimice:bire: eimice:biri eimice:birijo:	—	—
—	話し手利益 ニュートラル	聞き手利益あり	〈招待〉	ei:jo:	—	—	
		話し手・聞き手利益あり	〈勧誘〉	ee: ²⁵¹	—	—	
		聞き手利益あり	〈勧め〉	ee: eimiso:re: ei:jo: eimiso:rijo: (eimice:bire:) (eimice:birijo:)	—	—	
			〈許可〉	主に ee: eimiso:re: eimice:bire:	—	—	
(出来事終了後)		〈非難〉	厳しく ee: やさしく ei:jo:	—	—		

その他の命令文

4.2.9 n(:)ri, n(:)re:を用いた命令文

首里方言には「～してみろ」という言い方がふた通りある。一つ目は、動詞 n:dzun(見る)の命令形

²⁵¹ 勧誘の文は用例が二例しかなく、ei:jo:形式等も用いられる可能性がある。その詳細については今後の課題である。

を用いたものである。n(:)ri と n(:)re:の違いは先に述べた通り、形式ばった言い方と、口語的な命令の言い方である。

751) [民話。王府（公儀）からの命令]

haeira sambon=nakai ja:=nu sangen=ni gogen=nu ja: teukut-i turae-i. teukut-i nd-i
 柱 三本=DAT 家=NOM 三間=DAT 五間=GEN 家.ACC 作る-SEQ BEN-IMP1 作る-SEQ みる-IMP1
 「柱三本に家が三間に五間の家を作ってくれ。作ってみろ。」(那民, 137)

752) [刀が旅人本人の物である証拠を見せてみろと言われて]

su:ku=ja:. kunu katana=nu teiriφa=kara gueein=nu tukuru=ηkai kidzi=nu teutukuru
 証拠=SFP この 刀=GEN 切り羽=ABL 五寸=GEN 所=DAT 傷=NOM 一カ所
 「証拠か。この刀の切り羽から五寸の所に傷が一カ所」

?a-ru hadzi. to:. taekamit-i n:d-i
 ある-ADN INFR INTJ 確かめる-SEQ 見る-IMP1

「あるだろう。さあ、確かめて見ろ。」(聞き手が確かめる)

?a-ra=ja:. ?uri=kara katana=nu teika=nakai ro.dzi=nu φuiteika=nu teik-a:tt-o:-ru hadzi
 ある-DUB-SFP それ=ABL 刀=GEN 柄=LOC 龍=GEN 紋様=NOM 使う-PASS-PROG-ADN INFR
 「あるだろう？それから刀の柄に龍の紋様が使われているはず。」

to:, ?uri=made: n:te-i nd-e:
 INTJ それ=LIM.TOP 見る-SEQ 見る-IMP2

「さあ、それまで見てみろ。」(芝居, 814) (用例 324 と同文)

4.2.10 ma:を用いた命令文

n(:)ri/n(:)re:を用いた命令文とはモダリティが若干異なる。若干、挑戦的あるいは挑発的なニュアンスを伴いやすい。ma:は動詞の連用形・第二中止形に後接する。

753) A: ?ja:=ja nu:=n ?uturu-ko: ne:n. ho:t-i k-u:=wa. kadziga: kumpit-i turas-a
 2SG=TOP 何=ADD 怖い-INF.TOP ない 這う-SEQ 来る-IMP=SFP 首筋 踏んづける-SEQ BEN-INT
 「お前など何も怖くない。這って来いよ。踏んづけてやろう。首筋踏んづけてやろう。」

B: nai-ra:, to: kumpit-i=ma:
 できる-CND INTJ 踏んづける-SEQ=見る.IMP

「できるなら、さあ踏んづけてみろ。」(語遊「ウーユーサン」2008/7/13, p. 17) (用例 577 と同文)

754) [A が人から貰ったダイヤの指輪を B に自慢して見せる]

A: ?unu ?i:binagi: n:te-i=ma:. ?e:, daija=ndi=do:. so:mun ja-e: s-an=i
 この 指輪 見る-SEQ=IMP INTJ ダイヤ=QT=SFP 本物 COP-INF.TOP する-NEG=YNQ
 「この指輪見てみろ。ほら、ダイヤだとよ。本物だろう？」

B: so:mun ja=sa
 本物 COP=SFP

「本物だよ。」(実践, 34) (用例 344, 558, 734 と重複)

755) [無職の男たちがちよっかいを出して、手伝いもせず邪魔ばかりするので]

?itta:=n ikiga ja-e: sum=i. ?ukit-o:t-i hana φute-e: nar-an=do:. to: teibat-i
 2PL=ADD 男 COP-INF.TOP する=YNQ 起きる-PROG-SEQ 鼻 吹く-SEQ.TOP POT-NEG=SFP.ASS INTJ 気張る-SEQ
 「お前達これでも男なのか。起きていながら、いびきをかいてはいけないぞ。さあ、頑張って」

?umani:-ta: tigane: ee-i=ma:
 姉さん-PL.GEN 手伝い.ACC する-SEQ=見る.IMP

「女達の手伝いをしてみる。」(実践, 37) (用例 267 と一部重複, 519 と同文)

756) [祖母と孫の会話]

- A: nu:=nu ?awari s-o:=ga. ?mme:=ŋkai ?ite-i teik-ate-i=ma:
何=GEN 苦勞 する-PROG=WHQ お婆=DAT 言う-SEQ 聞く-CAUS-SEQ=見る.IMP
「何の苦勞しているの？お婆ちゃんに言って聞かせてごらん。」
- B: ?ure: tteu=ŋkae: teik-as-ar-an ?awari=du ja-ibi:-ru
それ.TOP 人=DAT.TOP 聞く-CAUS-POT-NEG 苦勞=FOC COP-POL-ADN
「それは人には聞かせられない苦勞なのです。」(実践, 14)

4.2.11 ma:ni を用いた命令文

先の ma: に ni が付いた形である。調査協力者によると, ma: の文を強くした感じだと言う(面接調査, 2015年12月21日)。より挑戦的あるいは挑発的なニュアンスを伴いやすい。ma:ni も動詞の連用形・第二中止形に後接する。また, na:ni というヴァリエーションもある。

757) nu:=ndi: i:. nama nu:=ndi ?ite-a=ga. na: teuke:n ?ite-i=ma:ni

何=QT EQ 今 何=QT 言う-PST=WHQ もう 一回 言う-SEQ=見る.IMP
「何だと？今何と言ったか？もう一回言ってみる！」(語遊「～ンディ」2010/6/13, p. 15)

758) [身分のある者との間にできた子供を泣く泣く養子に出すジュリ(芸妓) A と里親になってくれるという女 B の会話]

- A: wanne: kuri=eei ?uwakari s-abir-a
1SG.TOP これ=INST お別れ する-POL-INT
「私はこれで失礼します。」
- B: teu: wakari-e: na: ?iteaju-ru kuto: nar-an hadzi. ?uri na: teukeno: ?uja=ndi ?ite-i
今日 別れる-CND もう 会う-ADN 事.TOP できる-NEG INFR INTJ もう 一回.TOP 親=QT 言う-SEQ
「今日別ればもう会う事はできないだろう。さあ、もう一回は親だと言って」
teu:ku date-i=na:ni
強く 抱く-SEQ 見る.IMP
「強く抱いてごらん。」
- A: dak-ate-i k^wi-mice:m=i
抱く-CAUS-SEQ BEN-HON=YNQ
「抱かせてくださるの…」(芝居, 644) (用例 118 と同文)

759) nu: jat-i watta: su: kurute-a=ga. ?ite-i=na:ni

何 COP-SEQ 1PL.GEN 父.ADD 殺す-PST=WHQ 言う-SEQ=見る.IMP
「どうして俺たち父さんを殺したのか！言ってみる！」(芝居, 784)

551') [殺したのは正当防衛であって、本意ではない。正直に殺したことを告白したが、当時の事情を知らない息子達に罵倒されてしまう]

- to:, watta: su: kurute-an=ne: ee-i tatte-i=ma:ni. nu:=ga tat-an ?a-ru
INTJ 1PL.GEN 父 殺す-PST=ように する-SEQ 立つ-SEQ=みる.IMP 何=FOC 立つ-NEG ある-ADN
「さあ、俺の父さんを殺したときのように立ってみる！どうした、なぜ立たない？！」(芝居, 798)

4.2.12 否定質問形式を用いた命令文

否定質問形式を伴った文が〈命令〉を表す事もできる。ネガティブな評価的なニュアンスを伴う。四つ目の最後の用例は、事象が過ぎ去った〈非難〉の例である。

760) tai=tumu eigutu=n s-an, kuma=uti go:gut̃eis-o:-eiga, he:ku eigutu s-an=i
 二人=とも 仕事=ADD する-NEG-SEQ ここ=LOC 文句を言う-PROG-ADVRS 早く 仕事 する-NEG=YNQ
 「二人とも仕事もしないで、ここで文句ばかり言っているけど、早く仕事しないか。」(芝居 2, 1218)

761) A: ʔugueiko: t̃t̃eu=nu mando:-kutu t̃t̃ei: t̃t̃eikir-an=dare:naran=do:
 首里城.TOP 人=NOM 多い-CSL 気.ACC つける-NEG=OBLG=SFP.ACC

「首里城は人が多いから、気をつけないといけないぞ。」

B: ʔu:. nna mad̃zun ʔaeibi:-ga ʔite-abi:-kutu, t̃t̃eimuḍ̃zu:s-aibi:n
 はい 皆 一緒に 遊び-PUR 行く-POL-CSL 心強い-POL

「はい。皆んな一緒に遊びに行きますので、心強いです。」

A: maruke:ti:na:=ja sumut̃t̃ei=n jum-an=i
 時々=TOP 本=ADD 読む-NEG=YNQ

「たまには本も読まないか！」(入門, 78) (用例 3, 390 と重複)

762) [身分ある役人が親切心で百姓のお婆さんの荷物を持とうとしたので、側にいた別の役人が言う]

ha:me:, ʔusuri=n eir-an. du:kuru mut-an=i
 婆さん.CL 恐れ=ADD 知る-NEG 自分で 持つ-NEG=YNQ

「婆さん、恐れも知らん。自分で持たないか。」(芝居, 542)

557) A: ḍ̃ziru:-ta: ja:=ŋkai ʔaeib-i:ga ʔik-an=i
 (人名)-PL.GEN 家=DAT 遊ぶ-PUR 行く-NEG=YNQ

「ジルーの家に遊びに行かないか。」(中略)

B: ḍ̃zu:su-g^{wa}:=tu k^{wa}:ei-g^{wa}: ko:t-i=kara ʔik-a
 ジュース-DIM=COM お菓子-DIM.ACC 買う-SEQ=ABL 行く-HORT

「ジュースとお菓子を買ってから行こう。」

A: ʔai, ḍ̃zin=nu ne:ran. ʔja: mut̃t̃e-o:m=i
 INTJ 金=NOM ない お前 持つ-PROG=YNQ

「あ、お金がない！お前持ってるか？」

B: wannin ne:ran=do:. t̃t̃ea: su=ga
 1SG.ADD ない=SFP.ASS どう する=WHQ

「俺もないよ。どうする？」

A: na: ḍ̃ziru:-ta: ja:=ŋkae: ʔateā ʔik-a
 もう (人名)-PL.GEN 家=DAT.TOP 明日 行く-HORT

「もうジルーの家には明日行こう。」

B: hassamijo:. t̃t̃aeikamit-i=kara ʔabir-an=i
 INTJ 確かめる-SEQ=ABL 言う-NEG=YNQ

「ええっ！確かめてから言わないか！」(入門, 34)

4.2.13 動作主体が二人称の sandare: naran の文 (必要一命令)

動作主体が二人称で事象が未実現の場合、聞き手への《働きかけ》という意味あいが生じ、結果として〈命令・忠告・警告〉といった意味あいが生じる²⁵²。do:が用いられることで、聞き手に働きかける意味あいが強まり、忠告・警告的な意味あいが強くなる。詳細は、必要文を参照。

390) ʔugueiko: t̃t̃eu=nu mando:-kutu, t̃t̃ei: t̃t̃eikir-an=dare:naran=do:
 首里城.TOP 人=NOM 多い-CSL 気.ACC つける-NEG=OBLG=SFP.ACC

²⁵² 宮崎他 (2002) や奥田 (1999b) も参照されたい。

「首里城は人が多いから、気をつけないといけないぞ。」(入門, 78)

4.2.14 動作主体が二人称の *ciwadu jaru* の文 (必要-命令)

動作主体が二人称の *ciwadu jaru* の文も、〈必要〉という意味あいにより《働きかけ性》が加わって、〈強制・命令・忠告〉あるいは〈義務の押しつけ〉を表す。多くは、終助辞 *do:* を伴う。*do:* が用いられることで、忠告・警告的な意味合いが強くなる。詳細は、必要文を参照。

433') [二十歳の頃、地域の行事をすっぽかしたら母親が言う]

hataŋci=n ʔamar-e:=kara: muraguge:=n ei:-wa=rujan=do:

二十歳=ADD 余る-CND=ABL.TOP 村付き合い=ADD する-CND=OBLG=SFP.ASS

「二十歳も超えてからは村付き合いもしないといけないよ。」(語遊「クゲーとヒレー」2011/6/26, p. 19)

4.3 依頼文

依頼文は、授受補助動詞を伴って、聞き手に対して未実現の動作の実行をお願いする文である。したがって、動作主体は聞き手(二人称)である。強制力はほとんどない。動作の実現の選択はほとんど聞き手に委ねられている。動作の実現は、話し手にとって利益をもたらすが、聞き手にとってはそうではないことも多い。

用いられる授受補助動詞には、*kʷi:n* と *turasun* の二つある。*turasun* の方が聞き手に配慮する場面で用いられやすいため、丁寧な表現となる(調査協力者、面接調査, 2015年12月21日)。したがって、下記の用例では、*turasun* の用例の方がより丁寧である。

763) *gomanen karate-i kʷir-e:*

五万円 貸す-SEQ BEN-IMP2

「五万円貸してくれ。」(調査, 2015/12/21)

764) *gomanen karate-i turac-e:*

五万円 貸す-SEQ BEN-IMP2

「五万円貸してちょうだい。」(調査, 2015/12/21)

765) A: *nimotsu wa:=ga mutte-abi:=sa*

荷物 1SG=NOM 持つ-POL=SFP

「荷物私が持ちますよ。」

B: *mutte-i kʷir-e:=ja:*

持つ-SEQ BEN-IMP2=SFP

「持ってくれよ。」(調査, 2015/12/21)

766) A: *nimotsu wa:=ga mutte-abi:=sa*

荷物 1SG=NOM 持つ-POL=SFP

「荷物私が持ちますよ。」

B: *mutte-i turac-e:=ja:*

持つ-SEQ BEN-IMP2=SFP

「持ってちょうだいね。」(調査, 2015/12/21)

4.3.1 *kʷi:n* を含む文

口語的な場面では *kʷire:*, 形式的な場面では *kʷiri* が用いられる。

767) [商売人だと嘘を言ってからかう男 B と本物の商売人である女 A とのかけあい。喜劇]

A: wannin ʔan=do:. de:=ja har-a:nt-i=n eimun=do:. ko:t-i k^wir-e:
ISG.ADD ある=SFP.ASS 代=TOP 払う-NEG-SEQ=ADD 済む=SFP.ASS 買う-SEQ BEN-IMP2
「俺もちゃんとあるぞ。お金は払わなくてもいいぞ。買ってくれ。」

B: dzin harat-i ko:i-ei=du ʔateine: ja-ibi:-ru
金.ACC 払う-SEQ 買う-NLZ=FOC 商売 COP-POL-ADN

「お金を払って買うのが商売というものです。」(実践, 39) (用例 501 と重複)

768) masan[u: matte-i k^wir-e: masan[u: ʔja:=madi=n wan eitiʔiteu-ru ba:=i

(人名) 待つ-SEQ BEN-IMP2 (人名) 2SG=LIM=ADD ISG.ACC 捨て行く-ADN わけ=YNQ
「マサンルー、待ってくれ。マサンルー。お前までも俺を捨てていくのか…」(芝居, 924)

769) [可哀そうなわが子の運命はどうなのか、自分に問いかけている]

A: ʔiteitui-busa-ru kukuro: jamajama samadzama ʔa-eiga, samure:=nu dziri kado:
引き取る-DES-ADN 心.TOP やまやま 様々 ある-ADVRS 侍=GEN 義理 格式.TOP
「引き取りたい気持ちはやまやま様々あるが、侍の義理格式は」

ʔuçi:mun jan ja-gutu, ʔja: teui=ga kk^wa=tueci sudatit-i turae-i
大きな物 COP COP-CSL 2SG 一人=NOM 子供=として 育てる-SEQ BEN-IMP1
「大層なものだから、お前一人で子供を育ててくれ。」

B: samure:=nu dziri=ndi ʔi-ee: ʔansuka ʔuçi:mun ja-ibi:m=i
侍=GEN 義理=QT 言う-NLZ.TOP それ程 大きな物 COP-POL=YNQ
「侍の義理と言うのは、それ程大層なものですか。」

watta: guto:ru eimudzimu=no: wakaj-abir-an
IPL.GEN ような 身分の低い者=NOM.TOP わかる-POL-NEG
「私のような身分の低い者ではわかりません。」

A: teiru: jurute-i k^wir-i

(人名) 許す-SEQ BEN-IMP1

「チルー、許してくれ。」(芝居, 626) (用例 223 と一部重複)

日本語の「～してくれないか?」のように、肯否質問文から派生して、依頼文となる場合がある(詳細は後述の〈質問-依頼〉文を参照)。

770) gomanen karate-i k^wir-an=na:

五万円 貸す-SEQ BEN-NEG=YNQ2

「五万円貸してくれないか。」(調査, 2015/12/21)

4.3.2 turasun を含む文

771) [民話。助けてもらった恩返しにこっそり竜宮城から人間の男にご馳走を運んでいた人間の女に化けた魚だが、男に姿を見られてしまったので、魚に戻れなくなってしまったと泣いてしまう。そこで男が女に言う]

mutu=ni mudur-ar-an-ne: tea:na kunumama inagu=tueci ut-i turae-e:
元=DAT 戻る-POT-NEG-CND どうか このまま 女=として いる-SEQ BEN-IMP2

「元に戻れないならどうかこのまま(人間の)女としていてくれ。」

wa:=ga magukuru teikute-i ʔja: mi:kanje: su=sa
ISG=NOM 真心 尽くす-SEQ お前.GEN 世話 する=SFP

「私が真心尽くしてお前の世話するよ。」(大沖 35, 40) (用例 633 と重複)

首里方言には「くれる」「やる」の区別がない。

772) ?unu jumu-d̄zira=jo: teiramikk^wasan-u ɸu:d̄zira teinteikit-i turac-e:

この PEG-顔=IP 面憎い-MIR ほっぺた つねる-SEQ BEN-IMP2

「この憎たらしい顔よ。面憎い！ほっぺたをつねってやれ。」(語遊「チラミックッサン」2010/5/9, p. 13)

773) nu:=nu ?at-a=ga. wakai-ru gutu kume:kit-i teik-ate-i turac-e:

何=NOM ある-PST=WHQ わかる-ADN ように 詳述する-SEQ 聞く-CAUS-SEQ BEN-IMP2

「何があったのか。わかるように詳しく聞かせてくれ。」(語遊「クマーキュン」2010/12/12, p. 13)

774) [役人 B が村を視察している所に百姓達が薪を担いで何事もないかのようにやってくる。すると村長 A が慌てて百姓達に知らせる。B は百姓に優しく声をかける。C は村の百姓達]

A: ?ane ?ane, gud̄ze:ban ja-mice:-eiga teikubo:rani, teikubo:rani

INTJ INTJ 御在番 COP-HON-NASS INTJ INTJ

「ほらほら、御在番様でいらっしゃるぜよ。控えないか、控えないか」

B: ?anee: kaeikumar-ant-i=n eimi=ru su-ru. ?itta: ?awarina kurace: ju: wakat-o:-gutu

それ程.TOP かしこまる-NEG-SEQ=ADD 済む=FOC する-ADN 2PL 哀れな 暮らし.TOP よく わかる-PROG-CSL

「そんなにかしこまらなくてもよいのだ。お前達の哀れな暮らしはよくわかっているから」

kuri=kara: d̄zo:no:mun karuku nate-i, ?itta:=ga raku nai-ru gutu kan̄ge:t-i turasu-gutu

これ=ABL.TOP 上納物.ACC 軽く 成す-SEQ 2PL=NOM 楽 なる-ADN ように 考える-SEQ BEN-CSL

「これからは上納物を軽くして、お前達が楽になるように取り計らってやるから」

teibat-i turac-i=jo:

気張る-SEQ BEN-IMP1=SGP

「頑張ってくれよ。」(芝居, 536-538) (用例 331, 332, 503, 534 と一部重複)

775) [可哀そうなわが子の運命はどうか、自分に問いかけている]

ɸiteitui-busa-ru kukuro: jamajama samad̄zama ?a-eiga, samure:=nu d̄ziri kado:

引き取る-DES-ADN 心.TOP やまやま 様々 ある-ADVRS 侍=GEN 義理 格式.TOP

「引き取りたい気持ちはやまやま様々あるが、侍の義理格式は」

?uɸi:mun jan ja-gutu, ?ja: teui=ga kk^wa=tucei sudatit-i turac-i

大きな物 COP COP-CSL 2SG 一人=NOM 子供=として 育てる-SEQ BEN-IMP1

「大層なものだから、お前一人で子供を育ててくれ。」(芝居, 626) (用例 223, 769 と一部重複)

4.3.3 ?utabimice:n を含む文

?utabimice:n は k^wi:n に mice:n がついた k^wimice:n よりもさらに敬度が高い敬語表現である(音声「ウタビミシエーン」)。かなり社会的身分の高い人に対して〈依頼〉する場合に用いられる。

776) [上の続き。役人 B が村を視察している所に百姓達が薪を担いで何事もないかのようにやってくる。すると村長 A が慌てて百姓達に知らせる。B は百姓に優しく声をかける。C は村の百姓達]

A: ?ane ?ane, gud̄ze:ban ja-mice:-eiga teikubo:rani, teikubo:rani

INTJ INTJ 御在番 COP-HON-NASS INTJ INTJ

「ほらほら、御在番様でいらっしゃるぜよ。控えないか、控えないか」

B: ?anee: kaeikumar-ant-i=n eimi=ru su-ru. ?itta: ?awarina kurace: ju: wakat-o:-gutu

それ程.TOP かしこまる-NEG-SEQ=ADD 済む=FOC する-ADN 2PL 哀れな 暮らし.TOP よく わかる-PROG-CSL

「そんなにかしこまらなくてもよいのだ。お前達の哀れな暮らしはよくわかっているから」

kuri=kara: d̄zo:no:mun karuku nate-i, ?itta:=ga raku nai-ru gutu kan̄ge:t-i turasu-gutu

これ=ABL.TOP 上納物.ACC 軽く 成す-SEQ 2PL=NOM 楽 なる-ADN ように 考える-SEQ BEN-CSL

「これからは上納物を軽くして、お前達が楽になるように取り計らってやるから」

teibat-i turac-i=jō:

気張る-SEQ BEN-IMP1=SFP

「頑張ってくれよ。」

C: do:rin jutaeiku kange:t-i ?utabimicee:-bir-i

どうか よろしく 考える-SEQ BEN.HON-POL-IMP1

「どうかよろしくお願い申し上げます。」(芝居, 536-538) (用例 331, 332, 503, 534, 774 と一部重複)

4.3.4 意志文による〈依頼〉(意志-依頼)

「お願いしよう」というフレーズを伴った意志文では、「お願いする」のは話し手であるが、動作のない手は聞き手、あるいは聞き手をメインに話し手と聞き手の両方である。このような文では、動作の実行に対する〈話し手の意志〉よりも〈待ち望み〉のニュアンスが前に押しだされて、動作の実行を聞き手に〈お願い〉する意味あいが生じる。

777) A: dampatei ?unige: s-abir-a

散髪.ACC お願い する-POL-INT

「散髪をお願いしましょう。」

B: do:din kuma=ŋkai i-miso:r-e:

どうぞ ここ=DAT 座る-HON-IMP2

「どうぞ、こちらにお座り下さい。」(沖会, 73)

778) [閑散として貧しい百姓の村の様子を見て役人 A が部下 B に向かって言う]

A: kuri=kara ?utage:=ni teikara ?uteiawate-i çakueo:-nutea:=ga eiawaei=ni nai-ru gutu

これ=ABL お互い=DAT 力 打ち合わせる-SEQ 百姓-PL=NOM 幸せ=DAT なる-ADN ように

「これからお互いに力を合わせて百姓達が幸せになるように」

hakarat-i ?ik-a=na

計らう-SEQ 行く-HORT=SFP

「取り計らって行こう。」

B: jutaeiku ?unige: s-abir-a

よろしく お願い する-POL-INT

「よろしくお願いします。」(芝居, 536) (用例 661 と重複)

4.3.5 質問文による〈依頼〉(質問-依頼)

次の主語が二人称の i の文は、述語に -ti k^wi:n (～してくれる) を伴い、聞き手への〈依頼〉として働く。そのような文をここでは〈質問-依頼〉の文と呼ぶ。命令文のように聞き手に直接働きかけるのではなく、聞き手に尋ねることによって聞き手の判断を確認し、間接的に聞き手に働きかける。聞き手に尋ねて聞き手の判断を引き出すという質問文の機能上、命令形を述語にもつ文の〈依頼〉よりも、聞き手の判断・意向を確認するという配慮があり、強制力はなく、押しつけがましさが無い。

779) A: ?undzo: nu:gana ?ui-ee: ne:-miso:r-an=i

2SG.HON.TOP 何か 売る-NLZ.TOP ない-HON-NEG=YNQ

「貴方は何か売るのはありませんの。」

B: ?an=do: ko:t-i k^wi:m=i

ある=SFP 買う-SEQ BEN=YNQ

「あるぞ。買ってくれるか。」

A: muno: n:te-i=kara=du ko:-ibi:-ru
物.TOP 見る-SEQ=ABL=FOC 買う-POL-ADN
「物は見てから買います。」(実践, 39)

主語を二人称にした *i/mi* あるいは *na*:の文は、日本語の「～してくれないか?」のように述語に-*ti* *k^wi:n/turasun*(～してくれる)の否定形を伴い、聞き手への〈依頼〉を表す場合がある。否定形を伴う方がより丁寧な依頼文となる。

780) [彼氏 A と彼女 B の会話]

A: wan=tu madzun to:k'o:=ndzi kurate-i k^wir-an=i
1SG=COM 一緒に 東京=LOC 暮らす-SEQ BEN-NEG=YNQ
「俺と一緒に東京で暮らしてくれないか?」

B: ?an ei:-busa-ibi:=eiga, ?uja=nu jamme: kakat-i tundzaku s-an=de:na-ibiraŋ-kutu
そう する-DES-POL=ADVRS 親=NOM 病気 かかる-SEQ 看病 する-NEG=OBLG-POL-CSL
「そうしたいのですが、親が病気にかかって看病しないとイケないですから...」(リア, 107) (用例 396 と重複)

781) gomaŋen karate-i k^wir-an=na:

五万円 貸す-SEQ BEN-NEG=YNQ2
「五万円貸してくれないか。」(調査, 2015/12/21)

782) gomaŋen karate-i turas-an=na:

五万円 貸す-SEQ BEN-NEG=YNQ2
「五万円貸してちょうだいな。」(調査, 2015/12/21)

783) na: d̄zidzo:=ndi ?i-ee: nu: ja=ga. di: wan=nin kai katat-i k^wi-nso:r-an=na:
2SG.HON.GEN 事情=QT 言う.NLZ.TOP 何 COP=WHQ INTJ 1SG=DAT 語る-SEQ BEN-HON-NEG=YNQ2
「貴方の事情と言うのは何か?ほら、私に語って聞かせて下さらないか?」(芝居, 676)

784) A: ?unu katana micit-i k^wi-nso:r-an=na:

その 刀 見せる-SEQ BEN-HON-NEG=YNQ2
「その刀見せて下さらんか。」

B: kure: t̄teu=ni micit-e: nar-aŋ-gutu, n:te-e: k^wi-nso:n=nake:=ja:
これ.TOP 人=DAT 見せる-SEQ.TOP POT-NEG-CSL 見る-SEQ.TOP BEN-HON=PROH=SFP
「これは人に見せてはいけないから、見ては下さいますな。」(芝居, 758)

gaja:は疑い文で用いられるが、〈依頼〉という意味あいを伴った質問文で用いられる場合、婉曲的な意味あいを付け加えて、より遠回しで丁寧な依頼文となる。

785) kanci ?iteai-ei=n nu:gana=nu in=nu ?at-i=du ja-ru hadzi

こうして 会う-NLZ=ADD 何か=GEN 縁=NOM ある-SEQ=FOC COP-ADN INFR
「こうして会ったのも何かの縁があつてのことだろう。」

do:rin nasaki ?at-i, teu: iteija ?itta:=ni tuma-rate-i k^wi-nso:r-aŋ=gaja:

どうか 情け ある-SEQ 今日 一夜 2PL=DAT 泊まる-CAUS-SEQ BEN-HON-NEG=YNQ3
「どうか情けで、今日一夜お前の所に泊まらせて下さらんかね?」(芝居, 770) (用例 126 と同文)

4.4 禁止文

禁止文は、動作を実行しないように仕向けたり、働きかけたり、制御したりする文である。そのような文のモダリティを〈禁止〉と呼ぶ。動作を実行しないように仕向けられるのは聞き手である。したがって、二人称文となるが、動作主体が主語として明示されないことも多い。首里方言では、na を用いた動詞の禁止形が用いられる他、sanke: (lit. しないでおけ) という禁止形がある。

4.4.1 na の文

na を用いた禁止文は、日本語の「するな」にほぼ相当するもので、〈禁止〉を表す形式としては最も典型的・基本的なものとして位置づけられる。

786) A: ?e:, ?ja:=ja suba=kara ?abi:n=na. kacimasan-u

INTJ 2SG=TOP 側=ABL 言う=PROH うるさい-MIR

「おい、お前は側から言うな。騒々しい。」

B: ?ama=ga=ru wassa-ru-mun. ?uri ?abir-an ?ute-abi:m=i

あそこ=NOM=FOC 悪い-ADN-FN.CSL それ.ACC 言う-NEG.SEQ おく-POL=YNQ

「向こうが悪いんだもの。それを言わないでおくんですか？」(リア, 24)

787) munu kama-gatei: juntako: su=na. damat-i kam-e:

ご飯.ACC 食べる-SIM おしゃべり.TOP する=PROH 黙る-SEQ 食べる-IMP2

「ご飯を食べながらおしゃべりはするな。黙って食べろ。」(語遊「〇〇ガチー」, 2010/1/10, p. 9)

788) makatu:, natei=n su=na. nadzitei=n su=na. kannadzi na:tamaeidamaeci

(人名) 泣き=ADD する=PROH 嘆き=ADD する=PROH 必ず 皆それぞれ

「マカトゥー、泣きもするな。嘆きもするな。必ず皆それぞれ」

naeimunukk^wa=n ?utabi-mice:-kutu. ?anee: nadzite-e: k^{wi}:n=na

生みの子=ADD BEN-HON-CSL だから 嘆く-SEQ.TOP BEN=PROH

「生みの子も授かるのだから。だから嘆いてくれるな。」

禁止文には、上記の例のように、すでに行なっている動作(あるいはそうしつつある動作)に対して、これ以上しないように制止するものと、次に挙げる用例のように、未実現の動作に対して聞き手に働きかけてその動作をしないよう禁止するもののふた通りある。na の文は圧倒的に前者のこれ以上しないように働きかける制止を表すことが多い。

789) [沖縄の昔のことわざ・教訓]

k^wanasa:=ŋkai jadu karasu=na. tuku=nu kami mutte-i ?ik-ari:n=do:

産婦=DAT 宿.ACC 貸す=PROH 徳=GEN 神 持つ-SEQ 行く-PASS=SFP.ASS

「産婦に宿を貸すな。徳の神持って行かれるよ。」(大沖 32, 42)

4.4.2 najo: の文

na にさらに jo: が後接した najo: 形式が用いられるときは、相手を諭すように言う場合や、念を押す場合である。したがって、次の用例のように起こりつつある聞き手の心理状態に対して訴えかけて、そのような感情を持たないよう働きかけるような文が可能である。

790) [夫 A と妻 B の会話。夫のズボンの股間部分が破れている。今からそのことを告げる]

A: ʔaja:=jo:, warar-an̄k-i=jō:ja:

母.CH=VOC 笑う-NEG-IMP1=SFP

「母さん、笑うなよな。」

B: wara-ibir-an=sa. nu:n̄tei waŋ=ga wara-ibi:=ga=tai

笑う-POL-NEG=SFP なぜ 1SG=NOM 笑う-POL=WHQ=POL.F

「笑いませんよ。どうして私が笑うのですか。」

A: i:i, ʔja:=ga: warain

いや 2SG=NOM.TOP 笑う

「いや、お前なら笑う。」

B: wara-ibir-an=di ʔunnukit-o:-eiga t̄eik-ari-miso:r-an=i

笑う-POL-NEG=QT 言う.HUM-PROG-ADVRS 聞く-PASS-HON-NEG=YNQ

「笑いませんと申し上げていますが聞こえていらっしやらないの？」

A: ʔariari, watta: ʔaja:=jo:, wad̄zin=na=jō:

INTJ 1PL.GEN 母=IP 怒る=PROH=SFP

「あらあら、俺の母さんたら、怒るなよ。」

B: wad̄zi:=n s-abir-an, warai=n s-abir-an=sa. ʔe:ku na: ʔite-i t̄eik-aei-miso:r-e:

怒る.INF=ADD する-POL-NEG 笑う.INF=ADD する-POL-NEG=SFP 早く もう 言う-SEQ 聞く-CAUS-HON-IMP2

「怒りもしないし、笑いもしませんよ。早くもう言って聞かせてくださいな。」

A: ʔaja:, waŋ=ga kissa=kara kuma kateimit-o:-ei n:t̄e-o:m=i

母 1SG=NOM さっき=ABL ここ.ACC 捕まえる-PROG-NLZ.ACC 見る-PROG=YNQ

「母さん、私がさっきからここを捕まえてるのを見ているか。」(実践, 30) (用例 626, 711 と重複)

najo:の文は聞き手に配慮するような、あるいは諭すようなニュアンスを伴うからだろうか、圧倒的に次のような未実現の動作をしないよう禁止する場面で用いられやすい。

791) [B が豆腐屋に行くと言って。あそこの店の豆腐はおいしいかどうか聞かれて、どうだろうか考えている。思考途中であることを表している (用例 221, 320 と一部重複)]

A: ʔama=nu to:ho: masam=i

あそこ=GEN 豆腐.TOP おいしい=YNQ

「あそこの豆腐はおいしいか。」

B: t̄eɑ:=ga ja-ra wannin had̄zimiti=du jan=de:

どう=FOC COP-DUB 私.ADD 初めて=FOC COP=SFP

「どうだろう。私も初めてだよ。」

A: narabit̄e-e: ʔama=nd̄ze: ko:n=na=jō: (中略) ʔama=nu to:ʔu kami:-ne: eiɡu ʔi:n=di=do:

並ぶ-SEQ.TOP あそこ=LOC.TOP 買う=PROH=SFP あそこ=GEN 豆腐 食べる-CND すぐ 下す=QT=SFP.ASS

「並んでまではあそこでは買うなよ。あそこの豆腐食べたらすぐお腹壊すよ。」(実践, 33)

792) A: na:, eiɯ=sa ʔja:=ga t̄eɑ: nara-wa=n wa:=ga eit̄t̄e-o:=mi. ʔit̄e-busa-ra: ʔe:ku na: ʔik-e:

もう 済む=SFP 2SG=NOM どう なる-CND=ADD 1SG=NOM 知る-PROG=YNQ 行く-DES-CND 早く もう 行く-IMP2

「もう、いい。お前がどうなろうが私が知ったもんか。行きたかったら早くもう行け。」

ja-eiga=jō:, ʔant̄t̄e=tu wan sata: su=na=jō:

COP-ADVRS=IP あの人の人=COM 1SG.GEN 噂.TOP する-PROH=IP

「だけど、あのひとと私の話はするなよ。」

B: nabit̄u:=jō:, nama=ne: wakat-a=sa. ʔja:=ja ta:ta=nu tamme:=tu nu:gana jan=ja:

(人名)=IP 今=DAT.TOP わかる-PST=SFP 2SG=TOP (人名)=GEN お爺=COM 何か COP=SFP

「ナビトゥー、今わかった。お前は多和田のおじいと何かあるんだな。」(実践, 34) (用例 489 と同文)

793) A: kaniti ʔi:awate-a-ru tu:i, dʒiŋkani ʔubaitur-a:, eigu nugi:-ru gutu=do:ja:

予て 言い合わせる-PST-ADN 通り 銭金.ACC 奪い取る-CND すぐ 逃げる-ADN ように=SFP

「前に言い合せて通り、お金を奪い取ったら、すぐ逃げるようにな。」

da:na, inagu=ŋkai=ja mi:=ja kakin=na=jo:

(人名) 女=DAT=TOP 目=TOP かける=PROH=SFP

「田名、女には目をくれるなよ。」

B: wakat-o:=sa

わかる-PROG=SFP

「わかってるよ。」(芝居, 700)

すでに起こっていることや、起きてしまったことに対して述べる場合でも用いられる。その場合は、これ以上状況が悪化しないよう〈制止〉したり、してしまったことに対する〈非難〉を表す。

794) [商品を見せてくれと女が頼むと、男は目の前にあると言う。女が見えないので、指差しをして見せてくれと頼むが…]

A: to:, ʔance: ʔi:binutei ee-i micit-i kʷi-miso:r-e:²⁵³

INTJ CNJ 指差し する-SEQ 見せる-SEQ BEN-HON-IMP2

「そう、それじゃあ指で差して見せて下さいな。」

B: to:to:, na: eimu=sa. mi:r-an mun=nu=n ko:r-ari:m=i. ko:r-ant-i=n eimu=sa. na: ʔik-e:

INTJ もう 済む=SFP 見える-NEG 物=NOM=ADD 買う-POT-YNQ 買う-NEG-SEQ=ADD 済む=SFP もう 行く-IMP2

「はいはい、もう結構。見えないものなんか買えるか！買わなくても結構だ。さっさと行け。」

A: ʔundzo: so:-jukueimuna: ja-ibi:=sa. tteu=nu teimu jaʔaraki: dzo:dzi nat-i

2SG.TOP 本当に嘘つき COP-POL=SFP 人=GEN 心.ACC 和らげる事 上手 なる-SEQ

「貴方は本当に嘘つきですね。人の心を和らげるのがなんともお上手で」

B: ʔa:, ʔumani:=jo:. kanteige: su=na=jo:. ʔitta: teimu jaʔarakit-i tea: su=ga

INTJ 姉=VOC 勘違い する=PROH=SFP 2PL.GEN 肝 和らげる-SEQ どう する=WHQ

「おい、姉さん。勘違いするなよな。お前達の心を和ませてどうする？」

wanne: so:muni: s-o:-eiga, ʔitta:=ja teik-an=du ʔan=de:

1SG.TOP 真実言い する-PROG-ADVRS 2PL=TOP 聞く-NEG=FOC ある=SFP.NASS

「私は本当の事を言っているのだが、お前達が聞かないんだよ。」(実践, 40) (用例 382, 502 と重複)

795) [A が手を挙げずに質問しようとする]

A: ʔe:=sai

INTJ=POL.M

「あのう。」

B: ʔane, kuni-ça:. mata ʔatta-muni: e-i: kʷat-i. ti: ʔagit-i=kara ʔir-e:

INTJ こいつ-PEJ また 急-言う事 する-INF やがる-SEQ 手.ACC 上げる-SEQ=ABL 言う-IMP2

「おい、こいつめ。また急に話やがって！手を挙げてから言え！」

A: kissa=kara ti: ʔagit-o:-ibi:-eiga, ʔundzo: ʔanu ʔumani:=ŋkai muteikʷa:tt-i

さっき=ABL 手.ACC 上げる-PROG-POL-ADVRS 2SG.HON.TOP あの 姉=DAT 夢中になる-SEQ

「さっきから手を挙げてますが、貴方はあの姉さんに夢中で」

waŋ=ga ti: ʔagit-i=n n:dʒ-i=n s-abir-an-munnu

1SG=NOM 手.ACC 上げる-SEQ=ADD 見る-INF=ADD する-POL-NEG-FN

²⁵³ 原文では、miciti mimiso:re:とあるが、筆者が内容に合うように修正した。

「私が手を挙げても見もしませんですもの。」(用例 706 と重複)

B: ha:, to:to:, ni:ce:=jo: . kanteige: su=na=jo:

INTJ INTJ 青年=VOC 勘違い する=PROH=SFP

「は?おおい、若者よ。勘違いするなよな。」

muteik^wa:tt-o:-ru teimo: ?ar-an=do:. to:, ?ja:=n eitsumon=nu ?ar-a:, ?ite-i=ma:=ndi

夢中になる-PROG-ADN つもり.TOP COP-NEG=SFP.ASS INTJ 2SG=ADD 質問=NOM ある-CND 言う-SEQ=みる.IMP=QT

「夢中になっているつもりはないぞ。さあ、お前も質問があれば、言ってみろって。」(実践, 47)

敬語表現が用いられるのは、聞き手が目上であったり、社会的地位が高かったり、それ程親しくない間柄であったりする場合であろう。そのような関係が話し手と聞き手との間にある場合、敬語を用いて聞き手を配慮しながら、動作を禁止したり制止したりする。na も najo: も用いられる。najo: は相手を諭すニュアンスを付け加える。

796) A: ?ure:=jo:

それ.TOP=IP

「それはね...」

B: ?aja:=tai. matteo:tei-miso:r-i=jo:

姐=POL.F 待っておく-HON-IMP1=SFP

「姉さん。待って下さい。」

A: nu:=ga. nu: matteo:k-i=ndi=ga

何=WHQ 何 待っておく-IMP1=QT=WHQ

「何だい。何を待っていつのかい。」

B: ?a-ibir-an. ?unu ?atu=nu kutuba=nu teigakai=nati nu:gajara wanne: teimu=nu wasamite-o:-ibi:n

COP-POL-NEG その 後=GEN 言葉=NOM 気がかり=で 何だか 1SG.TOP 心=NOM ざわつく-PROG-POL

「いえ。その後の言葉が気がかりで何だか私は心が落ち着かないのです。」

?ite-e: k^wi-mice:-bin=na=jo: wanne: teimu dondon s-o:-ibi:=sa

言う-SEQ.TOP BEN-HON-POL=PROH=SFP 1SG.TOP 心 ドキドキ する-PROG-POL=SFP

「言っでは下らないでね。私は心がドキドキしていますよ。」

?aja:=tai. ?ite-e: k^wi-mice:-bin=na

母=POL.F 言う-SEQ.TOP BEN-HON-POL=PROH

「姉さん。言っでは下らないで。」

A: nu:=ga. ?ja:=ja ?anci ?awatit-i, mata nu: nat-o:-ru ba: ja=ga. eiwa: su=nake:

何=WHQ 2SG=TOP そんなに 慌てる-SEQ また 何 なる-PROG-ADN FN COP=WHQ 心配.TOP する=PROH

「何だい。お前はそんな慌てて、またどうなってるの?心配しないで。」(実践, 18) (用例 715 と重複)

797) [夫 A のズボンの股間部分が破れている。夫は「あれ」が切れていると告げたら、妻 B は「あれ」を勘違いして救急車を呼ぼうとする。夫は救急車はいいから家に早く帰ろうと告げる]

A: ?aja:=jo:. na: φe:kuna: ja:=kai ?ik-a=na

母.CH=VOC FIL 早く 家=ALL 行く-HORT=SFP

「母さん。もう早く家に行こう。」

B: ?ane. kittcaki kurubi=n ei-miso:n=na=jo:

INTJ つまづき 転び=ADD する-HON=PROH=SFP

「あら。つまづいたり、転んだりしなさないでね。」

A: na: ?abin=nake:. jutasa=sa. jutasa=sa

もう 言う=PROH 結構=SFP 結構=SFP

「もう何も言うな。結構、結構。」(実践, 30)

形式だけ見れば禁止文である次のような用例も、意味的にはほとんど命令文である。つまり、「忘れずに買って来い」という意味あい禁止表現（「忘れるな」）を使って表されている。

798) [洗濯物を干したのに雨が降りそうになり取り込もうかどうしようか迷う妻に対する夫の台詞]

wa:=ga n:te-o:teu-kutu, ?ja:=ja ko:imun e-i:ga ?ndz-i k-u:=wa
1SG=NOM 見る-SEQ.おく-CSL 2SG=TOP 買い物 する.PUR 行く-SEQ 来る-IMP=SFP
「私が見ておくから、お前は買い物しに行って来い。」
?e:, ja-eiga bi:ru=n waein=na=jo:
INTJ COP-ADVRS ビール=ADD 忘れる=PROH=SFP
「おい、だけどビールも忘れるなよ。」(リア, 19)

4.4.3 *nake:*の文

「しないでおけ」に相当する形にふた通りあって、そのひとつが *nake:*である。*nake:*は形づくりの上では「しないでおけ」だが、意味的には「するな」である。首里方言ではふつうに用いられるが、他の沖縄諸方言ではあまり用いられない。*nake:*も見つかった用例だけをみると、すでに起こっていることを制止する場合に多く用いられる。

799) [民話。願えば何でも出してくれる石臼を言葉巧みに借り出して、急いで船を出して島を出て奪い取ろうと企む。急いで出て来たのでおにぎりに塩を入れるのを忘れてしまう]

?e:, eiwa su=*nake:*. madzi tihadzimi=ni ma:sa ma:su ?ndzas-a=na
INTJ 心配 する=PROH まず 手始め=DAT 美味しい 塩.ACC 出す-HORT=SFP
「なに、心配するな。まず手始めに美味しい塩を出そう(そして、塩が溢れて止まらなくなるという話)。」
(大沖 33, 86) (用例 666 と同文)

800) [浮気性の夫を母が責めたてる]

A: ?appa:, nu:=ga wa:=ga eima-ee: eimi=du su-ru
母 何=WHQ 1SG=NOM 済む-NLZ.TOP 済む=FOC する-ADN
「母さん、どうして？私がいいならいいじゃない。」
B: ?ancei ?ja:=ja teimu=nu nubi=nu ?a-ru=ja:
とても 2SG=TOP 心=GEN 延び=NOM ある-ADN.MIR=SFP
「なんてお前は寛大なの。」
A: ?appa:, mitci=uti phi:dze: ne:ran. ?ance: ?unu teu=nu ci:kuee: ?i-nso:n=*nake:*
母 道=LOC 風情.TOP ない CNJ その 人=GEN 欠点 言う-HON=PROH
「母さん、道でみっともない。そんなにあの人の悪口をおっしゃらないで。」
B: mura=nu tteo: satunuei=ga ?amasa: jan=[i ?i-ee: ?ippe: ju: wakat-i
村=GEN 人.TOP (人名)=NOM 遊び人 COP=QT 言う-NLZ.TOP とても よく わかる-SEQ
eir-an-ee: ?ja:=n teui=du ja-ru
知る-NEG-NLZ.TOP 2SG=ADD 一人=FOC COP-ADN
「村の人は里之子が遊び人だってみんなよくわかってる。知らないのはお前ひとりだよ。」
A: ?ikana ?amasa: jat-i=n, in=nu ?at-a-gutu=ru mi:tunda nat-o:-ru-munnu
どんなに 遊び人 COP-SEQ=ADD 縁=NOM ある-PST-CSL=FOC 夫婦 なる-PROG-ADN-FN
「どんなに遊び人でも、縁があつてこそ夫婦になったんでしょう。」

ʔance: ʔakko: ei-nso:n=nake:

そんなに 悪口.TOP する-HON=PROH

「そんなに悪口はなさらしないで。」(芝居, 568-570)

801) A: ta:ri:=tai. ʔancei ʔe:kuna: ʔattci-mice:-bin=nake:

父=POL.F そんなに 早く 歩く-HON-POL=PROH

「お父さん。そんなに早く歩きなさらしないで。」

B: ʔja:=ja dandzimundzi=nu ʔuʔusan-u. ʔuʔe: ʔawatir-e:

2SG=TOP 文句=NOM 多い-MIR 少し.TOP 慌てる-IMP2

「お前は文句が多い。少しは急げ。」(実践, 29)

次のような場合は〈再発防止〉である。動作が瞬間的で、その動作が一度実行されてしまっていて、再度繰り返される可能性があるような場合、そのような意味あいが生じる。また、授受補助動詞を伴って、同じことを繰り返さなさいよう〈お願い〉する文でもある。

802) A: sari, ʔuming^wanume:

INTJ.M お嬢様

「あのですね、お嬢様。」

B: tari. na: ʔuming^wa=ndi ʔite-e: k^{wi}-miso:n=nake:. nu:=ga ja-ra hadzikasa-ibi:-eiga

INTJ.F FIL お嬢様=QT 言う-SEQ.TOP BEN-HON=PROH 何=FOC COP-DUB 恥ずかしい-POL-ADVRS

「あの、もうお嬢様と言っては下さいますな。何だか恥ずかしいですわ。」

A: nu:=nu hadzikasa-ibi:=ga

何=NOM 恥ずかしい-POL=WHQ

「何が恥ずかしいのですか。」(芝居, 1088) (用例 230 と一部重複)

すでに過ぎてしまった動作を述べるような場合は、もはや動作を制止あるいは禁止することはできないため、そのような動作をしたことを〈非難〉する文となる。

565) A: ʔmmi:=tai. ʔunuttɕu=ga ʔju-ru kuto: ʔcik-an-ɕe: maei ja-ibi:=sa. te:ge:muni:=du

姉=POL.F その 人=NOM 言う-ADN 事.TOP 聞く-NEG-NLZ.TOP まし COP-POL=SFP 適当な物言い=FOC

「姉さん。その人が言う事は聞かない方がいいですよ。適当な事を」

s-o:-ibi:n=do:. kuma=ne: nu:=n ʔui-biʔei: muno: ne:-ibiran-munnu

する-PROG-POL=SFP ここ=DAT.TOP 何=ADD 売るべき 物.TOP ない-POL-FN

「言っていますよ。ここには何も売るべき物はないんですから。」

B: ha:. ʔe:, inagu=jo:.. ʔane: ʔi=nake:. te:ge:muni:=ja ʔar-an=do:

INTJ INTJ 女=IP そう.TOP 言う=PROH 適当な物言い=TOP COP-NEG=SFP.ASS

「はっ?おい、女よ。そうは言うなよな。適当な事じゃあないぞ。」(実践, 40) (用例 472 と重複)

4.4.4 否定形 + ke:の文

否定形 + ke:の形は、調査協力者によると、昔の階級である「平民」の人々が用いる表現だと言う(面接調査, 2017年1月23日。文献では、もっぱら nake:形式が用いられるケースが多い)。他の沖縄諸方言では、この形が多用されることから、首里地域方言では、否定形 + ke:の形が用いられていた可能性がある。

nake:形式とはほぼ同じ意味あいで用いられる。したがって、すでに起きていること、あるいは起きつ

つあることを制止する場面で用いられることが多い。

- 803) na:da=na: na:da=na: e-i ?agima: s-an̄k-e: juku=n nikka nai=sa
まだ=YNQ2 まだ=YNQ2 する-SEQ 急き立てる事 する-NEG-IMP2 一層=FOC 遅く なる=SFP.MIR (語遊「アギマースン・アシガチュン」2009/10/25, p. 15)
「まだかまだかと言って急き立てないでよ。余計に遅くなるよ。」
- 804) A: ?e:=tai. kuma: karimen=nu eiken ?uki:ttukuru ja-ibi:=gaja:
INTJ=POL.F ここ.TOP 仮免=GEN 試験 受け所 COP-POL=DUB(YNQ3)
「あのう。ここは仮免の試験場でしょうか？」
- B: wa:=ga eit̄e-o:m=i. wannin nama=du ?itt̄e-i t̄e-o:-ru-munnu
1SG=NOM 知る-PROG=YNQ 1SG.ADD 今=FOC 入る-SEQ 来る-PROG-ADN-FN
「俺が知るか。俺も今入って来たところだもの。」
- A: ?und̄zo: nu: e-in kuma=ŋkai menso:t̄e-a=ga
2SG.HON.TOP 何.ACC する-PUR ここ=DAT 来る.HON-PST=WHQ
「貴方では何をしにここにいらしたの？」
- B: hat. ?ja:=ja nu:=ga. wa:=ga nu: e-in ku:-wa=n, wa: katti=du ja-e: s-an=i
INTJ 2SG=TOP 何=WHQ 1SG=NOM 何.ACC する-PUR 来る-CND=ADD 1SG.GEN 勝手=FOC COP-INF.TOP する-NEG=YNQ
「は？お前は何か。俺が何をしに来ようが、俺の勝手じゃないか。」
- A: ?e:=tai. ?und̄zo:, ?ansuka kuφamuni:=ja ei-miso:r-an̄k-e:
INTJ=POL.F 2SG.HON.TOP そんなに きつい言い方=TOP する-HON-NEG-IMP2
「あのですね。貴方、そんなにきつい言い方しなさないで。」
- B: nu:=ga nu:nt̄ei
何=NOM なぜ
「どうしてだ？」
- A: ?ancei wanne: inagu=du ja-ibi:-ru-munnu. ?uφe: jaφatte:ŋ^wa: e-i k^wi-miso:r-e:
CNJ 1SG.TOP 女=FOC COP-POL-ADN-FN 少し.TOP 優しい言い方 する-SEQ BEN-HON-IMP2
「だって、私は女ですもの。少し優しい言い方して下さいな。」(実践, 45)

聞き手がネガティブな状況に置かれている場合、そのことについて制止することで〈なぐさめ〉という意味あいが生じる。

- 805) A: we:n, we:n
(泣いている様)
「ウェーン、ウェーン。」
- B: ?uei:, na: nak-an̄k-e: to:, mad̄zun kusa ka-iga ?ik-a
(人名) もう 泣く-NEG-IMP2 INTJ 一緒に 草.ACC 刈る-PUR 行く-HORT
「ウシー、もう泣くな。さあ、一緒に草を刈りに行こう。」(入門, 97-98) (用例 655 と重複)

次の用例では、すでに起こってしまったことなので、転じて〈非難〉を表している。

- 566) A: ka:gi=ndi ?i:-ne: watta:=madi=ja:
容姿=QT 言う-CND 1PL=LIM=SFP
「容姿と言ったら俺の右に出るものはいないよな。」
- B: nu:=ndi: i: war-a:s-an̄=ke: ?ja:=ja jugura-ka:gi:=du jan=do:ja:
何=QT EQ 笑う-CAUS-NEG=PROH 2SG=TOP 汚れ-顔=FOC COP=SFP

「は？笑わせるな。お前なんか汚れ顔だわ！」（語遊「ユグラーカーギー」2010/4/25, p. 13）

4.4.5 動作主体が二人称の *ce: naran* (してはいけない) の文

二人称を動作主体にした〈不許可・非許容〉を表す *ce: naran* の文は、《働きかけ》が生じて、結果として〈忠告・警告的な禁止〉を表す。多くは終助辞 *do:* を伴い、文に《聞き手めあて》を付け加える。

513') [昨日大雨が降って]

kumui nte-a-kutu midzi=nu ?andit-o:t-an. ja-kutu teu:=ja kumui=uto:ti ?acid-e: nar-an=do:

池.ACC 見る-PST-CSL 水=NOM 溢れる-PROG-PST COP-CSL 今日=TOP 池=LOC 遊ぶ-SEQ.TOPなる-NEG=SFP.ASS

「池を見たところ水が溢れていた。だから今日は池で遊んではいけないよ。」（入門, 76-77）

第4章 「実行のモダリティ」まとめ

動作主体に必ず聞き手を含み、動作の実行を働きかけたり、仕向けたりする文を「実行のモダリティ」として分類し、記述してきた。勧誘文は、動作主体に聞き手だけでなく、話し手も含む点で、命令文・依頼文・禁止文と区別される。したがって、勧誘文は、話し手と聞き手が動作のにない手となり、共同で、あるいは同時に動作を実行する文である。そのような意味あいには、勧誘形だけが表しているわけではなく、ときには、断定形なり命令形なりを述語にもつ文において、つまり、述語の形式に関わらず動作のにない手が一・二人称の場合、〈勧誘〉を表すことができる。このことは、命令文や依頼文、さらに禁止文でも同じである。つまり、述語の形式に関わらず、動作主体が二人称で、聞き手に動作の実行を〈命令〉する文は命令文となり、聞き手に〈依頼〉する文は依頼文となり、聞き手に〈禁止〉する文は禁止文となる。逆に、命令形を述語にもつ文であっても、動作主体が聞き手のみでない場合は、〈命令〉を表さず、異なるモダリティを表すようになる。また、〈実行〉の文は、未実現の事象を述べる文でしかその役割を果たせないため、すでに起こってしまったことに対して述べる場合は、〈非難〉という評価的な意味あいへ移行することがある。人称性や事象の実現・未実現といった文法的要素を抽出しながら分析することが重要である。

第5章 質問のモダリティ

〈質問〉のモダリティは、聞き手から情報を引き出す〈真偽質問・補充質問・選択質問〉等の〈尋ね〉の文のモダリティである。そのような文を質問文と呼ぶ。従来の琉球諸語研究では、「肯否質問・疑問詞疑問」という用語が用いられていたが、本論では、「疑問」が〈疑い〉と混同することから〈質問〉という用語を使用し、また文の意味に重点をおくため〈真偽質問・補充質問〉という用語を採用する。事象の是非について聞き手に尋ねる文を〈真偽質問〉に、疑問詞を伴い、事象の具体的な不明点について聞き手に尋ねる文を〈補充質問〉とする。また、従来の研究で「確認要求」と分析されてきた〈真偽質問〉のヴァリエーションとして、間接確認の判断を含む〈念押し的な真偽質問〉がある。その他、間接質問文や問い返し質問文等、質問文の様々なヴァリエーションについても分析・記述する²⁵⁴。

²⁵⁴ 「疑いのモダリティ」は叙述文に含める。「確認要求のモダリティ」は「確認要求」という用語のあいまいさや、「確認要求」とされてきた文には、質問文や叙述文が混在している問題があることから、本論では使用しない。

5.1 真偽質問文

5.1.0 i と na: の文の概観

典型的な真偽質問文には、述語に i を含む文と na: を含む文の二つがある。モダリティの観点からは、これらの文から i や na: を取り除くことはできない。もし i や na: を取り除けば、〈質問〉というモダリティをも失ってしまう。次に i と na: の文の形態論的な特徴を述べながら、下の(a)~(d)の4点について明らかにしたことを述べる。

- 806) (a) i と na: の文は真偽質問文であらわれ、〈質問〉というモダリティを表現する。
(b) i は述語の叙述形と結合して活用語尾を形成し、na: は述語に直接付く接辞(くつつき)である。
(c) i の文は、単に述語の動作の成立・不成立を問う質問文であり、不確定性の要素が強い文である。na: の文は、文脈や発話状況から導き出された話し手の疑いと深く関わった質問文であり、その疑いが正しいかどうかを聞き手に問いかけて明らかにするような文である。
(d) 同一形式におけるイントネーションの違いはモダリティに関与しない可能性が高い。

5.1.0.1 音声的特徴とイントネーション

i や na: の文において〈質問〉というモーダルな意味を実現するためには、これらの文から i や na: を取り去ることはできず、i や na: は義務的である。日本語では「か」を伴った形でも、「か」を伴わないまま上昇イントネーションをとることで〈質問〉を表すことができるが、首里方言では i や na: を伴わないまま上昇イントネーションによって〈質問〉を表現する方法をとることは非常にまれである(ただし、〈質問〉以外のモダリティを表すことは可能である。例えば、〈問い返し〉等)。

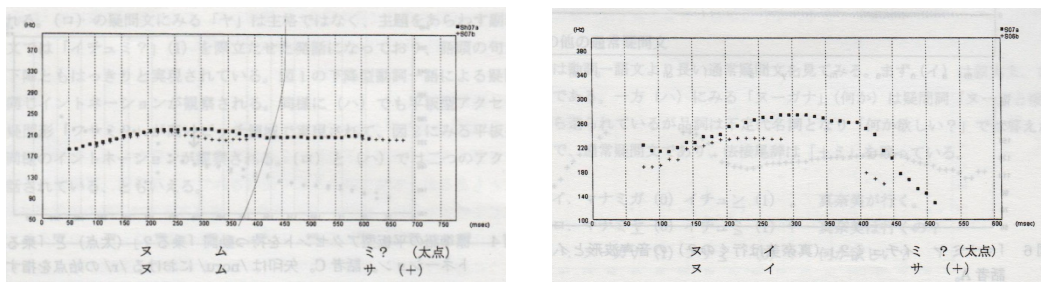
?? ?ja: =n madzun ?itcun↗
2SG=ADD 一緒に 行く
「お前も一緒に行く？」

?? ?ja: duci=ndi ?i-ee: inagudueidu jan↗
2SG.GEN 友達=QT 言う-NLZ.TOP 女友達 COP
「お前の友達と言うのは女友達なの？」

工藤(2014)でも述べられている通り、首里方言では「〈叙述法〉に対する〈質問法〉が形態論化され、構文的な表現手段である上昇イントネーションが義務的ではなくなる」(p. 76)。ただし、これは i の文についてのみ言える。i の文のイントネーションについて、永野マドセン(2011)は、平板型と下降型アクセントのふたつのタイプをもつ首里方言の動詞があらわれる肯定・非過去の i の文のイントネーションについて音響学的に分析している。

平板型アクセントを持つ動詞 numun(飲む)は、i の文では numumi となり、はじめから終わりまで「高く平らに」発音されるが、下降型アクセントを持つ動詞 nuin(乗る)や ?itcun(行く)は、nuimi や ?itcumi となり、高いピッチで始まって最後に下降することから、首里方言では、動詞のアクセント型によって i の文の述語のイントネーションも決定されることを明らかにしている。

図2 平板型アクセントをもつ numumi 「飲む?」と下降型アクセントをもつ nuimi 「乗る?」
(太線) のイントネーション (p. 4-5)



一方, na:の文のイントネーションは, 筆者の分析によると, 一度低い音から始まり一瞬下降した後すぐに, 緩やかに上昇する (音声「アンナ」)。低音から下降の部分は時間的に非常に短く, 上昇する時間の方が長く感じられる。ただし, 後ろに丁寧度を高める接辞 tai/sai がつくと, tai/sai の影響を受けてそれほど上昇せず, tai/sai で再び下降する (音声「チリ」)²⁵⁵。

807) ?anna ?we:kint̃eu=nu ?uppi=du kiϕu ei-mice:t-an=na:↘↗

あんな 金持ち=NOM これ位=FOC 寄付 する-HON-PST=YNQ2

「あんな金持ちがこれだけしか寄付なさらなかったの。」 (音声「アンナ」)

808) da:, t̃eu:=ja ?und̃zu du:t̃ui=na:↘↗=tai. t̃aire: ta:=n so:t-e: menso:r-ant-an=na:↘↗=tai

INTJ 今日=TOP 貴方 一人=YNQ=POL.F 連れ.TOP 誰=ADD 連れる-SEQ.TOP 来る.HON-NEG-PST=YNQ=POL.F

「どれ, 今日は貴方お一人ですか。連れは誰も連れてはいらっしゃらなかったの。」 (音声「チリ」)

まとめると, iの文のイントネーションは述語のアクセント型に準じ, na:は述語に関わらず, 下降・上昇イントネーションを伴ってあらわれるという違いはあるが, 同一形式内におけるイントネーションの違いによってモダリティが変化することはなさそうである。ただし, あらゆるタイプのiとna:の文のイントネーションを分析したわけではなく断定することはできないため, 詳細は今後の課題である²⁵⁶。

5.1.0.2 iとna:の形態的特徴と分析対象

iは動詞述語文, 形容詞述語文, 名詞述語文の全てにあらわれる。下に述語が断定形・肯定・非過去の文を例に挙げる。コピュラなしの名詞述語文にあらわれる場合は, 語尾が miではなくiであらわれる。

809) (a) ?ja:=n mad̃zun ?iteum=i 「お前=も 一緒に 行く=か。」

【動詞述語文】

(b) muno: ma:sam=i 「ご飯は おいしい=か。」

【形容詞述語文】

(c) ?ja:=n t̃eu=i 「お前=も 人=か。」

【コピュラなし名詞述語文】

²⁵⁵ taiは女性が使用し, saiは男性が使用する。

²⁵⁶ 儀間 (1987) によると, na:のイントネーションによって, na:に先行する名詞の《語彙的な意味》が変化する場合がある (p. 71)。したがって, モダリティに関しても, 今後, 詳細な分析が必要である。

コピュラなし名詞述語文のうち、名詞の語末が n 終りの場合、普通名詞であれば、u を挿入し i をつけ、?an や kan のような指示語であれば、i を挿入しさらに疑問の i をつける²⁵⁷。

- 810) (a) kunu ?ino: ?itta: ?inu=i 「この犬はお前達の犬か。」(儀間, 2000, 21)
 (b) kani=i 「こうか。」(音声「キ」)
 (c) ?ani=i 「そうか。」(音声「キ」)

また、断定形にあらわれる場合と、否定形および過去形に後接する場合とで違いがある。下記のように、肯定形では mi であったのが、否定形で ni, 第一過去形および第二過去形で ti: であらわれる²⁵⁸。

- 811) (a) ?ja:=ja ?uri mi:ran=i 「お前=は これ 見えない=か。」 【否定形】
 (b) ?ja:=n ke:t-i: 「お前=も 帰ったか。」 【第一過去形】
 (c) ?i:çi: su-ti: 「タメロ したか/していたか。」 【第二過去形】

第一過去形の場合は、中止形に i が後接した形であらわれるので、中止形の形によってさらにヴァリエーションがある(例えば、-mun, -bun 終わりの動詞は中止形に音便の形があつて -di となるので、質問形は di: であらわれ、-in 終わりの動詞は中止形が -ti となり、質問形は ti: となる)。

一方、na: も動詞述語文、形容詞述語文、名詞述語文の全てにあらわれるが、i とは違って述語の断定形、またはコピュラなしの名詞述語文では述語の名詞にそのまま後接する。下にその違いを図で示す。尚、t̄eu (人) と kamun (食べる) を例にとる。kamun の第一過去形は kadan, 第二過去形は kamutan, 否定形は kaman である。

表 38 i と na: 真偽質問文の述語の形

	コピュラなし の名詞述語文	述語 (動詞) の断定形			
		肯定形	第一過去形	第二過去形	否定形
i 真偽質問	t̄eu=i 人=YNQ	kamun=i 食べる=YNQ	kad-i: 食べる-PST.YNQ	kamu-ti: 食べる-PST2.YNQ	kam-an=i 食べる-NEG=YNQ
na: 真偽質問	t̄eu=na: 人=YNQ2	kamun=na: 食べる=YNQ2	kad-an=na: 食べる-PST=YNQ2	kamu-tan=na: 食べる-PST2=YNQ2	kam-an=na: 食べる-NEG=YNQ2

このように、i 肯否質問文では、述語の形によって i が様々に変化してあらわれるのに対して、na: は上述したように、断定形にそのままくっついた形をとっている。

また、次の表に見るように、i の文には、述語を ru でむすぶかたちも存在する。このような文は、文中に焦点化を表す du(ru) があらわれて、焦点化が行われるのが特徴的である。焦点化は主語・対象語・状況語・述語など多岐にわたって行われる。

²⁵⁷ ただし、i の文によるコピュラなしの名詞述語文は、実際にはあまり用いられない(儀間, 2000, pp. 20-21)。多くの場合、t̄eu=du ja-rui (人なのか)、?in=du ja-rui (犬なのか)、taru=du ja-rui (太郎なのか) 等、コピュラを伴って言い表す。

²⁵⁸ 首里方言の過去形には、第一過去形と第二過去形の 2 種類があつて、第一過去形は〈単純過去〉を表し、第二過去形は、話し手が直接知覚した第三者の過去の動作や出来事を表す。話し手が自分の動作や出来事を記憶していない等、特別な場面を除いて、主語が一人称をとれない(工藤, 2014; & 工藤他, 2007)。

表 39 i と na:真偽質問文の ru むすびの形

	名詞述語文	述語（動詞）の叙述形			
		非過去	第一過去	第二過去	否定形
ru むすび	tteu=du ja-ru=i 人=FOC COP-ADN=YNQ	kamu-ru=i 食べる- ADN=YNQ	(kad-a-ru=i)	(kamu-ta-ru=i)	kam-an=du ?a-ru=i 食べる-NEG=FOC ある-ADN=YNQ

kadarui, kamutarui のような過去形の ru むすびの i の文を見つけることができなかった。形式として存在するのかもしれないが、使用頻度が少ないのであれば、-ruい の文のモダリティと関わっている可能性があるだろう (-ruい の文と過去の事象が共起しにくいなど)。-ruい は〈はなしあい〉の場面では、-ri: と発音されることが多い(この変化は、音環境的な違い=アロフォンであって、モダリティの分別とは関わりがない)。

na: を含む文でも、文中で du(ru) による焦点化がしばしば行われる。ただし、na: の文の場合は、たとえ文中で du(ru) による焦点化が行われていたとしても、ru むすびにはならず、表 38 で示した形をとる(つまり、形式上の変化はなし)。

また、i や na: を含む文には、次のように ba:/basu (時, わけ) や mun (もの) 等の形式名詞に i や na: が後接するものや、引用を表す接辞 ndi, そして -du ?an が語源だと考えられる de:n (である) に na: が後接するものもある。basuna: は理論上は存在するが使用例が見つけられなかった。このような i や na: の文は、〈質問〉以外のモダリティを表すことが多い。

表 40 周辺の質問形式一覧

形式	用例	対応訳
ba:=i	φurimun nat-a-ru ba:=i 馬鹿 なる-PST-ADN FN=YNQ	バカになったのか?
basu=i	tca:=n teidz-e:t-e:-ru basu=i 茶=ADD 注ぐ-RES-PST3-ADN FN=YNQ	お茶も注いであったのか?
ba:=na:	mani ?uki-a-ru ba:=na: 真に 受ける-PST-ADN FN=YNQ2	真に受けたのかい?
munu=i	?anci naju-ru munu=i そうして POT-ADN FN=YNQ	そんなしてできるものか。
mun=na:	tca:=n nar-an mun=na: どう=ADD POL-NEG.ADN FN=YNQ2	どうにもならないなあ。
ndi=i	nu:=ndi: i: 何=QT EQ	何だって?
ndi=na:	sui=kara gudzo:=ndi=na: 首里=ABL 御状=QT=YNQ2	首里から御状だって?
de:n=na:	cidzika=de:n=na: 静か=COP2=YNQ2	静かだなあ。

以上が i と na: を含む文の形態論的特徴であるが、今回の分析では、形態論上の平等化を図るため、対象を i と na: の文の肯定・非過去の文にしぼる(ただし、用例が不足している場合に限り、過去形の用例も使用する)。次にこれらの文が実際に〈質問〉を表すのかについて検証してみたい。

5.1.0.3 i と na: の文は〈質問〉を表すのか？

宮崎他 (2002) によれば、最も典型的な質問文は以下の《a.不確定性条件》と《b.問いかけ性条件》の二つを満たすものである。

表 41 典型的な質問文の2つの条件 (p. 175)

- (a) 話し手には何らかの情報が欠けているために、判断が成立していない。
- (b) 話し手は聞き手に問いかけることによって、その情報を埋めようとする。

i や na: の文は、次の用例でみるように、上記の《不確定性条件》および《問いかけ性条件》という観点から、〈質問〉というモーダルな意味を実現していることがわかる。両者とも肯否質問文 (yes-no question) であらわれる。

i の文の用例

812) [伯父と青年の会話]

A: ʔundzo: ma:=kai mence:-bi:=ga

2SG.HON どこ=ALL 行く.HON-POL=WHQ

「貴方はどこへいらっしゃるんですか。」

B: ʔeu:=ja na:ʔa=nu matei=ŋkai suba kam-i:ga ʔiteu=sa. ʔja:=n madzun ʔiteum=i

今日.TOP 那覇=GEN 市場=DAT そば.ACC 食べる-PUR 行く.SFP 2SG=ADD 一緒に 行く=YNQ

「今日は那覇の市場にそばを食べに行くよ。お前も一緒に行くか。」

A: ʔu: 「はい。」 (入門, 106) (用例 630 と重複)

813) [祖母と孫の会話]

A: ʔancei duei=n mando:m=i

CNJ 友達=ACC たくさんいる=YNQ

「それで友達もたくさんいるか。」

B: ʔu: 「はい。」 (実践, 25) (用例 321 と一部重複)

na: の文の用例

814) [物を指で差しながら]

A: kuri=ru ja-ibi:n=na:

これ=FOC COP-POL=YNQ2

「これですか？」

B: ʔure: ʔar-an

それ.TOP COP-NEG

「それではない。」 (調査, 2015/6/25)

815) [祖母と孫の会話。友達が多いと言った孫だが...]

A: ʔja: duei=ndi ʔi-ee: inaguduei=du jan=na:

2SG.GEN 友達=QT 言う-NLZ.TOP 女友達=FOC COP=YNQ2

「お前の友達と言うのは女友達なのか。」

B: ʔan s-abi:-kutu

そう する-POL-CSL

「そうなんです、だから...」 (実践, 26)

上記の用例において、話し手は出来事への判断ができていないため、i や na: の文を用いて聞き手に問いかけ、情報を引きだしている。例えば、用例 812) では、話し手は聞き手が自分と一緒にそば屋に行くかどうか、情報を引き出すまで知ることができない。問いかけることによって、聞き手から情報を引き出している。用例 813) も同様である。

用例 814) の na: の文でも、話し手は自分が指差している物について聞き手が話題にしているのかどうか尋ねているが、それが正しいかどうかについては聞き手から情報を引き出すまで知ることができない。聞き手に問いかけて、聞き手から情報を引き出す文となっている。815) も同様である。

まとめると、i や na: の文は、《不確定性》と《問いかけ性》という観点から〈質問〉というモーダルな意味を表している。そして、〈質問〉を表すには、i や na: は義務的である。

5.1.0.4 i や na: は終助辞なのか？

内間 (1994) や西岡 (2002) 等の先行研究において、i も na: も疑問を表す終助辞として論じられてきた。i や na: は終助辞なのかどうか以下で論じる。

初めに i の文についてだが、現代首里方言において、形態素 i は、終助辞のように先行する名詞や述語等にそのまま後接したり、述語の断定形の末尾の n や中止形と結合して mi や ni や ti: 等へと変化し、結合した述語の形全体が一つの文法的なまとまりを成している。歴史的に見れば、述語に後接する接辞であったと考えられるが、現在は形態論的な特徴でもって〈質問〉を表現しているならば、mi や ni や ti: 等を活用語尾とみなし、i を含む述語全体を活用形の一つであるとみなすことができる。そうであるならば、断定形に対して「質問形」等と呼びならわすことも可能であろう。

その一方、na: は日本語の「か」のように断定形にそのままくっつく。しかし、〈質問〉というモーダルな意味を実現するためには、na: を取り去ることはできない点で日本語とは異なる。そして、na: がついた文全体が〈質問〉というモダリティを表現していることから、na: は文につくことで、その文法的な意味もはたされると考える。したがって、na: は接辞(くっつき)であるとみなしておく。

したがって、これまで i や na: は終助辞として論じられてきたが、モダリティの観点からは、聞き手へのさまざまな伝達的な配慮を表す終助辞 do: や ja: 等とは大きく異なる。さらに、形づくりの観点から、i は活用語尾であり、na: は接辞(くっつき)であると結論づけられる。

概観のまとめ

ここまで、i と na: の文の音声(音韻)的特徴、形態的特徴、質問文としての機能、そして形づくりについて概略的に述べてきた。i と na: は両方とも真偽質問文として機能するが、用いられる場面状況や細かい意味あいには異なる。次に、このような i と na: の文のモダリティの違いにも着目しながら、それぞれの文のモダリティについて分析・記述を行う。

5.1.1 i/mi の文

5.1.1.1 〈質問〉を表す i/mi の文

主語が二人称(聞き手のことについて尋ねる)

主語が一人称の場合は、特殊なため主語が二人称の場合から述べることにする。

主語を二人称にした i の文は、聞き手のことを聞き手に尋ねて情報を引き出す文である。したがって、《尋ねる対象》は《聞き手》が目の前にいれば《聞き手》以外はあり得ないのが普通である。

《尋ねる内容》は、最も典型的なものとして《聞き手の内的な一時的感情や状態》が挙げられる。

例えば、聞き手の体調、考えや意見、意志、認識、知識等である。このような、《聞き手内部の一時的感情や状態》は、発話時以前に話し手が知り得ない情報であり《不確か》である。また、そのような情報を聞き手に問いかけて引き出すため、《問いかけ性》がある。《状態》を表す名詞述語か形容詞述語文が用いられることが多い。

816) A: $\widehat{d}ziru$:=ja ?ar-an=i

(人名)=TOP COP-NEG=YNQ

「次郎じゃないか？」

B: $mi:du:san-u$. \widehat{genki} $\widehat{jam=i}$

久しぶり-MIR 元気 COP=YNQ

「久しぶりだな。元気か？」

A: $\widehat{genki=do}$:

元気=SFP.ASS

「元気だよ。」(儀間, 2000, 19)

817) A: $\widehat{hai=sai}$

INTJ=POL.M

「こんにちは。」

B: $\widehat{hai=sai}$ (中略)

INTJ=POL.M

「こんにちは。」

A: ?ugandzu : $\widehat{jamice:m=i}$

御頑丈 COP-HON=YNQ

「お元気でいらっしゃるの。」

B: ?ukadzini \widehat{nama} \widehat{eigutu} ?atte-abi:n

おかげで 今 仕事 歩く-POL

「おかげで今仕事しています²⁵⁹。」(楽沖, 45)

818) [息子マサンルーがまた別の女と浮気していると聞いた母が妻に言う]

A: \widehat{biru} :. $\widehat{satunuei}$ \widehat{kundo} : $\widehat{nabema:=tu}$ \widehat{gu} : $\widehat{nat-o:n=}$ [i ?i:n=do :. ?ja:=ja ?ancei \widehat{gattin} $\widehat{jam=i}$

(人名) (人名) 今度.TOP (人名)=COM 一緒 なる-PROG=QT 言う=SFP.ASS 2SG=TOP それで 納得 COP=YNQ

「ビルー、里之子今度はナベマーと一緒になると言うよ。お前はそれで納得か。」

B: ?ancee :. \widehat{wa} : $\widehat{mi:=ce}$: $\widehat{n:te-e}$: $\widehat{ur-an}$?uwasa=ru $\widehat{ja-ru-munnu}$

CNJ 1SG.GEN 目=INST.TOP 見る-SEQ.TOP いる-NEG.ADN 噂=FOC COP-ADN-FN

「だって、私の目では見てはいない噂ですもの。」(芝居, 568)

819) $\widehat{teu:=nu}$ $\widehat{eima=ja}$ \widehat{watta} : $\widehat{su:=g^wa:=ga}$ $\widehat{ma:matteng^wa}$: $\widehat{kate-abit-an=do}$:. $\widehat{kate-abit-an=do}$:

今日=GEN 相撲=TOP 1PL.GEN 父=DIM=NOM 丸々と 勝つ-POL-PST=SPF.ASS 勝つ-POL-PST=SPF.ASS

「今日の相撲はうちの父ちゃんがみごとに勝ちましたよ。勝ちましたよ。」

?ancei=n ?ussa-ru . (中略) ?ja:=n ?ussam=i

それ程=ADD 嬉しい-ADN 2SG=ADD 嬉しい=YNQ

「なんて嬉しい。お前も嬉しいかい？」(芝居, 1000-1002)

820) $\widehat{nu:gana}$ $\widehat{\phi usam=i}$

何か 欲しい=YNQ

「何か欲しい？」(永野マドセン, 2011, 6)

²⁵⁹ 直訳すると「仕事歩きます／歩いています」である。文脈にあうように意識した。動詞 ?atteun (歩く) には、／歩行する／という語彙的な意味のほか、／仕事をして生計をたてる／という意味がある。

次の形容詞述語文は三人称を主語に持つが、主語に差し示されているものに対する聞き手の《評価》について尋ねている。そのような聞き手の《評価》は事前に話し手が知り得ない聞き手内部の情報である。不確かな情報を問いかけて引きだしているので、《問いかけ性》がある。

821) A: ʔai, nabitu:. nage:=saja:. ʔja:=ja ma:=kai=ga

INTJ (人名) 久しぶり=SFP 2SG=TOP どこ=ALL=WHQ

「おお、ナビトゥー。久しぶりだねえ。お前はどこに行くのかい？」

B: wanne: to:ɸu ko:-iga kadu-g^{wa}a:=nu ma^{te}ija=kai

1SG.TOP 豆腐.ACC 買う-PUR 角-DIM=GEN お店=DAT

「私は豆を買いに角っこのお店に。」

A: ʔama=nu to:ho: ma:sam=i

あそこ=GEN 豆腐.TOP おいしい=YNQ

「あそこの豆腐はおいしいか。」

B: tea:=ga ja-ra. wannin had^{zi}imiti=du jan=de:

どう=FOC COP-DUB 1SG.ADD 初めて=FOC COP=SFP.NASS

「どうかな。私もはじめてだからね。」(実践, 33) (用例 221, 308, 791 と一部重複)

822) [夜眠れないという B に対して]

A: ma:gana karata=nu waruko: ne:-miso:r-an=i

どこか 体=NOM 悪い.TOP ない-HON-NEG=YNQ

「どこか体が悪いのではないですか。」

B: ʔisagai=n e-e: ur-an=do:

医者通い=ADD する-SEQ.TOP いる-NEG=SFP.ASS

「通院はしてはいないよ。」

A: muno: ma:sa-mice:m=i

食事.TOP おいしい-HON=YNQ

「ご飯はおいしいですか。」

B: muno: ma:san

食事.TOP おいしい

「ご飯はおいしい。」(実践, 13)

動詞述語文でも、次の用例のように、wakain (わかる) や eit^{te}o:n (知っている) のような知識や認識の有無を表す動詞の場合は、動作というより内的な状態を表している。聞き手の内的な状態は話し手にとって《不確か》な情報である。尋ねることで情報を得ているため、《問いかけ性》もある。

823) A: ʔja:=ja kunu ʔuta wakajum=i

2SG=TOP この 歌 わかる=YNQ

「お前はこの歌わかるか？」

B: teaŋguto:ru ʔuta ja-ibi:=ga

どのような 歌 COP-POL=WHQ

「どのような歌ですか？」

(A が歌を歌って聴かせる)

A: kunu ʔuta wakajum=i

この 歌 わかる=YNQ

「この歌わかるか？」

B: wakaj-abir-an

わかる-POL-NEG

「わかりません。」

A: wakar-an=ja:

わかる-NEG=SFP

「わからんよな…」(と言って A はがっかりする) (芝居, 542) (用例 226, 283 と一部重複)

824) A: ʔundzo: mata wakat-o:n ɸu:na: s-o:-eiga ɸunto: waka-mise:m=i
2SG.TOP また わかる-PROG ふり する-PROG-ADVRS 本当 わかる-HON=YNQ

「貴方はまたしたかぶりしているが本当におわかりなの？」

B: (前略) ʔuri=ga wakar-an=tei=n ʔam=i

これ=NOM わかる-NEG=QT=ADD ある=YNQ

「これがわからないってあるか。」

A: to:, ʔanee: ʔi:binutei ee-i mieit-i k^wi-miso:r-e:²⁶⁰

INTJ CNJ 指差し する-SEQ 見せる-SEQ BEN-HON-IMP2

「さあ, じゃあ指差して見せて下さい。」(実践, 40)

825) A: teu: ugan-abir-a, ʔmme:=sai. guburi: ja-ibi:-eiga kurika:=ŋkai mi:kuni
今日 拝む-POL-INT 婆さん=POL ご無礼 COP-POL-ADVRS この辺=DAT 新しく

「こんにちは, おばあさん。失礼ですがこの辺に新しく」

teukur-att-a-ru subaja: eitte-o:-mice:m=i

作る-PASS-PST-ADN そば屋.ACC 知る-PROG-HON=YNQ

「できたそば屋を知っていらっしゃるか。」

B: ʔanu kadu nidziri=ŋkai magat-i matto:ba ʔndza-ru tukuru=ŋkai ʔan=do:

あの 角.ACC 右=DAT 曲がる-SEQ 真っ直ぐ 行く.PST-ADN 所=DAT ある=SFP.ASS

「あの角を右に曲がって真っ直ぐ行ったところにあるよ。」(入門, 114-115) (用例 49 と同文)

次の用例も動詞述語文だが, 《対象的な内容》は具体的な動作ではなく, 仮定条件を伴って, 仮にその条件が成立するなら, 主文の条件は成立するかどうかというポテンシャルな聞き手の意見を尋ねている。

826) [もらったダイヤの指輪をバッグの中に大事にしまって持ち歩く B に対して A が言う]

A: teurasugae: s-o:t-i=n ʔan=du ʔa-ru=i²⁶¹

おしゃれ.TOP する-PROG-SEQ=ADD そう=FOC ある-ADN=YNQ

「おしゃれをしてもそうなのか。」

B: ʔja: jar-e: nute-i ʔatteij-u:sum=i²⁶²

2SG COP-CND はめる-SEQ 歩く-POT=YNQ

「お前ならはめて歩けるか。」

A: wanne: sugaimarugae: eik-an

1SG.TOP おしゃれ.TOP 好く-NEG

「俺はおしゃれするのは好きじゃない。」(実践, 34)

²⁶⁰ 原文は, mimiso:re:だが, 文脈に合うように筆者が修正した。

²⁶¹ 原文ママ。ʔan=du ja-ru=i の誤用か。

²⁶² 原文は, ʔatteijumi とあるが, 文脈に合うように筆者が修正した。

事象が未来の場合は、聞き手の未来のポテンシャルな動作について、聞き手の動作の実行の意志を尋ねる。意志は聞き手内部にすでに存在している意見なり判断なり考えである。そのような意見なり判断なりは事前に話し手が知り得ない、聞き手のみが持っている情報である。i の文はそのような情報を引きだしている。

812') [伯父と青年の会話]

A: ʔundzo: ma:=kai menɛ:-bi:=ga

2SG.HON どこ=ALL 行く.HON-POL=WHQ

「貴方はどこへいらっしゃるんですか。」

B: tɛu:=ja na:ɸa=nu matɛi=ŋkai suba kam-i:ga ʔitɛu=sa. ʔja:=n madzun ʔitɛum=i

今日.TOP 那覇=GEN 市場=DAT そば.ACC 食べる-PUR 行く.SFP 2SG=ADD 一緒に 行く=YNQ

「今日は那覇の市場にそばを食べに行くよ。お前も一緒に行くか。」

A: ʔu: 「はい。」 (入門, 106) (用例 630 と重複)

827) [子供を首里に連れて行くなと懇願するビルーだが説得に応じて]

A: ʔumɪŋ^wa=nu riɛɛin de:-mun. jar-aŋ-i su=sa, ha:me:

我が子=GEN 立身 COP2-FN 遣る-CAUS-SEQ する=SFP 祖母

「この子の立身ですもの。行かせましょう、おばあちゃん。」

B: ʔja:=ja ɸunto: ʔumitɛij=u:sum=i

2SG=TOP 本当 思い切る-POT=YNQ

「お前は本当に思い切れるのか。」

A: ʔumitɛir-an=de: tɛa: su=ga

思い切る-NEG=CND どう する=WHQ

「思い切らないでどうするの。」 (芝居, 590)

828) [継母に勘当されたトラジューに対して先生が]

A: turadzu:, ʔja:=ga kunu tɛine:=ŋkae: ur-ar-an-mun=na:

(人名) 2SG=NOM この 家=DAT.TOP いる-POT-NEG-FN=YNQ2

「トラジュー、お前はこの家にはいられないものな。」

B: einci:=sai

先生=POL.M

「先生…」

A: turadzu:, ɛiwa: su=na. tɛu:=kara wa:=ga ʔja:=ja ɸitɛitut-i gakumun ɛ-imi:-eiga

(人名) 心配 する=PROH 今日=ABL 1SG=NOM 2SG=TOP 引き取る-SEQ 学問 する-CAUS-ADVR

watta:=kai ʔitɛum=i

1PL=ALL 行く=YNQ

「トラジュー、心配するな。今日から私がお前は引き取って学問させるが私達の所に行くか。」

B: einci:sai 「先生…」 (芝居, 602-604)

ただし、次のような場合はもはや質問文とは言えないだろう。すでに起きていること、知っていることをあえて質問文という形で問い直すことで、話し手にそのことを自覚させ、そのことを〈非難〉するという意味あいを表す(詳細は非難の文を参照)。

555') [妊娠している娘 B とその母親 A の会話。サトゥヌシは B の夫]

A: ʔja:=ja du:=nu kawat-o:=ɛɛ:. satunuci=ŋkai ʔunnuki-ti:

2SG=TOP 体=NOM 変わる-PROG=SFP 里之子=DAT 言う.HUM-PST.YNQ

「おまえは妊娠しているだろう (lit. 体が変わっているだろう)。サトゥヌシに申し上げたかい？」

B: ma:da=do: ?appa:

まだ=SFP.ASS お母さん

「まだよ、お母さん。」

A: ?uritiramun kakusum=i

そのような事.ACC 隠す=YNQ

「そのような (大事な) 事を隠すのか。」

B: mucī sui=kai ke:tik-u:=n|j ?i:-ru guḏzo: ja-ine:, ?mmari:-ru kk^wa: t̄ca:naju=gaja:

もし 首里=ALL 帰って来る-IMP=QT 言う-ADN 御状 COP-CND 生まれる-ADN 子.TOP どうなる=DUB

「もし首里に帰って来いと言う御状なら、生まれる子はどうなるやら。」

A: ?an su-gutu

そう する-CSL

「そうなのよ…」 (芝居, 576) (用例 47 と一部重複)

聞き手が引きだしたい情報は、《聞き手の内的な一時的感情や状態》あるいは《評価》だけに限らない。次の主語が二人称の i の文は、話し手にとって《不確か》な聞き手の反復・習慣的な動作や現在進行中の具体的な動作ついて尋ねている。このような文の《対象的な内容》も聞き手から情報を引きだすまで話し手にとって《不確か》な情報であり、《問いかけ性》がある。

829) [A が運動不足のようなので、B が A にゲートボールを勧める]

A: wanne: ŋkaei=kara bukusan-u=jo: nu: ti:t̄ei=n naraj-u:s-an=du ?an=de:

1SG.TOP 昔=ABL 不器用だ-MIR=SFP 何 ひとつ=ADD 習う-POT-NEG=FOC ある=SFP

「私は昔から不器用でね。何一つも身につかないんだよ。」

B: t̄ca:=n ne:-ibiran=sa. te:ge:-g^wa:=du ja-ibi:-ru. narat-i n:d̄z-imiso:r-e:

どう=ADD ない-POL=SFP 適当-DIM=FOC COP-POL-ADN 習う-SEQ みる-HON-IMP2

「どうってことないですよ。適当ですから。習ってみてください (lit. 習いなされ)。」

A: ?an su=gaja: ?ja:=n sum=i

そう する=DUB 2SG=ADD する=YNQ

「そうするかな。お前も (ゲートボールを) やるのか。」

B: ei:-busa-ibi:-eiga wanne: (後略)

する-DES-POL-ADVRS 1SG.TOP

「したいですが私は…」 (実践, 14) (用例 361, 736 と重複)

830) A: wanne: mimi=n mi:=n jutasa-ibi:-eiga eindzo:=nu=ga wassa-ra t̄eimu dondon s-abi:n

1SG.TOP 耳=ADD 目=ADD よろしい-POL-ADVRS 心臓=NOM=FOC 悪い-DUB 肝 ドンドン する-POL

「私は耳も目もいいですが、心臓が悪いのか胸がドキドキします。」

B: ?isagakai s-o:m=i

通院 する-PROG=YNQ

「通院しているのか。」

A: u:u: 「いいえ。」 (実践, 46)

831) [話し手 B: 妻 → 聞き手 A: 夫。夫のズボンの股間部分が破れている]

A: ?ariari, watta: ?aja:=jo:, wad̄zin=na=jo:

INTJ 1PL.GEN 母=IP 怒る=PROH=SFP

「あらあら、俺の母さんたら、怒るなよ。」

B: wad̄zi:=n s-abir-an, warai=n s-abir-an=sa. ɸe:ku na: ʔite-i teik-aei-miso:r-e:
 怒る.INF=ADD する-POL-NEG 笑う.INF=ADD する-POL-NEG=SFP 早く もう 言う-SEQ 聞く-CAUS-HON-IMP2
 「怒りもしないし、笑いもしませんよ。早くもう言って聞かせてくださいな。」

A: ʔaja:, waŋ=ga kissa=kara kuma kateimit-o:-ei n:te-o:m=i
 母 1SG=NOM さっき=ABL ここ.ACC 捕まえる-PROG-NLZ.ACC 見る-PROG=YNQ
 「母さん、私がさっきからここを捕まえてるのを見ているか。」

B: ɸu:na:. mad̄zi ʔundzo: (後略)
 INTJ INTJ 2SG.HON.TOP
 「そうなの。あらやだ貴方は…(後略)」(実践, 30) (用例 711, 790 と重複)

832) [子供同士の会話]

A: d̄ziru:-ta: ja:=ŋkai ʔaeib-i:ga ʔik-an=i
 (人名)-PL.GEN 家=DAT 遊ぶ-PUR 行く-NEG=YNQ
 「ジルーの家に遊びに行かないか。」

B: teu:=ja ɸima ja-kutu eimun=do:
 今日=TOP 暇 COP-CSL 済む=SFP
 「今日は暇だからいいよ。」

A: nu:gana mutte-i ʔiteum=i
 何か 持つ-SEQ 行く=YNQ
 「何か持って行くか？」

B: d̄zu:su-g^{wa}:=tu k^{wa}:ei-g^{wa}: ko:t-i=kara ʔik-a
 ジュース-DIM=COM お菓子-DIM.ACC 買う-SEQ=ABL 行く-HORT
 「ジュースとお菓子を買ってから行こう。」

A: ʔai, d̄zin=nu ne:ran. ʔja: mutte-o:m=i
 INTJ 金=NOM ない 2SG 持つ-PROG=YNQ
 「あ、お金がない！お前持ってるか？」

B: wannin ne:ran=do:. teā: su=ga
 1SG.ADD ない=SFP.ASS どう する=WHQ
 「俺もないよ。どうする？」

A: na: d̄ziru:-ta: ja:=ŋkae: ʔateā ʔik-a
 もう (人名)-PL.GEN 家=DAT.TOP 明日 行く-HORT
 「もうジルーの家には明日行こう。」(入門, 34) (用例 557, 656 と重複)

次の主語が二人称の i の文は、知覚動詞を継続相のかたちで述語にすえて、話し手にとって《不確か》な聞き手の経験について尋ねている。《問いかけ性》がある。

833) [女遊びのひどい甥のマサンルーに怒りくるう伯父]

kuni-ça: masan[ɸu:=ga ʔugueiku teikaku=kara saki nud-i d̄zurihana so:t-i ʔatteu-tan=ʔi
 こいつ-PEJ (人名)=NOM お城 近く=ABL 酒.ACC 飲む-SEQ 芸妓.ACC 連れる-SEQ 歩く-PST2.DIREV=QT
 「このマサンルーがお城²⁶³近辺から酒を飲んで芸妓を連れて歩いてたと」

ʔi:-eiga ʔja:=ja teite-o:m=i
 言う-ADVRS 2SG=TOP 聞く-PROG=YNQ
 「言うがお前は聞いているか。」(芝居, 554)

²⁶³ 首里城のこと。

次の主語が二人称の i の文は、述語に存在動詞をすえて、聞き手の所有、あるいは所属について尋ねている。mando:n は／物や人がたくさんある（いる）／という語彙的な意味をもつが、ここでは、聞き手に友達がたくさんいるかどうかを尋ねている。

813) A: ?anci duci=n mando:m=i

CNJ 友達=ADD たくさんいる=YNQ

「それで友達もたくさんいるか。」

B: ?u: 「はい。」(実践, 25) (用例 321 と一部重複)

次の主語が二人称の i の文は、相手の〈特性〉や〈質〉といった恒常的特徴について尋ねている。〈特性〉や〈質〉が相手の本質的なものだとすれば、話し手が相手の本質が何なのか判断がつかない場合は、下記の用例のように相手の本質について尋ねることもあろう。尋ねることで聞き手から情報を引きだそうとしているので、《問いかけ性》がある。物事の本質は、主に、名詞述語文で差しだすことができるが、コンピュータを伴わない場合は、i が名詞に後接した形をとる。

834) teira: tteu=nu katatei s-o:-eiga ?ja:=n tteu=i

顔.TOP 人=GEN 形.ACC する-PROG-ADVRS 2SG=ADD 人=YNQ

「顔は人の形をしているがお前も人か。」(音声「キ」)

835) [ドアのノック音を聞いて尋ねる]

taru:=i²⁶⁴

(人名)=YNQ

「太郎か。」(音声「キ」)

主語が三人称（話し手と聞き手以外の第三者のことについて尋ねる）

主語を三人称にした i の文は、話し手と聞き手以外の第三者のことを誰かに尋ねて情報を引きだす文である。《尋ねる対象》つまり《聞き手》になる相手は、そのことを知っていると思われる適当な人物が話し手によって選ばれる。したがって、《聞き手》候補が何人いてもよい。《尋ねる内容》は、第三者の《質》や《特性》といった恒常的な特徴から、《状態》や《動作》といった具体的な事象にいたるまで様々である。そのような第三者の特徴や事象は、発話時以前に話し手が知り得ない情報であり《不確か》でなければならない。《不確か》な情報を聞き手に問いかけて引きだす。

836) [市場で売り手と客の会話]

A: mimiga:=n dzo:to: ja-ibi:n=do:

ミミガー=ADD 上等 COP-POL=SFP

「ミミガーもいいですよー！」

B: mimiga:=ndi ?ju-ee:, ?wa:=nu mimi=nu ka:=nu kutu ja-ibi:m=i

ミミガー=QT 言う-NLZ.TOP 豚=GEN 耳=GEN 皮=GEN 事 COP-POL=YNQ

「ミミガーというのは、豚の耳の皮のことですか。」

A: ?an ja-ibi:n

そう COP-POL

「そうです。」(入門, 44)

²⁶⁴ taru:=du ja-ru=i とコンピュータをつけて言うことが多い。

837) A: kunici=nu makate: ja-ibi:n

国吉=NOM (人名) COP-POL

「国吉のマカテーです。」

B: kunici=nu jumi=du ja-ru=i

(人名)=NOM 嫁=FOC COP-ADN=YNQ

「国吉の嫁か。」

A: d̄zinan inagung^wa ja-ibi:n=tai

次男 女の子 COP-POL=POL.F

「次男の娘でございます。」

B: e:, sundunt̄ci=nu ko:t̄ci-nume:=nu kunici=saja: ʔaja:=n ta:ri:=n ʔugand̄zu: ʔwa:t̄ci-mice:m=i

INTJ (地名)=NOM (人名)-HON=GEN (人名)=SFP 母=ADD 父=ADD お元気で 歩く.HON-HON=YNQ

「ああ、首里殿内の幸地さんの国吉だね。母上も父上もお元気で過ごしていらっしやるか²⁶⁵。」

A: ʔu: niʔe:de:biru

はい ありがとう.POL

「はい。ありがとうございます。」(実践, 46) (用例 306 と重複)

主語が一人称

一人称を主語とする i の文において、-ti(n) eimun (あるいは-ti(n) jutasan ともいう) を述語にすえて、話し手のこれから行う未実現の動作について、聞き手に〈許可を得る／求める〉文となる。動作が許容されるものかどうかは、聞き手から情報を引きだすまで事前に知り得ないものである。

838) kuma=uti ʔacid-i eim-abi:m=i

ここ=LOC 遊ぶ-SEQ 済む-POL=YNQ

「ここで遊んでいいですか。」(楽沖, 121)

839) A: kuma=nu kumui=uti ʔwi:d̄z-i=n eim-abi:m=i

ここ=GEN 池=LOC 泳ぐ-SEQ=ADD 済む-POL=YNQ

「この池で泳いでもいいですか。」

B: ʔwi:d̄z-i=n eimu-eiga t̄cu:ie-i ʔwi:g-i=jo:

泳ぐ-SEQ=ADD 済む-ADVRS 注意する-SEQ 泳ぐ-IMP1=SFP

「泳いでもいいけど注意して泳ぎなさい。」(楽沖, 121)

840) [創作喜劇。物の尻=端をつかめという意味を人の尻だと勘違いする]

A: ma: kat̄eimir-e: jutasa-ibi:=gaja:

どこ 掴む-CND よろしい-POL=YNQ3

「どこつかめばよろしいですかね。」

B: t̄cibi kat̄eimir-e:

尻 掴む-IMP2

「「シリ」つかみなさい。」

A: ʔe:, inagu. t̄cibi kat̄eimit-i=n eimm=i²⁶⁶

INTJ 女 尻 掴む-SEQ=ADD 済む=YNQ

「おい、お前。尻つかんでもいいか。」

²⁶⁵ 直訳は「歩いていらっしやるか」だが、意識した。「歩く」に相当する動詞 ʔat̄teun には「歩く」以外に「生活している／暮らしている」、あるいは単独で用いられて「元気である／達者である」という語彙的な意味がある。ʔwa:t̄eimie:n は ʔat̄teun の尊敬語である。

²⁶⁶ 原文ママ。eimumi の口語的な言い方か。

C: ʔu:. kateimit-i k^wi-miso:r-e:

はい 掴む-SEQ BEN-HON-IMP2

「はい。つかんでくださいな。」(中略)

C: ʔe:=tai, ʔundzo: nu:n^wtei wan teibi kateimit-o:-mice:=ga

VOC=POL.F 2SG.TOP なぜ 1SG.GEN 尻.ACC 掴む-PROG-HON=WHQ

「あのう、貴方はどうして私の尻をおつかみになってるの？」(実践, 38) (用例 688, 691 と重複)

「～しても」に入る述語が否定形の場合、「～しなくてもよいか」という出来事の不必要の許容について聞き手の判断を求める文となる。聞き手に尋ねて情報を引き出すので、問いかけ性がある。

841) [姑が嫁にそうめん炒めの作り方を教える]

A: ʔunu ʔatu so:min ʔitt-i taer-e:

この 後 素麺.ACC 入れる-SEQ 炒める-IMP2

「この後そうめんを入れて炒めなさい。」

B: teiribira: ʔirir-ant-i=n jutasa-ibi:m=i

蕪.TOP 入れる-NEG-SEQ=ADD よろしい-POL=YNQ

「には入れなくてもよろしいですか。」

A: ʔa-ine: ʔiri-eiga ʔatai=nakai mi:t-e: uran-kutu eimu=sa

ある-CND 入れる-ADVRS 菜園=LOC 生える-SEQ.TOP いない-CSL 済む=SFP

「あれば入れるけど、庭の畑に生えていないからいいよ。」(入門, 129)

これから行う未実現の話し手の動作について、聞き手がそれを承諾するかどうか尋ねるような場合、話し手の動作・行為の〈申し出〉を表す(日本語記述文法研究会, 2003, p. 43)。話し手が聞き手の利益になる動作・行為を申し出て、未実行の動作に対する話し手の〈意志〉を示す文であるならば、〈申し出〉の文も一種の意志文である。首里方言の場合、述語に断定形が用いられる(日本語で意志形が用いられるのと対照的)。

842) A: nimotsu wa:=ga mutē-abi:m=i

荷物 1SG=NOM 持つ-POL.IND=YNQ

「荷物私を持ちますか? (lit. 持ちますか?)」

B: ʔi: mutē-i turac-e:

うん 持つ-SEQ BEN-IMP2

「うん、持ってちょうだい。」(調査, 2015/7/23)

843) A: tea: mutē-i te-a:bi:m=i

茶.ACC 持つ-SEQ 来る-POL.IND=YNQ

「お茶持って来ますか? (lit. お茶持って来ますか?)」

B: ʔi: mutē-i k-u:=wa

うん 持つ-SEQ 来る-IMP=SFP

「うん、持って来て。」(調査, 2015/7/23)

主語が一・二人称

動作が未実現の話し手と聞き手の両方に関する内容である場合、話し手が聞き手に対して〈提案〉を差し出す文になる。質問文による〈提案〉は、「話し手と聞き手に関わる行為を実行しようと

いう話し手の提案を、聞き手が受け入れるかどうかを尋ねる」ことを指す(日本語記述文法研究会, 2003, p. 43)。話し手と聞き手に関わる未来の動作を聞き手に提案することで聞き手に働きかけているとすれば、非常に婉曲的な〈勧誘〉の文となる。

844) [子供同士の会話]

A: $\widehat{d}ziru$:-ta: ja:= η kai ?acib-i:ga ?ik-an=i
 (人名)-PL.GEN 家=DAT 遊ぶ-PUR 行く-NEG=YNQ
 「ジルーの家に遊びに行かないか。」

B: $\widehat{t}eu$:=ja ϕ ima ja-kutu eimun=do :
 今日=TOP 暇 COP-CSL 済む=SFP
 「今日は暇だからいいよ。」

A: nu:guna mutte-i ?iteum=i
 何か 持つ-SEQ 行く=YNQ
 「何か持って行くか？」

B: $\widehat{d}zu$:su-g^wa:=tu k^wa:ei-g^wa: ko:t-i=kara ?ik-a
 ジュース-DIM=COM お菓子-DIM.ACC 買う-SEQ=ABL 行く-HORT
 「ジュースとお菓子を買ってから行こう。」

A: ?ai , $\widehat{d}zin$ =nu ne:ran. ?ja: mutte-o:m=i
 INTJ 金=NOM ない 2SG 持つ-PROG=YNQ
 「あ、お金がない！お前持ってるか？」

B: wannin ne:ran=do:. $\widehat{t}ea$: su=ga
 1SG.ADD ない=SFP.ASS どう する=WHQ
 「俺もないよ。どうする？」(入門, 34) (用例 557, 656, 832 と重複)

不定人称

次の i の文は、話し手の動作が〈可能〉かどうかを聞き手に尋ねているが、必ずしも話し手に限ったことではない。誰にとってもその動作が〈可能〉かを表している。その知識を持っていそうな相手に尋ねて情報を得ようとしている。

845) A: karimen= \widehat{di} -ei ?mma=ndzi $\text{?ukir-arij-abi:m=i}$
 仮免=QT-NLZ ここ=LOC 受ける-POT-POL=YNQ
 「仮免ってのここで受けられますの。」

B: ?i :. kuma: ?unu eikendzo: ja=sa
 うん ここ.TOP その 試験場 COP=SFP
 「ああ。ここはその試験場だよ。」(実践, 46) (用例 315 と重複)

あいづちのようなフレーズ化された i の文は、《問いかけ性》があれば／再度確かめる／という質問文として機能するだろうが、なければ〈驚き〉や〈意外〉といった意味あいには派生・移行する。

846) ?an jam=i
 そう COP=YNQ
 「そうなの？」(儀間, 2000, 59)

847) ϕ unto:=i

本当=YNQ

「本当?」(儀間, 2000, 59)

848) ϕ unto: jam=i

本当 COP=YNQ

「本当か?」(儀間, 2000, 43)

849) A: jo:ko=ga ju:ban nite-e:n=te:

(人名)=NOM 夕飯.ACC 煮る-RES=SFP

「ヨーコが夕飯を煮ているよ(/煮たんだよ)。」

B: makutu=i

まこと=YNQ

「本当?」(Arakaki, 2013, 72) (用例 156 と同文)

du による焦点化を受ける i/mi の文

文中に du による焦点化を受ける場合、話し手は何らかの疑いあるいは見当・予想のようなものを示しながら、聞き手を問いただす。この場合、述語が rui という形をとりやすい。次の用例では、述語の客体(=saki 酒)が du によってとりたてられていて、聞き手の様子から「酒を飲んでいるのだろうか?」のような疑い・見当・予想を持ちつつ、そのことを確かめるために聞き手を問いただしている。

850) [酔っぱらってジュリの女を家に連れてきたマサンルーに対して伯父が]

A: masan[u:, ?ja:=ja saki=du nud-o:-ru=i

(人名) 2SG=TOP 酒=FOC 飲む-PROG-ADN=YNQ

「マサンルー、お前は酒を飲んでいるのか?」

B: tamme:=sai nud-o:-ibi:=sa

爺=POL.M 飲む-PROG-POL=SFP

「伯父さん、飲んでいますよ。」(芝居, 560-562) (用例 317 と重複)

名詞+sun(する)のようなタイプの動詞では、名詞が du でとりたてられて、述語が rui の形をとる。この場合、述語の動作全体に対して疑いをかけている。

851) [重い物を運んでいる女達を目の前にして何を手伝っていいのかわからず、何をしたらいいか尋ねる男 B に対してイライラした様子の男 A]

A: nu: tea: s-ara: jutasa=ga=ndi ?ite-o:=ga. ϕ uju:=du s-o:-ru=i

何 どう する-CND よろしい=WHQ=QT 言う-PROG=WHQ 面倒くさがる様=FOC する-PROG-AND=YNQ

「何を、どうしたらいいかと言っているんだ! 面倒くさがってるのか?」

B: u:u:, watta:=ga ϕ uju: s-abi:n=na:

いいえ 1PL=NOM 面倒くさがる様 する-POL=YNQ2.MIR

「いいえ、私達が面倒くさがるものですか。」(実践, 38)

次の用例では、述語の否定形が焦点化の du でとりたてられていて、聞き手の未実行の動作あるいは状態に対して疑いをかけている。述語の否定形がとりたてられる場合、代動詞は存在動詞 ?an(ある)をとり、さらに末尾が rui となる。

852) [夫 A がとても慌てている様子を見て、妻 B がなぜそんなに慌てているのか尋ねると]

A: ʔunu waki=nu wakar-an=du ʔa-ru=i

その 訳=NOM わかる-NEG=FOC ある-ADN=YNQ

「その訳がわからないのか？」

B: ʔu:, wakaj-abir-an=tai

はい わかる-POL-NEG=POL.F

「はい、わかりません。」(実践, 29)

853) A: ʔundzo: mata nu:nteĩ ʔunu ʔe:sa ʔuk-imiso:te-a=ga

2SG.HON.TOP また なぜ この 早さ 起きる-HON-PST=WHQ

「貴方はまたどうしてこんなに早く起きなされたのか？」

B: wanne: ʔakateĩteĩuke: ʔar-an=do:. ju:akidu:ei:=du s-o:n=de:

1PL.TOP 早起き.TOP COP-NEG=SFP.ASS 徹夜=FOC する-PROG=SFP

「私は早起きなのではないよ。徹夜をしているんだよ。」

A: ʔundzo: ju:bi=kara jukut-e: menso:r-an=du ʔa-mice:-ru=i

2SG.HON.TOP タベ=ABL 休む-SEQ.TOP いる.HON-NEG=FOC ある-HON-ADN=YNQ

「貴方はタベから休んでいらっしやらないんですか？」

B: ʔan ja=sa. mi:guʔaice-i nind-ar-an=jo:

そう COP=SFP 目が覚める-SEQ 寝る-POT-NEG-SFP

「そう。目が覚めて寝れないんだよ。」(実践, 13) (用例 42, 159, 293 と一部重複)

聞き手の《特性》に対して疑いをかけたり、見当をつけたりするならば、名詞述語文の名詞部分が焦点化の du でとりたてられて、述語が jarui となる。

854) A: ʔitta:=ja tunnaiʔateine:=du ja-ru=i

2PL=TOP 行商=FOC COP-ADN=YNQ

「お前達は行商なのか？」

B: ʔu:, guma-ʔaaine:-g^wa:=du ja-ibi:-ru

はい PFX-商人-DIM=FOC COP-POL-ADN

「はい、小さな行商です。」(実践, 40)

855) A: (前略) ma:=nu=ga

どこ=GEN=WHQ

「どこの家のものか？」

B: kunici=nu makate: ja-ibi:n

(人名)=GEN (人名) COP-POL

「国吉のマカテーです。」

A: kunici=nu jumi=du ja-ru=i

(人名)=GEN 嫁=FOC COP-ADN=YNQ

「国吉の嫁なのか？」

B: dzinan inagung^wa ja-ibi:n=tai

次男 女の子 COP-POL=POL.F

「次男の娘でございます。」(実践, 46) (用例 306, 837 と一部重複)

856) A: ʔidzi=n s-an=na:. ʔitta:=ja teĩ:gu:=du ja-ru=i

返事=ADD する-NEG=YNQ2.MIR 2PL=TOP 耳が聞こえない者=FOC COP-ADN=YNQ

「返事もしないのか。お前達は耳が聞こえないのか？」

B: u:u:, t̃ei:gu:=ja ʔa-ibir-an
いいえ 耳が聞こえない者=TOP COP-POL-NEG

「いいえ、耳が聞こえないわけではありません。」(実践, 45) (用例 702 と重複)

nu:gana(何か)と共起して、話し手の疑い・見当・予想のようなものを示しながら尋ねる。

857) A: nu:gana ʔai=ru su-ru=i
何か ある=FOC する-ADN=YNQ
「何かあるのか?」

B: ʔan=te:ma: ʔar-an
ある=どころ COP-NEG
「あるってもんじゃない。」(実践, 33)

次のようないわゆる「ウナギ文」でも、先行する名詞部分が du でとりたてられて、動作全体に対する話し手の疑いや見当を示しながら尋ねている。ここでも、nu:gana(何か)と共起している。

858) A: ʔunige: s-abir-a. ti: ʔagit-o:-ibi:n=do:
お願い する-POL-INT 手.ACC 上げる-PROG-POL=SFP.ASS
「お願いします。手を挙げていますよ。」

B: nu:gana eitsumon=du ja-ru=i
何か 質問=FOC COP-ADN=YNQ
「何か質問なのか?」

A: ʔu: 「はい。」(実践, 46) (用例 705 と重複)

次の用例では、主語を明示する助辞 nu に du が後接して、主語全体がとりたてられている。ここでも、nu:ga(何か)と共起している。

859) A: ʔja:=n ʔunu φe:sa ʔukit-i, nu:ga kakio:-ei munu=nde:=nu=ru ʔa-ru=i
2SG=ADD この 早さ 起きる-SEQ 何か 間に合わず-NLZ もの=等=NOM=FOC ある-ADN=YNQ
「お前もこんな早くに起きて、何か間に合わせのものでもあるのかい?」

B: ʔu:. watta: eikut̃ei=g^{wa}:nu ʔuφe: t̃ei:t̃ei=nu wassan-u=ru ja-ibi:n=de:
はい 1PL.GEN 仕事=DIM=NOM 少し.TOP 景気=NOM 悪い-CSL=FOC COP-POL=SFP
「はい。私達の仕事が少し景気が悪いからなのです。」(実践, 13) (用例 41 と同文)

i/mi の文の小まとめ

i/mi の文は、《不確定性条件》と《問いかけ性条件》という観点から〈質問〉というモダリティを表すことを示した。つまり、話し手にとって《不確か》な情報の真偽について、聞き手に問いかけて引き出す文である。話し手が何らかの疑い・見当・予想を示しながら聞き手に問いかける場合は、その疑い部分を du でとりたてて尋ねる。その場合、述語が連体形をとり、その後ろに i が後接し-rui というかたちになる。〈はなしあい〉の場面では、しばしば-rui は-ri:と発音される。次に〈質問〉以外のモダリティを表す i/mi の文について述べる。

5.1.1.2 〈質問〉以外のモダリティ

聞き手への《問いかけ性》あるいは《不確定性》を失った i の文は、〈質問〉以外の意味あいを付け加えたり、全く違ったモダリティを持つようになる。例えば、次のようなものがある。

表 42 〈質問〉以外を表す i の文

- (a) 聞き手にとって当然のことを質問文で差し出す文は、聞き手が気づいていないこと、忘れていたことを再認識させるという文となる(思い出させる文を参照)。
- (b) 一旦共有されている情報だが、いまだ信じがたい情報を質問文の形で差し出す文は、話し手の〈驚き〉や〈意外〉を表す文となる(感嘆文を参照)。
- (c) 主語が一人称をとり、話し手のこれから行う未実現の動作を差し出す文は、意志文となる(意志文を参照)。

他に、《問いかけ性》や《不確定性》を保持したまま、一人称を主語にして許可形式を述語に伴いながら許可を求める文になったり、二人称を主語にして依頼形式を述語に伴いながら依頼文になったりする文についてもみてきた。

5.1.1.2.1 〈反語解釈〉

ここでは、上記以外の用法である〈反語解釈〉の意味あいについて述べる。主語が一人称の i の文は、〈反語解釈〉を表す場合がある。〈反語解釈〉とは、「逆の判断が成り立つことを前提として聞き手に問いかけ、その前提を確認させ」、その結果として「話し手の強い主張を聞き手に伝える」ことを指す(日本語記述文法研究会, 2003, p. 50)。述語に示された動作や状態、事象が真ではないことを聞き手に強く訴える文となる。例えば、始めのふたつの例は、「話し手が知らない」という判断が成り立つことを前提に聞き手に対して「私知っているか」と問いかけることによって聞き手に逆の判断を認識させている。聞き手から情報を引き出す文ではないので、聞き手への《問いかけ性》はない。

860) A: ?e:=tai. kuma: karimen=nu eiken ?uki:ttukuru ja-ibi:=gaja:

INTJ=POL.F ここ.TOP 仮免=GEN 試験 受け所 COP-POL=DUB(YNQ3)

「あのう。ここは仮免の試験場でしょうか？」

B: wa:=ga citta-o:m=i. wannin nama=du ?itte-i te-o:-ru-munnu

1SG=NOM 知る-PROG=YNQ 1SG.ADD 今=FOC 入る-SEQ 来る-PROG-ADN-FN

「俺が知るか。俺も今入って来たところだもの。」(実践, 45) (用例 804 と一部重複)

861) ?ja:=ga tea: nara-wa=n wa:=ga citta-o:m=i. ?itei-busa-ra: ?e:ku na: ?ik-e:

2SG=NOM どう なる-CND=ADD 1SG=NOM 知る-PROG=YNQ 行く-DES-CND 早く もう 行く-IMP2

「お前がどうなるうが私知ったもんか。行きたかったら早くもう行け。」(実践, 34) (用例 489 と重複)

862) [A が人から貰ったダイヤの指輪を B に自慢して見せる]

A: ?unu ?i:binagi: n:te-i=ma:. ?e:, daija=ndi=do:. so:mun ja-e: s-an=i

この 指輪 見る-SEQ=IMP INTJ ダイヤ=QT=SFP 本物 COP-INF.TOP する-NEG=YNQ

「この指輪見てみ？ほら、ダイヤだとよ。本物だろう？」

B: so:mun ja=sa. ?uri handobaggu=ηkai ?itt-i=na:

本物 COP=SFP それ.ACC ハンドバッグ=DAT 入れる-SEQ=YNQ2

「本物だよ。それをハンドバッグに入れるのか。」

A: ʔaneɪ ʔiri:ttukuro: ne:n-munnu

だって 入れる所.TOP ない-FN

「だって入れる所がないんだもの。」

B: ʔi:bi=ŋkai nute-i ʔakk-e:

指=DAT 貫く-SEQ 歩く-IMP2

「指にはめて歩け。」

A: ʔungutu de:daka: ʔi:bi=ŋkai nute-i ʔakk-ari:m=i

こんな 高価な物 指=DAT 貫く-SEQ 歩く-POT=YNQ

「こんな高価な物指にはめて歩けるか。」

B: teurasugae: s-o:t-i=n ʔan=du ʔa-ru=i²⁶⁷

おしやれ.TOP する-PROG-SEQ=ADD そう=FOC ある-ADN=YNQ

「おしやれをしてもそうなのか。」(実践, 34) (用例 344, 558, 734, 754 と重複)

二人称を主語とする場合、〈反語解釈〉といった意味あい聞き手への〈非難〉といったネガティブな評価的ニュアンスを伴いやすい。

863) [酔っぱらって芸妓の女を家に連れてきたマサンルーに対して母が]

A: masanlu:, ʔanu inago: dʒuribana=du ja-e: s-an=i

(人名) あの 女.TOP 芸妓=FOC COP-INF.TOP する-NEG=YNQ

「マサンルー、あの女は芸妓じゃないか。」

B: wa:=ga kanasas-o:-ru hanadzimi-g^wa:=nu ʔusa-g^wa: ja-ibi:n

1SG=NOM 可愛がる-PROG-ADN (地名)-DIM=GEN (人名)-DIM COP-POL

「私が可愛がっている花染屋のウサグラーです。」

A: ʔitta: dʒuri bundze:=nu kuma: ʔndzi:risu-ru tukuru jam=i. ta: ʔuee:t-i kuma=kai te-a=ga

2PL 芸妓 分際=NOM ここ.TOP 出入りする-ADN ところ COP=YNQ 誰 見くびる-SEQ ここ=ALL 来る-PST=WHQ

「お前達芸妓の分際がここは出入りするところか! (私を) 誰だと思ってここに来たか²⁶⁸。」(芝居, 560)

主語が三人称あるいは一般人称の場合でも〈反語解釈〉を表せる。文に差し込まれる第三者あるいは人稱不特定な世間一般や不特定多数の人々のことについて述べ、そのようなことは「常識として普通一般に言ってあり得ない」ということを主張する。聞き手から情報を引き出すというよりは、主張を伝えるという側面が強いため、聞き手への《問いかけ性》はない。

864) A: ʔja:=ja wan ʔuee:t-o:n

2SG=TOP 1SG.ACC 見くびる-PROG

「お前は俺を見くびっているな(なめているな)。」

B: utu ʔuee:i-ru tudzi=nu u-ibi:m=i

夫.ACC 見くびる-ADN 妻=NOM いる-POL=YNQ

「夫を見くびる妻がいますの。」

A: ha:. ui=ga su-ra wakar-an=do:

INTJ いる=FOC する-DUB わかる-NEG=SFP

「ふん。いるかもわからないぞ。」(実践, 29)

²⁶⁷ 原文ママ。ʔan=du ja-ru=i の誤用か。

²⁶⁸ 直訳すると、「誰を見くびってここに来たか」だが、わかりやすいように修正した。

865) [腹が減ったという男 B に対して気を遣っておにぎりを差しだす女 A だが男 B が嫌がる]

A: ja:sa s-o:t-e: ?ikusa: na-ibir-an=do:=tai
 空腹 する-PROG-SEQ.TOP 戦.TOP POT-POL-NEG=SFP.ASS=POL.F
 「お腹がすいては戦はできませんよ。」

B: wanne: ?ikusa: eik-an-mun
 1SG.TOP 戦.TOP 好く-NEG-FN
 「俺は戦は好きじゃないもの。」

A: ?ikusa eiteu-ru tteu=nu u-ibi:m=i. mun=nu tatui=du ja-ibi:-ru. ?usagamiso:r-e:
 戦 好く-ADN 人=NOM いる-POL=YNQ もの=GEN 例え=FOC COP-POL-ADN 召し上がる-IMP2
 「戦好きな人がいますか。物の例えですよ。召し上がれ。」

B: i:i, eimu=sa
 いや 済む=SFP
 「いや、結構。」(実践, 48) (用例 355, 737 と重複)

次の i の文も可能表現を伴って、〈反語解釈〉を表している。つまり、そのような動作が不可能であることを強調し、そのことを再認識させようとしている。また、聞き手に対する〈非難〉といった話し手のネガティブな評価が付け加わっている。

866) [商品を見せてくれと女が頼むと、男は目の前にあると言う。女が見えないので、指差しをして見させてくれと頼むが…]

A: to:, ?ance: ?i:binutei ee-i micit-i k^{wi}-miso:r-e:²⁶⁹
 INTJ CNJ 指差し する-SEQ 見せる-SEQ BEN-HON-IMP2
 「そう、それじゃあ指で差して見せて下さいな。」

B: to:to:, na: eimu=sa. mi:r-an mun=nu=n ko:r-ari:m=i. ko:r-ant-i=n eimu=sa. na: ?ik-e:
 INTJ もう 済む=SFP 見える-NEG 物=NOM=ADD 買う-POT-YNQ 買う-NEG-SEQ=ADD 済む=SFP もう 行く-IMP2
 「はいはい、もう結構。見えないものなんか買えるか!買わなくても結構だ。さっさと行け。」

A: ?undzo: so:-jukueimuna: ja-ibi:=sa. tteu=nu teimu jaφaraki: dzo:dzi nat-i
 2SG.TOP 本当に嘘つき COP-POL=SFP 人=GEN 心.ACC 和らげる事 上手 なる-SEQ
 「貴方は本当に嘘つきですね。人の心を和らげるのがなんともお上手で」(実践, 40) (用例 502, 794 と重複)

次の i の文も〈反語解釈〉を表しているが、述語が-ntein ?ami または-nditei ?ami という形をとり、《対象的な内容》に対する聞き手との判断のずれについて述べていて、話し手の〈非難〉といった意味あいを帯びてくる。また、話し手にとって信じがたい事象を差しだすならば〈驚き・意外〉のニュアンスも付け加える。

867) A: ?undzo: mata wakat-o:n φu:na: s-o:-eiga φunto: waka-mise:m=i
 2SG.TOP また わかる-PROG ふり する-PROG-ADVRS 本当 わかる-HON=YNQ
 「貴方はまたしたかぶりしているが本当におわかりなの？」

B: (前略) ?uri=ga wakar-an=tein ?am=i
 これ=NOM わかる-NEG=QT=ADD ある=YNQ
 「これがわからないってあるか。」(実践, 40) (用例 824 と重複)

²⁶⁹ 原文では、miciti mimiso:re:とあるが、筆者が内容に合うように修正した。

868) [王府からの役人 B が村を視察している所に百姓達が薪を担いでやってくる。B は百姓達に優しく声をかける。百姓達は一礼して薪を持ち上げて立ち去ろうとする。それを手伝おうとする役人 B に対して地元の役人 A が言う]

A: sari sari. ʔuppina:=nu gudze:ban=nu ɕakuco:=nu eiɡutu tigane: ei-mice:-ne:
INTJ.M INTJ.M これ程=GEN 御在番=NOM 百姓=GEN 仕事.ACC 手伝い する-HON-CND

「もしもし。これ程の御在番様が百姓の仕事を手伝いなさいますと」

φu:dze: ne:j-abir-an-eiga

風情.TOP ない-POL-NEG-ADVRS/(NASS)

「みっともありませんよ…」

B: eiɡutu=nu tigane: su-ei=nakai φudze: ne:ran=difei ʔam=i. φunto:=ja wannin hataratei-busan
仕事=GEN 手伝い.ACC する-NLZ=LOC 風情.TOP ない=QT ある=YNQ 本当=TOP 1SG.ADD 働く-DES

「仕事の手伝いをするのにみっともないってあるか。本当は私も働きたい。」(芝居, 538) (用例 534 と重複)

869) [連れてきたジュリを母が追い返したので]

A: nu:=ga=sai, ʔaja:. ʔansukana: janagutei ei-mice:-ru
なぜ=WHQ=POL.M 母 そんなに 悪口 する-HON-ADN

「どうしてですか、母上。そんなに悪口しなさって。」

B: ʔe:, masan[u:. ʔikana nu: jar-awa=n dzuribana=madi teine:=ŋkai so:t-i teu:n=liŋei ʔam=i
INTJ (人名) いくら 何 COP-CND=ADD 芸妓=LIM 家=DAT 連れる-SEQ 来る=QT ある=YNQ

「おい、マサンルー。いくら何でも芸妓まで家に連れて来るってあるか。」(芝居, 560)

870) [目の前にあるのに女 B が見えないと言うので…]

A: ʔja:=ja ʔuri mi:r-an=i. φirumi:=du ja-ru=i
2SG=TOP これ 見える-NEG=YNQ 昼目=FOC COP-ADN=YNQ

「お前はこれ見えないのか。昼鳥目なのか。」

B: ʔe:=tai, ʔundzu=jo:. φirumi:=ntein ʔa-ibi:m=i
INTJ=SFP 2SG.HON=VOC 昼目=QT=ADD ある-POL=YNQ

「あら、貴方。昼鳥目ってありますの?」

A: ʔancei ʔuφina:na:=nu munu mi:r-an=di ʔi-kutu=te:
だって このくらい=GEN もの 見える-NEG=QT 言う-CSL=SFP

「だってこんな大きなものが見えないって言うからさあ。」

φiro: mi:r-aŋ=ga ʔa-ra=ndi ʔumut-a-ru=ba:=te:
昼.TOP 見える-NEG=FOC ある-DUB=QT 思う-PST-ADN=FN=SFP

「昼は見えないのかなって思ったんだよ。」(実践, 40) (用例 202 と一部重複, 215 とは同文)

871) ʔakisamijo:. ʔanne:taru munu ʔi:kata=ntein ʔam=i

INTJ そのような もの 言い方=QT=ADD ある=YNQ

「あれまあ。そんなものの言い方ってあるか?」(儀間, 2000, 70-71)

5.1.1.2.2 〈納得〉

次の主語が二人称の i の文には《問いかけ性》がない。「聞き手の喉が痛い」という情報から「具合が悪い」ことを話し手が判断し、その判断をそのまま言語化している。直前の聞き手の発言から得た新しい情報を心内で確認し、それをそのまま独り言のように表現する〈納得〉を表している。

872) [病院で医者と患者の会話]

A: (前略) teinu:=kara nu:di:=madi jad-o:-ibi:n

昨日=ABL 喉=LIM 痛む-PROG-POL

「昨日から喉も痛んでいます。」

B: ʔan ja-ibi:m=i, du: ʔamma-sa-ibi:m=i. ʔanci ʔubuno: ma:sa-ibi:m=i
そう COP-POL=YNQ 体 調子が悪い-POL=YNQ CNJ ご飯.CH おいしい-POL=YNQ
「そうですか。具合が悪いんですか。それではご飯はおいしいですか?」

A: ʔansuka i: ʔambe:=ja ʔa-ibir-an
それ程 良い 按配=TOP COP-POL-NEG
「あんまりいい具合ではありません。」(入門, 64-65)

次の i の文も《問いかけ性》はほとんどない。「(症状は)風邪である」という医者^の診断情報を話し手が〈確認〉し、その〈確認〉をそのまま言語化している。つまり、直前の聞き手の発言から得た新しい情報を心内で〈確認〉し、それをそのまま表現する〈納得〉を表している。ここでも独り言のように発せられている。

873) [病院で医者と患者の会話 (用例 588 と一部重複)]

A: kutei magiku ʔakij-a:ni, nu:di:=nu ʔuku mieit-i k^wi-miee:-bir-i
口.ACC 大きく 開ける-SEQ 喉=GEN 奥.ACC 見せる-SEQ BEN-HON-POL-IMP1
「口を大きく開けて、喉の奥を見せて下さい。」

(喉の奥を見る)

hanaʔitei ja-ibi:ŋ=ja:
風邪 COP-POL=SFP

「風邪ですね。」

B: ja-ibi:m=i. ntea nama: ʔe:t-o:-ibi:-kutu ʔuteit-i ne:j-abiraŋ=ja:
COP-POL=YNQ INTJ 今.TOP はやる-PROG-POL-CSL うつる-SEQ CPL-POL=SFP
「そうですか。やっぱり今は流行っているから、うつってしまったんですね。」(入門, 65-66)

否定質問形式を伴った文が《問いかけ性》を失って話し手にとって不利益あるいはネガティブな〈納得〉を表す場合、〈嘆き〉や〈諦め〉といった意味あい^が付け加わる。

874) A: ʔaka=nu tannin=nu ʔja: tumi:-ru kuto: nar-an
赤=GEN 他人=GEN 2SG.ACC 泊める-ADN 事.TOP POT-NEG

「赤の他人のお前を泊める事はできない。」

B: ʔuridaki tanud-i=n teite-e: k^wi-nso:r-an=i. kurika:çin=nu tteo: nasaki=ndi-ee:
これだけ 頼む-SEQ=ADD 聞く-SEQ.TOP BEN-HON-NEG=YNQ こら辺=GEN 人.TOP 情け=QT.言う-NLZ.TOP
eir-an=du ʔa-ru=i (用例 527 と重複)
知る-NEG=FOC ある-ADN=YNQ

「これだけ頼んでも聞いては下さらないのか…。 この辺の人は情けも知らないのか…」(芝居, 770-772)

i/mi の文のモダリティの総まとめ

i/mi の文のモダリティは、《不確定性》および《問いかけ性》の有無によって次の表のようにまとめられる。また、人称性の違いもモダリティの違いに関与している。ただし、あらゆるタイプの i/mi の文を分析したわけではないので、あくまでも暫定的・試験的なまとめである。

表 43 i/mi の文が表せるモダリティー一覧

	《不確定性》 & 《問いかけ性》あり	なし
一人称	〈質問－許可を求める〉 〈意志(申し出)〉 〈提案－勧誘〉(一・二人称主語で)	〈意志(動作実行)〉 〈反語解釈〉 〈納得〉
二人称	〈質問－聞き手の内的な一時的感情・状態・評価, 具体的動作, 経験等〉 〈依頼〉(依頼形式を伴って)	〈思い出させる〉 〈反語解釈〉(+非難) 〈驚き〉(+非難/蔑み, ba:i/ basui を述語にして) 〈問い返し〉 〈納得〉
三人称	〈質問－第三者の《質・特性・状態・動作》〉	〈反語解釈〉 〈納得〉

どの人称においても〈質問〉の働きを確認できるため、最も典型的な i/mi の文のモダリティーは〈質問〉であるとみなすことができる。人称ごとに《尋ねる内容》は変わるが、話し手の《不確か》なことについて聞き手に尋ねて情報を引きだす文であることに変わりはない。

その他のモダリティーは、《人称》あるいは《場面状況》に依存するモダリティーである。例えば、一人称を主語とする文は、動作が未実現の場合《意志性》が生じて意志文となる。二人称を主語とする文も、動作が未実現の場合《働きかけ》が生じて依頼文や思い出させる文となったりする。また、聞き手に対する〈非難〉といったニュアンスが伴いやすいのも二人称文の特徴である。

上記の表でみるように《不確定性》や《問いかけ性》を失った i/mi の文は、もはや質問文としては機能せず、話し手の疑いや信じがたい気持ち、あるいは話し手の揺らいでいる気持ちや決めかねている感情・心情のようなものを述べる文となり、叙述文的な働きを持つ。

5.1.2 na:の文

5.1.2.1 〈質問〉を表す na:の文

先行研究や沖縄語に関する書籍等では、na:の文は〈軽い疑問〉や〈間接疑問〉を表すという記述がしばしば見受けられる(内間, 1994; 儀間, 2000, p. 51)。〈間接疑問〉とは、「漠然たる聞き手へ向けられる」ものであり、「自問とでも称されるもので、疑問が詠嘆的に表出されるものである」(内間 1994, p. 287)。また、〈直接疑問〉として用いられる場合は「聞き手からのなんらかの答えを期待するもの」だと述べていることから、na:の文の用法は〈間接疑問〉から〈直接疑問〉まで多岐にわたる。

しかし、上で述べてきたように、自問だったり、詠嘆的に表出されたりする用法は i/mi の文にも備わっている。〈軽い疑問〉や〈間接疑問〉だと判断された要因は何であるのかを念頭に置きつつ、na:の文が表せるモダリティーについて分析を行った。その結果、na:の文は、ひとまず、na:が名詞に直接後接するものと、述語にあらわれるものとに大別できる。

5.1.2.1.1 名詞に直接後接する na:の文

na:が名詞にそのまま後接する形をとる名詞述語文(コピュラなしの名詞述語文)では、話し手は、先行する名詞のことについて、聞き手が話題にしているのか(あるいは言及しているのか)どうかを尋ねている。焦点化の du はあらわれない。

875) [物を指で差しながら]

A: kuri=na:

これ=YNQ2
「これか？」

B: ?ure: ?ar-an

それ.TOP COP-NEG
「それではない。」(調査, 2015/6/25)

876) A: sakuma-pe:tein=nu sudating^wa=ndi=na:

(人名)=GEN 育ての子=QT=YNQ2
「佐久間親雲上の育ての子だって？」

?anu sakuma-pe:tein=di ?i:-ne: to:nukura=nu sakumape:tein=na:

あの (人名)=QT 言う-CND (地名)=GEN (人名)=YNQ2
「あの佐久間親雲上と言ったら、当蔵の佐久間親雲上かい？」

B: ?o:, ?an jan=do:=na:

はい そう COP=SFP.ASS=POL
「はい、そうですよ。」(芝居, 672-674)

877) A: nu:=nu jakusuku=ga²⁷⁰

何=GEN 約束=WHQ
「何の約束か。」

B: teu:=nu eima=nu jakusuku=te:ja:.. tage:=ni tea:ci s-a=ga

今日=GEN 相撲=GEN 約束=SFP 互い=DAT どう する-PST=WHQ
「今日の相撲の約束だよ。互いにどうするんだったっけ？」

A: ?e:, na:=ηkai hana mut-ate-i, eima judzi:-ru kutu=na:

INTJ 2SG.HON=DAT 華.ACC 持つ-CAUS-SEQ 相撲.ACC 譲る-AND こと=YNQ2
「ああ、貴方に華を持たせて相撲を譲ることか？」

B: ?an jan

そう COP
「そうだ。」(芝居, 1004)

ただし、何が話題になっているか、何を指し示しているのか、明らかにしたい内容を du でとりたてて尋ねることも可能である。その場合には、コンピュータがあらわれるが、述語は ru 結び(連体形)にはならず、述語に na:がそのまま後接する。

814') A: kuri=ru ja-ibi:n=na:

INTJ COP-POL=YNQ2
「これ、ですか？。」

B: ?ure: ?ar-an

それ.TOP COP-NEG
「それではない。」(調査, 2015/6/25)

《問いかけ性》がない場合、あいづちや〈納得〉のような間投的な意味あいとなる(詳細は後述)。

²⁷⁰ 原文では nu:=nu jakusuku=na:だが、修正した。

878) A: nu:gana=nu takk^wi: ja-mice:-ra=ja:

何か=GEN 血筋 COP-HON-DUB=SFP

「何かの血筋でしょうね。」

B: wan=na: ʔamagaka:=nu takk^wi: ja=sa

1SG=YNQ2 天邪鬼=GEN 血筋 COP=SFP

「俺か? 天邪鬼の血筋さ。」(実践, 48) (用例 340, 560 と重複)

助辞のついた名詞につく場合は, その助辞のついている単語全体の働き, 例えば, 次の用例では, 話し相手の対象を表す η kai が kuri という指示語に後接し, 聞き手の話し相手の対象について言及している。ここでも《問いかけ性》を失って, 話し手の心内で確認する〈納得〉ような間投的な用法となっている。

879) A: ʔunu ʔjattei:= η kai ju:dz̄u ja-ibi:=sa

その 兄=DAT 用事 COP-POL=SFP

「その兄さんに用事ですよ。」

B: je:, kuri= η kai=na: ʔe:, ʔja:= η kai ju:dz̄un=di=do:²⁷¹

INTJ 3SG=DAT=YNQ2 INTJ 2SG=DAT 用事=QT=SFP.ASS

「ああ, こいつに(用事なの)か。おい, お前に用事だとよ。」(実践, 47)

5.1.2.1.2 述語に後接する na:の文

na:が述語に後接される文とは, 形式上, 名詞述語文では, コピュラを伴いその後ろに na:が配置される文, 形容詞および動詞述語文では, 述語の後ろに na:が配置される文のことである。

次の二人称を主語にした na:の文は, i/mi の文と同様に事象の是非について聞き手に尋ねる〈真偽質問〉を表す。文の《対象的な内容》は, 聞き手の未実現の動作であり話し手にとって《不確か》である。そのようないまだ《不確か》な情報について聞き手に問いかけて引き出す。

880) [妻と那覇にやってきた A が久しぶりに昔馴染みの先輩 B に会って…]

A: ma^wca:çi: maruke:ti=nu na:ɸakembutei ja-gutu ʔamakuma micit-i k-u:=çi:=na:

(人名) 時々=GEN 那覇見物 COP-CSL あちこち 見せる-SEQ 来る-INT=SFP=POL

「マチャー兄さん, たまの那覇見物だからあちこち見せて来ますね。」

B: ʔanei ʔunu ʔatu eima= η kai mudut-i ʔiteun=na:

CNJ その 後 村=DAT 戻る-SEQ 行く=YNQ2

「それでその後村に戻って行くのか。」

A: ʔar-an. t̄eu:=ja ha:me:-ta:= η kai tumat-i ʔiteu=sa

COP-NEG 今日=TOP おばさん-PL=DAT 泊まる-SEQ 行く=SFP

「いや, 今日はおばさんの所に泊まって行くよ。」(芝居 2, 1482-1484) (用例 84 と一部重複)

先行研究が指摘するように na:の文は i/mi の文よりも聞き手に柔らかく伝わる。ただし, 上のような文脈では i/mi の文と意味上の違いはないため, i/mi の文に置き換えることが可能である。したがって, はっきりと質問あるいは〈詰問〉する場合には, i/mi の文が用いられやすく, ちょっと聞いてみたという文脈の流れでは na:の文が用いられやすいのかもしれない。また, 次の二例の違いが示すよ

²⁷¹ ʔe:は, 原文では「ウエッシ」とあるが, 不明なため, 修正した。

うに、柔らかいニュアンスを持つため女性に用いられやすい表現である(ただし、次の二例は〈質問〉ではなく〈驚き〉を表す)。

881) [道で久しぶりに昔の友人に遭う。次の会話は男性同士である]

?ai, ?ja:=ja taru:=ja ?ar-an=i. ?anei mi:du:sat-a-ru

INTJ 2SG=TOP (人名)=TOP COP-NEG=YNQ CNJ 久しぶり-PST-ADN

「あれっ、お前は太郎じゃないか？ずいぶん久しぶりだなあ。」(儀間, 2000, 72)

882) [道で久しぶりに昔の友人に遭う。次の会話は女性同士である]

?ai:, akemi:=ru jan=na:

INTJ (人名)=FOC COP=YNQ2

「えっー、アケミなのお！」(儀間, 2000, 72)

さて、用例 880 が示すように、〈質問〉を表す na: の文における焦点化助辞 du によるとりたては必須ではない。しかしながら、na: の文では圧倒的に焦点化を受ける例が多い。つまり、話し手の疑いを du でとりたてながら、聞き手に尋ねるといったケースがほとんどである。また、主語が ja を伴って、「-ja + -du + 述語=na:」という構図を持つことが多い。

例えば、次の主語が三人称の文は主語 $\phi e:re:$ (追剥) が ja を伴い、na: (貴方) が du を伴って、「-ja + -du + jatan=na:」(janse:tan は jatan の尊敬形) という形をとり、追剥は他でもない「貴方」であったのかどうかをもう一度確かめる文となっている。この時、話し手は文脈や発話状況から事象の真偽(聞き手も弟も追剥だったこと)について疑っている、あるいは予想をつけていて、その話し手の疑いが正しいかどうかを聞き手に尋ねて明らかにしようとしている。そのような疑いをもった話し手の認識が du でとりたてられている。

883) [自分が追剥だったとばれて、地べたに座り込む B に対して旅人 A の台詞]

A: ?anu tuŋci=nu $\phi e:re:=ja$ na:=du ja-nce:t-an=na:

あの 時=GEN 追剥=TOP 2SG.HON=FOC COP-HON-PST=YNQ2

「あの時の追剥は貴方だったんですか？」

B: ?u: 「はい。」

A: wan=ni kurus-att-a-ru tŋeo: nu: jat-a=ga

1SG=DAT 殺す-PASS-PST-ADN 人.TOP 何 COP-PST=WHQ

「私に殺された人は誰だったんだ？」

B: ?are: wan ?uttu ja-ibi:t-a-eiga wan=jaka ?agatta jana-nindzin ja-ibi:t-an

3SG.TOP 1SG.GEN 弟 COP-POL-PST-ADVRS 1SG=CMPR 奢った PEJ-人間 COP-POL-PST

「あいつは私の弟でしたが、私よりもっと悪い人間でした。」

A: ?unu tŋeu=n $\phi e:re:=du$ jat-an=na:

その 人=ADD 追剥=FOC COP-PST=YNQ2

「その人も追剥だったのか？」

B: ?u: mo:eiwake: ne:j-abiran

はい 申し訳 ない-POL

「はい。申し訳ありません。」(芝居, 816)

次の主語が二人称の文は、娘から父親に話しかけている場面であるが、娘は父親の様子がおかしいと感じていて、その様子から「体調でも悪いのだろうか」と疑っている。しかし、その判断はいまだ《不

確か》である。話し手が直接確認できる情報に基づいて(この場合、観察に基づいて)、「体調が悪いのだろうか」という話し手の〈疑い〉が正しいのかどうかを目の前にいる父親に直接問いかけて、その《不確か》な疑いを晴らそうとしている。ここでも、「-ja + -du + 述語=na:」という構図になっている。

884) [長男の嫁 A が元気のなさそうな義父 B を見て、体調が悪いのだろうか心配する]

A: ?oto:san, nu:=ga. ?undzo: ?aneĩ genki=nu ne:-miso:r-an-eiga, ?ammaſa=du ?a-mice:n=na:

お父さん 何=WHQ 2SG.HON.TOP あまり 元気=NOM ない-HON-NEG-ADVRS 体調が悪い=FOC ある-HON=YNQ2
「お父さん、どうしたの。貴方、あまり元気がないですけど、体調が悪いのですか。」

B: nu:=n ?ammako: ne:ran=do:

何=ADD 体調悪く.TOP ない=SFP.ASS

「何も体調は悪くないよ。」(芝居 2, 1336)

次の主語が二人称の文では、話し手 B が周囲を見渡しても父親の姿が見当たらない(直接確認)ので、「寝ているのか」どうか疑問に思っている(間接確認)。述語(の語幹)に du をつけて焦点化することによって、話し手の疑問の焦点を明示しながら聞き手に質問している。

885) [元気のなさそうな父のことについて話す息子 A とそれを聞いて訪ねて来た父の妹の B]

A: g^waŋkuna mun ja-kutu b^o:iŋ=kai=ja ?ik-an=di=du ?i-mice:n=de:

頑固な 者 COP-CSL 病院=ALL=TOP 行く-NEG=QT=FOC 言う-HON=SFP.NASS

「頑固な人だから、病院には行かないとおっしゃるんですよ。」

B: ŋkaci=kara g^waŋkuna mun ja-kutu=ja:. ?aneĩ nint-i=ru mence:n=na:

昔=ABL 頑固な 人 COP-CSL=SFP CNJ 寝る-SEQ=FOC いる.HON=YNQ2

「昔から頑固な人だからね。それで寝ていらっしゃるの?」

A: ?a-ibir-an. t̄eu:=ja ?undo: sun=di ?iŋ-i φukandzi s-o:-ibi:n

COP-POL-NEG 今日=TOP 運動 する=QT 言う-SEQ 外出 する-PROG-POL

「いいえ。今日は運動するって言って外出しています。」(芝居 2, 1342)

ミラティブな意味あいを伴わせながら、〈質問〉を行う場合には、na:の文が用いられやすい。それは、次の二例の違いが示すようにもともと形式に備わったものだろうと思われる。

例えば、調査協力者によれば、急に次の台詞を言われたら「聞き手はムツとするだろう」と言う(面接調査, 2015年7月23日)。これは、「聞き手は行かないと思っている」という話し手の判断が前提にあり、〈驚き〉のニュアンスを伴うからである。これを ?iŋabi:mi (行きますか?) と i の文に置きかえると、そのような解釈は生まれない。単に話し手が《不確か》な事を聞き手に尋ねて聞き出している。

886) [行かないと思っていたのに。驚きながら言う]

?iŋabi:n=na:

行く-POL=YNQ2

「行くんですか?」(調査, 2015/7/23)

887) [明日パーティーがある。行くかどうかの情報は事前に共有されていない]

?iŋabi:m=i

行く-POL=YNQ

「行きますか。」(調査, 2015/7/23)

次の用例もまた、ミラティブな意味あいを伴わせながら〈質問〉を行っている例である。ここでは「自分は無関係だろう」という話し手の判断や想定のようなものが前提としてあったが、相手が「二人で」というので、自分も含まれているのか信じられない気持ちで聞き手に確かめている。

888) [力仕事をしている女 A とその側を男 B を含むふたりの男が通りかかって...]

A: ϕ e:ku \widehat{t} eibi \widehat{k} ateimit-i \widehat{t} ai= \widehat{c} ei \widehat{t} eibat-i= \widehat{m} a:
 早く 尻.ACC 掴む-SEQ 二人=INST 頑張る-SEQ=みる.IMP
 「早く端をつかんで二人で頑張ってみて。」

B: wannin=na:=sai
 1SG.ADD=YNQ2=POL.M
 「私も (するの) ですか。」

A: γ ja:=jaka ϕ uka= \widehat{n} e: \widehat{t} a:= \widehat{n} \widehat{u} r-an= \widehat{s} a
 2SG=CMPR 他=DAT.TOP 誰=ADD いる-NEG=SFP
 「あなた以外他に誰もいないよ。」(実践, 38)

ただし、次のような《問いかけ性》を失ってミラティブな意味あいだけが残った na:の文は、もはや質問文とは言えない。《対象的な内容》は一旦共有されているが、いまだ受け入れがたい・信じられない話し手内部の感情・驚き・意外な気持ちを吐露しているだけである。du でとりたてられることがない。du があったとしても、話し手の疑いをとりたてているのではなく、別のことをとりたてている(例えば、話し手の驚きをとりたてている等)。このような文は感嘆文に分類するのがよさそうである。

889) nu:=ga \widehat{d} o:so:kæ: γ i:na γ uwat-an= \widehat{n} a:
 何=WHQ 同窓会.TOP もう 終わる-PST=YNQ2
 「何だ? 同窓会はもう終わったの?」(語遊「イーナ」2010/12/26, p. 18)

890) sa \widehat{t} eiko:=ja γ i:na \widehat{k} e:t-an= \widehat{n} a:
 幸子=TOP もう 帰る-PST=YNQ2
 「幸子はもう帰ったの?」(語遊「イーナ」2010/12/26, p. 18)

891) \widehat{t} eukuna:mukuna:=nu \widehat{t} ein \widehat{t} eite-i= \widehat{r} u γ iteun= \widehat{n} a: ϕ u: \widehat{d} ze: \widehat{n} e:n-eiga
 しわくちや=GEN 着物.ACC 着る-SEQ=FOC 行く=YNQ2 みっとも ない-ADVRS.NASS
 「しわくちやの着物を着て行くの? みっともないが…」(調査, 2015/6/25)

892) nama= \widehat{r} u \widehat{t} e-o:t-i, \widehat{t} ea:ki \widehat{k} e:in= \widehat{n} a:
 今=ADD 来る-PROG-SEQ すぐ 帰る=YNQ2
 「今来たのに、すぐ帰るの?」(語遊「チャーキ」2011/9/25, p. 19)

893) kasa= \widehat{n} \widehat{m} ut-an, γ ami= \widehat{n} u \widehat{n} a:ka \widehat{n} dit-i γ atte-an= \widehat{n} a:
 傘=FOC 持つ-NEG-SEQ 雨=GEN 中 濡れる-SEQ 歩く-PST=YNQ2
 「傘も持たないで、雨の中濡れて歩いたの?」
 \widehat{t} e:ru: \widehat{d} zo= \widehat{k} ara= \widehat{n} di γ i:- \widehat{n} e:, \widehat{c} ipu:tu \widehat{n} at-o:n= \widehat{t} e: (用例 149 と同文)
 停留所=ABL=QT 言う-CND ずぶ濡れ なる-PROG=SFP
 「停留所からだ、ずぶ濡れだろうねえ(ずぶ濡れにちがいないねえ)。」(語遊「ンディユン」2010/7/25, p. 13)

894) A: \widehat{t} o:, γ amma: \widehat{n} a: \widehat{d} a= \widehat{n} \widehat{h} ana \widehat{c} i= \widehat{n} \widehat{c} i:- \widehat{b} usa: γ a- \widehat{c} iga, γ ju: \widehat{j} ukk^w \widehat{a} t \widehat{e} - \widehat{e} : \widehat{n} ar-an- \widehat{m} un γ ik-a= \widehat{c} i:
 INTJ おばさん まだ=ADD 話=ADD する-DES ある-ADVRS 夜 更かす-SEQ.TOP POL-NEG-CSL 行く-INT=SFP
 「それじゃ、おばさん、まだ話もしたいけど、夜暮れてはいけなないので行きますね。」

B: nu:=ga, γ ance:, \widehat{m} unu= \widehat{n} \widehat{k} ad-i γ ik-an= \widehat{n} a: \widehat{n} ama \widehat{c} i:= \widehat{n} γ akasa- \widehat{r} u- \widehat{m} unnu
 何=WHQ CNJ ご飯 食べる-SEQ 行く-NEG=YNQ2 今 日=ADD 明るい-ADN-FN

「何だい、それじゃ、ご飯も食べて行かないの。今まだ日も明るいのに。」(芝居, 680) (用例 511 と重複)

895) [子どもを産んだので久しぶりに B の家に訪ねて来た A]

A: kuri=kara ?we:ka-nutea: miguj-abi:-kutu ?ndz-i te-a.bir-a
これ=ABL 親戚-PL 巡る-POL-CSL 行く-SEQ 来る-POL-INT

「これから親戚達の所をまわりますので行って来ます。」

B: nama=kara=ru cirajatei:=n ?ndzi:-ru-munnu ?iteun=na:
今=ABL=FOC ヒラ焼き=ADD 出る-ADN-CSL 行く=YNQ2

「今からヒラ焼きも出るのに行くの？」

A: guburi: s-abir-a

失礼 する-POL-INT

「失礼します。」(芝居 2, 1390)

896) [那覇に見物にやってきた夫婦の会話。妻は妊娠している]

A: maruke:ti=nu na:φakembutei teikarit-a-ra=ja:

時々=GEN 那覇見物 疲れる-PST-DUB=SFP

「久しぶりの那覇見物疲れただろう？」

B: utat-e: ur-an-eiga ja:san-u

疲れる-SEQ.TOP いる-NEG-ADVRS ひもじい-CSL

「疲れてはいないけどお腹がすいて。」

A: ja:san. namasatei=du kad-o:-ru-munnu, ?i:na ja:san=na:

ひもじい.EQ 今さっき=FOC 食べる-PROG-ADN-CSL もう ひもじい=YNQ2

「お腹がすく？今さっき食べたのにもうお腹がすくのか。」

B: da:, ?ance: kad-i=n kad-i=n ja:sa=ru ?a-ru-munnu

INTJ CNJ 食べる-SEQ=ADD 食べる-SEQ=ADD ひもじい=FOC ある-ADN-CSL

「ほら、だって食べても食べてもお腹がすくんだもの。」(芝居 2, 1472-1474)

897) [祖母 A と孫 B の会話。戦争で苦勞したという A に対して自分も苦勞していると打ち明ける B]

A: ?ance:, wannin ?ippe: ?awari s-o:-ibi:=ssa:

CNJ 1SG.ADD とても 哀れ する-PROG-POL=SFP.MON

「それじゃあ、私もとても苦勞していますね。」

B: ci:na: madzi nu:=nu ?awari s-o:=ga. ?ancei φukubuku:tu s-o:t-i ?awari s-o:n=na:

INTJ INTJ 何=GEN 哀れ する=WHQ これ程 小太りな様 する-PROG-SEQ 苦勞 する-PROG=YNQ2

「ええっ！一体何の苦勞しているの？こんなにふくよかにしてて苦勞しているのかい？」

A: dziko: ?awari s-o:-ibi:n

とても 苦勞 する-PROG-POL

「とても苦勞しています。」(実践, 26) (用例 282 と一部重複)

このように、〈驚き・意外〉のようなミラティブな意味あいを伴せながら質問する場面では na:が用いられやすい。それは、そのような意味あいがかもともと na:という形式に備わっているためであろう。そして、しばしば《問いかけ性》を失い、感嘆文として機能する。このような特徴が〈軽い疑問〉や〈間接疑問〉だと判断される要因となったのだと考えられる。

na:の文の小まとめ

na:の文も i/mi の文と同様に、話し手にとって《不確か》なことを聞き手に問いかけて情報を引き出す質問文として機能する。《尋ねる内容》は、その情報が正しいかどうか、情報内容の是非を問うものである。ただし、na:の文では直接確認できる情報に基づいて、何らかの疑い・予想・判断を持ち

ながら、その正しさを確かめるために聞き手に問いかけるといった場面で用いられやすい。その場合、duによる焦点化を行うのが普通である。また、〈質問〉という土台的な意味に〈驚き・意外〉といったミラティブな意味あいを伴うことが多い。そして、そのような文は《問いかけ性》を失えば、ただの〈驚き・意外〉の文となる。圧倒的にこのような〈驚き・意外〉の用例が多い。

i/miの文と違って、na:の文では一人称を主語にして〈許可を求め〉たり、〈意志〉を表したりする例がほとんどない。本研究に限って言えば、そのような用例は見つからなかった。

5.1.2.2 〈質問〉以外のモダリティ

聞き手への《問いかけ性》あるいは《不確定性》を失ったna:の文は、〈質問〉以外の意味あいを付け加えたり、全く違ったモダリティを持つようになる。例えば、次のようなものがある。

表 44 〈質問〉以外を表すna:の文

- (a) 一旦共有されている情報だが、いまだ信じがたい情報を質問文の形で差し出す文は、話し手の〈驚き〉や〈意外〉を表す文となる(感嘆文を参照)。
- (b) 主語が二人称をとり、すでに共有されている聞き手の動作を質問文の形で差し出す文は、聞き手に対する〈非難〉の文となる(非難の文を参照)。

他に《問いかけ性》や《不確定性》を保持したまま、二人称を主語にして依頼形式を述語に伴いながら依頼文になったりする文もあった(依頼文を参照)。ここでは、上記以外の用法である〈反語解釈〉と〈納得〉とde:nna:の文について述べる。これらの文にも聞き手への《問いかけ性》や《不確定性》はない。

5.1.2.2.1 〈反語解釈〉

na:の文でも〈反語解釈²⁷²〉を表せる。例えば、次の主語が一人称のna:の文は、述語で示された動作や状態、事象が真ではないことを聞き手に強く訴える文となっている。聞き手から情報を引き出すというよりは、伝える側面が強いため《問いかけ性》はない。

898) A: (前略) ϕ uju:=du s-o:-ru=i

面倒くさい様=FOC する-PROG-ADN=YNQ

「めんどくさいのか。」

B: u:u: watta:=ga ϕ uju: s-abi:n=na:

いいえ IPL=NOM 面倒くさい様 する-POL=YNQ2

「いえ。私たちがめんどくさがりますか。」(実践, 38) (用例 851 とほぼ同文)

$\widehat{dzo}:i$ を伴う叙述文では $\widehat{dzo}:i$ の後に否定的な表現が続き、「絶対～ではない／しない、到底～ではない／しない」という意味になるが、 $\widehat{dzo}:i$ を伴うna:の文では、「絶対～なものか／するものか、到底～なものか／するものか」という話し手の反語的な判断を伝える。伝える側面が強いため、《問いかけ性》はない。

²⁷² 反語解釈の文は、「逆の判断が成り立つことを前提として聞き手に問いかけ、その前提を確認させるもの」で、その結果として、「話し手の強い主張を伝える」働きのことを指す(日本語記述文法研究会, 2003, p. 50)。

899) [夫の浮気ではないかと心配する A。「夫が私の手をひいていながら、隣の女の人をじっと見ていた」という女 A に対して、女 B が「それはね…」と何か意見を言おうとした瞬間に A はその発言をさえぎって言う]

A: wan utu=nu kukuru=nu wassan=di=ga ?i-mice:-ra=ntci, wanne: eiwa ja-ibi:t-a=sa
 1SG.GEN 夫=GEN 心=NOM 悪い=QT=FOC 言う-HON-DUB=QT 1SG.TOP 心配 COP-POL-PST=SFP.MIR

「私の夫の心が悪いとおっしゃるのかと、私は心配でしたの。」

?an=de: ?i-miso:r-an=da-ra=ja=:tai

そうだ=QT.TOP 言う-HON-NEG=FOC.ある-DUB=SFP=POL.F

「そうはおっしゃらないですわよねえ。」

B: ?akkijo:i. ja:φunnu. ?ja=:ja kate:mun ja=sa. wan=ga dzo:i ?an ?in=na:

INTJ INTJ.F 2SG=TOP 不思議な人 COP=SFP 1SG=NOM まさか そう 言う=YNQ2

「あれまあ。かわいそうに。お前は困った人だね。私がまさかそう言うもんですか。」

ti:=nu=ru wassa-ru-munnu

手=NOM=FOC 悪い-ADN-FN

「手が悪いんですもの。」(実践, 18) (用例 70 と一部重複)

次の主語が三人称の na:の文も、〈反語解釈〉として働く。三人称あるいは人稱不特定な世間一般や不特定多数の出来事について述べていて、世間一般的にそのような現象は真ではないことを聞き手に強く訴える文となっている。

900) [友達が二人しかいないという孫の相談に乗る祖母だが…]

A: ?ari=n eitir-ar-an, kuri=n nagir-ar-an=di ?i-ei ja-ibi:=sa

あれ=ADD 捨てる-POL-NEG これ=ADD 投げる-POL-NEG=QT 言う-NLZ COP-POL=SFP

「あれも捨てられないこれも振れないということですよ。」

B: ?akito:na:. ?iteide:dzi. ?ja: duei=ndi ?i-ee: inaguduei=du jan=na:

INTJ 大変 2SG.GEN 友達=QT 言う-NLZ.TOP 女友達=FOC COP=YNQ2

「あれまあ。大変。お前の友達と言うのはガールフレンド(のこと)なのか。」

A: ?an s-abi:-kutu, tai=nteo:n muteikanti:ee-i ?awari s-o:-ibi:n

そう する-POL-CSL 二人=でさえも 持ちかねる-SEQ 哀れ する-PROG-POL

「そうですから、二人でさえも持ちきれずに哀れな思いをしています。」

B: je:. tteu nindzin=nu inaguduei=nu tai=na: mut-ari:n=na:

INTJ 人 人間=NOM 女友達=NOM 二人=ずつ 持つ-POT=YNQ2

「あのね。人がガールフレンドを二人も持てますか(いや、持てない)。」(実践, 26) (用例 815 と重複)

次の用例は、〈反語解釈〉の文が〈非難〉の意味合いをおびている例である。

901) [義母 A と妻が帰って来る。夫 B が慌てて芸妓の女を外に出すが、今のは猫だと嘘をつく]

A: nama ?undzu=ga ?ndzate-i jar-asu-ta-ee: nu: ja-ibi:t-a=ga

今 2SG.HON=NOM 出る-SEQ 遣る-CAUS-PST2.DIREV-NLZ.TOP 何 COP-POL-PST=WHQ

「今貴方が出て行かせたのは何でしたか。」

B: ?e:, maja:=na:

INTJ 猫=YNQ2

「ああ、猫か。」

A: nu:=ga=tai, kubama=nu maja:=ja karadz̄i-g^wa:=n ju:t-i, teiŋ-g^wa:=n teite-o:-ibi:n=na:
 何=WHQ=POL.F (地名)=GEN 猫=TOP 髪-DIM=ADD 結う-SEQ 着物-DIM=ADD 着る-PROG-POL=YNQ2
 「何ですか、小浜の猫は髪の毛を結って、着物も着ているんですか！」(芝居, 570-572)

5.1.2.2.2 〈納得〉

話し手の発話の途中にあつて、話し手が心内で〈確認〉した内容をただ声にするような na: の文がある。形式上はまだ質問文のようだが、話し手の発話の途中にあるため情報の引きだし=《問いかけ性》はない。しがたつて、広い意味で〈納得〉を表す。

902) A: ?e:, ?anci ja: ?ure: nu: ja=ga. ?unu ?aka:=jo:
 INTJ CNJ FIL これ.TOP 何 COP=WHQ その 赤いの=IP
 「おい、じゃあこれは何か。その赤いの。」

B: kuri=na:=tai. kure: ?iteiteibinei: ja-ibi:n
 これ=YNQ2=POL.F これ.TOP イチチビンシー COP-POL
 「これですか。これはイチチビンシー²⁷³ですよ。」(実践, 21)

878') A: nu:gana=nu takk^wi: ja-micee:-ra=ja:
 何か=GEN 血筋 COP-HON-DUB=SFP
 「何かの血筋でしょうね。」

B: wan=na:. ?amagaka:=nu takk^wi: ja=sa
 1SG=YNQ2 天邪鬼=GEN 血筋 COP=SFP
 「俺か。天邪鬼の血筋さ。」(実践, 48) (用例 340, 560 と重複)

たとえ、発話の最後に用いられていたとしても、情報の引きだし=《問いかけ性》がない場合は、話し手の心内での〈確認〉を言語化しているだけである。

903) [義母 A と妻が帰って来る。夫 B が慌てて芸妓の女を外に出すが、今のは猫だと嘘をつく]

A: nama ?undzu=ga ?ndzate-i jar-asu-ta-ee: nu: ja-ibi:t-a=ga
 今 2SG.HON=NOM 出る-SEQ 遣る-CAUS-PST2.DIREV-NLZ.TOP 何 COP-POL-PST=WHQ
 「今貴方が出て行かせたのは何でしたか。」

B: ?e:, maja:=na:
 INTJ 猫=YNQ2
 「ああ、猫か。」

A: nu:=ga=tai, kubama=nu maja:=ja karadz̄i-g^wa:=n ju:t-i, teiŋ-g^wa:=n teite-o:-ibi:n=na:
 何=WHQ=POL.F (地名)=GEN 猫=TOP 髪-DIM=ADD 結う-SEQ 着物-DIM=ADD 着る-PROG-POL=YNQ2
 「何ですか、小浜の猫は髪の毛を結って、着物も着ているんですか！」(芝居, 570-572) (用例 901 と同文)

次の主語が二人称の na: の文は、(n)dina: という形で相手の発言から得た新しい情報を心内で確認し、それをそのまま表現する〈納得〉を表している。話し手の発話の途中にあつて《問いかけ性》はな

²⁷³ 『沖繩語辞典』によると、ビンシー(瓶水)とは、「酒を入れる錫製の器」「?ug^wan(願)・婚礼などに用いる」「赤紙で重ねて折り曲げたものでおおう」とある。しかし、現在、ビンシーといえは、一般的に祈願用の携帯木箱のことである。イチチとは何をさすのか、今のところ不明であるが、五重になっているのではないかと、という意見があった(調査協力者、面接調査, 2015年10月5日)。

い。《対象的な内容》は事前に共有されている。(n)di は先行する語や文が聞き手あるいは第三者からの伝聞情報であることを表す。伝聞情報をただ繰り返し述べて〈納得〉を表している。

904) A: wanne: nu:ɸa=nu ja-ibi:=sa=tai
 1SG.TOP (人名)=GEN COP-POL=SFP=POL.F
 「私は饒波の(者)です。」

B: ʔe:, nu:ɸa=nu=ndi=na:. nu:ɸa: watta: magara ja-eiga
 INTJ (人名)=GEN=QT=YNQ2 (人名).TOP 1PL.GEN 親戚 COP-ADVRS
 「ああ、饒波のってか。饒波はうちの親戚だが。」(実践, 21)

5.1.2.2.3 de:nna:の文

de:nna:の文は、新たに話し手が心内で〈確認〉したり〈判断〉したことをちょっとした感情の盛り上がりの表出を伴って述べる。《聞き手めあて》はなく、聞き手に対して強く訴えるというよりは、独り言のようにただ感情をもらすように述べる。

次の主語が二人称の de:nna:の文は、新たに話し手が心内で〈確認〉したり〈判断〉した聞き手のことを感情の盛り上がりの表出を伴って述べている。《聞き手めあて》はない。独り言のようにただ感情をもらすかのように述べているだけである。

905) A: ʔe:=tai
 VOC=POL.F
 「すみません。」
 B: ɸi:, nu: ja=ga
 はい 何 COP=WHQ
 「はい。何だ？」
 (声の主に注意を向ける)
ʔja:=n i:ka:gi=de:n=na:
 2SG=ADD 美人=COP2=YNQ2
 「お前も美人だな。」(実践, 47)

906) A: nu:=nu ʔateine:=ga
 何=GEN 商売=WHQ
 「何の商売か。」
 B: nu:ŋk^wi:n ʔut-a-i ko:t-a-i s-abi:=sa
 何もかも 売る-PST-INF 買う-PST-INF する-POL=SFP
 「何もかも売ったり買ったりしますよ。」
 A: nu:ŋk^wi:=ndi ʔi:-ne: nu:nu: ja=ga
 何もかも=QT 言う-CND 何々 COP=WHQ
 「何もかもと言ったら何々なのか。」
 B: nu:ŋk^wi:~no: nu:ŋk^wi:n ja-ibi:=sa
 何もかも.TOP 何もかも COP-POL=SFP
 「何もかもは何もかもですよ。」
 A: tu-i=n teikam-i=n nar-an ʔateo:du=de:n=na:
 取る-INF=ADD 掴む-INF=ADD POL-NEG 商人=COP2=YNQ2
 「掴みどころのない商人だな。」(実践, 39)

主語が三人称の **de:nna:**文でも、新たに話し手が心内で〈確認〉したり〈判断〉した第三者のことを感情の盛り上がりの表出を伴って述べている。《聞き手めあて》はない。ただ感情をもらすかのように述べているだけである。聞き手に伝えるというよりは、独話的に述べている。

907) [芝居の場面の始まり。在番が島を眺めている]

A: **cidz̄ikana cima=de:n=na:**

静かな 島=COP2=YNQ2

「静かな島であるな。」

B: **duku cidz̄ika=nati jumu-cikara:san-u na-ibir-an**

あまり 静か=で PEJ-寂しい-CSL なる-POL-NEG

「あまりに静かで非常に寂しくて仕方ありません。」(芝居, 536) (用例 337 と重複)

na:の文のモダリティの総まとめ

na:の文のモダリティは、以下のようにまとめられる。ただし、あらゆるタイプの na:の文を分析したわけではないので、あくまでも暫定的・試験的なまとめである。

表 45 na:の文が表せるモダリティ一覧

	《不確定性》 & 《問いかけ性》あり	なし
一人称	〈(柔らかい)質問〉(+驚き・意外)	〈驚き・意外〉 〈反語解釈〉 〈納得〉
二人称	〈(柔らかい)質問—聞き手の内的な一時的感情・状態・評価, 具体的動作等〉(+驚き・意外) 〈依頼〉(依頼形式を伴って)	〈驚き・意外〉 〈反語解釈〉(+非難) 〈納得〉 〈感情の表出〉 〈問い返し〉
三人称	〈(柔らかい)質問—第三者の《質・特性・状態・動作》〉(+驚き・意外)	〈驚き・意外〉 〈反語解釈〉 〈納得〉 〈感情の表出〉 〈問い返し〉

場面状況に合わせて様々に変化するので、最も典型的な na:の文のモダリティを決めるのは現段階では難しい。聞き手への《問いかけ性》があり、特に〈驚き〉のようなニュアンスも伴わず話し手にとって《不確か》なことを尋ねる場合はただの〈質問〉を表すが、多くは〈驚き〉のようなミラティブなニュアンスを伴って発せられる。

また、na:の文は《問いかけ性》や《不確定性》という質問文としての性質を失い、もはや質問文として機能していない文が多くみられる。このような文は、話し手の感情をもらしたり、つぶやいたりする叙事的な意味あいには派生している。na:の文はこのような叙事的な意味あいで用いられることが多いため、〈自問〉あるいは〈間接疑問〉といった記述が先行研究で多く見られる原因となったと考えられる。

i と na: の文の総まとめ

若干のニュアンスの違いはあるものの、〈質問〉として用いられる場合は i と na: の文の機能にほとんど違いはない。ただし、na: の文は〈驚き〉を伴う場面で多用される。また、na: の文の方がニュアンスとして聞き手に柔らかく伝わる。したがって、i の文は質問文としては無標の形であり、na: の文は有標の形とみなすことができる。

次の表は i と na: の文が表せるモダリティの一覧である。〈質問〉の機能は両方の形式でどの人称でも表せる。主語が一人称の i の文では、動作の実行の許可を求めたり、意志や勧誘の意味あいも表せる。また、二人称を主語にした i の文は、《働きかけ》が生じると〈思い出させる〉文となる。na: の文では、i の文に見られるような一人称文の《意志性》や《働きかけ》は生じない。繰り返すが、全体として〈驚き〉を伴う文が多く、叙述的な用法が豊富である。ただし、暫定的・試験的なものなので、詳細は今後の課題である。

表 46 i と na: の文が表せるモダリティー一覧

	不確定性&問いかけ性の有無	一人称	二人称	三人称
i の 文	あり	質問, 許可を求める, 申し出, 提案(勧誘)	質問, 依頼(依頼形式を伴って)	質問
	なし	意志, 反語解釈, 納得	思い出させる, 反語解釈, 非難, 納得, 驚き, 納得, 問い返し	反語解釈, 納得
na: の 文	あり	質問(+柔らかい&驚き)	質問(+柔らかい&驚き), 依頼(依頼形式を伴って)	質問(+柔らかい&驚き)
	なし	驚き, 反語解釈, 納得	驚き, 反語解釈, 非難, 納得, 感情の表出, 問い返し	驚き, 反語解釈, 納得, 感情の表出, 問い返し

5.1.3 raja: の文

5.1.3.1 概観

raja: の文は、質問文にあらわれて〈念押し的な真偽質問〉を表す²⁷⁴。話し手が直接確認できる事実から別の事象について判断するとき、その判断内容を叙述文でそのまま述べるのではなく、判断した内容が正しいかどうか、聞き手に念押し的な質問文として投げかける、というような文になる。判断した内容は、ほとんど正しいと話し手が決めてかかっている。決めてかかった態度のまま聞き手に問いかけて、正しさを明らかにしようとしている。

908) A: ?e:, ?anci ja: ?ure: nu: ja=ga. ?unu ?aka:=jo:

INTJ CNJ FIL これ.TOP 何 COP=WHQ その 赤い=IP

「おい、じゃあこれは何か。その赤いの。」

B: kuri=na:=tai. kure: ?iteifeibinei: ja-ibi:n

これ=YNQ2=POL.F これ.TOP イチチビンシー COP-POL

「これですか。これはイチチビンシーですよ。」

A: ?kacimun=du ja-ru=i. de:daka: ja-ra=ja:

昔物=FOC COP-ADN=YNQ 代高 COP-DUB=YNQ3

「古いものなのかい。高価なものだろうか？」

²⁷⁴ 奥田 (1984) の「念おし的なたずねる文」という用語およびその概念を参考にした。

B: u:u. so:be:mun=di ?j-abi:-tan

いえ 粗悪品=QT 言う-POL-PST2

「いいえ。安物と言っていました。」(実践, 21)

上記の用例では、話し手の見込みのような判断の正しさを明らかにしようとしているが、この場合、聞き手 B の u:u (いいえ) という否定的な返答からもわかるように、この話し手 A の見込みは正しくないということを表している。

間接確認を含む質問は, i/mi や na: の文にも見られるが, raja: の文は〈念押し的に尋ねる〉のである。話し手の中で何らかの判断がほぼ決まりかかっている、それを押しつけるような形で尋ねる。したがって、文脈によっては《押しつけがましき》が生じるだろう。

5.1.3.2 形態的特徴

raja: は、かりまた (2007) 等の従来の研究で ra 推量形と呼ばれる、機能的には主に〈疑い²⁷⁵〉を表す述語形式²⁷⁶に、終助辞の ja: (日本語の終助辞ネ相当形式) を後接させてつくる。名詞述語、形容詞述語、動詞述語のいずれでもあらわれる。ra 推量形は歴史的には推量形式であると考えられるため、日本語で同じ推量を表すダロウを用いて訳す。

909) ja-raja:	COP-raja:	そうだろう?
ma:sa-raja:	おいしい-raja:	おいしいだろう?
?iteu-raja:.	行く-raja:	行くだろう?

尚, raja: を述語に含む文の中には、話し手の〈疑い〉を表すものもある。ただし、そのような raja: の文ははまだ質問文になりきれていない。話し手の〈疑念〉を述るに留まっている。詳細は、疑い文を参照されたい。

5.1.3.3 raja: の文のモダリティ

raja: の文には、直接確認した事象に基づく話し手の間接確認による判断が差し込まれ、聞き手か第三者の事象について念押し的に尋ねる。特殊な場面を除いて話し手が自分自身のことについて推論することはないので、一人称を主語とすることはできない。

主語が二人称

二人称を主語にした raja: の文は、聞き手についての間接確認による判断内容が正しいかどうか念押し的に尋ねる文である。聞き手の現在のことについて尋ねる場合もあるし、聞き手の過去のことを尋ねる場合もある。聞き手の未来のことを尋ねる場合は、聞き手がその未来の動作を実行するかどうかあるいは実行しないかどうか、その〈意志を尋ねる〉文となる。

聞き手の現在のことを判断し問いかける

次の二人称を主語にした raja: の文の《対象的な内容》は、話し手の間接確認による判断である。直

²⁷⁵ 〈疑い〉とは、出来事への「判断が未成立なまま文として発話する」ものを指す(宮崎他, 2002, p. 187)。

²⁷⁶ 述語の n をとりさった形に ra を後接させてつくる(例: ?iteun → ?iteura)。

接確認できる事実(朝からずっと村巡りをしている等)から、聞き手は「聞き手は疲れている」というような見込みあるいは判断を下している。その判断が正しいと決めてかかった態度で念押し的に聞き手に問いかけてその正しさを確かめようとしている。

910) [一日中村巡りをした後で]

A: sari, gudze:bannume: teu:=ja muramigui=ja ?ussa e-imiso:te-i

INTJ.M 御在番様 今日=TOP 村巡り=TOP このくらいに する-HON-SEQ

「えー、御在番様。今日は村巡りはこのくらいになさって」

kuri=kara muraja:=nai ?utumum s-abir-a

これ=ABL ムラヤー=ALL お供 する-POL-INT

「これからムラヤー(村役場)までお供します。」

B: teu:=ja ?asa=kara=nu muramigui teikarit-a-ra=ja:

今日=TOP 朝=ABL=GEN 村巡り 疲れる-PST-DUB=YNQ3

「今日は朝からの村巡り疲れたらう？」

A: watta:=jaka gudze:bannume:=nu=ru ?uteikari ja-mice:n=te:

IPL=CMPR 御在番様=NOM=FOC お疲れ COP-HON=SFP

「わたしたちより御在番様のほうがお疲れでいらっしやるでしょうよ。」(芝居, 540) (用例 148 と同文)

次の用例を二人称文とするのは、《対象的な内容》が〈評価〉を表しているからである。つまり、料理そのものの〈記述〉ではなく、目の前の料理に対する聞き手の〈評価〉を尋ねている。その聞き手の〈評価〉は話し手が直接確認したことではない。直接確認したことに基づく話し手が決めてかかった判断(間接確認)が正しいかどうかを念押し的に問いかけて明らかにしようとしている。

911) [彼氏 A が彼女 B にご飯を作った。味には自信がある。きっと B もおいしいと思うに違いない]

A: tea:=ga. ma:sa-ra=ja:

どう=WHQ おいしい-DUB=YNQ3

「どうだ?おいしいだらう？」

B: ?u:. ?ippe: ma:sa-ibi:n. waη=jaka=n dzo:dzi ja-ibi:n.

はい とても おいしい-POL 1SG=CMPR=ADD 上手 COP-POL

「はい。とてもおいしいです。私よりも上手です。」(調査, 2016/5/30)

しかしながら、「明らかにしようとしている」とは言えないような raja: の文もある。例えば、次の用例では、確かに聞き手の気持ちを確認しようとい問いかけているニュアンスはあるのだが、ほとんど話し手が決めてかかった判断を聞き手に伝えているだけである。聞き手の気持ちや《特性》を押し量って述べることで〈思いやり〉だったり、逆にネガティブな内容を伝える場合は〈非難〉だったりという意味あいを付け加える。

912) ja:-g^wa:=nu ku:san-u²⁷⁷ guburi: nat-o:-ibi:n. ?iteidzirasa-mise:-ra=ja:

家-DIM=NOM 小さい-CSL ご無礼 なる-PROG-POL 窮屈だ-HON-DUB=DUB=YNQ3

「家が小さくて失礼しています。窮屈でいらっしやいますでしょう。」(音声「イチジラサン」)

²⁷⁷ 原文は ku:wanu だったが、意味があうように筆者が修正を加えた。

913) [看護師 A が患者 B に向かって]

A: t̄ea: ei-miso:t̄e-a=ga

どう する-HON-PST=WHQ

「どうなさいましたか。」

B: kurub-a:ni t̄einei wat-o:=sa

転ぶ-SEQ ひざ.ACC 割る-PROG=SFP.MIR

「転んでひざを傷めているよ。」

A: jami-mice:-ra=ja: eo:doku ce-i ?usagir-a

痛む-HON-DUB=YNQ3 消毒 する-SEQ BEN.HMB-INT

「痛むでしょう？ 消毒して差しあげよう。」(暮らし, 89) (用例 57, 580 と重複)

914) [帰宅した妻に。過去形が用いられているが、現在も継続している聞き手の状態を述べている]

nama=ru mudui-ru=i. utat-a-ra=ja:

今=FOC 戻る-ADN=YNQ 疲れる-PST-DUB=YNQ3

「今戻るのか。疲れただろう。」(芝居, 570)

915) A: ja:φunnu. kate:mun ja-mice:=sa

INTJ.F 変わり者 COP-HON=SFP

「ふん。変わり者でいらっしゃいますね。」

B: kate:muno: watta:=madi=te:

変わり者.TOP IPL=LIM=SFP

「変わり者は俺たち以外いないよ。」

A: nu:gana=nu takk^wi: ja-mice:-ra=ja:

何か=GEN 血筋 COP-HON-DUB=YNQ3

「何かの血筋でしょうね。」

B: wan=na:?. ?amagaka:=nu takk^wi: ja=sa

1SG=YNQ2 天邪鬼=GEN 血筋 COP=SFP

「俺か？天邪鬼の血筋さ。」(実践, 48) (用例 340, 342, 560, 878 と重複)

聞き手の過去のことを判断し問いかける

次に主語が二人称で事象が過去の raja: の文をみていく。過去の事象を表す二人称を主語にした raja: の文は、話し手の不確かな聞き手の過去の事象について、話し手が判断したことを念押し的に問いかけている。その過去の事象は過ぎ去ったことではあるが、話し手が直接確認したことではない。確認できる事実からあれこれ推測して下した判断(間接確認)である。

916) A: kunu inagu dateun=di d̄zino: jukai t̄eikat-a-ra=ja:

この 女.ACC 抱く=QT お金.TOP 相当 使う-PST-DUB=YNQ3

「この女を抱くと言ってお金は相当使ただろう？」

B: sammin=um nar-an ?atai t̄eikaj-abit-aŋ=ja:

計算=ADD POT-NEG 位 使う-POL-PST=SFP

「計算もできない位使いましたねえ。」(芝居, 1092-1094)

917) [お城に呼ばれて行った息子の帰りを待つ母親]

A: ?aja:=sai, mateikanti: ei-miso:t̄e-a-ra=ja:

母=POL.M 待ち兼ねる様 する-HON-PST-DUB=YNQ3

「母上、待ちかねていらしたでしょう。」

B: kissa=kara ʔja:=ga t̃eu:-ei=du nna mat̃eikanti: s-o:-eiga, ʔanei t̃eu:=nu
 さっき=ABL 2SG=NOM 来る-NLZ=FOC 皆 待ち兼ねる様 する-PROG-ADVRS CNJ 今日=GEN
 「さっきからお前が来るのを皆待ち兼ねていたが、それで今日の」
 ʔugueikukara=nu ʔujubidace: nu:ga nu: jat-a=ga
 お城=GEN お呼出.TOP 何=NOM 何 COP-PST=WHQ
 「お城からのお呼出しは何が何だったの？」(芝居, 834)

918) [亡くなった父にお世話になったと言って若い役人 B が訪ねてきて。A は娘で、C は母 (用例 78 とほぼ同文)]

A: ʔutea ʔusaga-mice:-bir-i

お茶.ACC 飲む.HON-HON-POL-IMP1

「お茶をお召し上がり下さい。」

B: niʔe:-de:biru. ja-ibi:-eiga, ʔattanni ju:gawai nat-i inagudatei=n²⁷⁸ cindo: ci-miso:t̃e-a-ra=ja:

有難う-POL COP-POL-ADVRS 急に 世変わり なる-SEQ 女達=ADD 心労 する-HON-PST-DUB=YNQ3

「有難うございます。ですけど、急に世変わりなって女達も苦勞してらしたでしょう。」(芝居, 1080)

次の聞き手の過去のことを問いかける raja: の文は、聞き手が目の前にいないという特殊な文脈であらわれている。あの世にいる亡くなった父に対してあたかも目の前にいるかのように語りかけている。父親は亡くなっているため、その真偽を直接確認することはできない。したがって、このようなケースでは文は独話的であり、話し手の〈疑い〉を述べる文に近くなる。

919) [芝居・多幸山。父親を殺したという者が名乗り出てきて、その時(仕方なく)ちょうだいしたという錢袋を何十年後かに息子の元に返す。そのときの息子の台詞]

kunu d̃zimbukuro: watta: su: muɲ=ja: su:, kuteisa-nee:t-a-ra=ja:

この 錢袋.TOP 1PL.GEN 父.GEN 物=SFP 父 悔しい-HON-PST-DUB=YNQ3

「この錢袋は俺達父さんの物だな。父さん、悔しかったらろう？」(芝居, 796)

過去の事象に対する判断の場合も、積極的な問いかけではなく、判断をただ問いかけるニュアンスを伴いながら述べているような場合、評価的な判断を述べる文と変わらない(次の用例は〈非難〉)。

561') i:ba: ja=sa. nama=ne: so: ʔitte-a-ra=ja:

いい折 COP=SFP 今=DAT.TOP 根性 入る-PST-DUB=YNQ3

「いい経験だよ。これで、思い知っただらう。」(儀間, 2000, 63)

562') [注意したのに、泥んこになって帰って来た子供に対して]

ja:, ja:, t̃eu=nu ʔi-ee: t̃eik-aɲ-kutu du: jamate-a-ra=ja:

INTJ INTJ 人=NOM 言う-NLZ.TOP 聞く-NEG-CSL 自分.ACC 痛める-PST-DUB=YNQ3

「ほら、な？人の言う事聞かないから怪我したんだらう？」(語遊「ヤー」2010/9/26, p. 13)

聞き手の未来のことを判断し問いかける

未来の事象については聞き手自身のことであるにしてもポテンシャルなことである。そのようなことを聞き手に問いかける raja: の文は、聞き手の意志を再度念を押すかたちで確かめるという文となる。ここでも話し手は判断についてほとんど決めてかかったような態度で問いかけている。文脈によって

²⁷⁸ 原文では=nu であったが、筆者が内容に合うように=n に修正した。

は、動作の実行を〈促す〉という意味あいも付け加える。

920) [海外旅行となると、いつも尻込みする友人に対して念を押す]

kundo: hawai r'oko: de:-mun. ?ja=n ?iteu-ra=ja:

今度=TOP ハワイ 旅行 COP2-FN.CSL 2SG=ADD 行く-DUB=YNQ3

「今度はハワイ旅行だもの。お前も行くだろう？」(語遊「ヤー」2010/9/26, p. 13)

聞き手の未来のポテンシャルな動作を否定的に raja: の文で差しだすことで、婉曲的に話し手の未来の動作を前もって〈阻止〉する働きをもつ。

921) [夫の浮気ではないかと心配する A。「夫が私の手をひいていながら、隣の女の人をじっと見ていた」という女 A に対して、女 B が「それはね…」と何か意見を言おうとした瞬間に A はその発言をさえぎって言う]

A: wan utu=nu kukuru=nu wassan=di=ga ?i-mice:-ra=n̄tei, wanne: eiwa ja-ibi:t-a=sa

1SG.GEN 夫=GEN 心=NOM 悪い=QT=FOC 言う-HON-DUB=QT 1SG.TOP 心配 COP-POL-PST=SFP.MIR

「私の夫の心が悪いとおっしゃるのかと、私は心配でしたの。」

?an=de: ?i-miso:r-an=da-ra=ja:=tai

そう=QT.TOP 言う-HON-NEG=FOC.ある-DUB=YNQ3=POL.F

「そうはおっしゃらないですわよねえ。」(実践, 18)

B: ?akkijo:i. ja:φunnu. ?ja:=ja kate:mun ja=sa. waŋ=ga d̄zo:i ?an ?in=na:

INTJ INTJ.F 2SG=TOP 不思議な人 COP=SFP 1SG=NOM まさか そう 言う=YNQ2

「あれまあ。かわいそうに。お前は困った人だね。私がまさかそう言うもんですか。」

ti:=nu=ru wassa-ru-munnu

手=NOM=FOC 悪い-ADN-FN

「手が悪いんですもの。」(実践, 18) (用例 70 および 899 と一部重複)

主語が三人称

三人称を主語とした raja: の文は、形式上三人称だが、聞き手の持ち物であったり、聞き手側に所属する人や聞き手に直接関わる事象等が主語(あるいは主体)となっている。ここでも話し手が決めてかかったような態度でもって、念押し的に問いかけている。

908') [A は品物が古そうにみえるので、高価なものだろうと考えている]

A: ?e:, ?anci ja: ?ure: nu: ja=ga. ?unu ?aka:=jo:

INTJ CNJ FIL これ.TOP 何 COP=WHQ その 赤いの=IP

「おい、じゃあこれは何か。その赤いの。」

B: kuri=na:=tai. kure: ?iteiteibinei: ja-ibi:n

これ=YNQ2=POL.F これ.TOP イチチビンシー COP-POL

「これですか。これはイチチビンシーですよ。」

A: ŋkaeimun=du ja-ru=i. de:daka: ja-ra=ja:

昔物=FOC COP-ADN=YNQ 代高 COP-DUB=YNQ3

「古いものなのかい。高価なものだろう？」

B: u:u:. so:be:mun=di ?j-abi:-tan

いえ 粗悪品=QT 言う-POL-PST2

「いいえ。安物とっていました。」(実践, 21)

922) [子供が急いで短刀を取ってくる]

?aja:=sai. kunu kugatana: ja-ibi:-ra=ja:

母=POL.M この 小刀 COP-POL-DUB=YNQ3

「お母さん, この小刀でしょう?」(芝居, 658)

923) [刀が旅人本人の物である証拠を見せてみろと言われて]

su:ku=ja:. kunu katana=nu teiriφa=kara guecin=nu tukuru=ηkai kidzi=nu teutukuru

証拠=SFP この 刀=GEN 切り羽=ABL 五寸=GEN 所=DAT 傷=NOM 一カ所

「証拠か。この刀の切り羽から五寸の所に傷が一カ所」

?a-ru hadzi. to:. taekamit-i n:d-i

ある-ADN INFR INTJ 確かめる-SEQ 見る-IMP1

「あるだろう。さあ, 確かめて見ろ。」(聞き手が確かめる)

?a-ra=ja:. ?uri=kara katana=nu teika=nakai ro.dzi=nu φuiteika=nu teik-a:tt-o:-ru hadzi

ある-DUB=YNQ3 それ=ABL 刀=GEN 柄=LOC 龍=GEN 紋様=NOM 使う-PASS-PROG-ADN INFR

「あるだろう?それから刀の柄に龍の紋様が使われているはず。」

to:; ?uri=made: n:te-i nd-e:

INTJ それ=LIM.TOP 見る-SEQ 見る-IMP2

「さあ, それまで見てみろ。」(芝居, 814) (用例 324, 752 と同文)

924) [ママ友同士の会話。子供の好き嫌いの話。話題はゴーヤー (苦瓜)]

A: tea: e-i kam-ate-o:=ga. teampuru: ei:-ne: kam-an=da-ra=ja:²⁷⁹

どう する-SEQ 食べる-CAUS-PROG=WHQ (料理名) する-CND 食べる-NEG=FOC.ある-DUB=YNQ3

「(ゴーヤーを)どうやって食べさせてる? チャンプルー(炒め物)にしたら食べないよね?」

B: ?i:, kam-an=sa:

うん 食べる-NEG=SFP.MON

「うん, 食べないねえ。」(調査, 2016/5/30)

925) [息子 A と父親 B の会話。カンナの使い方について]

A: ?oto:, kunu kannu: tea: e-i teikai=ga=sai

父 この 鉋 どう する-SEQ 使う=WHQ=POL.M

「お父さん, このカンナはどうやって使うの?」

B: da: kuma=ηkai ne:r-e:. teikaikata matcigat-o:=ee:. muru çig-ar-ant-a-ra=ja:

INTJ ここ=DAT よこす-IMP2 使い方 間違う-PROG=SFP 全然 削る-POT-NEG-PST-DUB=YNQ3

「どれ, こっちに寄せ。 (カンナを見る)使い方間違ってるじゃないか。全く削れなかっただろう?」

A: ?un. muru çig-ar-an

うん 全く 削る-POT-NEG

「うん, 全然削れない。」

B: kane-i=ru çidzun=do:. to: ?ungutuei e-e:=wa

こうする-SEQ=FOC 削る=SFP.ASS INTJ そのように SFP-IMP2=SFP

「こうして削るんだぞ。さあ, そのようにやってみろ。」

A: ?un. wakat-an

うん わかる-PST

「うん, わかった。」(調査, 2016/5/30)

²⁷⁹ kam-an=du ?a-ra=ja: (食べる-NEG=FOC ある(代動詞)-DUB=SFP) が収縮された形。述語の否定形に raja: が用いられる場合, ほとんど必ずこの形をとる。

フレーズとして固定化した *raja*: の文

次に, *raja*: の文のその他の諸特徴について述べる。まず, *raja*: の文には, ある特定の動詞とむすびついで常套句のように用いられる文がある。下の用例において, *wakato:raja*: (わかっているな) や *kakugoso:raja*: (覚悟しているな) は決まり文句のように頻繁に用いられている。聞き手の理解度や覚悟といった心理的態度について話し手が聞き手に念を押すかたちで確かめる場合に用いられる。

926) A: nu: jar-awa=n, nama=kara ʔanu inagu=ga²⁸⁰ kuma=ŋkai t̄ei:-ne: ʔi:ho:r-e:. wakat-o:-ra=ja:
 何 COP-CND=ADD 今=ABL あの 女=DAT ここ=DAT 来る-CND 追い払う-IMP2 わかる-PROG-DUB=YNQ3
 「何だろうが, 今からあの女がここに来たら追い払え。わかっているな？」

B: ʔu:, wakat-o:j-abi:n

はい わかる-PROG-POL

「はい, わかっています。」(芝居, 892)

927) A: kana:, t̄eu:d̄zu:tu munu ʔum-a:ε-i=jō:. wakat-o:-ra=ja:
 (人名) 強く もの 思う-CAUS-IMP1=SFP わかる-PROG-DUB=YNQ3
 「カナー, しかと分からせてやれよ。わかっているだろう？」

B: wakat-o:=sa

わかる-PROG=SFP.MIR

「わかっているわ。」(芝居, 692) (用例 62 と同文)

928) [相撲の稽古をしてみると言っ。相手は背丈は大きい弱いので優しく教える]

A: jaʔatte:ŋg^wa: mimig-i=jō:. wakat-o:-ra=ja:
 お手柔らかに しごく-IMP1=SFP わかる-PROG-DUB=YNQ3
 「お手柔らかにしごいてやれ。わかっているな？」

B: wakat-o:=sa

わかる-PROG=SFP.MIR

「わかっているさ。」(芝居, 696) (用例 63 と同文)

929) A: to: ni:εe:. d̄zid̄zo:=ja nu: jar-awa=n, ʔja: ʔuja kurute-a-ru mun ja-kutu
 INTJ 青年 事情=TOP 何 COP-CND=ADD 2SG.GEN 親.ACC 殺す-PST-ADN 者 COP-CSL
 「さあ, 若造。事情はどうであれ, お前の親を殺した者だから」

ʔin[o: s-aŋ=gutu ʔutte-i tur-i

遠慮 する-NEG=CSL 討つ-SEQ 取る-IMP1

「遠慮しないで討ち取れ。」

B: kakugo: s-o:-ra=ja:

覚悟.TOP する-PROG-DUB=YNQ3

「覚悟はしているな？」(芝居, 812)

930) A: ʔuʔusu: t̄ea: suga. eigu ʔuteituim=i
 叔父 どう する=WHQ すぐ 討ち取る=YNQ
 「叔父さん, どうする? すぐ討ち取るか。」

B: (中略) eigu ʔuteikurue-e:

すぐ 殺す-IMP2

「すぐ殺しなさい。」

C: ja=sa, ja=sa. kurue-e:, kurue-e:

COP=SFP COP=SFP 殺す-IMP2 殺す-IMP2

「そうだ, そうだ。殺せ, 殺せ。」

²⁸⁰ 原文は *inagu=ni* であるが, 内容に合うように修正した。

A: kakugo: s-o:-ra=ja:

覚悟.TOP する-PROG-DUB=YNQ3

「覚悟はしているな？」(芝居, 806-808)

次のような場面では, *jaraja*: が常套句として用いられる。聞き手が納得していない事実や事象を話し手の誘導により聞き手が肯定した場合に, その反応として「そうだろう?」のような意味あいを用いる。ただし, このような用いられ方の場合, 質問文としての意味あいはほとんどなく, あいづち程度の機能しか持たない。

931) [追い剥ぎ同士が兄弟ゲンカをしている]

A: tabinin ?uda:te-i d̄ziŋkani ?ubaitui-ru kunu eiguto:

旅人.ACC 脅す-SEQ 銭金.ACC 奪い取る-ADN この 仕事.TOP

「旅人を脅して銭金を奪い取るこの仕事は」

ta:=ga hadzimit-i ta:=ga nara:te-a=ga

誰=NOM 始める-SEQ 誰=NOM 教える-PST=WHQ

「誰が始めて誰が教えたか?!」

B: ?ure: ?ja:=ga=te:=ça:

それ.TOP お前=NOM=SFP=PEJ

「それはお前がだけど…」

A: ja-ra=ja: ja-gutu, duku ei:d̄za ei:d̄za=ndi ?ite-i, kusamunui:=ja su=nake:=ça:

COP-DUB=YNQ3 COP-CSL あまり 兄貴 兄貴=QT 言う-SEQ 生意気な言い方=TOP する=PROH=PEJ

「だろう? だから, あまり兄貴兄貴と言って, 調子ぶっこくんじゃねえよ!」(芝居, 750) (用例 335 と重複)

raja:の文のまとめ

raja:の文は, ほとんど決めてかかったような態度で, 直接確認できる事象からの間接確認という話し手の判断が正しいかどうかを念押し的に聞き手に問いかけて, 明らかにする文であることを示した。これを仮に間接確認の判断を含む〈念押し的な真偽質問〉の文と呼んだ。補充質問(疑問詞質問)ではあらわれない。二人称文であっても質問文としてほとんど機能していない, 叙事的な *raja*:の文は, 話し手が判断したことを問いかけるようなニュアンスで述べることで, 聞き手への〈思いやり〉や〈非難〉といった意味あいを表すこともわかった。*raja*:の文は, 他に焦点化接辞の *ga* を伴う〈疑い〉を表す文や, 「そうだろう?」のようなあいづちの用法等がある。

5.1.4 ra の文

直接的な〈真偽質問〉を表す場合, *i* や *na*: を伴った質問文が義務的であるが, これらの文を使わずに〈間接的な質問(indirect question)〉を行うこともできる。*ra* の文を使った〈間接的な質問〉もその一つである。疑問の対象を *ga* でとりたてて尋ねるのが特徴的である。*ra* の文による間接的な質問は, 仲原(2014)によれば, 「この問いかけは相手に詰問せず, やや押し量った柔らかな尋ね文となる」(p. 140)。また, 首里地区の複雑な社会状況(階級差等)にも触れ, *ra* の文による間接的な質問が首里方言において多用されるのは, このような複雑な社会と何らかの関係があるだろうと分析している(同上)。しかしながら, この *ra* による質問文は若い世代では用いられなくなってきている(同上)。

932) kunu jama=nu ?utēe: eiteina?udun=ga jaj-abi:-ra²⁸¹

この 森=GEN 奥.TOP (地名)=FOC COP-POL-DUB

「この森の奥は識名園でしょうか。」(沖文, 78)

933) ?uisudzi=nu ?uju:dzu=ga jaj-abi:-ra

お急ぎ=GEN ご用事=FOC COP-POL-DUB

「お急ぎのご用事でしょうか。」(沖文, 78)

188') ?undzu=nu hatake: eiteigakai=ga jaj-abi:-ra

2SG.HON=GEN 畑.TOP 湿地=FOC COP-POL-DUB

「貴方の畑は湿地でしょうか。」(沖文, 78)

間接質問文において婉曲的なニュアンスを表すのは、述語の語彙的な意味によっても行われる。例えば、次の用例では、*jutasan*(よろしい)という単語が述語に用いられているが、これは *cimun*(済む・よい)よりも丁寧なニュアンスを持つ単語である。したがって、そのような単語をあえて選択して用いることでも婉曲的な意味あいの付け加えを実現している。

934) A: eitsumon=nu ?ar-a: ?ite-i=ma:ni

質問=NOM ある-CND 言う-SEQ=みる.IMP

「質問があれば言ってみなさい。」

B: wanne: sutumitimun kam-an-jo:i eiken ?uki:=ga te-o:-ibi:-kutu suba-g^{wa}: ti:tee:

1SG.TOP 朝食.ACC 食べる-NEG-SEQ 試験.ACC 受ける-PUR 来る-PROG-POL-CSL そば-DIM 一つ.TOP

「私は朝飯を食べないで試験を受けに来ましたので、そば一つだけ」

kad-i k-u:=naja:=ndi ?umut-o:-ibi:-eiga jutasaga ?a-ibi:-ra

食べる-SEQ 来る-INT=SFP=QT 思う-PROG-POL-ADVR よろしい=FOCある-POL-DUB

「食べて来ようかと思っていますが、よろしいでしょうか。」

A: ?e:, ni:ee:. ?uφe: kanget-i munu ?ir-i=jo:. kuma: ma:=ndi ?umut-o:=ga.

INTJ 若者 少し.TOP 考える-SEQ もの 言う-IMP1=SFP ここ.TOP どこ=QT 思う-PROG=WHQ

eikendzo:=du jan=do:ja: (用例 704 と重複)

試験場=FOC COP=SPF

「おい、若造。少しは考えてもの言えよ。ここはどこだと思ってるか。試験場だぞ。」(実践, 47)

935) [腕相撲をしようと言って]

A: kamidza:=ga ?udi kaki:-ei nudzud-o:n=di=na:. kamidza: ikiga=ndi ?i-ru munno:

(人名)=NOM 腕.ACC かける-NLZ.ACC 望む-PROG=QT=YNQ2 (人名) 男=QT 言う-ADN 者.TOP

「亀寿が腕相撲をするのを望んでるとな。亀寿、男と言う者は」

?unu ?atai=ja ?idzire: ?ari-wa=dunairu

その くらい=TOP 意地.TOP ある-CND=OBLG

「そのぐらいは意地はないとな。」

B: ?anee: ?udi kakit-i jutasaga ?a-ibi:-ra

それでは 腕 かける-SEQ よろしい=FOC ある-POL-DUB

「それでは腕相撲してもよろしいでしょうか。」

A: jutasa-kutu madzi kakit-i nd-i

よろしい-CSL まず かける-SEQ 見る-IMP1

「よいからまずやってみろ。」(芝居, 692) (用例 201, 441 と重複)

²⁸¹ *jajabi:ra* は古風な言い方で、今の首里方言では、*jaibi:ra* という言い方が普通である。

5.1.5 gajaの文

gajaは〈真偽質問〉としても用いられる。gajaは、基本的には話し手の〈疑い〉を表す形式だが、話し手の〈疑い〉を聞き手を目の前にして述べることで、しばしば婉曲的な質問文として機能する。

936) A: ?aie:, nama=madi harit-o:t-a-ru-mun, ?ami φui-gisan-u

INTJ 今=LIM 晴れる-PROG-PST-ADN-FN 雨 降る-DIREV-MIR

「あたら、今まで晴れていたのに雨降りそうだなあ。」

tēa: s-abi:=gaja:. eintakumun ?itto:tē-abi:=gaja:

どう する-POL=YNQ3 洗濯物.ACC 入れて置く-POL=YNQ3

「どうしましょうか。洗濯物を入れておきましょうか。」

B: eimu=sa. wa:=ga n:tēo:tēu-kutu ?ja:=ja ko:imun e-i:ga ?ndz-i k-u:=wa

済む=SFP 私=NOM 見ておく-CSL 2SG=TOP 買い物 する-PUR 行く-SEQ 来る-IMP=SFP

「大丈夫。俺が見ておくからお前は買い物しに行行って来い。」(リア, 19) (用例 172 と同文)

937) A: ?amma:, bira=tu tēiribira=ndi ?i-ee: junumun=|u ja=gaja:

お母さん ビラ=COM チリビラ=QT 言う-NLZ.TOP 同じ物=FOC COP=YNQ3

「お母さん、ビラとチリビラと言うのは同じ物かしら？」

B: ?aran=do:. bira=ndi ?i-ee: negi, tēiribira: nira ja=sa

違う=SFP.ASS ビラ=QT 言う-NLZ.TOP 葱 チリビラ.TOP 蕪 COP=SFP

「違うよ。ビラと言うのは葱、チリビラは蕪だよ。」(リア, 12) (用例 74 と同文)

938) A: nu:=ga. ?itta: jattei:=ja ?ire:φidzi=nu ne:ran-eiga, ei:mi:=ja ?ik-an tēimue:=ru ja=gaja:

何=WHQ 2PL.GEN 兄=TOP 返事=NOM ない-ADVRS 清明祭=TOP 行く-NEG つもり=FOC COP=YNQ3

「何だ？兄ちゃんは返事がないが、清明祭²⁸²は行かないつもりなのかなあ？」

B: ?ane: ?a-ibir-an=do:. namasatēi φidzi=nu ?at-i, ?iteun=di ?ite-o:-ibi:n=do:

そうでは COP-POL-NEG=SFP.ASS 今さっき 返事=NOM ある-SEQ 行く=QT 言う-PROG-POL=SFP.ASS

「そうではありませんよ。今さっき返事があって、行くと言っていますよ。」(リア, 18)

5.2 補充質問文

補充質問文は、疑問詞を伴い、事象の具体的な不明点について聞き手に尋ねる文である。gaによる補充質問文が基本であるが、間接的な補充質問文として、ra と gajaの文も用いられる。

5.2.1 gaの文

gaの文は、補充質問文のなかで最も典型的なタイプの文である。何、どこ、なぜ、誰、どう等の疑問詞と共に起し、補充質問文を形づくる。疑問詞を波線で示す。

939) A: kunu ?ijo: nu:=ndi-ru ?iju ja=ga

この 魚=TOP 何=QT-ADN 魚 COP=WHQ

「この魚は何という魚か。」

B: kure: ?irabutea:=ndi ?jun

これ.TOP (魚名)=QT 言う

「これはイラブチャー(あおぶだい)と言う。」(暮らし, 82)

940) A: suba=ηkai ?a-ru ?ijo: nu:=ndi ?i=ga

側=DAT ある-ADN 魚=TOP 何=QT 言う=WHQ

²⁸² 一種のお墓参りの事。旧暦の2月後半から3月頃に沖縄地方で行われる年中行事。

「そばにある魚は何と言うか。」

B: gurukun=di ?jun

(魚名)=QT 言う

「グルクン(たかさご)と言う。」(暮らし, 82)

941) [民話. 貧乏な独り身の青年になぜか何度もご馳走を運んで来る人がいて, こっそり隠れて誰が持って来るのかを待つ青年の家に一人の女がやって来たので青年が言う]

?ja:=ja nanimun ja=ga. nu:n̄tei wannĩkai kunujo:na kutu su=ga

2SG=TOP 何者 COP=WHQ なぜ 1SG.DAT このような 事.ACC する=WHQ

「お前は何者か。どうして私にこのような事をするか。」(大沖 35, 39-40)

942) A: sari, ?uming^wanume:

INTJ.M お嬢様

「あのですね, お嬢様。」

B: tari. na: ?uming^wa=ndi ?ite-e: k^wi-miso:n=nake:. nu:=ga ja-ra hadzikasa-ibi:-eiga

INTJ.F FIL お嬢様=QT 言う-SEQ.TOP BEN-HON=PROH 何=FOC COP-DUB 恥ずかしい-POL-ADVRS

「あの, もうお嬢様と言っては下されますな。何だか恥ずかしいですわ。」

A: nu:=nu hadzikasa-ibi:=ga

何=NOM 恥ずかしい-POL=WHQ

「何が恥ずかしいのですか。」(芝居, 1088) (用例 230 と一部重複, 802 と同文)

943) nu:=ndi: i:. nama nu:=ndi ?ite-a=ga. na: teuke:n ?ite-i=ma:ni

何=QT EQ 今 何=QT 言う-PST=WHQ もう 一回 言う-SEQ=見る.IMP

「何だと? 今何と言ったか? もう一回言ってみろ!」(語遊「ヘンディ」2010/6/13, p. 15) (用例 757 と同文)

944) A: ?itta:=ja nu: s-o:=ga

2PL=TOP 何.ACC する-PROG=WHQ

「お前達, 何をしているのか?」

B: teiburu migurate-o:-ibi:n

頭.ACC 巡らす-PROG-POL

「考えを巡らせています!」(猿, 4)

945) ta:=ga ?an ?i-ta=ga

誰=NOM そう 言う-PST2.DIREV=WHQ

「誰がそう言っていたか?」(語遊「イチャン・イタン」2010/10/10, p. 11)

946) ?e:=tai. ?undzo:, ta:=tu munu ?ite-o:=ga=tai

INTJ=POL.F 2SG.HON.TOP 誰=COM もの 言う-PROG=WHQ=POL.F

「ねえ, 貴方, 誰と話しているのですか?」(猿, 2)

947) [王様の臣下 A とお姫様のお供 B とお姫様 C の会話. B と C が王様の見舞いにやって来る]

A: ta: ja-ibi:=ga

誰 COP-POL=WHQ

「誰ですか?」

B: niraikanai=nu kuni=kara gudziraosama=nu ?umime: ei:-ga jucirij-abit-an

(地名)=GEN 国=ABL (人名)=GEN お見舞い する-PUR 参る-POL-PST

「ニライカナイの国からグジラ王様のお見舞いをしに参りました。」(中略)

gudziraosama=nu ?ambe:=ja tea: ja-mice:-bi:=ga

(人名)=GEN 按配=TOP どう COP-HON-POL=WHQ

「グジラ王様のご体調はいかががございましょうか。」(猿, 7) (用例 494 と重複)

5.2.2 ra の文

ra の文は間接的な〈補充質問〉の文でも用いられる。ここでも、疑問の対象が ga による焦点化を受ける。しかしながら、この ra による間接質問文は若い世代では用いられなくなってきていて、しばしば先の ga の文に置き換えられる（仲原, 2014, p. 140）。

948) [聞き手が庭で芋を育てているので、あいさつ代わりに芋の育ち具合を尋ねる]

?mmo: tea:=ga ja-ibi:-ra
芋.TOP どう=FOC COP-POL-DUB

「芋はいかがでしょうか。」(全国 2, 140)

949) mandzamo:=ndi juttukuru=ja teanguto:ru tukuru=ga ?jaj-abi:-ra

(地名)=QT 言う所=TOP どのような 所=FOC COP-POL-DUB

「万座毛と言う所はどのような所でしょうか。」(沖文, 78)

950) A: ta: ji:=ga ?jaj-abi:-ra

誰.GEN 絵=FOC COP-POL-DUB

「誰の画でしょうか。」

B: bunteimi:=nu φudi jaj-abi:n

(人名)=GEN 筆 COP-POL

「文徴明の筆です。」(沖文, 79)

5.2.3 gaja の文

gaja は、婉曲的な意味あいをもった補充質問文にも用いられる。

951) A: ?aja:=tai. kuri=kara ?atu, watta:=ja teangutu: nat-i ?ite-abi:=gaja:

母.CH=POL これ=ABL 後 IPL=TOP どのように なる-SEQ 行く-POL=DUB

「母上。これから後、私達はどのようになって行きますでしょうか。」

B: ?an ja=saja: teangutu=ga nai-ra

そう COP=SPF どのように=FOC なる-DUB

「そうだねえ。どのようになるやら。」(芝居, 1074)

952) A: ?e:=tai. teu:=nu ju:bano: nu: s-abi:=gaja:

INTJ=POL.F 今日=GEN 夕飯.TOP 何 する-POL=WHQ

「貴方、今日の夕飯は何にしましょうか？」

B: nu: jat-i=n eimu=sa

何 COP-SEQ=ADD 済む=SPF

「何でもいいよ。」(リア, 17)

953) [文句ばかりで手伝おうとしない A に何か不満があるのか B が尋ねると]

A: nu: φusuku=n ne:-ibiran

何 不足=ADD ない-POL

「何の不満もありません。」

B: ?anee:, φe:kuna: ?umani: tiganē: e-e:

CNJ 早く 姉 手伝い する-IMP2

「じゃあ、早く姉さんの手伝いをしろ。」

A: ?u: ma: kateimir-e: jutas-aibi:=gaja:

はい どこ.ACC 捕まえる-CND よろしい-POL=DUB

「はい。どこを捕まえればよろしいでしょうか。」(実践, 38) (用例 691, 840 と重複)

954) [動悸を訴える受験者 A と試験官 B の会話。いつから動悸しているのか尋ねる B に対して A が返答する]

A: ʔundzu=ga ʔitte-i mence:-ei=tu madzo:ŋ=kara

2SG.HON=NOM 入る-SEQ 来る.HON-NLZ=COM 同時=ABL

「貴方が入って来たと同時に。」

B: ʔance: eiken=nu ʔuwat-i, waŋ=ga kuma=kara ʔndzit-i ʔik-e: no:i=sa

CNJ 試験=NOM 終わる-SEQ 1SG=NOM ここ=ABL 出る-SEQ 行く-CND 治る=SFP

「それじゃあ試験が終わって、俺がここから出て行けば治るさ。」

A: ja-ibi:=gaja:

COP-POL=DUB

「そうですかねえ。」

B: ja=sa. ʔar-an=di ʔumui-ra: ja:=kai ʔik-e:

COP=SFP COP-NEG=QT 思う-CND 家=ALL 行く-IMP2

「そう。じゃないと思うなら家に行け。」

A: eikeno: tea: na-ibi:=gaja:

試験.TOP どう なる-POL=DUB

「試験はどうなりますでしょうか？」

B: na: teuke:n k-u:=wa. ʔatcaŋasa

もう 一回 来る-IMP1=SFP 明日の朝

「もう一回来い。明日の朝。」

A: nu:=ga nu:ntei=sai

何=NOM なぜ=POL.M

「どうしてですか？」(実践, 46) (用例 139, 490, 722 と重複)

955) A: d̄zitee: kannu:na hanaci=nu ʔat-i=ru ja-ibi:-eiga

実.TOP 大切な 話=NOM ある-SEQ=FOC COP-POL-ADVRS

「実は大切な話があるのですが。」

B: nu:gutu ja-ibi:=gaja:

何事 COP-POL=YNQ3

「何事でしょうか？」

A: sari, ʔuming^wanume:

INTJ.M お嬢様

「あのですね、お嬢様。」

B: tari. na: ʔuming^wa=ndi ʔite-e: k^wi-miso:n=nake:. nu:=ga ja-ra hadzikasa-ibi:-eiga

INTJ.F FIL お嬢様=QT 言う-SEQ.TOP BEN-HON=PROH 何=FOC COP-DUB 恥ずかしい-POL-ADVRS

「あの、もうお嬢様と言っては下さいますな。何だか恥ずかしいですわ。」

A: nu:=nu hadzikasa-ibi:=ga

何=NOM 恥ずかしい-POL=WHQ

「何が恥ずかしいのですか。」(芝居, 1088) (用例 230 と同文, 802 および 942 と一部重複)

5.3 その他の質問文

5.3.1 否定質問文

否定質問文は、〈真偽質問〉も〈補充質問〉も表せる。本研究では否定質問文が表せるモダリティについての分析が不十分であるため、意味の記述は行わない。次に示すような i の文による否定質問の形式上の違いについてだけ述べるに留めておく。

否定質問形式が作る「ではないか(じゃないか)」「のではないか(んじゃないか)」相当形式には、形づくりの上で次の通り二種類ある。形式上「ではないか(じゃないか)」と「のではないか(んじゃないか)」の区別はない。

ʔit̃e-a-e: s-an=i
 言う-PST-INF.TOP する-NEG=YNQ
 「言ったじゃないか/言ったんじゃないか」
 ʔit̃e-a-no: ʔar-an=i
 言う-PST-IND.TOP COP-NEG=YNQ
 「言ったじゃないか/言ったんじゃないか」

調査協力者の内省によれば、どちらの文も同じ意味を伝えている。違いは、前者は柔らかい土着的な言い方で、後者は直接的で荒っぽく平民的な言い方だと言う²⁸³。したがって、次の内容はどちらの文でも言い表すことができる。

956) [ママ友同士の会話。子供の好き嫌いの話。話題はゴーヤー（苦瓜）]

A: t̃ea: e-i kam-at̃e-o:=ga. t̃eampuru: ei:-ne: kam-an-e: s-an=i
 どう する-SEQ 食べる-CAUS-PROG=WHQ (料理名) する-CND 食べる-NEG-INF.TOP する-NEG=YNQ
 「(ゴーヤーを) どうやって食べさせてる? チャンプルー(炒め物) にしたら 食べないんじゃない?」
 B: ʔi:, kam-an=sa:
 うん 食べる-NEG=SFP.MON
 「うん、食べないねえ。」(調査, 2016/5/30)

957) [ママ友同士の会話。子供の好き嫌いの話。話題はゴーヤー（苦瓜）]

A: t̃ea: e-i kam-at̃e-o:=ga. t̃eampuru: ei:-ne: kam-an-o: ʔar-an=i
 どう する-SEQ 食べる-CAUS-PROG=WHQ (料理名) する-CND 食べる-NEG-TOP COP-NEG=YNQ
 「(ゴーヤーを) どうやって食べさせてる? チャンプルー(炒め物) にしたら 食べないんじゃない?」
 B: ʔi:, kam-an=sa:
 うん 食べる-NEG=SFP.MON
 「うん、食べないねえ。」(調査, 2016/5/30)

5.3.2 問い返し質問文

〈問い返し〉を表す文には、(1)「相手のはなしが聞きとりにくかったため問い返す」場合と、(2)「相手の話しに驚いて思わず問い返す」場合がある（日本語記述文法研究会, 2003, p. 48）。

次の用例は、(2)の「相手のはなしに驚いて思わず問い返した」場合に *mi* の文が用いられている。したがって、*mi* はミラティヴィティの機能も持ちあわせているが、使用場面や〈問い返し〉という機能に付随するプラグマティカルな機能であろう。また、このような〈驚き〉を表す問い返しの文は、話し手の驚きの表出であるため《問いかけ性》はない。

958) A: ʔakito:na:. ʔja:=ja ʔe:sat̃ei=n d̃zo:d̃zi nat-i ʔirumaei:mun de:n=na:
 INTJ 2SG=TOP 挨拶=ADD 上手 なる-SEQ 不思議なもの COP2=MIR
 「あれまあ。お前は挨拶も上手になって不思議なもんだね。」

²⁸³ ただし、断言するには研究不足は否めないため、今後の課題である。

ʔja:=ja na: ʔikutei nat-a=ga
 2SG=TOP もう いくつ なる-PST=WHQ
 「お前はもういくつになったのか。」

B: d̄zu:hatei nat-o:-ibi:n=sai
 十八 なる-PROG-POL=POL.M
 「18 になります²⁸⁴。」

A: kune:da=madi ʔaja:=jo:, ʔaja:=jo:, ee-i ʔat̄teu-ta-ru-munnu. ʔe: d̄zu:hatei nat-o:m=i
 こないだ=LIM 母=VOC 母=VOC する-SEQ 歩く-PST2-ADN-CSL INTJ 十八 なる-PROG=YNQ
 「こないだまでお母さん、お母さん、して歩いていたのに。まあ 18 になってるの。」(実践, 25)

相手の直前の発言に驚いて、発言の直後、その発言をそのまま繰り返してもう一度問いかけるような場面では、(n)dina:の文が〈問い返し〉として働く。(n)di は引用を表す助辞で、na:はミラティブな意味あいを表す質問形式である。話し手の驚きを伝える側面が強いので《問いかけ性》はない。

959) A: wanne: gute:=nu jo:san-u na-ibir-an=sa:
 1SG.TOP 力=NOM 弱い-CSL POT-POL-NEG=SFP
 「私は力が弱くてできませんよ。」

B: ʔuφina.nu gute: s-o:t-i jo:san=di=na:
 こんなに 力のある様 する-PROG-SEQ 弱い=QT=YNQ2
 「こんな力のある体つきで弱いだって?」(実践, 38) (用例 688 と一部重複)

960) A: kuramutu=ŋkai ʔund̄zu ʔatit-i sui=kara gud̄zo:=nu t̄e-o:-ibi:-eiga
 (地名)=DAT 2SG.HON あてる-SEQ 首里=ABL 御状=NOM 来る-PROG-POL-ADVRS
 「蔵元に貴方宛てで首里から御状が来ていますが。」

B: ʔi:, sui=kara gud̄zo:=ndi=na:
 INTJ 首里=ABL 御状=QT=YNQ2
 「えーっ! 首里から御状だって?」(芝居, 574)

あるいは、相手の発言をそのまま繰り返すのではなく、相手の発言と同じ内容を別の表現を使って問い返す次のような〈換言〉の例もある。場面によっては〈驚き〉のニュアンスを伴う。

961) [夫マサンルーを思い続け、首里に帰る着物まで織ってくれた妻ビルーに]

A: ʔja: einasake: ʔit̄ci=madi=n wacir-ar-an
 2SG.GEN 情.TOP いつ=LIM=ADD 忘れる-POL-NEG
 「お前の情けはいつまでも忘れない。」

B: satunuei, wanne: ʔund̄zu=nu nasaki ʔukit-i mimutei nat-o:-ibi:n
 (人名) 1SG.TOP 2SG.HON=GEN 情.ACC 受ける-SEQ 身持ち なる-PROG-POL
 「里之子、私は貴方の情けを受けてみごもりました (lit. 身持ちなっています)。」

A: karata=nu kawat-o:n=|i=na:
 体=NOM 変わる-PROG=QT=YNQ2
 「妊娠したとな (lit. 体が変わったとな)。」

B: ʔmmari:-ru kk^wa tea: s-abi:=gaja:
 生まれる 子 どう する-POL=DUB

²⁸⁴ 直訳は「なっています」であるが、意識した。

「生まれる子どもしましょう。」(芝居, 580-582)

または、文末の母音あるいは子音を延ばしながら、波をうつイントネーションで表現する。

962) [納得がいかなそうに言う。予想していなかった軽い驚きが末尾にあらわれている]

çakuen n:↘↗↘↗

百円 EQ

「百円だつてえ？」(儀間, 1996, 44)

963) ma:=kai: i:↘↗↘↗

どこ=ALL EQ

「どこにだつてえ？」(儀間, 1996, 44)

964) ma:ko: ne:nt-an: n:↘↗↘↗

おいしく.TOP ない-PST EQ

「おいしくなかつただつてえ？」(儀間, 1996, 44)

965) A: t̃eu: kad̃ziri kunu ja:=kara ?nd̃ziti?ik-e:

今日 限り この 家=ABL 出て行く-IMP2

「今日限りこの家から出ていきなさい。」

B: ?ikana nu:jar-awa=n t̃eu: kad̃ziri ?nd̃ziti?ik-i i:↘↗↘↗ t̃eimu mut̃t̃eimun=nu ?anci=n

いくら 何 COP-CND=ADD 今日 限り 出て行く-IMP1 EQ 心 持つ者=NOM そんな風に=ADD

「いくら何でも今日限り出ていけですって！心あるものがそんな風な」

mun=nu ?ir-ari:n=na:. nisannitee: kange:r-ate-i k^{wi}-nso:r-e:

もの=NOM 言う-POT=YNQ2 二・三日.TOP 考える-CAUS-SEQ BEN-HON-IMP2

「言葉が言えますか。二・三日考えさせてくださいな。」

A: nar-an, nar-an

POT-NEG POT-NEG

「だめだ, だめだ。」(芝居, 718)

966) [沖縄芝居・多幸山。追剥 A が旅人 B に向かって言う]

A: φe:re:=ni s-att-an=di ?i-ciga, wa: mi:=kara n:dz-i:ne: ?ja:=ga=du

追剥=DAT する-PASS-PST=QT 言う-ADVRS 1SG.GEN 目=ABL 見る-CND 2SG=NOM=FOC

「追剥にやられたと言うが、私の目から見たらお前の方が」

φe:re:=nati mi:n=de:=ça:

追剥=に 見える=SFP.NASS=PEJ

「追剥に見えるぞ。」

B: nu: jan n:. wa:=ga φe:re: e:↘↗↘↗

何 COP EQ 1SG=NOM 追剥 EQ

「何だつて！俺が追剥だと?!」(芝居, 772) (用例 364 と重複)

967) A: ka:gi=ndi ?i:-ne: watta:=madi=ja:

容姿=QT 言う-CND 1PL=LIM=SFP

「容姿と言ったら俺の右に出るものはいないよな。」

B: nu:=ndi: i:↘↗↘↗ war-a:s-anj-k-e:. ?ja:=ja jugura-ka:gi:=du jan=do:ja: (用例 566 と重複)

何=QT EQ 笑う-CAUS-NEG=IMP2 2SG=TOP 汚れ-顔=FOC COP=SFP

「何だと?! 笑わせるな。お前なんか汚れ顔だわ！」(語遊「ユグラーカーギー」2010/4/25, p. 13)

968) eiŋ^watei=ni=ru n̄u:gaku s-a-eiga daigako: ?i:na jamit-an=di i:↘↗↘↗

新月=DAT=FOC 入学 する-PST-ADVRS 大学.TOP もう やめる-PST=QT EQ

「4月に入学したのに大学はもうやめたんだつて?!」(語遊「イーナ」2010/12/26, p. 18)

969) ʔari=tu ʔo:in=di: i:ɳʌʌʌ de:d̥zi ja=ssa: eigu kurus-ari:n=te: (用例 154 と同文)

3SG=COM 喧嘩する=QT EQ 大変な事 COP=SFP.MON すぐ 殴り飛ばす-PASS=SFP

「あいつと喧嘩するって？やばいなあ。すぐ張り倒されるよ。」(語遊「デージナトーン」2010/8/8, p. 21)

(1)の「相手のはなしが聞きとりにくかったため問い返す」場合も、文末で波をうつようなイントネーションを伴って表す。

970) nu: i:ɳʌʌʌ

何 EQ

「何だって？」(調査, 2015/7/23)

971) [仕事で那覇に行って来るという父 A]

A: na:ɸa=kai ʔnd̥ziku:ri-wa=rujaru, wanne:

那覇=ALL 行って来る-CND=OBLG 私.TOP

「那覇に行って来ないといけない、私は。」

B: ʔoto:san, na:ɸa=kai mence:-bi:n n:ɳʌʌʌ

お父さん 那覇=ALL 行く.HON-POL EQ

「お父さん、那覇にいらっしゃるんですって？」

A: ʔn:. na: t̥e:u:=ja d̥ziɸi ʔnd̥ziku:r-an=to:naran-eiga

うん FIL 今日=TOP ぜひ 行って来る-NEG=OBLG-ADVRS

「うん。もう今日は必ず行ってこないといけないが。」(日放, 280-281) (用例 372, 416, 720 と重複)

第5章 「質問のモダリティ」まとめ

真偽質問文には, *i/mi* と *na:* という形式が主に用いられる。若干ニュアンスの違いはあるものの、〈真偽質問〉として働く場合、意味的に違いはなかった。焦点化助辞 *du* を伴い、話し手の疑いあるいは見当のようなものを示しながら問いかけるような文もあった。特に, *na:* の文ではそのような用例が多く見受けられた。

また, *na:* の文は *i* の文と比べて柔らかい響きを伴って、〈驚き〉や〈意外〉といったミラティブな意味あいを含ませながら問いかける場合に用いられることが多かった。そのような *na:* の文が《問いかけ性》を失って、ただ話し手の〈驚き〉や〈意外〉といった感情をただ伝えるような叙述的な用法を持つ *na:* の文もあった。そのような場合は、話し手の疑いや判断が *du* でとりたてられることがない。

質問文にあらわれる *raja:* の文は、直接確認に基づいた間接確認の判断を含む〈念押し的な真偽質問〉を表す。そのような *raja:* の文の《対象的な内容》には、ほとんど話し手が決めてかかった間接確認の判断が差し込まれる。そのような判断を念押し的に聞き手に問いかけて判断の正しさを確かめる文となる。

補充質問文は主に *ga* を用いて表す。その他, *ra* や *gaja:* による間接質問文や〈問い返し〉のような質問文もある。どの形式が用いられていようとも、《問いかけ性》がみられない場面では、質問文ではなく、〈疑い〉や〈驚き〉のような叙述的な意味あいを表す。述語に質式が用いられているからといって、必ずしも質問文になるわけではない。《問いかけ性》や《不確定性》といった文法的要素を分析することで、質問文かどうか、どのようなタイプの質問文なのかを明らかにすることができる。

尚、本研究では〈選択質問〉に関しては扱うことができなかったため、選択質問文の詳細な分析および記述は今後の課題である。

第 III 部 本研究の総まとめ

ここまで宮崎他(2002)のモダリティ分類の枠組みを用いて、〈叙述・実行・質問〉のモダリティを中心に首里方言のモダリティ体系全体の記述を行った。第 III 部では、第 6 章 1 節で各章のまとめを行い、それぞれの章で明らかになったことを思い起こしながら、2 節で全体を通したまとめを行い本研究を総括する。全体を踏まえた上で最後の 3 節で、本研究の第二の目的である首里方言のモダリティ体系の特徴について、特に日本語と比較した場合の共通点および相違点について特筆すべき点を挙げながら、具体的に述べる。

6.1 各章のまとめ

第 1 章では、本研究におけるモダリティとは何かについて論じた。ひとまずモダリティという用語を「現実世界に対する認識を通して、話し手が聞き手に何を伝えるのか、どのような目的を発話によってはたそうとしているのかを表現している、文レベルの働き」と規定し、宮崎他(2002)に準じて〈叙述・実行・質問〉というモダリティ全体の枠組みを用いることを説明した。また、これらの規定や枠組みを土台としながら、差し支えがない程度に Palmer(2001)等の他のモダリティ研究も活用することを述べた。

第 2 章 1 節では、本研究における「琉球語首里方言」とは何かについて論じた。當山(2015)を参考にして言語学的な用語としての琉球諸語の下位カテゴリーである「首里階層方言」と「首里地域方言」を首里方言とし、研究の対象とすることを述べた。また、モダリティ分析上差し支えがないと判断される場合に限り、「首里那覇社会方言」や隣接方言(屋取方言・芝居の方言)も使用することを述べた。

第 2 章 2 節では、首里方言の音声(音韻)・形態・語彙的な特徴について特筆すべきことを述べた。音声(音韻)的特徴として、グロッタルストップ(声門破裂音)およびグラジュアルビギニング(ゆるやかな声たて)の対立があること、形態的特徴として否定形の連体形や中止形は形が変わらないこと、語彙的特徴として na:dziki sun(名付けをする=名付ける)のような「名詞+sun(する)」の形を持つ述語が非常に多いこと等を取り立てて述べた。

第 3 章では、叙述のモダリティについて論じた。先行研究の枠組みに準じて、おおかた認識のモダリティと評価のモダリティのふたつに分類して記述した。しかし、希求のモダリティに関しては、先行研究での記述がないため、どちらにも含めずに記述を行なった。意志のモダリティに関しても、先行研究では実行のモダリティあるいは勧誘文と併せて分析・記述されることが多かったが、〈意志〉という話し手内部の判断を聞き手に伝えるという観点から叙述のモダリティに含め、さらに、認識および評価のモダリティのどちらにも含めずに記述を行なった。

叙述のモダリティの分析に関する本研究での特徴は、〈記述〉の文と〈評価〉の文について扱ったことである。〈記述〉の文は、「父は外出しました」のような話し手が〈確認〉したことをそのまま描写し、聞き手に述べ伝える文である。〈評価〉の文は、「父はとても親切です」のような話し手が〈評価〉したことを聞き手に述べ伝える文である。実際の〈はなしあい〉の場面ではそのような文を終助辞を付加して伝えることが多い。終助辞 do:は聞き手に向かって主張するような《聞き手めあて》を明示する。終助辞 sa は聞き手に向けてというよりも、話し手の発言なり主張なりを述べるとき感情の変化を文に添える。終助辞 de:の文の話し手の主張は聞き手に向かってはいるが、婉曲的で控えめな伝達となる。

都市方言であり階層方言でもある首里方言では、他の沖縄諸方言と比べても、聞き手への配慮、言

葉の選択をより意識しながら文を述べ伝える。場面状況に応じて、その時々聞き手との関係の仕方によって、聞き手に対する配慮の仕方にも変わるため、用いられる終助辞もさまざまである。したがって、今回分析を行った *do:*, *sa*, *de:*, *te:*以外の終助辞についても詳しく調べる必要がある。

表 47 終助辞 *do:*, *sa*, *de:*, *te:*の文の比較まとめ

	<i>do:</i>	<i>sa</i>	<i>de:</i>	<i>te:</i>
文のタイプ	叙述文	叙述文	叙述文	叙述文
共有情報	×	×	×	×
独りごと	×	×	×	×
聞き手めあて	○	×	△(弱)	×
主張の強さ	強い	強い	控えめ	控えめ
〈記述〉	○	○	○	×

第4章では、動作主体に必ず聞き手を含み、動作の実行を働きかけたり、仕向けたりする文を「実行のモダリティ」として分類し論じた。動作主体に聞き手だけでなく、話し手も含む点で、勧誘文を命令文・依頼文・禁止文と区別した。つまり、勧誘文は、話し手と聞き手が動作のいない手となり、共同で、あるいは同時に動作を実行する文であった。そのような意味あいには、勧誘形だけが表しているわけではなく、ときには、断定形なり命令形なりを述語にもつ文において、つまり、述語の形式に関わらず動作のいない手が一・二人称の場合、〈勧誘〉を表せることが明らかになった。

このことは、命令文や依頼文、さらに禁止文でも全く同じ結果であった。つまり、述語の形式に関わらず、動作主体が二人称で、聞き手に動作の実行を〈命令〉する文は命令文となり、聞き手に〈依頼〉する文は依頼文となり、聞き手に〈禁止〉する文は禁止文となることがわかった。

逆に、命令形を述語にもつ文であっても、動作主体が聞き手のみでない場合は、〈命令〉を表さず、異なるモダリティを表すようになることも明らかになった。また、〈実行〉の文は、未実現の事象を述べる文でしかその役割を果たせないため、すでに起こってしまったことに対して述べる場合は、〈非難〉という評価的な意味あいへ移行することがあった。したがって、人称性や事象の実現・未実現といった文法的要素を抽出しながら分析することが重要であることを主張した。表 37 を再掲する。

表 37 *ce:*, *ei*, *eijo:*, *wa* 形式のモダリティの諸相

強制	利益性	機能	形式	付加された機能	形式	
強 ↑ ↓ 弱	話し手利益あり 聞き手不利益	〈強制〉	<i>ce:</i> , <i>ei</i> (古), <i>wa</i>	+ 〈罵倒〉	<i>ei k^we:wa</i>	
		〈要求〉	〈指示 1〉	<i>ce:</i> , <i>ei</i> (古), <i>wa</i>	+ 〈同意=念押し〉	<i>ce:ja:</i>
			〈違反矯正〉	厳しく <i>ce:</i> やさしく <i>eijo:</i>	—	—
			〈指示 2〉	<i>eijo:</i>	+ 〈同意=念押し〉	<i>eijo:ja:</i>
	聞き手利益 ニュートラル	〈丁寧な要求・促し〉	<i>eimiso:re:</i> <i>eimiso:rijo:</i> <i>eimice:bire:</i> <i>eimice:biri</i> <i>eimice:birijo:</i>	—	—	
—	—	〈招待〉	<i>eijo:</i>	—	—	

	話し手・聞き手 利益あり	〈勧誘〉	ee: ²⁸⁵	—	—	
	話し手利益 ニュートラル	聞き手利益 あり	〈勧め〉	ee: eimiso:re: eijo: eimiso:rijo: (eimice:bire:) (eimice:birijo:)	—	—
			〈許可〉	主に ee: eimiso:re: eimice:bire:	—	—
	(出来事終了後)	〈非難〉	厳しく ee: やさしく eijo:	—	—	

第5章では、質問のモダリティのうち、主に真偽質問文と補充質問文について論じた。〈真偽質問〉は主に i の文と na: の文が表していた。若干のニュアンスの違いはあるものの、〈質問〉として用いられる場合は i と na: の文の機能にほとんど違いはなかった。話し手の疑いを取り立てて〈質問〉する場合は、疑い部分を取りたて助辞 du を用いて尋ねることを用例を用いながら分析・記述した。ただし、na: の文は〈驚き〉を伴う場面で多用され、ニュアンスとして聞き手に柔らかく伝わることを述べた。したがって、i の文は質問文としては無標の形であり、na: の文は有標の形とみなすことができると結論づけた。

〈質問〉の機能は i および na: の両方の形式でどの人称でも表せる。主語が一人称(あるいは一・二人称)の i の文では、動作の実行の許可を求めたり、意志や勧誘の意味あいも表せる。また、二人称を主語にした i の文は、《働きかけ》が生じると〈思い出させる〉文となる。na: の文では、i の文に見られるような一人称文の《意志性》や二人称文(あるいは一・二人称文)の《働きかけ》は生じない。繰り返すが、全体として〈驚き〉を伴う文が多く、叙事的な用法が豊富である。

また、その他の質問文として〈念押し的な真偽質問〉を表す raja: の文について詳しく分析・記述した。raja: の文の《対象的な内容》には、ほとんど話し手が決めてかかった間接確認の判断が差込まれていて、そのような判断を聞き手に押しつけながら念押しの尋ねるような質問文であった。つまり、日本語の「あなた、行くでしょう?」のような質問文と類似のものであった。

補充質問文は主に ga を用いて表す。その他、ra や gaja: による間接質問文や〈問い返し〉のような質問文もあった。どの形式が用いられていようとも、《問いかけ性》がみられない場面では、質問文ではなく、〈疑い〉や〈驚き〉のような叙事的な意味あいを表していた。述語に質問形式が用いられているからといって、必ずしも質問文になるわけではないことを明らかにした。《問いかけ性》や《不確定性》といった文法的要素を分析することで、質問文かどうか、どのようなタイプの質問文なのかを明らかにすることができることを主張した。

表 48 〈質問〉に関わる形式を含む文が表せるモダリティ一覧

不確定性&問い かけ性の有無	一人称	二人称	三人称
あり	真偽質問, 許可を求め る, 申し出, 提案(勧誘)	真偽質問, 依頼(依頼形式を伴って)	真偽質問

²⁸⁵ 勧誘の文は用例が二例しかなく、eijo: 形式等も用いられる可能性がある。その詳細については今後の課題である。

iの文	なし	意志, 反語解釈, 納得	思い出させる, 反語解釈, 非難, 納得, 驚き, 納得, 問い返し	反語解釈, 納得
na:の文	あり	真偽質問(+柔らかい&驚き)	真偽質問(+柔らかい&驚き), 依頼(依頼形式を伴って)	真偽質問(+柔らかい&驚き)
	なし	驚き, 反語解釈, 納得	驚き, 反語解釈, 非難, 納得, 感情の表出, 問い返し	驚き, 反語解釈, 納得, 感情の表出, 問い返し
raja:の文	あり	念押し的な質問	念押し的な質問	念押し的な質問
	不確定性あり 問いかけ性なし	疑い(raの形で可)	疑い(一・二人称で可)	疑い
gaの文	あり	補充質問	補充質問	補充質問
	不確定性あり 問いかけ性なし	(不明)	疑い	疑い
	なし	反語解釈	反語解釈, 驚き	反語解釈, 驚き
raの文	あり	動作の実行の許可を求める婉曲的な真偽質問	(不明)	婉曲的な真偽質問, 婉曲的な補充質問
	不確定性あり 問いかけ性なし	疑い(独話的)	疑い(引用節で可, 独話的)	疑い(独話的)
	なし	(不明)	(不明)	反語解釈
gaja:の文	あり	動作の実行の許可を求める婉曲的な真偽質問	(不明)	婉曲的な真偽質問, 婉曲的な補充質問
	不確定性あり 問いかけ性なし	疑い(対話的)	疑い(対話的)	疑い(対話的)

6.2 全体のまとめ

全体を通して見えてきたものは、述語の持つ語彙的・文法的意味だけでなく、主語と述語の関係あるいは文全体の《対象的な内容》が文のモダリティを決めていた。例えば、未実現の動作の実行の〈意志〉を表すのは、意志形を述語に持つ文だけが注目されがちであるが、断定形を述語に持つ文が一人称文であらわれて、非過去形のかたちで話し手の未来の動作を差しだすならば、〈意志〉を表すようになる(次頁 f)。また、主語が聞き手を含む一・二人称の文で意志形が用いられると、その文は〈勧誘〉を表すようになる(次頁 f, g, h)。主語が二人称の評価文は、聞き手に訴えながら述べるような場面では、聞き手への《働きかけ》が生じて、命令文のような働きをする(次頁 h)。逆に、命令文や依頼文のような実行文が《働きかけ》を失うような場面では、話し手の〈願い〉や〈祈り〉といった意味あいを表すようになる(次頁 t)。

つまり、用いられる形式に関わらず、全体として《対象的な内容》が未実現の動作を差しだすなら、一人称を主語とする文では、《意志性》や《待ち望み性》が押しだされ、意味的に意志文に近くなる(下記 f)。二人称を主語とする文では、《働きかけ》が生じて、命令文のようになる(次頁 g, h)。三人称を主語とする文は、第三者の事象や出来事について話し手の〈確認〉を通した〈記述〉なり〈評価〉なり〈判断〉なりを聞き手にただ述べ伝える。

6.2.1 叙述文

叙述文に関して特筆すべきこととして以下の(a)~(u)が挙げられる。

- (a) 話し手が〈確認〉した現在あるいは過去の事象をそのまま述べる → 〈記述〉
- (b) 話し手の〈確認〉を通して、ものや事象の〈評価〉を述べる → 〈評価〉
- (c) 〈記述・評価〉に《聞き手めあて》を付け加える → 終助辞 *do:* が付く
- (d) 〈記述・評価〉を《聞き手めあて》なしに述べる → 終助辞 *sa* が付く
- (e) 〈記述・評価〉を控えめに述べ伝える → 終助辞 *de:* が付く
- (f) 主語が一人称の未来の事象を伝える → 《待ち望み》が生じて動作の実行の意向を示す
- (g) 主語が二人称の〈記述〉を訴える → 《働きかけ》が生じて動作を仕向ける
- (h) 主語が二人称の〈評価〉を訴える → 《働きかけ》が生じて動作を仕向ける
- (i) 上のような聞き手への《働きかけ》を強める → 終助辞 *do:* が付く
- (j) 実現可能な未来のポテンシャルな事象を述べる → 〈推量(間接確認)〉
- (k) 痕跡等に基づいたポテンシャルな事象を述べる → 〈推定〉
- (l) 間接確認の事象をいきって述べる → 〈推論を含む確信的断定〉
- (m) 実際には起こらなかった過去のポテンシャルな事象を述べる → 〈反事実仮想〉
- (n) 話し手の想像上の事象・出来事を独り言のようにつぶやく → 〈疑い〉
- (o) 終助辞 *ee:* を伴って、聞き手が忘れていた事象を思い出させる → 〈思い出させる〉
- (p) 終助辞 *ee:(ja:)* を伴って、話の前置きを述べる → 〈前提〉
- (q) レアルな事象同士を説明的・論理的に結びつけて述べる → 〈説明〉, 終助辞 *te:* が付く
- (r) 発話時に沸き起こった瞬間的な感情や驚きや気づきを述べる → 〈感嘆〉
- (s) 聞き手の意向が示されている場面で命令する → 〈許可〉
- (t) 話し手がコントロールできない実行文 → 〈願い〉や〈祈り〉
- (u) 終助辞 *te:* を伴って成り行き的な話し手の未実現の動作を述べる → 〈成り行き的な意志〉

6.2.2 実行文

実行文では、常に聞き手を主語あるいは動作主体に含んでいて、聞き手に対して未実現の動作の実現を仕向ける。話し手も動作のいない手に含む場合は〈勧誘〉となる。したがって、先に述べたように、述語に勧誘形や命令形が用いられていたとしても、動作主体が意志を持たないような場面や事象がすでに起こってしまったような場面(既実現・非実現)では、文は《働きかけ》を失い、もはや実行文ではなくなる。また、実行文では、話し手と聞き手との関係が形式のあらわれ方に深く関わってくる。聞き手が目上か目下か対等か、男性か女性か、社会的地位があるかないか、親しい間柄かどうか、といったことが直接的に形式のあらわれ方の違いに反映される。叙述文や質問文でも同じことが言えるが、実行文は聞き手に動作の実行を〈仕向ける〉という特徴から、聞き手配慮をとくに意識して述べられる。あるいは、動作主体が二人称の動作の実行を〈仕向ける〉ような叙述文においても聞き手への配慮を意識しながら伝えられる。

6.2.2 質問文

質問文は、話し手の認識のあり方と文脈のさまざまに左右されやすい。聞き手から情報を聞き出すまで全く判断も検討もつかない状況では典型的な〈質問〉を表すが、話し手の認識として何らかの〈疑い〉を持って問いかけるような〈質問〉もある。その場合、話し手の疑い部分をとりたて助辞でとりたてる。さらに、ほとんど決めかかった間接確認による話し手の判断を聞き手に押しつけるように問いかける〈念押し的な質問〉等、さまざまなタイプの質問文がある。

質問文、あるいは質問形式を述語に含む文は、感嘆文や疑い文、さらには命令文や勧誘文にまでその意味あいを広げることができる。《問いかけ性》を失ってしまった質問文はもはや〈質問〉というモダリティを表すことはなくなり、例えば、文が話し手の直接知覚した信じられない・受け入れがたい事象を差し出すならば、質問形式を述語に含む文は〈驚き・意外〉という意味あいを表すようになる。二人称を動作主体として動作の実行を〈仕向ける〉ような文は、述語が質問形式を含んだ文であったとしても命令文となる。一・二人称を動作主体として聞き手を話し手の動作に引き込むような文は述語が質問形式を含んだ文であったとしても勧誘文となる。ここでも、述語の形式よりも文の《対象的な内容》が何を表しているのかがモダリティの決定に直接的に反映している。

それから、質問文といえ、従来の研究で「確認要求」と呼ばれてきた文の中には、実際には質問文であったり、叙述文であったりが混在していたことが思い出される。日本語では「確認要求」とされてきた文の述語が推量形式だったり、質問形式だったり、イントネーションの上下によって意味の区別が行われていたり、非常に複雑な構造を持っていたために、分析が不明瞭なきらいがあった。首里方言では、幸いにも〈思い出させる〉文や〈前提〉の文が形式上叙述文であることがはっきりしていたため、最初からすなりこれらの文を叙述文に含めて分析することができたし、そのような周辺の叙述文を分析することで、叙述文や質問文のさまざまを発見することができた。しかしながら、全体としてまだまだ分析が不十分な部分が多いため、さらなる用例の収集に努め、詳細を明らかにしていきたい。

6.3 首里方言のモダリティの特徴

最後に、日本語と比較した場合、首里方言に特徴的なモダリティのあり方を叙述・実行・質問文ごとに分けて述べる。

6.3.1 叙述文

言語系統的にも近い関係にある首里方言と日本語は、そのモダリティ体系も非常によく似ている。しかしながら、叙述文に関してはいくつか異なった特徴を見せることがある。特筆すべきこととして以下の(a)~(g)が挙げられる。

- (a) 推量形式が〈前提〉や〈思い出させる〉文になれない
- (b) 否定質問形式が〈前提〉の文になれない
- (c) 〈前提〉や〈思い出させる〉文には終助辞が用いられてその機能を果たす
- (d) 聞き手に強く訴える *do:*の文と控えめに述べる *de:*の文の対立がある
- (e) 断定形を述語に含む文が持ち主の受け身を伴って *malefactive* な〈意志〉の文となる
- (f) 話し手の間接確認の判断や評価を伝える文に終助辞 *te:*が用いられて〈説明〉を表す
- (g) 話し手の発話時における瞬間的な感情や判断を述べる文に終助辞 *sa* が用いられる

(a)日本語では「ほら、あそこにあるだろう？↑(前提)」や「ほら、あそこにあるだろう↓(思い出させる)」のような推量形式を含む文が上昇あるいは下降イントネーションを補助的に伴って〈前提〉や〈思い出させる〉文になれるが、首里方言ではなれない。

(b)また、日本語では「ほら、あそこにあるじゃない？↑(前提)」のように否定質問形式を含む文が〈前提〉を表せるが、首里方言では〈思い出させる〉文にはなれるが、〈前提〉を表すことはできない。

(c) 〈前提〉や〈思い出させる〉文には、述語の断定形の短縮形語幹(述語の末尾の n を取り去った形)に終助辞 *ce:*, *ce:ja:*, *saja:* などの終助辞が用いられて文全体がそのような機能を果たす。

(d) 首里地域は社会的階層が複雑であるため、首里方言は他の沖縄諸方言に比べて、敬語体系も複雑であり、対人的なモダリティが発達している。したがって、他の沖縄諸方言で多用される *do:* は聞き手に強く訴える際に用いられるが、それ以外では *de:* や *te:* 等、聞き手への伝わり方を配慮した工夫がなされる。しかしながら、このような使い分けは時代の移り変わりとともに衰退しているのが現状である。

(e) 「*tikko: magirari:n=do:* (手をへし折るぞ, lit. 手曲げられるぞ)」のような文が相当するが、日本語では能動文で訳されることが多いのが特徴的である。首里方言あるいは多くの沖縄諸方言で聞き手に不利益または被害が及ぶことを伝える場面では、このように受け身表現を伴って聞き手の視点で伝えられることが多い。話し手が動作のにない手でない場面ではもちろん、話し手が動作のにない手であるにも関わらず受け身表現を用いて、聞き手不利益の可能性を伝えるのは特徴的である。

(f) 終助辞 *te:* は先行する文脈や場面と結びつけて、一連の出来事を説明的・論理的に述べ立てる場合にあらわれる終助辞である。多くは話し手の間接確認による判断や評価を伝える場合に用いられる。このような終助辞は日本語にはなく、「のだよ・のだろうよ」等、様々な形式を組み合わせる複合的に表されるところを首里方言では *te:* ひとつ付け加えることで表すことができる(厳密には、*te:* を含む文全体がそのような意味を実現している)。

(g) 終助辞 *sa* は日本語の終助辞「サ」とは似ても似つかない形式である。もちろん、意味的に重複している部分があるので、終助辞 *sa* の文を「サ」で訳しても差し支えがない場合もあるだろう。しかし、そのような場合はむしろまれであって、ほとんどの場合はそうではない。終助辞 *sa* は瞬間的な感情や判断をもらすような場面で用いられるため、日本語の「サ」の文のような《当然性》はなくてもよい。

6.3.2 実行文

実行文に関しては、叙述文程の違いは見られず、日本語と非常によく似ている。例えば、意志形と勧誘形が同一形式である。また、実行文が《働きかけ》を失って叙述的な意味あい用いられたり、逆に主語を二人称にした評価形式や質問形式を含む文が実行文に派生したりするさまは、日本語と同じである。さらに、命令文が〈勧め〉や〈許可〉を表すことができる点でも共通している。いくつかの異なる点を挙げるとすれば次の(h)~(k)がある。

- (h) 「食べようか」のような意志形に質問形式が後接した形がない
- (i) 「食べて」のような第二中止形が命令文になれない
- (j) *kamaŋke:* (食べるな, lit. 食べないでおけ) という命令文が〈禁止〉を表す
- (k) 「食べてみろ」のような「してみろ」の命令形がふた通りある

(h) *mutcabi:m=i* (持ちましようか, lit. 持ちますか) のような質問形式を用いて〈申し出〉を表す場合でも、首里方言では断定形が用いられる。

(i) 首里方言では、末尾が *e:* 終わりの *ce:* 形式と *i* 終わりに終助辞 *jo:* が付いた *ei:jo:* 形式が命令形として主に用いられる。どちらも中止形由来ではない。*ei:jo:* 形式の方が聞き手に配慮する場面で用いられやすいため、*ce:* 形式が命令形としては無標の形式で、*ei:jo:* 形式を有標の形式とみなすことができる。

(j) 首里方言では、「食べるな」にほぼ相当する *kamuna* という形も命令形としてよく用いられるが、

他に *kamunake:* や *kamaŋke:* のような述語の禁止あるいは否定形に *ke:* (おけ) という命令形が後接した命令文が頻繁に用いられる。したがって、〈禁止〉というモダリティを〈命令〉という意味から独立して分析するのがよい。

(k) 動詞 *n:dzun* (見る) の命令形を用いた *n(:)ri*, *n(:)re:* と、おそらく動詞「見る」の祖形から派生して来て終助辞的な形式に変化した *ma:*, *ma:ni* というふたつの形が「してみろ」を表す。どちらも動詞の第二中止形接続である。本研究では十分に分析を行うことができなかったが、現時点では、*ma:*, *ma:ni* の方がやや挑発的・挑戦的に命令する場合に用いられやすい。しかし、詳細な分析は今後の課題である。

6.3.3 質問文

日本語の質問文は、(1)「か」を伴うかどうか、(2)上昇イントネーションを伴うかどうか、(3)「の」を伴うかどうか、は重要な分析要素となるが、首里方言ではその様相がだいぶ異なる。首里方言の質問文は質問形式を伴わない形が〈質問〉というモダリティを表すことは原則できない(下記 m)。また、イントネーションが〈質問〉というモダリティに関与することもなく(下記 n)、日本語でいう「の」もあらわれない(下記 o)。その代わり *i*, *na:*, *raja:*, *gaja:*, *ga*, *ra* といった質問形式が豊富に存在している(下記 l)。したがって、どの質問形式が用いられて、どのような意味を表しているかの分析が重要となる。また、日本語と同様《問いかけ性》および《不確定性》の有無によっては、〈質問〉以外の機能を表す場合もあるし、〈驚き〉や〈蔑み〉等の副次的な意味あい有無も重要な分析要素となる。首里方言の質問文の特徴をまとめると以下の(l)~(r)が挙げられる。

- (l) 質問形式がモダリティごとに分化していて豊富である
- (m) 〈質問〉というモダリティを表すには質問形式の使用が必須である
- (n) イントネーションは〈質問〉のモダリティに関与しない
- (o) 形式上「(食べる)か?」「(食べる)のか?」の対立がない
- (p) 〈真偽質問〉を表す主な形式に *i/mi* と *na:* のふたつある
- (q) 〈真偽質問〉を表す *i* は終助辞由来だが、現在は活用語尾となって述語全体が活用する
- (r) 〈真偽質問〉を表す形式と〈補充質問〉を表す形式が異なる

(l)~(o)に関しては先述した通りである。

(p) 事象の是非を問う〈真偽質問〉は、*i/mi* の文が無標の形式として、*na:* の文が有標の形式として存在する。どちらも〈質問〉を表す場合は機能的に違いがないが、*na:* の文の方が〈驚き〉のような副次的な意味あいを伴いやすく、しばしば柔らかいニュアンスを伴って伝えられる。

(q) 述語の肯定・非過去形では、*kamumi* のように末尾が *mi* であらわれるが、肯定・過去形では *kadi:* というように末尾が *i* となり、否定・非過去形では、*kamani* と末尾が *ni* になる。したがって、現在首里方言では活用語尾としてふるまう。

(r) 日本語では「これ、食べる?」「何食べる?」とでは疑問詞の有無だけで〈真偽質問〉と〈補充質問〉の区別がなされるが、首里方言では *kuri kamum=i* と *nu: kamu=ga* のように述語にあらわれる質問形式によっても区別しなければならない。ここでは、*i* と *ga* という形式が対立している。

今後の課題

ここでは、項目ごとに今後の課題を箇条書きにして示す。以下に挙げるもの以外にも課題はあるだろうが、とりあえず現在思いつく限りを列挙して示しておく。

・叙述文

- (a) 終助辞の付かない断定形で言い切る文のモダリティの分析および分類・記述
- (b) 二人称を主語にした〈記述〉を表す文の用例の収集および分析・記述
- (c) $\phi u: \hat{d}zi$, $guto:n$, $gisan$, $ne: sun$ 等を述語に持つ、広い意味としての周辺的な推量文の用例の収集および分析・記述
- (d) 複合的にあらわれる〈説明〉というモダリティのさまざまな文における分析・記述
- (e) 《事実確認》の事象を差しだし〈説明〉を表す $te:$ の文の用例の収集
- (f) 過去形が用いられる $sandare: naran$ および $eiwadu jaru$ の文の用例の収集および分析・記述
- (g) $sawadu$ が条件節となれるかの調査および用例の収集
- (h) $eiwadu jaru$ と $sawadu jaru$ の間に特別な違いはあるかの調査および用例の収集
- (i) $ba:i/basui$ の文の用例の収集(特に非過去形)
- (j) 意志形 + 終助辞 na の文の用例の収集

・実行文

- (k) $eiyo:$ 形式や $ei miso:rijo:$ 形式の〈許可〉の文の用例の収集
- (l) $ei miche:biri$ 形式を含む文の用例の収集
- (m) 依頼文の用例の収集と、さらなる詳細な分析および分類・記述
- (n) 禁止文の用例の収集と、さらなる詳細な分析および分類・記述
- (o) 「してみろ」の文の用例の収集と、さらなる詳細な分析および分類・記述
- (p) 命令形式を述語に含む文が〈勧誘〉を表す場合の用例の収集

・質問文

- (q) あらゆるタイプの i と $na:$ の文のイントネーションの分析
- (r) あらゆるタイプの i と $na:$ の文のモダリティの分析および分類・記述
- (s) 選択質問文の用例の収集, 分析, および記述
- (t) 否定質問文の用例の収集, 分析, および記述
- (u) 二種類ある否定質問形式(「ではないか(じゃないか)」「のではないか(んじゃないか)」相当形式)の用例の収集, 分析, および記述

・全体に関わる

- (v) 終助辞を含む文のモダリティの詳細な分析(特に $do:$, sa , $de:$, $te:$ 以外の終助辞)
- (w) さまざまな文のイントネーションの詳細な分析
- (x) 首里地域方言についての実態調査

・モダリティ以外

- (y) 個々の母音および子音(あるいは音節)の音響学的な分析

- (z) さまざまな文のイントネーションの詳細な分析
(α) 「名詞 + する」の動詞の詳細な記述(あるいは首里方言の単語作りの特徴について)

さいごに

このように首里「方言」といっても、他の言語と同じように複雑かつ緻密なモダリティ体系を持っている。本研究は、琉球諸語で初めてモダリティという観点からひとつの言語(方言)のモダリティ体系全体の分析・記述を試みた研究として今後のモダリティ研究に寄与することができる。いまだ分析が不十分であることは否めないが、本研究が一番に目指したことは、どの言語を分析したとしても通用する普遍的な文法的概念を用いて分析することで、異なる言語形式が用いられていたとしても、他の言語と比較・対照が可能となることである。そして、本研究ではその目的をきちんと果たすことができた。

参考／引用文献²⁸⁶

- 新垣 友子(2006). 『旧正と大晦日の思出』における敬語表現の研究 伊豆山敦子(編) 放送録音テープによる琉球・首里方言—服部四郎博士遺品—(pp.74-89) 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- Arakaki, T. (2013). *Evidentials in Ryukyuan: The Shuri variety of Luchuan*. Leiden, Netherland: Brill.
- Arakaki, T. (2016). A comparative study of the evidential/epistemic markers: hazi in Ryukyuan, hazu in Uchinaa-Yamatuguchi, and hazu in Japanese. 沖縄キリスト教学院大学論集, 12, 15-27.
- Chafe, W. (2000). Epistemic modality in English. *Epistemic modality and related phenomena: The case of Japanese, English, and Chinese*. (pp. 1-19). Tokyo: The National Language Research Institute.
- 「大好き沖縄」編集部(編)(2005a). 正直者と黄金石の話 大好き沖縄, 31, 33-38.
- 「大好き沖縄」編集部(編)(2005b). 徳の神と貧乏神 大好き沖縄, 32, 39-42.
- 「大好き沖縄」編集部(編)(2006a). 粟国島の美味しい塩 大好き沖縄, 33, 80-87.
- 「大好き沖縄」編集部(編)(2006b). ためされた真心 大好き沖縄, 34, 31-36.
- 「大好き沖縄」編集部(編)(2006c). ためされた真心(中) 大好き沖縄, 35, 39-43.
- Faquire, R. K. (2012). *Modality and its learner variety in Japanese*. Bern: Peter Lang AG, International Academic Publishers.
- 比嘉 光龍(2015). 気持ち伝わる! 沖縄語リアルフレーズ BOOK 研究社
- 船木 礼子(2006). 確認要求表現 大西拓一郎(編) 方言文法調査ガイドブック 2 (pp.211-230) 国立国語研究所
- 言語学研究会(編)(1983). 日本語文法・連語論(資料編) むぎ書房
- 儀間 進(1979). 琉球弧—沖縄文化の模索— 群出版
- 儀間 進(1987). うちなあぐちフィーリング 沖縄タイムス社
- 儀間 進(2000). 語てい遊ばなシマクトゥバ—続々うちなあぐちフィーリング— 沖縄タイムス社
- 儀間 進(2007). わたしの言語史 I 沖縄エッセイスト・クラブ(編) 合同エッセイ集—甘藷の花—, 24, 224-235. 那覇出版社

²⁸⁶ APA スタイルに準じ、アルファベット順に並べた。日本語文献の表記の仕方については、日本心理学会 HP の「執筆・投稿の手びき」に準じた(Retrieved from <https://psych.or.jp/publication/inst/>, 2018年3月5日)。

- 儀間 進(1989-2011). 語てい遊ばなシマクトゥバ(新聞連載コラム²⁸⁷) 沖縄タイムス
- 花藪 悟(2014). 日本語教育の方法論を応用した初級沖縄語教科書について 日本語・日本語学研究, 4, 111-129. 東京外国語大学国際日本研究センター
- 樋口 文彦(1992). 勧誘文——しよう, しましよう—— ことばの科学, 5, 175-186. むぎ書房
- 平山 輝男・大島 一郎・中本 正智(1966). 琉球方言の総合的研究 明治書院
- 外間 守善(2000). 沖縄の言語と歴史 中公文庫
- 伊芸 弘子(編著)(1992). 昔話研究資料叢書別巻——沖縄・首里の昔話—— 三弥井書店
- 伊狩 典子・広田 貴代子(1998). しまくとぅば 安木屋
- 井上 拓子(2001). 終助辞——「ね」と「よ」—— 教育国語, 4(2), 4-27. むぎ書房
- 井上 拓子(2006). 終助辞「さ」 ことばの科学, 11, 88-110. むぎ書房
- 石垣市総務部市史編集室(編)(1993). 石垣市史叢書4 石垣市役所
- 石原 昌英(2011). 言語の記録保存と研究者の倫理 ハイナリッヒ, P.・下地 理則(編) 琉球諸語記録保存の基礎——Essentials in Ryukyuan Language Documentation——(pp.67-83) 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 石原 昌英(2013). 琉球における言語危機と言語復興 文部科学省特別経費概算要求プロジェクト平成 24 年度成果報告書——新しい島嶼学の創造——日本と東アジア・オセアニアを結ぶ基点としての琉球弧——(pp.195-202) 国際沖縄研究所
- かりまた しげひさ(1999). 音声の面からみた琉球諸方言 言語学研究会(編) ことばの科学, 9, 13-85. むぎ書房
- かりまた しげひさ(2000). 奄美沖縄方言群における沖永良部島方言の位置づけ 日本東洋文化論集, 6, 43-69. 琉球大学法文学部
- かりまた しげひさ(2004a). 沖縄方言の動詞のアスペクト・テンス・ムード——沖縄県具志川市安慶名方言のばあい—— 工藤真由美(編) 日本語のアスペクト・テンス・ムード体系——標準語研究を超えて——(pp.220-265) ひつじ書房
- かりまた しげひさ(2004b). 危機言語としての琉球語の文法研究の課題 日本東洋文化論集(琉球大学法文学部紀要), 第 10 号, 57-77.
- かりまた しげひさ(2005). 琉球語の地位 真田 信治・庄司 博史(編) 日本の多言語社会(pp.257-260) 岩波書店
- 狩俣 繁久(2011). 琉球方言から考える言語多様性と文化多様性の危機 国立国語研究所 第 3 回国際学術フォーラム——日本の方言の多様性を守るために——(pp.4-11) 国立国語研究所
- かりまた しげひさ(2013a). 方言ことわざの表現形式にみるジェンダー 沖縄におけるジェンダー学の理論化と学術的実践——沖縄ジェンダー学の創造——(平成 24 年度事業報告: 文部科学省特別経費プロジェクト~大学の特性を活かした多様な学術研究機能の充実~)(pp.168-181) 琉球大学国際沖縄研究所
- かりまた しげひさ(2013b). endangered language と killer language 比嘉豊光(編) 「時の眼——沖縄」批評誌 N27, 創刊号, 94-97. 新星出版
- かりまた しげひさ(2016). 沖縄名護市幸喜方言の終助辞のモダリティ 琉球アジア文化論集[別冊], 2, 11-52.

²⁸⁷ 儀間進氏が沖縄タイムス紙にて 1989 年(平成元年)4 月から 2011 年 12 月 25 日まで連載したコラム。本研究では、筆者が個人で収集した 2008 年 7 月辺りから 2011 年の終わり頃までの記事を使用している。

- かりまた しげひさ・島袋 幸子(2007). 沖縄方言のとりたてのくつつきとかかりむすび——今帰仁謝名方言と具志川安慶名方言のばあい(おぼえがき)—— 日本東洋文化論集, 13, 1-29.
- 川上 徳明(1998). 「敬度」「敬度値」「敬度指数」——敬意の度合の客観的な把握のために—— 比較文化論叢(札幌大学文化学部紀要), 1, 259-282.
- 国立国語研究所(編)(1963). 沖縄語辞典 大蔵省印刷局
- 国立国語研究所(編)(1982). 方言談話資料(6)——鳥取・宮崎・愛媛・沖縄—— 秀英出版
- 国立国語研究所(編)(1985). 方言談話資料(8)——老年層と若年層との会話—— 秀英出版
- 国立国語研究所(編)(1987). 方言談話資料(10)——場面設定の対話その2—— 秀英出版
- 工藤 真由美(1995). アスペクト・テンス体系とテキスト——現代日本語の時間の表現—— ひつじ書房
- 工藤 真由美(2004). 日本語のアスペクト・テンス・ムード体系——標準語研究を超えて—— ひつじ書房
- 工藤 真由美(2014). 現代日本語ムード・テンス・アスペクト論 ひつじ書房
- 工藤 真由美(2015). 奥田論文を読む——「奥田論文を読む」おわりに 奥田靖雄著作集刊行記念国際シンポジウム予稿集
- 工藤 真由美・高江洲 頼子・八亀 裕美(2007). 首里方言のアスペクト・テンス・エヴィデンシャルティー 大阪大学大学院文学研究科紀要, 47, 151-183.
- ローレンス ウェイン(2006). 沖縄方言群の下位区分について 沖縄文化, 40, 101-118. 沖縄文化協会
- van der Lubbe, G. (in press). Japanese-Northern Ryukyuan language contact and structural convergence: The case of embedded interrogative constructions. In K. Funakoshi, S. Kawahara, & C. D. Tancredi, (Eds.), *Japanese/Korean Linguistics*, 24. CSLI Publications.
- 益岡 隆志(1991). モダリティの文法 くろしお出版
- 又吉 元亮(1997). 実践首里語テキスト 純スイ会
- 目差 尚太(2017年7月26日). 与那国方言の終助詞「do」「dja」について Paper presented at 大学内講義, 琉球大学
- 三宅 知宏(2011). 日本語研究のインターフェイス くろしお出版
- 三宅 知宏・高木 千恵・松丸 真大(2012年10月28日). 確認要求的表現と対照言語学 日本語文法学会第13回大会発表予稿集, 29-35. Paper presented at 名古屋大学
- 宮良 信詳(2002). 沖縄中南部方言動詞のモダリティ 言語研究, 122, 79-113. 日本言語学会
- 宮良 信詳(2015). 沖縄語の接辞動詞/-ras/, /-imi/について Southern Review, 29, 17-38. 沖縄外国文学学会
- 宮崎 和人(2005). 現在日本語の疑問表現——疑いと確認要求—— ひつじ書房
- 宮崎 和人(2006). 一人称の未実現の動作を表す文のモダリティー 日本語文法学会第7回大会予稿集, 69-76.
- 宮崎 和人(2013). モダリティーとしての〈可能〉——レアリティーと時間的な意味とのからみあい—— 岡山大学文学部紀要, 59, 87-98.
- 宮崎 和人(2014). モダリティ 日本語大事典(下)(pp.2011-2012) 朝倉書店
- 宮崎 和人(2015). 奥田論文を読む——構文論研究としての「おしはかり」—— 奥田靖雄著作集刊行記念国際シンポジウム予稿集
- 宮崎 和人・安達 太郎・野田 春美・高梨 信乃(2002). 新日本語文法選書4——モダリティー—— くろしお出版
- 宮里 朝光(2012). 沖縄語の教え方(沖縄語講師養成講座配布資料) 沖縄語普及協議会(編)

- 宮里 朝光・小那覇 全人・崎濱 秀平・宮良 信詳(2006). 沖縄ぬ暮らしとう昔話 沖縄語普及協議会(編)
- 村上 三寿(1993). 命令文—しろ, しなさい— ことばの科学, 6, 67-115. むぎ書房
- 村上 三寿(2010). 文を部分にわけることの意味 国文学解釈と鑑賞, 75(7), 6-15. 至文堂
- 村木 新次郎(2012). 日本語の品詞体系とその周辺 ひつじ書房
- 永野マドセン 泰子(2011). 首里方言にみる法接尾辞と疑問文イントネーション 琉球の方言, 35, 1-16. 法政大学沖縄文化研究所
- 那覇市企画部市史編集室(編)(1979). 那覇市史資料編 第2巻中の7(那覇の民俗)
- 那覇市教育委員会, & 沖縄言語研究センター(1994a). 沖縄芝居脚本集第2巻 那覇の方言—那覇市方言記録保存調査報告書IV—
- 那覇市教育委員会, & 沖縄言語研究センター(1994b). 沖縄芝居脚本集第3巻 那覇の方言—那覇市方言記録保存調査報告書IV—
- 那覇市教育委員会社会教育課(編)(1982). 那覇の民俗資料第4集首里地区 那覇市教育委員会
- 仲原 穰(2014). 沖縄県那覇市首里方言 方言文法研究会(編) 全国方言文法辞典資料集(2)—活用体系(2009-2013年度 科学研究補助金基盤研究(B) 研究成果報告書 No. 21320086)(pp.135-145) Retrieved from <http://hougen.sakura.ne.jp/shuppan/2014.html> (2017年11月27日)
- 中松 竹雄(1973). 新版・沖縄語の文法 げんけん出版
- 中松 竹雄(2000). 沖縄語会話 沖縄言語文化研究所
- 中松 竹雄(2003). 楽しい沖縄語会話 沖縄言語文化研究所
- 日本語記述文法研究会(編)(2003). 現代日本語文法4—第8部モダリティ— くろしお出版
- 日本放送協会(編)(1972). 全国方言資料第10巻—琉球編I— 日本放送出版協会
- 西岡 敏(2002). 沖縄語首里方言の終助辞付き用言語彙資料 琉球の方言, 26, 17-46. 法政大学沖縄文化研究所
- 西岡 敏・仲原 穰(2000). 沖縄語の入門—たのしいウチナーグチ— 白水社
- 仁田 義雄(2014). 文の種類 日本語文法学会(編) 日本語文法事典, 562-565. 大修館書店
- 沖縄県立図書館貴重資料デジタル書庫・首里古地図 Retrieved from <http://archive.library.pref.okinawa.jp> (2016年10月10日)
- 奥田 靖雄(1984). おしはかり (一) 日本語学, 12月号, 54-69. 明治書院
- 奥田 靖雄(1985a). おしはかり (二) 日本語学, 2月号, 48-62. 明治書院
- 奥田 靖雄(1985b). 文のさまざま(1)—文のこと— 教育国語, 80, 41-49. むぎ書房²⁸⁸
- 奥田 靖雄(1990). 説明その(1)—のだ, のである, のです— ことばの科学, 4, 173-216. むぎ書房
- 奥田 靖雄(1992). 説明その(2)—わけだ— ことばの科学, 5, 187-219. むぎ書房
- 奥田 靖雄(1993). 説明その(3)—はずだ— ことばの科学, 6, 179-211. むぎ書房
- 奥田 靖雄(1996). 文のこと ことばの研究・序説(pp.227-240) むぎ書房²⁸⁸
- 奥田 靖雄(1999a). プラグマチカ [言語学研究会口頭発表用原稿]
- 奥田 靖雄(1999b). 現実・可能・必然 (下) —しななければならない— ことばの科学, 9, 195-261.
- Palmer, F. R. (2001). *Mood and modality* (2nd ed.). Cambridge: Cambridge University Press.
- Pellard, T. (2013). 日本列島の言語の多様性—琉球諸語を中心に— 田窪 行則(編) 琉球列島の言語と文化—その記録と継承— (pp. 81-92) くろしお出版

²⁸⁸ 同名あるいは類似の論文が複数の文献にまたがっている。奥田(1985b)および奥田(1996)は、『奥田靖雄著作集刊行委員会(2015). 奥田靖雄著作集 2 言語学編(1)』も参照されたい。

- Pellard, T. (2015). The linguistic archaeology of the Ryukyu Islands. In P. Heinrich, S. Miyara, & M. Shimoji (Eds.), *Handbook of the Ryukyuan languages*, Mouton de Gruyter.
- 琉球弧を記録する会(編)(2003). 島クトゥバで語る戦世——100人の記憶——
- 酒井 雅史(2012). 兵庫神戸市方言における命令表現 阪大社会言語学研究ノート, 10, 18-29.
- 崎原 正志(2015a). 首里方言の終助辞 do:, jo:, te:, ja: 琉球方言研究, 4, 2-43. 琉球大学法文学部国際言語文化学科琉球方言研究室
- 崎原 正志(2015b). ネオ沖縄語の出現とシマクトゥバの消失 国際琉球沖縄論集, 4, 33-46. 琉球大学国際沖縄研究所
- Sakihara, M., Karimata, S., Shimabukuro, M., & Gibo, E. L. (2011). *Rikka, Uchinaa-nkai!* (1st ed). International Institute for Okinawan Studies at University of the Ryukyus.
- 崎間 麗伸・船越 義彰・狩俣 繁久(2002). 古老にきく『沖縄の言葉と文化』(対談) 国文学解釈と鑑賞, 67(7), 46-58. 至文堂
- 佐藤 里美(1992). 依頼文——してくれ, してください—— ことばの科学, 5, 109-174. むぎ書房
- 佐藤 里美(1999). 文の対象的な内容をめぐって ことばの科学, 9, 87-97. むぎ書房
- 柴田 真希(2007). ラジオ沖縄「方言ニュース」から見る沖縄方言 沖縄フィールド・リサーチ 2007 Retrieved from <http://hougen.sakura.ne.jp/hidaka/okinawa/> (2017年11月27日)
- Shimoji, M. (2012). Northern Ryukyuan. In N. Tranter (Ed.). *The languages of Japan and Korea* (pp. 351-380). New York, NY: Routledge.
- 下地 理則(2013). 危機方言研究における文法スケッチ 田窪 行則(編) 琉球列島の言語と文化——その記録と継承——(pp.45-80) くろしお出版
- 下地 理則(2015). 書評『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』工藤真由美著 日本語文法, 15(2), 167-175. くろしお出版
- Shimoji, M., & Pellard, T. (2010). *An introduction to Ryukyuan languages*. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa Tokyo University of Foreign Studies.
- Shinzato, R. (1984). *Epistemology in linguistic analysis: A case study from Japanese and Okinawan* (Doctoral dissertation, University of Hawai'i at Mānoa, Honolulu, HI). Nov. 27, 2017 Accessed. Retrieved from scholarspace.manoa.hawaii.edu
- 白田 理人(2016). 喜界島小野津方言のモーラ表／語例と格助詞／とりたて助辞の例文 文化庁委託事業報告書——平成27年度危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究——, 5-32. 琉球大学国際沖縄研究所
- 白田 理人・Rieser, L.(2016, 4月). 喜界島上嘉鉄方言の名詞化辞-*su* と文末辞-*soo* Paper presented at 沖縄言語研究センター月例研究会, 西原町, 沖縄
- 蔣 家義(2010). モダリティ体系と認識のモダリティ 杏林大学国際協力研究科博士論文 Retrieved from <https://researchmap.jp> (2018年3月5日)
- 首里那覇方言音声データベース(1999). Retrieved from <http://ryukyu-lang.lib.u-ryukyu.ac.jp/srnh/index.html>
- 首里振興会(2000). 首里振興会ホームページ Retrieved from <http://syuri-sinkoukai.com/jitikai.html> (2017年11月27日)
- 首里奨学母の会(1978). 首里の日日 末吉安久(編)
- 砂辺 祥子(2012). 読谷村座喜味方言の動詞のおしはかり表現 琉球方言研究, 第3号, 42-79. 琉球大

学法文学部国際言語文化学科琉球方言研究室

鈴木 重幸(1960). 首里方言の動詞のいいきりの形 国語学, 41, 74-85.

Retrieved from <http://db3.ninjal.ac.jp/SJL/> (2018年3月5日)

鈴木 重幸(1972). 日本語文法・形態論 むぎ書房

高江洲 義寛(1979). 沖縄わらべうたの世界 青い海出版社

高木 千恵(2009). 命令表現 国立国語研究所全国方言調査委員会(編) 方言文法調査ガイドブック 3 (pp.105-129) 国立国語研究所

武井 基晃(2009). 屋取りにおける土族系門中の現状——「田舎降り」と「門中化」の対称性—— 沖縄民俗研究, 27, 1-22.

玉那覇 朝子(編訳)(n.d.). 猿の生肝(芝居の脚本)(那覇市文化協会うちなーぐち部会配布資料)

田代 竜也(2015). 沖縄県首里・那覇方言における主語——主語の意味・機能と助辞の形式—— 琉球方言研究, 4, 44-87. 琉球大学法文学部国際言語文化学科琉球方言研究室

當山 奈那(2012a). 沖縄中南部方言のヴォイス体系 琉球大学人文社会科学研究科修士論文

當山 奈那(2012b). 沖縄首里方言の他動詞派生接尾辞と使役動詞派生接尾辞 日本言語学会第145回大会予稿集, 76-81.

當山 奈那(2015a). 沖縄首里方言におけるヴォイスと利益性の記述文法研究 琉球大学人文社会科学研究科博士論文 Retrieved from 琉球大学学術リポジトリ(2017年11月27日)

當山 奈那(2015b). 首里方言のなかの地域方言と社会方言 琉球方言研究, 4, 88-102. 琉球大学法文学部国際言語文化学科琉球方言研究室

津波古 敏子(1997). 琉球列島の言語(沖縄中南部方言) 亀井 孝・河野 六郎・千野 栄一(編著) 言語学大辞典セレクション——日本列島の言語—— (pp.369-388) 三省堂

Tsunoda, T. (2005). *Language endangerment and language revitalization*. Mouton de Gruyter.

内間 直仁(1983). 沖縄本部町瀬底方言の助詞 琉球の方言, 8, 31-104. 法政大学沖縄文化研究所

内間 直仁(1994). 琉球方言助詞と表現の研究 武蔵野書院

内間 直仁・新垣 公弥子(2000). 第3節那覇市前島方言の助詞 沖縄北部・南部方言の記述的研究 (pp.218-232) 風間書房

内間 直仁・野原 三義(2006). 沖縄語辞典——那覇方言を中心に—— 研究社

上村 幸雄(1972). 琉球方言入門 言語生活 三省堂書店

上村 幸雄(1997). 琉球列島の言語(総説) 亀井 孝・河野 六郎・千野 栄一(編著) 言語学大辞典セレクション——日本列島の言語—— (pp.311-354) 三省堂

UNESCO (2009). Atlas of the world's languages in danger. Retrieved from <http://www.unesco.org/languages-atlas/>

全国方言文法データベース(2007). 沖縄県那覇市首里の原因・理由の表現の例文集 Retrieved from http://hougen.sakura.ne.jp/db/cs_geninriyu/reibun/47shuri.html (2017年11月27日)

【付録資料 1】

琉球語とは？

本研究では、「琉球語」を北は奄美諸島から南は八重山諸島まで、琉球列島と呼ばれる島々で話されている言語・方言群の総称を指す言語学的な用語として使用する。琉球語に属する地域変種・方言の数は 800 を超えると言われている。後述するように複数の言語で成り立っているため、琉球諸語とも呼ばれるが、本研究では便宜上「琉球語」で統一する。

また、本研究がなぜ琉球「方言」ではなく、琉球「語」と表記するのか、その立場について明らかにしておく必要があると思う。上村は、相互理解度だけをみれば、琉球語と呼ぶことも可能であるとしながらも、「『言語』『方言』という名称は、言語の構造的差異、相互理解度と関わりあった概念であるばかりでなく、その言語、方言を用いる社会のありかた、歴史とも関わりあう概念である」と述べている（上村 1997, p.313）。特に、上村は、琉球列島の言語あるいは諸方言の文章語の未発達という歴史的な事実と、規範性のなさという現状について取り上げて、日本語との差異が大きいものにも関わらず、「地位の下落ともよぶべき現象が進行しつつある」と述べている。

しかし、ある「言語」が「方言」へ変化するという現象についてはもう少し深く掘り下げて考える必要があるだろう。日常生活の使用言語が別の言語に置き換わり、言語としての威信を失ったからといって、その言語が方言に「下落」するのだろうか。使用の幅が狭められ、言語としての発達も妨げられて、コミュニケーションのために日本語からの大量の語彙が必要だとしても、琉球語独自の音韻や文法体系にのっとって作った文や言葉の連なりは琉球語と言えないのだろうか。

また、琉球語は琉球王国の成立により、日本語と分断されて、その間に多様な変化を遂げている。その変化が九州方言との相互理解を欠く大きな要因となっていることは考慮すべきである。したがって、本研究では、このような歴史的背景と、それによって生じた変化を重視し、「琉球語」と呼ぶ立場をとる。

琉球語の分類は研究者によって異なる。UNESCO は、2009 年に琉球列島に存在する危機言語として、北から奄美語、国頭語、沖縄語、宮古語、八重山語、与那国語の 6 つを認めると発表した。

しかし、UNESCO のこの区分に関しては様々な意見や批判がある。例えば、国頭語は、奄美諸島の南に位置する沖永良部島と与論島の言語も含んでいて、「国頭」が指し示す以外の地域も含むので、「奄美南部・沖縄北部方言」とすべきという意見がある（上村 1972, かりまた 2000 等）。また、「沖縄」という語は一般的に沖縄島北部地域も含むので「沖縄語」というよび方についても課題が残る。したがって、厳密には、「奄美北部方言」「奄美南部・沖縄北部方言」「沖縄中南部方言」「宮古方言」「八重山方言」「与那国方言」、あるいはもう少し細かく分類しなければならない可能性もある²⁸⁹。

かりまた（1999）では、奄美南部諸方言と沖縄北部諸方言が同じサブグループに含まれる理由として、これらの地域の諸方言が中舌母音 /i, e/ を有しないことと、h 音の p 音保持および語頭の k 音から h 音の変化（例：kadzi→hadzi「風」等）を挙げている。

一方で、ローレンス（2006）や Pellard（2015）等の研究では「国頭語」や「奄美南部・沖縄北部方言」という区分を支持しない論が展開されている。これらの研究では、上述の中舌母音の無いことや p 音保持、k→h 音の変化は、地域的な特徴あるいはその地域で同時に起こった相互変化であるとし、「歴史・系統的に」奄美南部（与論・沖永良部島方言）は「奄美語」に含められ、沖縄北部方言は「沖縄語」に含められるとする。すなわち、これらの研究において琉球語は「奄美語」「沖縄語」「宮古語」「八

²⁸⁹ 例えば、久高島方言（沖縄北部方言と音声上の共通点がある）、多良間島方言（八重山方言との語彙的・文法的共通点がある）等は分類がむずかしい。

重山語」「与那国語」と5つに分類される。

しかしながら、琉球語の下位区分については、琉球語に属する全ての諸方言の音韻・文法体系について明らかにした上で決定されるべきである。特に文法に関しては、未だ明らかになっていないことが多い。さらに、琉球語の場合、琉球王国の成立による日本語との分断と、王国内における土地区分制度の与えた影響が大きいとするならば、北山時代の統轄地域が沖縄島北部地域だけでなく、沖永良部島と与論島を含んでいた事実による言語変化への影響を軽視することはできない。あらゆる観点からの分類を試みるべきだと筆者は考える。

このように、琉球語の分類を巡って、様々な論説がある。本研究ではそれを決定づけることはせず、基本的には保留の立場を取ることにするが、「琉球語は、およそ800もの地域変種とそれらを言語学的にいくつかに分類した複数の言語で成り立つ琉球列島の島々で話されている言語の総称である」と定義しておく。下にかりまた(1999)の分類を掲示する。

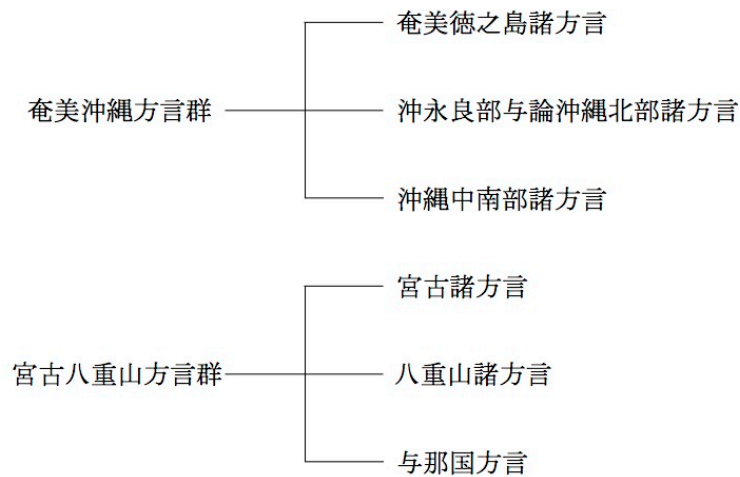


表 49 琉球語（琉球方言）の下位分類（p. 26）

【付録資料 2】

首里方言に地域差はあるのか？

首里地区は現在、赤田町・崎山町・鳥堀町の三箇（さんか）と呼ばれる地域と、赤平町・池端町・大中町・金城町・儀保町・久場川町・寒川町・汀良町・当蔵町・桃原町・真和志町・山川町、旧西原間切から編入された石嶺町・大名町・末吉町・平良町・の 19 の町（ちょう）と呼ばれる地区から成り立っている。かつてはそれぞれの町が村（むら）と称され、上記の 19 に相当する村に大鈍川・与那覇堂・立岸村が加わり、さらに金城町は金城村と内金城村、儀保町は上儀保村と下儀保村に分かれていて、これら全て合わせると 24 の村から成り立っていた。

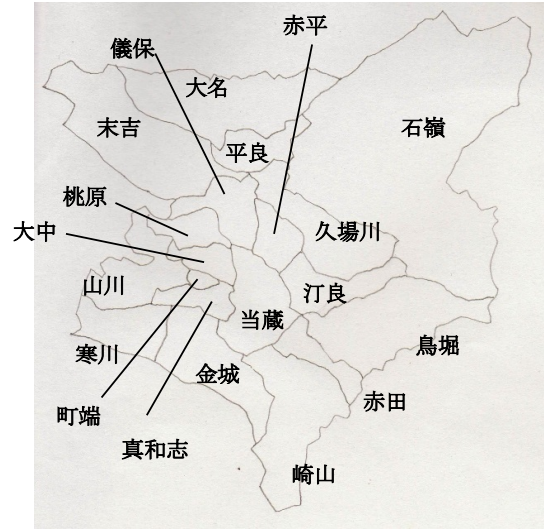


図 3 現在の首里地区の各町²⁹⁰

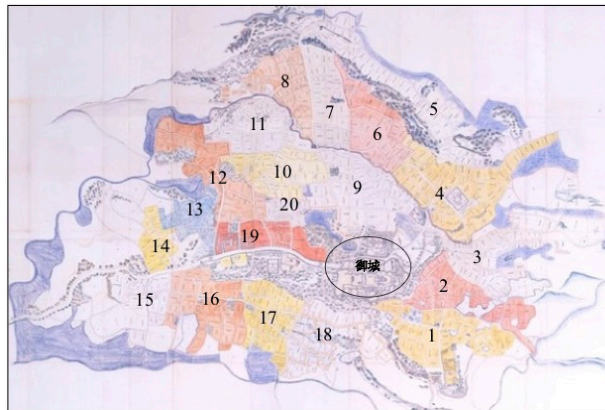


図 4 首里古地図（1700 年代初頭）²⁹¹

さて、首里方言の地域差について、儀保町出身で沖縄語普及協議会の宮里朝光氏は、「昔、首里は、二〇村あったが、各村の言葉は違わなかった。その代わり身分ごとに言葉が違っていた」と述べている（宮里, 2012）。

しかしながら、このような認識は他のいくつかの資料によって否定される。例えば、平良町出身の儀間進氏は、中学校に上がった際、末吉町出身の友人のイントネーションは今まで自分が聞き慣れてきた首里の言葉と異なる独特のものだったと述べており、彼が使用する語彙には聞き慣れないものもあったという（儀間, 2007, pp. 227-228）。

さらに、仲原（2014）では、動詞「見る」が儀保町の話者は $\text{?nd}^{\text{h}}\text{dzun}$ 、鳥堀町・汀良町の話者は $\text{?n}^{\text{h}}\text{dzun}$ と n 音を長音で発音するかしないかという違いが見られた他、他の語彙の長音に関しても違

²⁹⁰ 首里振興会 HP (<http://syuri-sinkoukai.com/jitikai.html>) 記載の地図を基に筆者が作成。

²⁹¹ 「沖縄県立図書館貴重資料デジタル書庫」より転載。数字や文字は筆者が付加。

いが観察されたという (p. 136)。このことは、かつての西原間切から編入された村ではない村々の間にも地域差が認められる可能性を示唆している。また、詳しい研究や資料はないが、一般的に赤田・崎山・鳥堀の三箇と呼ばれる地域の方言は他の地域と比べて特徴的だと言われている。

したがって、本研究においても、首里方言に地域差を認め、「首里地域方言」の存在を支持しつつ分析・記述を進めることにする。平良町出身の男性との面接調査で「首里地域方言」だと思われる語彙が現時点で1例見つかっている。

972) ?i:te-i=n su=na=jo:.

動く-INF=FOC する=PROH=SFP

「動きもするなよ。」

語形から推測するに、断定形（終止形）は ?i:teun だと考えられるが、「首里階層方言」を主に記述しているとされる『沖縄語辞典』では ?ndzuteun と記載されていて、これは一般的によく知られた語形である。調査協力者に確認したところ、?ndzutei-n su=na=jo: も使用可能だという。?i:teun は『沖縄語辞典』では確認できない語形であることから、「首里地域方言」である可能性がある。

「首里地域方言」は先行研究がほとんどないことから、「首里階層方言」よりも危機的な状況にあるか、ほとんど消滅してしまっている可能性がある。また、面接調査の際、話者が kantun tuja:ci ru suru（髪の毛も整えるんだよ）と言った後、「これでは下品だから」と言って karadzin tuja:ci ru suru と言い直したことがあった。kantu は『沖縄語辞典』に「髪 (karadzi) の卑語」と記載されているが、「首里地域方言」話者にとっては日常語だった可能性がある。したがって、「首里地域方言」は、下品・粗野であるといった話者の中に存在する差別意識の反映によって内省されて、採集しにくいのではないかと考えられる。

このように「首里地域方言」の実態を明らかにするには、様々な問題がつかまとう。しかしながら、危機的な状況を考えると、「首里地域方言」についての研究も早急に行われる必要があるだろう。そのためには、首里平良方言、首里金城方言等、個々の村に焦点をあてた記述研究が行われなければならない。

【付録資料 3】

調査同意書

私は、琉球大学大学院生の崎原正志と申します。

現在、首里方言の「モダリティ」について博士論文を執筆中です。モダリティとは「話し手の考えや判断をあらわす」言葉のことです。代表的なのは、「イチュルハジ」、「カムルハジ」、等の「～ハジ」ということばがそうです。その他、「イチュンドー」の「ドー」等の終助辞もこの「モダリティ」に含まれると私は考えています。この「～ハジ」や「ドー」等のモダリティをあらわす言葉が文の中でどのような意味・機能をもっているのか、言語学的に分析し、記述しています。

首里方言はさまざまな研究が行われてきましたが、「モダリティ」の研究は非常に少なく、あまり明らかになっていません。今後、首里方言を学びたいとする若者がいるでしょう。しかしながら、彼らが十分に学べるための教材や文法書がありません。したがって、文法書や教材を完成させ、首里方言を残していくために、「モダリティ」の一研究として、この研究は不可欠です。

この研究のためには、首里方言のモダリティに関するデータが必要です。今回あなたにこのデータ収集のための面接によるデータ収録に参加していただきたいと考えています。

収録の方法は、私がこまかい場面設定を行い、そこで使用されるであろう日本語あるいはウチナーヤマトグチを提示しますので、首里方言で考えてもらい、発話していただきます。例えば、兄と妹と一緒に学校から家に帰ってきて、スイカを切ったお母さんの姿はないが、切られたスイカを発見したという場面で、「お母さんがスイカ切ってアル！」と兄と一緒に帰ってきた妹に言った場合、これを首里方言では何といいますか、のようです。

また、同じ首里方言の話者同士、自由に会話をお願いすることもあります。その会話はまた録音され、研究のために使用されます。会話の場合、あなたとその相手は会話の話題を自由に選ぶことができます。また、あなたはいつでも収録を中止させることができます。

この「調査同意書」は、私の行っている調査について、よく理解していただくためのものです。あなたは、このプロジェクトに実際に参加するかどうか、選択することができます。もしプロジェクトに関して疑問点がありましたら、以下の連絡先までご連絡ください。

崎原正志（さきはら まさし）
琉球大学大学院博士課程後期
人文社会科学研究科・比較文化地域専攻 1年次

住所： ○○○

電話番号： ○○○

Eメール： ○○○

1) あなたの権利について

あなたの本調査への参加は、強制的なものではありません。あなたは、この調査への参加を拒否することもできますし、収録が始まってから参加を取りやめることもできます。参加を取り止めた場合、収録から一ヶ月の間、あなたにはあなたを含むデータを削除する権利および削除を要求する権利があります。また、あなたはこの同意書のコピーを受け取る権利があります。

2) 研究について

私は、首里方言の文法、特に「モダリティ」について興味をもっており、収録されたデータはそのための研究のみに用いられます。このデータに基づく研究によって、首里方言のモダリティの仕組みがどのようになっているのかが明らかになることが期待されます。モダリティの仕組みが明らかになるとは、首里方言の話し手が自分の判断や考えをどのようなことばを用いてあらわすかが明らかになるということです。そして、そのことによって、首里方言を学びたい人のための教科書や文法書の作成に活かすことができるようになります。

したがって、あなたのこのプロジェクトへの参加は、首里方言及び、琉球方言研究の発展に大いに役立つものです。

収録の日時はあなたの都合に合わせて相談しながら決めます。

録画や録音のための装置を、収録の邪魔にならない場所に、また会話の場合、あなたが友人やご家族と自然な会話をするのに問題のない場所に設置します。

私が今回のデータを研究で用いる場合、あるいは以下であなたが指定する方法で他の研究者に渡す場合、あなたに対してはイニシャル等が用いられ、あなたの実名が公開されることはありません。

もし、この書類について、あるいは今後私が行う研究について疑問点があれば、上記の連絡先までお問い合わせください。

3) データ利用の制限について

データの利用については、あなたの希望によって「誰が、どう利用してよいか」を制限することができます。以下に質問項目がありますので、どのように制限したいかを選択肢の中から選んでください。

質問 1：データの公開方法について選んでください

1-a) 資料・論文への掲載

	学会の配布資料・論文・著書に掲載しても良い	データを掲載した資料・論文・著書をインターネットで公開しても良い
会話の文字書き起こし	(はい ・ いいえ)	(はい ・ いいえ)

イラスト	(はい ・ いいえ)	(はい ・ いいえ)
写真	(はい ・ いいえ)	(はい ・ いいえ)

※「イラスト」とは、録画された映像を基に、個人が特定できない程度に加工してイラストにしたものです。

1-b) 動画・音声の使用

	公の場 (例：学会での研究発表や大学での講義) で再生しても良い
音声データ	(はい ・ いいえ)
動画データ	(はい ・ いいえ)

質問2：データを所有しても良い人の範囲について教えてください

(注)「共同研究者」「指導学生」「知り合いの研究者」「その他の研究者」のいずれであれ、もしデータを渡すことになった場合は下記の三点を約束する誓約書を、私との間で交わした上で利用が可能になります。

(i)質問1であなたが指定した公開方法に従うこと

(ii)他の人にデータを渡さないこと

(iii)データ管理を厳重に行うこと

	音声データを所有しても良い	動画データを所有しても良い
(A) 崎原	(はい ・ いいえ)	(はい ・ いいえ)
(B)「共同研究者」	(はい ・ いいえ)	(はい ・ いいえ)
(D)「知り合いの研究者」	(はい ・ いいえ)	(はい ・ いいえ)
(E)「その他の研究者」	(はい ・ いいえ)	(はい ・ いいえ)

・「共同研究者」とは、(a)今回のデータを用いて私と共同で論文を執筆する人、あるいは(b)私に依頼さ

れてデータを整理する人、のことで。この場合、データは私が直接関わる研究の中で利用されま
す。

※インフォーマントは高齢者が多いため、実際にはフォントを大きくした書類を用いる。

・「知り合いの研究者」とは、(a)私と同じ研究機関に所属する学生・教員、あるいは(b)私と同じ研究会
に参加している学生・教員等、私と直接の学問上のつながりがある研究者のことです。この場合、デ
ータの利用は、私とは独立に行われます。

・「その他の研究者」とは、私とこれまでに面識や交流がないものの、今回のデータの存在を知って
「自分も利用したい」と希望してきた人のことです。

*以下の欄でのあなたの署名は、あなたが本研究のための収録に同意することを意味します。

私は、私の発話や会話が 2015 年 4 月 1 日から 2018 年 3 月 31 日の間に収録されることを許可し
ます。

また、私は、今回収録された全ての音声データが、上記の回答に基づく形で利用されることに同
意します。

名前： _____

印またはサイン： _____

日付： _____ 年 _____ 月 _____ 日

【付録資料 4】

表 50 動詞の活用表

	基本語幹	連用語幹	連用語幹 n なし	音便語幹
規則変化 m (食べる)	kam- kam-i, kam-a	kam- kam-un	kam-u- kam-u-ga	ka-d- ka-di
規則変化 b (呼ぶ)	jub- jub-i, jub-a	jub- jub-un	jub-u- jub-u-ga	ju-d- ju-di
規則変化 n (死ぬ)	ɕin- ein-i, ein-a	ein-un ein-un	ein-u- ein-u-ga	ei-d- ei-di
規則変化 k (書く)	kak- kak-i, kak-a	katē- katē-un	katē-u- katē-u-ga	ka-tē- ka-tēi
規則変化 g (漕ぐ)	ku:g- ku:g-i, ku:g-a	ku:dz̄- ku:dz̄-un	ku:dz̄-u- ku:dz̄-u-ga	ku:-dz̄- ku:-dz̄i
規則変化 s (さす)	sas- sae-i, sas-a	sas- sas-un	sas-u- sas-u-ga	sa-tē- sa-tēi
規則変化 t (待つ)	mat- mat-i, mat-a	matē- matē-un	matē-u- matē-u-ga	mat-tē- mat-tēi
規則変化 r-1 (取る)	tur- tu-i, tur-a	tu- tu-in	tu-i- tu-i-ga	tu-t- tu-ti
規則変化 r-2 (切る)	tēir- tēi-i, tēir-a	tēi- tēi-in	tēi-i- tēi-i-ga	tēit-tē- tēit-tēi
規則変化 d (かぶる)	kand- kand-i, kand-a	kandz̄- kandz̄-un	kandz̄-u- kandz̄-u-ga	kan-t- kan-ti
規則変化 r-3 (洗う)	?arar- ?ara-i, ?arar-a	?ara- ?ara-in	?ara-i- ?ara-i-ga	?ara-t- ?ara-ti
規則変化 r-4 (買う)	ko:r- ko:-i, ko:r-a	ko:- ko:-in	ko:-i- ko:-i-ga	ko:-t- ko:-ti
(思う)	?umur- ?umu-i, ?umur-a	?umu- ?umu-in	?umu-i- ?umu-i-ga	?umu-t- ?umu-ti
規則変化 r-5 (言う)	?ir- ?i-i, ?ir-a (?ja-a)	?i- ?i-in	?i-i- ?i-i-ga	?i-tē- ?i-tēi
混合変化 (起きる)	?ukir- ?uki-i, ?ukir-a	?uki- ?uki-in	?uki-i- ?uki-i-ga	?uki-t- ?uki-ti
混合変化 (着る)	tēir- tēi-i, tēir-a	tēi- tēi-in	tēi-i- tēi-i-n	tēi-tē- tēi-tēi
混合変化 (見る)	n:d(r)- n:d(r)-i, n:d(r)-a	n:dz̄- n:dz̄-un	n:dz̄-u- n:dz̄-u-ga	n:-tē- n:-tēi
特殊変化 (いる)	ur- u-i, ur-a	u- u-n	u- u-ga	u-t- u-ti
特殊変化 (来る)	tē-, ku: tē-i, ku:	tēu- tēu-un	tēu-u- tēu-u-ga	tte- ttei
特殊変化 (する)	(s)s- ɕ-i, ss-a	s- s-un	s-u- s-u-ga	ɕɕ- ɕɕi

【付録資料 5】

IPA (国際音声記号) 表記および音韻・音節構造等について

首里方言の母音音素と子音音素については以下の通りである²⁹²。

表 51 首里方言の母音

	前舌		奥舌	
	短	長	短	長
狭	i	i:	u	u:
半狭	e	e:	o	o:
広	a, a: ²⁹³			

表 52 首里方言の子音

		両唇音	歯茎音	歯茎 硬口蓋音	硬口蓋音	軟口蓋音	声門音
閉鎖音	無声	p	t			k	ʔ
	有声	b	d			g	
破擦音	無声		ts̺	tɕ			
	有声		dz̺	dʒ			
摩擦音		ɸ	s	ɕ	ç		h
鼻音		m	n		ɲ	ŋ	
はじき音			r				
半母音	非喉頭	w			j		
	喉頭	ʔw			ʔj		

次の表は現代首里方言のモーラ一覧を示したものである。原則、古い発音や外来語のみで用いられる音節はここでは示さない。//には音素表記を示し、[]には音声表記を示す。

表 53 首里方言のモーラ一覧²⁹⁴

	i	e	a	o	u	唇音化(*)および硬口蓋化(†)
ʔ	イ	エ	ア	オ	ウ	
	/ʔi/	/ʔe/	/ʔa/	/ʔo/	/ʔu/	
	[ʔi]	[ʔe]	[ʔa]	[ʔo]	[ʔu]	
²⁹⁵	い	え	あ	お	う	
	/i/	/e/	/a/	/o/	/u/	
	[i, ji]	[e, je]	[a]	[o, wo]	[u, wu]	

²⁹² 表 51 と表 52 は白田 (2016) の「表 1 小野津方言の母音目録(p. 5)」および「表 2 小野津方言の子音目録(p. 6)」を参考に作成した。

²⁹³ 首里方言の広母音は、前舌と奥舌の対立がなく、/a/はその中和された音である。

²⁹⁴ 當山 (2015a) の「表 1 首里方言のモーラ(短音節)一覧(pp. 7-8)」に筆者が若干の修正を加え転載した。

²⁹⁵ ゆるやかな声たて(グラジュアルビギニング)。詳細は「2.2.1 音声的特徴」を参照されたい。

k (カ行)	キ	ケ	カ	コ	ク	クイ	クエ	クワ		
	/ki/	/ke/	/ka/	/ko/	/ku/	/kwi/	/kwe/	/kwa/		
	[ki]	[ke]	[ka]	[ko]	[ku]	[k ^w i]	[k ^w e]	[k ^w a]		
g (ガ行)	ギ	ゲ	ガ	ゴ	グ	グイ	グエ	グワ		
	/gi/	/ge/	/ga/	/go/	/gu/	/gwi/	/gwe/	/gwa/		
	[gi]	[ge]	[ga]	[go]	[gu]	[g ^w i]	[g ^w e]	[g ^w a]		
s, ɕ (サ行)			サ	ソ	ス	シ	シエ	シヤ	シヨ	シユ
			/sa/	/so/	/su/	/sjɪ/	/sje/	/sja/	/sjo/	/sju/
			[sa]	[so]	[su]	[ɕi]	[ɕe]	[ɕa]	[ɕo]	[ɕu]
ḏz, ḏz̄ (ザ行)			ザ	ゾ	ズ	ジ	ジエ	ジヤ	ジヨ	ジユ
			/za/	/zo/	/zu/	/zji/	/zje/	/zja/	/zjo/	/zju/
			[ḏza]	[ḏzo]	[ḏzu]	[ḏzi]	[ḏze]	[ḏza]	[ḏzo]	[ḏzu]
t (タ行)	テイ	テ	タ	ト	トゥ					
	/ti/	/te/	/ta/	/to/	/tu/					
	[ti]	[te]	[ta]	[to]	[tu]					
d (ダ行)	ダイ	デ	ダ	ド	ドウ					
	/di/	/de/	/da/	/do/	/du/					
	[di]	[de]	[da]	[do]	[du]					
ṭs, ṭe (チ行)	ツイ	ツエ		ツオ	ツ	チ	チェ	チャ	チヨ	チュ
	/ci/	/ce/		/co/	/cu/	/cɟi/	/cɟe/	/cɟa/	/cɟo/	/cɟu/
	[ṭsi]	[ṭse]		[ṭso]	[ṭsu]	[ṭɕi]	[ṭɕe]	[ṭɕa]	[ṭɕo]	[ṭɕu]
n (ナ行)	ニ	ネ	ナ	ノ	ヌ					
	/ni/	/ne/	/na/	/no/	/nu/					
	[ni, n ⁱ]	[ne]	[na]	[no]	[nu]					
h (ハ行)	ヒ		ハ	ホ	フ			ヒヤ	ヒヨ	ヒユ
	/hi/		/ha/	/ho/	/hu/			/hja/	/hjo/	/hju/
	[çi]	([he])	[ha]	[ho]	[ɸu]			[ça]	[ço]	[çu]
ɸ						フィ	フェ	ファ	フォ	
						/hwi/	/hwe/	/hwa/	/hwo/	
						[ɸi]	[ɸe]	[ɸa]	[ɸo]	
b (バ行)	ビ	ベ	バ	ボ	ブ			ビヤ	ビオ	ビユ
	/bi/	/be/	/ba/	/bo/	/bu/			/bjɑ/	/bjɔ/	/bjɯ/
	[bi]	[be]	[ba]	[bo]	[bu]			[b ^ɰ ɑ]	[b ^ɰ ɔ]	[b ^ɰ ɯ]
p (パ行)	ピ	ペ	パ	ポ	プ			ピヤ		ピユ
	/pi/	/pe/	/pa/	/po/	/pu/			/pja/		/pju/
	[pi]	[pe]	[pa]	[po]	[pu]			[p ^ɰ ɑ]		[p ^ɰ ɯ]
m (マ行)	ミ	メ	マ	モ	ム			ミヤ	ミヨ	ミュ
	/mi/	/me/	/ma/	/mo/	/mu/			/mja/	/mjo/	/mju/

	[mi]	[me]	[ma]	[mo]	[mu]		[m'a]	[m'o]	[m'u]
r (ラ行)	リ	レ	ラ	ロ	ル				
	/ri/	/re/	/ra/	/ro/	/ru/				
	[ri, i]	[re, e]	[ra, a]	[ro, o]	[ru, u]				
ʔj			ヤ	ヨ	ユ				
			/ʔja/	/ʔjo/	/ʔju/				
			[ʔja]	[ʔjo]	[ʔju]				
'j (ヤ行)			や	よ	ゆ				
			/'ja/	/'jo/	/'ju/				
			[ja]	[jo]	[ju]				
ʔw	ウイ	ウエ	ワ						
	/ʔwi/	/ʔwe/	/ʔwa/						
	[ʔwi]	[ʔwe]	[ʔwa]						
'w (ワ行)	うい	うえ	わ						
	/'wi/	/'we/	/'wa/						
	[wi]	[we]	[wa]						

成節的 子音	/ʔN/(語頭) [ʔm, ʔn, ʔŋ]	/'N/(語頭) [m, n, ŋ]	/N/(語中) [m, n, ŋ]	/Q/ ²⁹⁶ [p, t, (d), k, s, ɛ]
-----------	--------------------------	-----------------------	----------------------	--

次にモーラ語例を(1)モーラ, (2)語例の音声表記, (3)形式(品詞), (4)和訳(意味)の順に示す。特殊な例を除いて、できるだけ常用される語彙を選び掲載した。上の表と併せて参照されたい²⁹⁷。尚、語例は簡略的な音声表記で示す。

表 54 首里方言のモーラ語例

(1)	(2)	(3)	(4)	(1)	(2)	(3)	(4)
i	in	名詞	縁	ʔa	ʔakasan	形容詞	赤い
i	ɛiɛi	名詞	獅子	o	o:ɗzi	名詞	王子
i	i:n	動詞	貰う	o	ʔuɸuso:	名詞	そそっかしい者
i	ɛi:ɛi	名詞	末吉(地名)	ʔo	ʔo:ɗzi	名詞	扇
ʔi	ʔin	名詞	犬	u	un	動詞	いる
ʔi	ʔi:n	動詞	入る, 言う	u	kamun	動詞	食べる
e	e:ma	名詞	八重山	u	u:n	名詞	斧
e	ʔo:e:	名詞	喧嘩	u	ja:teu:	名詞	灸
ʔe	ʔe:	感動詞	おい	ʔu	ʔun(tei)	名詞	運
a	kakia:sun	動詞	間に合わせる	ʔu	ʔu:bi	名詞	帯

²⁹⁶ t および k は語頭でもあらわれる。p, (d), s, ɛ は語中にのみあらわれる。

²⁹⁷ 白田 (2016) の「モーラ語例(pp. 7-15)」を参考に作成した。

pi	pinjan	名詞	ピンアン(空手の型の一つ)	to	matto:ba	名詞	まっすぐ
pi	pi:pi:	副詞	貧乏な様	tu	tui	名詞	鳥
pa	passai	名詞	パッサイ(空手の型の一つ)	tu	tu:i	名詞	通り
pa	pa:pa:	名詞	おばあさん	tu	ɛitu	名詞	夫の親
po	po:po:	名詞	ポーポー(料理名)	tu	ʔutteintu:	名詞	うつぶせ
pu	putturu:	名詞	糊状に作った料理	di	dippa	名詞	立派
p ^h a	rupp ^h aku	名詞	銭六百文	di	di:	感動詞	さあ
p ^h u	ʔipp ^h u:	名詞	一俵	di	madi	助辞	まで
bi	bira	名詞	葱	di	kadi:	活用形	食べたか?
bi	kabi	名詞	紙	de	de:	名詞	台, 代, 題
bi	bi:ra:	名詞	弱虫	de	ṭeo:de:	名詞	兄弟
bi	ʔabi:g ^w i:	名詞	叫び声	da	daki	名詞	竹
be	be:	名詞	倍, 二倍	da	da:	感動詞	物を請求する
be	so:be:	名詞	粗悪品(lit. 商売)	da	na:da	副詞	まだ
ba	basa:	名詞	芭蕉布	da	ʔo:da:	名詞	もっこ
ba	ba:ki	名詞	ざる, かご	do	do:gu	名詞	道具
ba	ɛiba	名詞	舌	do	mundo:	名詞	口論(lit. 問答)
bo	bo:	名詞	棒	du	duci	名詞	友人
bo	gumbo:	名詞	ごぼう	du	du:	名詞	体(lit. 胴)
bu	buri:	名詞	無礼	du	kadu	名詞	角
bu	bu:sa:	名詞	じゃんけん的一种	du	ja:du:	名詞	やもり
bu	kibuɛi	名詞	煙	ki	kidzi	名詞	傷
bu	tubu:	名詞	トビウオ	ki	ki:	名詞	木
b ^h a	samb ^h aku	名詞	三百	ki	mo:ki	名詞	儲け
b ^h a	ʔieib ^h a:	名詞	昔の大砲	ki	iki:	名詞	女の男兄弟
b ^h o	b ^h o:ṭei	名詞	病気	ke	ke:	名詞	貝, 匙, 櫃, 粥
b ^h u	ko:ɛib ^h u:	名詞	孔子廟	ke	saŋke:	活用形	するな!
ti	tin	名詞	天	ka	kata	名詞	肩, 型, 片-
ti	ti:	名詞	手	ka	ka:	名詞	井戸
ti	ʔasati	名詞	あさって	ka	ʔaka	名詞	赤, 阿嘉(地名)
ti	ʔutti:	名詞	おととい	ka	ʔaka:	名詞	赤いもの
te	te:	名詞	力	ko	ko:in	動詞	買う
te	namate:	名詞	おどけ者	ko	ḍziko:	副詞	とても
ta	tai	名詞	二人	ku	kuba	名詞	ピロウ
ta	ta:	名詞	誰, 田	ku	ku:ba:	名詞	蜘蛛
ta	ʔuta	名詞	歌	ku	taku	名詞	蛸
ta	ʔiteuta:	副詞	ちょっと, 暫く	ku	mattaku:	名詞	紙凧の一種
to	to:	名詞	中国(唐)	k ^w i	k ^w i:	名詞	声, 杭
				k ^w e	sakk ^w i:	名詞	咳
					k ^w e:	名詞	肥やし, 鍬

k ^w e	mucik ^w e:	名詞	虫食い	teo	gant ^w eo:	名詞	眼鏡
k ^w a	k ^w ain	動詞	食う	teu	teui	名詞	一人
k ^w a	k ^w a:ei	名詞	菓子	teu	teu:	名詞	今日
k ^w a	kk ^w a	名詞	子	teu	?i:teu	名詞	絹
k ^w a	ei:k ^w a:sa:	名詞	シークワサー	teu	kat ^w eu:	名詞	鯉
gi	gire:in	動詞	普請する	dzi	dzin	名詞	お金
gi	?akagi	名詞	アカギ	dzi	dzi:	名詞	土地, 字
gi	?akagi:	名詞	赤毛の者(卑称)	dzi	tudzi	名詞	妻
ge	ge:	名詞	反抗	dzi	phi:dzi:	名詞	普段, 日頃
ge	kan ^w ge:	名詞	考え	dze	dze:ban	名詞	在番(役職名)
ga	gama	名詞	洞窟	dza	dzannin	名詞	残念
ga	ga:na:	名詞	こぶ	dza	dza:	名詞	部屋
ga	ku:ga	名詞	卵	dza	?acidza	名詞	下駄
ga	teiraga:	名詞	豚の顔皮	dza	kandza:	名詞	鍛冶屋
go	go:ja:	名詞	苦瓜	dzo	dzo:	名詞	門
go	?iteigo:	名詞	一合	dzo	phudzo:	名詞	たばこ入れ
gu	gucitei	名詞	すすき	dzu	dzuri	名詞	芸妓, 遊女
gu	gu:	名詞	仲間, 味方, 懇意	dzu	dzu:	名詞	しっぽ
gu	da:gu	名詞	団子	dzu	kudzu	名詞	去年
gu	dzo:gu:	名詞	上戸	dzu	gandzu:	名詞	健康, 丈夫
g ^w i	g ^w i:ku	名詞	越来(地名)	sa	sara	名詞	皿
g ^w i	?uφug ^w i:	名詞	大声	sa	sa:ru	名詞	猿
g ^w e	g ^w ettai	名詞	ぬかるみ	sa	kusa	名詞	草
g ^w e	ko:ig ^w e:	名詞	買い食い	sa	kusa:	名詞	後ろ
g ^w a	g ^w asag ^w asa	副詞	うようよ	so	so:	名詞	性根, 根性
g ^w a	kk ^w a-g ^w a:	指小辞	小さい子	so	guso:	名詞	あの世, 後生
dza	kadzai	名詞	飾り	su	suku	名詞	底
dzo	kadz ^w o:san	名詞	風が強い	su	su:	名詞	父
dzu	kadz ^w u:jun	名詞	数える	su	kusu	名詞	糞
tei	teibi	名詞	尻	su	phinsu:	名詞	貧乏
tei	tei:	名詞	血	ei	eima	名詞	島
tei	mut ^w ei	名詞	餅	ei	ei:	名詞	岩, 精力
tei	mut ^w ei:	名詞	平民(lit. 無系)	ei	?uei	名詞	牛
tee	?unt ^w ee:	名詞	空芯菜	ei	?uei:	名詞	教え
tea	teassa	疑問詞	いくら	ee	ee:	名詞	バツタ
tea	tea:	名詞	茶	ee	munuakae:	名詞	なぞなぞ
tea	?ate ^w a	名詞	明日	ea	tacea	名詞	達者, 元気
tea	hate ^w a:	名詞	蜂	ha	hana	名詞	鼻, 花
teo	teonteon	副詞	ぼたぼた	ha	ha:	名詞	歯
teo	teo:mi:	名詞	長生き	ha	naihantei	名詞	空手の型の一種

ho	ho:in	動詞	這う	ni	gani	名詞	蟹
ça	çaku	名詞	百	ni	ʔumani:	名詞	嫁に行った姉
ça	ça:i	名詞	日照り, 干ばつ	ne	ne:n	動詞	ない
ça	ʔanuça:	接辞	あいつ, あの野郎	ne	teine:	名詞	家庭
ço	ço:ei	名詞	機会, きっかけ	na	natei	名詞	夏
çu	çu:rutei	名詞	ひよめき	na	na:	名詞	名, 名前
phi	phima	名詞	暇	na	eina	名詞	砂, 品
phi	phi:	名詞	屁, 火	na	sansana:	名詞	クマゼミ
phi	ʔiphi	名詞	少し	no	no:in	動詞	直る
phi	ʔaphi:	名詞	兄	no	no:dzi	名詞	苗字
phe	phe:	名詞	南	no	ei:no:	名詞	ふるい
phe	dza:pe:	名詞	始末に負えない事	nu	numi	名詞	蚤, 蠶
pha	pha:	名詞	葉	nu	nu:	名詞	何
pha	ʔupha	名詞	おんぶ	nu	inu	接辞	同じ
pha	dzi:pha:	名詞	かんざし	nu	teinu:	名詞	昨日
pho	ʔufo:ku	副詞	多く	ri	ʔiri	名詞	西
phu	puta	名詞	蓋	ri	ri:dzi	名詞	礼儀
phu	phu:	名詞	穂, 帆	ri	juri:	名詞	休暇
phu	jugaphu:	名詞	豊年	re	ʔire:	名詞	答え
mi	midzi	名詞	水	ra	teira	名詞	顔
mi	mi:	名詞	目	ra	kura:	名詞	雀
mi	kumi	名詞	米	ro	ʔuro:san	形容詞	(糸などが)細い
mi	ʔuei:mi:	名詞	清明祭	ru	kamuru	連体形	食べる～
me	me:	名詞	前	ru	ʔo:ru:	名詞	青
me	nakame:	名詞	茶の間	ja	jama	名詞	森
ma	matei	名詞	市場	ja	ja:ma	名詞	糸車
ma	ma:tei	名詞	松	ja	ʔuja	名詞	親
ma	kuma	名詞	ここ	ja	ʔaja:	名詞	母
ma	kuma:	その他	ここは	jo	jo:san	形容詞	弱い
mo	mo:	名詞	原っぱ	jo	bakujo:	名詞	仲買人
mo	ha:mo:	名詞	歯のない者	ju	jumi	名詞	嫁
mu	mumu	名詞	桃	ju	ju:	名詞	夜
mu	mu:tei	名詞	むつつ	ju	ʔiju	名詞	魚
mu	kumu	名詞	雲	ju	phuju:	名詞	物ぐさ, 無精
mu	ʔuφudzimu:	名詞	気前がいい者	ʔja	ʔja:	名詞	お前
m'lo	de:m'lo:	名詞	貴族	ʔjo	ʔjo:i:g ^{wa} :	名詞	赤ちゃん
m'u	m'untei	名詞	お顔	ʔju	ʔjun	動詞	言う
m'u	m'u:	名詞	妙	wi	wi:	名詞	酔い, 甥, 柄
ni	niei	名詞	北	we	ju:we:	名詞	お祝い
ni	ni:	名詞	根	wa	wa:=ga	名詞	私=が

wa	eiwa:ei	名詞	十二月, 師走	n	n̄t̄ea	名詞	土
?wi	?wi:	名詞	上	n	n:dz̄un	動詞	見る
?we	?we:kin̄t̄eu	名詞	お金持ち	n	kannai	名詞	雷
?wa	?wa:	名詞	豚	ŋ	ŋkaei	名詞	昔
?m	?mma	名詞	馬	ŋ	ŋ:kijun	動詞	向ける
?m	?m:mi:ḡ ^w a:	名詞	末の姉さん	ŋ	kuma=ŋkai	助辞	ここ=に
?n	?ndzi:n	動詞	出る	p	?ippe:	副詞	とても
?n	?n:di:	名詞	蕪	t	?itta:	名詞	お前達
?ŋ	?ŋga:ŋga:	感動詞	おぎゃあおぎゃあ	k	nikka	副詞	遅く
m	mmi:	名詞	嶺井(地名, 人名)	s	wassan	形容詞	悪い
m	?amma:	名詞	母	ɕ	tacea	名詞	達者, 元気
m	kampu:	名詞	男児の髪型				